南紀德川史

第十四冊

南紀徳川史第十四册總目錄

南紀徳川史卷之百二十五

典禮第一

目次

南紀德川史卷之百二十六

典禮第二

御婚禮上

目次

南紀德川史卷之百二十七

典禮第三

御婚禮下

目次

南紀德川史卷之百二十八

典禮第四

御姫樣方御入輿御道具帳　上

目次

南紀德川史卷之百二十九

典禮第五

御姫樣方御入輿御道具帳　下

目次

南紀德川史卷之百三十

典禮第六

目次

南紀德川史卷之百三十一

典禮第七

年中行事　上

目次

南紀德川史卷之三十二

典禮第八

年中行事　下

目次

南紀德川史卷之百三十三

典禮第九

御式御禮式　上

目次

南紀德川史卷之百三十四

典禮第十

御式御禮式　下

目　次

南紀德川史卷之百三十五

典禮第十一

出駕式一

目次

南紀德川史卷之百二十五

臣　堀内　信　編

典禮第一

緒言

按するに　歴世に於ける内外吉凶大小の典禮式儀は實に枚擧すへからす即ち　幕府の御代替將軍宣下等の大典に對せらるゝを初め　御家吉凶百般の典儀其概目さへ掲けんとするも容易ならさる也今假りに大目を數ふれは

御誕生　御七夜
御色直　御宮參
御紐解　御袖留
御髪置　御袴着
御幟建初　御具足召初
御疱瘡　御水痘痲疹
御前髪取　御鐵漿染
御緣組　御結納
御引移御婚禮　御着帶

御安産　御元服御官位
初て御登城　御歸國
御參府　御官位御昇進
御養君　御聟養子
御家督御相續　御隱居
御年回御法會　龍祖御入國支干相當御祝
和歌御神事　諸上使
諸御拜領　宿繼奉書
御生身玉祝　御誕辰祝
御移徙　將軍御立寄御通り掛
御老中御招請　宮樣御招請

大略如斯の類一典一儀毎外は　幕府を初め尾水三卿御緣族諸侯等へ對せらるゝ御獻上物　上使御禮事乃至御音信御贈答使者往來內は　御父君御簾中諸公子御連枝御双方よりの御禮遇上下諸臣の奉賀謁見祝盃金帛下賜の事に至る迄曲節細目錯綜多端を極め悉く尊嚴鄭重規格肅然たるの程度は苟も追思憶想の及ふへきに非す而して御世子の典儀は　君公に同し男女諸公子は少しく御差等はあれとも御生誕より御婚嫁又は他家御相續の末々迄も吉凶の事々物々御作法儀式亦擧け盡へからす（大慧菩提心御兩公の庶公子數多あらせられ觀自在公香嚴公の御世には二十有余の方々いませし也）該典禮の事は一切表用局日記方調元にして其調帳は悉

く同局に保存の處維新の變該日記帳と共に廢毀に屬し今傳はらされは編述に由なし然るに僅に廢毀を免れ一二遺存のもの乃至內庭に殘留せるもの等を彼是蒐集以て此編を草すと雖も固より殘篇遺殘首尾缺漏多く不了の慨なき能はされとも亦如何ともしかたし聊か以て其一般を窺ふへきのみ

一編述の順序年次に因ると雖も類事は對照見易きか爲め新舊一所に續記のものあり御婚禮の如き是也

一凶禮即ち御喪祭等の典儀亦掛からされ共記皆傳はらす故に欠如す

一歲旦を初五節句式日の典儀又は歲時御廟參御祭奠の事或は內外謁見の禮等總して年中恒例に定めらるゝ處の式目頗る多し之を年中行事乃至何々御式と稱して奉行す記の存するものは類を分て別に編述せり

一臨時吉凶の典儀は表用局日記方同書記係員を置き別局を開き普く舊典前例を審查更に調帳を製し御用人より執政に詢り上裁を仰き執政初御勘定奉行御用人御廣敷御用人御目付其他關係の有司御用掛を被命（內庭の事は老女若年寄表使等の女官掛員となる）此輩擔當奉行畢て祝儀慰勞等として金帛拜賜の事あり而して百般の事務細雜の處理は皆表用局統轄するの例也

一御婚姻等の御慶儀は皆小笠原流を用ひらるゝの例也近世は大管新右衛門其子禮之進（共に小笠原の門人なり）禮式を以て奉仕其作法を捧く故に記中往々同人等の名あるなり

一御代々樣御簾中樣方御逝去（當時の制將軍は薨去三親藩三卿方等は逝去と稱す余は諸大名と雖も卒去といふ御家にても御簾中世子の外諸公子方は御卒去と稱す）は就中の大典にして御式儀作法容易ならす先つ御不例御發表より不輕御容體御差重り御大切遂に御逝去といへる如き

順序ありて御不例中は勿論右御容體の度毎　將軍家右大將家より御尋之上使（御側衆）御拜領物或は御典醫を被差向又は　上意を以て御樣體言上の御附人を被命續て尾水三卿方初内外の御見廻贈答數限りなく彌御發喪に至れは御悔御香奠の上使（御老中也御香奠は將軍家より銀百枚右大將家より同五十枚也）御膝中御尋の上使節々の御拜領物（御側衆上使を以御檜重麻地飴燒饅頭等數回拜領）御同族初諸家より之御音信御附届あり御遺骸は紀州長保寺へ御葬送にて東海道本阪越美濃路通御發棺（江戸にて御逝去の時也御簾中にも御同樣さす公子方は長保寺に不限御所在の御菩提寺へ御葬送なり）而して和歌雲蓋院及ひ長保寺にて御中陰より百ヶ日迄不輕御法會續て長保寺且高野山へ御廟御寶塔經營又は御遺物御贈進の事乃至江紀御家中節々の總出仕謁伺又は謹愼の作法（五十日之間月代を禁す）等に至る迄實に千緒万緒盡しかたく一切表用局の調元にして準備の内調一朝一夕に非されは御内實より一二ヶ月の後に非らされは御發喪の運ひに至らさる多し爲めに係員は晝夜睫を交るの暇なく江紀人士の往來飛脚は櫛の齒を挽くの有樣にて調査の簿册は積て山をなしたりと云然れとも今一つも傳らす聊か一言を附す

一御代に因て稱呼を異にするあり職名（職制の部に詳なり）其他御内證を大奥錠前向を御廣敷と寺社御代參を御名代と御殿中を殿中と若山西御丸を西丸と（以上皆寛政四年改る）改稱の如し是等の事　舜恭公の時に多し記述皆時の稱呼に從ふ

一上使へ被爲對御禮節は恰も　將軍に對させらるゝ如く御迎送御會見共（御迎は前方より御玄關へ出張上使御門前注進にて薄縁へ御出迎御送りも同薄へり迄）御崇敬を盡し給ひ即日御登城御禮仰上らるゝの例也御不例等にて御會見なき時は西條公御名代御出會御同公亦御差支の時は執政出會　上意を奉す

一尾水御兩公と御往來は常也と雖共御三卿（田安清水）一つ橋は然らす先つは御參邸等無之　幕府へ御伺差

圖の上營中にて御對顔の事あり然れ共一つ橋大納言卿には寛政十二年九月赤坂庭園御見物として御參邸御饗應ありたり最も幕府へ御達の上也

一西條公には朔望廿八日五節句其他吉凶に付必す御參邸御對顔等恰も　我公か　幕府に於かさせらるゝ如し松平彈正大弼侯亦然り（御連枝に準せらる）而して兩君登城の際には先赤坂邸に御入來　我公の御出門を御待ち跡に尾して登營を常とせらる故に殿中には御兩侯の御部屋と稱するありたり

一御大禮御吉事乃至御參府御歸國等の時御老中御招請の事往時は有りたれとも近世は其事なし是幕府へ御義務の一たりしも節減によれるもの也

寛永元年正月　元和十年也

前將軍台德公竹橋邸へ御成之次第

按に將軍家總ての出駕を御成と稱す（足利家以來の通稱）龍祖の御時には三親藩の本邸皆本城に隣接殊に御近親の御間御内輪にひとしく且萬事御無造作にわたらせられ三家方初諸侯へも臨邸の事屢なり則ち我邸へは

元和十年正月廿三日

前將軍　台德公　竹橋邸へ

同年同月廿七日

將軍　大猷公　竹橋邸へ

規式先年尾張黄門亭へ臨駕の時に准す在江戸諸侯を召し猿樂の御饗應あり

寛永三年二月廿七日

前將軍　竹橋邸へ

同年三月七日

將軍　同

十四日諸侯を召し御饗應

同五年三月四日

前將軍　同

御相伴水戸頼房卿藤堂高虎立花宗茂

同年同月十四日

將軍　同

御相伴水戸公藤堂高虎丹羽長重

同七年二月廿日

前將軍　同

御相伴駿河大納言忠長公水戸公藤堂高虎丹羽長重

同年同月廿三日

將軍　同

御相伴右同斷及ひ立花宗茂

同十七年五月十四日

將軍 大猷公 同

猿樂御饗應

爾後五十六年間中絕　淸溪公の御時元祿十年四月十一日　將軍綱吉公常憲公赤坂邸へ臨駕本年二月御成御殿造營○將軍御講釋御仕舞被遊賴職賴方兩公子へ新知三萬石宛を賜ふ廿五日御老中御招請廿六日御成の節の御供御譜代大名御招請廿七日尾水兩公御家門方御饗應あらせらる將軍御成は諸侯に在ては就中の大典寛永御成の記に因ても其容易ならさるを知るへし治平日尙淺きに在てすら如此し況んや爾后太平に隨ひ相競て崇敬を表さんと益鄭重を盡し唯善唯美の至らさらんを懼るゝのさまと成り行き其費實に巨萬を重ね諸侯疲弊の慨なきにあらされは其後は絕へて御沙汰もなかりしか　顯龍公の御時文政十年九月十八日御內意は前年十二月に出る　將軍家齊公文恭公赤坂邸へ御立寄あり

吹上御庭御成先より御立寄也規式低減の点よりの稱にて御序を以御立寄り被遊の義なり是御父子の御間柄格別の御事と聞く殿房亭榭の構營初百般の準備實に筆紙に盡し難きとは信等幼耳に聞知する處也後　憲章公の御時弘化四年八月十八日　將軍家慶公愼德公濱御成の次を以我芝邸へ御立寄ありて　公及御簾中の君御參邸御饗應あらせらる斯る大典其調帳は皆表用局に存置の處今傳わらす僅に寛永元年及寛永十七年の記の遺存するあり文政十年の分は唯殿中亭榭の裝飾記に

過きされとも亦發見に隨ひ揭載す記事斷續不倫止むを得さるなり

寛永元子正月廿三日

大御所樣台德院樣紀伊中納言殿南龍院樣へ御成之次第

一前日御城へ御禮に御登城

一御成之朝御城へ御迎に御上り候事

一卯辰之間に御數寄屋口より　御成之事

一外路次之外迄御迎に御出候事

御數寄屋之内

一床にきたう掛物横文字　棚にくわんはほうき

一釜せめひほ　炭入ちやりくへ

一堆朱布袋之香合火はし

御膳之次第

四つ揃のわんに蒔繪御紋杉足打御通盃は杉三方御相伴四つ揃之椀に杉之平膳本膳計引落し

御本膳

酒ひて

鶴　あわひ　たい　くりせうか　よりかつを　みつかん

御汁　鶴　つくし

椎茸（ひとめふと）　にしめ　けし山椒　味噌かけ

御食

御　二

ゆるか内の物あへて　さんしやう味噌 煎酒酢少加る

けりやきて兩足身二切　切かまほこ

たいらき二切はくし　かうのもの塩山椒

御汁　生たら こんふ入

御　肴

このわた　京燒皿に入て

御酒　三へん

御菓子　杉緣高三方

きんとん　水くり　御やうし

豆のこ　黑ごま　さとう　山芋煮染

御相伴衆

水戸宰相様　丹羽五郎左衛門殿

御所様御花　紅梅白玉

花入かねの物くた耳　水指　いもかしら 織部

御茶入　あけの衣　かんさうの袋に入て
石田松　　堆朱四方盆　織部盆
御茶わん新見　　茶しやく虫喰織部
ふた置ひつきり　　水こほしめんつ
　御茶過て
御所様御炭
　檜足打に炭いろ〳〵　火はし　大ほうろく　堆朱香合　長火はし　鵜の羽　そこ取　こほうろくはい入て
　鎖之間に
上段板書院に上に虎同しもく　　雨龍の筆架かうらい筆
八角の硯から物　　定家の千載集　　自在つたの釜つりて　袋棚
御茶入　かんさう袋に入て　玉かき
　但ふんりんはいかつきの天目　但尼け崎の臺に乗る
水差なんきん物　さしやく利休　茶せんほうらい　ふた置かれの物
水こほし古き染付　ひしやく
　洞子之間に
床に三幅對　中わの机　唐物青貝　しゝのかうろ　かれ物　八角の釜
水さし　かれ物　御茶入中頃　けんさんの天目　さしやく　織部

ふた置　せいし　　ひしやく　　御風呂屋道具色々
水こほし　なんはん物　　茶筅

御成書院の餝

右の棚に　　せひし盃同直に
右
とうひんからの物直に
右の下
食籠盃に　何も堆朱
下の中に
食籠青貝堆朱の盃に

床の内

一幅對かんさん十徳　かんき筆　　小机貳つ　　朝銅の花入二つ　花入池坊

左の棚

廻りかうろ金の臺きんし盃　　うかい茶わん二つ　ぬり臺二つに乘て置
上より二棚
硯箱くりくりくり　　右上より二の棚
印籠　　きんし同盃に
下の右
せきしやうせいし鉢　　下の左
食籠　　同盃堆朱

板書院

上に釣香爐　　盃山の石　末のまつ山　金の鉢　砂から物
蒔繪の臺子　　たく高の御茶入臺天目たゝすに入て

御書院へ被爲成拜領之次第

一御太刀　吉平　　一銀子　三千枚
一呉服　貳百　　一八丈島　三百端

御祝之次第

金の三方に紙一帖敷御熨斗出る

初　獻

金の三方置上け繪御紋
同三方にかわらけ壹つ置出る
亀の甲かれ繪大重に乗り同輪

鳥きそく採にて　龜の甲とし め先へ五度手塩　御そうに　耳

亀の甲五種　餅　あらめ　するめ　栗　かつた　芋一重餅五切に　小くし蚫平かつた

御二獻

小重輪　塩引　同たり　金のきやう採廻　ひれの物　みゝ

三　獻

小重　から墨　するめ角盛　ひしほ煎　耳

何も一獻に三方に金土器盃一つゝ出る

御ちやうし銀金のちやうつくゑ同かり何も金紙口のかさり松さくら山たちはな

右御盃の次第は初獻御盃紀伊中納言殿　頂戴此時に御腰物切叉貞宗御脇差正宗　拜領其御盃御前へ上る其御盃水戸宰相殿　頂戴納る　二獻に御盃水戸宰相殿　頂戴其御盃　御前へ上る

其御盃紀伊中納言殿　頂戴其御盃宰相殿納る御祝之間廣間に家中の者十二人呉服銀子拝領廣間にて御成之廊下にて拝領之御禮申上る

御廣間之餝

右鴨之香爐　堆朱之かん板に

左御茶入袋に入て　堆朱之盆　けん山天目　堆朱之臺内赤め四方盆に

下の中砂之物金の鉢かんはんに

床之内

三幅對繪はもつけい　右太公ほう　中すゝいの三人　左わらしつ

大机に

鶴龜二つ　うすはた二　香爐かうはしはいおし入て　香はし立　堆朱香箱

兩の脇に

壺くわひん二　小机に乗て

左の棚上段

右沈箱　堆朱直に　左堆朱之盆に　せいしのかうろう　堆朱香爐　同かうはし

左上の(一本アリ間に)棚に食籠　四角くり〳〵　堆朱盆に

左の下食籠　青貝くり〳〵盆に　左の下盆山石　塗はちに砂唐物

板書院

上の中
くわんしやう　右之柱にしもく　ちく物三筆　さうふり　さり　かうせい
くり〱長盆　雨龍二疋連かいらい　ひつか　小刀　から墨　筆　さや軸　くり〱
水入　せいしのけんひやう　硯　けさん一對
金地印籠　くり〱盆に　せいしすひびん　花入てきんしの盆
左柱に掛る
からのかゝみ　金之臺子　風呂釜　水さし　ひしやく　水こほし　いつれも金
御茶入大海内くもり臺天目石たんすに入廣物のゐんに

御廣間にて進上次第

一御太刀　行平　一金子三百枚
一御小袖　二百　一金襴三十卷
一繻珍　百卷　一糸三百斤　紅二百斤　白百斤
一綿　千把
右進上物相濟家中之者御祝詞申上候事
一御太刀一腰　小袖　安藤帶刀　一右同斷　久野丹波守
一同　安藤長二郎　一同　彥坂九兵衞
一同　松平久七郎　一同　戸田金左衞門
一同　水野淡路守　一同　三浦長門守

一同　水野平右衛門　一同　大數新右衛門
一同　蔭山土佐守　一同　澁谷伊豆守

以上

鞍置馬進上　鹿毛　松平久七郎　渡す
諏訪部　受取

御能之次第始の御使　酒井雅樂守

一式三番　三十郎 翁　梅若 千歳　權之丞 三番三
大夫三十郎 難波　わき 福王　大 庄三郎 小 新九郎　太 左吉 笛 又三郎
七太夫 賴政　權右衛門　大 九郎兵衛 小 左衛門　笛 庄兵衛
七太夫 湯谷　春藤　大 植田 小 長右衛門　太 左吉 笛 庄兵衛
三十郎 舟辨慶　同人　大 植田 小 新九郎　笛 又三郎
七太夫 自然居士　同人　大 大助三 小 左衛門　笛 又三郎
金剛 あふひの上　春藤　大 九郎兵衛 小 長右衛門　太 二郎兵衛 笛 庄兵衛
三十郎 祝言　彌二郎　大 庄次郎 小 清二郎　太 左吉 笛 又三郎
狂言　庭鳥の子　墨ぬり　粟田口　ふす

右御能三番過にて舞臺へ鳥目三百貫文三所に積大夫に小袖三つ内から織わく重總座へ小袖貳つつゝ芝居之見物人に大折まんちう積十此外鰑酒盃出る

其後御書院へ被爲成七五三上る

御本膳

大重に輪 塩引　たこいほを取　かくかまほこ　亀足五

大重 和交 のし するめ　五度御湯漬　手塩 耳御はし

同 香物　福免　をけ

第二

大重輪 巻鰑　小重 そき物　集 御汁　芋　大こん　牛房　いりこ　くしあわひ

貝盛　きわく

同 から墨　くらけ　はりくり　御汁　こい

御三

いわきまゐ 羽盛　御汁　白鳥　しいたけ　三度あいきわけしさらへ 金二 銀一

船盛 上置重て　御汁　ひれの物

御吸もの

あい金 櫻煎　ふくら煮

御菓子緣高　總金置上け繪御紋　三方に乘

金銀さんほう六つくし金 燒麩　まんちう三　姫くるみ　ちやうち取り たいきわく　みつかん　かんの臺きわく やうかん

上へ重て 豆飴　御やうし　結ひこんぶ　柿二内一金　かや　ちさりの臺 てうきわく

糸花 櫻つはき松

右何も御膳總金にて置上け繪松竹鶴龜緣に御紋かわらけの輪に角いせゝ草花合に御紋御相伴衆

金銀嶋屋にいせゝの繪有り

一御湯漬之時に銀のかな色御湯漬鉢　但金之三方に乘る

同銀之しやくし御相伴衆は錫鉢

折十合　置上け總金御紋合に草花　但三つ足

小板 かまほこ　きわく 金銀箸　かさりすゝき きりこ　金銀に繪

かさり小波立金銀 床ふし　中に　きんかん 九年は さくろ かさり糸さくら上之重にから墨

金銀白くかい中に蚫重て盛

五種物ほしいそめ

かさり小きわく はまくり　金銀　かさりつは木葉銀のふきかけ 椿餅　かと盛

具少 貝金銀に（一本ノ して）合て盛上置ひかいて

かさりさんほ金銀 そき盛　かさりきわく 塩引　六角　かさり松 くしひ餅　かさり松梅 やうかん

三つ星合之かわらけ輪すかし有置上て三方に乗る
そき物（さんはう金銀）　から墨（金）　箸　ふしのり（金銀のかさり）　金銀のよりにてからみゝ
二つ星　五度
塩引廻し盛（のきわく金銀）　箸　やうかん廻し盛（かさり白玉）　御盃臺　御膳　五膳
金の置上け繪御紋有り三方に乗る作り物色々
盃の臺御目通り三膳金の置（上脱カ）け三方に乗る
盃台くり足二膳金銀嶋やり作りもの
右何れも折棚にかさり御肴出る
獻二通り
三獻目の御盃　御前へ上る
此時に義弘之御腰物とりかい國次之御脇差進上其御盃紀中納言殿頂戴其御盃　御前へ上る其御盃水戸宰相殿頂戴納る
御引替御膳御掛盤
御本膳
かき和鯛　よりかつを　くりしよか　わさひ　御汁　鶴　生しいたけ　うさ
香のもの色々　あへ物ゆるか内之物　御食
御　二

鮒生成　すし　　いん鳥　　御汁　ちしや　　塩たい　　やきものます
御　三
燒もの小たい　　御汁　白らたにこんぶ　　和ものはにら
御引物
煎鳥ひはり　　いか塩さし
御吸物
いりこ　かき
御菓子三方に紙を式
肥後みつかん　枝柹　是は薄淺きわん今燒さし
御相伴　紀伊中納言殿　水戸宰相殿
夫より御廣間へ被爲成四番目御能始る御能過　御數寄屋通り　還御中納言外路次迄御送りに被出
御禮被申候家中拾貳人之者も出る
還御之後　御城へ　御禮に　御上候夫より
公方樣へ御禮直に大炊守殿雅樂頭殿信濃守殿主計頭殿へ御出
御臺樣へ銀子五百枚御使者水野淡路守
同　貳拾枚　民部卿へ　同　貳拾枚　表御局へ
御成之日同翌日迄五々三膳部

本膳　足打

大重輪いつれも金繪
塩引　すし　御汁　鶴にうさ　しゐたけ

同
香物　和交たこ　御飯

御　二

から墨　かく かまほこ　きわく五　御汁　あつめ

貝もりきはく　かく おけ

そき物

御　三

羽盛にし　きわく　御汁　たい　しらに　船盛

引もの

むし貝　濱焼　焼物ます　いり鳥　たこ

肴

かも
煎鳥　赤かいにしめて

吸　物

ふくら入　小鮒

初献はかわらけの盃にて面々に引落してうらにて出る　二献より塗盃出る

菓子

さんぼ五 まんちう　みつかんかきゑた金　くるみきわく　やうし

花松さくら やうかん　しらあみ　豆飴

粗進の五に三是翌日出る

本膳

干大根　あらめ　汁　山いも　豆ふ　椎たけ

和交　六せう　さつさか　に耳

香物　はす　食

二

廻し盛 牛房　かまほこきわく　焼ものきわく

廻し盛 ろくせう　おけ　汁　あつめ

三

繪葉吹かけ 羽盛　かわらけ 山の芋　汁菜　ふのこさしきわく

引もの

わらひにて　上けこんふ　酢牛房

盃臺御供之衆に出申はくり足三尺五寸四尺の臺總金置上け同金銀嶋やり色々作物の臺數七膳翌日

迄出る此外に九尺臺總金に壹つ是は金之土器澤山に置翌日廣間へ出る
松さいの物五（椰［本ノマヽ］）金之三方同すなこ金銀嶋やり作り花此外に肴色々

折總金に繪是御成之日は延引翌日出る

かさりつはき　塩引きわく　まつ　まんちう　かさりさんほ　やうかん　小きわく　はい

御成之日御供之衆へ御振舞五々三金銀御振廻式は常之料理何もにくにて向詰迄之御振廻有之

同廿七日

將軍樣大猷院樣御成之次第

前日　御城へ御禮に何も式右に同御數寄屋口より

御成之事外路次迄御迎右に同御數寄屋之内置合右に同

御膳部之事

四揃のわんに御紋御蒔繪杉足打御相伴は平膳

御本膳

さつま燒新皿　酒浸　あわひ　よりかつを　たい　みつかん　くり

御汁　鶴くつし　せうろ　ひはり　濃醬

御食

二

盛こはし
焼鳥　けり うつら　かまほこ　かうのもの塩山椒　御汁　こな

御肴
たいらき　このわた　から墨

御菓子
きんとん　豆のこ 黒ごま　砂糖　山之芋　水くり　御やうし

御相伴　甲斐中納言殿　峰嚴院様駿河大納言様之事
丹羽五郎左衛門　朽木牧齊

鍍之間たうこの間　御成書院御廣間置合右に同

御茶過御書院にて拝領之次第

一御太刀　正恒　一銀子　三千枚
一呉服　貳百　一御夜の物 からたり　二十

御祝之次第

金之三方に御喰積長御熨斗蚫出る

初献
亀甲
鳥株立ひらき　御そうに　御はし臺　五種株立ひらき　手塩

二献
小重輪
塩引 かうたて　同 ふか　ひれの物　御はし臺

三献

たこ　うこ盛するめ　ひしほやき　御はし臺

右一献々にて金のかわらけ三度一つ金の三方に出る

初献御盃紀伊中納言殿頂戴此時二字國俊の御腰物切及貞宗之御脇差拜領其御盃　御前へ上る其

御盃甲斐中納言樣へ其御盃　御前へ上る其御盃水戸宰相納る　三献御盃紀伊中納言殿頂戴其

御盃甲斐中納言樣へ參其御盃水戸宰相殿納る

其内廣間にて家中之者共右之吳服銀子拜領申廣間へ　御成之廊下にて御禮申上る

廣間へ被爲成中納言殿より進上

一御太刀　來國光　　一金子　三百枚

一金襴　三十卷　　一繻珍　百　卷

一糸　貳百紅 百 白三百斤　　一吳服　貳　百

一綿　千　把

此後家中之者共右之通御禮申上候

進上
一鞍置馬　黑毛　　松平久七郎渡す
木村孫八郎受取

御能之次第

一式三番　翁（三十郎）　千歳（梅若）　三番三（権之丞）

一（三十郎）加茂　福王　大 庄二郎 小 新九郎　大 左吉 笛 又三郎　えひす　ひしやもん

一（七太夫）八嶋　春藤　大 九郎兵衛 小 小左衛門　笛 庄兵衛　花子

一（三十郎）千壽　進藤　大 植田 小 長右衛門　大 左吉 笛 又三郎

一（七太夫）道成寺　春藤　大 助三 小 新九郎　笛 又三郎　老武者

一（同）自然居士　進藤　大 植田 小 長右衛門　笛 庄兵衛

一（同）百萬　權右衛門　大 九郎兵衛 小 小左衛門　太 左吉 笛 庄兵衛

一（三十郎）やうろう　彌太郎　大 庄次郎 小 清次郎　太 左吉 笛 又三郎

御能三番過舞臺へ錢萬右同斷

其後御成書院にて七五三上る

御本膳

塩引鮹　かまほこ　和交　御湯漬　御箸臺

香物　福免　おけ　手塩

御二

さめかたり　くらけ　御汁　集

から墨　　貝盛すし　　御汁　白鳥

御　三

羽盛さゝめ　　御汁　鯉

船盛　　御汁　鯉の雲煎

御菓子

さんほう金銀 やきふ　　まんちう　　ちやう金銀の かやきわく　　枝かき　　みつかん　　金の臺 やうかん

御やうし　　いんなん物　　結ひ昆布 作り花松からし　　姫くるみ

折十合　但六つ足

かさり玉水 塩引　　さんほう まんちう　　かさり千鳥 から墨

かさり無金銀繪 重ちう　　松に五色糸かけ するめ　　はすかさり梅

かさり松 むしかい　　かさり無金銀繪 きつから重　　かさり無し そき重

葉銀 みつかん

二　星　　金の三方に乗る

のしかわりとんほう　　かさりかもくし ふしのり　まて　あさり　はまくり　　金銀箸

三　星　　金 から墨　　さくら

塩引　たつなみ　はす　　松五色糸

御盃臺之事

地肩臺　源氏臺　西王母臺　人丸臺

伏義神農臺　桐の臺　次海士臺

重肩子　蓬萊　鐘馗

以　上

獻二返過三獻御盃上る時大左文字之御腰物同國吉御脇差進上其御盃紀伊中納言殿　頂戴其御盃御前へ上る其御盃甲斐様へ進其御盃　御前へ上る其御盃水戸宰相殿へ頂戴納る

御引替御膳御掛折

御本膳

鱠　たい　ほら細作り　くらけ　せうか　みつかん　御汁　鶴　くつし　うさ　かうのもの

焼物　ます　御飯

御二

焼鳥　うつら　にかも　水貝　御汁　たら　こんふ　生成すし

御三

やきもの　小たい　このわた　御汁　ちしや

御引物

かまほこ　入鳥　あへもの入かの内物

御吸物
さくら入　こふな
御肴　二星 三星
御菓子　三方紙を敷
麥かき　みつかん
御相伴は　うすはたに淺きのわん 足打は赤わんにて出ゐ
夫より御廣間へ　御成四番目御能始る
御能過右之通御數寄屋通り還御外路次の外迄御出御禮申上候家中之御禮申上候者共右同前之事
一還御之後　西之御丸へ御禮に御上り夫より　御本丸へ御禮に御上り夫より　甲斐中納言樣へ御禮之事
一御太刀　左文字　一御腰物　長光
一御脇差　左文字　一御小袖　二十
一金子　三十枚
右御使は鳥居土佐守
甲斐中納言殿へ進上
一御太刀　國行　一御腰物　守家
一御脇差　西連　一卷物　五十　しゆちん 廿五 さんす 廿五

一銀子　三百枚

以上

正月廿三日　同廿七日兩日共

御成之時役人之事

一御數寄屋方役人　大藪新右衛門　竹田慶安宗円

一御數寄屋方勝手方役人　安藤忠兵衛

五十人前本二三檜足打にて　深尾源七郎

四つ揃の數寄屋わんにて　中野新兵衛

一御成書院勝手方役人　山本圖書

五十人前本二三杉足打にて　山（本）茂兵衛（一本下）

蒔繪のわん是は年寄衆御振舞　垣屋市郎兵衛

一御黒書院役人　右同人

百五十人前本二三三通蒔繪のわん

一御對面所方役人　加納數馬

五十人前内三十人前出る　三宅與兵衛

但廿三日之朝

一御廣間方役人五々三　渡邊一學　芦川甚兵衛　川合刑部

百人前の内七十人前出る

但廿三日之朝

一御勝手之間役人　都筑久大夫
　　　　　　　　　天野長七郎

三百人前余本二三向詰是は五々三之已後御能之間に金銀之御振廻

一御式臺之間役人　山田八左衛門
　　　　　　　　　水野甚三郎

貳百人前是は馬乘同心衆御歩行衆二三向詰迄晩は三通

一御樂屋方　役人　芦川權兵衛
　　　　　　　　　薗田伊兵衛

大夫之外は木具にて三迄殘は二迄

一芝居役人　上野三郎右衛門
　　　　　　渥美太郎兵衛

折酒を引但翌日は赤飯御酒出る

一辻固衆役人　布施五左衛門
　　　　　　　小笠原次右衛門
　　　　　　　神谷九左衛門

赤飯樽肴折を引

一御成之間　渥美源五郎
　　　　　　戸田八郎右衛門

百人前本二三向詰迄晩は三

一臺所（御門）[一本役人]　水野平右衛門
　　　　　　　　　　　　　曾根孫大夫

右同

一北之御門　小笠原十郎右衛門
　　　　　　志賀又左衛門

右同　村松郷右衛門　大久保四郎右衛門

一南之御門

右同　望月次左衛門

一御中間御小人

右同　市川甚右衛門　早川清右衛門　朝倉勘解由

一御盃の臺役人

御肴同御菓子之類

同廿八日翌日諸大名衆御振廻之事

御能之次第

式三番　觀世　翁　權之丞　千歳　三番三

三十郎 竹生嶋　福王　大 九郎兵衛　小 長右衛門　太 左吉　笛 庄兵衛あさう

七大夫 實盛　春藤　大 植田　小 新九郎　太 清右衛門　笛 又三郎

三十郎 牡丹　近藤　大 助三郎　小 小左衛門　太 左吉　笛 又三郎しうろん

七大夫 橋辨慶　大 太兵衛　小 茂右衛門　笛 庄兵衛

三十郎 弓八幡　權右衛門　大 茂右衛門　小 庄二郎　太 八兵衛　笛 九助

右御能三番過大夫に唐織一はゝ一小袖一舞臺へ貳百貫役者へ小袖貳つゝ廣間にて諸大名衆御能より前に御振廻五々三二百人前之内百人前程出る三人前精進

御書院之勝手にて御年寄衆御振廻是は當之料理

五十人前本二三迄わん蒔繪同畫も御振廻有御料理同樣

御黑書院にて五十人前　是は御能之間晩迄之料理

御對面所にて三百人前本二三迄　是は御能之間晩迄之料理

遠侍にて本二三迄御料理

御能過御廣間にて諸大名衆御振廻貳百人前本二三向詰迄金銀是は御能過勝出候得共入不申候則廣間役者出る御能之間へ金銀之折出る同盃臺酒肴押之物出る

此外に盃臺長さ九尺横六尺五寸

總金に置上ケ色々作り物の臺金之かわらけ五十程置同肴置合出る

御能過時分迄も酒盛有之候

寛永十七年五月御成御座敷等御飾圖

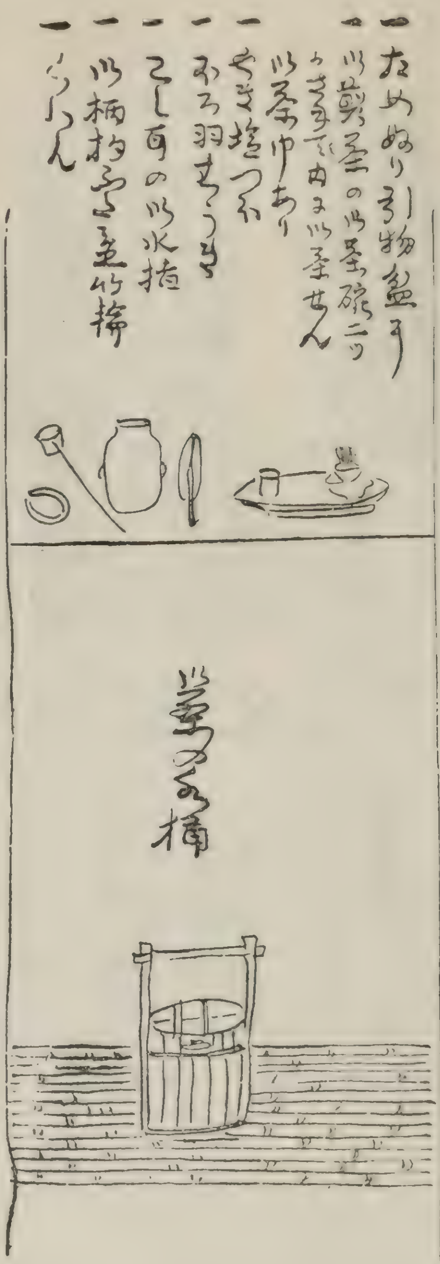
寛永十七年五月御成御座敷所々之御飾

一日出に被爲成

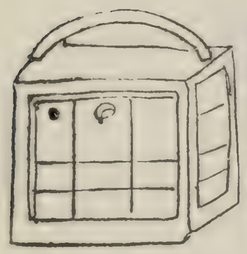
一外御露地堂之わきのひさしに御道具掛御輿すへ有

唐御門之内御茶屋御飾物色々

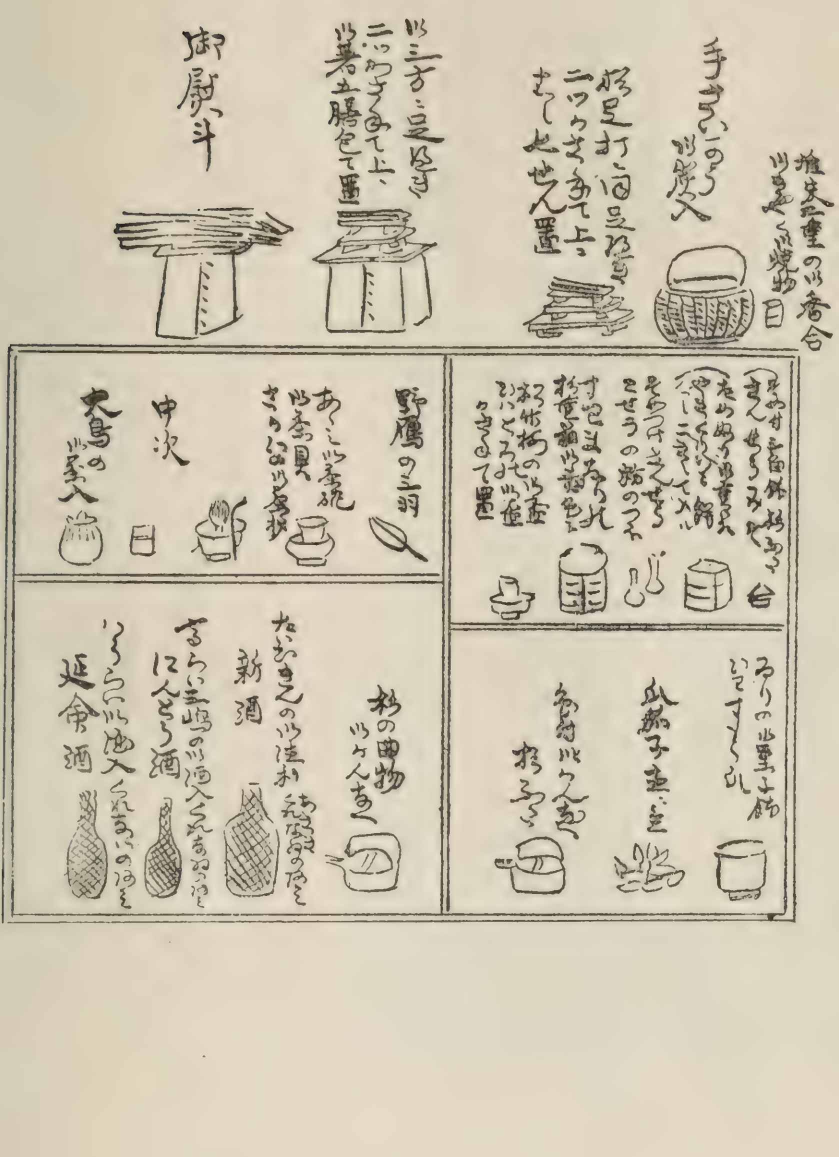
一御茶屋之東の方入口之南の脇に茶屋腰掛を置丸た皮付にてさし青竹杉けたうちませなり
一疊石之間中程の上に鉄燈籠を釣
一くと二つに一つには御煎茶のはかま一つには御茶の湯之かふら釜
一くとの脇のいろりにいりなへ五徳にすへて置まはりにあふり餅てんかくを立をく
一水つかひに御茶之水桶ちやうをおろして
一同上の棚に御茶具あり



一水遣のわきに又いろり有やき餅なへ五徳にすへて置まはりにやきくりいもを立てをく
一水遣といろりの間の柱に青竹二重切の御花入に菊薄入て掛る右之筒小堀遠州切



一御たんす置棚の脇にをく唐竹の組物也内に御香合釜居帋御ふくさ御柄杓はいほうろくなと入る
置棚長四尺一寸高三尺一寸よこ一尺二寸
ぬくひ板の間北のかへのきはに置



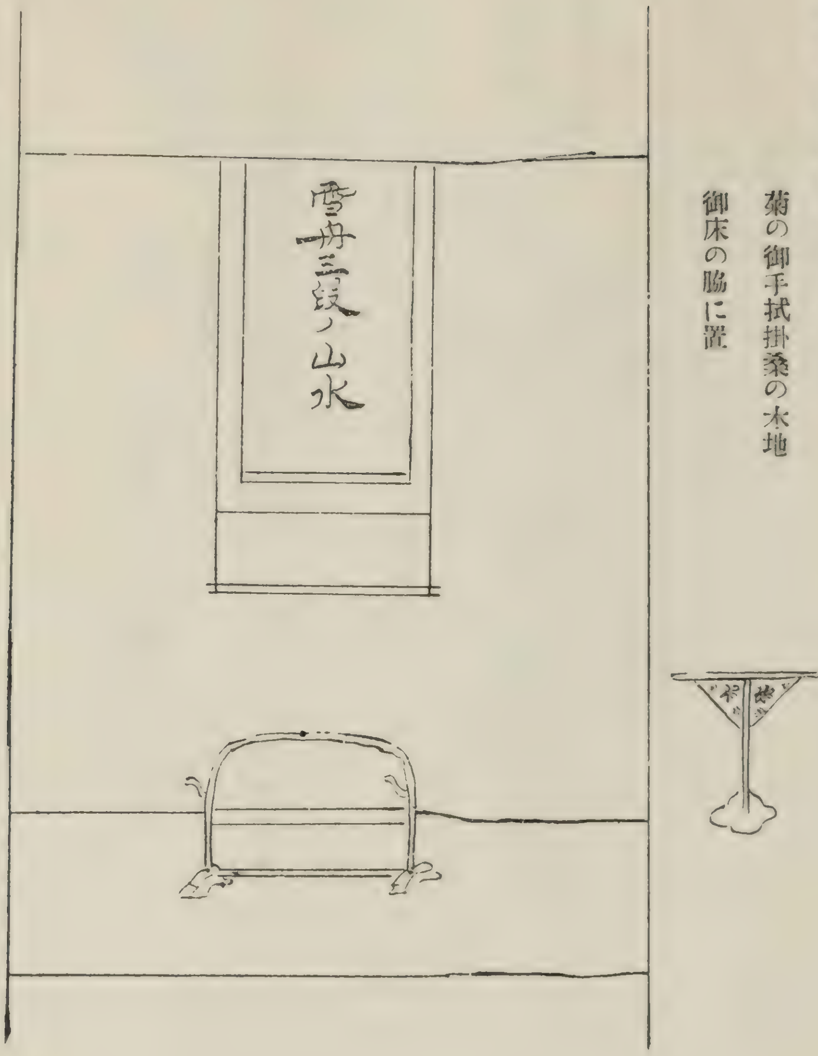
一同板之間いろりの前に唐莚一枚しく

一同南の方中敷居之きはに丸きもうせん五枚重てをく

同御上壇八疊敷出床一間

菊の御手拭掛桑の木地

御床の脇に置



一御床之前に御しとね置

御數寄屋

一御掛物　虚堂之墨跡不動軒
　棚に
堆朱の御香合　布袋　御伽羅　鶴本白の三羽
一御釜　菊水　土風爐　小板
一御炭入　くみさいろう　御灰ほうろく　しゐかさしの御火箸
一御水次　木地の飛驒かた口
御膳過て御中立之間に御炭被爲直
一御花入　音信　薄板
　御花組　杉の足付　草花色々　御花切　茶巾古銅之水次
公方様御花被遊　さゆり　ひめゆり
一御茶入　朱の衣　段々のかんとうの袋
一御茶碗　雲龍之染付
一御茶杓　利休
一御茶筅　白竹ほうさい
一御水指　織部つは水さし
一御水建　飛驒めんつう木地

一御柄杓

一御蓋置　竹輪



一八角つたの御釜

ぢざい

一栗の木地ふち

桐の袋棚

玉かきの御茶入

袋白極とんす

青磁の御水さし

ぬりふた

ほやがうろ

たいひさんの

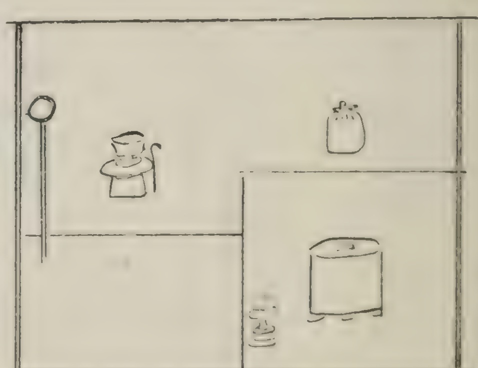
松の木臺

むしくひの御茶杓

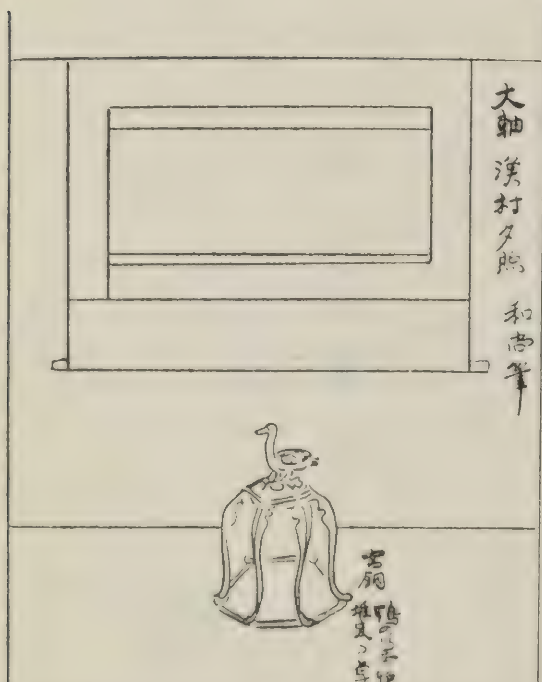
御柄杓

御水建人形染付

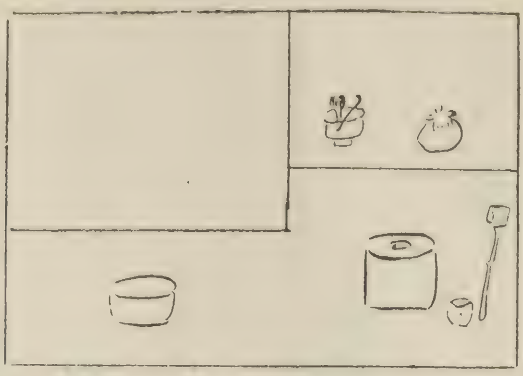
御茶巾臺高麗一文字



御たうこの間

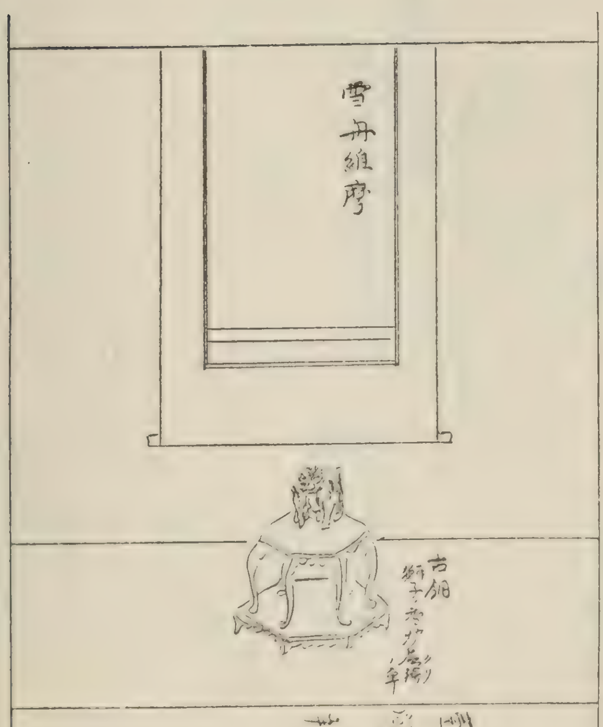


同おし入の棚　御釜はやうはり

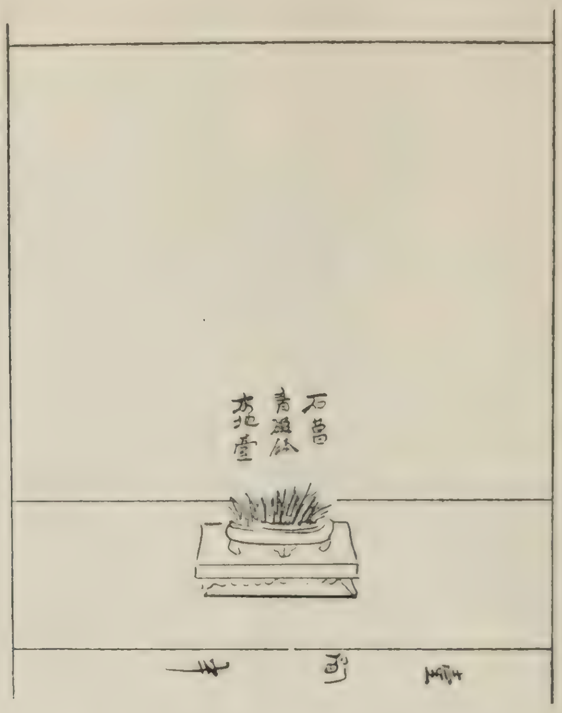


御茶入竹中次
　袋きんらん
御茶碗織部
さかひの御茶杓
古銅の御水指
蓋置青磁すかし
御水建かうし
御勝手に
炭入ふくへつんさ切
御香合地紅
くはん大はし
くる鶴の三羽
眞のかた口

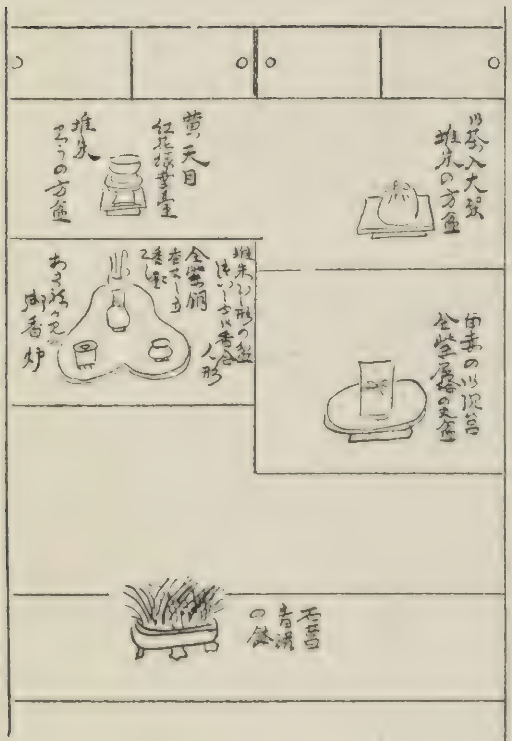
櫻之御書院

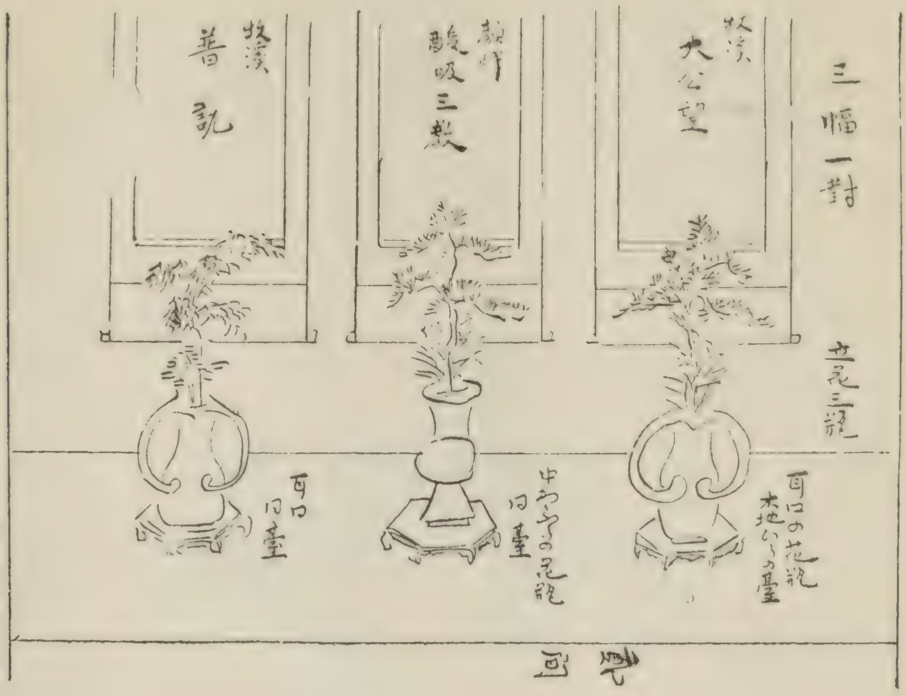


同下壇の押入板床

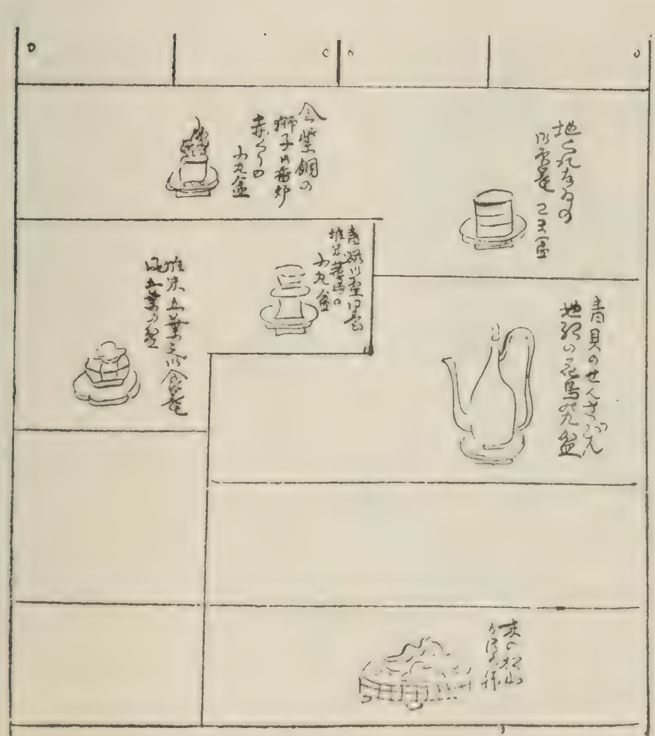


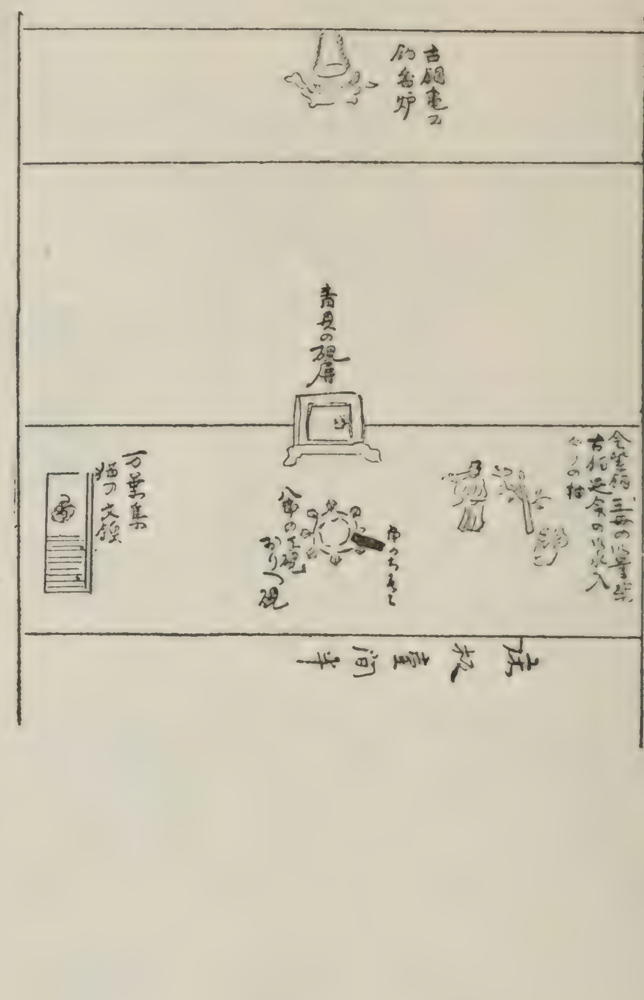
御成書院





三幅一對
牧渓
大公望
三教
牧渓
立花三瓶
耳口の花瓶





一御二之間右勝手に餝る

御臺子　梨地高蒔絵

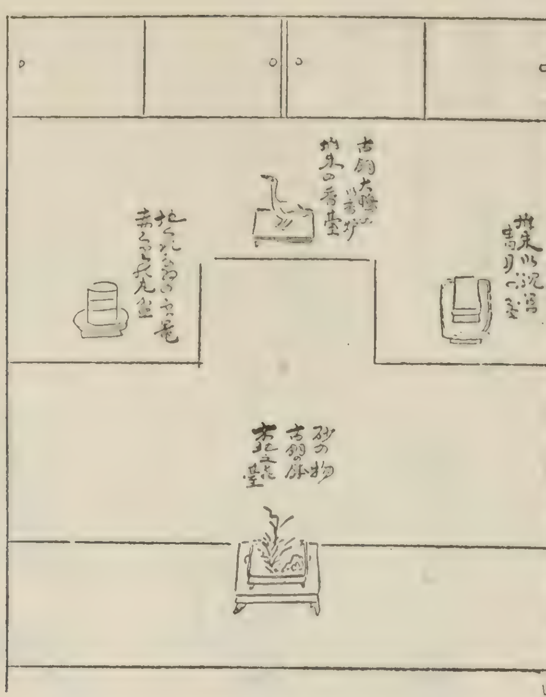
同御たんす　御茶箱　御茶具

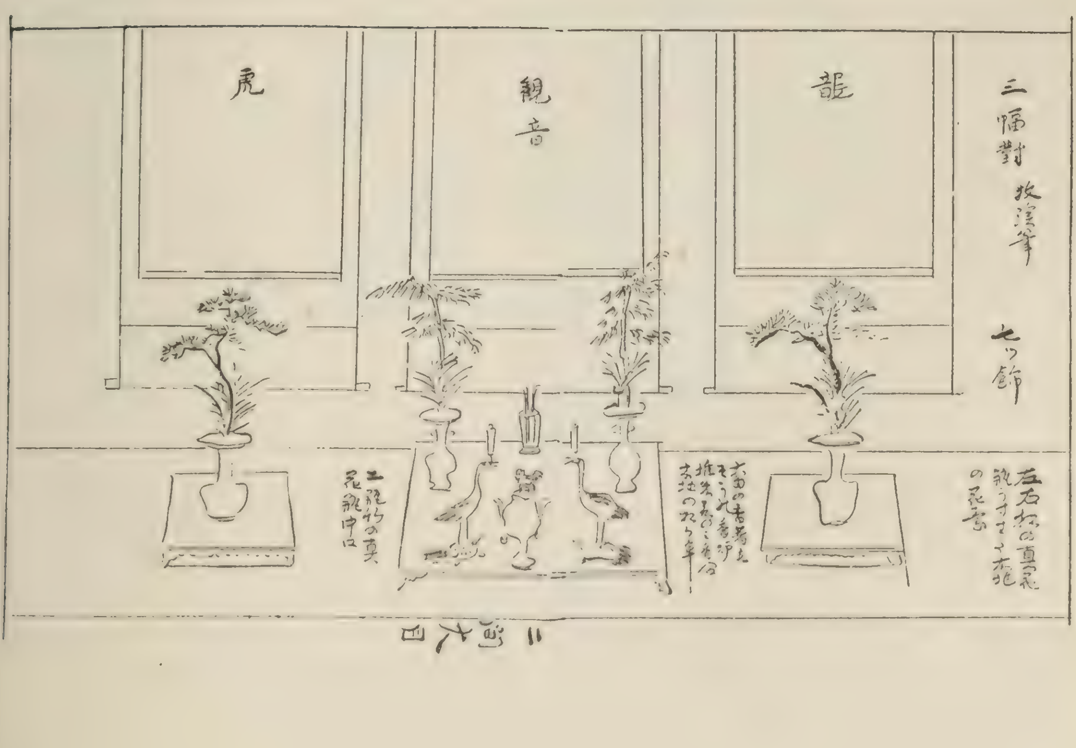
一御茶入　なし地御紋のなつめ

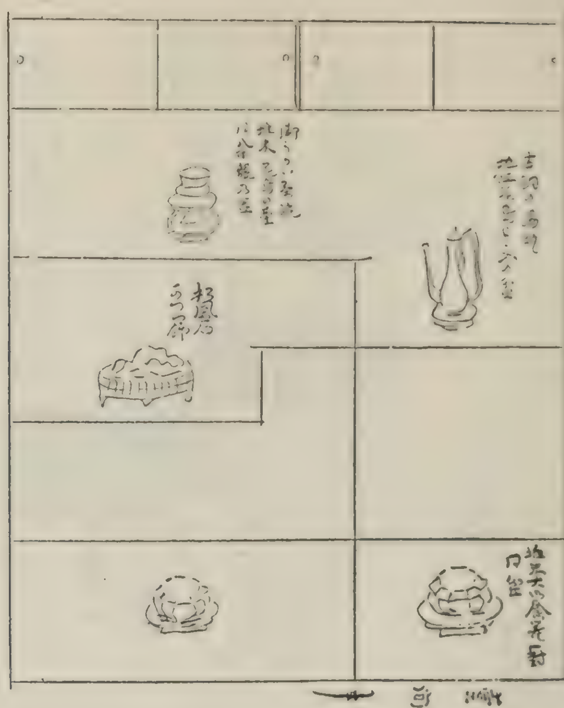
一烏盞の御天目印の臺

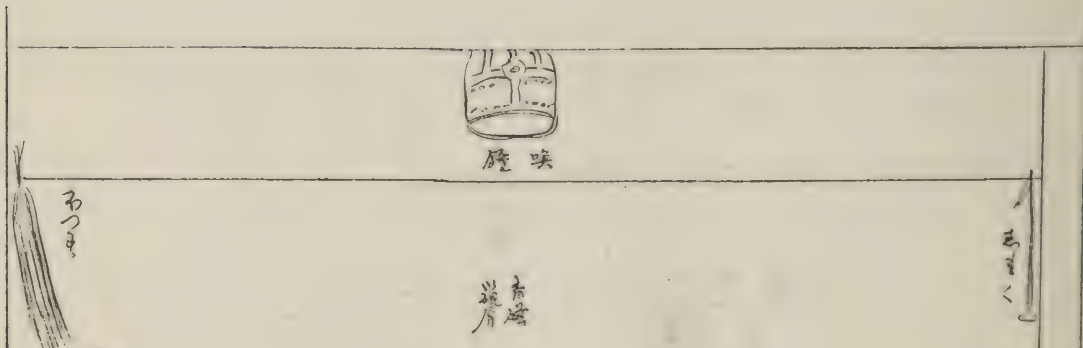
一御釜風炉　水指小道具共に何も銀

御廣間



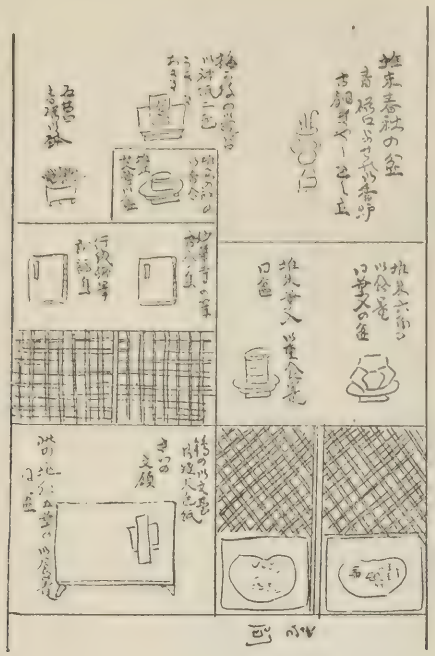


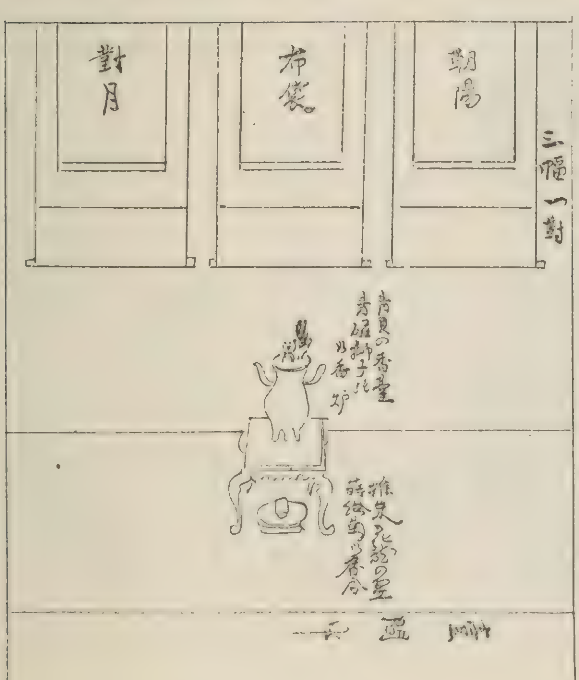




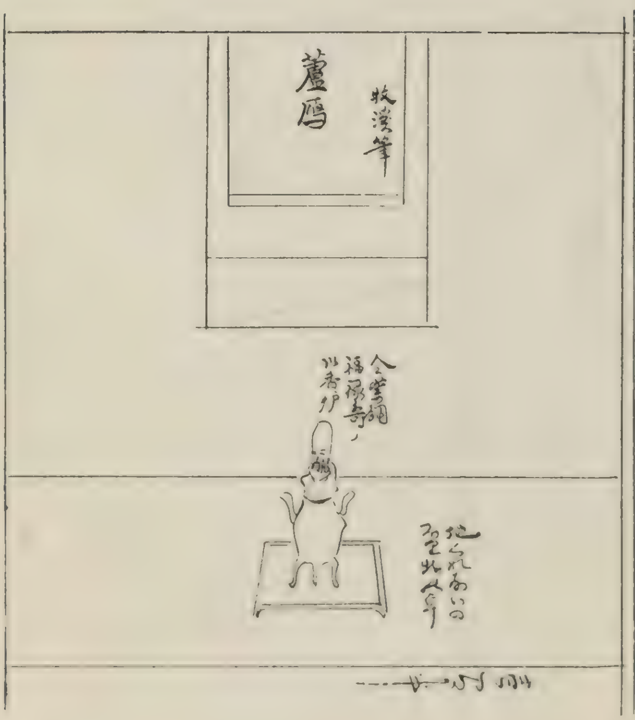
一御書院前の板椽にかさる
一金の臺子　御釜風爐小道具共に金
一金御茶入　但かたつき
一同御臺天目
一蒔繪之御たんすに　御茶筅御茶具あり
　御休息之間

此の内に御枕二つ








蘆雁
牧溪筆

御臺子　二本足同たんすになし地高蒔繪
御茶具
御茶箱
一御茶入　へり目肩衝
一はいかつき御天目尼ヶ崎臺
一へうたんの御釜　古銅の風爐
一古銅の壺水さし
一建ふた置　御柄杓たていつれも古銅のもの
御勝手に
一蒔繪の御炭入
一嶋ふくろうの三羽
同所御圍　圍爐裏　くわの木地ふち
一御かけ物　一山正法
一御茶入　うち疊
一御茶(杉)一本杓判の利休
一御水建　飛騨のめんつう溜塗
一御花入　きぬた

一地くれなゐの御香合
一眞の塗かた口
一棚に　青貝梅の御香爐大鳥の三羽
一御茶碗　丸高麗
一御水指　伊賀やき
一御釜　たり入

御勝手水屋に
一仕かけ釜　風爐　　一炭箱　三重
一御炭入　ふくへ　　一半田ほうろく
一はい入　　一飛驒ため塗かた口
御勝手に
一御料理道具いろ／＼　　一御酒の道具色々
一御菓子　御肴いろ／＼
已上

奥書云
むかし江戸にて　殿様御屋鋪へ　公方様御成之時所々御かさり之儀小堀遠州御童朋福阿み被遊御賴候時之事共之由
右は其書にて候ひしか損候故朱にて文字其まゝに寫し候也

文政十年九月御立寄御餝付

將軍文恭公臨邸之時殿中初御餝付（文政十亥年九月十八日）
御立寄之節御餝書寫
表御書院御床
一御掛物　三幅對　中　酢吸　顔輝筆　左右　傳悅 太公望　牧溪筆

一御立花　松一色一對　御花瓶銀御花台　唐桑

同御棚

一御香爐　青磁東大寺　盆　堆朱四方彫殘

名物一御香合　堆朱布袋　盆　堆（朱）〔一本紅〕　牡丹彫

一御沈箱　桐蒔繪　盆　朱曲葉入

地之板一御食籠　黒曲五重　盆　堆朱三方水仙彫

御菓子　大平糖　紅白　氷さとう　源氏かや　秋之霜

同御附書院

一御硯　蘭亭硏

一御硯屏　青貝　一御筆　堆朱軸

一御筆架　瑪瑙　一御墨　五雲丸

一御水入　金紫銅厂　一御筆洗　水晶

一御手鑑　一帖　三拾六歌仙寄合書　文鎮　金銀柑子

御小書院御床

一御掛物　二幅對　梅之書　雪湖筆

一御香爐　唐金獅子

一御　卓　青貝　山水屋臺人物模樣
同御棚
一御香合　朱曲　盆　堆朱人物
一御置物　萬年茸筐附　臺黑塗雨龍象眼
同御附書院
一御硯箱　梨地松竹梅蒔繪　料帋
竹之間御床
一御掛物　一幅　東坡眞跡
一伐溜　南京染付　薄板
同御棚
一御歌書　二冊　古今和歌集　後小松院宸翰
文鎭　金紫銅兎
一御料紙箱御硯箱　若松蒔繪　料紙
以上表御座敷
奥御座之間御床
一御掛物　三幅對　中邢和璞左右山水　古法眼筆
一御香爐　唐金獅子

一御香臺　朱青貝椿之紋
　同御棚
一御香合　堆朱三重丸　盆　青貝四方
一銀香匙火筋筒共　一組　盆　堆朱丸雨龍彫
地之板名物
一盆山　末之松山　かはら鉢
　御休息御床
一御掛物　二幅對　明呉小僊三友仙鶴圖
一砂之物鉢　唐金雨龍象眼　臺
　同御棚
一御手鑑　一帖　吹上八景爲久卿目錄自筆
一文鎮　厚貝鮎
一御置物　蓬萊白珊瑚樹
　御書棚　紫檀縁込戸
一硝子御徳利　一對　一同　御こつふ　拾を
一同　御猪口　拾を
一御歌書　二冊　新古今和歌集　北小路俊孝卿筆　文鎮　唐金獅子

一御香爐　青磁銀網蓋　盆　堆朱山水人物
一御香合　蒔繪太鼓形　足三人唐子
一銀之御臺子　一脚
御釜　金あられ　御風爐　小道具共銀
御小座敷御床
一御掛物　一對　孝子　牧溪筆　一紫檀御印籠掛け
同御棚
一御置物　白玉一双　臺
以上奥御座敷
大奥御對面所御床
一御掛物　三幅對　中太公望 左右山水　常信筆　一御香爐　交趾象人形
一御卓　青貝　卓下一銀香匙火筋筒共一組　盆　堆朱丸木に唐子
同御棚
一御香合　堆朱雨龍　盆　黑曲丸　地之板一御軸之物　貳拾卷　つれ〳〵草　臺
御附書院
一重御硯箱　梨地高蒔繪

同二之間御床

一御掛物　二幅對　瀧之繪　養川筆　　一砂之物鉢　唐かね　臺

御附御棚

一御置物　枝珊瑚樹　かはら鉢　　地之板 一御置物　竹根荷葉 下に金ゑ

御座之間御床

一御掛物　三幅對　中 白樂天 左 柳黄鳥 右 牡丹蝶　探幽筆

一御立花　一對　御花瓶唐かね　花臺　溜塗四方

同御棚

一御食籠　堆朱八角三重　盆　　堆朱寶盡御菓子　室の梅　源氏かや　濱邊貝

一御手鑑　一帖　熊嶽奇勝之圖　　文鎮　黒柿馬

地之板 一御料紙箱御硯箱　梨地花車蒔繪　　料紙

御休息御床

一御掛物　一幅　吉兆圖　陸治筆　　一御花生　木桐鳳凰蒔繪　花臺

同御棚

一御歌書　一冊　八代集抜書　冷泉爲相卿筆　　文鎮　大崎石兎

地之板 一盆山　古屋谷石　かはら鉢

御客之間御床

一御掛物　二幅對　山水　伊川筆　　一御冠棚　梨地御紋散

御香爐　唐金冠　御香合　唐物象牙　三つ羽

同御棚

一御軸物　二卷　和漢朗詠集　慶運筆

盆　青貝人物

一御食籠　青貝　廿四孝之紋

盆　朱曲葉入　御菓子　玉つばき　五色花せんへい　唐まつ

御使座敷御床

一御掛物　一幅　龍　探幽筆　　一御花入　青磁　小薄板

同御棚

一御硯箱　栩木地八つ橋之彫　料紙

「御化粧之間御床

一御掛物　二幅對　松鹿竹鶴　土佐光祐筆　　一御小簞笥　紫檀牡丹蝶蒔繪

同御棚

一御香爐　青磁御寄　盆　堆朱四方松に人物

一御香合　蒔繪桃　盆　堆朱丸木に人物

一御硯箱地之板　五重　黒塗松に鶴蒔繪見返し岩に龜

「西御三階御床

一御掛物　一幅　富士見業平　探幽筆　　一薄端御花入　足波　臺　唐桑芦蒔繪

「梅之間御二階御床

一御掛物　一幅　布袋　探幽筆　　一御置物　鶴巣籠り

同御棚

一御歌書　壹冊　伊勢物語　庭田大納言重孝卿　文鎮　唐かね鶴

一御酒器　硝子徳利　一對　同こつふ一對　盆　地紅丸木鳥

一御文具硯

「同御二階下御床

一御掛物二幅對　眞山水　雪舟筆　　一御花入　唐金　不老門　薄板

同御棚

一御香爐　金銀面箱　盆　黒曲葉入

一御香合　蒔繪鶉籠　盆　堆朱四方人物

一御菓子入琉金さんふり　盆　堆朱葉入花鳥

同御附書院

一瑠璃　喚鐘　撞木

「御小座敷御床

一御掛物　一幅　徽宗皇帝牡丹白鷹之圖　　一御花入　唐金薄端　花臺　卷足

同御棚

一御置物　竹根壽星　一玉笛　一管　　盃　青貝　一丁子風爐釜　めつき

御書棚　琉球　青貝

一御歌書　六冊　二八明題和歌集　　文鎮　厚貝瓢たん

一御硯箱　梨子地和歌浦　　一御置物　牡丹蝶鉢植

御書齋御床

一御掛物　一幅　虛堂墨跡　　一御花入　二重　銘千年　了々齊作

一御釜　芦屋車軸　梅花之紋　　一御香合　布袋赤　いんかう作

妻紅御臺子

一御棗　光琳蒔繪　一御茶碗　高麗　井戸手　　一御茶杓　紹鷗作　銘あさち

一御水指　南京祥瑞　一御柄杓立　唐かね　　一御蓋置　瑠璃夜學

一御建水　唐金　一御火箸　利休形　　一御炭斗　菊蒔繪　さくず箱

以上大奥御座敷　ヽ

「「印之御場所御しなは上け候へとも御餝付は女中之取扱ひ也」

宜春觀御床　「前通り一面之櫻にて花盛之節は氣色宜敷御疊百五十余敷也」

一御掛物　二幅對　馬之繪　雪舟筆「雪舟之淀屋馬ゝ申候」

一御花入　青磁牡丹手　薄板

同御附書院

一御釣香爐　鞠　　一御香合　堆朱　盆　黑曲菓入

鳳鳴閣御床「鳳鳴閣は御茶屋中にて一番廣く候二百疊余敷く」

一御掛物　一ふく　岳飛眞跡　　一御香爐　唐金鶉

一御卓　黑曲

卓下御香合　南京六角三重　　盆　朱曲四方

同御棚

一御食籠　堆朱八角　　盆　地紅尾長鳥彫　御菓子唐まつ壽之字糕

一地之板盆山　翠峯石　かはら鉢

觀魚亭　當亭は兒ヶ淵之中へ一間半四方の屋臺を築出し道より一間の橋を掛四方幷橋共朱の欄干也内は敷瓦屋根は竹網代に煤竹の押椽うこん色錦の幕を打總体唐仕立也

一御机　青貝

一御硯　荷葉研　　一御硯屏　青磁麒麟之紋

一御筆　紫藤香軸　　一御筆架　壽山石

一御筆洗　紫銅爵　　一御墨　齋雲仙境圖

一御水入　唐かね　　一御文庫　唐物青貝　唐紙入

一とん　二　南京染付　御腰かけ也八角にて高一尺八寸位織物猩々緋をかける

一御衝立　堆黑

洗心亭御床　洗心亭は椽之下迄水流れ入御茶屋の脇より前へ出流れに成る此水地の下に入て瀧へ落る御疊百余疊

一御掛物（名物）　一幅　小倉色紙　こぬ人を　定家卿筆　一御花入　唐金桔梗口　薄板

同御附書院

一喚鐘　撞木

幽皇床御棚

一御軸物　一巻　竹之繪　道昇筆　盆　黑曲

一御硯箱三重　末之松山之繪 宮城野之萩　寄細工　料紙

白虹臺御床

先年御燒失後八疊敷之御腰掛にて有之處當春御普請御疊數百三十余も有之

一御掛物　三幅對　中　布袋 左右　兎猿猴　尙信筆　一伐溜　青磁壺形　花臺

同御附書院

一御硯箱　丸　紫檀總彫物 御蓋表南京　一御手鑑　一帖　新六歌仙　寄合書　文鎮　白毛石

向陽亭御床　此亭は一構へに成り内は不殘植木鉢植花檀築山泉水等にて諸事植木茶屋の躰なり御腰掛何れも八疊六疊之亭也

一御掛物　一幅　糸瓜茄子　元信筆　一御料紙箱御硯箱　村梨地梅蒔繪　料紙

同御棚

一御置物　銀橋折枝
同新御座敷御床
一御掛物　一ふく　歌之物　貫之筆　　一御置物　蠟石白玉
已上御茶屋
御庭名
修竹關　小嵯峨　枕流床　漱玉泉　幽篁床　垂映圯
浣花溪　洗心亭　維石湍　仮網戸　華　屏　走井御腰掛
野々宮　走　井　七賢人「御腰掛け　土　橋　御　流　「御茶屋
新　流　簀　戸　網代屏
以上内御庭
含暉亭　定家御腰掛　淹芽井　古　井　杜若洲　牡若流
精翠池　大泉水　二虹梁　二はし　古驛林　鎌倉道
宜春館　丸山御茶屋　古行程　一り塚　弄花苑　中　山
翔水選　中　道　清夏沼　道下小池　鎖翠溪　元唐橋
疊翠丘　山　道　儲香園　梅はやし　鎮火祠　秋葉社
臨漬亭　新御腰掛　香陰亭　置御腰掛　千苞轡　栗　山
松濤阜　松山名所　晩紅丘　秋草有之　青藍沼　兒ヶ淵

觀魚亭　同御腰掛　垂䤡石　鏡　石　向陽亭　北の「御茶屋

望雲亭　同御腰掛　凌陰洞　氷　室　稻荷社　稻　荷

風音瀨　稻荷山　雪英沼　牡若池　黃金溪　山吹流

步月叢　田　萩　停雪林　竹　林

「竹林の内へ此度被　仰付新に百姓家一軒出來長生村と號す三間に二間之くつや作也牛部屋雪隠等不殘付前芋畑廻りは竹藪にて田舍の一軒家の躰也」

望嶽亭　富士見御腰掛　鳳鳴閣　森川「御茶屋　裛露園　花　畑

走　泉　掛　樋　柴　門　凌雲道　富士見坂　餘香圃

元菊畑　小華林　田屋敷　螢火溪　螢　澤　桃花林

桃はやし　凝霞苑　花　畑　青崖埒　九十間馬場　映愭碧

廣　芝　捻蘗逕　中　道　丹楓苑　紅葉山　薜蘿逕

蔦之細道　躑躅溪　五月流　五里香　田　淸冷潭

淸　水　風字沼　流　白虹臺　瀧「御茶屋　彩紅棧

唐はし　淸音澗　瀧

以　上

右之通御庭之名は前々より御號有之候「印之處御傍附之事

按に原本年號を脫す寛政二年山本豊湖の苑圖には望雲亭觀魚亭長生村等なし　將軍臨邸の事は文政十亥年九月十八日と弘化二巳年十月十八日の兩回也而して文政十一年の江紀の柴折には向陽亭觀魚亭長生村あり果して知る此臨邸は文政十年九月十

八日　文恭大君の御時なるが故に斷して卷首の如く題す

此記は奥向女中方舊記之中より發見により抄錄す則　有德公御代江戸に於ての御事にして書中　宮樣とは　有德公御簾中　寛德大夫人なり　伏見家より御入輿ゆへ宮樣と稱し奉れり蓋し　梶井宮と　大夫人とは伏見家の御續合の被爲在如斯御招請御對顏ありしならん

梶井宮御門跡御入來御式

一寶永六年丑十二月十五日　梶井御門跡被爲入候次第表御書院にて御喰積切こんふ勝くり白四方敷紙にて出る夫より御奥通し御守殿へ被爲　入候て御喰積右同斷出る引次に御三獻出る　梶井樣宮樣殿樣御相伴御三人樣分廻す但梶井樣宮樣四方　殿樣三方長柄御銚子加共包貳錺廻す右御三獻御引次ふくさ御そう煮是は　殿樣御相伴不被遊候御膳三汁九菜御向詰共　梶井樣宮樣御二人樣前殿樣御相伴不被遊候白薄盤四方御椀類瀬戸物白手御食次御湯當御水次御食杓子等迄椙の木地也

　但宮樣には蒔繪御椀也

一御守殿にて御料理相濟御歸被爲遊候節御座之間にて　梶井樣四方ふち高　殿樣三方ふち高出世院家ふち高足扮用意いたし候得共　梶井樣計上り外は出し不申候

ゑたかき小さくら糖小みとりあるへいとう卷せんへい

一御書院にて出世貳人院家一人　殿樣御相伴にて御吸物御取肴出る坊官諸大夫は御盃計被下候由にて吸物は入不申候外に魚類の御取肴一種廻し置申候

一梶井樣御獻立之次第

表御書院
御喰積四方　こんふ 勝くり
御守殿にて
御喰積四方　こんふ 勝くり
御引次
御三人様分
御三獻　白薄盤
御盃土器　御銚子　長柄 加 包　御したみ土器
御引替
ふくさ御雜煮　御吸物御肴
御料理三汁九菜向詰共　四方白薄盤
御吸物御肴三種
御盃臺　若まつ　押　落　押
御取肴貳色
御茶菓子
御後菓子
御後段　うきふ

御吸物御肴貳種
御くわし　二色
杉御重　壹組　四重物　外箱下臺共
一御煮染
三重　御菓子
右御料理　宮様御相伴ゆへあなたへ御頼諸事御拵等も　御守殿にて拵申候
右諸事御膳部御守殿御膳場より組立上け申候
宮方臨邸の事は　日光宮には毎歳年頭等にて御參向又庭園御見別して入らせ給ひし事あり寛政十年三月四日
然れ共簿冊皆傳わらす唯本記のみあり女中の覺書に止まれは完備とはいひかたし

秘　鑑

此一巻は　將軍家より御三家方へ被爲對御禮節初諸御禮式御豫參御參詣等の儀式を御家中心得の爲めに　舜恭公文化九年閏申五月御自記秘鑑と題し給へるもの也元政府に秘藏ありしか維新轉傳の後僅に遺存す　公には就中威儀典禮の事に御熱心に被爲渡御家御禮式も總して　幕府に被爲則しゆゑんのもの窺ひ得べし
原書表紙に
秘　鑑
右は　御三家様御初諸侯方

公邊向御取扱等御認被遊候御書之寫

三家之儀は國初より追々區々に相成別て正德之頃は尙更相互に何事も競合候樣の風儀に相成就ては公邊よりも自然御踈遠に相成且は三家出會も年頭參暇等にても書院向にて之出會而已にて先多分は玄關白洲にて申置候方多邂逅通候處前段之通書院迄と申樣なる儀にて其上三人共寄合候儀は先致遠慮候と申位之儀に候稀には庭等之約束にて出會候節は居間迄も通り候得共右躰之節は至饗應と申振にて格別親みは無之是も兎角馳走振を競合候と申樣なる事に候右之風儀故政事向は尙更之儀に候然處天明之度被　仰出之儀有之段々厚御趣意も被　仰出以來三家用談初り猶又三家一同に及參會義も右之頃より相初り至于今月一兩度之有之事に候右用談と申も初は重き被　仰出も有之一旦は御用談も有之たる義に付右之續より自然一同之參會も每度に及ひ就ては年來之仕來りは　御趣意に基致齟齬事故以來は三家申合是迄之如く相互に競合外樣國主抔之風儀に似寄候儀無之只　天下之御定法に不振樣厚申合都て御趣意之厚義を各領國へ押移し天下之御連枝たる義を外樣よりも能相心得聊も國持大名之如家風異躰之義無之樣との義を精々申合老中向へも其段一統に相達以來追々及改革儀每々有之たる事候然るに當藩は尾水兩藩よりも事替候義多奉對　天下當時之申合にては遠慮有之義藩中にては不心附哉にて大に　御趣意に振れ候義多又前々より被對　公邊格段　御遠慮之厚義も當時にては却て不都合に相聞候義も有之萬端此類多追々右之筋改候處藩中にて右等之譯合委敷は不存事故何とか不穩樣にも相聞甚心痛いたし候處近比は先穩に相聞聊安心之事に候扨前段不穩義も　公邊向之義何に不寄不案內より種々之存念出是も輕き身分之者は其筈之義にて無構義に候へ共中分より以

上に良もすれは甚拙き論も相聞何とか不穩別ては當時厚　御趣意にて天明以來相改り其以來は每々
上よりも御親敷被成下候義も被爲在吹上御庭へ被爲　召候義は　國初よりも無之と申程之義に候是等は全天明幷寛政之度より　御趣意被爲在候事にて容易に御庭拜見と申計之義には無之候右之通之厚　御趣意も有之三家申合之ヶ條も有之候得共秘密之義も有之一々は難申聞只々三家と申候ても中度は少々御大法には相違之義も自然有之兎角當時にては天明以來之　御趣意と國初代官町屋敷之比と大躰參會抔も同樣に相成全　天下之御連枝と申所を厚心掛け政事向異体に無之樣申合事に候得共藩中都て此意を相含異論無之樣に致度事に候就ては誰も存たる義には可有之候得共　公邊にて三家を初國持幷御譜代席等之御取扱前段之一助にも可相成哉に付覺振を以大略を左に記候事

當藩中にては兎角奥役と申を取扱之重樣に心得候哉に相見候得共則如此義聊異論に候兩家（安藤 水野）を初家柄之向抔は如何にも重々敷諸向見込も尤に見へ　上より之取扱も格段に申所に至り度事に候何とか折には輕々敷義有之樣に存事に候奥役表役抔之論は從來は頭役位にても不都合に候　公邊抔にては（是は引當に認る事にて　公邊にては頭役と申唱先は無之頭役と申は悉表役にて是等之論は）一向に無之事に候

三家之部

一登城之節御玄關より表坊主之內部屋附之者一人先立西丸にては御目付方坊主先立
　直垂長袴共括りは御玄關上の板敷にて下し候事
　刀は大廣間溜りに供之者持居候事
一御禮以前席は大廊下休息所

右は三家之部屋と唱候得共元は大廊下休息所と唱候事にて夫故　勅使并日光御門跡增上寺方丈も休息に相成候　正月六日抔には御內禮之出家も右同樣也

一右休息所迄は先立之外坊主二三人御城附も供致し候勿論供之家老も同樣にて休息所外に始終居候事

右休息所より御禮席に依り差別有之事にて先は坊主等も附不參候事

一御禮席

三家出禮之節は御褥御刀掛共無之御揚疊も無之御謠初之節に限り御褥御刀掛御揚疊共有之候事

右御白書院

年頭　上巳　端午　七夕　八朔　重陽

若菜　月並　家督御禮

公儀より御入輿有之候得は　結納御式　御入輿之式

右二ヶ條は自分御禮事而已に無之

右御黑書院

一右之外御大禮束帶之節は悉（皆）[一本ナシ]御白書院出禮にて大廣間御中段西之椽側へ御儀式中着座東上南面也　御中段着座北上東面之義も有之

右之節々直に御請と申義は無之悉皆老中御取合に候事

「御直御請と申は前々は有之候得共享保之比より相止悉老中御取合に候事」

一御取合は當日御祝儀目出度被存と之老中御取合也
一上意は目出度と計　年頭にても同樣
「無事に超歳してとの　上意は三家にても不被爲在目出度と計の　上意に候事」
一暑中寒中一度御懸之　上意被爲　在尤暑寒御禮日右之内に無之節は御流に相成候事
一右之義に付文化六己巳七月尙又殘暑餘寒に付ては　上意不被爲　在御定に相成候旨水府より申
來別紙之通留あり
「殘暑余寒に付ては別段　上意不被爲　在品相尋候節之書付　壬申五月十七日楠左衞門より出す」

文化六巳七月

殘暑余寒に付ては　上意無之品
右は天明四辰七月朔日
殿樣御部屋住にて御登　城之節殘暑に付　上意有之　水戸樣にも御登　城同樣　上意有之候然
處右以後此御方にて御登　城之節殘暑に付　上意有之候儀相見不申候
水戸樣には御常府にて御登　城も多候に付あなたにては近比も殘暑之　上意有之儀も可有之哉
と御用人迄及問合候處右は寬政十午年幷享和元酉年同三亥年暑氣之内御登　城無之殘暑之節御
登　城被成候處何等　上意無之由然處文化三寅年六月五日入土用同廿三日土用明にて暑中には
御登　城無之七月朔日御登　城被遊殘暑に付　上意有之哉との儀專阿彌へ御尋被遊候處殘暑余
寒に付ては　上意は以後相止候旨專阿彌申上　御對顏之節當日一通之　上意有之由御用人岡島

藤左衛門より申來之

右上意被爲　在候節は別段老中御取合有之事

一上意は暑寒中無事に被在てとの　上意に候事

「當藩中にて重役共へ申聞候振　公儀にては三家計にて御譜代席にも無之」

一太刀目錄披露の老中其外月並御禮等之節は官名計老中居成に披露　但官名殿付なり

一太刀目錄疊目は大中納言參議三位以上以下之差別有之候得共平伏致し候疊目は御下段と御椽側境之御敷居際一疊目にて平伏

「當藩にては年寄共初大寄合等太刀之疊目に無構敷居際にて平伏之通に候事

一節句に椽側詰年寄共一人つゝ右之疊目にて平伏其節年寄共居成に名計披露之儀は三家の節句月並御禮の節之振合也　公邊にては溜詰にても御椽側にて平伏なり」

一御盃之儀は三位以上返盃水府にて四位少將之內は返盃無之御流也

御謠初之節獻數に依り返盃無之義と元服之節返盃は別段之儀に候事

一謁之義は老中之節は御白書院西椽側老中御用有之出席無之節は奏者番にて右之節は同所南椽側に候事

一御禮日居殘御禮之節は多分老中謁夕上使御禮登　城之節は奏者番にて候

一總出仕之節（是は御慶事等にて一同謁御目見等無之節之事也）謁は　出御無之日に候得共　出御之節同樣加州初國持且御譜代席迄一同寄せ其上にて老中出席先御黑書院にて溜詰之面々に謁相濟自夫御白書院出席故三家の

謁は溜詰より後に相成自夫追々席々へ出席有之候事

一老中表へ出席之節は謁に不限何つにても御目付先立大目付隨從御同朋頭も先進候事

「右謁は當藩にて總謁と申振りにて三家にても謁而已にて御目見は無之事」

一退散之節は御間に依り場所は違ひ候得共大躰御白書院後之邊より御城附先相立其次は御目付先立致し御玄關緣取迄先立致候（是を御目付方にて御家門送りと云）

一下乘橋內外百人組御番所を百人番所と云右之邊より百人與力同心へは手を出し及會釋に候老中若年寄は右與力同心居候方を見候て通り候由

一此邊より御本丸迄御番人制し振りは三家兩卿方老中若年寄日光御門跡　勅使は同樣に候右之外は堂上大中納言にても其外加州初御譜代之面々にても御番人其儘居成にて時宜無之事（一本ナシ是は平川御門より登城に候故通行先は無之甚稀に通行有之事）

一登　城之節にても退散之節にても右百人番所に百人組之頭出居候此節は致會釋候（老中若年寄も同樣に候得共老中揃に候さ三家の登城に不構御本丸へ上り候故時に依り三家　登城之節は不居儀有之候事）

一同斷之節中の御門御玄關前御門等にても老中若年寄通行之節は御番所々々に頭出居候（是は御先手なり）御玄關前にも出居其所々々にて致時宜候得共三家登　城之節は出不申幕の內に時宜は不致候事

一右御門に頭幷兩山御參詣之節所々の固め御跡固めとも振合同樣之事

（右之外御謠初其外夜に入諸大名一統退散之節の燎等も悉老中目當にて老中退散に候へは燎等も一時に消候事）

一右之外は加州初幷御譜代井伊家初差別無之事

一紅葉山兩山共豫參之義大躰左之通

百回御忌より一統束帶右之外御法會衣冠年頭は直垂狩衣大紋等也

一紅葉山にては裝束所兩山にては宿坊に扣居兩山にては御道具廻御左右にて　御靈屋御供所へ相詰右は御供所に座敷有之御諱忌日には右之場所に扣候得共御法會之節右之所　上の御手當にて御供所大半奥〆りに相成候故御靈屋御別當の部屋へ相詰候御門主にも右之所に御扣に付部屋一ヶ所計有之　御供所にては右之所も差支候故三疊敷の物置有之右之内へ此方共相詰候何れも束帶或は衣冠之事故太刀抔所々へ當り夏分抔は甚難儀いたし候義に候右之外に御法會の節は大豫參之國持大名幷表向四品以上其外　御手自ら御備之御菓子等御手長之役高家御門主且增上寺にては方丈の花籠幷被物之役高家都合十二三人程幷御簾の役中奥御小姓且大乘僧正　紫衣以上之花籠被物の役中奥御小姓都合二十人程右何れも束帶或は衣冠にて右御供所の御臺所へ夫々屛風仕切等にて相詰甚混雜の儀に候事

一御手水廻りにて（紅葉山にては御手水廻りの後御道具廻り有之故御道具廻りにて）三家一統御拜殿端疊へ夫々着座
前段御手水廻りと申は御裝束所より御手水之具坊主持之御小姓附添相廻り候節の儀を云此前後に老中若年寄御先立之溜詰一統御靈屋へ相詰る老中は勅額御門內溜詰は右御門內御柱際へ着座若年寄は御內陣詰に出候事故御唐門左右に分ち着座

一老中一統　勅額御門外へ出溜詰御正面へ出候比三家は一統御唐門內へ出る
右御老中勅額御門な出候は仁天御門へ御先被爲見候御左右にて出候事

一勅額御門外へ御譜代四品以上豫參大豫參之面々も　勅額御門と御唐門之間敷石之外鐘樓之方へ列

座（白洲の上也）御水屋之方へ御法事掛り御勘定奉行等列座（白洲の上也）各束帯或は衣冠（尤總奉行は老中一統の内へ籠る）

一御使番隨身六人（何れも細纓追懸弓箭を帶赤地金紋袍）右追々　勅額御門外へ列立次に諸大夫二行（是を大行列と云ふ）六十人程（是は表向中大名且御譜之大名并諸大夫御役人等なり）何も束帶或は衣冠勅額御門外列立次に高家兩人庭上御裾の役若年寄隨身（卷纓追掛弓箭を帶紺地金紋の袍）次に　御轅被爲　見候節一統白洲に拜伏于時三家も一統白洲へ出る（御法會の節御唐門内平常は御唐門外也）

「右の場所は御手水廻り有之向にて當地にて和合院御唐門外に手水廻り有之と似寄候所にて右之所は御白洲の上にて雨天に相成候と大に濡れ御拜殿へ上り候節抔甚恐入事に候去々庚午の年春は餘程の雪にて御白洲一面に雪と石と打交り凍り候上之事故座し居候内自然雪融直垂の裾大に（泥）〔汚カ〕れ候て御拜殿へ上候節別て恐入たる事に候

一當地にて重役共豫參は平常出候振は御譜代雁之間席抔之趣にて出居候場所は國持大名等の大豫參の振也」

一通御の後御跡より御拜殿階下へ扣御拜殿御椽側より老中會釋之上裾を下し一人つゝ御拜殿端疊へ着陣　御諱忌日御參詣の節は長袴の事故作法無之候付直に拜禮相濟候事

一被物畢て一統階下へ退去

一着座之次第は御聽聞所御拜殿の御左にて三家は御内陣を向端奥に着座御門主三家と向ひ端疊に御着座增上寺にては方丈御聽聞所へ向ひ端疊に着座僧正以上の出家三家と並端疊に着座增上寺にて紫衣の僧同斷

右三位以上且僧正并紫衣の席也

椽座溜詰（加州にて出席の節は右の上座に着座）老中總奉行の老中共且又兩山共大衆十二人

右殿上人且右に順る僧の席也

外座是は出家計也

一右の外四品幷諸大夫は何れも夫々の御役に依り外座の僧の後座にも又廻廊にも着座也

一右之外越州初大豫參の諸大名且御譜代之四品以上御唐門の外に　還御迄扣居候事

一中大名幷御譜代の諸大夫且諸大夫御役人供奉行列の向其外隨身等は勅額御門外に　還御迄扣居

還御之節行列也

一御内陣にて燒香拜禮相濟御拜殿階下白洲に着座此節裾を取候事

一還御之節無滯參詣も濟てとの　上意通御掛被爲　在候事

一右之節　上には御膝の邊迄御手を被爲下　上意被爲　在候

一日光御門主には御拜殿階下破魔床迄御送りとして御出　通御の節御平伏此節　上意無滯參詣も濟てとの　上意にて右の節の御樣子三家へ　上意の節と同樣

一增上寺にて方丈御送りも御門主同樣にて　上意其外御門主と同樣の御樣子に被爲　在候事

「此儀に付て增上寺之重義能相分候御送之場所御門主は三家より勿論重事故之儀にて破魔床へ御出にて白洲へは御下り無之儀と存候に增上寺にても方丈矢張破魔床へ出白洲へは不下申は三家より余程上にて御送之事に候其外　上之御座之前を御門主御通り之節　上之御目通りにて御門主御中座御平伏有之候得共　上には其御儘にて御手も不被爲　突候一品親王にても右之御扱誠　天下之

御威光格段之事に候此義抔は人に能々奉畏様にいたし度事に候

一右之通り一品親王にても御尊敬被爲　在候義を奉畏候ては増上寺方丈之前段に申通り御門主と御送り之場所も同様　上意之御振りも御同様と申は格別重御取扱に候事

一大牀中は御門主三家方丈中様なる順の御取扱にて方丈は御靈屋にては御取扱三家より重様にて上意之節御手を被爲下候儀も同様に候乍去　於御城は三家より少々輕御取扱も有之候御門主は於御靈屋は三家格別相違も無之様に候得共御城にては三家より勿論餘程重御取扱に候事」

一通御之御跡より爲御送御唐門内迄三家一統罷出御轅被爲　召候迄右之所に相居御轅御簾垂候比より平伏御跡行列不殘通候比一統御供所初之席へ退去

一右還御之節　通御掛け大豫參之面々へ　上意無滯參詣も濟てとの　上意被爲　在勅額御門内にて御先立溜詰御右の方へ披き御跡より參候老中幷御内陣詰之若年寄等の御役へ被爲向溜詰一統へ　上意前段同様（但堂上御補役之老中總奉行とも此内へ籠る）

一還御後一統拜禮有之候三家は拜禮相濟候事故直に　御廟へ拜に罷出相濟退散之事

　但豫參の向は一統拜禮行列之向は　還御立歸り拜禮に候事

一年頭幷御譜忌日豫參は御參詣計之事故着座無之御迎御送同様に候事

一豫參之儀三家は御參詣之度毎に出る　但七月十四日は不出

　右之外國持幷表四品以上以下共御法會之節計出候事

一加州越州御譜代御家門之向は四月十七日豫參有之候事

一雁之間菊之間之向は御參詣毎に出候（是は少々不分明に候事）

加州越州之部

一登　城之節御玄關より表坊主十人或は十四五人程も附添候得共先立は無之候事

直垂長袴之括下し候儀等は三家之外は都て極りも無之候得共多分上之板敷之邊にて下し候事

但溜詰は相違其部に記

刀は御玄關御式臺に供之者持居候事

一御禮以前席は大廊下下の休息所

右休息所迄之義は兩丸共相替儀無之三家之外は極りも先は無之坊主は三家より人數多附添候事

一御禮席御大禮之節着座共多分三家同樣也

一直御請之儀も三家同樣相替儀無之

一上意も同斷

一暑寒に付ては分て　上意無之

一太刀目錄披露加州宰相任官後は老中其外は悉持參御禮月並御禮等之節は老中居成に披露（松平加賀松平越前と）計之披露也

一太刀目錄は持參故夫々官位之疊目へ出直に平伏故三家之平伏之所より上に候加州にて宰相任官後は太刀目錄持參に無之老中披露に付平伏致し候疊目は却て下り三家と同樣御敷居際一疊目に候事

一御盃は加州宰相任官にても四位之事故返盃は無之

加州にて從三位昇進之上は御差別も可有之歟此段は覺悟不致事

一返盃は無之候得共委敷申時は左之通

一三家三位以上は御盃三方にて下り返盃吳服臺も南北へ竪に出る

一水府四位少將と加州四位宰相は御盃三方にて下り返盃無之吳服臺は南北へ竪に出る

右以上白綾時服

一加州四位中將以下幷少將以上は右兩家之外にても

一御盃銚子之口へ載せ下り此以下は御加等も無之一獻にて御流吳服臺も東西へ竪に出る

一侍從は右之通にて吳服臺敷居之際へ出る故御椽側より敷居を隔て頂戴

一四品以下は吳服廣蓋にて肩へ掛頂戴

一加州越州丙州は御白書院着座にて三家と同席其外は着座無之一人つゝ出席

「當藩にて大寄合以上之先振合也」

一國持大名は二日御禮にて是は大廣間にての着座也

一諸大夫以上は三人つゝ出席

「當藩書院番以上杯之振にて當地元日禮之振合也」

一布衣之面々は新御番頭小普請支配等を初都て　入御後之御流頂戴にて引續御番衆も同樣觀世大夫迄頂戴

「新御番等を初都て布衣之御役より以下は當藩之城代支配小普請以下と同樣也」

一謁之儀大躰三家同様にて少々席之差別有之事

一退散之節登　城之節同様にて坊主等多附添候迄にて相替儀無之先立等は加州初御譜代之向にても一切無之

但先立之義は殿中にては三家之外は老中若年寄計にて右之外は決て無之其内老中若年寄は御役に付候事故御同朋頭先立も有之御座敷向へ出席之節は三家より格段威光有之候事

一豫參之儀は加州にては御法會之節御拜殿之椽座に候得共越州は大豫參之向と同様御唐門外に始終相詰　通御之節平伏之事

但し拜禮は　還御後に候事

一豫參之儀は御法會之節と毎年四月十七日計に候事

溜詰之部

一溜詰之儀は御譜代家之内格別之席柄にて家筋と申は井伊掃部頭松平肥後守（會津）松平讃岐守三人而已にて右之外は帝鑑之間席御譜代家之内より二三人蒙　仰候儀も有之先は酒井雅樂頭松平下總守松平隠岐守抔にて當時にては松平越中守格段に被　仰付候得共右家にては珍敷事と存候勿論當時は掃部頭讃岐守越中守と三人而已にて尤御役人と申には無之候得共外様との差別有之事に候

一外様と差別左之通之ヶ條に候右之外は本文にて可知事

一都て御慶事之節三家溜詰御譜代雁之間菊之間と申振りに有之

又三家溜詰雁之間菊之間と申義も有之又溜詰雁之間菊之間と申義も右之如登　城之儀表向出仕

無之節にても極り有之尙又三家登　城無之溜詰御譜代雁之間菊之間と申儀も有之出仕無之式日にも溜詰雁之間菊之間は是非登　城有之平日は五日に一度登　城尤老中へ謁にて御目見は無之候右に次て雁之間も二人つゝ代る〳〵日々登　城尤謁也

一朔望之外　御目見と申は三家は勿論溜詰にても無之右之外は勿論に候事

「當藩にて椽側詰年寄共大躰溜詰に引當候事にて右之内前條所々に申如三家之取扱を交へ候樣なる物に候事

一雁之間菊之間大樣當藩にて大番頭以下重役共之振合に似寄候尙其部に可見合候

一登　城之節御玄關より坊主附添候儀等加州越州抔と同樣尤先立は無之事

一席柄にて直垂長袴共括下し不申尤御玄關より蘇鉄之間通檜之間を通御御白書院後通波之間より御數寄屋役所之内に扣居

右扣所に候得共席は御黑書院松之溜りと申所也

一右御場所は月並御禮之節御錠口にて三家一統寄り候席も同所に候事

右扣所之邊は勿論其外御座敷向何れも參候にも括り之儘にて御錠口御左右之上括を下し御禮席へ寄り候事

刀は御玄關に供之者持居候事

一席柄にて挾箱片しは中の御門へ殘し片しは御玄關前腰掛迄時に依り入候事

挾箱之儀加州初諸向一統片しは下乘所（則下乘橋にて候事）片しは中の御門

一長柄傘簑箱等は三家之外は加州初溜詰にても悉道具牽馬と同様大手門櫻田兩御門へ殘り候事
但雨天之節は何れにても御玄關前迄長柄傘或は位傘も爲持候事
「當藩にて椽側詰年寄共大躰右之振歟」
一挾箱其外道具牽馬とも加州初溜詰御譜代等何れも前段之通に候三家は大手内櫻田兩御門之外に道具牽馬殘し先對箱中の御門へ殘簑箱も同所に殘り立傘跡挾箱は御玄關前迄爲持候事
一老中初万石以下にても御役人之向は下部屋迄挾箱は爲持候老中若年寄は簑箱も時に依り爲持候右之外部屋有之向は挾箱爲持候向有之御小姓御小納戸抔勿論に候事
一御禮席大躰三家加州越州同樣
一着座之儀御大禮束帶之節は勿論其外年頭節句等は大廣間御下段西之板椽月並御禮之節は御白書院西之椽側外に溜り
但若菜は御黑書院迄の　出御に候故着座と申儀は無之
「當藩にて椽側詰年寄共年頭八朔に大廣間下段椽側に着座月並之節等波之間に着座右溜詰同樣之振合也」
一直御請之儀大躰三家同樣之振に見及候得共席柄にて品合有之との事に候
一上意も三家と同樣目出度と計　上意年頭を初都て同樣
一暑寒に付　上意は無之
「一椽側詰年寄共取扱之內

○月並禮に奥へ出候儀
○講釋日に奥にて之目見へ
○出仕無之式日奥にて之禮
○右等之節に時候に付言葉
上ヶ紙庚辰 ○印五ヶ條近頃改正にて當時と相違
右四ヶ條と年頭に無事に超歲してとの言葉且暑寒に付て之言葉は 公邊にては溜詰にても右躰之 上意は不被爲 在三家とても同樣にて其内三家に限り暑寒に付 上意被爲 在候計に候事」
一席柄にて出仕無之式日にも登 城且三日之間にも五日一度と申振にて平服にて登 城御目見は無之老中へ謁候事
「當藩中にて出仕無之式日にも重役共登 城有之右之外講釋日に登 城有之如物に候得共。大番頭以上奥にて目見申付候樣なる義は 公邊にては無之大番頭以下之重役を當藩中にて取扱候振りに候溜詰右之通に付ては雁之間菊之間之向は勿論同樣 御目見等は無之事に候
一公儀にては出仕無之式日にも 御目見と申は兩卿方老中若年寄計に候溜詰を初雁之間菊之間且大御番頭初登 城は有之候得共奥へ出候義は一切無之事
右登 城之節に謁にて候三日之外登 城之節も勿論同樣に候事
一講釋は毎月十日計にて雁之間にて有之右之節は御役人計聽聞尤詰合之雁之間席之分は定て聽聞之事と存候溜詰菊之間席は詰合候ても聽聞は有之間敷と存候尤老中若年寄は出席有之候得共御

側衆は奥御奉公と申奥勤故出席無之御用御取次は尚更之事に候

一講釋に付　出御と申義は勿論無之事に候

上ケ紙庚辰○印の所前段同樣當時相違」

一太刀目錄臺目且披露之振合御盃頂戴之振合は御譜代外樣の差別無之悉皆官位にて進退有之候故溜詰さても差別無之

一謁之儀は御黒書院松之溜則此所席なりにて謁有之候故三家よりも先へ相濟候總出仕之節抔は右故三家より先へ退散致候事

但總出仕と申は御禮日に無之御慶事并御法事濟等にて總登　城之節之義に候事

一退散之節も別段差別は無之勿論坊主先立抔は一切無之儀に候得共御禮日着座有之候故諸家之退散より後相成候事

一三家を初加越其外國持并外樣は其身御禮濟候得は直に退散いたし候へ共溜詰は　入御後之退散に候御禮日之品に依り雁之間之向も　入御後退散之義有之且又裝束之節等御譜代衆も是は帝鑑之間席之向入御後退散の義有之候

一菊之間席之向は　入御之節御通掛　御目見故式日にも入御後の退散に候事

一三家加越國持外樣は自分居殘御禮等之節計　入御後退散に相成候事

「一菊之間席之向并雁之間席の嫡子は　入御之節御通掛　御目見にて當藩にて鎖之間にて重役共嫡子　目見之振に候事」

一豫參之義は御法會之節計にて平常　御參詣之節に御先立相勤候儀等左之通
豫參之義は御法會之節御先立之外何人にても溜詰一統（束帯衣冠）等にて御裝束所へ相詰御先詰之老中一統御靈屋へ相詰御法會中は東之張出し又は椽座に籠り候事

一御先立は御法會之節は勿論平常御參詣之節にても其節々前日に老中連名之奉書を以明日御先立可相勤旨被　仰付候事

御裝束所へ相詰老中一統御靈屋へ相詰候義等前段記有之故略之

初勅額御門西之柱際へ着座仁天御門へ御先參候注進にて勅額御門內正面へ着座此所より直に御先立相勤（尤此所御下乘所なり但不殘御通筋は御敷物有之故御先立代り候義は無之此處より御唐門通り御拜殿を過御內陣迄御先立相勤候事）御唐門外にて御手水并御括被爲解候內御唐門石段の下に平伏夫より又々御先立至御拜殿御先へ行過御內陣至階上御拜席を伺ひ直に階下へ下り御拜殿と御內陣之相渡り殿にて平伏　通御相濟御拜殿東之方に相罷在　還御之節此所より御先立勅額御門西之柱際へ披き平伏　通御相濟御跡より老中御內陣詰若年寄等御門際にて平伏此節一統へ　上意（無滯參詣も濟御轅か　てさの上意直に御駕かへ）乘御　還御相濟て立歸り自拜有之候事

「御敷物等にて代合候義無之且御靈屋之御樣子格段相違之事故勤振りは違候得共大躰は當藩にて參詣之節椽側詰年寄共先立等之振に似寄候事」

一御法會之節御逮夜に被物有之右之節總奉行之老中一人衣冠并溜詰衣冠にて着座有之候事

一被物之義は御當日御門主且方丈を初內坐の向へは於御前御次第有之候得共從來　御聽聞と申は御當日御經供養計に候故御次第之中も少之內にて出勤之僧侶も內坐六人上野にて僧正以上芝に

て紫衣以上是を內坐の六人と云椽坐十二人外座四五十人程右計にて此已前三日之正御法事には夥敷人數にて僧正以上以下とも御當日御參詣之節は出勤無之僧の方多右之分へ御逮夜に被物有之事に候被物は勿論御門主七つ方丈同斷內坐之中寺格にて三つ外は二つ宛何れも綾羽大紋綸子の類之綿入にて夏分にても冬の時服同樣に候事

一右之節被物之役は御當日同樣中奧御小姓衣冠撤劔にて相勤候事

一席柄にて京師へ之御名代等相勤候義帝鑑之間席にて勤候節より御重き御慶事等之節相勤其節に加階有之正四位上にも至り候得共全御譜代家にて中は參暇等之節國持へは侍從にても老中　上使に候得共溜詰は正四位上中將にても矢張御使番　上使にて御暇は上使も無之召狀にて登　城之上被仰渡に相成大に國持大名よりは劣り候事に候乍去御譜代と外樣之差別にて席柄は格別前段之通に候事

「當藩にて椽側詰年寄共大躰右を見合右溜詰御取扱に三家へ之　上意振等を取交候樣なる物に候事」

「一右之外國持諸侯は加州越州より尙更表向の御取扱にて柳之間席（是は中大名也）之面々も同樣交代寄合表高家之面々とも勿論當藩中へ可引當儀は無之尤奧へ出候と申義は末に記候向計にて國持幷中大名には一切無之右之內國持大名にては加州嫡子にても大廣間席之先官にて上座に進候得共正月二日大廣間にて直御請と申儀有之由

御盃吳服拜領等相濟益御機嫌能被遊御超歲奉恐悅候旨を申上候由是は三家にも無之事に候右之外

相替儀も無之當番中へ引當可申ヶ條も無之候付席分計記雁之間菊之間之向も夫々朱書にて委細を記候事」

一御禮席大躰左之通に候得共漏候ヶ條甚多乍去多分席分は右之內へ籠り候事に候尤御大禮束帯等之節は何れ大廣間之御式にて右御式前後に三家は御目見致し候得共御白書院にて奥へ付候義にては無之

一朱引より上は奥に候事（朱書點線）

一上意は三家加越溜詰國持（是ハ年頭可）之外都て無之通御掛の向は勿論也

一身分に付御禮事には多分上意被爲　在候事

御座之間

　老中
　若年寄
右召出し
　兩卿方
　菊千代殿

元日
一統官服右御禮御盃吳服頂戴

表出御掛

御側衆　御小姓　御小納戸　御禮

御黒書院

御勝手の方羽目之間にて
　新御番組頭
　表御祐筆組頭
　奥表御祐筆

右通御掛平伏

御禮以前此所にて老中一統裝束着之

上出席

御白書院

三家　着座あり
同　加州
同　越州
同　因州（元日に限る）

溜詰
御家門の侍従以上
御譜代の侍従以上
老中も籠る四品以上

大廣間

　御譜代諸大夫外樣万石以下
　御留守居大御番頭初諸大夫之御役人布衣以上
以下共一統御禮

重て御上段御着座の上
　諸大夫以上御流吳服頂戴
　法印法眼も出る

入御後

御側衆も御禮幷御流等は大廣間諸
大夫も龍る尤御小姓御小納戸は急
度御禮さ中には無之

御座之間

老中
若年寄

右召出し

御側衆御小姓御小納戸元日に殘り候分
御禮

二日
一統官服

●御の間御禮は元日表にて相濟候事

▲御の間も元日此の所にて御目見の義も有之歟

●兩番方家老　●御廣敷御用人

●奥御醫師　▲兩番方用人

▲奥詰之面々
右御序に御通り掛御目見

御座之間

三日
老中
若年寄

兎御吸物
右御風味有之事

御黒書院

御勝手の方

西湖之間より羽目の間山吹の間へ掛け

雁之間詰父子共
菊之間詰父子共

右御禮は元日大廣間一統の内にて相濟今日は表出御に付着座に出候付一統通御拝御目見

一統平伏

御黒書院

御次第無之

右御禮御盃呉服頂戴
御勝手の方にて平伏　御小姓組 幷町人共

御白書院

着座あり

三家の嫡

松平左兵衛督　當時幼年

右御禮御盃呉服頂戴（尤左兵衛督は御盃無之）

大廣間へ渡御之節櫻の間にて

溜詰平伏　是も着座に付登城

御勝手の方

帝鑑の間にて
御譜代一統
御留守居
大御番頭御

右も御禮は元日大廣間にて相濟今日着座に付登城一統平伏

御白書院

無官の面々
幷小普請等

布衣之面々御流頂戴次に素袍の面々小十人格
觀世大夫迄御流頂戴

大廣間

着座あり

國持幷表向

四品以上

加越の嫡共

右御禮御盃呉服頂戴尤侍從以上は着座元日の三家加越の振合なり

中大名也
外様萬石以上

右の外元日殘諸役人御番衆共御禮諸大夫以上御流呉服頂戴等元日之通り

大廣間

渡御不被爲在

右召出し計

奥之御次第等は不存候へ共表向は元日二日六日抔さ進年中御次第書の外にて全無官の面々御目見のみにて出席の向計長袴一統は半袴着

御座之間

元日二日之通官服に候へ共當番の御番衆は相違も可有之歟

六日

老中
若年寄

右召出計

二月朔日天台宗一統御禮今日の通り官服尤月並御禮は無之候事

御座之間

老中
若年寄

右召出し

上巳　兩卿方

端午　菊千代殿

七夕　右御禮尤御下段御左の方

御黒書院

御次第無之

溜詰
高家
雁之間

右今日寺院御禮に付登城　御目見へ無之尤も何れも官服也

御黒書院

御次第無之

御白書院

立御にて御目通有之候へ共此度御次第書に不入

一三家無官嫡子有之節は御盃頂戴有之候へ共是以御次第書に不入

增上寺初
御内禮の分御禮
御譜代衆

右今日の御禮に付登城　御目見は無之尤何れも官服也

御白書院

出禮　三家父子共
同　加州
同　越州
溜詰父子共
同　松平左兵衛督
同　山王別當
同　神職

父子共出候は代々溜詰の向計以下の御順之御式

大廣間

立御にて一統寺社山伏御禮有之

御着座は無之

上に記候通候へ共當番之御小姓組御書院番小十人は元日二日の通素袍着歟

大廣間

出禮

國持并
加越の嫡
且國持嫡
表四品以上

二の間より三の間御車寄せ板椽へ掛け一統平伏

八朔　表出御掛け　御側衆
重陽　右の後座に御小納戸
奥御醫師
御廣敷御用人等定例に無之出る歟
一統長袴御番の衆の當番は半袴かさ存候事

御勝手の方一統平伏
高家
雁の間詰
菊之間

萬石以上は出禮七人充
兩僧も出禮

外樣万石以上
護持院
金地院
御譜代幷御留守居
大御番頭初

御座之間

御次第上巳端午等の通月並御禮　兩卿方の一統半袴　家老用人
右一統平伏有之候歟に相聞候事

御黒書院

出禮三家父子共
同加州
同越州
同溜詰
御勝手之方一統平伏
高家
雁之間詰
入御之節菊之間にて
雁之間之嫡子
菊之間の向
一統平伏

御白書院

出禮國持初
御譜代
外樣共
右四品以下は七人宛出禮
同
護持院
金地院
右出禮
御勝手の方
御留守居
大御番頭初
右一統平伏
出禮
松平左兵衞督
右四品以上に籠る

大廣間

渡御不被爲在
御白書院出禮の内御用被爲在候歟又は大奥へ御年禮登城の向抔有之節は且六月朔日より八月十五日迄は四品以下一統は御禮に相成其節々御禮前老中席達有之事右の節は左之通
御譜代四品以下
右は帝鑑の間
外樣萬石以上
右御廊下
右の席にて一統平伏

御座之間

御黒書院

御白書院

大廣間

□印は不時御禮若菜御禮にては無之　老中　若年寄

右召出

三家加越計長袴若菜一統半袴　兩卿方若菜計　菊千代殿

不時御禮

御席計外は常服　□三家

右參府御暇其外身分に付候御禮

「三家奥へ出候義は此節計り三家の庶流其家の本家參府御禮の節計は本家に付出る」

御座之間

⊠老中　若年寄

右召出

謁

⊠印の分出仕無之式日は一統平袴又出仕の外常服の義も有之　兩卿方　菊千代殿

右三の間被謁老中出席

出禮三　家父子共

同　加　州當主計

同　越　州同

同　溜　詰

右若菜の節計

雁之間

右竹御廊下

高家

右西湖の間

右一統平伏

不時御禮の節も同様

出禮

□諸家一統

右參暇幷身分に付候御禮

御黒書院

溜詰

右謁老中へ

⊠一式日共

雁の間父子

菊之間

右於席老中へ

一若菜幷不時

御禮の日は出御無之

一月並御禮日に

諸家參暇幷御禮事罷候節は出御被爲在候に付此所にて御禮事有之

月並御禮日の御禮事

一諸家の參暇幷身分に付候御禮

寺社の御禮事

御白書院

三家父子共

右西の椽側

加　州

右黒鷺御杉戸之際

越　州

右櫻の間

渡御不被爲在

大廊下

國持幷四品以上以下

外様

護持院

金地院

右之席迄老中出席尤御黒

図一式日は出禮

御拳の鳥御披き

三家庶流の御譜代

右二三の間にて一統平伏

「右の向此節計奥へ出る」

御　座　之　間

三家父子共
兩卿方

右拜任拜叙

加判之列被　仰渡

右を初布衣以上御役替之節は何れの向にても同様万石以上以下共出る

「當藩頭役以上役替の通り」

図一式日共

此節は御家門の向も御譜代へ籠る

一御家門さ唱候向は三家之庶流さ越前家の向な云

御譜代
御留守居
天御番頭
右帝鑑の間
内外

御拳の鳥御料理等御目見後夫々於席々に頂戴尤御家門の向共

書院より御白書院此所迄御目付御同朋頭先立大目付御目付隨從

本文の外三家御座の間へ出候義姫君様御縁組等被　仰出幷に右に順候御慶事の節出候義有之

一右御慶事等の節は加州越州溜詰も出候事

一右の外拜任拜叙等は大躰御黒書院に候事

右之通り國持外様は奥へ出候義無之三家を初加州溜詰も本文の通にて奥へ出候義は甚稀に有之候事

○「當藩中にて椽側詰年寄共幷大番頭以上式日奥へ出候義講釋の節出候節の如御振りは無之

下ヶ紙
○印朱書も前段同様當時相違口印前段の二ヶ條此所とも都合二ヶ所改正にて自然東都の御振合なり

一三家を初布衣以上迄何れにても無差別奥へ通り候節は御黒書院御勝手の方三家は西湖の間外は同所椽側へ寄せ有之其上にて御錠口明き暫致し若年寄御錠口より出案内致し三家は御成廊下七曲り杜

子美の御杉戸内外は貴長房の御杉戸内曲り角へ寄せ出御の上又々若
年寄案内にて御座の間三の間御椽側へ寄り老中差圖にて出席之事

大躰右之通にて老中若年寄は先御役柄にて(口)[一本ナシ]奥と申に詰所有之御側衆と兩卿方の家老は口奥より奥への廊下時計の間廊下と申所に詰所有之右之續に御側御用人詰所有之

「老中若年寄詰所之邊より笹の間御膳建の間より御成廊下白鳥の御杉戸へ之御勝手通は三家之通り候御場所に無之候へ共寛政の度御黑書院御白書院御修覆有之夫故其比斗右の邊　上の御通り筋に相成三家御禮も右之内計御座の間相成御側御用人詰所此方共の寄候席に相成候事にて夫故右之御場所此方は存居候得共全御普請中計の事にて定例にては無之候右御場所は全此方共計格別之御取扱にて通り候事溜詰加越とも御普請中は奥へ出候樣なる御次第は無之候得共御普請中若し右等の御次第有之候ても件之通り故奥へ出候者は不相成樣に見請候事」

申は老中若年寄兩卿方之家老は御役柄にて奥に詰所有之御側衆は奥御奉公と唱全御側向に候御用御取次詰所は笹之間より內右御役と御小姓御小納戸は勿論奥御奉公と唱候事にて別て御前近御奉公に候「當藩中の奥役にて詰所奥內に有之樣なる物に候」右之外は三奉行初悉く表向之御役にて御用有之被爲　召候節は前段小書之通何れにても若年寄案內にて　御前へ出候事に候

「寺社奉行御勘定奉行御目付等御用にて被爲　召候節は申は當藩にて目付共へ用有之居間へ呼候節抔の振幷當地にて寺社奉行町奉行抔へ用有之居間へ呼候節之振にて　公儀にては大目付御勘定奉行迚も同樣に候事」

右之通りにて表役奥役と申義も無之都て老中若年寄は御役柄にて詰所は奥内に候得共當藩へ引當申候時は年寄共初大目付勘定奉行用人共抔之如詰所より毎々奥内へ出入致候様なる物に候「當藩右役々の如表に詰所有之候て奥内へ出入いたし候向は無之本文之通老若共詰所口奥と申所にて奥の口より内にて候」右之通にて奥役とも表役とも不申職分にて右之通に候御用御取次御小姓御小納戸是は詰所も奥内御側衆も先同様此分は職分に無之御役と申にも無之奥御奉公と唱候「當藩中にて申は小姓小納戸両役の振りに候」夫故三家を初諸家之屋敷へも出入不相成其内御側衆計は上使相勤候義邂逅有之候其節計此方共屋敷へ參候事に候兩卿方之家老は詰所口奥に候得共是は職分に付候事に候右之外奥高家を初御留守居大御番頭三奉行を初悉當藩にて申表役に候件の通故表奥役と申義無之三家を初表向にては御側衆御小姓御小納戸を指て奥之衆と唱候事に候扨又頭役平士と申唱勿論無之候「●」諸番頭「●大御番頭初など云」「▲」諸物頭「▲百人組の頭御先手等など云」「■」諸役人「■御納戸頭御腰物奉行御膳奉行等など云」と申唱は有之尤布衣以上以下共籠り有之御番衆（兩番新御番御納戸御番等なり）と申唱別に有之格合に付候節は諸大夫以上布衣以上（小十人格迄など云勿論何れも素袍の輩也）御目見以上と申唱有之候勿論万石以上は高役に付候節は六拾万石以上より拾万石以上五万石以上と申唱有之候得共格合には不相成三位以上少將以上侍從以上四品以上諸大夫以上布衣以上と唱候素襖は一統之事故素襖以上と申唱は無之候先大躰右のヶ條にて當藩中引當には可相成哉尤覺振にて認候義多定て相違之義も可有之候得共一々相糺候儀も差支候向も有旁

如斯候也

一老中諸向對談之振合

若年寄順之

一老中三奉行初御用談は御同朋頭を以及談候御同朋頭は奥へは勿論不入候得共口奥之内故老中の詰所迄は參候事に候奥御祐筆組頭迄共是は御祐筆部屋と申老中詰所少し表之方に有之先口奥に候右御役も奥へは不入右詰所限りに候右之外に小溜と申所有之奥之口御杉戸内に候向は新御番の御番所にて則奥之口御番に候事

三奉行初御用向大体は以御同朋頭申談又は奥御祐筆組頭を以申談候義も有之候御用部屋（側老中詰所也）奥向故三奉行初詰所へ參候義は不相成事に候「當藩中の如く年寄共詰所へ諸向入込直談と申義は一切無之事に候」御用之品に依り老中へ直談いたし度節は三奉行初御同朋頭を以申込老中御用部屋より出新番所前小溜りへ出席右之所へ三奉行にても何れにても直段に參候向出座にて直談いたし候御用之儀には候得共新御番所前故見通し之場所に候右に付ては格別入組候御用向（是は御黒書院御勝手也尤表に候事）は老中羽目之間へ出席にて此所にて談有之候此所とても右羽目之間之續山吹之間にて此所には中奥御小姓中奥御番詰有之事に候閑談と申には無之候先大躰件之通りにて自分用事にて老中へ對談抔と申義は一切無之三家にても先は無之事に候一躰御役柄甚嚴重なる義にて格段之義に候事

一此書は覺振を以認相違之程も難量候得共別紙書付之ヶ條計にては餘り疎漏に候故又々如此認見せ候事

壬申五月

公方様紅葉山兩山
御參詣之節御注進之次第

舜恭公御直書を以て監察へ御示之趣（但年月を欠く蓋し文化の比なるへし）
（御背書）是は覺振を認直し見せ可申處及延引候故此儘見せ候事

紅葉山

御道具廻　　御徒のしめ半袴二三人歟

右御注進申來り候以前御內陣詰御先詰とも
「是は若年寄二人にて御唐門內渡り廊に着座御手水の比御先へ御椽通り御內陣御座の御前後御椽に着座の事」

御宮へ相越夫々席へ相詰右之節三家も御拜殿端疊へ着坐

此後溜り詰相詰追付老中も詰る

御轅（或御駕）御注進隨身御門迄申來る　御徒上に同

御先番組御徒頭隨身御門外にて御徒目付より承之右御門內に相詰候老中へ相達直に至御唐門御內陣詰若年寄へ御門外石段下にて御轅御注進申來候旨申述直に御唐門外御水屋之向へ相詰（半袴）

蓮池御門注進　　御徒同

右隨身御門外に相詰居候御目付（布衣或は大紋）承之申次前段御徒頭同樣尤御唐門より直に又々隨身御門外へ戻る

一の御華表

右御徒目付直に御目付へ相達老中へ達候様子にて右之節老中隨身御門之外へ御成道石段の上へ出る

右之外御注進無之

兩山

御道具廻　御駕

右二度之御左右は御本坊幷増上寺にては方丈へ申込

上野筋違御門

芝虎之御門

右も前段同樣

上野黑門

芝青松寺前

右御左右にて老中初一統御靈屋へ豫參老中溜り詰は勅額御門御内陣詰は御唐門内渡り廊の左右へ着座

右を御手水廻りと唱候事

一三家は御道具廻りにて御靈屋へ相詰右御手水廻りにて御拜殿へ相詰

二天門先來る

右御徒目付御目付へ相達同役　勅額御門外より老中へ相達右之節老中右御門外石段之下へ出る

右之外御注進無之

一人の樣に見受候事

一御目付は御裝束の節は布衣或は大紋　都て御下乘所之邊に相詰御注進老中へ相達紅葉山にては御唐門外迄蓮池御門御左右申來る

一御徒頭頭三人組頭御供四人此外御人數不分明御徒百五十人

右は御徒之內五十人御供を其日之御供番組と云右頭は御先御行列之內也

五十人是を辻固と云右頭も前段同樣御先行列也御注進は右御徒之內之由　五十人是を御先番組と云右頭は元芝にては何れに居候哉不存事

御靈屋地之內張番所有之右へ相詰黑門又は青松寺御左右にて勅額御門內へ相詰る

「右は秘鑑中に御記載には非す監察上書物古紙中偶々發見により類を以て爰に附記す」

南紀徳川史卷之百二十六

臣　堀　内　信　編

典禮第二

勝姫様御婚禮

寶暦十一辛巳年十一月十五日

勝姫様御婚姻御盃事次第

勝姫様は　菩提心公御長女にして寶暦四戌年四月廿四日松平加賀守重敎殿へ御緣組同十一巳年十一月十五日御結納本日御引移御婚姻被爲整此時御十七歳也後加賀守天明六年年六月卒去爾來壽光院と御改此次第書は蓋し其當時加州家より呈したるものなるべし他の調書は存せす

御着座被遊候て

御熨斗三方

勝姫様へ先上之御祝被遊加賀守殿被祝之

式三献

初　献

勝姫様

加賀守殿

右居之候上床之瓶子長柄銚子同提を以　勝姫様へ先上之御膳之内に御座候三盃上之御土器にて神

酒三献御加共上り候と其銚子加賀守殿へ向一献被請候處へ御守見參畢て二献被加候と銚子提は中座仕見合候

二　献

勝姫様

加賀守殿

右居之候上銚子提加賀守殿へ向中之土器にて加共三献被受候と其銚子　勝姫様へ上之同中之御土器にて御加共三献上り候と御銚子役前之通

三　献

勝姫様

加賀守殿

右居之候上銚子提　勝姫様へ上之下之御土器にて御加共三献上り其銚子　加賀守殿へ向同下之土器にて加とも三献被受納り申候

右之通り畢て土器初之通膳に組付置瓶子長柄銚子提共寅前之通床餝置三献御膳披申候

御箸初之臺

勝姫様へ先上之御祝被遊　加賀守殿被祝候

七五三

勝姫様

加賀守殿

右居之候上わけの御めしかさ　御双方樣御介添へ渡し追付御湯　勝姫樣へ先上之御祝被遊　加賀守殿被祝之

右相濟七五三御膳披之追付雜煮三献御居被遊候

雜煮三献

三膳共に　勝姫樣加賀守殿へ一度に居之候上床に餝置候三方之三盃上之土器にて　勝姫樣御加共一献上り候と其御盃加賀守殿へ被遣加共一献被受又中之土器にて加賀守殿加とも一献被請其盃勝姫樣へ上之御加とも一献上り又下之御土器にて御加とも一献上り其御盃加賀守殿へ被遣加とも一献被受納り申候長柄銚子提は勝手より差上候右御盃土器三方に組付前之通床に餝置申候

御菓子

勝姫樣加賀守殿へ居之右三献御膳披申候

此處にて御双方廣蓋披露畢て加賀守殿退座追付　勝姫樣御待上﨟へ引渡三献上之御盃事可被遊候

御熨斗三方

三献御盃臺押

勝姫樣御待上﨟御居被遊候と御盃臺　勝姫樣へ上之一度上り其御盃御待上﨟へ上之一度上り押上之二度御加共御盃　勝姫樣へ上之一度上り押上之一度御加納り申候

右畢て　勝姫樣御退座　御色直御座着被遊

御盃土器一

三献

三膳共　勝姫様加賀守殿へ居之右一つ土器にて加賀守殿一献被受其盃　勝姫様へ上之一献上り候と御添肴

御双方様へ居之候上二献御加其御盃加賀守殿へ被遣二献被受以上三献にて納申候長柄銚子提は勝手より差上候

右引續服紗御料理之上

塗御盃

御銚子一度つゝ止り申候御肴上り御銚子一度つゝ御吸物上り御銚子一度つゝ

御盃臺 高砂 鶴龜　押　二

右盃臺加賀守殿へ向一度被受押向之二度被加其盃　勝姫様へ上之一献上り押上之一献御加其御盃御待上臈へ上之一度上り候と右之押上之二度御加納り申候右御盃臺押とも御上座に直置申候又改外之御盃臺　勝姫様へ上之一度上り外之押上之二度御加其御盃加賀守殿へ被遣一献被受右之押向之一献被加御待上臈へ上之一度上り右押上之二度御加納申候

以　上

安永五年申十一月

懿姫様へ御結納御使

懿(アツ)姫様は　観自在公御長女にて明和四亥年二月於紀州御誕生安永三午年十一月廿七日一條内大臣輝良公へ御縁組　上使を以被　仰出同五年十一月十六日一條様より御結納の御使紀州へ被進天明五巳年八月三日紀州御發輿同七日京都御着十三日御婚禮被爲整于時御十九歳後政所又大政所の御稱號被　仰出天保十四卯年八月十九日御逝去芳壽院様と稱し奉る御婚禮調帳逸失唯此調帳のみを存す記中　大殿様は観自在公　殿様は香嚴公御事なり

御結納御使諸色調帳　安永五年申十一月十六日

田井平助調

一安永五年申十一月十六日

一條様より懿姫様へ御結納爲御使難波刑部權少輔副使内海右兵衞へ四つ半時御城へ參着殿様御對面所へ被　爲入御盃事於御對面被　爲遊　御前へ鰭御吸物土器盛白大三方御使者へは鰭御吸物土器盛白木具二の膳にて尺御箸附御三人前出る御島臺高砂押福壽草長柄御銚子加とも檀紙包糸花餝御土器は御臺に壹つ載せ出る御したみ土器は一　御前へ計白三方にて上る右相濟殿様には被爲　入

一大殿様四つ時之御供揃にて御城へ被爲　入於御對面御盃御使被下御前へ鰭御吸物土器盛白大三方御使者へは鰭御吸物土器盛白木具二の膳にて尺御箸附御三人前出る御島臺鶴龜押長春長柄御銚子加とも檀紙包糸花餝御土器は御臺に壹つ載せ出る御したみ土器者御前へ計白三方にて上る

右相濟大殿樣には被　爲入直に
御料理三汁九菜向詰とゝも白木具御年寄衆御相伴にて御客共三人前出る鉢は三行引物引肴湯水共
壹行にて相濟鯛之吸物出候より御年寄衆不殘御挨拶に被出候由にて白足扮に箸附五人前出る島臺
貳面共出る　小振り臺二面用意之內若松に藪かうし一面出る御用意吸物肴は不出右獻立等前方に
相認め御用部屋へ出し相極る
一御使入來之節長のし行事には無之候に付前方御用部屋へ伺候處二面用意致候樣にと下肝煎中被申
候由にて用意致候へとも不出
一右御祝儀に付御年寄衆御供番頭以上御用達迄幷に御內證女中例之通御酒被下
一難波刑部內海右兵衛供之侍分並に下部者　御城中御門火之番所御長屋にて出る料理は侍分一汁五
菜吸物肴三種總くわし下部は一汁四菜其外は一統也右御長屋前方賄方調より見分に參御長屋を二
つに仕切外かわ幕圍ひに致させ火鉢無之候に付白砂を板圍幷致雨覆鐵輪にて鍋物を煖出す尤大和
屋仕出しに相成候事
右　行　事
一於　御對面所
鱶土器盛
御吸物　白三方
御臺　御押

檀紙包糸花餝り
長柄御銚子
御加
難波刑部
內海右兵衞
給仕 大小姓

鰭土器盛
御吸物
白木具

御酌出御盃御前へ被　召上刑部へ被下之頂戴御挾肴被下之此節御腰物御年寄衆持出刑部へ被下之頂戴御銚子へ加一献給御盃を持杉戸之外へ披御盃御年寄衆へ請取指上之御禮申上元之席へ着座次に右兵衞へ御盃被下御挾肴被下之御盃を持杉戸之外へ披御盃御年寄衆請取差上之御禮申上元之席へ着座畢て御臺御銚子等御勝手へ引之　御答被　仰聞之
殿樣被爲　入

一刑部右兵衞等兩人御對面所へ御年寄衆同道御敷居之內へ着座追付御料理出之相伴御年寄衆
御料理三汁九菜
白木具向詰共
給仕 大小姓

一本膳　一二の膳　一三の膳　一向詰
一引もの　一鉢　一汁盛替　鉢不替候得共汁替に不出
一銘々盃　一廻り銚子　一盃之足扮引　一引肴
一三膳引　一廻り銚子　一二膳引に出る　一吸物
一臺　一押　一銚子　一吸もの
一廻り銚子　一引肴　一臺　一押
一銚子　一湯　一水　一茶菓子
一銘々菓子　一茶碗引

表御小姓

一御酒二篇通御吸物出盃臺出之其節御役者罷出御囃子有之刑部右兵衛御年寄と盃事有之御小姓頭以上順々に盃事有之畢て御用達衆一同に罷出挨拶

一納之臺御年寄納

一御祝儀物に附參候侍分蘇鐵之間にて御料理被下

御料理　三汁八菜　二汁七菜

並白木具

此所御料理相止

給仕　十八組

刑部供之

一汁五菜　歩行 三人　侍 二人

一汁四菜　下部 十人　押 一人

右兵衛供之

一汁五菜　侍分 二人　御進物世話人 二人

一汁四菜　下部 八人　上方町人 五人　長持々人 四人

一殿様より懿姫へ御使

吸物肴

一御年寄衆より御供番頭以上御酒被下

一御内證女中右同斷

以上

御盃事之次第

御前へ　土器盛

御吸物　塩たい ひれ　白大三方 尺御はし

御客へ

御吸物 右同斷　白木具 二の膳 尺御はし

御臺　高砂御土器

御押　福壽草　折するめ

檀紙包糸花餝

長柄御銚子加共

右相濟

十一月十六日

御料理三汁九菜向詰共白木具

本膳

鱠　たい　しやうが　くり　金かん

汁　鴨　いてう大こん　こほうせん　よめな　めうど

小角
香物　なら漬うり　みそ漬小茄子　塩山升

煮物　箱玉子白き　松露　丸むきにんじん

飯

二

丸杉焼　あんかう　同黒かわ　ひれ　摺山升

汁　たい　ゆ

水あへ　ほうれん草　唐くらけ

三

杉地紙介敷杉葉

さしみ　子附鯉　しらも　みる　ひれ　久年母　わさひ

汁　千葉

いり酒　　茶碗盛　丸寄豆ふ　いり干飯　くす入
向詰
小鯛掛汁
引もの　敷紙　　大板かまほこ
肴　敷紙　　小くし　はた白
吸物　小蛤　ひれ　　同　たい　ゆ
肴　敷紙　　みそ漬やきいか
御用意
吸物　もうた　ゆ　　同　結ひきす　くこのめ
肴　　にしめ　くしこ
酒煎　たこ　　煎　かき　ゆ　のり
塩煎　くわい　　酢　たい　わさひ
大殿様
小振臺　　貳面
若松に根さゝ　　紅梅に薮かうじ
島臺　　三面
御前へ御盃事之節上る

高砂　　押　福壽草

御料理之上出る

鶴龜　　押　折ふき するめ

御納

跭　　押　水あふひ

取肴　たわ　するめ　うんきり　からすみ　めさし　ちゝみのし

茶菓子　水くり　桂もちやうじ　河たけ

干菓子　明石糖　花　月　白しのふ

一汁五菜吸物肴
三種菓子猫足ぜんにて上る　難波刑部／内海右兵衛　供之　侍分　五人／侍分　四人

右兩人之下部

一汁四菜吸物肴三種くわし猫足ぜんにて出る　上方町人持人とも　都合二十八人

御使町宿にて十四日夕より十七日朝迄

上分　二汁六菜吸物肴三種夜食一汁三菜

勤候朝夕　勤候日は朝夕二汁七菜吸物肴三種

干菓子三色　十七日朝二汁六菜吸物肴三種

同所にて侍分二十一人才領二人
　一汁四菜肴二種
下部二十五人一汁三菜肴一種
持人二十人　　夜食三菜汁なし
才領一人
右之通十四日夕より十七日朝迄出し申候
　御酒被下
御年寄衆　　五人前
　吸物　さゝめき ゆ　　肴　小くし わらさ
大殿様より御酒被下
御年寄衆　　五人前
　吸物　めはる ゆ　　肴酢の物　ほら　粉しやうが
大寄合衆より御供番頭以上御用達迄
　御内證女中へ　　やきするめ
　御酒被下　上通り 七人　中通り 一人

吸物 はまくり こせうのこ　　肴 酢たこ おろし しやうか

一同日御目通り有之候委細は大帳に記し有之

右役配

當番　近藤富右衛門　竹田又吉　石井幾右衛門

大殿様御膳

今井才右衛門　外山兵左衛門　兒玉楠左衛門

坂本新兵衛　高橋安五郎

中の間御盃事幷に御料理

近藤幸右衛門　北村源右衛門　二上喜平次

高田定右衛門　大堀常右衛門

御役者中宿

岡本十藏

調　田井平助

組頭　今井弁左衛門　竹田善左衛門

木具

一大白三方　三膳　　一白木具　四膳 二の膳

一島臺　一面 鶴龜押ふき　　一丸杉やき　三つ 臺共

一杉地紙　三つ　足付
一黒もし　十本　御賄方より御茶道方に受取
一青くし　十五本
一かまほこ大板　二十枚
一杉くし　十五本
一押　壹面

右者大殿様御盃事御用

木具

一縁高　四つ
一二の膳　四膳
一白三方　八膳
一三の膳　四膳
一同小三方　三膳
一杉地紙　八つ　足付
一大高足打　四人前　但本二三
一丸杉焼　八つ
一向詰　四膳
一鉢居　四膳
一ひの木小角　四つ
一御島臺　三面
一のし板　三枚
一高砂　押福壽草
一高足扮　三十枚
一蕗　押水あふひ
一杉箱四寸に二寸五分　四つ
一西王母　押若竹

小振御臺　二面

若松に根さゝ　紅梅に藪かうし

右者御結納御使者之節御用

御菓子注文

一椿餅　貳折 くろみ不入　八つ
一花月　二十臺
一いり干飯　五合
右者大殿様被爲入候に付御膳御用
一椿餅　くるみ不入　八つ
一白しのふ　七十目
右者一條様より之御使者入用

紙類

一引合紙　七枚
一太元結　五尺物　十五筋
一内竹　一本
一中奉書　拾枚
「按に内竹は細竹（かよたけ）なり俗に内竹と書し通したるなり」
右者長柄御銚子餝御用

御肴注文

御鱠
一たい尺三寸

一明石糖　七つ
一白しのふ　六十目
一明石糖　七つ
一花月　二十五
一糸花　六本　松竹藪かうし
一紅白水引　廿把
一紺水引　一把
一半紙　一帖

御汁
一鴨　雄　壹羽

丸杉
一あんかう 尺八寸　壹盃
御水あへ
一唐くらけ　一枚
御向詰
一小たい 八寸　貳枚
一たい 尺三寸　一枚
御用意御吸物
一茂魚 尺也　貳本
御用意御肴
一くしこ　九本
一たい 尺二寸　一枚
右同斷
一たい 尺二寸　一枚
一ひ取鯛 尺二寸　一枚半
右者御結納御使者御用

御二汁
一たい 尺二寸　貳枚
御さしみ
一子持鯉 尺四寸　貳本
大坂かまほこ
一はむ 六寸廻り　貳本
御肴
一いか　大五つ
御用意吸物
一きす 六寸　十
御用意御肴
一たこ 尺一寸　一盃
一かき　一升
一するめ　三枚　御有物

一目さし　三枚
一たり　一丁
一うん切　七本
右者御肴御用
大殿様被爲　入候に付御膳筋注文

御肴注文

御鱠
一たい尺二寸　一枚
丸杉
一あんかう尺八寸　一つ
水あへ
一唐くらげ　貳枚
御向詰
一小たい　八寸　三枚
大坂かまほこ
一はむ　六寸廻り　二本

一から墨　一丁
一のし　十本
御汁
一鴨　雄雌　二羽
御二汁
一たい　尺三寸　二枚
御さしみ
一子持鯉　尺五寸　貳本
酢たい
一たい　尺二寸　一枚
御肴敷紙
一端白　尺三寸　一本

御吸物
一小蛤　貮升
御用意
一たい　尺二寸　一枚
御取肴
一鰹節　三本

御肴
一くしこ　拾本
一するめ　御有物
一ひ取鯛　尺二寸　一枚半

天明七丁未年十一月廿七日
種姫（君 一本アリ）様御入輿御婚姻

種姫（君 一本アリ）様は　田安中納言宗武卿〈悠然院公 有徳公御子〉御女にして安永四未年將軍家治公〈浚明公〉御養女被　仰出御入城天明二寅年二月七日　上使御老中松平周防守田沼主殿頭を以岩千代様へ〈香嚴公御養子 舜恭公御事〉御縁組被　仰出天明三卯年四月十五日御結納御進覧同六午年二月廿七日　上使田邊玄蕃頭を以　種姫君様御事來年冬中御引移可被遊旨被　仰出同七未年二月十一日種姫君様當冬中御引移御當日御婚姻御整被遊筈に付御引移は無之直に御入輿御婚姻御整可被遊旨御老中水野出羽守宅於て被　仰出同年九月廿三日　上使水野出羽守を以種姫君様御事當十一月中御入輿可被爲旨被　仰出同年十一月朔日依差圖御家老水野對馬守登城之處來る廿七日御入輿可被爲在來る九日御道具被遣初日極候旨御老中松平越中守を以被　仰出則本日辰刻御城御出輿江戸赤坂御中屋敷へ御入輿御婚姻被爲整

たり于時御歳二十三逝去後　貞恭院様と稱し奉る
一岩千代様には天明二寅年三月七日御元服常陸介と御改め同三卯年十二月朔日從三位中將に御任叙
爾來中將様と稱し奉る御年十七
一按に此比天明の飢僅と稱し天明四年の比より引續き天下大凶荒御收納非常に減し財政困難を極め
既に同七年九月には御家中半知をも被命　香嚴院公御苦心之狀は世記に詳記したる如し然れとも
香嚴公には中將様御上に於ては毫も御儉約不被遊御入輿に付ては赤坂邸へ御守殿御造營善美を被
爲盡七千疊余之御疊を特に和歌山にて御新調御上棟式には御出入之諸職人車力之者迄も御酒肴を
賜り上下千八百人も謡ひ舞ひ實に前代未聞之御賑ひなりしとあれは御婚儀万端之大造なりし押て
知るべし然れ共總て調書は傳わらす僅に此御式を存するのみ
一天明六年年二月御入輿御手當して　幕府より金五万兩御拜借同未年七月御勝手御繰合相直候迄
公方様格別之思召を以今年より三ヶ年之内金七千兩つゝ　種姫君様へ御手當可被進旨被　仰出
たり

御貝桶請取渡　　　　　御輿請取渡
御道具請取渡　　　　　庭之松明
脂燭差　　　　　　　　打合之餅
右御式
御入輿御當日御供揃刻限應庭松明之役人介添とも御守殿中御門左右へ罷出打合之餅男女二人つゝ

御式臺脇左右へ罷出御注進次第　殿様御守殿中御門迄御出被遊御輿へ御出迎夫より御玄關上之御床前へ御着座被遊候御貝桶受取御輿請取之御年寄兩人　殿様御右之方繪圖面之所へ着座　御輿被爲入候時に左右打合之餠春初　御輿中御門御通り被遊と庭之松明法式之通相勤之　御輿御玄關へ御上り被遊と打合之餠左之方之臼之餠右之方三臼打合四人一所春之夫ゟ法式之通御勝手へ持參之御行列に被立候御輿渡御貝桶渡御老中　御守殿御玄關へ被參候と番頭罷出致案内　御同所使者之間へ通し置御貝桶奥役人請取御式臺之上迄持參夫より御藥込頭御小納戸之内請取繪圖面之御場所へ直し直に外之御間へ披き居る御幕は初より上置之御輿繪圖面之御場所へ直し御輿舁者御白洲へ披き御守殿脇差御用人御用達之内持參　御輿御近所扣罷在于時御供之若年寄衆番頭案内致し御老中御着座之席へ通す御幕奥役人おろし奥役人者御式臺へ披着座扆前より御老中被扣居候御場所御障子際茶屋宗理着座御障子をひらき御老中へ及御會釋則御貝桶御輿御請取渡御法式之通相濟御老中方繪圖面之所へ　御ひらき　御年寄も繪圖面之所へ披候と　殿様御敷居際迄　御出被遊御挨拶被遊(眞〔直カ〕)に奥へ被爲入于時御藥込頭御小納戸頭之内罷出御貝桶を奥へ入引續御輿舁之御藥込罷出御輿舁上奥へ被爲入夫より番頭罷出御案内致し御老中方若年寄衆上之使者之間へ通之此時宗理會釋致し御幕上け則御幕際左右に奥役人扣罷在夫より御召替之　御輿初段之御行列に立候御道具夫々掛り之者受取御錠口迄持參女中へ渡し御道具不殘上り候上御老中方若年寄衆へ茶多葉粉出し御熨斗者白三方敷紙致し御使者之間御床へ出置之相濟御老中方若年寄衆右使者之間より中口へ番頭案内致し途中之案内御目付仕表御玄關へ同道于時番頭罷出御客之間へ通し御吸物出し　殿様御會釋被

遊相済被披候事　御守殿御玄關前に被扣居候御留守居乗初御白洲脇切戶口より御目付案內致し表御玄關より下の御客之間へ通し御吸物出し　殿樣御挨拶被遊相濟披被申右之外直に被披候御供中も右同斷御目付案內致し御守殿中口御門出大御門より被披此節御目付差圖致し押之者案內仕候事

御祝御座敷

御床御餝附之圖

御水引紅純子御模樣寶盡　　御敷布　白紗綾　御模樣幸菱

御座敷御着座之次第

御下段より御上段へ御向御右之方　　種姫君樣

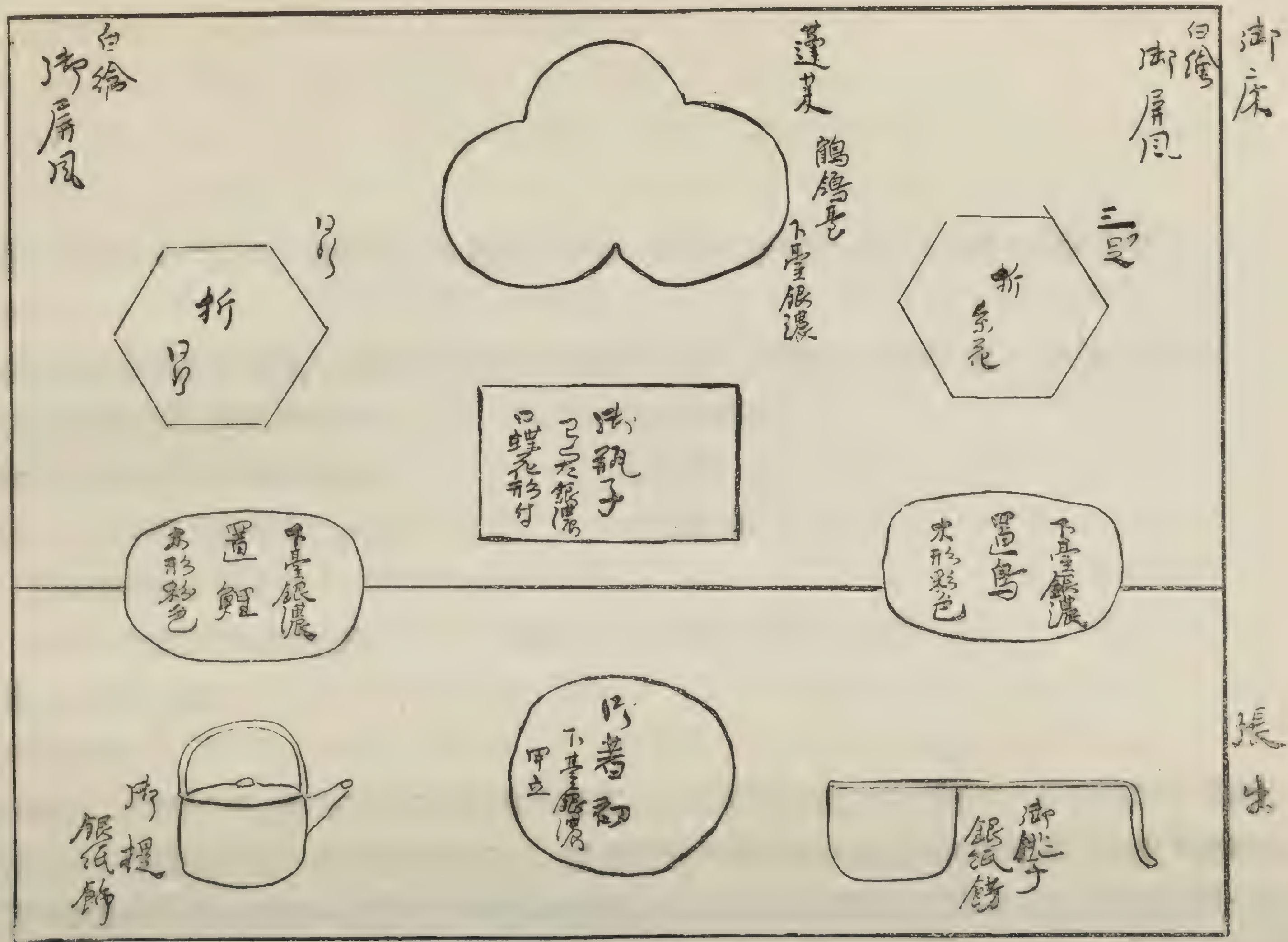
御下段より御上段へ御向御左之方　　中將樣

御下段より御上段へ御向御右之方　　御待上﨟樣

一種姫樣御着座被遊候て御待上﨟樣愛敬之御守御受取被遊　中將樣へ御覽に御入元之所へ懸る

一御著初

御床之內に有之候を　姫君樣　中將樣　御待上﨟樣へ差上夫より元の所へ直置申候


御床
白絵
御屏風
三ツ足
折
糸花
蓬莱
鶴亀
下台銀濃
御銚子
下三方銀濃
口蝶花形付
折
白絵
御屏風
下台銀濃
置鳥
宋形彩色
下台銀濃
置鯉
宋形彩色
御肴
下台銀濃
御銚子
銀紙飾
御提
銀紙飾
張出

式御三献
御三つ盃　御下段より御上段へ向御床際御左之方へ少寄候て置申候
此御三盃御引渡御膳出候と直　姫君様御前へ居御盃御取かはし被遊候
御星之者　御下段より御上段向御床際御右之方へ寄御三盃之御三方と並置申候
御初献　御引渡
中將様　姫君様　御待上薦様
御銘々様へ御引渡御膳出る
御酌　御加　出る
右は御銚子御提は御勝手より出申候　尤銀錺
御三つ盃　姫君様御前へ奉居
姫君様御初　中將様御納
御酌　御加　入る
御引渡御膳下け申候
御二献　御膳
中將様　姫君様　御待上薦様
御銘々様へ二献御膳居奉る
御酌　御加　出る

（御二〔一本ナシ〕つ盃　中將樣へ居奉る）

中將樣御初め　姫君樣被召上　御待上﨟樣御納め

御酌　御加　入る

二獻御膳下け申候

御三獻　御膳

中將樣　姫君樣　御待上﨟樣

御銘々樣へ御三獻御膳居奉る

御酌　御加　出る

御三盃　御待上﨟樣へ奉居

御待上﨟樣御初　姫君樣被召上　中將樣御納め

此時御結ひ酌有之候

御酌　御加　入る

御三盃御星之物御三獻御膳共下り申候

饗御膳

御本　御二　御三　此御順に段々御居渡

御湯出る

御膳段々下り申候

御縁高盛御菓子出直に下り申候

○御色直し

御着座之御順

御下段より御上段御向御右之方　姫君様

御下段より御上段御向御左之方　中將様

同斷御右之方　御待上﨟様

御三つ盃　御下段より御上段向御床際御左之方へ少寄置申候

此御盃御引渡御膳出候と直　中將様へ居奉る

奈良臺高砂　御下段より御上段へ向御床際御(左右)[一本右方]へ寄御三盃之御三方と並置申候

押若竹　押御臺も右之御順に並置申候

御初献　御膳

中將様　姫君様　御待上﨟様

御銘々様へ御初献之御膳居奉る

御酌　御加　出る

御三つ盃　中將様へ居奉る

中將様御初め　姫君様御納め

御酌　御加　入

御初献之御膳下り候

御二献　御膳

中將様　　姫君様　　御待上臈様

御銘々様へ二献御膳居奉る

御酌　御加　出る

姫君様御初め　　中將様被召上　　御待上臈様御納め

御酌　御加　入る

二献御膳下り申候

御三献　御膳

中將様　　姫君様　　御待上臈様

御銘々様へ三献御膳居奉る

御酌　御加　出る

御添肴出る

御三盃　御待上臈様へ居奉る

御待上臈様御初め　　中將様被召上　　姫君様御納め

此御盃事御結ひ酌無御座候

御酌　御加　入る

御三盃御星之物御三献御膳共下け申候

○五々三

　御膳

御本　御二　御三　此御順に居奉る

御鉢出　御湯(出)〔一本ナシ〕

御膳段々下け申候

縁高盛御菓子出直下け申候

右御規式御祝ひ相済候て御引續御料理三汁十菜差上る

○御祝御献立書

式御三献　御膳部銀濃白繪松竹御紋付

御三盃　御三方繪様同斷　御下捨土器　同斷　御星物　糸花蝶改敷御箸臺

鹽ほう盛　鹽引盛

御初献

指掻甲立 海月盛　小重土器下輪

指掻甲立 御三つ盃　熨斗盛　御箸臺　大重土器下輪

右同斷 梅干盛　右同斷

御銚子　銀紙傍　御提　糸花

御二献

（拮挭甲立重土器）内粥　酢手塩　御箸臺

陰陽之鱛石疊置之

御銚子　御提

御三献

銀濃檜葉改敷五度土器

腸煎　塩手塩　御箸臺

右同断庖丁之儘置之

御銚子　御提

右御居御盃事相済

饗御膳　御膳部銀濃白繪松竹御紋付小道具銀濃土器甲立銀紙改敷共御膳へ相生糸花松立て

御本

（拮挭甲立大重）鯛盛　（同）鳥盛　（同蝶改敷）老海鼠盛

（同）削盛　（間土器）御饗（鶴龜）龜帶　（手塩）御箸臺

（同）鱸盛　（同）松笠盛　（同）宇津盛

御二

桔梗甲立小重角盛　同 鳥盛 別足亀足　同 はね魚

同 鱠　同 杉形御饗 鶴亀　同 御箸臺

同 かど盛　同 芋込　同 酢蕪

御　三

重箸甲立小重盥引盛　同 ふかしりか　間土器下輪御汁 鶴

小角かさみ 亀足　五度蝶改敷 御汁掛饗上にひろかつた置

同 酒浸盛　同 からすみ盛

御湯土器　御湯

縁高盛

御汁 醤煎（ひしほいり） 山のいも　きし のり　御菓子　御縁高御三方共に銀濃白濃

糸花 とんほう　まんちう やうかん　亀足臺　すわま ひらせんへい　かや 千鳥　くるみ てう　結ひこんふ 有平　ゑたかき　御揚枝臺

○御色直し

御三献　御膳部金濃御紋松竹改敷亀足等金紙紅裏

御三つ盃　御三方　御下捨土器　同断

奈良臺高砂　押　若竹

御初献

めゝ角すみ甲立
昆布　吹ちらし のし　御三つ盃　御箸臺

めゝ角すみ甲立
勝くり
　御銚子　御提

　御二献

小角すみ甲立
縮熨斗　五度蝶改敷 色之餅　御箸臺

白粉　赤粉

　御銚子　御提

　御三献

小重蝶改敷
差身　御吸物 鯉　御箸臺

下輪
鮒 亀足　かん あかゝい

　御添肴

小重蝶改敷
鱠　五度蝶改敷 鮎口　御箸臺

小角すみ甲立
小指物 亀足

　御銚子　御提

○五々三御膳　御膳部金濃松竹繪　御紋付龜足甲立改敷　金紙紅裏

御　本

大重土器下輪 鱠盛　下臺小角 小桶　御汁 鶴 いてう大根 同 かふ

小角御やき物 きそく　御箸臺

大重土器下輪 香の物　同 ふく目　御取分御食のかさ御盛に成 御太飯

御 二

小重土器下輪 巻鯣盛　小角きそく かまほこ盛　きそく 小榮螺 下臺小かく　御椀 御汁 子持鯉

右同斷 子鱈盛　小重土器下輪 たこ盛

御 三

小角露はゝ 船盛

小かく くしこ盛　御汁 ふな

同さいしき 羽盛

御盃土器　御下捨土器　御吸物ひれ

御銚子　御提

御湯土器　御湯

御菓子　緑高盛　糸花　松 梅 椿

まんちう　やうかん　紅　みとり　せんへい

きくりん　ゐたかき　露はゝ　結こんふ　御揚枝

右御規式相済候て

御服紗御膳三汁十一菜

御肴　　御吸物　　御島臺
御押　　御下捨土器　　御銚子御提
前後御くわし　　御後段

御休足之御間

稲之御臺　御三方　　御盃　　御下捨
御肴　　御三方御箸　　御銚子御提

御祝御膳御給仕之次第

式御三献

一御三土器御三方御持被成様御三方之まへ之さまより右之手を入其手にすへ左之手にて御三方の前のふち之まん中を御もち候て御出可被成候居やうは御すゑ可被成所より少し手まへの方にて右之足をそと踏出し候てひさまつき御三方を置申候置所は御上座之方少し左へ寄御置可被成候立候時も少ししりそき左へ廻り御立可被成候

一御星之物御三方御持被成やう御すへ被成やう前と同し事に御座候置所は御土器之右之方に御置可被成候御たち候時も少ししりそき左へ廻り御立可被成候

御初献

一御手長之衆御膳御持被成様前と同し事に御座候御膳御持出候て御介添之左之方にてひさまつき御

膳を下に置少し取廻し御介添へ御わたし左へ廻り御立可被成候御介添則御膳を御すへ可被成候此
御膳御持被成やうも前と同事に御座候御すへ被成候御順は
中將様　姫君様　御待上﨟様と御すへ可被成候御膳御下け被成候時も御順同事に御座候御したみ
之土器御手長之衆より御請取二の御膳之趣に御すへ可被成候此土器は御三獻目迄殘り申候

御酌　　御加

姫君様被召上
中將様御納
御銚子御持被成やう右の大ゆひを菊のかねをははつし其外之ゆひの揃候やうに御持左之手は御
銚子之疊すり之所へ添て御持可被成候
御提御持被成やう右之手にて釣之中ほとを御持左之手は御銚子底へそと御そへ被成候て御持可
被成候御銚子は先へ御加は跡に御出可被成候直に御本酌へ御銚子より御わたし御加へ御渡し可
被成候御銚子御加とも御本酌之左之方にて御渡し候て左へ廻り御立可被成候御本酌御加とも御
請取被成候と其儘御本酌御上座之御三つ土器を御取候て左へ廻り　姫君様へ御すへ可被成候此
御三方御持被成やう左之手へ御居へ御持可被成候御すへ被成候時もはいひさし心持能御座候御
銚子一度御盛二度御加可被成候是も左之方にて御加可被成候扨其土器を　中將様へ御すへ被成
候時も左へ廻り申候一度御盛二度御加へ可被成候此時も少しはいひさし御心持能御座候扨左へ
御向御手長之衆へ御加へより御渡し可被成候御手長之衆請取左へ廻り尤御加先御銚子は跡に續

て御勝手へ御入可被成候扨御本酌御三つ盃之御三方を元の所へ直し被召上候御土器を三つ土器之下へ廻し候て御置可被成候此時も左へ廻り申候扨初獻之御膳下り申候

御二献

御膳之御持被成やう御介添へ御膳を御渡被成やう同御請取被成候て御そなへ被成やう何も初獻之御膳と同し事に御座候

御酌　　御加

中將樣御初　　姫君樣被召上　　御待上﨟樣御納め

御酌の衆へ御手長之衆御銚子御加へ御渡しやう初献之通りにて御座候御銚子御くわへを御請取被成候と御本酌御上座之御三つ土器を御取候て　中將樣へ御居被成一度御盛二度御加被成扨其盃を　姫君樣へ御すへ被成一度御盛二度御くわへ被成候事御同樣右御土器を　御待上﨟樣へ御すへ被成やう御加へ被成やうまへのことくにて御座候夫より御手長之衆へ御渡し被成候事も前之通にて御座候御本酌御三つ土器之御三方を元之所へ直し被召上候御土器を三つ御土器の下へ御廻し被成御置可被成候扨二獻之御膳下り申候

御三献御膳

御膳之御持被成やう何も二献之御膳と同し事に御座候

御銚子　　御加

御待上﨟樣御初　　姫君樣被召上　　中將樣御納

中將樣御納被遊候と直に御土器は御手長之衆へ御渡し被成候て下り申候御星之物も下り申候此時御手長之衆兩人御越御壹人は御土器御受取御壹人は御上座之御星之物を以前之ごとく御持御土器に引續御下け被成候此時御本酌御立被成御上段之御敷居際迄御下り候て御座候御加へも御たち御本酌之右之方に御並ひ被成候扨兩御酌一度に御立御銚子より左り御廻り被成御加へ御座候跡に御直り被成候御くわへも御銚子に續同しやうに御めくり候て初之御銚子之御座候座に御直り可被成候此時御手長之衆御越御加より御請取御勝手へ御入被成候右兩御酌は御本座へ御直り可被成候次に御したみ土器三獻目之御膳ともに下り申候此次に引續饗の御膳出申候

饗之御膳

御膳之御持被成やう御介添へ御渡し候やう前之通りにて御座候御介添御すへ被成やうも同事にて御座候扨御湯出申候御湯被召上候と段々に御膳下り申候此時も御左へ御廻り被成候御くわし出申候此時御手長之衆御下段に中座被成御揚枝御置被遊候と御菓子御下け可被成候總て御色直し前は何之儀にても左へ〳〵と御廻り被成候て好御座候

御色直し

御三獻

御三つ土器奈良臺御持被成やう何も前と同し事にて御座候

但奈良臺御持被成樣御島臺之通御持被成候事

御初獻

御膳之御持被成やう御すへ被成樣前と同し事にて御座候御したみかはらけ之御樣子も同前にて
御座候何も右に廻り申候
御銚子　御加　姫君樣御納
中將樣御初
是も前之通にて御座候御くわへも右にて御くわへ可被成候
御二献
御膳之御持被成やう御すへ被成やう前之通にて御座候
御銚子　御加
姫君樣御始　中將樣被召上　御待上﨟樣御納
是も前之通にて御座候御酌右廻り御加へも右にてくわへ申候
御膳之御居やう前之通りにて御座候
御添肴　御銘々樣へ差上奉る
御銚子　御加
御待上﨟樣御初　中將樣被召上　姫君樣御納
姫君樣御納被遊候と直に御土器御勝手へ御下け被成候奈良臺も御手長之衆御出候て御下け被成
候尤御むすひ酌者無御座候直に御手長之衆へ御銚子御くわへも御渡し被成候御加を先へ御銚子
者跡に續御膳手へ御入可被成候御色直し後は何も右へ〳〵と御廻り被成候て能御座候御三つ土

器奈良臺御押御添肴御三献之御膳とも下け申候て引續五々三御膳を出し申候

五々三

御すへ渡しにて御座候二と三との御膳は御本膳と間を御置可被成候御鉢も出申候御引土器御銘々樣へ出申候御湯出候と御膳段々に下け申候御膳之御取計萬前之通りにて御座候次御菓子出直に下け申候

右御規式相濟候て三汁十菜常之御膳出申候

御本　　御二　　御三

御吸物　　御嶋臺

御銘々樣へ出申候

御押御同斷

御銚子　　御加

此御給仕之次第常之通御座候

御色直し御三献御祝相濟五々三御膳御祝相濟

御三方樣へ御土器三方御吸物御銚子御加出申候右御給仕御盃之次第何も右廻りにて御座候

一右御盃御土器壹つつゝ御三方にすへ御三方樣へ差上申候此節は御盃事無御座候

中將樣一献御受被遊候と　姫君樣へ御銚子參一献御受被遊夫より　御待上﨟樣へ御銚子參一献被遊候と御加に立申候と御吸物出申候夫より御銚子　中將樣へ參御加共二献御請被遊

姫君様二献御請被遊　御待上﨟様にも二献御請被遊直に御銚子御加とも御勝手へ下け申候
御三つ目御祝儀
御着座之次第
御下段より御上段へ御向御左之方　中將様
御同斷　御右之方　姫君様
御着座被遊候と御勝手より御熨斗三方出
中將様　姫君様へ差上御床前へ直し置申候
御雑煮三献
御三盃
右御熨斗三方之左の方へ少寄候て置申候
御初献
御雑煮
中將様　姫君様
御銘々様へ御雑煮御膳出る
御酌　御加　出る
御三つ盃
中將様へ奉居

中將様御初　　　　姫君様御納

御酌　　御加　　入

御雜煮御膳其儘居置

御二献

御吸物

中將様　　姫君様

御酌　　御加　　出

御銘々様へ二献之御膳奉居

御三つ盃

姫君様へ差上

姫君様御初　　中將様御納

御酌　　御加　　入

御二献之御膳其儘上置

御三献

御膳

中將様　　姫君様

御銘々様へ差上

御酌　　御加　　出

御三つ盃

中將様へ差上

中將様御初　　姫君様御納

御酌　　御加　　入　　御結酌は無御座候

御三つ盃御三献御膳御順に下け申候

御服紗御膳差上

三汁十菜

御三献御献立

御初献

梅干　　御雜煮　御箸臺　　五種盛

御二献

御指身　　御吸物御箸臺　　熊引

御三献

からすみ　　壚鯛盛　　醤煮御箸臺

一御雜煮之御膳御本膳之通御居夫より御手長之衆御本酌御加共御勝手より御出中座御本酌御加共御受取被成御本酌之御方御銚子御持之儘御床前へ御出御同所之御三つ盃左に御持右に御銚

子御持

中將樣へ御三つ土器奉居一獻御盛二度御加其御盃　姫君樣へ被進一獻被召上二度御加相濟御本酌左右へ御持御床前へ御出被召上候御土器を三つ御土器の下へ廻し候て御置可被成候扨御酌御加共元之所へ御出候と御手長之衆御出御加は先き御銚子は跡に引續御勝手へ御入被成候事御初獻は其儘御居置御二獻之御膳御二の膳之方へ御居可被成候扨御銚子御加御初獻之通御勝手より出候と御受取御本酌御床前へ御出御三つ土器　姫君樣へ御居一度御盛二度御加相濟其御盃　中將樣へ被進一獻被召上二度御加被成候事も前之通御座候御本酌御三つ土器之御三方を元之所へ御置被召上候三つ御土器之下へ御廻し被成御立可被成候御手長之衆御加御銚子共受取御勝手へ下り申候御二獻之御膳其まゝ御居置御三獻目之御膳御三之膳之所へ御居可被成候扨前之通御銚子御加共出候と御受取初之通り御床前へ御出　中將樣へ居一獻差上二獻御盛其御盃　姫君樣へ被進一獻被召上二度御加相濟前之通御床前へ御直し置御銚子御加共御勝手へ御入可被成候夫より御手長之衆御盃三方御下け御下捨土器御下け御三獻目之御膳より御順に御下け可被成候

引續二汁十菜御膳出

御五つ目御祝儀

御着座之次第

御下段より御上段へ御向御左方　中將樣

御同斷御右之方　姫君樣

御着座被遊候と御勝手より御熨斗三方出
中將様　姫君様へ差上御床前へ直し置申候
御雜煮三献
御三つ盃
右御熨斗三方之左之方へ少寄候て置候
御初献
御雜煮
中將様　姫君様
御銘々様へ御雜煮御膳出る
御酌　御加　出る
御三つ盃
姫君様へ奉居
姫君様御初　中將様御納
御酌　御加　入る
御雜煮御膳其儘居置
御二献
御吸物

中將様　　姫君様
御銘々様へ二献之御膳奉居
　御酌　御加　出
御三盃
中將様へ差上
中將様御初　姫君様御納
　御酌　御加　入
御二献之御膳共儘上置
　御三献
　　御膳
中將様　　姫君様
御銘々様へ差上
　御酌　御加　出
御三つ盃
姫君様へ差上
姫君様御初　中將様御納
　御酌　御加　入　御結ひ酌は無御座候

御三盃御三献御膳御順に下け申候
是より之御式都て御三つ目御祝儀之御給仕之通りにて御献立等御同様之御儀に御座候

御三つ目御祝御献立書

御長のし鮑

御雑煮三献

御三盃　御三方

御下捨土器　同斷

御初献

小重捨抺甲立
梅干

小角すみ甲立
五種盛

五度
雑煮　もち　芋こみ　くしこ
平ふし　結ひこんふ

御箸臺

小重同斷
數の子

御銚子　御提

御二献

小角すみ甲立
指身　すゝき

間土器

御吸物　ひれ　御箸臺

小角同斷
熊引
御銚子　御提
御三献
小角
からすみ
間
醤煮　きし　のり　山のいも　御箸臺
搥鯛盛
御銚子　御提
御服紗御膳三汁十菜
御吸物御肴附
嶋臺高砂
御盃　御押　福壽草　御肴　御銚子　御酌
前後御くわし
御五つ目御祝右同斷
一種姫君御入輿御祝儀の御催しの節の開口といひ傳ふるあり曰く
夫れ蔭あほく姫小松　ふたばの色の彌まさり　冬も常盤に榮へつゝ　千歳を契ることぶきは芽

出度かりける時とかや

夫れ千代をふる　霜雪に常盤の色をあらはして悪そ深き窓の竹　みとりを添ふる庭の松　枝葉ましへて榮ふる　芽出度かりける時とかや

文化十三子年

豊姫様御鉄漿初御祝

本年十一月廿八日　式部卿様（舜恭公御養子 顯龍公御事）と御婚姻に付此御祝儀被爲整月日缺記にて不了此記及御婚姻已下　倫宮様御鉄漿初御婚姻之記共大奥老女方に保存之雜記覺書中より拾集したるを以て自つから女中扱に係るもの多く固より備具したる調書に非す唯御作法の大概を察すへきのみ

但豊姫様御婚姻のみ表御用部屋調帳を發見次記の如し

一御當日御祝御式

御對面所御二之間にて御整被遊

御上段より御二の間御簾掛る

御二の間御床へ御飾等帳面之通

一御吸物二汁五菜御膳上る

一御方御床へ

天兒様　御伽

御氏神
神々様
一為御取替被進
殿様より　舜恭公御事也
紗綾　三巻　御使
馬場
一しゆ
御姫様より
生さかな代り　百疋被下　同
殿様より
御小袖一重ね　御料紙硯　御肴一折　御使
外に御酒　御硯ふた　綾
一御筆御上
美壽姫様　松平左京大夫頼啓様御内室
泰壽院様御事千萬君様御養母也御筆御上に付
左京大夫様　美壽姫様より
御肴一折　御使
吉川
御姫様へ　左京大夫様より
御肴一折

御同所様へ　美壽姫様より
御かね筆　紗綾　三卷　こんふ　干たい
右御使女中へ被下有之
右御答禮
殿様より　左京大夫様　美壽姫様へ
御肴　一折
同美壽姫様へ
卷物　三卷　こんふ　干たい
外に御文庫之内　紅白紋ちりめん　二反
御側廻りに被下候様にと
大硯ふた一面　御酒
右之通被進
一御かね御上け之後森玄蕃初御目見被仰付
一御鉄漿初爲御祝儀兩家御家老御用人(御廣敷御用人なるへし)御醫師老女より　御姫様へ　御肴差上　御同所様より御召被下
一殿様より左之通被下
銀一枚　浦瀨　貳百疋つゝ　(民澤崎の)

三百疋つゝ　御中﨟二人　百疋つゝ　御伽一人　御次三人

銀十匁　御三之間一人　五十疋　御中居一人

銀五匁　御半下一人

文化十三子年十一月廿八日

豐姫様御婚姻

一御日限被　仰出

右は來る幾日

式部卿様御引移可被爲　在旨被　仰出尤　御引移當日御結納被進　御婚禮被爲整候との趣

一右に付

大納言様より

式部卿様へ　御使　御年寄

一右に付

日光御門主様　尾水様御初御緣家方京都向へ爲御知之儀取計之

一右爲御知

太眞様へ　御使在紀州　奥掛

諧姫様へ　奉切紙

御政所様へ　奉狀

轉心院様へ　奉切紙
修理大夫様へ　同
左京太夫様へ
美壽姫様へ　同
哲丸様へ
鍇姫様御初へも被　仰進之
一爲御知
大納言様より　御使　奥掛
太眞様へ
大納言様
太　眞　様より　御使　奥掛
豊姫様へ
右爲御禮
大納言様へ豊姫様より御使御上
太眞様へ
於紀州
大納言様　豊姫様より御使御上被遊
大納言様　太眞様　豊姫様へ

錯姫樣より　　　　　　　　御使　御附御用人
御政所樣より　　　　　　同　同　代り
轉心院樣より　　　　　　同　御附御用人
修理太夫樣より　　　　　同　御傅
左京太夫樣　　美壽姫樣より　　御使
哲丸樣より　　　　　　　　御使
右之通御歡被　仰上之
太眞樣へは於紀州御上被遊
一御日限之儀
御意
式部卿樣來月幾日　御引移可被爲在旨被　仰出候當日御結納被進（御表 御藥種畑共 御老女）　御婚姻被爲　整候此段可申
聞との　御意候
右之通　御意被成下奥掛御廣敷へ罷出直申聞之
但　御藥種畑老母へ申聞は紀州へ申遣之
一謁
右御日限被　仰出候爲御歡

大納言様　太眞様へ御供番頭已上奥向謁之

一御引移

右は今日吉辰に付

式部卿様御引移　御本殿表御門より御玄關へ被爲入御書院通　御休息へ被爲入御同所にて御息

被遊御都合次第　大納言様御座間於　御上段　式部卿様へ　御對顔御太刀目錄を以御禮被　仰

上之

御熨斗　御小姓

右

御二方様へ差上則引之

御土器　白三方　御小姓

御吸物　同　同

御肴　同　同

御捨土器同　同

式部卿様へ

御吸物　白三方　同

御捨土器同　同

御　酌　同

御加　　同

御前へ被　召上有て其御盃　式部卿樣へ被進之御肴被進御刀御脇差被進等之御次第相濟

修理大夫樣左京太夫樣へ御對顔且御年寄初被　召出

大納言樣式部卿樣御同道大奥へ被爲入

一右爲御祝儀

式部卿樣へ　太眞樣より

御肴代百疋　　御使 御年寄

御目錄

錯姫樣より　　同 御附御用人

大政所樣より　　同 同　代り

轉心院樣より　　同 御附御用人

修理大夫樣より　　同 御傅

左京太夫樣　美壽姫樣より　　御使

哲丸樣

大納言樣へ　太眞樣より　　御使 御年寄

御肴代百疋

一大納言樣式部卿樣御互に御祝儀物之儀　御對顔にて被爲濟分て御祝儀物御取替し無之

大納言様へ　鍇姫様御初より御使を以御歡被　仰上之

太眞様へ　大納言様より　御使在紀州　御年寄

　御肴代百疋

式部卿様より　同　御傅代り

　生鯛一折

鍇姫様御初よりも御口上計之御使於紀州御上被遊

豊姫様へ

大納言様　太眞様より　御使　奥掛

　御肴代百疋つゝ

鍇姫様より　同　御附御用人

大政所様より　同　同　代り

轉心院様より　同　御附御用人

修理大夫様より　同　御傅

左京太夫様　美壽姫様より　御使

哲丸様

　御口上計

一豊姫様より

大納言様御初へ御祝儀物等御上無之

一前段御使被進候爲御禮

太眞様へ

大納言様より　御使在紀州　御年寄

式部卿様より　同　御傅

豐姫様より　同　御廣敷御用人

一謁

右爲御歡

大納言様　太眞様　式部卿様へ總謁有之

一爲御知

右は今日　式部卿様無御滯御引移被遊御大慶　思召候との御事にて

大眞様へ

大納言様より　御使在紀州　御年寄

式部卿様より　同　御傅

一御内々より

右は今日無御滯御引移被遊忝　思召候との御事にて

御連文一通つゝ　兩御丸　女中衆

御臺様御簾中様へ之御禮女中口上

式部卿様より

御連文一通つゝ　兩御丸　女中衆

御臺様御簾中様へ之御禮女中口上

一御結納

式部卿様より　御使　御傅

豐姫様へ

御小袖三重　卷物　五

御帶　二筋　三種　二荷

御目錄

右之通被進之

一右御使於御廣敷相勤之

御請老女申述之

但右御請申述候節

豐姫様より時服代り銀貳枚被下候段老女申渡之

一右御使へ雜煮御酒吸物被下之

紗綾　三卷　御内證御方

豐姫様御附

銀貳枚つゝ　上　﨟
　　　　　　老　女

同壹枚つゝ　若年寄より
　　　　　　御中﨟頭

束
銀二十枚　御中﨟より
　　　　　御半下迄

右之通　式部卿様より被下之覺目六を以御廣敷御用人へ御使之御傅申述之

一御祝儀物

式部卿様より
大納言様へ　御使　御傅
縮緬三巻　一種一荷
御目錄

太眞様へ　御使在紀州　御傅代り
右同斷
同

大納言様　太眞様より
式部卿様へ　御使　御年寄

一種一荷つゝ

御目錄

右御使へ　式部卿樣より御酒御吸物被下之

大納言樣　太眞樣より

豐姫樣へ

御使　奥掛

生鯛一折つゝ

右御使へ　豐姫樣より御酒御吸物被下之

一御右爲御禮

豐姫樣より　大納言樣　太眞樣へ女中作略にて御禮被　仰上之

大納言樣へ

太眞樣より

御使　御年寄

生鯛一折

御目錄

太眞樣へ

大納言樣より

御使在紀州　御年寄

生鯛一折

御目錄

一差上物且被下物

大納言樣より　卷物　三　御內證御方へ

豐姫樣より　卷物　二

大納言樣　式部卿樣　豐姫樣へ　御同人より

一種つゝ代百疋

式部卿樣　豐姫樣へ

睹姫樣より　御使　御附御用人

大政所樣より　同　同　代り

轉心院樣より　同　御附御用人

修理大夫樣より　同　御　傅

左京太夫樣より

一種つゝ代百疋つゝ　御　使

美壽姫御初よりは御口上計之御使御上被成

右之通

大納言樣へ

睹姫樣御初より御口上計之御使御上被成

太眞様へは於紀州右御同様御上被成

一謁

右爲御歡　大納言様太眞様式部卿様へ翌日總謁有之

一御婚禮

右は今日吉辰に付御婚禮御整被遊

一御規式

式部卿様御召物　白御狩衣

一御色直之節嘉珍子持筋之御熨斗目同御長袴　後嘉珍無地のしめ御半袴

「豐姫様には御式正御袴御色直し紅唐綾御緋袴其後御地黑（襦）[一本繻]子御袴之由」

一御婚禮御式正大嵜新右衛門取調候通御調被遊

一御色直之節

式部卿様へ

御熨斗目　二重

內

嘉珍子持筋　一重　嘉珍無地　一重

御上下　二具

內

嘉珍子持筋御長袴　一具　　同　御半袴　一具
御帯　二筋　　御扇子二本　一包
御疊紙　一折
右一臺に積包のしそへ御目錄無之
右之通
豊姫樣より被進之
豊姫樣へ
御小袖　二重
内
紅唐綾幸菱　一重　　地黒綸子　一重
御帯　二筋　　御疊紙　一折
包のし　御目錄無之
右之通
式部卿樣より被進之
一右御祝儀物
御互に被進之儀大奥於御勝手女中御披露申上之
一爲御知

右は御婚禮被爲濟候に付

太眞様へ　　御使在紀州　奥　掛

右之通

一爲御歡

大納言様　式部卿様　豐姫様　へ

大眞様より　　御使　奥　掛

御口上計

鍇姫様御初　御方々様よりも御口上計之御使御上被成

一太眞様へは

鍇姫様御初より於紀州御使御上被成候事

一右

太眞様より御使被進候付爲御禮

太眞様へ

大納言様より　　御使在紀州　奥　掛

式部卿様より　　同　同　斷

豐姫様より　　同　御廣敷御用人

一謁

右爲御歡

大納言様　太眞様　式部卿様へ翌日總謁有之

一御酒被下

右は御引移　御結納　御婚禮御兼

大納言様　太眞様　式部卿様より御相合にて御目見已上已下末々迄御酒被下之

女中へも同様被下之

一御飛脚

右は御引移　御結納　御婚禮被爲　整候段　太眞様へ申上候に付貳印聲掛御飛脚出之

一御三つ目

御式正大菅新右衞門取調奉伺候帳面之通に候事

一右に付御年寄初共被　召出之節御祝儀申上之

一御五つ目

右御同斷

一五百八十餅御取替し

式部卿様へ　御使　奥掛

五百八十餅　鯛一折　昆布一臺　御樽一荷　御目錄

式部卿様より

大納言様へ　（御使（一本ナシ）　奥　掛）

右同断

右之通御取替し被遊

右之通

大納言様　太眞様　式部卿様　豊姫様へ

鍇姫様御初　御方々様より御口上計之御使御上被成

但太眞様へは於紀州御上被成

一右相濟御年寄初被　召出御祝儀申上之

一右御規式相濟候上一旦御廣敷へ相廻し

御方々様へ御取分被進且其外へ被遣等御同所にて取計之且又御年寄初奥表頭役　御目見已上へ

被下分御廣敷より出させ被下之

一式部卿様よりも右同様被下之

一御祝儀内御取替し

大納言様へ

太眞様より　御使　御年寄

一種代百疋　御目録

式部卿様より　御使　御傅

御太刀壹腰　御馬代銀三枚　一種　御目錄

太眞様へ

大納言様より　御使在紀州　御年寄

一種代百疋　御目錄

式部卿様より　同　御傅代り

御太刀壹腰　御馬代銀三枚　一種　御目

式部卿様へ

大納言様より　御使　御年寄

巻物三　一種　御目錄

太眞様より　御使　御年寄

巻物二　一種　御目錄

豐姫様より

大納言様へ　御使　豐姫様御用人

紗綾三巻　一種代百疋　御目錄

太眞様へ

紗綾二巻　一種代百疋　御目錄

豐姫様へ

大納言様より　御使　御年寄

紗綾三巻　一種代百疋　御目録

太眞様より　（同 一本ナシ　同）

紗綾二巻　一種代百疋　御目録

大納言様　太眞様　式部卿様　豊姫様　へ

鍇姫様より　御使　御附御用人

一種代百疋　御目録

大政所様より　同　同　代り

右御同断

轉心院様より　同　御附御用人

右御同断

修理大夫様より　同　御傅

右同断

左京大夫様　美壽姫様　より　御使

右御同断つゝ

右之通御上被成

但太眞様へは於紀州御上被成候事

大納言様　太眞様　式部卿様　豊姫様　より

鍇姫様へ一種　代百疋　御目録　御使　中奥

大政所様へ　右御同断　同　京御屋敷奉行

轉心院様へ　右御同断　同　中奥

修理太夫様へ　右御同断　同　同断

左京大夫様 美壽姫様へ　右御同断つゝ　同　同断

一差上且被下

大納言様　式部卿様　より　御内證御方へ

巻物三つゝ

豊姫様より

同　二

大納言様　太眞様　豊姫様へ　御内證御方

一種代百疋つゝ

大納言様　太眞様　式部卿様　豊姫様へ

御熨斗一臺つゝ　水野飛騨守

同断　安藤帯刀

相合 同断　(安藤一得軒 安藤壹岐守)

在江戸在紀州
太眞樣方共

同　同斷　　年寄共
緣側詰共

同　同斷　　在紀州　年寄共隱居

在江戸在紀州
太眞樣方共

同　同斷　　御側御用人

同　　御勘定奉行

御用御取次

同　同斷　　御用人

右は表御用部屋掛り日記方前以仕出之調帳なり御日限等未た御治定無之際なるを以て來る幾日云々としたるなり

一御祈禱

御婚禮に付御愛敬之御祈禱賀茂右京進へ被仰付右御守差上る

右御守大菅新右衞門にてこしらへ出來之上相廻る

御愛敬御守袋入　右付候白繪御硯ふた

泰山府靈符

右同樣御祈禱に付差上度申出る　御座所御床裏式御寢所御天井又は御守之類納候場所へ納置候樣

一式部卿様之御祈禱左之ヶ所へ
大納言様より被　仰付御札守女中作略にて被進之
　山王社　氷川社　圓滿寺
豐姫様之御祈禱左之ヶ所へ御同様被　仰付
　山王社　氷川社　圓滿寺　岡本左馬介
雲蓋院　松生院　紀厩清主　明見寺

一無禮に付式正吳服被下
白綾幸綾　一反　西上ろう
紅梅織　一反　老女より
江白綾帯（わたうら）　一筋つゝ　表使迄
同斷　幾しま　澤の
　地白りんす表（裏わた）　いそ初
　中色縮めん縫入一通　みを　りの　たせ　せき　さく
　　　　　　　　　　　小てふ　りんや　くれ竹　あやめ　かいろ
右之外御本家女中へも式正吳服被下しなるへきも記載見へず

一女中支度金被下
　式部卿様御付

十三兩　御錠口　一人
五　兩　御三之間　一人
五百疋つゝ御半下　二人

豊姫様御附

十七兩つゝ　老女三人
十三兩つゝ　若年寄二人　御中﨟頭一人
八兩　御右筆一人
六兩つゝ　呉服之間二人
三兩つゝ　御仲居 一人　使番 二人

一御本家御附御式正被下候分は御金被下無之
一服御道具上け初幷御戴物御祝儀
御口柄よろしく付右御祝儀御整被遊

御刀掛
白唐綾　一反　白羽二重御裏
白唐綾御帯　一筋
御下召白練　一反　大紋
唐織大御夜る　二反　七寳に橘

七兩　御次一人
三兩　使番一人
御中﨟四人　御小姓一人　表役一人
七兩つゝ　御次　四人
五兩つゝ　三之間 四人　末頭 一人
五百疋つゝ　御半下　六人

御貝桶　一對　御目錄
紅唐綾　一反　紅同
紅　同　一筋
御下召紅練　一反　同
純子御夜る　二反

綸子御小寢卷　　二反　　御上ふさん紅羽二重　一疋
御下ふさん御緣唐織　一反　　御下ふさん御かゝみ地大紋一反
御しとね
右之通上る
一御戴初吳服之間にて有之
一御吳服幷御道具上初御戴初御祝儀相兼御整に付御吸物上り大奥幷御廣敷向御用掛御用取扱等之分
へ被下
一御衣服且衣服
御方は御上初　式日　御用掛之者　式日　御戴物致候者　五節句
御戴初御用相勤候に付被下
御姫樣より
御召地黑御吳服　千代橋へ　黑ちりめん同　とり
一御婚禮前日御對面所初御規式御飾に相成る
一陰陽御弓御寢所御化粧之間之あいたに御飾
一鴛鴦の衾御守護白檜箱入西御殿へ廻る
一御式正御夜着天兒御伽服仕立出來に付御對面所へならへ置御覽被遊奥表拜見被　仰付
一御寢所御次へ左之通御飾に成る

唐織御夜る

御召衣桁にかける　御地白綸子一　御間召　一

御地赤　一　御地黒　御縫入　御帯　二

一御婚禮御飾之儀左之通禮式大菅新右衛門より差出す

御婚禮御式正御床飾

御水引紅純子子寶盡繪様

御敷布白綾幸菱　　御銚子　銀紙包糸花飾　但松竹藪柑子

御置鳥　彩色御臺烏帽子形二重　革草御模様

臺銀濃内　染飯敷松梅椿　其外下草　蓬萊之御臺　木錫銀濃白繪　若松御紋付紺青　枠臺銀濃繪様　御瓶子　　銀濃御土器　御三つ盃

御置鯉　彩色御臺右同斷　根芹御模様

御長熨斗鮑御三方　右同斷繪様　　御提子　右同斷

御同所御棚飾　　御棚下

御軸物様之者　　御食籠様之者

御座之間御床飾

目出度御繪　御銚子

御掛物　三幅對　稻之御臺御押臺

御提子

御したみ土器御三方

御したみ土器御三方

御同所御棚飾

御棚下

御手鑑様之物　御料紙箱様之物

御同所御附書院

一御硯御硯屏御筆荷様之物

一御同所御鴨居に御長刀一振御穂先北に當り申候御掛置被成候御作法にて御座候夜に入候ては御化粧之間に御座候御太刀御守脇差御万寶をも此所へ御移し被成候との古傳にて御座候

御化粧之間御床飾

御袋入　御太刀　御太刀掛

目出度御繪　御掛物　二幅對

同　御守脇差御万寶掛

一御同所御椾之具御飭附御化粧之間御入口鍵之手に御屏風金地にても白地にても目出度御繪御粉色御屏風御立被成御飾御例之通にて御座候

一御同所御二之間南之方に向

御犬張子

天兒　御瓶子一對　御三方　這子　御据り鏡　御三方

御犬張子

御守筥　御臺

一御鈴守御三方に置天兒之次にならへ御飾附御座候此次に御貝桶一對蜻蛉之鼻と鼻向合候樣に御並へ置被成候此次に御夜之物御飾附御座候

一御夜之物御飾御後ろに金地御屏風立其前御長持二棹並へ此上に御飾御座候

一鴛衾御夜之物御飾之內御長枕之御間に御座候て御寢所へ相廻り　御明日は御厨子棚之御厨子之內へ御納被成候との古傳にて御座候

一陰陽弓御蟇目何れ之間にても御飾附御座候

御明日

御對面所御床飾

目出度御繪
御掛物三幅對

御黑棚
御厨子

一御同所御棚飾御置物御見合可然御飾付御座候

一御婚禮御床盃之御銚子へ差添へ候御用に付芝神明神田明神幷山王社の神酒可取寄旨老女中聞則取
寄御初穂御備へ相成
一御婚姻御式
十一月廿八日
御對面所御着座之次第
御下段より御上段へ御向御右之方　豐姫様
御下段より御上段へ向御左之方　式部卿様
一豐姫様御着座被遊候て御配膳御愛敬之御守を請取奉り御小廣蓋に置
式部卿様へ御覽に入其後御棚下へ御置候て本座に御着可被成候
一御箸初
御床の内に御座候を
式部卿様へ差上　豐姫様へ差上夫より元之所へ直し置申候
式御三献
一御三つ盃御三方（御下段より御上段へ御向御床際御左之方へ少寄候て置申候）此御盃御初献御膳出候と直に　豐姫様へ差上御盃御取か
はせ被遊候
一御星之物（御下段より御上段へ向御床際御右へ寄御三つ盃之御三方と並へ置申候）
御初献御膳

御引渡

式部卿様　豊姫様　　御銘々様へ御初献御引渡御膳出

御したみ土器

御酌　　御加　　出

右御銚子御提子御勝手より出申候

御三つ盃

豊姫様御初　式部卿様御納

御酌　　御加　　入

御初献御膳下申候

御二献御膳

式部卿様　豊姫様　　御銘々様へ御二献御膳出

御酌　　御加　　出

御三つ盃

式部卿様へ差上る

式部卿様御初　豊姫様御納

御酌　　御加　　入

御二献御膳下け申候

御三献御膳

式部卿様　豊姫様　　御銘々様へ御三献御膳出

　御酌　　御加　　出

御三つ盃

豊姫様へ差上る

豊姫様御初　式部卿様御納

　此時御結ひ酌有之候

御三つ盃御星之物下け申候

　御酌　　御加　　入

　御三献御膳下け申候

　御高盛御膳五五三

御本　　御二　　御三

　此御順に御すへわたし

御鉢出　直に下け申候

御盃素土器　　御本御二の御向へかけ候て備へ申候

御引添　　御本御三の御向へかけ候て備へ申候

御したみ土器　御引添の御脇へすへ申候

　御酌　　御加　　出

式部卿様御初　豊姫様御納

御銘々様御盃にて一度御盛二度御加へ被成候

御酌　御加　入

御したみ土器御盃御引添下け申候

御湯土器出　御本の御向へそなへ申候

御湯出　直に引申候

御膳御順に下け申候

縁高盛御菓子出　直に下け申候

御臺天目出　直に下け申候

御色直し

御着座之次第

御下段より御上段へ御向御右之方　豊姫様

御下段より御上段へ御向御左之方　式部卿様

一御三つ盃　御下段より御上段へ向御床際御左の方へ少々寄置申候

此御三つ盃御初献御膳出候と直に　式部卿様御前へ差上申候

一御星之物　御下段より御上段へ向御右之方へ寄候て置申候

御初献御膳

式部卿様　豊姫様　御銘々様へ御初献御膳上る
御したみ土器
御酌　御加　出
御三つ盃
式部卿様御前へ上る
式部卿様御初　豊姫様御納
御酌　御加　入
御初献御膳下け申候
御二献御膳
式部卿様　豊姫様　御銘々様へ御二献御膳上る
御酌　御加　出る
御三つ盃
豊姫様御前へ上る
豊姫様御初　式部卿様御納
御酌　御加　入
御二献御膳下け申候
御三献御膳
式部卿様　豊姫様　御銘々様へ御三献御膳上る

御添肴　　御三之趣に備へ申候
　御酌　　御加　　出る
御三つ盃
式部卿様御前へ上る
式部卿様御初　豊姫様御納　此御盃事連理之御酌御座候
御三つ盃御星之物下申候
　御酌　　御加　　入
御したみ土器御添肴御三献御膳下け申候
　御祝御膳御給仕之次第
一御三つ土器御三方御持被成様御三方の前のさまより右之手を入其手にすへ左之手にて御三方の前の縁の中程を御持候て御出可被成候居様は御すへ可被成所より少手前之方にて右之足をそとふみ出し候てひさまつき御三方を置申候御置ところ御上座の方少し左へ寄候て御置可被成候御立候時も少しりそき左へ廻り御立可被成候
一御星之物御持被成様御すへ被成やう前と同し御事にて御座候御置ところ御盃三方の右の方へ御置可被成候御立候時も少御しりそき左へ廻り御立可被成候
　御初献
御手長の衆御膳御持被成やう前と同し御事にて御座候御膳を御持出被成候て御配膳の左の方にひ

さまつき御膳を下に置き少取廻し御配膳へ御渡し左へ廻り御立可被成候此御膳御持やうも前と同し御事にて御座候御すへ被成候御順は　式部卿様豊姫様と御すへ可被成候御手長御二人御ひき續き御膳御持出候て　式部卿様御配膳へ御渡し被成御塗縁と御下り候時　豊姫様御膳御手長御塗縁を御上り候様御出引とも御ぬり縁の際にて御手長と御手長御行合候様にて宜敷御座候御したみ土器は御手長より御配膳御受取二の膳の趣に御すへ可被成候此したみは御三献目と殘り申候

一御銚子　　御提子

豊姫様御初　式部卿様御納

御銚子御持被成やう右の大指を菊のかねをはつし其外のゆひの揃ひ候やうに御持左の手は御銚子の疊すりの所へ御すへ被成候て御持可被成候御銚子の御持やう右の手にてつるの中程を御持左の手は御提子の底へそと御そへ被成候て御銚子は先御提子は跡に御出可被成候直に御本酌へ御銚子を御渡し御提子は御加へ御渡し可被成候御銚子御提子共に御本酌の左の方にて御渡し候て左へ廻り御立可被成候御本酌御加共に御受取被成候とそのまゝ御本酌御上座の御三つ盃を御取候て左へ御廻り　豊姫様へ御すへ可被成候此御三方御持被成やう左の手にすへ御持可被成候　御前に御すへ被成候時は膝行の心に少し御すへり寄可被成候御銚子は一度御盛二度御くはへ可被成候扨其土器を　式部卿様御前へすへ申候時も左へ御廻り被成一度御盛二度御くはへ可被成候此時も膝行の御心に御すへり寄可被成候偖左へ御向御手長の衆へ御渡し可被成候御手長の衆受取左の方へ御廻り尤御加は先御銚子は跡に續て御勝手へ御入候偖御本酌御三つ盃を御上座へ御直し候て被　召上

御土器を御三つ土器の下へ廻し候て御置可被成候偖御初献御膳下り申候

御二献

御膳の御持被成様御配膳へ御膳を御渡し様同しく御請受被成御そなへ被成様いつれも御初献御膳と同し御事にて御座候

一御銚子　御提子

式部卿様被召上　豊姫様御納

御酌の衆へ御手長の衆御銚子御提子御渡様御初献之通にて御座候御銚子御提子を御受取被成候て御本酌御上座の御三つ盃御三方を御取被成候て　式部卿様御前へ御すへ被成一度御盛二度御くわへ可被成候その御土器を　豊姫様御前へ御すへ被成御盛被成様御加へ被成様前のことくにて御手長の衆へ御加へより御渡し被成候御事も前の通りにて御座候御本酌御三つ盃の御三方を御上座へ御直し被　召上候御土器を御三つ土器の下へ御廻し被成候て御置可被成候偖御二献御膳下り申候

御三献

(一本ナシ御膳御持被成やう何も御二献御膳と同し御事にて御座候)

御銚子　御提子

豊姫様被召上　式部卿様御納

御酌の衆へ御手長の衆御銚子御提子御渡し候様御二献の通にて御座候御銚子御提子を御受取被成候て御本酌御上座の御三土器の御三方を御取候て　豊姫様御前へ御すへ被成候て一度御盛二度御

加へその御盃　式部卿様御前へ上一度御盛二度御くわへ御納被遊候と御三つ盃御三方は御手長之衆へ御渡し被成候て下り申候御星の物下り申候此時御手長の衆御兩人御越候て御壹人は御三つ土器御三方を御受取御壹人は御星の物を以前のことく御持御三土器と引續き御下け可被成候此時御本酌御立被成御上段の御敷居際まて御下り候て御座候御加へも御立候て御本酌の右の方に御並ひ被成候偖兩御酌一度に御立御銚子より左へ御廻り被成御加への座へ御直り被成御加へも御銚子に續き同し様に御廻り候て御銚子の御座候座へ御直り被成候此時御手長の衆御越御加へより御請取御勝手へ御入可被成候右兩御酌は御本座へ御直り可被成候次に御したみ土器御三献御膳ともに下り申候此御引續き御高盛御膳出申候

御高盛御膳

御本　　御二　　御三

御膳御持被成様御配膳へ御渡し被成様前の通にて御座候偖御鉢出候て直に下り申候

御盃は御本御二の御向へかけ候て御すへ被成候

御引添御本御三の御向へかけ候て御すへ被成候御したみ土器は御引添の御脇へ御すへ可被成候

一御銚子　御提子

式部卿様御初　豊姫様御納

豊姫様御納被遊候て御本酌左へ御向御立被成御手長の衆へ御加へより御渡し被成様前の通りにて御座候偖御本酌御加へ御本座へ御直り被成候御したみ御盃御引添下り申候て御湯土器出御本の御

向へ御配膳御すへ被成御湯御手長の衆御持出直に御下け可被成候偖御湯土器御三御二御本御膳不殘下り申候
緣高盛御菓子御配膳御すへ被成候と御手長の衆中座に御ひかへ御臺天目出御配膳御差上直に受取奉り御手長の衆へ御渡し候て御臺天目下り申候次に緣高盛御菓子御下け被成候總して御色直し前は何の儀も左へ左へと御廻り被成候て宜敷御座候

御色直し

御三獻

御三つ盃御三方御星の物御持被成やう何も前と同し御事にて御座候此時は右へ御廻り可被成候

御初獻

御膳御持被成樣御すへ被成やう前の通にて御座候御したみ土器の御樣子も同前にて御座候いつれも右へ御廻り御立可被成候

一御銚子　　御提子

式部卿樣御初　豊姫樣御納

御酌の御樣子御三つ盃の御取扱前之通にて御座候尤も右へ御廻り御加へも右にてくはへ申候

御二獻

御膳御持被成樣御すへ被成樣前の通にて御座候

一御銚子　　御提子

（一本ナシ）豊姫様御初　式部卿様御納

御酌の御様子前之通にて御座候尤右へ御廻り御加へも右にてくはへ申候

御三献

御膳御持被成様御すへ被成様前之通にて御座候

御添肴

御手長の衆より御配膳御受取三の膳の趣に御すへ可被成候

一御銚子　御提子

式部卿様御初　豊姫様御納

豊姫様御納被遊候と直に御三つ土器御手長へ御渡し被成候て下り申候御星之物下り申候御様子前之通にて御座候尤此時れん理の御酌御座候て直に御銚子御提子御手長へ御渡し被成候御提子先御銚子跡につゝきて御膳手へ御入可被成候御色直し後は何も右へ右へと御廻り被成候て宜しく御座候御したみ御添肴御三献御膳ともに下け申候御取計ひよろつ前之通にて御座候

右御規式相すみ三汁九菜常の御膳

御本　御二　御三

御向詰　御鉢　塗御盃　御肴　銀御燗鍋

奈良臺高砂　御押福壽草

御銚子　御提子　御湯　御菓子　御後菓子出申候

此御次第は常御給仕之通にて御座候

一御當日御召服　式部卿様　白御狩衣　白綾御召　豊姫様　御式正　御袴

御色直し　式部卿様　嘉珍子持筋　同御長袴　豊姫様　紅唐綾　御緋袴

その後　式部卿様　嘉珍無地御のしめ　御半袴　豊姫様　御地黒綸子　御袴

一御色直し爲御取替

式部卿様より　豊姫様へ

紅唐綾御小袖　一重ね　御地黒綸子　一重ね

御帶　黒しゆす縫取　花色同　御疊紙　御使　小山

右一臺

式部卿様へ　豊姫様より

御熨斗目御小袖　二重　嘉珍子持筋　同　無地

嘉珍子持筋御上下御長袴　同　無地　御半袴

御帶　二筋　御扇子　二本　御疊紙　御使　浦勢

右壹臺

一右御使相勤候付被下

式部卿様より　三百疋　浦勢

豊姫様より　三百疋　小山

一御婚禮御床盃之御銚子へ差添へ候御用に付芝神明神田明神弁山王社之神酒可取寄旨老女中聞則取寄御初穂御備へ

一御婚姻御式

十一月廿八日

御對面所御着座之次第

豊姫様御下段より御上段へ御向御右之方

式部卿様御下段より御上段へ御向御左之方

一御被　御配膳取之　御手長御廣ふた持出御納戸へ納之　御配膳取之渡

一御愛敬之御守　御手長御廣ふた持出

式部卿様へ入御覧御床に納之

一番　御箸初　御床之内に有之候取おろし候て御二方様へ上之元之所へ置之

二番　式御三献　御三つ盃　御床前中央に置之

三番　御星之物　御三つ盃と並び置

四番　御初献御膳引渡　式部卿様豊姫様御銘々へ上之

五番　御したみ土器出　御疊に置之御三方引之

六番　御酌御加出　御三つ盃
　豊姫様御初　式部卿様御納　御酌御加入
七番　御二献御膳内粥出
八番　御酌御加出　御三つ盃
　式部卿様御初　豊姫様御納　御酌御加入
九番　御三献御膳鵬煎出
十番　御本酌御加出　御三つ盃
　豊姫様御初　式部卿様御納　御三つ盃下り申候
　御星之物下り申候御酌御加入　御したみ土器引　御三献御膳鵬煎引
　御二献御膳御内粥引　御初献御膳御引添引　御高盛御膳五々三
十一番　御　本
十二番　御　二
十三番　御　三
十四番　御　鉢
十五番　御　盃
十六番　御引添
十七番　御したみ土器

十八番　御酌御加出　式部卿様御初　豊姫様御納
　御銘々様御盃にて御加共御三献上之　御酌御加入
　御したみ土器引　御盃引　御引添引
十九番　御湯土器出
二十番　御湯出　引次第　御湯土器引　御三引　御二引　御本引
二十一番　緣高盛御菓子出
二十二番　御臺天目出
御色直し御着座之次第
豊姫様御下段より御上段へ御向御右之方
式部卿様御下段より御上段へ御向御左之方
一番　御三つ盃
二番　御星之物
三番　御初献御膳御引渡出
　式部卿様　豊姫様　御銘々様へ上之
四番　御したみ土器出
五番　御酌御加出　御三つ盃
　式部卿様御初　豊姫様御納　御酌御加入

六番　御二献御膳御色之餅出　御二方様へ差上之
七番　御酌御加出　御三つ盃
　豊姫様御初　式部卿様御納　御酌御加入
八番　御三献御膳鮒　御二方様へ差上之
九番　御添肴鮎きやう　御二方様へ差上之
十番　御酌御加出　御三つ盃
　式部卿様御初　豊姫様御納　御三つ盃御本酌御手長へ御渡し下り申候　御星之物下け申候
御酌御加入　御したみ土器引　御添肴引　御三献　御膳鮒引　御二献御せん御色餅引
御初献御膳御引渡引
右御規式相濟三汁九菜常之御膳
御本　御二　御三　御向詰　御鉢　塗御盃　御肴　銀御燗鍋
奈良臺高砂　御押福壽草　御銚子　御提子　御湯　御菓子　御臺天目御濃茶
御後菓子　御臺天目御薄茶
右
一右之通目出度御祝儀被爲整御時刻等左之通り
御式正
御三献　御盃事　御式

御祝五々三御膳上る　　八半時過被爲濟

御色直し

御三献御盃事　　御式七半時被爲濟　御表へ被爲入

御對面所にて

御服紗御祝御膳上る

右被爲濟　御二所樣　御座之間へ被爲入御のし上る四つ時前御寢所へ被爲入御祝御盃事被爲濟候事

一御婚禮御祝儀御取替しに付　御三方樣於　御對面所御盃事被遊候

一御三つ目御祝儀於　御對面所　御二所樣へ御祝上る

大納言樣　中將樣御取かはせ表向にて有之　御表へ　上使被進

一御五つ目之御祝ひ於　御對面所　御二所樣へ上る

一御婚禮濟に付御祝儀御取替しに付　御三方樣　御方々樣へ被進且御上被成外御帳に留有之

右之外御帳欠失不明なり

一御婚禮當日之

置鳥　置鯉　瓶子一對

御式之御膳部幷御當日御三つ目御五つ目奈良臺おさへ

右御廣敷へ出し戴候樣にと御用人へ渡す右殘り廿一大奥へ廻し

御三方一つ充　三老女　若年寄　御通ひに掛り候者共

右之通御有合戴かせ候事

一御婚禮首尾能被爲濟候爲御禮

大納言樣より左之ヶ所々々へ御名代被遣御備へ被遊候

山王社　氷川社　御庭稲荷社　同秋葉社　紀州岡之宮　日前社國懸社　邦安社

一寒中御尋して女中上使之節御婚禮爲整之御祝儀御使有之

一御婚禮濟に付

大納言樣豊姫樣より女中綾小路（一本ナシ初小山）初つと初末々迄御金被下いさゐ別帳にあり

一御婚禮御祝して御出入町人等左之通差上

御三方樣へ

御肴　茶や　丸や　越後や

御出入の町人共

猩々緋二けん　越後や

御肴一折　大菅新右衛門

右に付御酒御肴御目録被下之

一御婚禮濟に付追て　御二所樣へさし上

御肴一しゆ　老女はしめ　表使まて

南紀徳川史卷之百二十七

臣　堀内信　編

典禮第三

倫宮様御銕漿初御婚姻

倫宮様は　伏見貞敎親王御妹　伏見入道禪樂邦家親王御女にして安政六未年十二月六日御縁組被仰出同七申年正月廿二日京都御發輿二月九日江戸御着座同十一日御結納之御式被爲整御廣敷奥御殿に御住居之處御銕漿初あらせられ引續き御婚姻被爲整たり抑　伏見宮より御縁組は重々の御縁邊にして則ち

明暦三酉年九月
伏見安ノ宮（貞清親王姫宮）　清溪公へ御縁組
寶永三戌年二月
伏見眞宮（貞致親王姫宮）　有德公へ御縁組
元文四未年六月
伏見富ノ宮（貞建親王御養女）　菩提心公へ御縁組

如斯再々の御吉例也御婚姻は就中の御大禮一切表御用部屋調元にて　公邊向初御同族方諸家御音信應答御内手諸御禮式等枚擧すへからすして一朝一夕の事に非す且天明度　種姫君様御縁組以來は外様より御入輿之事なく明暦初の御例は何れも年古く左れは　豊姫様（鶴壽院様）御例により取

調たるならんも表方調帳は渾て散逸に屬したれは知るに由なし此記は唯內庭遺存の女官記錄に憑て抄錄する處なれは　公邊初他向の事及御家表向の次第等を缺如す尙他遺漏の事も免れさるへし
御結納は江戶御着輿の節引續き整させられ御下向之部に連記したるを以て爰に揭けす

倫宮樣　當公御簾中

御鐵漿初御婚姻

文久二戌年三月政府より　倫宮樣御用人へ達
一倫宮樣御事當九月上旬御鐵漿初同十一月中御婚姻御整被遊筈候間右御用筋老女申合取調可被申事
右一通
御婚禮之義は不外御大禮に候得共斯る御時節に付無御據可成丈御手輕に御整可被遊との御事候間老女へも篤と申合諸事右之心得にて取調可被申事

同年六月十五日
一倫宮樣御婚禮被爲濟候はゝ　伏見宮樣へ御互御使を以御祝儀物御取替有之に付　伏見宮樣御初へ御婚禮御比合爲御知之儀今日出御飛脚を以表御用人より取計之
御鉄漿初御整之儀　伏見樣へ前以爲御知は大奧にて取計之

倫宮樣御鐵漿初

一文久二戌年九月十八日御式被爲整　卯之日御祝ひ巳之刻下り
御式場　御對面所御二之間玉女之方巳之方へ向はせらる

玉女之方とは其日のゑとより九つ目たとへは子の日は申之方閒(きい)神の方と申は其日之ゑとより三つ目たとへは子の日は寅之方玉女閒神の歌に

　玉女とは其日を入て九つ目これに當るを閒神といふ

是諸祝儀に用ゆる吉辰之旨諸禮大管禮之進より申上る

右之通之處玉女九つ目は御當日夜に入候に付三つ目巳之方へ御向被遊

一御筆親　西條千萬君様より御上け　明和四亥年　從姫様御鐵漿初之節御筆親　賢姫様へ御頼被遊御筆被進候に付爲御挨拶大奥作略にて　賢姫様　播磨守様へ被進物有之　文化四卯年十一月十九日　鍇姫様御鐵漿初之節　田安御簾中様より御筆被進候に付大奥作略にて　右衛門督様御簾中様へ被進物有之　文化九申年十一月七日　豐姫様御同斷之節は　美壽姫様より（左京大夫賴啓様御内室恭壽院様御事なり）御筆御上け依て此度は　千萬君様へ御頼被遊候事

一御召服　地白綸子御合召じゞろ御帶白地ぬいとり（是迄の御袴にて）

一御　袴　大腰濃(こき)精好（御仕立上の丈五尺　御紐丈貳丈五尺）

右中納言様より被進　御肴　一折　御目錄　御袴は御口上にて申上　御使　綾小路

　西御中藹兩人にて持出御披露御禮被　仰上御使へ　肴　一折（覺目錄　金二百疋）被下

一右御袴は御式被爲濟候て御ゆきのへ御召被爲召候節矢張り巳の方へ御向御袴被爲召

　倫宮様御袴召初は被爲濟有之候得共御鐵漿初よりは是迄之は御用ひに不相成大腰濃御袴被爲召候事

豐姫樣には御婚禮より御緋袴被爲召候得共京都にては御十六歳迄濃御袴ゆへ　倫宮樣は御婚禮相成候ても濃御袴にて御居置相成候筈御十六歳前にても御着帶に被爲成候はゝ其節より御緋袴被爲召候との事

一御鐵漿初之節

中納言樣より　倫宮樣へ紗綾一種 三卷紅白 御目録　御使奥掛り御用人

倫宮樣より御上け　干鯛　一箱 御目録　御使　女中

右之通御取替せ被遊御使奥掛りへ　宮樣より卷物代り金二百疋被下之

一右に付　倫宮樣より御禮之儀は御(内〔一本同〕)殿之儀に付　御對顏にて被仰上

紗綾干鯛は表御用部屋にて出來方申付る

一御産神へ　御名代

倫宮樣より上御靈社へ銀一枚　御名代

右　伏見宮樣方へ御頼にて被遣　但當地にては左之通り御備へ被遊　强飯　瓶子

但御庭稻荷へも　御名代可被遣處未た御婚禮已前に付無之

豐姫樣には御家の御方樣に付山王氷川御庭稻荷へも御名代被遣候得共此度本文之如し乍併九月に付御庭三社へ奥より御名代有之節前段被爲濟候御禮御ふくみにて被遣山王氷川へは來月之節御舍にて御初穗も一所に御納め之筈いつれも女中取扱ひ之事

一伏見宮樣へ御祝儀被進

中納言樣より
伏見宮樣へ　一種　御目錄　　御使京都御屋敷奉行
入道宮樣
入道宮樣御息所樣へ　一種つゝ　　同　同
岡宮樣へ　御口上計　　同　同
倫宮樣より
伏見宮樣へ　一種御樽代二百疋　御目錄　　同　同
入道宮樣
入道宮樣御息所樣へ　一種　御樽代　三百疋つゝ　　同　同
伏見樣御息所樣へ　一種　御樽代　二百疋　　同　同
岡宮樣へ　御口上計　　同　同
右之通被進
一御當日御對面所御二之間御床飾
三つ御盃　木地御三方
御瓶子一對　同　本文瓶子御銚子御提子へ御酒入御飾付
男蝶　長柄御銚子　　女蝶　御加へ
數の御のし　木地御三方
白子餅　十六　白木御三方ニ紙敷改（一本處 敷）南天ゆつり葉

内（八つ鳥子色 八つ丸白）（長さ六寸 大さ五寸）上に（包熨斗 包昆布）

天兒御伽御鏡餅　天兒御伽は御自身樣之計り

右早朝男子向より取計毛氈は奥の分用ゆ

一天兒這子衣服之事

紅梅練絹　裏白ねり　紐同斷　但袷喜立

御　紋　五つ所　金箔にても糸にても宜し

模　樣　鶴龜松竹（一本橘 梅）或は小寶盡しにても宜し 但素縫にても染もようにてもよろし

下重ね　白ねり絹　但夏冬之差別なく御用に相成候て宜し

御婚禮御當日御飾付御逢盃之節御色直し之節も右にて宜し

一御誕生日其外常々にても御用相成候て御差支之品無之事

一御表樣之分天兒這子御揃ひ御座候得は　姬君樣之方も今一つ御出來に相成候て御二つ御揃ひに相成候得は別て宜く御座候事

右は諸禮家よりの書付と見ゆる

然るに左之如く丸や正兵衞へ注文五月朔日迄に出來と見へ其記あり

天兒着用帷子　一重

但地白生絹葵御紋金糸にて五所腰模樣七寶橘素縫す

右　（下重白生絹袗重 紅羽二重紐地仕立上け）　一式

調書之内に左之記あり

明和八卯年御注文天兒御召

一御地嘉珍（幾し）[一本ナシ]葵御紋蓬萊金箔摺總体寶盡し若松摺箔

一御下重白羽二重

一御地勝色晒　葵御紋蓬萊總躰寶盡し若松白上り

一御下重白晒

右之通御座候以上　丸屋

嘉永二酉年七月十六日小笠原平兵衛へ天兒着服之儀問合答に

白綾に鶴龜松竹寶盡しを金銀之箔にて付夏は生絹に裏打たるを用申候色直には紅を用申候

尚又左之如く問合す

御書面天兒着服之儀菊千代殿當八月上旬之内被致宮參候に付右之節天兒之着服夏衣中に付本式に候はゝ如何之品を相用宜候哉地合色目等迄致承知度略し候着服之儀は存寄次第之事ニ御座候得は地合晒色は花色鶴龜松竹寶盡し素縫歟又は染出しにても好次第之帷子に白晒之重を用ひ候ても宜敷哉御問合申候事　但菊千代殿年齢は四歲に相成候

右答に

夏は練不申絹にて本文之模樣を箔置にても素縫にても染出しにても本法に欠候儀は無之被仰越候晒地に花色へ素縫染出しも不苦夏にても生絹相用候儀家書に相見申候重は生絹に候得は其品

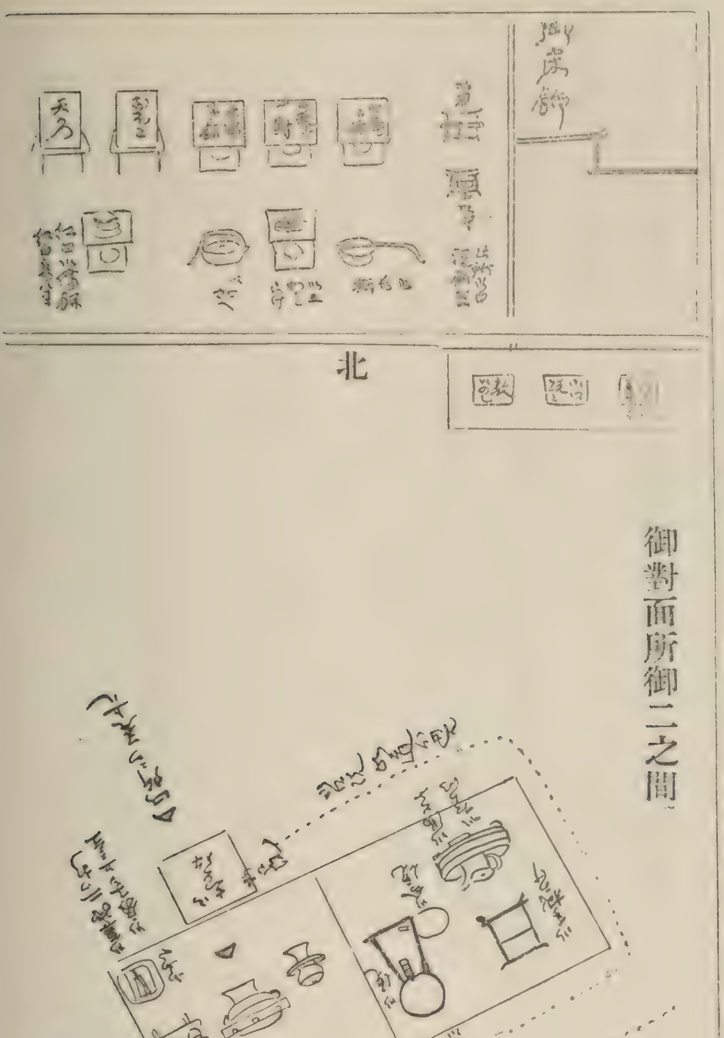
晒に候得は其品同様之品を相用候

依て左之通茶屋宗味へ注文同年八月五日迄に出來

一天兒着用帷子　一重　但地白生絹　橘素縫　葵御紋金糸にて五つ所　腰模様七寶

下重　白生絹　袷重　紅羽二重　紐地仕立上け　一式

代二百三十三匁



「御湯さふ御水さし御ぬり盥御手拭かけ等常御用之筋用ひ」

大管禮之進より提出之書付を少しく御斟酌ありしさ察せらる

御口〔税〕御三方　「以下諸禮家大菅禮之進より差出したる書付」

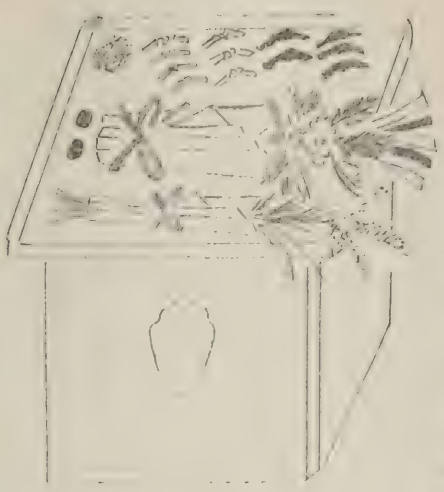
花包稻穗包　花包　若松　紅白椿

南天　ゆつり葉

藪柑子　三種

糸花

右七種一本に仕立
のし昆布さし包む



むすひ昆布
むすひのし
米　一つかみ
さゝれ石二つ

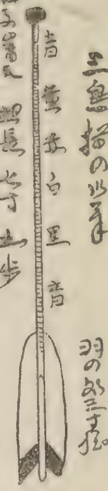


三鳥揃の御筆包



三鳥揃の御筆包
此箱の内に有之
御祝之節は取出し　御飾付

三鳥揃の御筆

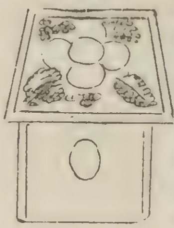


鶴の元白　雉子　山鳥　にて作る
右出來之上金紙紅紙包金水引結ふ
白木臺にすへ御祝之節用之

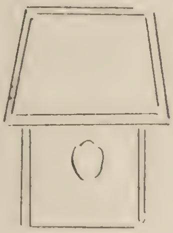
御床飾

五寸位の紅白丸餅
八つつゝ數十六
改敷南天讓葉の類

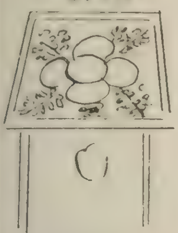
上にのし包
五色餅



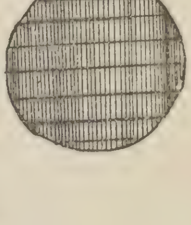
男蝶
女蝶
御瓶子一對
御飾付



上にのし包
五色餅

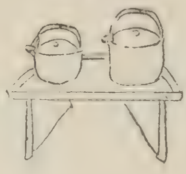


秡簀（ぬきす）
竹を細く黒塗に
して赤き大白の
糸にてあみ御耳
盥の中ほとに入
るゝ

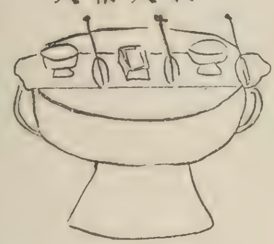


此外御湯桶御水差
御塗盥御手拭等

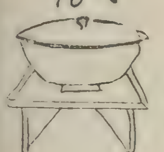
銀めつき
大千鳥
同
小千鳥



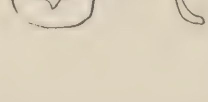
御耳盥
渡しかれ
御かれ入
御ふし箱
御かれ入



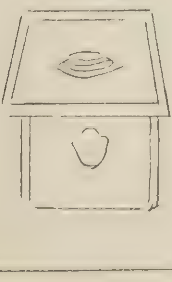
御うかい
茶わん



御長柄
御飾付



御三土器



御加へ
御飾付



一殿中衣服

御鐵漿初御整被遊候に付爲御歡　中納言様へ御年寄初例奥へ罷出候輩於御次御小姓頭取へ謁す

揃四時衣服服紗小袖半袴

御年寄初奥向御廣敷熨斗目半袴

右御祝に付御年寄初へ御酒可被下之處御省略中に付被下無之女中へも被下無之　中納言様より被進物之御使へも御酒被下無之

一御年寄初より　倫宮様へ差上物可仕之處御省略中に付御用捨

一御祝之次第

巳之刻下り御祝之間玉女之方へ向はせられ御着座

此節御扇子御疊紙淺ちりへすへ御座の御右之方へ置之御守刀御後へ置く但御万寶掛へ掛置く

御口祝之臺（花包稻穗之臺）を老女御前へすへ御口祝被爲在

御筆硯之紐をさき御筆包より　御主様御右を先き御左中さ出す

御かれを大千鳥より小千鳥へうつし御しようつへ御右より御左へつき御かれを御筆へしめし御右より三御左三御ふし三度差上

御飾付之御耳盥へ御向ひ被遊御飾り付之右之筆を被爲執三度御かねを御付被遊候眞似を遊し左之筆を執せられ左のかねを三度付させられ候眞似を被遊候て中之御飾付之筆にてふしを三度御附被遊候眞似を被遊相濟御口すき御うかい上御口紙上御ぬくひ被遊（御廣ふたを持御口紙を御中﨟下る）わさと花こんふにても被召上候事（數の御のし上御祝儀中上る）

右被爲濟候て御上段へ被爲入　中納言樣より千鯛御袴被進之御使御請被遊御化粧之間へ被爲入御鋏襍召せられ御色直し地赤被進之御袴被爲召

一御座之間にて御雜煮　三獻　三（十〔汁カ〕）七菜御ふくさ御膳上る

一に（御祝御膳二汁七菜梨子地御懸盤）さあり

御雜煮　御松建　（〔一本ナシ〕剝[illegible]蚫）吹ちらし　御前　御盃土器　御（吹〔吸カ〕）物

吹ちらし御松たて　御盃上り　御三獻　御雜煮上り　御三獻　御吸物上り　御三獻

下け候節御跡より上り候御品より下り候事　御盃事は不被爲在

一御式拜見さして御錠口格迄御席へ罷出る身扱五節句地白綸子あい白白地帶　表使格迄御右筆已下は何にても

一御祝儀被下

御縫入御召　倫宮樣御用人　岡　權右／石川　馬／渡邊儀平次

御ぬひなし同　同　原　勘兵衛／和田金之丞

御紋付御帷子　掛り御いし　金谷玄澤／黑川瑞仙

金一兩つゝ　御廣敷御用達　四　人

一綾小路はしめ女中御目見以上迄御品々被下

銀三拾枚　　兩御三之間以下　總女中へ

金二千疋　　　　　　　　　　御比丘尼へ

金七百疋　　　　　　　　　　同

一左京大夫様より之御使女使へも御目錄被下

文久二戌年十二月廿一日

倫宮様御婚禮

一御召服

御大禮に付御服飾御新調固より枚擧に不堪しならんも御禮式服之他は年々の御新調無數故に此同は御禮式筋のみ御新調と見へ老女方に左之筆記存せりいつれも地合紋柄寸尺逐一京都へ注文の上更に織立を命せられしといふ

書中地上りといふは新規織立にあらすして地場に織上りある品を稱するよし

一御召　白唐綾　紋から幸菱　一反　裏地白二羽重　地上り　一疋

一御召　紅唐綾　同斷　一反　裏地紅羽二重　地上り　一（一本反疋）

一御召　白大紋　紋から竹　一反　裏地白羽二重　地上り　一（一本反疋）

一御召　紅大紋　紋から梅　一反　裏地紅　地上り　一（一本反疋）

一御　帯　白唐綾 紅白　二筋　一御かつき地　白練　一疋
一御式 純子御夜具地　地紺紋から七寶に橘 紅萌黄白糸にて織立　二反　裏地紅羽二重　二疋
一御式 御續ふとん地　純子緞地々紺七寶に橘 紅萌黄白糸にて織立　二通　此内にて四尺六寸は御枕地に成る
鏡地紅大紋綸子裏紅羽二重　一疋
一御中夜具地　空色ちりめん模樣龜甲に梅　裏紅羽二重
一同斷 小納戸縮めん 花色純子　一 わた一〆二百目 一 同 一〆三百目とあり　（裏白羽二重）〔一本ナシ〕　二疋
一御續ふとん地　花色ちりめん 御下ふさん紅　地上り　二
一夏御續ふとん　空色絹ちゝみ
一御腰卷地　地合極之通龜甲金箔半分紅糸半分　梅椿縫ひ紅白萌黄ひわ萌黄金糸にて見計よく
一地黒綸子　模樣車花盡し　一反　裏　紅　一疋　白羽二重　二疋
一御　帯　地　鯉瀧 牡丹　二筋
一白唐綾　御拔褥　紋から幸菱　二
一紅唐綾　同斷　同斷　二
一御床たゝみ　二
一御小ふくさ　緋ちりめんもやう 紫（ちりめんもやう）　二
「京都へ御（願之）〔一本積ヲ之〕上越前介にて出來代金總計銀四貫五百拾五匁」
一御小打着　萌黄共色總竹竪わく 浮紋所々程よく赤にて梅の丸縫取　一具　裏紫松重ね羽二重

一御單　濃小葵地紋尤共色　一具　一御袴大腰　濃淸好　一具
一紅梅　共色梅の折枝浮紋　一反　裏紫羽二重　一反　白ねりきぬ　一反
一御附帶　濃ねり絹所々雲竪わくに白くひ鳥尤金箔置　一筋
御式服關東御風にて御介取被爲召御打着は不被爲召候得共追て被進たるよしなり

一御道具向

御婚禮御道具之事左記御廣敷御用人より政府へ提出書に據れは可成御有物を御用ひ不得止分のみ新調たるを知るへし　別帳とは蓋し末に揭くる品書ならんか又御待受とは　倫宮樣京都より御入輿之節御待受之事をいふなり

此度御婚禮御鐵漿初御用御式正御召物類初御側御道具幷御次通り之品々別帳之通取調申出候事候右は無御據御不足之御品々御出來に相成候筈候得共御時節柄の御儀に付可相成丈は御有物御繕ひに致し御用立可申筈之所大奥にも精々行屆取調へ候事に御座候乍去地場御入用之御品々御待受にて多分御出來には相成候得共全御差向御用品丈手を詰御出來に相成御婚禮之節右御不足分御出來之積りに追送取計申置候旨此度御式正之外御品も御新調に相成候樣との申合に御座候就ては御右筆間取扱筋宜御品々大樣御有物御用に致し候得共御書御外箱類皮文箱幷御縫服紗蒔繪御重箱御長持等數無御座候ては御內々　御獻上物且被進等之節は所々へ御用ひに相成候節御差支に付無據御品丈此節御新調に取計候筈に御座候先大樣之處見積り左之通りに御入用御座候哉と存候以上

閏八月

大様積り
一金千五百兩程
八百五拾兩程
三百兩程
百八拾兩程
百七拾兩程
右之通り

倫宮様御用人

御式正御召類
御綿兩御用
御褥御縫服紗
御油断（本ノマヽ）類包之共
銀御小道具類
小買物類
金物類御繕ひ代共
表具師
指物師
塗師御繕ひ代共
大奥御調物
御用宛

文化十三子年

式部卿様　豊姫様　御婚禮之節御廣敷にて取扱仕候御式正御召類御側御道具類其外總御入用見積り左之通り申上候事に御座候

御入用見積り

凡金四千六百兩程

一御婚禮御用御道具類御有物大奥にて篤と取調へ見候處左之御品々此度御用立可申旨老女申聞候右は御讓之御品にて何れも御品柄宜く當時申付候ても出來兼可申御品々にて御座候夫に付一と通之御品柄にて此節御新調に被成候得は如何程之御入用にて相調可申哉と取調させ試候處先大樣之御直段左之通り申出候事

閏八月　　倫宮様御用人

一御厨棚　御小道具一通り

一御黒棚　御小道具一通り

一御書棚　御小道具一通り

小以〆銀六十貫九百五拾匁

一御仕廻道具御一通り

御うかい道具共　御かもし箱　御帯箱

小以〆銀二拾一貫百五拾匁

一金地極彩色御屏風初

御貝桶はしめ御祝儀筋　御右筆間筋御書箱諸色

小以〆銀七拾貫四百拾匁

總〆銀百五拾二貫百拾匁

此金二千五百三拾五兩

銀拾二匁程

御道具品書

一御仕舞道具　梨子地御紋竹菱模様　一通

御湯當御（興）一木製　一箱　御耳たらい　一

御嗽器　一　御輪臺　一

御渡しかね箱　御渡しかれ 御かれつき木　銀木二 一　御ふし箱　一

御手拭懸　はさみ共　一箱　御鏡建　御鏡二面　一箱

御椸臺

御油入　一　御ひん水入　一

御白粉とき　一　御水入　二

御こね入　一　御眉道具　二通

御まゆはき　一對
御小女郎　二對
御櫛拂　一
御楊枝箱　一
御毛ぬき　一
御紅筆　二對
御歯黒箱
御漿子　銀一
御ふし箱　大中小三
御旅櫛箱
御油入　一
御ひん水入　一
御まゆはき　一對
御四つくし　一通
御はさみ　一
御湯當盥　一箱
御耳たらい御嗽盃

御かね筆　一對
御四つ櫛　一通
御髮なて　一
御もみたとふ　二
御毛たれ箱　一
御毛垂　二
御漿鐵次　銀一
御髮なて　二
御白粉とき　一
御楊枝箱　一
御紅筆　一對
御櫛拂　一
御鏡御鏡建共
御手拭懸　はさみ共

一御廣ふた　中小
右不殘御有物
一御衣桁　梨子地御紋唐草　一
一御たはこ盆
右四品御有物
一御犬張子　一對
一牡丹に蝶御蒔繪御烟草盆　一
一黑花塗合朱御紋付御長持　二棹
一春慶無地御長持　一棹
一春慶御紋付　同　二棹
銀御藥茶碗御臺共　御有合にて
御藥はかり　同　一
御藥溜　同　一
一金御屛風　若菜繪合　大　一双御箱入
右御有合物
一御扇子掛　黑塗竹蒔繪　若山廻り之にて上る
一御重　梨子地扇蒔繪　一組

一御貝桶　一對
一御刀掛　梨子地御紋
一御鼻紙臺
一牡丹に蝶御蒔繪御鼻紙臺御簾付　一
一黑塗御紋付御長持御式正入　金御紋二棹
一春慶御紋付御長持　御臺子　一棹
一白木　同斷　一棹
一御藥簞笥　黑塗蒔繪　一
御藥鍋　新規御出來筋　一
御ちろり　御はかま付　同
一同御腰屛風　緞子張　一双同
一御置物　みさり石　同斷
一御多葉粉盆付五つ道具

御掛きせる　二對　銀御胴〆
銀御七つ道具　同御文鎮
同御香箱　同御懐中かんさし
へつかう御髪さし
御平日
ひらみ四角御かうかい
一御仕舞戸棚　寸法くしら
横はゝ四尺　奥行一尺七寸　高さ三尺五寸　中棚下より一尺六寸五分　中あき四寸
一春慶御提帯入御ひつ
本家御膳所
小ほん　二拾枚　一つ物（大ふり）三拾枚
鱠さら　五拾枚　中さら　五拾枚
菓子盆　三拾枚　小さら　五拾枚
猪口　三拾　さかつき　三十
黑わん　五拾　すきや膳　廿人前
西御殿御膳筋
黑塗御重　梅立木蒔繪替ふた付（八寸五重物）　一組

同七寸　七寶に花ひし　五重物　一組
同四寸　同　同斷
御硯ふた　長手　一面
三升德利　外箱黑ぬり　二本
唐草壺　外箱共　一つ
春慶御建　一本
火打箱　火打かれ石共　一つ
まな板　一つ
手拭かけ　二つ
わさひおろし　小一つ

西御殿次筋

木地八寸重替ふた付　五重物　一組
同　五寸　同　一組
三升德利　外箱共　二本
一升德利　同　一本
たいこ鉢　黑塗杓子共　二つ
大　鉢　二枚

同六寸　松竹梅　同　一組
同四寸五分　桃　同　同斷
御はいてう臺　長手　一つ
二升德利　外箱共　一本
御淺物わん　二つ
御出方春慶御紋御長(持)一本物　但絹ゆたん共　大小二棹
流し　小一つ
銘酒德利　二本入　一つ
御椀洗(用)一本桶　臺共　一つ
御長持　白木御紋棒共　二棹
同　七寸　五重物　一組
同　六寸　一組
二升德利　外箱共　一本
切ため　一組
二升赤鉢　二つ
中　鉢　中大ふり　三枚

ぬり間鍋　三つ　　白長二升徳利　外箱共　四本
一升徳利　外箱共　四本　　深鉢　大　二つ
五升鍋　二つ　　三升鍋　二つ
七升（鍋）一本共　二つ　　大ほん　三拾枚
小ほん　五拾枚　　すきや膳　三拾枚
菓子盆　三拾枚　　黒わん　五拾
鱠さら　五拾枚　　中さら　五拾枚
小さら　五拾枚　　猪口　五拾
一つ物　大形　五拾　　さかつき　三拾
白木長持　此内一棹御有物　二棹　　燭臺　朝顔眞切眞鍮共　大中小　五本
障子屏風　一双　　唐紙屏風　一双
毛氈　五枚　　御卓下御花入　一
小御書臺　一つ　　但し御本の通にて内のり高さ全五寸金粉にて梅奥逸懸無し

御右筆間

御書箱　梨子地御紋御模様　御有物　五箱　　御書箱　梨子地御紋計　同　二箱
奉文箱　梨子地黒塗共御模様　内十箱御有物　拾二箱　　御長文箱　梨子地黒塗共御模様　内十箱御有物　拾一箱
竪御目録箱　同　御有物　五箱　　横御目録箱　同　同　三箱

横御目錄箱　御紋計　同　一箱
縫入御ふくさ御書本文共此内三つ御有物十二
縫入御かけふくさ　御地御有物　二つ
御重ふくさ紫羽二重　四布　二つ
御書御文箱　紅紐計　一
御ふんこ　七つ
皮唐草横目錄箱　二つ
緋絹御ふくさ　三布二つ　二布二つ　二布半三つ
上使之節御用
御蒔繪御廣ふた　御有物　五枚組　一箱

御婚禮之節御餝書

御座之間御床

一御掛物　中　壽老人（一本應）　左右林和清（齊）放　探幽筆　三幅對

同　御棚

一御沉箱　桐蒔繪　盆

御休息御床

一御掛物　菊　牡丹　探幽筆　二幅對

同　御棚

縫入御ふくさ此内四通御有物　大小　七通
中色御紋御ふくさ　御有物　三つ
淺黄御ふくさ　二布二つ　一布半二つ　一布三つ
御ふくさ裏計　大小
毛　氈　五枚
皮唐草文箱　二つ
風　呂　敷　四布一　二布半三つ　三布三つ
春慶御紋御長持　二棹
御蒔繪御廣蓋　御有物　一組

一御香爐　南京三足　一御香臺　和歌浦の松

一御食籠　朱曲四重　盆

（一本ナシ）
（一御料紙箱　御硯箱　若松蒔繪）

一御歌書　九十賀　寄合書　一冊

文　鎮

一枝珊瑚樹　臺

御使座敷御床

一御掛物　開闢嶽上月景　養川筆一幅　　一御花入　唐金　薄板

同御棚

一御硯箱　鎮刀木

料　紙

以上

一陰陽御弓

御蟇目御弓共御床餝に相成御休息へ立掛け御餝　御二所様之御守に相成候事之旨大（菅）[一本菅]禮之進

中出る御袋は御廣敷にて出來

一鴛鴦（えんおう）の衾（ふすま）御守護

白木白繪箱さんふた入　長一尺二寸　横一尺三寸　高さ一寸五分　紐白わた打　御守護は大高紙に包

一御鈴守

御愛敬の御祈禱御用人方にて取扱吉川へ被　仰付大（菅）[一本ナシ]禮之進へも被　仰付御守二つ御供物閏

八月十九日御用人より差出女中拜見

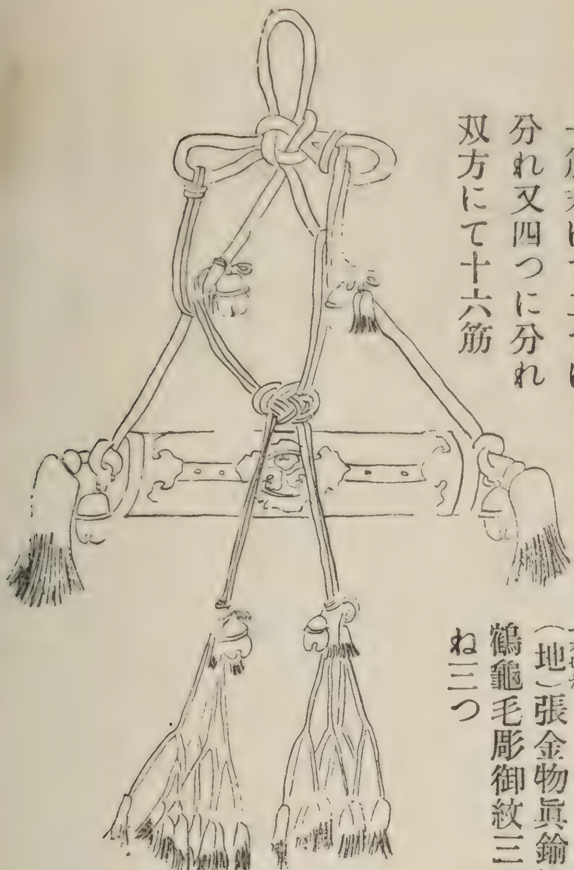
御守袋　白綾（巾一尺／竪八寸）　裏　紅梅（ね）（一本ナシ）寸法同斷

御守中へ入候筒切　白綾（八寸四方）　裏紅梅　同斷

御　箱　白木白繪御紋紺青　長一尺二寸　横三寸　高三寸　ふた合口　白綿打紐

御鈴守

紐紅唐糸八つ折
襷紐紅唐糸二筋つゝ
一筋末にて二つに
分れ又四つに分れ
双方にて十六筋



鈴眞鍮

御守入赤地金襴寶盡し
（地）（一本切れ）張金物眞鍮松竹梅
鶴龜毛彫御紋三所筋か
ね三つ

御貝桶一對（男貝／女貝）



臺わく

紐紅（男貝は男蜻蛉結ひ／女貝は女蜻蛉結ひ）

（男貝には金箔彩色繪／女貝には銀箔同斷）何れも公家繪

御貝桶覆ひ
裏赤



龜甲に笹模様赤白黒
黄崩黄にて五違ひに織出し
御紋白四つ天一つ

貝盤



渡し六寸計り
はんや入
地猩々緋
萠黄(一本無)縁付

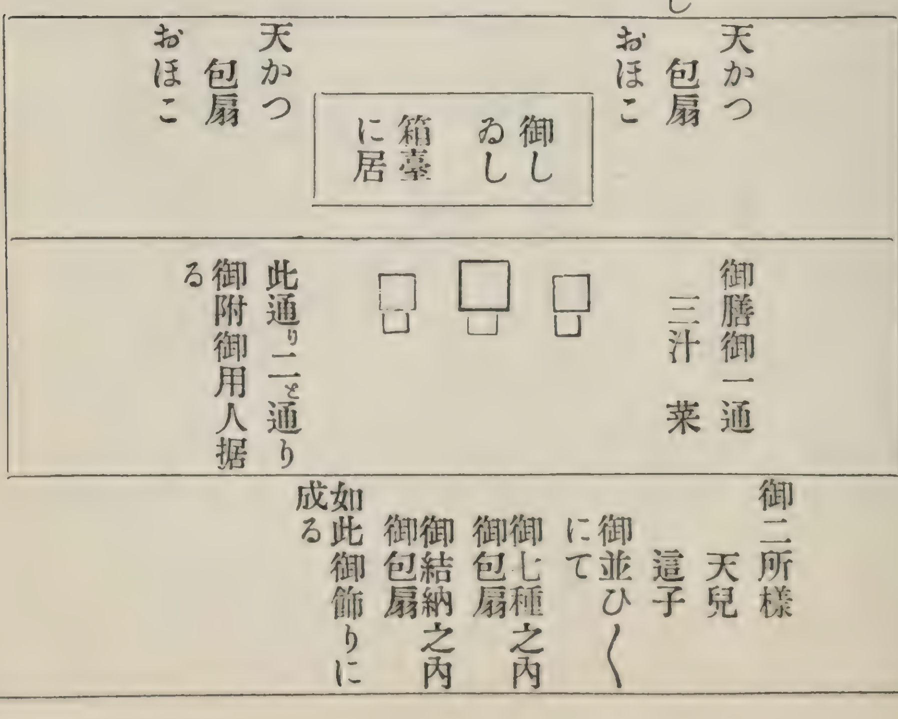
大貝盤　大さ渡し四尺計丸
地猩々緋さゝへり同斷ハンヤホス入

御納戸つゝき
御八疊御床へ

宮様之間
御箱より出し
毛せん敷

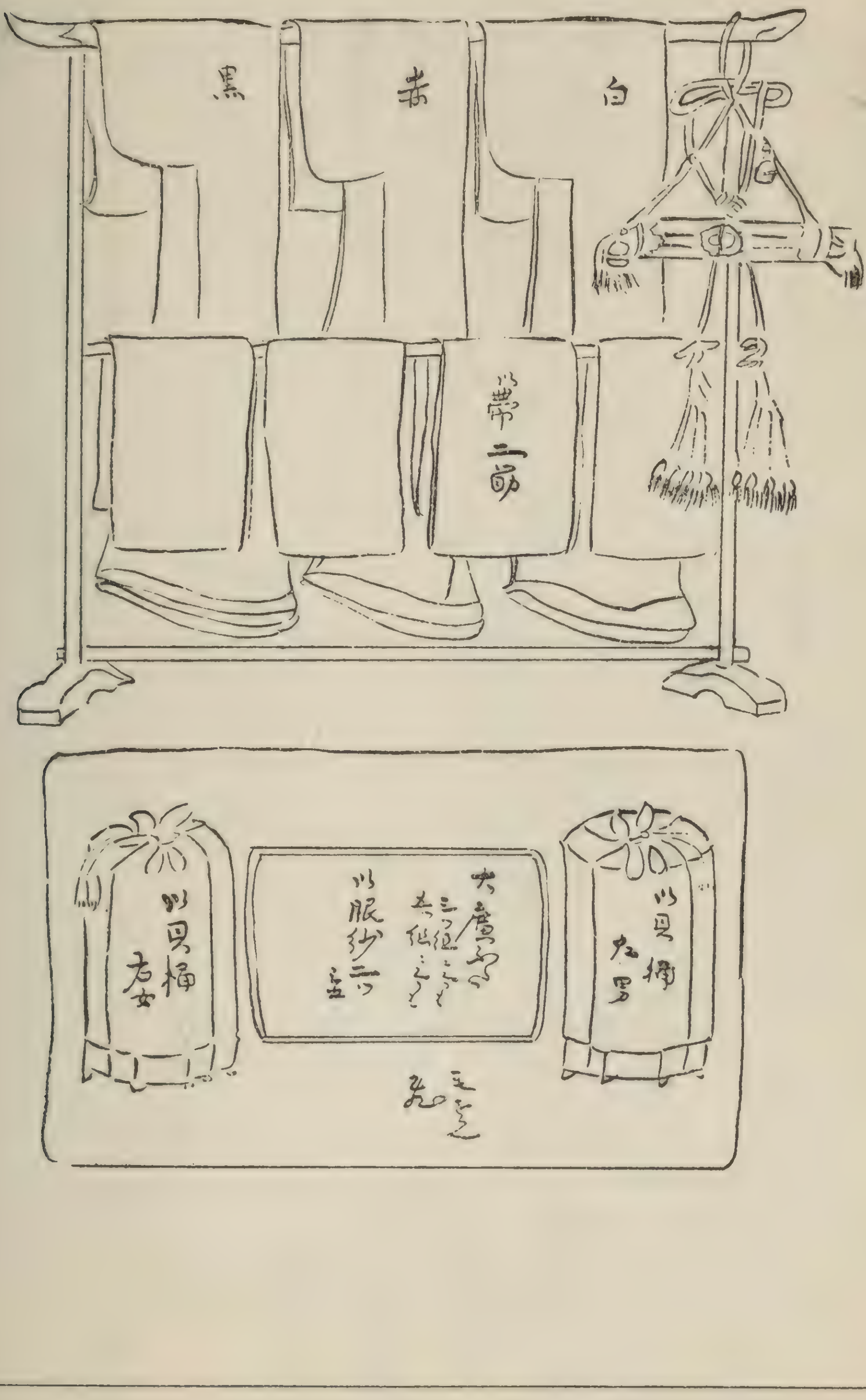
中納言様之間

右同斷



御二所様
天兒
這子
御並ひ〳〵にて
御七種之内
御包扇
御結納之内
御包扇
如此御飾りに成る

御納戸へ

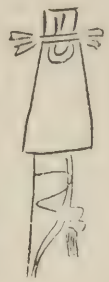


御續ふとん二敷
御唐織大御夜具御介まき
御二所樣御分中にて御袖
を組合せ上に御長枕二つ
を横に置上にゑんおふの
ふすま御守を置く
御枕長曲尺二尺八寸
高八寸
括りひた十二つゝ
房二寸八分
御袖は兩方へたらす

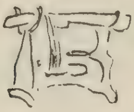


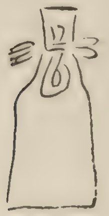
圖には
御長持一
つなれ共
御夜多く
候ゆへ二
つ居へ候
事

御化粧之間

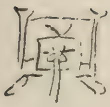


御守刀袋入

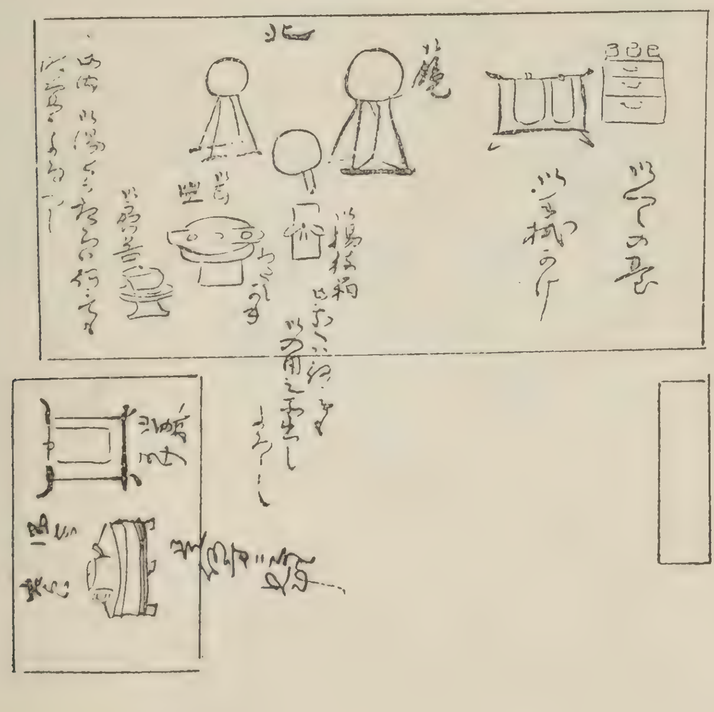


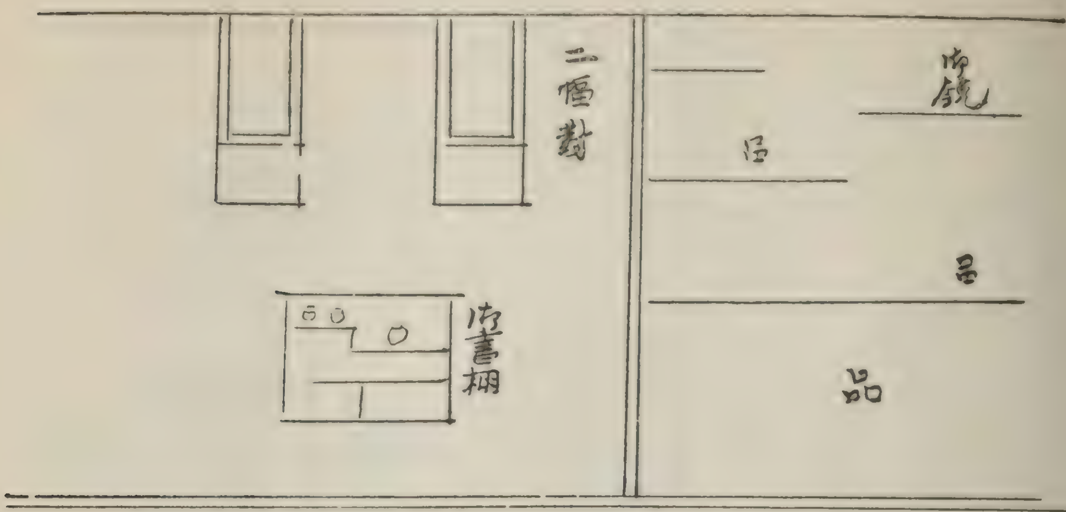


御萬寶



同御入側

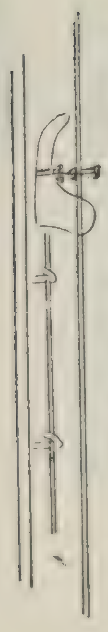


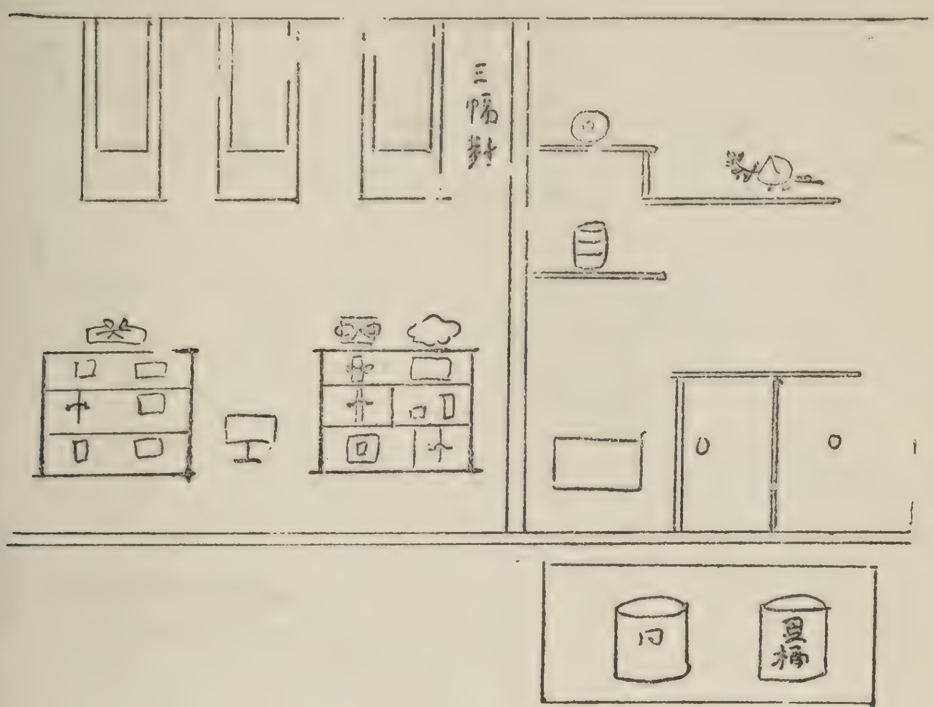




御休息

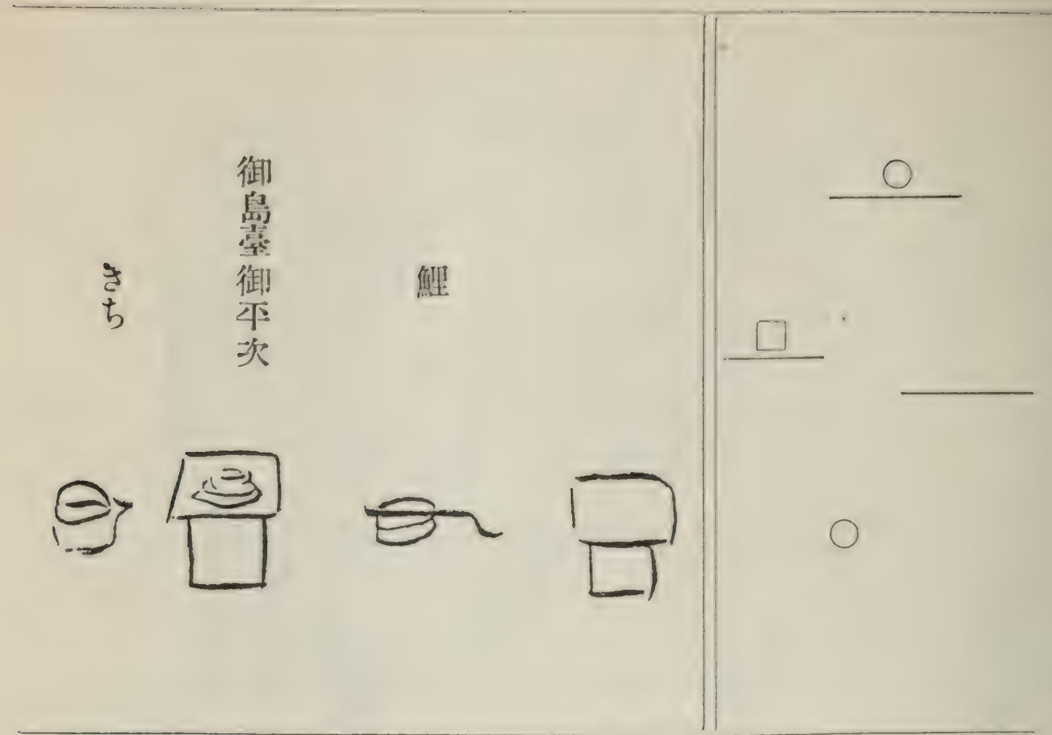
御長押へ御長刀を北向に掛け候事　古實





當朝御飾かへ
(一本にて畫)此處へ

御對面所御二之間
當朝御棚むき少々
御かさりかへに相成



御當日

御上段

白繪御腰屏風

御色直し粉しき

御とう明白繪

御燭臺

御床へ二對夜に入上る

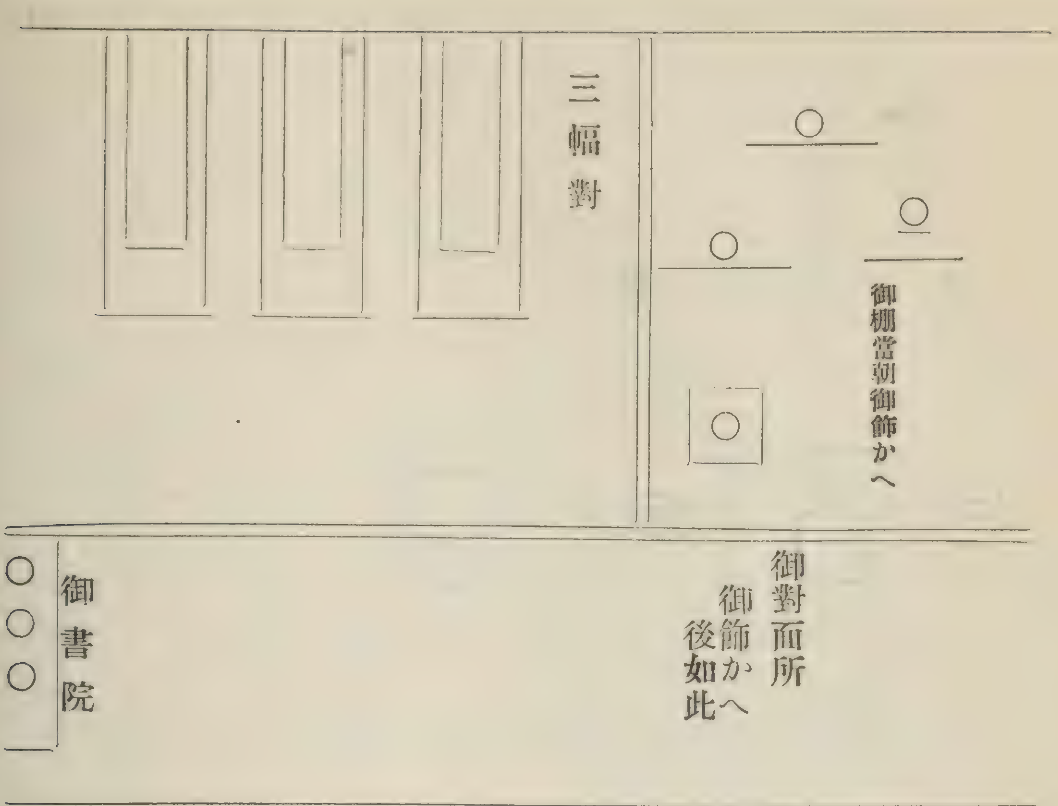
二本は御下段御水引あれは

御床へかゝる

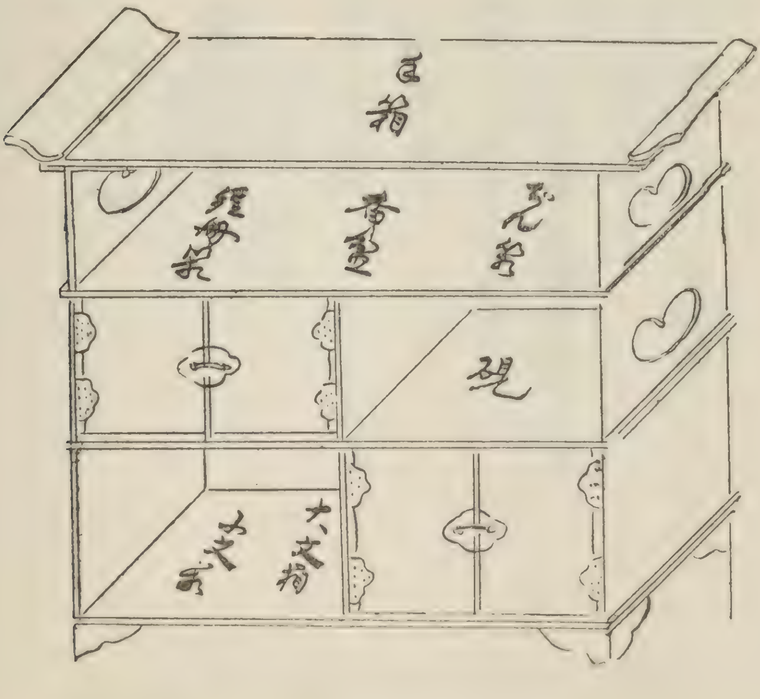
此回は御いそき御略してなし

御書院

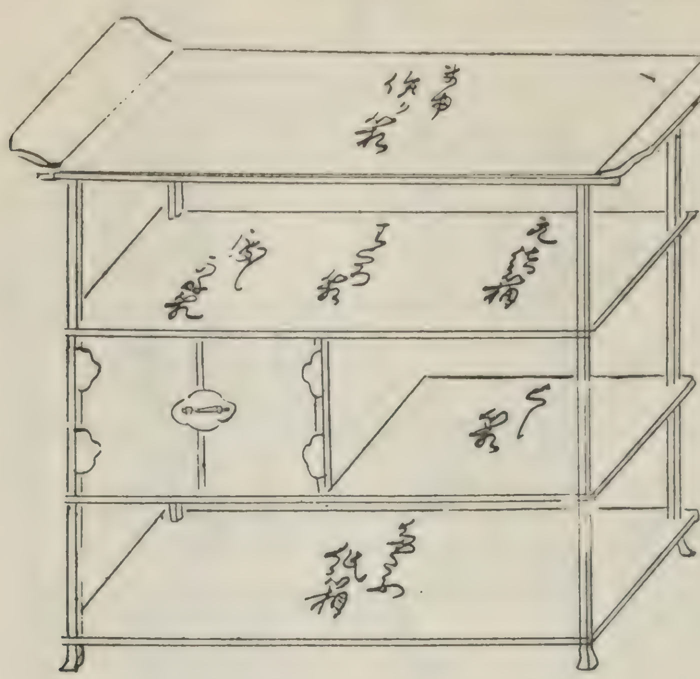
○○○



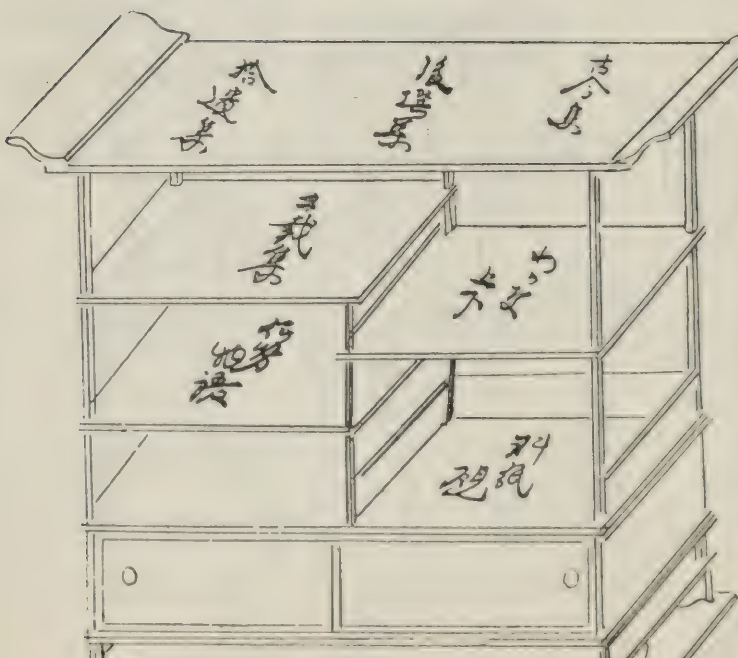
御厨子



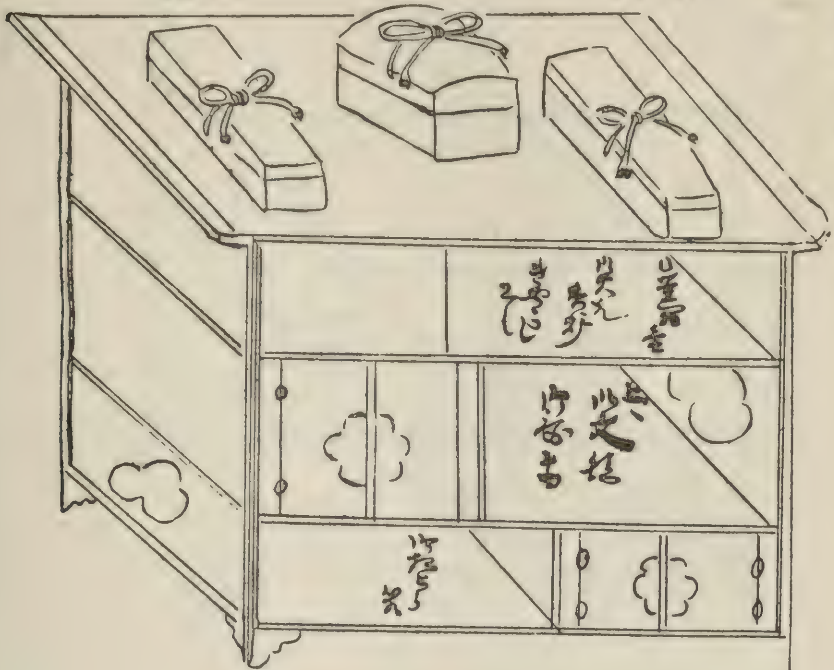
黒棚



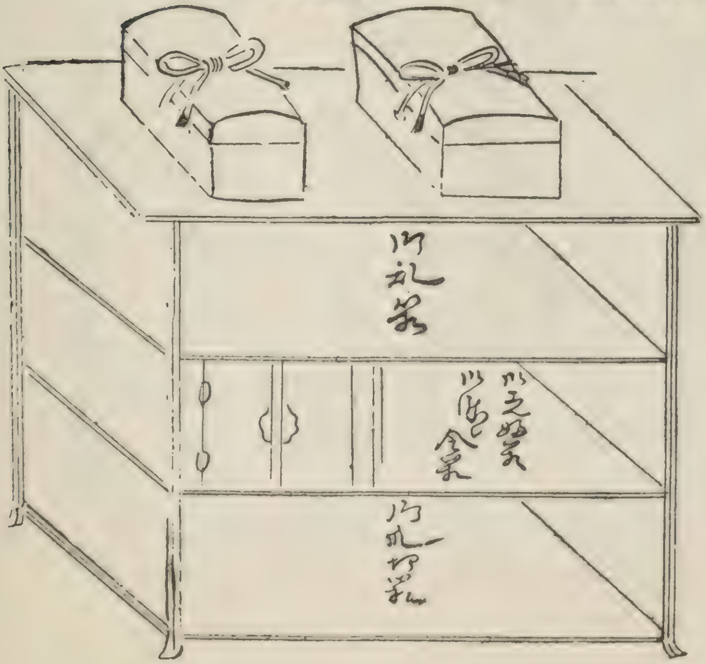
書棚



此御棚向候て西の方



御黒棚



十一月中

一御婚禮に付女中一同へ御式正呉服幷支度金被下

御本家

白綾幸菱　一反つゝ　白羽二重裏わた共
紅梅織　一反つゝ　紅羽二重わた共
紅白綾幸菱帯　一筋つゝ
地白綸子縫入　紅裏わた共
中色總縫入　同　同斷
同もやう　同斷

上﨟　老女　若年寄
御中ろう　御錠口
御前詰　表使迄　二拾五人
御右筆初　以上之分　十一人
御三之間　御末頭
使番頭迄　十二人
御中居　使番　六人

西御殿

白綾幸菱　一反つゝ　裏地白羽二重わた共
紅梅織　一反つゝ　裏地紅羽二重わた共
紅白綾幸菱帯　一筋つゝ
地白綸子縫入　裏綿共
中色總縫入　同斷
同もやう　同斷

上﨟　老中　中年寄
御中老　御小姓
表使迄　十二人
御右筆初　以上之分　七人
御三之間　御末頭迄　五人
御中居　使番　三人

御本家

金拾兩つゝ　上﨟一人　老女三人

金七兩つゝ　若年寄四人　御中﨟壹人　御錠口格共八人

金五兩　御前詰二人　表使格共五人

金四兩つゝ　御次頭壹人　御右筆一人

金三兩つゝ　御次四人　呉服之間三人

金貳兩つゝ　呉服之間格　使番頭二人　御三之間格共　御末頭二人

金一兩つゝ　御中居　使番介共六人

火之番　御半下十三人

束金四兩　兩役所　呉服之間子供八人　茶所

西御殿

金拾兩つゝ　上﨟一人　老女二人

金七兩つゝ　中年寄二人　御中﨟頭一人　御中﨟三人　御小姓二人　表使　一人

金五兩　御右筆　一人

金四兩つゝ　御次四人　呉服之間二人

金三兩つゝ　御三之間四人　御末頭一人

金貳兩つゝ　御中居　使番介共三人

金一兩つゝ　　御半下　四人

金貳兩貳分　　兩役所呉服之間　茶所子供五人

一前記女中一同へ被下之御式正呉服反數代價左之如くにて六月呉服師へ注文申付たるなり

白綾幸菱　三拾六反くしら三丈二尺　代拾壹貫五百貳拾目　壹反に付　三百二十目

白羽二重裏地　三拾六反くしら三丈四尺五寸　代四貫二百四十八目八分　一反に付九十五匁割合百十七匁八分

元中綿　三貫六百目　代一貫三百六十八匁　但百目に付三拾八匁

紅梅織　三拾六反くしら三丈二尺　代五貫九百四拾目　一反に付百六十五匁

紅羽二重裏地　三拾六反くしら三丈四尺五寸　代四貫四百六拾目四分　一反に付百五匁割合百卅三匁九分

元中綿　三貫六百目　代一貫三百六拾八匁　百目に付三拾八匁

白綾幸菱　一反くしら三丈七尺　代三百七拾目

白羽二重裏地　一反くしら三丈九尺五寸　代百三拾四匁六分

元中綿　百目　代三拾八匁

紅梅織　一反くしら三丈七尺　代百九拾目九分

紅羽二重裏地　一反　同　三丈九尺五寸　代百四拾四匁九分

元中綿　百目　代三拾八匁

白綾帯　三拾七筋　代三貫八百八拾五匁　一筋に付百五匁

紅綾帯　三拾七筋　代五貫六百四拾二匁五分　一筋に付百五拾二匁五分

地白綸子辻　拾八反　代六貫九百三拾目　一反に付三百八十五匁

紅羽二重裏地　十八反くしら三丈四尺五寸　代二貫二百三拾目五分　一反に付百五匁割合百廿三匁九分

元中綿　一貫八百目　代六百八拾四匁　百目に付三拾八匁

中色縮緬總縫入　拾七反　代六貫三百三拾二匁五分　一反に付三百七拾二匁五分

紅羽二重裏地　拾七反くしら三丈四尺五寸　代二貫百六匁三分　一反に付百五匁割合百二拾三匁九分

元中綿　一貫七百目　代六百四十六匁　百目に付三拾八匁

中色縮緬模様縫なし　九反　代二貫三拾七匁五分　一反に付二百三拾七匁五分

紅羽二重裏地　九反くしら三丈四尺五寸　代一貫百拾五匁一分　一反に付百五匁割合百廿三匁九分

元中綿　九百目　代三百四拾二匁　百目に付三拾八匁

〆六拾一貫八百六拾五匁七分　此金千三拾一兩と五匁七分

一倫宮様御唱へ之事

十二月十八日政府より左之通布達

倫宮様御事御婚姻御式御整被遊候御當日より御手前にては　御簾中様と可奉稱事　公邊他向へは　御名を認御手前計に可被相心得事

一十二月廿日御呉服上け御裁初御祝儀有之

今日吉辰に付御呉服上け初御裁初御祝儀取計之

御反物　白木御臺　御蚊帳　白木御臺

右御廣敷御用人御目錄を以大奥御廣座敷へ廻之　御用達手傳して右　末席へ罷出候事

一御目錄小奉書紙竪に認　但裏付

一御裁初に付左之通吳服之間へ御用達廻之

御毛せん之上へ餝之

神　酒　一對　塗御三方　塗瓶子同蝶花形

改敷南天　菱附御備餅　一餅　赤白同紙敷

白米一升（同斷）釣掛桝に入　鰹節二本添　紙包水引にて結

かや　勝栗　柿二串　○薹十二筋　○熨斗十二筋　○昆布　十二筋　鯣　五枚

○根松　五本　山橘　五本　是は藪かうしにて　數の子

右十品塗（一本御）（飾）三方へ紙敷載之　○印はのし包にて

（一本挾）（狹）肴

數の子　結び昆布　塗御三方紙布　巻　鯣　御銚子

包生飾　御　提　同　內曇土器三つ組　塗御三方

一右に付御用掛りへ左之通御酒御肴被下之

御酒　御吸物　御肴二種　綾小路　梅尾　久野

御酒　御吸物　御肴一種　槇野　増尾　駒野

瀧尾　濱井　いまたち

御末頭みと 同格つて 使番頭とま 同格きま

御酒 御吸物 御肴二種　能勢次部藏　內藤右門

御酒 御吸物 御肴一種　高嶋七左衞門　上田庫助

御酒 御肴一種　御用部屋　陸尺十一人

右之通被下之

一跡々大奥御廣敷向御用掛へ御かね被下候得共御省略中に付被下無之

一衣　服

御用掛無地のしめ返し小紋にて無之半袴　但御用掛之外平服

一跡々御用達候町人共より御のし一臺つゝ差上御酒御肴御かね被下候得共御省略中に付右差上旦被下無之

一御婚禮御日段幷御刻限

十二月廿一日　御婚禮御當日 月曜 張宿

巳中刻より御式初り夕七つ時吉刻　五つ時　式御三献饗御膳

四つ時　御色直御三献御服紗御膳

九つ時　御休息　稲之御臺

十二月廿三日　御三つ目御式 水曜 軫宿　（夕七つ時吉刻）一本ナシ

同　廿五日　御五つ目御式　午刻吉辰

廿一日　廿三日　廿五日　朝御膳御一（菓）（一本菓）之事

一御三つ目御膳御五つ目御膳いつれも御二度に差上る　但し豊姫様御例に御准被遊しなり

一倫宮様御召服

御當日　白綾御地白御介取　御下小袖白大紋　御介取下御帯同様白綾

御三つ目御五つ目　御地白綸子　御相赤　御帯黒

五節句

廿五日　御縫入　但廿五日御五つ目之處廿六日に御祝に付本文之通

一御祝儀為御取替

御當日朝御使にて

倫宮様より　中納言様へ七種御品被進

御熨斗目　二重　内嘉珍子持筋　一重　同無地　一重

御長袴　二具　内嘉珍子持筋　一（重）（一本具）　同無地　一（重）（一本具）

御帯　二筋　御扇子　二本一包　御疊紙　一折

中納言様より　御簾中様へ

御色直之節

御小袖　二重　内紅綾幸菱　一重　地黒綸子　一重　御帯　二筋　御疊紙　一折

御簾中樣より　中納言樣へ

御小袖　二重　内 濃花色 一重 花色 一重

御半上下　二具　内 嘉珍 一具 花色幸菱小紋 一具

御帶　二筋　御扇子　二本　御疊紙　二折

右一臺に積包のし添御目錄

右之通御双方より被進大奥御勝手に於て御披露取計之　中納言樣より被進品は御廣敷にて　御簾中樣より被進品は御表にて出來候事

御三つ目爲御取替

中納言樣より　御簾中樣へ　御使 奥掛り御用人

五百八十餅　御披露叺二つ一臺に積　鮮鯛　一折

昆布　一臺廿把居　御樽　一荷

御目錄

右之通被進御使於御廣敷御附御用人（へ）〔一本ナシ〕勤る　御請同役を以被　仰上

御簾中樣より　中納言樣へ　御使 御附御用人

五百八拾餅　御披露叺二つ一臺に積　鮮鯛　一折

昆布　一臺二十把居　御樽　一荷

御目錄

右之通被進御使於表御用部屋相勤御答奥掛御用人申述る

一御使へ御酒御吸物被下

一御簾中様より被進品は御年寄初詰合之　御目見以上へ被下　中納言様より被進品は御附御用人

初御廣敷向一統へ被下

一御當日女中身拵へ

兩詰所　紺白　白綾幸菱　合着　大紋 / 白綾箱せこ　帯　同斷 / 銀ゑ元結ひ左かさり結切

若年寄初　表使御次頭　白綾幸菱　合着　白菊りんす / 白綾箱せこ　帯　同斷

御右筆以下　地白綸子　合着白さあや　羽二重にても / 帯　白地なれは猶宜　たてわく紫地無用

御三之間　御末頭迄　中色總縫入　合着白さあや　羽二重にても / 帯紫地を除き何にても

御色直にて

兩詰所　紺白　紅梅織　相着　紅　菊綸子にても大紋にても / 帯　紅綾幸菱結切 / 箱せこ同黑元ゆひ常之通

若年寄初　紅梅織　相着　大紋にても菊綸子にても / 帯　紅綾幸菱結切　箱せこ同

御右筆以下　地黑綸子　相着　紅さあや　御容しや何にても / 帯　白地にても黑地にても / 其後着かへもやう帯付紫地無用

御三之間　最初の / 中色にても　縫入　相着前之通　紅何にても / 黑にても / 其後着かへもやう帯付紫地のそき

かもし相着御色直しの節之まゝにて御夜結迄居候

一濟せられ候うへ着かへ

兩詰所御側向表使まて　地黑　帶　黑にても 花色にても

一廿二日元日之通御禮被爲請に付

組　白

地白　相着地白　帶同　着かへ　中色にても 黑にても

御三つ目
御五つ目　五節句　一つ白

兩詰所　地白綸子　相着　赤　帶　黑

若年寄初
御右筆以下　中色縫入

廿五日御五つ目之御廉　縫入　色何にても

一十二月廿一日御婚姻被爲整

御婚禮御式正

大奥御對面所

御床餝

御水引　紅純子寶盡し 御鋪布白綾幸菱

置　鳥

御銚子　銀紙糸花

蓬萊御臺 但鶴鴿組付　御瓶子御三つ盃 木錫銀濃白繪 若松竹御紋紺青 臺銀濃白繪御紋同斷 但一對口銀紙蝶花形　御熨斗 御三方銀濃白繪　御提 同斷

置鯉

襲御膳式御三献御色直し 御三献御膳御三つ目御膳 御五つ目御膳不殘 御二方様前

式御三献 御膳部木地白繪松竹御紋同斷小角吹ちらし 土器下輪共銀濃亀足亀甲銀紙裏兩面銀紙

御三つ盃 御三方木地白繪御紋付　御捨土器 右同斷

二つ星
御星之者 臺すはま銀濃御紋付白繪松竹 下御三方繪樣同斷

御星之物此御壹臺にて御兼合
塩引廻し盛 糸花しら梅上置鰯　御箸臺

鰡廻し盛　同しらきく同からすみ

御初献

海月盛 小重下輪桔梗甲立　熨斗盛 大重桔梗甲立　御箸臺

梅干盛 同斷　御銚子 銀紙包糸花餝　御提 同

御二献

内　粥 大重土器下わ桔梗甲立　手鹽酢　御箸臺　陰陽のひれ盛留鯉下盛ぼら

御三献

腹　煎　五度土器下わ銀濃檜葉改敷　手塩しほ　御箸臺　庖丁之儘盛之

右御居り御盃相済

五々三　御膳部木地白繪若松竹鶴龜繪様御紋付土器下輪小道具銀濃龜足甲立銀紙裏無地銀紙

御　本

塩引盛　大重土器蝶改敷　燒　物　小角甲立龜足　和交盛　同斷　饗五度土器下輪帶有　御箸臺

香物盛　同斷　かまほこ　小角すみ甲立亀足

御　二

唐墨盛　小重土器蝶改敷　たこ盛上同斷　御汁間土器つみの牛房しぬたけいてう大根くき菜

辛　螺　間土器蝶改敷亀足　鱸　盛　同斷　鮎すし　上同斷　御　汁　鴈　麩　芋

御　三

船　盛　小角すみ甲立　さゝゐ　間土器蝶改敷龜足　御　汁　鯛

羽　盛　小角すみ甲立　數之子　小重土器蝶改敷

ひしほ煎　山の芋　のり　きじ　御箸臺

九万引　小重土器蝶改敷　御　鉢　木地白繪　御三方　木地白繪御紋付

御盃土器　御三方　木地白繪御紋付　御下捨土器　同

御銚子　銀紙包糸花餝　御　提　同

御湯木土器　御三方同斷　　御　湯　同斷

御緣高御紋付銀濃白繪

御菓子　やうかん　かんみ臺　まんちう　せんへい　糸花松梅椿　ちんほう　蝶千鳥

結こんふ　あるへい　かや　くるみ　御やうし　御三方同斷

御色直し

是より御三方御薄盤木地紺青御紋付若松竹梅繪樣同斷小道具金濃龜足甲立金紙紅裏

御床餝　　　　　　　　金紙糸花餝 御銚子

金紙御餝付 御瓶子御三方「○」置鳥 金濃若竹梅繪樣御紋付紺青　　金濃土器 御三つ盃

「○」蓬萊御嶋臺

金紙御飾付 御瓶子御三方「○」置鯉 御紋紺青金濃若竹梅繪樣　　金紙糸花餝 御提子

朱丸印は最初御飾其儘御居置

御三盃　御三方　御下捨土器　同

二つ星 御星之物　臺團扇金濃紺青繪樣御紋附下　御三方木地紺青繪樣

御星の物此一臺にて御盃合 五度土器下わ のりからみ　　上置たり 金銀濃まてはまくり

同 熨斗盛　上置かまほこ金銀濃檜葉紅きく

御銚子　金紙包糸花飾　御提　同斷

御初献

昆布 銘々角甲立　熨斗 吹ちらし　橘 銘々角甲立　御箸臺

御二献

結熨斗 小角甲立　色々餅 五度土器蝶改敷　小豆の粉 同断　大豆の粉 同断　御箸臺

御三献

指味 小重蝶改敷鱸　鮒 間土器　鮨 同亀足　御銚子 金糸包糸花飾　御加 同断　御箸臺

御添肴

青鱠 小角甲立　鮎きやう 間土器　小指物 小角甲立亀足　御箸臺

一 御服紗御膳三汁九菜　梨子地御膳部

御本

御鱠 たいくり しやか 金かん　御汁 つみ入 小かふ 皮牛房

御香物 生漬瓜 花丸瓜　御煮物 今出川豆ふ くるみ　御飯

御二

御杉箱 茂うな 山の芋 割山升

御和物 にんしん 白こま 山升　御汁 鯛　御焼物 味噌漬名よし

御三

杉地紙形改敷南天實共熊さゝ

御さしみ　かき鯛 鯉子附　唐くらけ 久年母　わさひ

御いり酒　御汁 小菜　御ひら皿 くしこ 牛房 わゆ

御向詰 小鯛掛け　御鉢　御盃 ぬり　銀御間鍋　御肴 みそ漬はた白　御吸物 鯛ひれ

高砂 御奈良臺 御盃土器　御押 薮かうし 干はむ　御銚子 白紙包糸花餝　御提 同　御湯

御菓子　朝鮮あめ　煎染芋　同河たけ　御やうし　御後菓子 筋有へい 千代結ひ　紅みさり 紅きくりん　葛せんへい 御やうし

御休息之御間

稲之御臺 小三方 御三方紺青御紋松竹鶴亀繪様　但御一つ盃組付

御　肴 小三方 御三方 同斷　はまくり 金濃小重土器下わ　川海老 同　數の子 同

御銚子 金紙包糸花餝　御提子 右同斷

御銘々様 御下捨土器　御三方

御三つ目御祝

數之御熨斗蚫

御三献　木地御薄盤小道具 木地白紙甲立

御初献

昆　布 銘々角甲立　熨　斗 吹ちらし　勝　栗 銘々角甲立　御箸臺

御二献

梅干 小重土器桔梗甲立　五種盛 小角甲立　數の子 同　御雑煮 餅 芋込くしこ くし貝 平かつを　御箸臺

御三献

御吸物 たい ひれ （一本ナシ 御箸臺）　御三つ盃木地御三方　御下捨土器 同斷　御銚子 白紙糸花餝　御提子 同斷

御引次御膳三汁九菜　梨子地御膳部　御通ひ木地御三方

御本

御膾 紅梅はら はれのり せうか 金かん　御汁 四半さより 岩たけ 五六大根　御煮物 牡丹ゑび しゐたけ 朝せんくわゐ

御香物 石見漬 なす 守口大こん　御飯

御二

丸杉箱 蒸さはら れいも 葛溜り わさひ　梅か香　御汁 松笠たい めうさ　御皿附 大坂かまほこ

御三

杉地紙形改敷南天

御さしみ 山吹鱸 赤貝 せん 久年母 わさひ　御煎酒　御汁 千葉

御平皿 唐草いか 人しん 輪柚　御向詰 小たい かけしろ　御鉢　御盃 ぬり　銀御間鍋　御肴 むし貝

御吸物 たい ひれ　鶴亀 御奈良臺　押福壽草 するめ　御銚子 白紙包糸花餝　御提子 同斷

御茶菓子　木地御三方 山せうもち 水くり にしめ山芋 御やうし　御後菓子 朧まんちう 紅落かん 有平さう みさり 小卷せんへい 御やうし

御五つ目御祝

數之御熨斗　木地御三方紙敷

御三献　木地御三方小道具 木地白紙甲立

御初献

昆布　銘々角甲立　熨斗　吹ちらし　勝くり　銘々角甲立　御箸臺

御二献

梅干　小重土器 桔梗甲立　五種盛　御雑煮　餅芋込くしこ くし貝 平かつを　數之子　同　御箸臺

御三献

御吸物　鯛ひれ　御三つ盃　木地御三方　御下捨土器　同　（一本ナシ 御箸臺）

御銚子　白紙包糸花飾　御提子　同

御引次御膳三汁九菜　梨子地御膳部　御通木地御三方

御本

御鱠　ひらめ せうか　備前くらけ きんかん　くり　御汁　細つみ入 榎たけ　作り芋　御煮物　火取きす 河たけ　はす

御香物　奈良漬瓜 花丸瓜　御飯

御二

丸杉箱　あは雪豆ふ 花かつほ　葛溜り　御和物　百合根　御汁　鱸 ゆ　御皿附　むし蛸

御三

杉地紙改敷檜葉

御さしみ　細作りほら　久年母　平作り　わさひ　銀のり　御煎酒　御汁　わかめ
御淺物椀　二色たまこ　御向詰　小鯛　掛汁　御鉢　塗御盃　銀御間鍋　御肴　板附ほうほう
御吸物　たい　ひれ　松竹　御奈良臺　押ほたんから墨　御銚子　御提　御菓子　やうかん　にしめ麩　水くり　御やうし
御後菓子　若菜糖　貝盡し　花せんへい　若竹　若まつ　御やうし

一御式女中覺書

御次第

一御當日七種之御品御とり代し
右は朝御使にて被進候事
一御　式
一中納言樣御上段へ向左之方
一倫宮樣御上段へ向右之方
御跡より御刀御銚口之若年寄持御小廣蓋御側の人持二人御供す　宮樣御跡より御かいそへの人次に御小廣蓋御中﨟持二人御供す　若年寄御側の人御中﨟右之三人同し跡より下り候事
一御着座被爲在候得は御はい膳之上﨟兩人御二の間西の方へ座す少し見合せ御前へ着座す
一御中﨟御廣蓋を持出御上段へ上る　宮樣之上﨟立ち請取御前へ持行平伏す御介添御かつきを御ぬかせ申御廣蓋へ入る上﨟持立て御中﨟へ渡す（御中﨟上候まゝ其所に平服し此時請取て下り候事）上﨟元の座へ着す
一御小廣蓋御中﨟持出前に同所へ着す（其儘平伏にて御まち申居候事）上﨟(取)（一本立）て請取御前へ上置其儘平伏す御かい添

御愛敬の御守をのせ候得は上﨟持立て　中納言樣の上﨟へ渡す上﨟請取　中納言樣の御前へ御覽に入平伏す直に持立て御床の東よりへ置直にわきにかさり有御のしを持て　中納言樣へ上平伏し又直に　倫宮樣へ上同斷又直に元の所へ上置座に着す

一御三つ盃御土器御中﨟持出す御本家上﨟請取御床際柱よりに置て元の處へ座す 尤御中﨟上る計りにて下り候事

一御星の物御中﨟持出同し所に座す　宮樣上﨟請取御床際之御三つ盃とならへ右の方へ居置元の所へ座す

一御初獻御引渡し

御二所樣御同樣に出る 御中﨟いつにても同し所まで持て上り候事上候計直に下る　兩上﨟同し事に請取上候事

一御したみ出る兩上﨟請取て御土器計御三方のわきに置御三方下ける 御中﨟共儀ひかへ此時請取下り候事

一御提子　若年寄

一御提子　中年寄一所に持出　御上段之際にて中年寄少々跡に成引つゝき上り右に居る兩上﨟請取座のまゝ向ひ合一寸ひといきして立御提子は西かわへ三足跡へ下り着す御銚子は持なから御三つ盃の所へ行御銚子を右の手御盃左の手にて持御初獻一こん　宮樣へ上御加有又二こん上中納言樣へ上一こん上御加へ有　中納言樣にて御加の上﨟はしめ御請取て西かはへ行着す宮樣の御加へすみ元の所へ着し　中納言樣へ御酌參る上﨟と行ちかいに東かわへ行座す　中納言樣御加すみ元の所へ座す御酌の上﨟は御酌すみ候得は御銚子右の手左に御三方一所に持御床際元の所へ持行御盃をとり上のを下へ組替て置候て御銚子を下ける此時御加の上﨟一所に立て

むすみなしに下る若年寄中年寄兩人御二の間の御しきゐ際東の方にひかへ居此時立て下る
一御二献出る御初献と御引かへ御中臈其まゝひかへ居御引かへにて下り候得は持て下け候事
一御したみ御引かへ御中臈前に同し事
一御銚子　若年寄
一御提子　中年寄前に替事なし
一御盃此度は　中納言様へ上　倫宮様にて御納に成候事（上臈心得初めにかわる御事なし）
一御三献出御二献と御引かへ御初献と同し（御）［一本ナシ］事
一御　盃
一御したみ御引かへ前に同し此度は　倫宮様へ上　中納言様にて御納め御初献の御通り御盃御床際に居置御銚子計下ける此時御加の上臈と結ひ合て下る故御酌の上臈は左へより御加の上臈は立て右へ御酌の後へまわり下る
若年寄中年寄も心得て若年寄は右中年寄は左へまわりむすひ合てはしめと入替りに上段へ上り御銚子御加請取て下る兩上臈元の所へ座す
一御中臈一人出御上段へ上り平伏す　中納言様の上臈立て御盃を下る又入替に御中臈出此通り平伏す　倫宮様の上臈立て御星の物下る兩上臈元の所へ座す

五々三御膳

一御本出る兩上臈とも立て請取上り御中臈上置下る

一御二御右へ上る　御中﨟前に同し

一御三御左へ上る　御中﨟前に同し

一御　飯　若年寄中年寄持出上段へ上り平伏す直に下る御かわりはなし

一御飯の蓋置の御三方　御中﨟若年寄中年寄の跡に附持出御二の間東御しきゐ際にひかへ座し御飯下り候得はまたはしめの通り跡より直に下る

一御　盃　御中﨟持出上﨟に渡し下る上﨟請取御本と御三の角へかけて上置

一御漪土器出る　御中﨟上其まゝ平伏す上﨟請取御土器斗御三方下のわきに置て御三方計下る御中﨟請取下る

一御銚子御加出る　若年寄中年寄前に同し　上﨟請取何も前に同し事此度は　中納言様へ上御加有　倫宮様へ上
御加有此度は結ひなしに下る　若年寄

一御湯器上る　御中﨟上置下る上﨟御本の御向ふへ上置

一御湯とふ若年寄中年寄持出御上段へ上り平伏して直に下る御湯も上るにてはなし

一御中﨟兩人出御上段へ上り着す

一御湯器下る

一御したみ下る

一御三下る　御中﨟前に同し

一御二下る　御中﨟同し事

一御本下る　御中﨟同し事

一御菓子出る

一御濃茶　御中﨟持出御上段へ上り上﨟に渡し其まゝひかへ居る手より手へ請取御側へ持行右ににて御盞を取り御たゝみへ直に置兩手にて上候事　中納言樣には御とり遊し一寸御まねあそはし御下け遊はし候事　宮樣は御かい添とりて御手へ上候得は一寸御まね遊はし御かい添へ御渡し遊はし御かい添より御茶臺へのせ候事上﨟直に御中﨟へ渡し下る

一御菓子下る

是にて御めて度御すみ遊はされ上﨟御入かわへしりそきひかへ居る

一御二所樣御めて度御ひらき遊し御上段の御正面より入らせられ候事前之通り御刀上け御側の人御小廣蓋を持御供す　倫宮樣も御一所に御ひらき遊はし前之通り御かい添御中﨟御小廣蓋持御供致候事

是より御めて度御色直しの御事

御色直し後御式

一中納言樣御上段へ向御左の方

一倫宮樣御上段へ向御右の方

はしめの御式と同し御所より被爲入候御ひらきも同し御事

一御はい膳の上﨟初に同し所へ座す

一御三つ盃出る　中納言樣の上﨟請取御床際東よりの方左へよせて居置何もはしめに替る事なし

一御臺物出る　倫宮樣の上﨟請取御三つ盃とならへ右の方に置

一御初献御膳御引渡し出る
一御滴土器出る
一御銚子
一御提子
前の通り上﨟二人請取其儘一禮有何もはしめに同し御事此度は　中納言様へ御三つ盃上る　倫宮様にて御納　尤御加有前に同し御事
一御二献御膳御色々餅　御初献さ御引かへ
一御滴土器御引替前に同し
一御銚子
一御提子
前の通り此度は　倫宮様へ上　中納言様にて御納め　尤御加あり何も前に同し御事
一御三献御膳鮎きやう　御引かへ同し御事
一御添肴御右へ上る
一御滴土器　御引かへ同し御事
一御銚子
一御提子
前の通り請取此度は　中納言様へ上　倫宮様にて御納め此度は御三つ盃も御銚子と両手に持て

一時に下る此時に御提子も御酌の後へまわりむすひ合左へまわり下る此節は　宮様へ御酌の時ふんに御三つ盃を下る御中﨟一人出中年寄の次にならひ居御三つ盃下る時一人立て御上段へ上り御三つ盃を下る入かわりに若年寄中年寄立て中年寄右へ廻り御銚子御提子結ひ合て下る

一御星物下る御中﨟前に同し事

一御滴土器下る

一御添肴下る

一御三献下る

一御二献御膳色々御餅下る

一御初献御膳御引渡し下る

是にて御規式御めて度相濟此御まゝにて是より御常の御膳出る

一御式場圖

一上被爲成前御床の御かはらけ御長柄御くわへ御通之者三人にて引

一上被爲成御先たち御上り口にひかへ御刀上け御左へ行こし御刀かけへかける御小廣ふた御供の者御左へ置

一宮様御跡より御てうたい御後に御着座御介添御まかなひ御供御小廣ふた御右へ置

御かつき御廣ふた持出ひかへゐる　御守御廣ふた上右は御守御さり御のせ御表様上﨟へ上一寸御覽に入御床内は御棚にても上置

御はしの物上る　もとの所へ置

御かはらけ御床柱少し左御床内のかたへ御星の物御床柱正面へならへ置御初献御三方御した

み出（上御右　宮様御左）　御長柄提　御酌　宮様へ上御くわへすみ　上へ上御同様　御長柄提下る
御二献御三方と御初献と引かへ下る　御長柄提出る　上へ上御加へすみ　宮様御同様　御長柄提下る　御三献御三方と御二献と引かへ下る御長柄提出る　宮様へ上御くわへすみ　上へ上御同様御長柄提下る　御かはらけ下る　御臺の物下る御したみ下る御三献下る

一御通御長柄くわへ（右御長柄　左御くわへ）立ならひ御上段一疊目へ御長柄先へ上る御くわへ跡よりうしろを廻りその橋方へ上る是にて一結ひなり

一上ろう御酌すみ三度目のとき計御本酌みてうたひの方下のほふへ渡うしろを廻り御書院のかたへ御くわへ廻りて渡す是を草のむすひ酌と申候

御式御高盛

一御本　御二　御三

御鉢御通持候御上段にて一禮申上下る

御ふた置御三方御下段にてひかゆる御鉢とひとつに下る

御土器　此御かはらけ初御正めんへ置御添肴出るとき御居かへに相成候

御添肴　御したみ出　御長柄提出　上より御先御提すみ　宮様へ御同様　御長柄提　御土器　御したみ下る　御添肴下り　御湯上（御鉢御同様御水御下段にひかゆる）

御三御二御本下る　御ふち高菓子　御濃茶上る（臺天目臺とも差上　すくに御通待居下る）御菓子下る

右にて御休息被遊御召かへに相成候

御色直し

一御三土器
御星の物出方受取渡御三献之通

御初献　御したみ出　御長柄提　上より御初　宮様御納御酌下る御初之通り

御二献　御初献の御右へ置　御長柄提　宮様より御初　上御納　同断

御三献　御初献の御左へ置　御長柄くわへ　上より御初　宮様御納

此時御土器御長柄に持そへなから御通へ渡し御通壹人
早く御下段へ参り居此御土器を受取三人にて下り候　御したみより御三献御二献御初献下る

御ふくさ御膳御なし地

一御本　御二　御三　御向詰　御正めん

御鉢　御鉢は上﨟受取御ふた置へ御ふた取

御ふた置　御ふたあつかいこれあるに付
其儀御上段に御待ひかへ居る　御鉢下る

一御ぬり盃　御向ふさ引かへ　御吸物　御したみ出

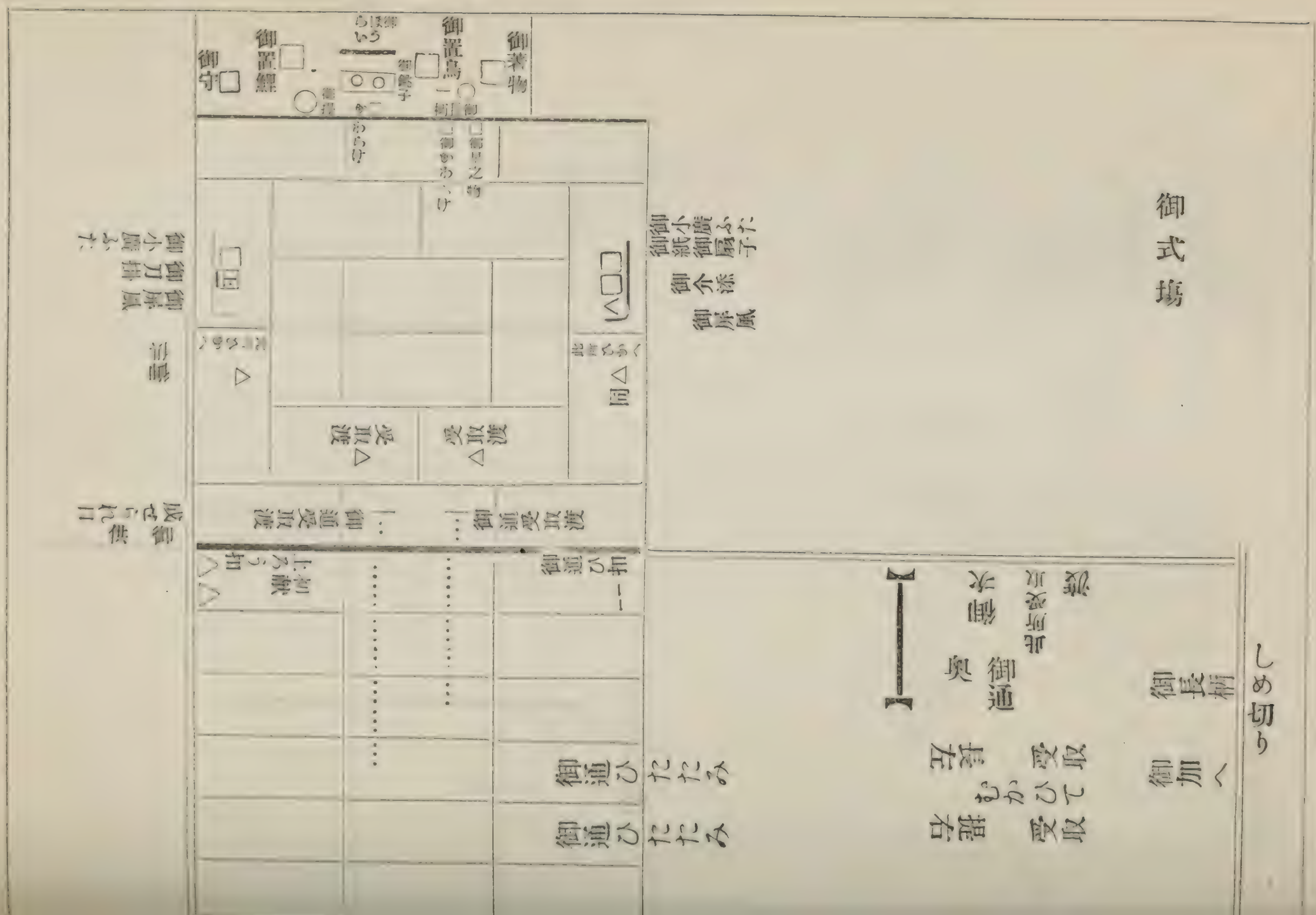
御銀銚子にて御銘々様へ御三献つゝ召上り下る

御奈良臺と御盃とひきかへ　御肴と御吸物とひきかへ

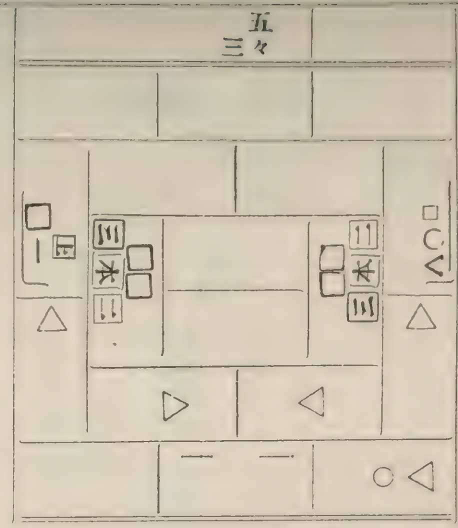
御長柄くわへ　御銘々様へ差上下る　御したみ下る

御奈良臺　御肴下る　御湯差上る御鉢之通り御水御下段にひかゆる下る　御三　御二　御本下る

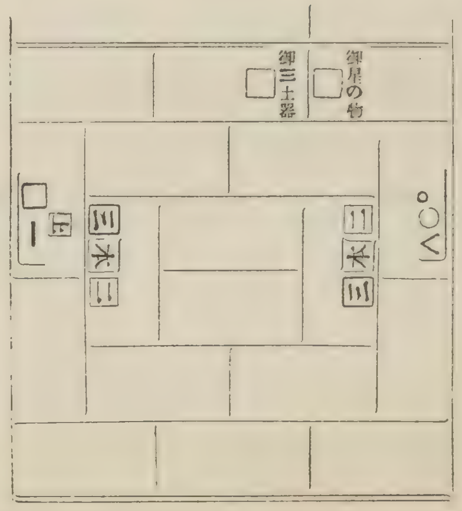
御ふち高菓子御濃茶上　下る　御さら御干菓子御薄茶上　下る御茶何れも臺天目


御式場
しめ切り
御通ひたたみ
御通ひたたみ
長左
提右
御屏風
御刀掛
御小鷹ふた
御通受取渡
受取渡

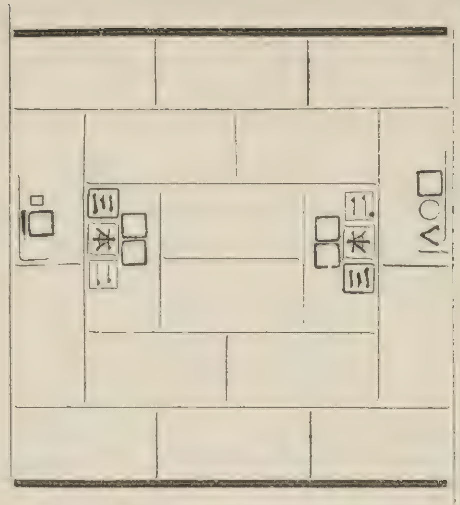
御式御高盛



御色直し



御服紗御膳



一御婚禮濟爲御祝儀　伏見宮樣御初へ左之通以御使被進之

中納言樣より　伏見樣へ　　　御使在紀州　御家老

御太刀　一腰　　御馬代金　二枚
綿　三拾把　　鹽鯛　一箱
昆布　一箱　　御樽　二荷　代金二千疋
御目錄

入道宮樣へ

御太刀　一腰　　御馬代金　一枚
綿　二拾把　　鹽鯛　一箱
昆布　一箱　　鰑　一箱
御樽　一荷　代金千疋　　御目錄

入道宮樣の御息所樣
伏見樣の御息所樣へ

綿　拾把　　鹽鯛　一箱つゝ
昆布　一箱　　御樽　一荷　代金三百疋
御目錄

岡宮樣へ

綿　五把　　鹽鯛　一箱

昆布　一箱　　御目録

銀三枚 紗綾三巻 つゝ 覺目錄　殿上人へ　　同二枚 同二巻 つゝ 覺目錄　諸大夫へ

銀二枚つゝ　御用人へ　　銀二枚 紗綾二巻 つゝ　上﨟 老女 へ

銀二拾枚　總男女中

右之通被進且被遣候事

一御用掛老女等へ被下

銀三枚つゝ　綾小路　梅尾　民野　田川　園橋　杉尾　長濱

御婚禮御用掛り相勤候に付被下之

二月廿九日

此外男子向御家老初御用掛り之面々へも被下物有りたれとも欠帳にて不了なり

右之如く文久二戌年十二月廿一日御婚姻式被爲整御當日より御手前にては　御簾中樣と可奉稱
公邊他向へは御名を認　御簾中樣との唱へは御手前計と被　仰出
同年十二月廿六日御婚姻式相濟候爲御祝儀五百八十餅爲御取替有之　御目見以上服紗小袖返し
小紋にて無之半袴着御目見以下にても御用掛り之分は麻上下を着す
文久三亥年正月十五日　公邊他向へ御婚姻之御弘め有之同日より　公邊幷他向へも　御簾中樣
と可稱旨被　仰出

南紀徳川史巻之百二十八

臣　堀内信　編

典禮第四

御姫樣方御入輿御道具帳　上

此記は姫君方御婚嫁の時御携へ調度品の程度を規定したるもの也原書年次を揭けされはいつ比の制定なるや判しかたし然とも文中兩卿樣とありて三卿樣となし蓋し清水御家なき以前の事か清水御家は　將軍惇信公の御子萬次郎(公)[一本ナシ]寶暦九年十二月清水御館へ御移同十二年初て拾萬石を被進とあり寶暦の頃は　大慧公菩提心公の姫君方御婚家の事頻にあらせられし故此際此制定ありしならん乎

一原書上け紙下け紙を粘付し　尾水兩卿樣と京都との區別を示す繁雜且つ制本を妨く因て上け紙は朱書「　」に換へ下け紙は藍色〔　〕に記入す

原書凡例に

一大名衆へ　御入輿之節の御道具は此帳面之通

一尾州樣水戸樣兩卿樣へ　御入輿之節之御道具は上附紙に御增減或は相違を記

　但附紙無之分は本行と御同樣

一京都へ　御入輿之節之御道具は下附紙に御增減或は相違を記

但同断

一御召物其外御端物類御綿類は　御両家様両卿様京都大名衆へ御入輿之節とも無御差引

御姫様方御入輿御道具帳

一御弓蟇目　代銀壹貫七百五拾八匁貳分　諸色込

一御袋　一御箱

一御油箪紺木綿御紋附　一御桐油御紋附

一御召御輿　一挺　代銀拾五貫九百廿四匁五分程　諸色込

黒蠟色御蒔絵御紋ちらし

一御日覆猩々緋御紋白羅紗　一御雨覆黒羅紗御紋緋羅紗 但御召替の御雨覆も御兼用

〔御雨覆御兼用之品御座なく候〕

一御油單花色絹袷　黒木綿單御ゆたんも掛る　一御輿臺　二脚　花塗　御日覆御雨覆共右同断

一御外箱　黒柿合ぬり　一御挿箱　同断

一御召替御輿　一挺　代銀九貫七拾壹匁五分程　諸色込

黒蠟色御紋ちらし　一御日覆其外都て御召之通

一御持御挾箱　一對　代銀五貫百貳拾三匁三分程　諸色込

御召御輿之通御蒔絵御紋ちらし

一御覆猩々緋御紋白羅紗　　一御雨覆黒羅紗御紋緋羅紗

「御雨覆御兼用之品無御座候」

〔御雨覆御兼用之品無御座候〕

一淺黄加賀袷御服紗　　一御捧袋同斷

一御外箱捧箱共　黒布合塗但御持替さ御雨覆御兼用

一御持替御挾箱　一對　代銀三貫四百壹匁八分程　諸色込

黒蠟色御紋付

一御覆其外都て御持之通　但御捧袋花色木綿

一御持御長刀　一振　代銀壹貫五匁九分五厘程（御身潰銀は不籠）　諸色込

御鞘御柄御蒔繪御紋ちらし　御召御輿之通

一御袋猩々緋御紋白羅紗

一御雨覆黒羅紗御紋緋羅紗但御持替之御雨覆之御兼用

「御雨覆御兼用之品無御座候」

〔御雨覆御兼用之品無御座候〕

一花色絹單御袋に入　一御休鞘　一

一御外箱　黒布合ぬり

一御持替御長刀　一振　代銀六百三十五匁貳分程 御身并潰銀は不籠　諸色込

黒蠟色御紋ちらし

一御袋其外都て御持之通

一御持御茶辨當　一荷　代銀貳貫貳百七拾五匁程　諸色込　潰銀は不籠

黒蠟色御紋付

御小道具

一御二重箱　二組　黒塗無地　一御四重箱　一組　上に同

一御棗　一　黒塗御紋付　一御袋金入　一御箱黒塗無地　一御茶碗臺　一　御ふた共　黒塗御紋付逸懸

一御茶碗染付　二　一御おに茶碗　一

一御茶筌御箱共　一本　一御茶杓御筒共　一本

一御水灑御箱共　一本　一御火吹竹ためぬり一本

一御炭箱ためぬり　一　一底取銅　一

一御火箸眞鍮　一膳　一御拭巾　一

一御柄杓　一本　一銀御風爐　一

一銀御水指　一

一御覆猩々緋御紋白羅紗　一御雨覆黒羅紗御紋緋羅紗

但御持替之御雨覆と御兼用

「御雨覆御兼用之品無御座候」

〔御雨覆御兼用之品無御座候〕

一御油單黒木綿　　一御臺二脚黒花塗

一御持替御茶辨當　　代銀貳貫貳百七十五匁程　諸色込　潰銀は不籠

塗右同斷

一御小道具幷御覆等都て御持之通

一御貝桶　　二對　　代銀拾貫九百三拾壹匁九分程　諸色込

内

一對　朝鮮　黒蠟色御蒔繪御紋ちらし　　一對　桑名　黒蠟色御紋附

「一朝鮮御貝桶之方村梨子地御蒔繪御紋ちらし

一御服紗　淺黄羽二重　　一御覆　唐織

右之外は本行と御同様

一桑名御貝桶之方本行と御塗は御同様

一御覆純子御紋白糸縫込

右之外本行と御同様」

〔一朝鮮御貝桶之方村梨子地御蒔繪御紋ちらし

一御貝　三百七十五對充　　一御貝敷　猩々緋

一御覆二對共純子御紋白糸織込か又は一對は唐織か

一一對は唐織

一御貝桶包淡黄加賀御ふくさ

「一御餘貝箱　二　溜塗」

一大御外箱　黑柿合塗

一御雨覆絹桐油御紋附二對分

一御日傘　一本

御柄御蒔繪　御召御輿之通

一御輿へ差掛候筋に付御袋無し

一御持御日傘　一本

御柄御蒔繪御召御輿之通

一御袋　猩々緋御紋白羅紗

「御雨覆御兼用之品無御座候」

〔御雨覆御兼用之品無御座候〕

一花色絹無地袷御袋に入

一御持替御日傘　一本

御柄黑蠟色御紋ちらし

一御袋其外都て御持之通

一一對は純子御紋白糸縫

一御外箱　黑ぬり御紋附」

〔一御餘貝箱　一荷　黑蠟色御紋付〕

一筱御釣臺　棒共二對分

代銀三百九十七匁五分程　諸色込

本花絹無地袷御袋代も籠る

代銀壹貫三十七匁七厘程　諸色込

一御雨覆黑羅紗御紋緋羅紗　但御持替之御雨覆ミ御兼用

一御外箱　黑柿合塗

代銀六百五拾八匁貳分程　諸色込

一御簑箱　一差荷ひ　代銀三貫三百五拾目程　諸色込
黒蠟色御蒔繪御紋ちらし　御召御輿之通
一御覆猩々緋御紋白羅紗
一御雨覆黒羅紗御紋緋羅紗但御持替之御雨覆と御兼用
「御雨覆御兼用之品無御座候」
「御雨覆御兼用之品無御座候」
一御外箱　黒柿合ぬり
一御持替御簑箱　一差荷ひ　代銀壹貫九百目程　諸色込
黒蠟色御紋付
一御覆其外都て御持之通
一御厨子棚
黒蠟色御紋ちらし御蒔繪
一御黒棚
右同斷
一御書棚　御三棚にて代銀貳拾貫九百三拾九匁程　諸色込　潰銀は不籠
右同斷
一御三棚御覆花色さあや袷御紋白上り　一御外箱　黒柿合ぬり

右御三棚御小道具

御拂箱　一

一折疊紙大小一對片し

一御くし拂　一對　御柄とつこ形長さ一寸三分御疊に包

御櫛箱　一

一御三つくし　十二具　銘々御疊に包

一御ひんくし　二つ　上に同し

御短冊箱　一

一御たんさく　十枚　絹地竹の模樣御疊に包

御色紙箱　一

一御色紙　十枚　絹地竹の模樣御疊に包

御眉作り箱　一

一御眉作大中小　三對

一小上ろう　一對

一白はつし大小　二對

一御三つ道具象牙に御蒔繪御紋附御疊に包　一通

一御疊紙　一對

一御白粉水入　一對

一大上ろう　一對

一ほんほり大小　二對

一黑はつし大小　二對

一御へに筆　一對

一御白粉香合　一對

一御こ手墨香合　一對

御水引箱　一

一金御水引　五十把　御疊に包

一銀御水引　五拾把　上に同し

御硯箱　一

一御硯石　一

一御筆　一對

一御墨挾　一本

一御墨　一挺

一御墨敷　猩々緋

一銀御きり　一本

一銀御水入　一

一御小刀　御金物銀　一本

御香盆

一銀御香匙火筋立　一

一銀御灰押　一本

一同御鶯　一本

一同御香挾　一本

一同御火あひ　一本

一御(守)香合　一本重　一組

一御壺香爐　内張銀　一

一あこた御香爐　一　但銀籠目蓋御香爐内張銀

一銀御香箸　一膳

一御火敷箱　一　銀御香敷十枚御疊に包

御爪切箱　一

一御右小刀

一御左小刀　但三對入

御重硯箱　五重物　一組

一御硯石　一つゝ

一御筆　一對つゝ

一御墨　一丁つゝ
一御小刀御かな物銀　一本つゝ
一銀御きり　一本つゝ
御沉箱　一　掛子有
一御香合　六　草源氏御蒔繪
御沉割箱　一
一御沉刻臺　一
一御槌　一
一御のみ　一
御元結箱　一
一御元ゆひ金六つ銀左かけ六つ　鶴龜松竹模樣
十二御手箱　一
身蓋の緣銀ふくりん内張白地金入寳盡し模樣
一御ふし香合　一對
一御丸鏡　御家共　二面
御角赤　大小　二
御齒黑箱　一

一御墨敷　猩々緋　一つゝ
一銀御水入　一つゝ
一御伽羅枕　一
一御なた　一
一御白粉香合　一對

一銀うつし鍋 鶴亀松竹毛彫 一　一塗御うつし鍋 上に同し御まき繪 一
一銀御しゆうす 同毛彫 一對　一御ふし箱 一對
一御かね筆 一對　一御紅筆 一對
御渡しかね箱 一
一銀御渡しかね 一枚　一塗御渡し木 一枚
御亂箱 一
一御長文箱 一　一御半文箱 一
一御長盆 一枚　一御昆布箱 一
一御炭團箱御たさん入 一
御文鎮 五
布袋 唐子 かさね双紙 冠檜扇 枝桃
右いつれも銀
御打枝銀にて橘 一
右御小道具御箱御棚之通御金物いつれも銀紅御紐附夫々淺黄羽二重御服紗に包
〔御紐を本紅 其外は御同様に御座候〕
一御附初筋御手道具〔御鉄漿初之節出來候筈之事〕 代銀三貫貳百八拾目程 諸色込 潰銀は不籠
黒蠟色御蒔繪御紋ちらし

一御歯黒箱御小道具共　一

一御手洗　一

一御耳手洗内壹つ眞鍮内張　二

一御輪臺　一

一御小櫛箱御小道具共　一

一御眉作箱御小道具共　一

一御鏡六寸八寸　御家共　二面

一御服紗　淺黄加賀袷

一御渡しかね箱御渡しかね貳枚　一

一御湯當　一

一御手拭掛　一

一御嗽器御臺ふた共　一

一御櫛臺但香盆形　一

一御鬢臺但香盆形　一

一御鏡立　一張

一御外箱　黒柿合ぬり

一御手道具　一通り　代銀三貫四百五拾目程　諸色込　潰銀不籠

黒蠟色御蒔繪御紋ちらし

「御塗濃梨子地御紋ちらし　御小道具は本行と御同樣に御座候」

〔御塗梨子地御紋ちらし

一御渡しかね金滅金之方をぬり御渡し木

一御姿見御鏡を　大御鏡　壹尺二寸一面」

一御鏡立　一張

一御耳手洗内一つ眞鍮内張　二

一御手洗　一

一御鬢臺は二つ

一御櫛臺御小道具共　一

一御鏡御家共　二面

一御嗽器御ふた共　一

一御湯當御口ふた共　一

一御歯黒箱御小道具共　一
一御鬢臺但香盆形箱形御小道具共　二
一御嗽器臺　一枚
一御姿見御鏡御家御鏡立共　一面
〔本行の外に
一御眉作箱御小道具共　一
一御小くし箱御小道具共　一
一御平生筋御手道具　一通り　代銀三貫五拾目程　諸色込　潰銀は不籠
黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし
一御櫛臺香盆形御小道具共　一
一御手洗　一
一御手拭掛　一張
一御輪臺　一
〔御耳手洗内一つ眞鍮内張　二つ〕
一御嗽器　一
一御鏡　大小　二面
一御渡しかね箱銀御渡し金金めつき同　一枚一枚

一御渡しかね箱銀御渡しかね金滅金同　一枚一枚
一御輪臺　一
一御手拭掛　一張
一御服紗添黄加賀袷御外箱　黒柿合ぬり
一御昆布箱〕　一
一御眉作箱御小道具共　一
一御湯當御口ふた共　一
一御鏡立　一張
一御耳手洗　一
一御嗽器臺　一枚
一御亂箱　一
一御鬢臺香盆形　一

〔ぬり御渡し木〕
一御歯黒箱御小道具
一御服紗淺黄加賀袷
一御外箱黒柿合塗

一御平常　代銀貳貫九百五拾貳匁三分程　諸式込　潰銀は不籠

「此御道具不殘黒蠟色御蒔繪御紋ちらし」

一御机黒蠟色御紋ちらし　一脚
一御料紙箱　同斷　一
一御硯箱右同斷　一
一御文臺　同斷　一
一御鼻紙臺黒蠟色御蒔繪御紋ちらし一
一御多葉粉盆　同斷
一御服紗淺黄加賀
一御外箱黒柿合ぬり

一御旅櫛箱　一　代銀三貫八百目程　諸色込　潰銀は不籠

濃梨子地御紋ちらし

一御折鏡立　一脚
一御鏡大小御家共金入御袋入　二面
一御鬢臺折足　一
一御湯當御口ふた共
一御手洗　一
〔一御湯當手洗小さく出來候樣〕
一御輪臺　一
一御耳手洗　一
一御揚枝箱　一
一御嗽器御ふた共　一
一御亂箱　一
一御嗽器盆　一
一御服紗淺黄加賀袷
一御外箱黒柿合塗

御客様前

一御手道具　　三通り　　代銀八貫六百七拾貳匁五分程　諸色込　潰銀は不需

　黒蠟色唐草御蒔繪　「黒蠟色」御蒔繪」

〔御雛中様方御道具は此三通り之外に御紋附唐草かなし地御紋か今一通り出來候様〕

一御櫛臺 香盆形 御小道具共　三　　一御鏡 大小 御家共　二面充

一御鏡立　三　　一御湯當 御口ふた共　三

一御手洗　三　　一御手拭掛　三

一御耳手洗　三　　一御揚枝箱　三

一御輪臺　三　　一御嗽器 御ふた共　三

一御嗽器臺　三　　一御齒黒箱 御小道具共　三

一御渡しかね箱 御渡かね共　三　　一御眉作り箱 御小道具共　三

御不浄筋
一御湯當手洗 黒ぬりい つかけ計　一通り　　上に同し
一御手拭掛 上に同し　一

〔一御衣かう　一　　一御もうせん　三枚〕

右入組御長持 黒柿合塗 朱御紋附　二棹御ゆたん花色絹單御紋附

一御料紙箱　一　　一御硯箱 御小道具共　一

一御鼻紙臺　三　　一御提多葉粉盆 御小道具共　三面

一御外箱いつれも黒柿合塗　　一御服紗あさぎ加賀袷

〔一御硯蓋　三枚

御次上客前

一手道具　三通り上中下都合八通り分　代銀六貫三百目程　諸色込

黒蠟若竹折枝蒔繪

〔御蒔繪御繪樣は其節之御振合にて申出候事〕

「黒蠟色塗二葉葵蒔繪」

一櫛臺香盆形小道具共　三

一嗽器蓋盆共　三

一鏡家共　二面つゝ

一湯當口ふた共　三

一輪臺　三

不淨筋 一湯當手洗黒ぬり　一通り

一提多葉粉盆小道具共　三面

一料紙箱　一

一茶臺蓋幷茶碗共　三

一銘々淺黄木綿袋に入

御客筋 一御床疊大紋縁　二疊」

一耳手洗〔黒蠟色塗蒔繪〕　三

一鏡立　三

一手拭掛　三

一手洗　三

一嗽器臺　三

上に同し 一手拭掛上に同　一

一硯蓋黒ぬりいつかけ計　三枚

一硯箱小道具共　一

一外箱黒柿合塗

一黒塗衣桁　一

〔衣桁　二　内 壹つまきへ 壹つ黒ぬり〕

御次中客前

一手道具　三通り

出來合黒ぬり縁に金いつかけ

一櫛臺箱形小道具共　三

一嗽器ふた共　三

一鏡立　三

一輪臺　一

一湯當　三

不淨筋 一湯當手洗溜ぬり　一通り

一提多葉粉盆 小道具共 但蒔繪こほれ梅　五通り

一硯蓋　三枚

一外箱黒柿合ぬり

「御次中通

一手道具　香盆形　出來合黒ぬり

一櫛臺 小道具上中通同様かれ次なし　一通り

一鏡　一面

「衣桁　二　内 一つ二葉葵蒔繪 一つ黒ぬり」

一耳手洗　三

一鏡家共　二面つゝ

一手拭掛　三

一嗽器臺　三

一手洗　三

上に同 一手拭掛上に同　一

〔一御次上中通り客前

一提多葉粉盆唐草蒔繪〕

一茶臺ふた幷茶わん共　内 二つ逸掛 三つ逸掛なし　五

一銘々淺黄木綿袋に入

一通り

一鏡立　一張

一湯當手洗　一

一耳手洗　一
一手拭掛　一
一料紙　一通
一平多葉粉盆黒ぬり小道具共　一通
一嗽器ふた共　一
一硯箱　一
一硯ふた　一
一提多葉粉盆小道具共唐草まきゑ　一面

上中下客前三等之外に

御次中通客前

一手道具香盆形　三通
出來合黒塗縁に金逸掛
一櫛臺小道具上通りと同様　三通
一嗽器ふた共　三
一鏡家共　二面つゝ
一輪臺　三
一湯當　三
一不淨筋湯當ためぬり　一通り
一提多葉粉盆小道具共唐草蒔繪　五面
一茶臺ふた茶わん共　五
一銘々淺黄木綿袋に入レ
一耳手洗　三
一鏡立　三
一手拭掛　三
一嗽器臺　三
一手洗　三
一手拭掛上に同　一
一硯ふた　三枚
一外箱黒かき合ぬり

御次下客前

一手道具　　二通り　　出來合黑塗

一櫛箱小道具共　　二　　一鏡家井鏡立共　　一面つゝ

一耳手洗銅　　二　　一嗽茶碗染附　　二

一手拭掛ためぬり　　二　　一湯當手洗上に同　　二通り

一平多葉粉盆小道具共　　二面　　三通「一平たはこ盆黑ぬり」

殿樣被爲　成候節御道具

「殿樣被爲　成候節之御道具は無御座候」

一御刀掛黑蠟色御紋附　　一脚　　代銀貳百七十五匁程

「黑蠟色と御座候分何れも黑ぬり」　　「一御外箱何れも黑柿合ぬり」

一御茶碗臺同斷　御蓋廻共　　一　　代銀五拾七匁五分程　御ふた并御茶碗共

一御茶碗染色　　二

一御多葉粉盆同斷　　一面　　代銀五百五十匁程御小道具共

御小道具　　銀御床押一本　　御きせる一對　　御きせる掛共

一御鼻紙臺黑蠟色御紋付　　代（金）[銀カ]貳百七拾目程

一御鏡　　二面　　代銀二百八拾目程　御家御鏡立共

御家黑蠟色御紋付　　一御鏡立同斷

一御湯當手洗同斷　　一組　　代銀貳百十五匁程

一御手拭掛同斷　一脚　代銀百二十目程
一御嗽茶椀ふた共　一　代銀百七十五匁御臺ふた共
一御臺黒蠟色御紋付　一
一御揚枝箱同斷　一　代銀貳拾五匁程
一御耳手洗同斷　一　代銀九拾五匁五分程
御不浄筋
一御湯當手洗　一組　代銀貳百目程
黒蠟色邊掛計
一御手拭掛同斷　一脚　代銀百拾匁程
一御褥夏冬二つ入　一箱　代銀五百八十八匁九分程　御褥二共
一御膳具　一通り　代銀三貫七百六十三匁五分程　潰銀は不籠諸色込
黒蠟色御紋ちらし
一御掛盤御本二三　一通　一御本椀七つ組　一具
一御替汁椀　一具　一御二の椀　二具
一御三の椀　二具　一御吸物椀　三具
一御淺物椀　七具　一御盃　二枚
一御平皿　四具　一御坪皿　二具
一御腰高　七　一御木直口　二

一御縁高　一
一御食次　二
一御杓子御はい帳共　二本
一御湯當　一
一御水さし　一
一御切立　一
一御菓子盆　二枚
右御椀たんす入
一七寸御重　一組
一銀御直口　二
一銀御皿　二枚
一同御菓子鉢　一
御めん類
同御汁次　一
一同御からみ次　一
一同御間鍋　一對
右一箱に入
一御掛盤御はい帳　一箱
一銀御薬罐　一
一御茶臺一つ入　一箱
御きせなし
一御茶臺（此内一通り御茶に臺蓋共）
春慶
一大御三方　三枚
上に同
一御通ひ三方　七枚
御先方御道具
一御刀掛　二脚
代銀二百七十五匁程　御外箱共
黒蠟色御先方御紋附
御外箱いつれも黒柿合ぬり
一御茶碗臺御ふた共　一
代銀五拾七匁五分程　御茶碗并御ふた共御外箱共

同断
一御茶碗 染附　二
一御多葉粉盆 御小道具共　一面　代銀五百五十七匁貳分程 御小道具御外箱共
同断
一御灰押御香箸御きせる一對銀
御刀掛け
〔一御太刀掛　一
村なし地御先方御紋付　一御外箱黒柿合ぬり
一御茶碗臺　一御多葉粉盆の小書に 御火入灰吹眞鍮にて銀めつき毛彫」
一御鼻紙箱　一　代銀百九拾八匁程 御外箱共
黒蠟色御先方御紋付
一御鼻紙臺 同断　一　代銀貳百七拾目程 御外箱共
一御鏡　二面　代銀二百八拾目程 御家御鏡立 御外箱共
御家黒蠟色御先方御紋付
一御鏡立　同断
「御鼻紙箱小書に　銀御圭算一本　御鼻紙臺小書に　御紙押銀御圭算添」
〔一御鼻紙箱は無御座候　一御鼻紙臺の小書に 黒蠟色塗金いつかけ
一御文鎮 銀一　御外箱黒柿合ぬり　一御鏡は一面

一御湯當手洗御手拭掛
黒蠟色御先方御紋附金いつかけ
一御嗽茶碗　　一御揚枝箱
一御耳手洗　　一御鏡立」
一御湯當手洗　一組　代銀貳百拾五匁程御外箱共
黒蠟色御先方御紋附
一御手拭掛　一脚　代銀百貳拾目程御外箱共
同斷
一御嗽茶碗ふた共　一　代銀百七拾五匁程　御ふた御臺御外箱共
一御臺黒蠟色御先方御紋付　一
一御揚枝箱同斷　一　代銀貳拾五匁程御外箱共
一御耳手洗同斷　一　代銀九十五匁五分程御外箱共
一御からこ箱　一　代銀貳拾五匁程眞鍮御匙共
黒塗眞鍮御匕添
一御料紙箱　一　代銀三百八拾五匁御外箱共
黒蠟色御先方御紋附
一御硯箱同斷　一　代銀右料紙箱代銀の内へ籠る小道具共

一御褥夏冬二つ入　一箱　代銀四拾五匁程御褥は御名物の部にあり

〔一御からこ箱無御座候尤京都にて御不用之由御座候

一御料紙箱の塗村梨子地御先方御紋ちらし

一御硯箱も右同斷

御小道具左之通認出御座候

一御小刀御金物銀唐草毛彫一本　一御きり上に同　一本

一御墨差同斷　一本　一御墨　一挺

一御水入銀角形無地　一　一御筆御外箱黒柿合ぬり　一對

一御褥　御毛氈無御座候

本行の外に

一御鋏　一挺
一御毛抜　一對　認り御座候〕

一御不淨筋
一御湯當手洗　一通り　代銀二百目程御外箱共

黑塗無地金いつかけ

一御手拭掛同斷　一張　代銀百十匁程御外箱共

一御毛氈　二枚　代銀七十六匁程

一御先方樣に御隱居有之歟又は御部屋住へ之御入輿に候得は御隱居幷御當主御出之節之御道具　殿樣被爲　成候節之通り御道具御用意之事

但御紋附之分御先方御定紋附

〔上使女中道具は勿論無御座候事〕

「本行之外に　上使女中手道具

一黒蠟色唐艸蒔繪縁に金逸懸

一櫛道具香盆形小道具共　三人前

一鏡立　三張

一輪臺　三

一湯當手洗　三通

一置巨燵　壹

一提十能臺付銅　壹

一多葉粉盆小道具共きせる鍍　三面

一硯箱小道具共　壹

一茶わん　十

一炭斗黒塗唐草蒔繪　一

一鼻紙臺　三

不淨筋一手拭掛黒塗金逸掛

一臺子　一通り

一鏡大小家共　六面

一耳手洗盃共　三

一嗽器ふた共　三

一手拭掛　三張

一ほんぼり六角形臺附黒柿合塗　二

一硯ぶた文鎮共　三組

一料紙箱　一通り

一茶臺ふた共　五通り

一手あぶり火鉢黄唐金眞鍮金火はし共　三

一塵取黒塗唐草まきゑ　一

不淨筋一湯當手洗　一通り

内小道具
風爐　一
鉄釜　一
水差　一
水こほし　一
柄杓立　一
蓋置　一
右いづれも黄唐金
一御服紗　三
一御茶碗　六
一火はし　一膳
一茶入箱　一

御彈物類

一御彈前御琴　一面
御蒔絵御紋ちらし
一御柱箱御蒔絵右同様　一
一御爪御箱御蒔絵右同様　三十
一御袋にしき　二具

一茶碗臺　三
一御棗　二
一御茶筌　一
一御茶巾　一
一御柄杓　一本
一御茶杓　一本
一水漉　一本
一茶ぶり　一
一毛氈　五枚」

代銀貳貫八百三十二匁六分程　諸色込
御三棚同様御蒔絵
一御柱
内　十五御蒔絵同様
　　十五御紋附
一御外箱　黒蠟色金粉御紋付

一大御外箱　黒柿合ぬり

「一御彈前御琴　御蒔繪斗　一面

一御爪　二具

一御爪箱御蒔繪同樣　一

一御外箱蠟色塗御紋付

一御袋にしき」

〔御彈前の外に

一御錺御琴　一面

一御柱箱御蒔繪右同斷　一

一御替柱御紋付　十五

一御袋錦

一大御外箱　黒柿合ぬり」

一同　御　琴　一面

一御柱箱御蒔繪右同樣　一

一御爪　二具

一御外箱　黒蠟色金粉御紋付

「一御彈前御琴　一面

一御柱箱御蒔繪右同樣　一

一具は象牙御蒔繪
一具は黒塗御蒔繪　御爪裏二具共金粉御紋一つゝ

一御柱同斷上に御紋付　十五

一大御外箱草の柿合塗

御蒔繪御三棚御同樣

御柱　十五

一御爪御箱御蒔繪御柱箱之通　二具

一御外箱黒塗金粉御紋附

代銀貳貫六百六拾円匁三分一厘程　諸色込 御蒔繪御紋なし

一御柱　三十　内　十五 御蒔繪右同樣
十五 裏葵御紋付

一御錦袋

一大御外箱　黒柿合塗

御蒔繪御紋なし　御蒔繪右同樣

一御柱箱　一　　一御爪　壹具御蒔繪右同樣　壹具金から皮　御爪裏御紋附　二具

一御柱御蒔繪上に御紋　脇へ御まきへ　十五　　一御爪箱御蒔繪右同樣　一

一御袋錦　　一御外箱　蠟色塗御紋付

大外箱黑柿合ぬり

右御彈前二面之外に

一御鎊御琴　一面　　御蒔繪御三棚御同樣

一御柱鐵か木にて甲象牙　十五　　一同紫檀にて　十五

一御柱箱二重物　御蒔繪同斷　一　　一御爪箱同斷　一

一御爪象牙の所へ御蒔繪同斷　一具　　一御袋錦

一御外箱　黑蠟色塗御紋附　　一大外箱草の柿合ぬり」

〔一御彈前御琴前に有之一面計にて本行御琴は無之〕

一御彈前御三味線　一挺　代銀九百九拾七匁三分五厘程　諸色込

御蒔繪

一御撥　象牙　一枚

御袋　金入毛織　　御箱　黑蠟色金いつかけ御蓋へ御蒔繪附

一御駒御箱右同斷　一　　一御糸箱塗等右同斷　一

一御三味線袋金入毛織　一　　一御三味線箱黒蠟色ぬり　一
「一御撥袋御三味線袋錦　　一御撥箱御糸箱御駒箱黒蠟色塗御蒔繪
一御三味線箱黒塗
右之外本行御同樣」
〔御三味線袋
御撥袋〕錦
右之外本行御同樣尤都合二丁」
一御彈前御三味線　御蒔繪　一挺　代銀七百八拾七匁三分五厘程　諸色込
一御小道具等右同斷
「本行御彈前御三味線無之」
一御皷弓　一挺　代銀三百八拾七匁八分五厘程　諸色込
一御弓黒塗中繼御袋花色金入毛織　一本　一御駒　一
一御皷弓袋金入毛織　一　一御外箱　濃溜塗
「御駒二枚　御外箱　濃溜ぬり
右之外は本行御同樣」
一御次琴御蒔繪　二面　代銀壹〆五百目程　諸色込
一御柱　三十　一面十五つゝ　一御柱箱黒ぬり　二
一爪　箱黒塗　二具　一御袋さんす　二

一御外箱　煤色付

一御次三味線　三挺　代銀壹貫目程　諸色込

「御次三味線　四挺　御小道具は本行御同様」

〔二挺〕

一糸箱黒ぬり金いつかけ　一　一撥箱同斷　一

一象牙撥袋さんす　三本　一御三味線袋さんす　三

一御外箱黒柿合塗

一御調子竹　御外箱共　一通り　代銀三拾四匁五分程

一御外箱黒塗

御側御道具類

一丁字御風爐釜　一通り　代銀二百六拾五匁程　諸色込　潰銀は不籠

銀から草毛彫

一居臺　唐桑金粉御紋附　一御外箱　黒眞柿合ぬり

一御万寶掛　一御外箱

一御筒守

一天兒　一御伽

一犬張子
右三品
一御外箱　白木　　一御小道具　疊紙に包
右御五品は御出來に不及御持來を御修覆に相成候事
一御冠棚御外箱共　一　代銀壹貫五拾目程　潰銀は不籠
梨子地御紋ちらし
一御外箱黒眞柿合ぬり
「濃梨子地御紋ちらし」
一御爪切手洗　一　代銀七拾五匁六分程　御外箱共
黒蠟色御紋附　一御外箱　黒柿合ぬり
「黒蠟色御紋附金逸掛　一御外箱　黒眞柿合塗」
〔黒蠟色御紋附金逸掛〕
一御爪切文庫御小道具　二　代銀五拾八匁五分程　御外箱共
黒塗金粉御紋附
「一つは御紋附　一つは其御方様御印附」
〔一つ御紋附　一つ御印附〕
一御細工箪笥御小道具共一御引出し五　一　代銀貳百四拾三匁五分程　諸色込

黒蠟色縁に金逸掛　　一御外箱　黒柿合ぬり

一御細工物入御簞笥黒柿合ぬり「溜塗」　一　　代銀八十二匁程

一御碁盤御碁器御石共　一面

一御將棊盤御駒御箱共　一面　　御三面代銀七百貳拾四匁八分程　諸色込

一御双六盤御筒御挽石御賽共 一御挽石袋金入　一面

「一御挽石袋　錦　　一銘々淺黄加賀袷御服紗に包

右之外は御同様」

〔御挽石袋錦〕

右御三面四方かわ廻り附黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし

御小道具黒蠟色御紋ちらし

一銘々淺黄加賀御服紗に包　　一御外箱黒眞柿合ぬり

一御次碁盤御碁器御石共　一面

一御次將棊盤御駒御箱共　一面　　三面代銀貳百四拾八匁程　諸色込

一御次双六盤御筒御挽石御賽共 御挽石袋 さんす　一面

右三面共四方黒蠟色塗　　御外箱　黒柿合ぬり

一御小書棚　御外箱共　一　　代銀三百八拾目程

黒蠟色御紋ちらし　　御外箱　黒柿合ぬり

一御香御道具　　代銀壹貫三百八拾目程　諸色込

一花軍香　一箱　御人形十組（玄宗 楊貴妃）官女八人　持枝十本

一六儀香盤　一箱　鳥居　二　玉垣　四　立物　十本

一蓬萊香盤　一箱　御人形　三（西王母 官女二人）鶴龜其外立物

右御箱いつれも黒蠟色塗　〔御香道具　其御方様思召次第〕

「一御香具御道具筋

一兩面蹴鞠花軍御香盤　一箱　蹴鞠香御人形其外御小道具入一箱

但御人形十　鞠二つ　立物四本

花軍香御人形入　一箱　但御人形十玄宗楊貴妃官女八人

折枝持枝十本きく花梅山吹椿牡丹櫻紅葉桔梗若竹

一兩面矢數名所御香盤　一箱　競馬御香盤　二枚入組

右内へ入組

矢數御香盤立物　矢　十本　金のざい十銀のざい十

名所香立物　さくら　五本　もみぢ　五本　短冊　十枚　串　一本

競馬香人形二　黒裝束赤裝束　此馬黒此馬赤立物紅葉一本

一舞樂香御香盤　一箱　舞樂人形　一箱　人形高三寸

右は源氏舞樂之裝束　人形高三寸

右は朧月夜十二單之裝束　　立物もみち二本　さくら二本
投扇一柄　かさしの菊一枝　かさしの紅葉一枝　幔幕二張　樂太皷一　樂鐘皷一
右いつれも一箱に入組
一花守香御花立　　一箱
立物　海棠　五本　花守鈴　五　かさゝき　五羽
右御箱何れも黑蠟色塗」
一御香札箱御引出し附　一　代銀三百七拾目程　諸色込
右へ納り候御香札數
一花軍香札　一六儀香札　一蓬萊香札
何れの御香札にても御品定り候上知れ可申事
銘々御服紗包」
「新月香札六十枚　煙競香札八十枚　舞樂同　九十枚
花軍同　九十枚　花守　同百　枚
右銘々御引出しへ入御服紗包」
一御歌かるた　三通　代銀壹貫三百六拾壹匁三分程　諸色込
自讃歌　壹箱　伊勢物語　一箱　百人一首　一箱
いつれも御帙にしき御箱黑ぬり

右御香道具御歌かるたは猶其御方様之思召次第御品替り可申事

一御十種香箱御小道具共　一　代銀七百貳拾六匁ノ分程　諸色込

黒蠟色御蒔繪御紋ちらし

一御袋　白地錦　　一御外箱黒眞柿合塗

一御伽羅簞笥　一　代銀壹貫貳拾貳匁程　諸色込

一錫御伽羅壺　一　一御外箱　黒柿合ぬり

一御櫛道具入御戸棚　一　代銀五百九拾目程　繪具代其外共　諸色込

溜塗御繪唐紙二枚入

一御長かもし箱　一　代銀四百八拾壹匁壹分程　諸色込

黒蠟色御紋ちらし

一御かもし二掛入　一御外箱黒柿合塗　淺黄木綿御袋掛

一御詠草箱御外箱　一　代銀三百八十壹匁五分程

黒蠟色御蒔繪　一御外箱　黒眞柿合塗

一御短冊箱　一　代銀百五拾壹匁七分程　諸色込

同斷野郎ふた御下水板入　一御外箱　同斷

一御朱硯箱御小道具共　一　代銀五拾七匁三分程　諸色込

唐木ぬり　一御外箱　同斷

一御重硯箱十三組 御小道具共　一組　代銀五百拾匁程　諸色込

唐木ぬり　一御外箱　たんす差黒塗

一御料紙箱　一 御料紙 御硯箱　代銀五百拾匁程　諸色込

黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし

一御服紗　淺黄加賀　一御外箱　黒柿合塗

「御料紙箱御硯箱御机　黒蠟色御蒔繪御紋ちらし」

「御仕廻道具御文臺まで　御同樣に御蒔繪」

一御硯箱　御小道具共　一面　黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし

一御服紗御外箱同斷

一御　机　一脚　代銀三百三十目程　諸色込

黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし　一御服紗御外箱　同斷

一御見臺　一　代銀三百貳拾三匁程　諸色込

黒蠟色御紋ちらし　一御服紗御外箱　同斷

「御見臺　御文臺　御文臺附御硯箱　黒蠟色御蒔繪御紋ちらし」

「御見臺　御文臺　御文臺附御硯箱共　黒蠟色御蒔繪御紋ちらし」

一御文臺　一脚　代銀五百目三分程　諸色込　左之御硯箱代も籠る

同斷　一御服紗御外箱右同斷

一御文臺附御硯箱　一面　代銀右御文臺代銀之内へ籠る
黒蠟色御紋ちらし　一御服紗御外箱右同斷
「一御脇息　一脚　梨子地御紋付」
一御外箱（一本御紋付 黒柿合ぬり）　一御服紗淺黄加賀
［一御脇息　一脚
黒蠟色御紋ちらし御紋附　一御外箱黒柿合ぬり
一御沉箱　一
御掛子附御香合六つ入　黒蠟色御紋ちらし」
一御沉割箱御小道具共　一　代銀四百目程　諸色込
右同斷　一御外箱黒柿合ぬり
一御鼻紙箱　一　代銀三百貳拾五匁程　諸色込
黒蠟色御蒔繪　一御外箱　黒柿合ぬり　一御ふくさ淺黄加賀
「黒蠟色御蒔繪御紋ちらし　一御外箱黒眞柿合ぬり　一御服紗淺黄加賀」
一御はんそう角手洗御外箱共　一　代銀貳百目程
内村梨子地外黒蠟色御紋ちらし　一御外箱　黒柿合ぬり
「外黒蠟色御蒔繪御紋ちらし」
一御絹張　二通り　代銀三百三十二匁三分程　諸色込　左に御しるし等の代も籠る

黒蠟色御紋ちらし
一御しゐし　二百本　内百本長張　無地黒ぬり
一御しゐし箱并臺共
白木若松若竹白繪御袋白練　御絹張御しゐし共
一御服紗　淺黄加賀　一御外箱　黒柿合ぬり
「御外箱　黒眞柿合ぬり」
一御硯蓋　貳枚組一組　代銀百五拾目程　諸色込
村梨地御紋ちらし
一御服紗　淺黄加賀　一御外箱　黒柿合ぬり
「濃梨子地御蒔繪御紋ちらし　一御外箱　黒眞柿合塗」
一同　二枚組一組　代銀百五匁八分程　諸色込
黒蠟色御紋ちらし
一御ふくさ御外箱も同斷　〔蒔繪御紋ちらし〕
一御廣蓋　三枚組二組　代銀貳貫貳百六拾八匁六分程　諸色込
内一組村なし地御紋ちらし　一組黒蠟色御紋ちらし
一御服紗御外箱同斷
「村梨子地之方を濃梨子地御蒔繪御紋附」

〔御蒔繪御紋ちらし〕

一御鼻紙臺　一　代銀五百九拾弐匁九分程　諸色込　潰銀は不籠

村梨子地御紋ちらし　一御文鎭　二

一御服紗御外箱同斷　「濃梨子地御紋ちらし」

一御きぬた　一通り　代銀百四拾五匁六分程　諸色込

槌　三本　木口黑塗金粉御紋附

一御外箱　黑柿合ぬり　槌も一所に入御袋淺黃木綿

一御衣桁　二脚　代銀八百四拾五匁程　諸色込

内 一脚　黑蠟色御蒔繪御紋ちらし　一脚　黑蠟色御紋ちらし

一御服紗　淺黃加賀　一御外箱　黑柿合ぬり

「一御衣桁　三脚

内 一脚　梨子地御紋ちらし　一脚　黑蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし

一脚　黑蠟色御紋附」

〔一御衣桁　三脚

内 一脚　村梨子地御紋ちらし　一脚　黑蠟色塗唐草御蒔繪御紋ちらし

一脚　黑蠟色御紋附〕

一呉服御文庫 御紐御かなもの 御風呂敷共　二　代銀三百九拾八匁三分程

黒蠟色御紋附　　一淺黄木綿御風呂敷に包

「三つ」　〔三つ〕

一御側簞笥　　一　　代銀四百目程　諸色込　潰銀は不籠

御引出七つ御戸兩開　　同御紋ちらし

一御服紗淺黄加賀　　一御外箱黒柿合ぬり　　一御ゆたん　とんす

一御文庫　　大中　二　　代銀三百八拾七匁三分程　御紐御かな物　御風呂敷共

黒蠟色御紋附　　一淺黄木綿御風呂敷に包

「大中小　三」　〔大中小　三〕

一御小簞笥　　二　　代銀七百六拾八匁程　諸色込　潰銀は不籠

黒蠟色御紋ちらし　内一つは無地　　一御外箱黒柿合ぬり　　一御覆　とんす

〔御道中筋一御簞笥長持春慶塗　一棹　　一御革覆金御紋付〕

一御藥箱　　一　　代銀三百七拾六匁程　諸色込　潰銀は不籠

黒蠟色御蒔繪菊之立木　　一御香合金粉御紋附　三

一銀御匕　　一本　　一銀御へら　一本

一御服紗　淺黄加賀　　一御外箱　黒眞柿合ぬり

一御疊紙

「御引出附　　一黒蠟色塗菊之御蒔繪

一御香合の脇書に　　印籠煉御紋付金逸掛」

〔御薬箪笥〕

一御輿入御薬箱　　一　　代銀貳百六拾五匁程　諸色込　潰銀は不籠

村梨子地御蒔繪菊

一御小道具等都て右同断　　但御香合銀御紋附唐草毛彫

「御輿入
一御鼻紙箱　　一つ　　代銀貳百五匁程　諸色込」

一御守脇差箱掛子有　　一　　代銀貳百七匁　諸色込　潰銀は不籠

黒蠟色金粉御紋附

〔御守脇差箱　　御鼻紙箱右同様之御蒔繪御紋〕

一御居臺　折足　　黒蠟色金いつかけ

一御外箱御居臺共　　一　　黒柿合ぬり

「御外箱御居臺　黒柿合ぬり」

一御頂戴物箱　　一　　代銀百七拾貳匁程　諸色込　潰銀は不籠

御掛子附御居臺共　　黒蠟色金粉御紋附

一御外箱　眞柿合ぬり　　一淺黄加賀御服紗に包

一御符箱　　一　　代銀百四十三匁四分壹厘程　諸色込　潰銀は不籠

一御盃　　十　　朱塗金逸掛

蠟色金粉御紋付

一御外箱　春慶塗黑漆御紋附「御外箱黑眞柿合塗」〔御外箱　黑柿合ぬり〕

一御灸箱　一　代銀三百五拾目五分程　諸色込

黑蠟色御蓋之上へ計菊折枝御蒔繪

一御硯箱　御小道具共 御蒔繪右同斷　一　一御もくさ箱　一

一御灸箸　五膳　一御かわらけ　五

一御ほいろ無地黑ぬり　一通り　一御疊紙　五枚

御外箱黑柿合ぬり　御火入御ほいろ銘々淺黃木綿御袋に入

一御羽ほうき鶴羽御柄白地にしき二本　一棕呂手箒　一本

一御外箱　黑柿合塗　一御服紗淺黃加賀

右御ほいろ之外御小道具類御灸箱に入組

一貘御枕　一對　代銀五百貳拾七匁程　諸色込

組物之處朱塗木口なし地一方へ貘一疋一方へ南天折枝一本御紋一つ附陽貘之方也陰貘之方は
南天二本附

一御外箱黑眞柿合塗　一御服紗　淺黃加賀

一御書御文箱但長半小三つゝ　九　代銀五貫百三十九匁六分七厘程　諸色込潰銀は不籠

〔三つ〕內　濃梨子地　村梨子地　黑蠟色　御蒔繪御紋ちらし之類見合出來

一御服紗　淺黃加賀袷　一御外箱黑蠟色金粉御紋附　九　一大御外箱春慶ぬり　九
一御半文箱　七　代銀貳貫四百四拾五匁八分程　諸色込潰銀は不籠
御蒔繪等右同斷或は御紋無之も交る　一御服紗御外箱大御外箱も右同斷
「御紋無之筋一つ交る」　〔五つ〕
一長御文箱　七　代銀三貫四百九十四匁五分四厘程諸色込潰銀は不籠
右同斷　一御服紗其外も同斷
一竪御目錄箱　五　代銀壹貫九百三拾八匁六分程　諸色込　潰銀は不籠
內　三つ　黑蠟色唐草御蒔繪　二つ　黑蠟色御紋ちらし
一御服紗淺黃加賀　一御外箱黑上花塗
「六つ內　二つ黑蠟色唐草御蒔繪　一つ黑蠟色御紋ちらし　三つ黑蠟色御紋附」
〔江戸御城御用　但江戸誂附
本文箱　二　蠟色金御紋附紅唐糸御ひも　一御外箱　上花ぬり御紋なし
橫御目錄同斷　一　蠟色金御紋附紅唐糸御ひも　一御外箱　上花ぬり御紋なし」
一橫御目錄箱　三　代銀壹貫五百四拾壹匁八分程　諸色込　潰銀は不籠
內　二つ　黑蠟色唐草御蒔繪　一つ　黑蠟色御紋ちらし　一御服紗御外箱同斷
一御荷　一荷　代銀壹貫六百十四匁程　諸色込
黑蠟色御紋附　一御外箱　春慶　一大外箱に不及

「黒蠟色御紋ちらし」　〔一黒蠟色御紋ちらし」

一呉服御簞笥　二　代銀壹貫七百九拾貳匁程　諸色込

御戸兩開　黒蠟色御紋附　一御油單　花色さあや單御紋白上り

「御呉服箱　一荷　黒蠟色塗御紋附

右左御ゆたん花色さあや單御紋白上り　三つ」

一御伏籠　二組　代銀六百八拾七匁七分程　諸色込

黒塗唐草御蒔繪

内　箋　一組　菅　一組　一御外箱　黒柿合ぬり

一御伏籠附箱御火鉢　二　代銀貳百六拾貳匁六分　諸色込

眞鍮火はし　二膳添　黒蠟色ぬり御火鉢黃から金　御外箱　柿合ぬり

一御平常御伏籠御火鉢共　一組　代銀貳百五拾五匁程　諸色込

一御藥通ひ箱　二　代銀七百五匁五分程　諸色込　遺銀は不籠

内　一つ黒蠟色御蓋廻へ計菊折枝御蒔繪附御紋付　一つ黒蠟色御紋附

一御外箱　一つ黒塗朱御紋付此大外箱黒柿合塗　一つ黒柿合ぬり

「一つ黒蠟色塗御蒔繪御紋附　一つ同斷御紋附御蒔繪なし

御外箱　一つは金粉御紋附　一つは黒ぬり朱御紋附

一大外箱黒柿合ぬり」

一御薬篭笥　二　代銀貳貫三百六拾六匁程　諸色込　潰銀は不籠
内　一つ　村梨子地御紋ちらし　一つ　黒蠟色御紋ちらし　一御服紗浅黄加賀
右御小道具
村梨子地の方
一銀御香合　三　一銀御匙　大小　二本
一銀御篦　一本　一銀御薬鍋　二
一同御薬溜　二　一同御湯煎黒ぬり袴共　二
一同御茶碗御ふた共　二　一同御茶臺
一同御薬計御柄黒ぬり　二　一同御薬秤
右銘々浅黄木綿御袋に入御外箱白木
蠟色の方
一黒塗御薬漉きぬはり御紋付　二本　一御秤れいてんく　一挺
一御生姜切小刀　一本　一御水漉　一本
一御調合臺黒ぬり　一　一御炭斗黒柿合ぬり　一
一杉御小手桶割ふた柄杓壹本　一　一黄唐金御風爐御敷板五徳共内一つ杉形一つしかみ形　二
一御薬てんひん　一通り　一眞鍮御火箸　一膳
一御湯煎さはり　一　一御薬三方蠟色御紋附いつかけ　二膳
一御臺子覆溜ぬり御紋附いつかけ　二
「御調合臺　桑木地　さはり御湯煎は　眞鍮

一御調合臺　黑ぬり一
一御外箱黑柿合ぬり
一御たけ長箱　御居臺共　一
代銀五十七匁程　黑柿合塗
一五倍子挽石臼
代銀百拾六匁五分程　諸色込
一枕臺　一
一箱篩眞鍮御匙一本添　一
一羽箒　一本
一御外箱いつれも黑柿合塗
「居臺共　黑柿合塗朱御紋附」
〔挽臺黑ぬり〕
一御繭黑壺　大小　二
代銀拾貳匁程　諸色込
一御出しかね鍋　一
小竹柄杓　二本
一御かねこし　一本
内　外拭ひ漆釣鉄藤卷
一御外箱黑柿合ぬり
「内外拭ひ漆釣戸卷御ふた取手附」
〔一御柳箱　一
一御白粉もみ箱　一
御掛子附
御茶碗　大（白）一本小　一
御篩　一
御茶碗居臺　一
御白粉摺　一本
先きに水晶御柄桑眞鍮はりかれ卷
羽箒　二本

黒ぬり縁にいつかけ

一御茶臺御茶碗ふた共　二

内　一組濃なし地御紋附
　　一組黒蠟色御紋附

〔御納戸筋〕
一御たんす　ためぬり　〔三棹〕

一御からこ箱　二　代銀五拾三匁七分程　諸色込

眞鍮御匙二本
内一つは黒ぬり　一つは溜ぬり

一御置巨燵御火鉢共　一　代銀百五拾目程

〔白木御火鉢眞鍮并御大火箸共〕

一御提灯　三張　代銀七拾五匁程

朱と黒にて御紋二つヽ附

綟子張
一御臺子　一餝　代銀壹貫三百三拾五匁八分程　諸色込

黒蠟色唐草御蒔繪御紋付

一御風爐から金敷板黒柿合塗　一　　一御釜鉄　一

一御水さし黄から金　一　　一御蓋置黄から金　一

一御水こほし同　一　　一御柄杓立同　一

一臺十能　一　　一御火はし　一膳

一御外箱白木

「一大御盆丸　一枚
黒蠟色塗内御紋附縁廻り唐草御蒔絵　一浅黄木綿御袋に入」
〔黒蠟色唐草御蒔絵御紋ちらし　一御風爐　黄から金〕
右御臺子附
一御茶たんす　一　代銀五百十五匁八分程　諸色込
黒蠟色唐草御蒔絵御紋附
一御茶碗臺御ふた共　一　一御棗御袋共　二
一御茶杓御筒共　一本　一御茶筌　一本
一御水漉　一本　一御茶碗　五
一紫御（緥）一本但　一　一御茶ふり　一
一御茶入箱　一　一御柄杓　一本
一御茶巾　一　一御拭巾掛　一
右御臺子附
一御水なかし御附戸棚附二枚戸入　一つ　代銀百六拾五匁程
「一御茶碗臺御ふた共
一つ黒蠟色御紋附金逸掛　一つ若竹橘御蒔絵御紋附金逸掛
一御棗　一つ日向御紋附　一つ陰御紋附

一御茶碗染付三大白二　五　一御水瀝　溜ぬり　御〔掛〕(拭カ)巾掛

一御茶杓御筒共

本行之外に

一御炭計上花ぬり　一

〔一御茶碗臺　御ふた共　二

一御茶わん　五つ　内染付三　大白二　一御茶ふり　一御茶入箱　溜ぬり

一御臺火鉢　七脚　代銀三貫五百七拾五匁程　諸色込

内　二脚　小形　黒蠟色唐草御蒔繪御紋附　三脚　黒蠟色御紋附　二脚　黒塗無地

一眞鍮細張ほや七つ　一黄から金御火鉢七つ

一眞鍮御火箸　七膳　一御外箱黒柿合ぬり

〔一御火鉢　九脚

但黒蠟色御紋附唐草御蒔繪之方大形にて二つ増」

〔五つ

内　一つ　村なし地御蒔繪御紋附　一つ　黒蠟色同斷

一つ　無地いつかけ　二つ　ためぬり

外に　提御手あふり　眞鍮無地　一」

一御炭計　三　代銀四拾目貳分程

内　一つ　黒塗　二つ　柿合ぬり

「三つ共黒柿合ぬり」
〔二つ内　一つ御蒔絵　一つ黒塗〕
一御多葉粉通ひ箱　一　代銀弐拾六匁七分程　諸色込
二重もの
溜塗御ふたへ黒漆御紋付　一御外箱御居臺共柿合塗
一御焼薬入　一　代銀三十七匁程　諸色込
薄溜塗行燈青土佐張御火入錦手　瀬戸物御香箸灰押
一御軸盆　一　代銀五拾六匁七分程　御外箱共
朱うるし御紋附　一御外箱黒柿合ぬり
〔一御軸盆　一
本洗朱塗御紋附　一御外箱柿合塗
一御軸の物　二通り　銘々箱入御服紗浅黄羽二重
一御掛物　一幅物　三通り　一御香爐　二　一御外箱共
一銀御香爐　御香盆小道具共　一　一御香臺　一
右之通り認有之御香爐数は本行と御同様に御座候得共委儀は認無之御小道具も委細は書出
無御座候」
〔御軸盆を　御長盆　本洗朱御紋附　御外箱黒柿合ぬり〕

一御軸の物　一通り　代銀五百目程　諸色込
　一御ふくさ淺黄加賀　一御外箱黒柿合塗
一御掛物　御繪の外一幅諸色込　代銀三百目程　共箱可定事
　一御服紗御外箱同斷
一青磁御香爐　御ふた銀籠目　一　代銀百五拾目程　諸色込
一あこた御香爐　御蓋金滅金 檜垣すかし　一　代銀百三十目程
〔唐金御香爐　二　御香臺　二〕
一御香爐　一
　一御香盆　一枚　御香爐御香盆共黒蠟色ぬり唐草御蒔繪
　右御香爐附
　一御香箸　金滅金　一膳　一御灰押　上に同　一本
一銀御香匙火筋立　二　代銀三十目程　潰銀は不籠
内　一つ六角梅唐草すかし　一つ唐草毛彫
一御茶壺　一　代銀六十三匁程
一御毛氈　二十枚　代銀七百六拾目程
　「貳拾五枚」
一眞鍮三足燭臺　眞切壷さや共 但御さや六角黒ぬり　三本　代銀貳百拾參匁程　諸色込

「五本」

一唐金御燭臺　同斷　大小　十五本　代銀壹貫三百五拾七匁五分程　諸色込

一鉄御燭臺　同斷　同　十五本　代銀八百七拾七匁五分程　諸色込

「一唐金燭臺　大小　十五本　鞘眞切壺共　一鉄燭臺　十五本

黒塗御紋附唐草蒔繪鞘黒ぬり」

一御手燭黒ぬり御鞘共御外家入　一本　代銀四拾五匁程　諸色込

「御手燭御鞘共後外家入黒ぬり唐草蒔繪　五本

一脚立　ぬくひうるし」　三脚

〔御手燭　五本

御脚立　京都にては無御座候」

一御花生　代銀五拾目程　其節之御模樣次第

一御薄板　黒ぬり　代銀貳拾九匁五分程　諸色込　御花生に可應事

一御服紗淺黄加賀　一御外箱黒柿合ぬり

「一御花生　二

右之外に

一釣御花生　一　一切溜御花生　一　一御花瓶　一對

此御三品無御座候　御外箱黒柿合ぬり

一御薄板は　一枚
御花臺は　一對」　〔一京都も二枚〕
「御薄板の脇書に　一御ふくさ淺黄加賀　一御外箱黒柹合ぬり」
一御花臺　御外箱共　一對　代銀百拾匁程　一御外箱黒柹合塗
〔御花臺無御座候〕
「一御瓶子　一對　御外箱黒柹合ぬり」
〔一御瓶子　一對　銀だみ　御外箱黒柹合ぬり〕
殿様より進被候
一御太刀箱　一　代銀三百五拾目程
同
一御小脇差箱　一　代銀二百五拾目程
一御花たんす大中小　四　代銀百五拾目程　御花筒御居臺共
黒柹合ぬり　御花筒　春慶
〔御花たんす　大中小　三〕
一御花桶　三　代銀貳百貳拾五匁程　御居箱御外箱共
黒ぬり　一御外箱同斷
「御花たんす　大中小　三　御花筒　春慶塗　一御外家　黒柹合ぬり
御花桶　眞柹合ぬり金粉御紋
〔御花桶　眞柹合塗金粉御紋附〕

一御風呂屋御道具　　代銀八百四拾七匁壹厘程　諸色込

一御入桶　御ふた共　一　　一御たらい　大中小 わりふた　三

一御檀　一　　一桃形桶　一

一切桶　二　　一御手桶　棒共　二荷

一御湯溜桶　御ふた共　一　　一かいけ　一

一御水溜桶　御ふた共　一　　一大柄杓　一本

一水こし　一本

「一御手洗　大の方 白木箱入　　一御湯溜桶御水溜桶　脇書に 御ふた共

一水漉　壹本　　かいけ　一本

一本行に有之切桶二つは無之左之通に御座候

一御湯こほし桶　一　　一御次手桶　一　　一御手拭掛　一　　一御不明溜塗　一」

一御幕　御串共　五張　　代銀三貫五百八拾五匁貳分程　諸色込

内　純子御幔幕　一張　　紫紗綾御紋附　一對　　晒御紋附　一對

「一御幕　串共　三對

内　純子田町交　一對　　紫縮緬御紋附　一對　　花色さあや　一對

【四對

内　純子御幔幕　一對　　紫さあや御紋附一對　　紫ちりめん同一對　　麻御紋附　一對

一御翠簾　　　七枚　　　代銀壹貫百五拾五匁　諸色込

一御重箱　　　十組　　　代銀四貫三百七拾目程　諸色込

　　内　一組　梨子地御蒔繪御紋附　　　五組　黑蠟色御蒔繪御紋ちらし

　　　　其外は御蒔繪無之御紋ちらし或は御紋附其節見計御出來之事

　　　　一御外箱いつれも黑塗

一御行器　　　三　　　代銀四百拾參匁壹分五厘程　諸色込

　　内　壹荷　黑蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし　　貳荷　黑蠟色御紋附

　　　　　一御外箱黑柿合ぬり

　「御行器　　　五荷

　　　二荷　黑蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし　　三荷　黑蠟色御紋附

　　　　　御外箱　黑眞柿合塗　朱漆御紋附」

一小御行器　　　一荷　　　代銀六百五拾目程　諸色込

　　　黑蠟色塗御紋附　　　　　　一御外箱　同斷

　「黑蠟色御紋ちらし　小御行器　壹荷」

　〔京都には無御座候〕

一御食籠　　　五對　　　代銀貳貫三百七拾壹匁程　諸色込

　內　二對　黑蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし　三對　黑蠟色御紋附

御外箱　同断

「一御食籠　　六荷

内　貳荷　黒蠟色唐草御蒔繪御紋ちらし　　三荷　黒塗御紋附

小一荷同　　御外箱　溜塗」

一御屏風　大中小品々　貳拾五双程　　代銀貳拾五貫五百拾五匁壹分程　諸色込　潰銀は不籠

内　一双　御翠簾屏風　　三双　御小屏風　　五双　金地御屏風

右之外は一通り之御繪屏風或は御障子屏風或は唐紙張等之積

一御屏風挾　　十二　　一同　下挾　　六

一御れんちん　　八本　　一御外箱黒柿合塗

金地御屏風以上御服紗淺黄加賀其餘は御服紗花色絹

「御小屏風　　五双　　其外は御同様」

〔大中小品々　　二十双程　　內譯本行御同様〕

御平生筋

一御手洗　　一　　代銀四百六十目程　　黒蠟色御紋附金逸掛

「大小二つ　　御湯當も二つ」

〔大小二つ　　御湯當も二つ〕

一同御湯當　　一　　一同御手拭掛　　一張

御不淨筋
一御手拭掛　黒ぬりいつかけ　一　　同
一御湯當手洗同斷　一通り

此四品代銀右御手洗代銀之内へ籠る

一御多葉粉盆　一面　代銀四百六拾五匁貳分程　諸色込　潰銀は不籠

黒蠟色御蒔繪御紋ちらし

一銀御きせる　一對　一御小道具いつれも銀　御外箱黒柿合ぬり

「平目梨子地御蒔繪　御外箱黒眞柿合塗」

一御輿入御多葉粉盆　一面　代銀壹貫貳拾八匁程　諸色込　御銀は不籠

梨子地御蒔繪御紋ちらし

一御引出し之内　御硯其外御小道具　御きせる銀壹對

一御外箱黒柿合ぬり

一御小道具いづれも銀　御外箱　黒眞柿合塗」

「一御提多葉粉盆黒蠟色御蒔繪　一面

一御書物　被進筋紙鄕入楚共品々　代銀三貫目程　諸色込

一御たんす（春慶溜塗）寸法色々　一御ゆたん花色絹單御紋附

一御褥箱　黒柿合塗　五　代銀貳百貳拾五匁程　御褥は御召物之部にあり

内夏御褥三つ入　一　冬御褥三つ入　一
同二つ入　一　同二つ入　一

一御輿呉蓙蒲團入御箱　一　代銀四十五匁

右同斷

一御袴入御文庫黒塗御紋附　二　代銀三百目程

一御上疊 大紋縁　二疊　代銀九拾五匁七分程　御外箱共　一御外箱白木

「御上疊　白木 二箱　但三疊御縁大紋」

一御かつら箱

御掛子附　御小道具共　黒柿合ぬり

「黒柿合塗」

一御かつら立瀬戸物　二　御外箱黒柿合塗

〔御かつら箱　御かつら立　御かつら立臺　代銀三十三匁程　諸色込〕

一御かつら立臺　一

黒塗　一御外箱右同斷

一御掛物竿　二本　代銀八匁六分程

竹にて溜塗　淺黄木綿御袋に入

「大小　二本　竹ぬくひうるし」

一角赤代り御箱　一　代銀百八拾三匁程　諸色込

御引出し　二　黒蠟色塗

一御外箱　黒柿合塗　一淺黄木綿御風呂敷に包

「御引出二つとの品は認り無御座候　御外箱は白木
御風呂敷に包候との義も認り無御座候
此上紙一ヶ條は追て御極め可被遊間此儘差置候様にとの御事」

一御有明行燈　一　代銀百五匁程　諸色込
御引出し火打箱仕込御小道具共
眞濃溜塗　御金物幷上下皿其外金具銅
「御有明行燈御小道具共　一
眞の濃溜塗御油次箱黒眞柿合ぬり」

一御先ほんぼり　一　代銀貳拾八匁五分程
四角方御柄臺共黒ぬり

一御塵壺　二　代銀四拾目程
内　一つ黒塗　一つ春慶ぬり

一御塵取　二　代銀十五匁程
黒塗　御羽箒添
「御慶壺　二
取手二重戸かけ黒柿合ぬり」
【黒柿合ぬり　取手二重戸かけ】

一御手傘 白張　一本　代銀七拾五匁程 御袋代共
御柄朱塗藤巻　一御袋　花色加賀
「御手傘
御日傘 共御柄黒塗　御袋　黒かねきん
右之外本行御同様に御座候」
〔御柄黒塗藤巻〕

一御日傘 青土佐張御紋附　一本　御手傘代之内へ籠る
同断　一御袋同断

一御太刀掛　一脚　代銀五百五拾五匁程 諸色込 潰銀は不籠
濃梨子地御紋ちらし
一御ふくさ　浅黄加賀　一御外箱　黒柿合塗
「御ふくさ　浅黄加賀袷」

呉服之間御道具

一御長持　二棹　代銀三百九拾五匁程 諸色込
春慶塗　黒漆御紋附　一御ゆたん花色絹單御紋附
「三棹　溜塗黒漆御紋附」
〔五棹　溜塗黒漆御紋附〕

一御箪笥　一　代銀百九拾四匁八分程　諸色込

御引出し四　御戸兩開

同斷　一　御ゆたん同斷「塗右同斷」

一御裁物箱　一　代銀三拾九匁貳分程　諸色込

黒ぬり金粉御紋附

一双ふくら御さや柄共黒ぬり二挺　一小刀上に同し　二挺

一御さし　五本　竹にて　三本　石南花　二本

一御裁物板　一枚　代銀三百貳拾壹匁五分程　諸色込

木地朴にて木口黒ぬりはしはめ入

一御定木　二本　一御鋏　四挺

一御針文庫黒ぬり　三　一御糸巻　大小　三十

一塗桶黒ぬり　二　一御火のし黄唐金御柄御臺共黒塗　二

一御掛針　眞鍮　一御錦切鋏　一挺

「一御裁物板　一枚

足木口黒ぬり

一定木　大小　二本　一鋏　大小　八挺

一針文庫黒ぬり　四　一糸巻黒上花ぬり　三十

一塗桶 三 内一つ木二つ瓦
一掛針 五
〔御鋏 大小 八丁
御糸巻 黒ぬり
御針かけ 三
右之外は本行御同様〕

一火のし 臺共 三
一御（錦）切鋏 一本綿 一挺〕
御針文庫黒ぬり 三
御塗桶 一つ木二つ瓦 三

一御袖形 白木 二枚 代銀貳匁程
内 一枚は御留袖形
一御押板 檜にてはしはめ入 二枚 代銀八拾目程
一御敷板 三十五枚 代銀貳百八拾目程
一箱火鉢 二 代銀貳百七匁程
春慶塗 「溜塗」 銅火蓋火箸共〔ためぬり〕
一炭斗 一 代銀六匁五分程
一臺十能 銅臺柄共黒柿合ぬり 一 代銀四十目程
一硯箱 小道具共 一 代銀十三匁五分程
「黒ぬり出來合」
一御燭臺 二本 代銀百貳拾貳匁程 諸色込

唐金眞切壺さや共

「燭臺　大小　五本」

〔燭臺　三本〕

一銅提ほんぼり　一　代銀貳拾四匁三分程　諸色込

一黒塗平たばこ盆　一面　代銀三十五匁程・諸色込

火入灰吹黄から金烟草箱一きせる眞鍮

一茶びん　一　代銀五拾八匁程

煮黒目　釣籐巻

一御てうちん　三張　代銀貳拾目七分程

「一鉄行燈小道具共　一　一糊板御へら共　一枚」

〔本行の外に

一鉄行燈小道具共　二　一糊板御へら共　一枚

一茶たんす溜ぬり　一

一茶船　一　一茶わん　五　一茶壺ふた共　一

一はたき　一本　一五徳　二

一棕梠箒　二本　一八寸　二枚

一間鍋　一　一盃　二枚

一一つ物鉢　一　一あふりこ　二

御右筆之間御道具

一御進物入御長持　三棹　代銀五百九拾貳匁五分程　諸色込
　春慶塗黒漆御紋附
　一御ゆたん花色絹單御紋附
「御長持　四棹　御進物入
　溜塗黒漆御紋附」
「一御長持　五棹
　溜塗黒漆御紋附
　一御ゆたん花色絹單御紋附
一御進物入御長持　二棹
　春慶塗同斷
　一同斷」
一御長持　同斷　二棹　代銀三百九拾五匁程　諸色込
　一御ゆたん同斷
「塗右同斷」

一革包御文箱　十五　代銀壹貫六匁八分程　諸色込
青漆革着せ金御紋きめ込
「十二御紋附　三つ御印附」
〔七つ〕
一同竪御目録箱　同断　一　代銀百三十貳匁三分六厘程　諸色込
〔二つ〕
一同横御目録箱　同断　二　代銀貳百貳拾九匁六分貳厘程　諸色込
「よせ葵御紋附」
一御たんす　一　代銀貳百七拾三匁程　諸色込
春慶塗黒漆御紋附
一御ゆたん　花色絹單御紋附
「溜ぬり黒漆御紋附」
〔溜塗黒漆御紋附〕
一御文庫　五　代銀五百五拾九匁九分程　諸色込
黒蠟色朱御紋附
「内　中小　二　金粉御紋附　大中小　三　朱御紋附」
〔大中小　五　黒蠟色塗御紋附〕

一御挾箱　四走　代銀六百六拾五匁程　諸色込
黒塗御華覆金御紋附
内　大一走　小三走
〔大三走　小一走〕
御疱瘡節
一御牛文箱　一　代銀三百四十壱匁五分程　諸色込
内外朱ぬり御紋附
一御外箱も同様　一御ふた緋さんす
〔貳つ〕
一長御文箱　一　代銀三百四拾六匁程　諸色込
同斷　一御外箱御ふくさも同斷
同
一横御目錄箱　一　代銀三百四拾五匁程　諸色込
同斷　一御外箱御服紗も同斷
一上差　春慶ぬり　五　代銀百五拾七匁程　諸色込
内　一つ御札箱　御蓋へ黒漆御紋附
四つ　御蓋へ御印計附
「六つ
内　大二　柿合ぬり朱御紋附

中小三　黒柿合ぬり
小一つ　春慶ぬり黒漆御紋附」
〔上差無御座候〕

一机　三脚　代銀貳拾四匁程
出來合溜ぬり
「一御札箱　春慶ぬり黒漆御紋附」

一掛硯箱　三　代銀四拾五匁程　諸色込
掛子附引出し二つ小道具共　黒柿合ぬり
「硯箱　黒ぬり　四面　小道具共」

一御臺　十枚　代銀八十六匁程
内　五枚　春慶ぬり　五枚　黒柿合ぬり
「目錄代　五　溜塗黒御紋附」
〔目錄臺　三　溜ぬり〕

一御紙臺　春慶塗　一枚　代銀拾五匁程
「御紙臺
御熨斗人箱　無御座候」
〔無御座候〕

一御熨斗人箱　白木　一　代銀拾貳匁五分程

一御肴籠　大中　二　代銀五拾壹匁五分程

　一御外家　黒柿合塗

〔御肴籠　大中小　七つ
御菓子籠　同　五つ　さなた様にても下札之通〕

一御菓子籠　大中小　三　代銀三十六匁九分程

　内　大一つ角　中小二つ丸　一御外家右同断

一御重御外家　二重入 一重入　大小六つ　代銀貳百貳拾目程

　黒塗〔一本アリ も〕へき眞田紐

一印判　印肉共箱入　一　代銀拾五匁程　諸色込

一御燭臺　眞きり共　三本　代銀百八拾三匁程　諸色込

「一鉄行燈　一　小道具共」

〔一鉄行燈　二　小道具共〕

一銅提ほんほり　臺柄共　一　代銀貳拾四匁三分程

　「二つ」　〔二つ〕

一箱火鉢　春慶銅火ふた火はし共　一　代銀百三匁五分程　諸色込

　「二つ」　〔二つ〕

一臺十能　柄臺共柿合ぬり　一　代銀四拾目程　諸色込

「一敷紙　大中小　三」

一炭とり　柿合ぬり　一　代銀六匁五分程
一茶ひん　煮黒目釣籐巻　一　代銀五十八匁程
一黒塗平多葉粉盆　一面　代銀三拾五匁程　諸色込
火入灰吹黄唐金眞鍮きせる一對たはこ箱共
「多葉粉盆　二面　一手燭　一　さや眞切壺共」
一小刀　二挺　代銀三匁六分程
一きり　一本　代銀貳分四厘程
「小刀　三本　柄溜ぬり　錐　二本　同斷」
一釘貫　一　代銀三匁貳分程
一もふせん　三枚　代銀百拾四匁程
一かな槌　一　代銀壹匁八分程
一御てふちん　五張　代銀三十四匁五分程
一はさみ　一挺　代銀壹匁八分程
「三挺　一のり板　一板　へら共」
一紺木綿御風呂敷　二十　代銀百四拾壹匁四分程
御紋白(一本ナシ)上り端へ御印并御右筆の間と染出し　但大中小いろ〳〵且御紋無之筋もあり
〔一本行之外に〕

一敷紙　大中小　三枚　　一唐金手燭　一

一御紋附雨かけ　一荷　　一茶たんす　溜ぬり　一　一茶船　一茶臺　一　一茶わん　ふた共　五

一はたき　一本　　一雑巾たらい　一

一五徳　二　　一棕梠ほうき　二本

一八寸　二枚　　一間鍋　一

一盃　二枚　　一一つ物鉢　一

一あふりこ　一

表使詰所

一黒塗平多葉粉盆　一面　代銀三十五匁程

火入灰吹黄から金たはこ入箱一きせる一對共

一箱火鉢　火はし共　一　代銀八十目程

一炭とり　柿合ぬり　一　代銀六匁五分程

一茶ひん　煮黒目釣籐卷　一　代銀五拾八匁程

一提ほんほり　一　代銀貳拾四匁三分程

一十能　一　代銀七匁八分程

一硯箱　小道具共　一面　代銀十三匁五分程

一御てうちん　三張　代銀貳拾目七分程

〔表使詰所と申株は無之客座敷御道具之内に本行之通相見猶又本行之外に左之通り御座候

一印判　一

一茶碗　七

一五徳　二

一八寸　二枚

一盃　二枚

一間鍋　一

一一つ物鉢大小　二

一茶臺　一

一鉄行燈　二

一茶たんす溜ぬり　一

一茶ふね　一

一戸棚　溜ぬり小道具共　一

一掛硯箱溜塗引出し二小道具共　一

一桶　一

一棕梠ほうき　二本

一はたき　一本

一雑巾たらい　二〕

御三之間預り筋

一臺十能　一　代銀四拾目程

一野風呂　一　代銀三十八匁程

一八寸　廿枚　代銀十五匁程

一ほんほり臺附　一　代銀二十四匁三分程

一蚊遣り　奥御用筋　一通　代銀六拾五匁程
一菓子盆　五十人前　代銀七拾八匁程
一茶わん　五十　代銀拾九匁五分程
一御てうちん　十張　代銀六拾九匁程
〔御三之間預り筋と中株は無之奥茶所御道具左之通
一箱火　鉄火はし二張　二　　一五徳　二
一薬罐　二　　一手桶　杓二本　二
一棕梠ほうき　二本　　一はたき　二本
一手ほうき　一本　　一塵取　一
一炭〔斗〕（取カ）　二　　一臺十能　二
一天井はらい　二本〕

南紀德川史卷之百二十九

臣 堀内信 編

典禮第五

御姫樣方御入輿御道具帳 下

御膳具類

一 村梨子地御膳具 御紋附内朱 一通り 代銀六貫貳百貳拾四匁貳分程 諸色込 潰銀は不籠

「村梨子地御膳具 一通り 御紋附御蒔繪内朱 御椀具木行御同樣」

「村梨子地御膳具 一通り 御紋附御蒔繪内朱 御椀具木行御同樣」

一 御掛盤 御本二三 一通り

一 御替汁椀 一具

一 御三の椀 二具

一 御淺物椀 七具

一 御平皿 四具

一 御腰高 七つ

一 御昆布食籠 一對

一 御杓子 御はい帳共 二本

一 御水差 一

一 御本椀 七つ組 一具

一 御二の椀 二具

一 御吸物椀 三具

一 御 盃 二枚

一 御坪皿 二具

一 御木猪口 二つ

一 御食次 二つ

一 御湯當 一

一 御切立 一

一御木錫　一對
一御菓子盆　二枚
右御椀たんす入
一七寸御重　一組
一銀御皿　二枚
一同御汁次 御めん類　一
一同御間鍋
一御瀨戸物皿 大中小　二枚つゝ
右一箱に入
一御掛盤 はい張　一箱
〔御膳具一通りに付銀御藥罐一つゝ付〕
一御茶臺　一箱
一大御三方 春慶ぬり　三枚
一御かけ 花色さんす　一つ
右一箱に入
一御盤立 春慶ぬり　二脚

一御緣高　一
一御箸 御箱共　一膳
一銀御猪口　二
一同御菓子鉢　一
一同御からみ次　一
一御瀨戸物茶碗　三
一銀御藥罐　一
外に
一御茶臺御きせなし　一
〔上に同〕
一御通ひ三方　十枚
一御鉢包 紅さあや　二つ

一御膳具　一通り　代銀五貫五百七拾四匁貳分 諸色込　潰銀は不記

黒艶色御蒔繪御紋附内朱　御椀具等都て村梨子地御膳部の通御出來之事

一御高臺御膳具　一通り　代銀貳貫貳百四拾六匁程　諸色込

一御　膳　具　一通り　代銀三貫七百六拾五匁程　諸色込　潰銀は不籠

黒艶色御紋附内朱　御椀具等都て前段同様御出來之事

但御昆布食籠御木錫は御不用に付不及御出來　外に左之通り御出來之事

一御めん類たいこ鉢　一　一銀御さし　一本

一銀御湯のこすくひ　一本

右御椀たんすへ入組

一御瀬戸物

一御ちよく　三　一御膾皿　三

一御燒物皿　三　一御中皿　三

一御小皿　三　一御めん類皿　三

一御鮎皿　三　一御銘酒猪口　三

一錫御皿鉢　二　一御硯蓋　二枚

右一箱に入

一御長柄御加　二通り　代銀四百五拾三匁程　御外箱共

二通り共銀滅金御紋鶴龜松竹毛彫一御外箱　黒梻合ぬり

一銀御野風爐　一　代銀百三十目程　御外箱共　潰銀は不籠

一御外箱同斷

一同御藥罐　一　代銀五拾九匁五分程　御外箱共　潰銀は不籠

御外箱同斷

一銀御鉢　御はい帳共大小　二枚　代銀百七拾目程　御外箱共　潰銀は不籠
御紋唐草毛彫　御外箱同斷
一御辨當　一荷　代銀七百九拾五匁程　諸色込　潰銀は不籠
黑蠟色御紋附　但御掛盤幷御椀具其外は御紋ちらし內朱
一御掛盤　御本二　一通り　　一御本膳　五つ組　一具
一御二の椀　二膳　　一御吸物椀　二膳
一御平皿　大小　二膳　　一御坪皿　大小　二膳
一御腰高　三　　一御めし次　一
一御杓子　御箱共　一本　　一御吸筒　一
一御通ひ盆　五枚　　一御重箱　三重物　一組
一御汁入（一本ナシ御內ふた共）　二　　一御湯當　一
一御菜入　二　　一御箸　御逆輪銀御箱共　一膳
一御盃　朱ぬり御紋付　二枚　　一鐵御間鍋御鈞御ふた銀　一
一御貝杓子　一本　　一御皿　瀨戶物大小　二枚
一唐金御鍋御ふた黑塗朱御紋附　一　　一たゝみ五德　一
一御鉢臺　黑ぬり無地　一　　一御拭巾　一
一御小道具包淺黃加賀

一御外箱　黒柿合塗

〔一御腰高　二　一銀御間鍋

一唐金御鍋大小御ふた黒ぬり朱御紋附　一御鍮皿 本行之外に御座候　一

一御小皿　二

一御外箱黒真柿合朱御紋附に

〔本行之外に

一御輿入御小辨當　一組　御掛子附かふせふた 黒御椀具蝋色塗御蒔絵あり

一二つ折御膳　一枚　一御椀 四つ組　一膳

一御平皿 身計　一　一御盃 朱ぬり　一枚

一御杓子　一本　一御小重 二重物　一組

一御小重 一重物　二組〕

一御爪道具 御紋唐草毛彫　一通り　代銀三百拾匁程 諸色込　遣銀は不籠

一銀御爪鉢　一枚　一銀御爪皿　三枚

一同御直口　三　一御かつふり 御柄唐木 御逆輪銀　三本

一淺黄木綿御袋入　御外箱白木

〔一本ナシ〕〔一京都より參候帳面には無之候得共此度之調帳には本行御同様認出御座候〕

一御提重　二組　代銀四貫三拾目程 諸色込　遣銀は不籠

一組　濃梨子地御蒔繪御紋ちらし御盃金たみ御蒔繪同斷　御德利二つ銀きせ
內
一組　黑蠟色御蒔繪御紋ちらし御盃御德利御蒔繪同斷
一御外箱　黑柿合ぬり　御居臺　黑ぬり
「御提重　三組
內
二組は本行御同樣尤御德利本行には銀きせさ御座候處　丸印には銀
一組　黑蠟色御蒔繪御紋附
御盃御德利本行黑蠟色之筋さ御同樣　御外箱も黑ぬり大御外箱溜ぬり」

一御蕎麥船　二組　代銀四百目程　諸色込
一組　十重　御居臺共　黑蠟色ぬり
一御外箱臺差　黑柿合塗朱御紋附

一御先方御膳具　二通り　代銀四貫貳百四拾九匁程　諸色込　潰銀は不籠
內
一通り黑蠟色御先方御紋附
一通り[illegible]塗御先方御紋附

一御掛盤　御本二三　一通り　一御本椀　七つ組　一組
一御替汁椀　一具　一御二の椀　二具
一御三の椀　二具　一御吸物椀　三具
一御淺物椀　七具　一御　盃　二枚
一御平皿　四具　一御坪皿　二具
一御腰高　七つ　一御木猪口　二つ

一御食次　二つ　　一御杓子（御はい帳共）　二本

一御湯當　一つ　　一御水さし　一つ

一御切立　一つ　　一御縁高　一つ

一御菓子盆　二枚

右御椀たんす入

一七寸御重　一組　　一銀御猪口　二

一銀御皿（御めん類）　二枚　　一同御菓子鉢　一

一銀御汁次　一　　一銀御かうみ次　一

一銀御間鍋　一對

右一箱に入

一御掛盤御蠅帳　一箱　　一銀御藥鑵（御きせなし）　一

一御茶臺　一つ入　一箱　　一御茶臺（上に同）　一

一大御三方（春慶）　三枚　　一御通ひ三方　七枚

右之通御二通り御出來之事

一御先樣御膳具　二通

一通り内外洗朱塗御紋附

一通り葡萄塗御紋附内朱御精進筋

右之外御極具本行（一本之通）御同様に御座候）」

〔御先樣御膳具

一御臺　六膳

黒塗内朱　一御はい帳春慶萠黄紗帳

一御小高杯　御はい帳に同　三十膳

御先方様御紋附　一御盃　緞子覆共　四

一御飯鉢　御杓子共　黒ぬり金逸かけ　四

御紋無用　一御菓子鉢　四枚

同　一御刺身皿　六枚

同　一御中皿　八枚

同　一御鮎皿　六枚

同　一中御直口　十

薄様御紋なし　一染附御煎茶碗　十

御先方御紋付　一御水次（一本ナシ口ふた共）　二

今（一本品）やき　一御爪鉢　二枚

一御中高杯　六膳

上に同　一上に同

一御平盤　黒塗内朱　三十枚

唐草斗　一御茶碗（一本ナシ御ふた付）　七十

錫御先方御紋付　一御湯次　口蓋　二

一御湯の子すくひ　一本

上に同　一御一つ物鉢　六枚

同　一御鱠皿　六枚

同　一御小皿　十枚

同　一大御直口　八

同　一御銘酒猪口　十

御先方御紋附　一錫　口ふた共　二對

同　一御茶臺　二

同　一同御蓋　四枚

御先方御紋附
一銀御爪皿　五枚　　上に同 一銀御小皿　五枚

同 一御直口　五枚　　一純子御掛　二

一小き御掛　三　　一天目臺　二　木地にて塗御先方御紋附 御茶碗同蓋共

右塗物之分は絹袷袋に夫々入

一御鉢ふとん　二

「一上使女中三人分

一寸高 一白大三方　三面　　一常白大三方　四面

一白小三方　六面　　一三　方　木二　十組

一銀御湯次　三　　猫足膳部　木二三　七人前

蠟色塗唐草蒔繪内朱

猫足膳部十人前さ御座候處七人前さ直り有之椀具も此數に可減さ御座候付書替之通り相成候

一本　椀　五つ組　十膳〔七膳〕　　一二の椀　十膳〔上に同〕

一三の椀　同〔同〕　　一吸物椀　同〔同〕

一替汁椀　同〔同〕　　一平　皿　同〔同〕

一坪　皿　同〔同〕　　一腰　高　三十〔廿一〕

一緣　高　十組〔七組〕　　一高　鉢　五

一杓　子　五本　　一朱　盃　金粉蒔繪　十枚〔七〕

一塗冊鍋 つまみ銀　三　　一湯　當　三通り
一水　差　二通　　一湯蓋茶椀 差上筋　十（七）
一湯切立 差上筋　五　　一同汁次 上に同　五
一錫　皿　十枚（七枚）　　一鉢　臺　三
一瀬戸物
一差身皿　十枚（七枚）　　一鱠　皿　十枚（上に同）
一燒物皿　同（同）　　一猪　口 大中十つゝ　二十（十五）
一いり酒直口　十（七）　　一中　皿　十枚（上に同）
一小　皿　廿枚（十五）　　一蓋茶碗　十（七）
一菓子鉢　十枚（七枚）　　一鮎　皿　十枚（七）
一加役皿　同（同）　　一統汁直口　十（七）
一名酒直口　同（同）　　一盤　立　九面
一足附盆　十五枚（十三枚）
一春慶ぬり御三方五十膳程 是は下地七十膳さ御座候處を五十膳さ直し御座候に付其儘差置申候
一御重箱蒔繪　三組　一御外箱 黒柿合ぬり　一御居臺 同　一御ふくさ淺黄加賀絹
右入組
御長持二棹黒柿合ぬり 御ゆたん紺木綿唐草御紋附

一御客樣前御膳具　三通り　代銀三貫五百三十目貳分程　諸色込

黒蠟色内朱御蒔繪御手道具之通り

一御掛盤　御木二三　三通

一御本椀　〔御本椀五つ組 四つ組〕　三通

一御汁椀　六膳

一御二の椀　六膳

一御三の椀　同

一御吸物椀　同

一御平皿　同

一御坪皿　同

一御腰高　十五

一御　鉢　御臺共　二

一御湯（當）一本當　御口ふた共　三

一御水差　御口ふた共　三

一御杓子　御箱一　三本

一御菓子盆　六枚

一御縁高　二

一御　盃　六枚

一御茶碗臺　御ふた共　三

一錫御瓶子　三つ　二つ

一御瀬戸物

一春慶御三方　三十枚

一御菓子皿　三枚

一御膾皿　三枚

一御燒物皿　三枚

一御鮎皿　三枚

一御中皿　三枚

一御小皿　三枚

一御直口　六つ

一小御直口　三つ

右御入組御長持　一棹

〔御瀬戸物三枚つゝ〕

御ゆたん紺木綿御紋附

「御木椀の小書四つ組ゟ七つ組

一御坪皿　御平皿　御縁高御ふた共

一春慶御三方無御座候」

一御客様筋

（白木）一御薄盤　本二三向詰共　拾通り

（同）一大御三方　拾膳

一御通三方　七十膳

一錫御食次　御杓子共　五

一銀御水次　五

一朱御盃　二十

（春慶塗）一御三方戻子覆　十

（薄様）一御茶椀　土器ふた共　三百五十

（同）一御中皿　廿

（同）一大御直口　同

（同）一御鱠皿　同

（同）一御刺身皿　同

（同）一御三の膳　十膳

（同）一御縁高　十

（黒金いつかけ）一御食次　御杓子共　五

一銀御湯次　五

一御肴重七寸四重物替ふた共　一組

（春慶ぬり）一御綟子覆　本二三　五通

（同）一丸戻子覆　大小　十

（薄様）一御鱠皿　二十

（同）一御小皿　同

（同）一中御直口　同

（同）一御向詰鉢　同

（同）一御水仙皿　同

一同御煎茶碗　同
一同御濱焼鉢 緞子覆共　二枚
一かつふり　五本
一緞子御のし掛　二
一御盤立　六面
御客宛て
大清
一御三方 本二三　十方前
大清中清
一御重臺　合二十
一平　附 本二　百」

一同名酒御直口　同
一同御肴鉢　十枚
一緞子御懸　八
一御布巾　五掛
一銀御徳利 銀口共　五
中清
一御三方 本二三　十方前
上に同
一御小四方　合三十

「一御瀬戸物各数六つゝにて
御菓子皿御焼物皿無之　御刺身皿六枚御一つ物皿六枚
御肴鉢　二枚　御茶碗十五　御水仙皿六枚　御水仙小皿六枚多く御座候
銀御道具
御汁次　二　御間鍋　五　御水次　二　御鉢　一枚
御水仙(一本すくひ は)六一本御湯の子すくひ一本
一御外箱何れも白木
一御長持之塗黒柿合ぬり朱御紋附」

御客樣前

一御臺子　　一飾　　代銀壹貫百四拾七匁九分程　諸色込

　黒蠟色唐草御蒔繪

一唐金御風呂釜　　一唐金御水差

一同御柄杓立　　一同御蓋置

一同水瓶

一同御茶寶筒　一　　代銀右御同樣

　右同斷

一御濃茶々碗　十　　一御薄茶々碗　十

一御服紗　十　　一御棗　袋入ぬり箱入　二

一御茶碗蓋　十　　一黒塗御茶臺　五

一御柄杓　二本　　一御茶筌　二本

一御茶巾　二　　一御茶杓　筒入　二本

一釜敷　一　　一火はし　一膳

「御小道具本行御同樣にて數十ゝ御座候筋何れも五つ
一御茶臺二つ」

一黒塗御炭計　一つ　　右御臺子代銀に籠る

一猫足膳部　本二三　十八前　　代銀六貫三百三十一匁七分程　諸色込

　若竹折枝蒔繪内朱

一木椀　五つ組　十人前
一三の椀　廿膳
一坪皿　同
一腰高　五十
一鉢臺　木具形　五
一水さし　口ふた共　一
一盃　朱塗若竹松枝蒔繪　十枚
一茶碗臺　ふた共　五
一春慶三方　廿枚
一瀬戸物
一大皿　二十
一鱠皿　二十
一大直口　十
右外箱白木
右入組御長持　二棹　黒柿合塗
御ゆたん紺木綿唐草御紋附
一猫足膳部　本二三　十五人前
黒蠟色塗蒔繪二葉葵内朱緣に逸(金)　一本揃

一二の椀　二十膳
一平皿　同
一吸物椀　同
一めし次　杓子五本箱入　五
一湯桶　口ふた共　三
一塗間鍋　ふたつまみ銀　五
一菓子盆　十枚
一茶碗　十
一茶臺　十
一緣高　十
一中皿　二十
一小皿　二十
一小直口　十

本椀十五人前　其外は

椀具本行御同様にて十八前之所は廿人前二十膳と有之所は三十膳

一塗間鍋之脇書に蓋つまみ銀

一盃の脇書に朱塗若竹折枝蒔繪

一春慶塗三方を溜塗

一瀬戸物之内繪皿三十多く御座候

但瀬戸物も各數三十つゝ

一御長持　三棹」

「堂上方息女上﨟御局抔へ出候筋

一白木足打　本二　十八前

一同鉢居　五膳

一黒塗湯當　二

一塗緣高　十

薄様七寶青海もよう
一繪皿　二十

同
一小皿　同

同
一煎茶々碗　同

同
一鮎皿　同

一同八寸　五十膳

一黒塗食次　杓子共　五

一朱盃　十

薄様七寶青海もよう
一茶碗　土器ふた共　二百

同
一中皿　二十

同
一中直口　同

同
一燒物皿　同

同
一刺身皿　同

一同水仙皿　同　　一同菓子鉢　同
一同名酒直口　同　　一錫　三
一白木具　木二　五人前　　一大直口　二十

老女幷上通女中筋

一白木ひらつけ　廿人前　　一白粉　廿枚
一食次　杓子共　四　　一湯當　二つ
一朱盃　廿　　一染付茶碗　土器ふた共　三百
一染付鱠皿　同　　一同中皿　二十
一同小皿　同　　一同煎茶之碗　同
一同大直口　同　　一同燒物皿　同
一同鮎皿　同　　一同刺身皿　同
一菓子盃　同　　一錫　三
一中直口　同

中通末々女中筋

一黑平折敷　五十人前　　一同通ひ盆　三十枚
一同食次　杓子共　七つ　　一同湯當　五

一朱　盃　五十　一茶　碗（染附）土器ふた共　三百
一鱠　皿　五十　一手塩皿（同）　五十
一直　口（染付）　同　一焼物皿（同）　同
一中　皿（同）　同　一肴　鉢　十枚
一錫　五

老女幷上通女中筋塗椀具

一春慶塗木具　本二　廿人前　一黒宗和本膳　四つ組坪平共　廿人前
一黒宗和二の膳　廿人前　一同吸物椀　四十人前
一同食次　杓子共　五　一同湯當　三
一同通ひ盆　廿枚

中通より末々女中筋

一猫足膳　本　五十人前　一淺黄椀　四つ組坪平共　五十人前
一同吸物椀　五十人前　一同食次　杓子共　七
一同湯　當　五つ」
一塗木具膳部　本二　二十人前　代銀五貫九百八十四匁程　諸色込
内（黒塗無地十人前／春慶塗十人前）椀具いつれも黒塗内朱〔此御膳具前／附紙之内に籠り居候〕

一本　椀　四つ組　廿膳　一二の椀　三十膳
一吸物椀　四十膳　一こし高　四十
一坪　皿　二十　一平　皿　二十
一めし次　杓子共　五　一春慶八寸　三十枚
一春慶鉢臺　五膳　一湯　當　五
一水　次　五　一盃　朱ぬり　二十
一菓子盆　二十　一茶椀臺　ふた共　七
一鉄間鍋　出來合朱ふた共　七
一瀬戸物
　大　皿　二十　中　皿　二十　鱠　皿　二十
　大直口　二十　小直口　二十　小　皿　二十
　茶わん　二十
　　右外箱　白木
右入組箱長持　三棹　黒柿合ぬり
　御ゆたん紺木綿唐花御紋附
「塗木具膳部　本二斗　二十人前
黒溜色塗椀具（一本付 計）金逸掛内外（一本朱 黒）
一本椀小平に五組　一吸物椀腰高四十五膳つゝ

一坪皿平皿　三十つゝ　一盃の小書に朱ぬり

瀬戸物は

皿 大中小廿つゝ　六十　猪口 大小廿つゝ　四十　膾皿　二十

鮎皿　二十　茶碗　十

瀬戸物

皿 大中小廿つゝ　六十　猪口 大小廿つゝ　四十　膾皿　二十

鮎皿　二十　茶碗　十」

御次
一御臺子　一餝　代銀七百五拾五匁八分程 諸色込

黒花塗

一唐金御風呂釜　一同御蓋置　一唐金御水指

一同御柄杓立　一同水翻

「黒塗其外本行御同様」

御次
一御茶簞笥 溜塗　代銀右御臺子代銀の内へ籠

一濃茶之椀　十五　一薄茶之椀　十五

一服紗　十五　一棗 内濃茶之棗は袋入　二

一茶杓　二本　一茶筌　二本

一柄　杓　二本　一茶　巾　二
一茶椀ふた　十五　一釜　敷　一
一火　箸　一揃
「塗は上花ぬり
本行に十五と有之分何れも十　一本行之外に茶碗臺五有之候」
一黒塗炭計　一　代銀右御臺子代銀之内へ籠
一御伽天兒膳部　代銀五百六拾目程　諸色込
塗物類黒塗朱にて鶴亀松竹蒔繪
春慶
一薄　盤　本二三　二通り　一本　椀　四つ組　二膳
一二の椀　二膳　一三の椀　二膳
一吸物椀　二膳　一平　皿　ふた共　二
一かさ　ふたなし　二　一腰　高　二
一坪　皿　ふた共　二　一盃　朱ぬり無地　二枚
一緣　高　ふた共　二　一菓子皿　二枚
春慶
一湯　當　二　一めし次　杓子共　二
同
一三　方　十一　一瓶子臺三方　白木　二枚
一鱠　皿　瀬戸物　二　一本猪（直）口　瀬戸物　二

一小　皿　同　二　　一焼物皿　同　二

一外箱白木

右入組御長持　二棹　黒柿合ぬり御紋附

一御ゆたん紺木綿御紋附

〔一御薄盤　本二三　二通　　一御三方　十三面

一御手盥皿　四つ・

一左之通り本行之外に御座候

白木御鏡居臺　二　　白木一御鉢居三方　二

御小角　四　　一御水差　二

御三の椀　二　　一御木皿　十五

大直口　二　　一神酒徳利　一對

一御薄盤御三方御縁高も白木

一御椀具赤繪

右之外本行御同様〕

御長持

黒蠟色唐草御蒔繪御紋附

一御長持　二棹　代銀貳貫九百四拾四匁程　諸色込

一御油（單）純子御紋白統　一本宛

黒蠟色金御紋附

一御長持　十五棹　代銀拾五貫六拾目程　諸色込

一御ゆたん右同斷

同朱御紋附
一御長持　十棹（十五棹）　代銀五貫七百拾六匁五分程　諸色込

一御油單花色紗綾單御紋白上り

溜塗黒漆御紋附（溜塗朱御紋附）
一御長持　十五棹　代銀三貫三拾一匁三分五厘程　諸色込

一御油單花色きぬ單御紋白上り

黒柿合ぬり朱漆御紋附
一御長持　十棹程　代銀壹貫九百三十目程　諸色込
〔四十棹程さ有之候御長持數の儀は御入組之御樣子にて其節（得と）可相定事〕

一御油單紺木綿唐花御紋白上り

春慶黒漆御紋附
一御長持　廿五棹程（五十棹程）五十棹程　代銀五貫二百十八匁七分五厘程　諸色込

一御油單花色ぬき單御紋白上り

黒柿合ぬり御風呂屋筋
一御長持　二棹　代銀三百四拾目程　諸色込

一御油單紺木綿無地

「本行之外に

眞柿合ぬり朱漆御紋附
一入組御長持　四十棹程

一御ゆたん紺木綿無地」

〔次仕廻道具夜具等入候御長持二十棹程〕

奥御膳所御道具

一大御平皿　二　代銀二百五十目程
から草御蒔繪御紋附

一小御三方　一枚　代銀百七十目程　御蠅帳共
御紋附御蠅帳共

一御茶碗臺　御蓋共　一　代銀百二十目程　御ふた共
から草御蒔繪御紋附

「本行之内左之分丸印帳面には無之候

一大御平皿
一小御三方　御はい帳共
一御茶碗臺
一御太皷鉢
一鉄御間鍋
一黑塗御三方　御はい帳共
一黑塗朱御紋附御はい帳
一黑ぬり御重居臺
一黑塗御臺
一御名酒德利
一春慶御臺　御はい帳共
一柿合塗御臺　御はい帳共
一蕨手附御箱
一春慶塗御箱
一銀御銚子
一御いり鳥鍋　火はし外箱共
一御　鍋　御箱共
一御膳たて

一御膳米入箱
一御味噌桶
一御薬罐臺
一御鍋臺
一御膳笊
一御蕎麥上け笊
一御椀たて御薄盤
一御水なかし
本行之外に左之通り御座候
一砂糖入壺 七ニ本添 二
一御酒湯煎 一
一醤油徳利 三升入 一
一庖丁 眞那板共 二通
一御菓子小刀 箱共 二本
一あふりこ 四
一山葵おろし 一
一茶ほうし鍋 一

一御ひやし桶
一御ひやし舟 御はい帳共
一御すし桶
一御燒鍋
一御金こし
一瀬戸物大鉢
一鉄網
一御熨斗三方 外家共
（虫損不明）
一御蓋物 大小
一御酒漉 二
一酢入徳利 一升入 一
一薄刄 箱共 二丁
一鉄御渡しかね 二
一唐金薬罐 五升入 一
一燭臺 覆眞切壷共 五本
一打五徳 五

一大十能　一
一臺十能　一
一火かき　大　一本
一ほんほり　二
一大水溜桶　一
一御椀洗桶　二
一大火箸　二膳
一灰ならし　一本
一底取　一
一備後表薄縁　二枚
一火打箱　小道具共　二
一御せんし茶壺　ふた溜ぬり　一
一切立御塩入　但魚類染付 御精進白手　二
一摺鉢　下臺摺木共　二
一塵取　一
一手ほうき　二
一羽箒　二本
一塵籠桶　一
一棕櫚箒　二本
一眞鍮御さし　二本
一鰹節箱　小道具共　一
一ぬり木鉢　三つ入子　一組
一御湯のこすくひ　一本
一木杓子　大小　三本
一御鍋居臺　大小　三
一かつふし箱　五本入　一
一生干籠　三
一大たらい　一
一口ぬき　一本」

〔御高盛御膳具〕

御椀類御修覆御塗直御膳具白木にて出來之事

一薄盤 本二三 内七五三 五五三　貳通
白木 一御小角　十五
同 一御縁高　二
同 一御鏡居臺　二膳
同 一御蓮飯居　一膳
黒塗内朱金逸掛御紋附 一御汁椀　二膳
同 一御三の椀　二膳
右に付小間遣方御道具
塗 一御高盛御本盛輪　六
一同突輪　六
一木地手折敷　十枚
一酢煎形　二
一紙裁板 定木共　一枚
一さしかね　一
一鉄槌　一

一白木御三方　十三面
同 一御のし三方　二面
同 一御めし角　十
同 一御(貝)盛下輪 一本具　一
同 一鏡居臺 御手男筋　一膳
黒ぬり内朱金逸かけ御紋附 一御本椀　二膳
同 一二の膳　二膳
同 一御高皿　二十
一同御二盛輪　六
春慶ぬり 一同輪ぬけ　六
一熨斗もみ粉　二枚
一御三献餅形　二
一紙裁庖丁　一丁
一はさみ　一
一きり　一本

一はけ　一枚　一蝶板 尺九寸（筋付共 一本ナシ）　二枚

一紙張板　一枚〕

一御太皷鉢 黒蠟色御紋附　一　代銀七十五匁程

〔本文四品無御座候〕

一鉄御間鍋 御ふた共　一　代銀二十九匁程 御ふた共 潰銀は不籠

〔鉄御間鍋より 黒塗御臺迄 五品無御座候〕

一黒塗御三方 御紋附御いは帳共　一　代銀百七十目程

一同朱御紋附御蠅帳　一　代銀九十目程

一黒塗御重居臺　二　代銀七十目程

一同御臺　二　代銀六十目程

一御徳利 三升入 二升入　二　代銀二十六匁程

〔御徳利二升入家共〕

一御名酒徳利 一升入　二對　代銀三十六匁程

一春慶御臺 御はい帳共　大小二つ　代銀六十目程

一柿合塗御臺 春慶御はい帳共　一　代銀三十目程

〔御名酒徳利より春慶塗御箱迄五品無御座候〕

一蔟手附御箱御小重二重入　一　代銀二十五匁程　御小重共

一春慶塗御箱　一　代銀十七匁程

一銀御銚子御紋唐草毛彫　一　代銀七十五匁程　潰銀は不籠

一御いり鳥鍋　一　代銀三十八匁五分程　諸色込
御蒔金粉御印附
眞鍮火箸一膳
御外箱　黒柿合ぬり
〔銀御銚子
御いり鳥鍋無御座候〕
御鍋

一御　鍋　一　代銀五十七匁五分程　諸色込
御銚子掛御箱共溜塗
御ふた黒ぬり

一御膳たて　春慶塗
内二つ引出附　五　代銀二百三十目程
〔御盤立　四〕

一唐 金 鍋　十　代銀三百八匁七分程
「大小十七」

一御膳米入箱　三斗入　一　代銀十一匁五分程
〔御膳米入箱
御ひやし桶無御座候〕
御味噌桶

一御ひやし桶　一　代銀三匁程

一御味噌桶　一　代銀七匁程

一御まな板　大中小　四枚　代銀百三十一匁五分程
〔小組板　三
手桶　四荷〕
一御手桶　十五荷　代銀三百九十七匁五分程
内五荷黒塗朱御紋附丸ふた錠前附
棒　五本
十荷　白木割ふた黒漆御紋附
棒　五本
「御手桶　三荷　棒二本　擔器二本　水漉二本共」
一御藥鑵臺　大小　二　代銀十七匁五分程
黒塗
〔御藥鑵臺
御すし桶無御座候〕
一御すし桶　二　代銀九匁程
一御蒸籠丸形三重組　一組　代銀六十五匁程
一御鍋臺　五枚　代銀三十七匁五分程
一御燒鍋　一　代銀三十一匁八分五厘程
「入子鉢　四組
溜塗黒御紋附　結鉢五つ入子二組」
〔御鍋臺は　三
御燒鍋は無御座候　御曲鉢は薄溜ぬり黒御紋附
入子鉢　四組〕

一御曲鉢　八つ組　三組　代銀七十二匁程
　〇四枚目与此印之処へ
　　春慶切溜一さ御座候付都合四組に相成申候

一御膳笊　「七つ組」　一　代銀三匁四分程

一御すいのう　二　代銀五匁三分四厘程

一御金こし　一　代銀一匁八匁程

一御蕎麦上け笊　一　代銀三匁四分程
　「御膳笊
　　御金こし
　　御蕎麦上け笊　無御座候」

一木　鉢　一　代銀十七匁五分程
　「三つ入子　一組」

一瀬戸物大鉢　二枚　代銀二十五匁程

一御椀立御薄盤　一　代銀三十二匁五分程

一鉄　網　二　代銀十三匁四分程
　角一つ　丸一つ

一御薬罐　七升入　一 二つ　代銀八十五匁程
　「大鉢
　　御椀立
　　あふりこ　四
　　長薬罐大中小　三
　　長火鉢　二
　　火はし共　無御座候」

一長手御火鉢　御てんかく焼　一　代銀四十八匁五分程

一御戸棚　一　代銀百八十五匁程
一御拭巾掛　白木　一　代銀六匁五分程
「大小二
御ふきん五つ」
一御杓子立桶　一　代銀二匁五分程
一雑巾たらい　おかもち形　七　代銀二十六匁六分程
「貝指桶　二　「金杓子　五本
貝杓子　五本」
〔一雑巾たらい　四　一炭取大小　四
一貝さし桶　二　一御水溜桶　二
一御拭巾掛　二
一大長手御火鉢　一御水なかし
一御のし三方　一切　溜　四品は無御座候
本行之外に左之通御座候
一黒小御重箱　三組　内金粉御紋　二組
朱御紋　一組　替ふた共
一砂糖壺　大中　二　一蓋物　染附
白　（二
一）　一本一組ツヽ
唐金
一御湯せん　一　一御酒漉　二
一醤油入　一　一酢入　二
一庖丁まなはし　箱入　二通　一薄双　箱入　二枚

一御菓子小刀　箱入　二本
一御茶ほうじ鍋　一
一火かき　大　一
一山葵おろし　一
一ほんほり　二
一御椀洗桶　二
一貝杓子　五本
一灰かき　一
一薄縁　三枚
一御盥入　二
一塵取　一
一棕櫚箒　二本
一塵桶　一
眞鍮唐草
一御湯の子すくひ　二本
一木杓子　三本
一緞子御掛　六凵
一御水溜桶　壹升入柄杓二本添　一

代銀六十六匁五分程

一鉄渡しかね　二
一打五徳　大小　五
一臺十能　一
一唐金燭臺　五本
一水漉　二
一金杓子　五本
一大火はし　二（膳）一本[illegible]
一底とり　一
一御煎茶壺　一
一擂鉢　擂木下茎共　二
一手箒　二本
一羽箒　二本
一鰹節箱　大小刀共　一
一御匙（しんちう）　二本
一硯箱　小道具共　一

一御炭計　一　代銀八匁五分程

「炭計三内大一小二　外に一つ」

一大長手御火鉢　一　代銀二百七十五匁程

一御水なかし　下戸棚附　一　代銀五十五匁程

一御熨斗三方　文鎮共　二枚　代銀六十二匁五分程　諸色込

白木
一外家内へ棚一上下へ一枚つゝ入組

⊕一春慶切溜　七つ組　一　代銀二十四匁五分程

一御冷し舟　御はい帳共　一　代銀八十五匁程

右入組

御長持　一棹　代銀百七十八匁程　御油単共

黒柿合塗唐花御紋附
一御ゆたん紺木綿唐花御紋附

御男子様方御客之節御用

表
一御客筋御膳具　但御先方之御様子次第相減或は御用意無之候ても可相済事

御薄盤春慶

御椀具計黒塗　代銀二貫七百二十七匁五分程　潰銀は不籠　諸色込

（木行御膳具京都にては御不用猶其の節相調可申事）

一御薄盤　本二　五人前　一同御三の膳　廿膳

一塗大御三方　十膳
一御縁高　御ふた共　十
一塗御三の膳　廿五膳
一塗御縁高　十
一同角不切　十
外に
一同御汁椀　十膳
一同御坪皿御平皿　十膳つゝ
一同御吸物椀　三十膳
一同御湯當　御水次共　十
一同御肴重　一組
一御中皿　廿枚
一御直口　大中二十つゝ　四十
一御蓋茶碗　二十
一御菓子鉢　十枚
一御筆寒皿　廿枚
一御肴鉢　十枚
一塗御熨斗三方　三膳

一春慶御三方　八十膳
一塗木具　御本二　十膳
一同御足扮　五十膳
一同御鉢居　四枚
一同御本椀　四つ組　十膳
一同二三の椀　廿膳
一同御腰高　三十
一同大平皿　十膳
一同御かさ　二十
一同御鱠皿　三十枚
一御手盥皿　三十
一御鮎皿　二十枚
一御向詰鉢　十五枚
一御水仙皿　廿枚
一濱燒鉢　御緑子覆に居臺共　大小二枚
一名酒直口　二十
一御貝の輪のふた　二十

一塗御盃　三十　一御盤立　六面
一御めし次　杓子共　七　一御盤かけ　十
一御ふた盃　二十　一銀御銚子　三

「本行之外に
御先様御表へ相渡候筋末々三十人前程用意
御先様の御様子次第相減或は御用意無之候ても可相濟事

一桑名盆　七十枚　一青漆本椀　四つ組　七十膳
一青漆平皿　七十　一同坪皿　同
一塗　拚　同　一かさ　同
一一つ物鉢　七枚　一柄さし湯當　六本

表
上使兩人分　同斷

一寸高
一白大三方　御用意共　三面　一塗高足拚　二膳
一八　寸　八枚　一黑吸物椀　四膳
一朱　盃　四　一同かさ　二
一中　皿　四　一小　皿　四
一銀盞間鍋　二」

表
一御次客前膳部　代銀五貫五百八拾目程　諸色込
但御先方之御様子次第相減或は御用意無之候ても可相濟事

一塗木具　十五人前
一同二の膳　同
一黒塗本二三之椀　八十膳
一同腰高　三十
一同湯當　十三
一黒塗吸物椀　八十膳
一鱠皿　百
一手塩皿　百
一朱蓋間鍋　十五
一菓子鉢　三十
一黒塗盃　十枚
一錫鉢かな色　三
一水呑茶碗　五
一溜塗粉　五十枚
一淺黄椀　本二　五十人前
一同こし高　五十
一湯當　八

一塗縁高　三十
一同足扮　百枚
一黒塗坪皿平皿　八十膳
一同食次　十五
一朱塗盃　百廿
一黒塗肴重　五組
一中皿　三十
一直口　大中　百
一蓋茶碗　三十
一名酒直口　十
一錫鉢　三十
一白詰鉢　百
一黒塗足附丸盆　廿枚
一黒猫足膳　本二共　百膳
一淺黄坪皿平皿　五十人前つゝ
一同めし次　杓子共　十
一燭臺　覆眞切蓋共　五本

一淺黄吸物椀　六十人前

［諸大夫等へ出候筋

一平　附　本二　十八人前

一白扮鉢居　二枚

一黒湯當　二

一染附茶碗　土器ふた共　二百

一同中皿　十

一同小皿　十

一同水仙皿　廿

一煎茶々碗　十

御酒被下筋

一吸物椀　廿人前

一黒丸盆　三十枚

一手塩皿　四十

一一つ物鉢　十

一溜塗肴重　七寸四重物　一組

一錫皿　三十枚

一白扮　五十枚

一黒食次　杓子共　二

一朱盃　十

一染附鱠皿　十

一同中直口　十

一大直口　十

一燒物皿　十

一錫　三

一塗八寸　足なし　三十枚

一塗盆　三十枚

一石鉢　廿

一並染附直口　四十

伊賀以下末々へ出候筋

一板折敷　三十八前
一溜塗食次　杓子共　五
一鱠皿　三十
「本文之外に
男子向取扱御臺所道具
一ちろり　四
一溜塗銚子臺　引出し附　一面
一かん風爐　ゑんこう桶共　二
一塗菓子盆　百枚
一鉄鍋　大小　八
一箱切溜　五つ組　二組
一大俎　二面
一染附大砂鉢　箱入　二枚
一柿合塗朱御紋附鍋臺　八枚
一小燭臺　一
一春慶塗黒御紋附麵類桶　二

一赤椀　四つ組　三十八前
一溜塗湯當　三
一燒物皿　三十」
一溜桶　三
一丸はい帳　三
一燭臺　六
一太白色糸綱　三
一唐金鍋　大小　廿五枚
一大藥罐　一斗入　一
一ほと桶共　二
一木京黒漆御紋附通ひ三方　三十面
一春慶塗黒御紋附貝さし桶　三
一枠火鉢　一

一次木地麵類桶　二

一薬研　一挺

一湯取飯揚笊　一

一艦立　引出し附　一面

一銀御鉢　二
内一通り御魚類
　一通り御菓子類
御猪子翼居臺共

一肴御居臺　大小　春慶塗御紋附　十枚
内二枚　御精進筋

一御肴籠　御外箱黑柿合ぬり　五

一御進物長持　桐油共　黑柿合塗朱御紋附　五棹

一釣臺　十

一御膳筋純子御懸　十

一純子御のしかけ　御昆布かけ共　四

一純子御銚子掛　二

（一廡御紋附御掛　一ホナシ　七

一廡御印附御掛　三）

御廣敷御客之間御道具

一黑塗湯當手洗　一組　代銀七十目程

一同御手拭掛　代銀四十五匁程
「一黑塗手拭掛　二つ
　一龍の口　一」

一客多葉粉盆「小道具共」　二面　代銀六十匁程　小道具共
「客多葉粉盆
　銀きせる　二本」

一黑塗臺火鉢　一　代銀七十八匁程

一同硯箱　小道具共　一面　代銀二十目程　小道具共

〔御客之間附御道具

一黒塗御湯當　一

一同御手拭懸　二

内二つ掛　一
一つ掛　一

一御客硯箱　小道具共　二面

一臺御火鉢　網火屋共　一

一灰ふるい　一

一ほんほり　二

一塵取羽箒　一通

御使者之間附御道具

一溜塗湯當　一

一御手拭掛　一

一多葉粉盆　小道具共　三面

一臺十能　一

一ほんほり　二

御客之間
御使者之間　附兼御道具

一同御手洗　一

一牛　黒味唐金　銅　一

一御客たはこ盆　小道具共　二面

一臺十能　一

一灰押　一

一燭　御客御使者兼　臺　眞鍮切燈さや共　三尺　五本

一炭計　一

一御手燭　御客御使者兼　小　五本　三本眞鍮　二本煮黒め

一同手洗　一

一辰の口　一

一黒蠟色臺火鉢　網火屋共　一

一炭計　一

一御臺子　　一餝　但小板共黒塗

一風呂釜　一　　一水さし　一　　一水こほし　一

一杓立　一　　一蓋置　一　　一水こし　一

一釜敷　一　　一釜洗　一　　一拭巾掛　ふきん共　一

一茶入箱黒塗　一　　一火はし　一せん

一臺十能　一

一茶簞笥　但春慶ぬり金物銅

御客前
一濃茶々碗　ふた共　十　　一薄茶々碗　ふた共　十

一染附茶碗　十　　御使者前
一濃茶々碗　十

御使者前
一薄茶々碗　廿　　一同　染附茶碗　五十

御客御使者兼
一服紗　廿　　一嚢　内一つ袋入　二

御客前
一濃茶々碗蓋　十　　御客前
一薄茶々碗　十

一同　黒塗茶臺　ふた共　五通　　一柄杓　二本

一茶杓　二本　　一茶筌　二

一茶巾　二　　一大ふくさ　二

一茶ふり　二本　　一塗足打　廿

一黒塗炭計　一　　一換溜大棗　六　濃茶入三　薄茶入三

一茶臼　但小道具共　二柄
一手　桶　割ふた　二荷
一かいけ　二本
一莖十能　二
一炭挽鋸　一挺
一手　燭　二本
一火　鍋　一
一斤りやう　一本
一塗片口　二
一御紋附挑灯　二張
一中長押二枚折御屏風　黒繪山水類　二双」

一御客前　一柄　一御次筋　一柄
覆春慶黒漆御紋附（杖）木共
一水　瀧　割ふた　二組
一釜洗桶　二
一火はし　二膳
一御勝手附大簞笥　一本
一ほんほり　二
一茶上戸　一
一れいてんく　一本
一長　持　一棹
一大長押二枚折御屏風　繪花鳥　一双

御廣敷御玄關御餝道具

一御　弓　御靭御鞢御矢共　五張　代銀一貫百二匁五分程　諸色込
一御　鈴　十筋　代銀四百九十四匁程　諸色込
右二品御先方より相渡り候得は御不用之事

「御玄關向御道具

一黒塗御弓　御矢御空穂御靫共　五張
一御印鎗　替鞘外箱共　二筋
一御硯箱　小道具共　一面」
一木行之外に
御廣敷御使之間御道具
一溜塗手拭掛　一
一多葉粉盆　小道具共　三面
御客之間
御使者之間　相兼
一臺十能　二
一灰ふるひ　一
一ほんほり　三
一塵取羽箒　一通り
御客前
御次　御茶道具一通
一黒塗御臺子　黄から金御風爐御釜鈇共　一脚
一黄唐金御水さし
一同御蓋置
一御紋附御棗　御濃茶 御薄茶　二
一御薄茶々碗　七

一御　鎗　十筋
一御帳箱　一
一龍の口　一
一溜塗臺火鉢　一
一灰　押　一
一燭　臺　しん切壷共　五本
一炭　計　二
一同柄杓立
一同御水飜
一御濃茶々碗　七
一御茶碗蓋　ためぬり　大小　十四枚

一御茶碗臺　黒ぬり眞鍮覆輪　五
一御茶杓　二本
一御茶筌　二
一御茶たんす　溜塗　一
一御炭計　一
一御釜敷板　一枚
一溜塗足打　二膳
御次筋
一臺子　唐金風呂釜銚共　一脚
一から金水差
一同ふた置
一濃茶々碗　十五
一茶碗ふた　二
一ふくさ　十五
一茶巾　二
一柄杓　二本
一釜敷板　一枚
一御膳御茶磨御磨覆溜塗御紋附桐箱入　一柄

一御茶ふくさ　四
一御茶巾　二
一御柄杓　二本
一桑柄火箸　一膳
一三つ羽　一本
一大ふくさ　二
一同柄杓立
一同水翻
一薄茶々碗　十五
一小棗　内一袋入　二
一茶杓　二本
一茶せん　二本
一箱炭計　一
一虫喰不明火箸　一膳
一御次茶磨　磨覆春慶箱入　一柄

一御茶出し道具　　一箱　　内 一斤（秤）一本料 風袋共　一葉茶七　一竹箸　一敷紙　一葉茶上戸　一そくい板箆共

一御膳御茶挽溜御紋附御棗 御茶篩 黒塗　袋入四 御紋附一　一御茶分具重硯箱　三重一組　内 一重は硯箱　一重は御茶封札袋入　一重は服紗茶杓はれ銀七はさみ

一御茶わけ臺　春慶塗　一枚　　一御茶たんす　薄溜塗　一

一御次茶挽溜　黒塗大棗 茶杓　二内一つ袋入 一本　茶篩ためぬり　眞鍮さし 一本 一

一御膳水荷ひ手桶　一荷　　一御水漉搔器　一組

一御釜あらひ　一　　一同あらひ臺　一枚

一大水漉　一　　一臺十能　一本

御次筋　〇印之分は本行帳面平日諸御用宛さ申候之内に相見申候

〇一水荷ひ手桶　一荷　　〇一水漉かいけ　一組

〇一釜洗桶　一　　〇一大水漉　一

〇一臺十能　一本

御前様御表へ相渡候御道具

一御弓　御靭御韘御矢共　五張　　一御鎗　十筋

右二品は本行帳面之内御廣敷御玄關御餝道具と申所に出御座候

一御屏風　唐紙張内 六枚折 二双 二枚折 一双　三双

一時計　一掛　　一高御挑灯　竿共　十張

一箱御挑灯　内十張女中筋　十八張」

平日諸御用宛筋

一灰おさへ　一　代銀四匁八分程

「是より末朱☒印之所迄之御道具等丸印帳面には無御座候」

〔本行諸御用宛御道具は御客之間御使者之間附幷諸役所御道具之内に大樣配分御座候〕

一灰ふるひ　一　代銀七匁五分程

一ほんほり　二　代銀二十五匁程

一炭　計　一　代銀三匁八分程

一塵取「羽箒」　一通り　代銀五匁七分程

一箱御挑灯　六十八帳　代銀八百二十目程　内　五十張　御供通り　拾八張　諸御用

一高御挑灯　二十四張　代銀三百四十目八厘程　内六張　御臺所御門下乘口御庭　十六張　御供通り　二張御用部屋

一御紋附朱丸御挑灯　四張　代銀五十八匁程　御供通り

一御紋附白丸御挑灯　五張　代銀四十二匁五分程　御供通り

一挽溜大棗　二　代銀二十五匁程　内　濃茶壷　一　薄茶壷　一

一手　桶　一荷　代銀五匁程

一水漉かいけ　一組　代銀三匁八分程

一かいけ　一組　代銀三匁五分程

一釜洗桶　一　代銀五匁六分三厘程
一臺十能　一　代銀十四匁五分程
一火　箸　一膳　代銀一匁二分程
一炭挽鋸　一挺　代銀六匁五分程
一御勝手大算筒　一　代銀八十五匁程
一手　燭　一本　代銀八匁五分程
一火　鍋　一　代銀五匁七分程
一茶上戸　一　代銀二匁八分程
一斤りやう　一本　代銀二匁六分三厘程
一れいてんく　一本　代銀五匁二分七厘程
一長　持　一棹　代銀六十三匁程

御用部屋御道具

一御挾箱　二　代銀二百七十目程
一御小挾箱　二　代銀二百二十目程
一御目錄箱　六　内黑塗　一つ　〔四つ内竪目錄箱　三　横目錄箱　一〕
一御符箱　一　代銀五匁程　無御座候
一御長持　二棹　代銀百廿六匁程　〔一棹〕

一銀　秤　　一挺　　代銀五匁二分七厘程〔無御座候〕

一火　鉢　内しかみ一つ　　四　　代銀拾五匁二分程　〔三つ〕

一箱火鉢　御出先筋　　一　　代銀三十八匁五分程　〔二つ〕

一御書上さし　春慶　　二　　代銀三拾目程〔御書上さし　両掛挟箱は無御座候〕

一両掛御挟箱　　一荷　　代銀百五十目五分程

一御花簞笥　　二　　代銀五十目程

〔御花たんす此處には無御座候尤是より前々之所に御花たんす大中小三御座候〕

一机　　二脚　　代銀十六匁程〔四脚〕

一硯　箱　　二面　　代銀十一匁程　小道具共

一同　黒塗　　二面　　代銀廿八匁程　小道具共

〔三面外に次硯箱　　二面　小道具共　誓紙硯箱　上に同　一面〕

一黒塗たはこ盆　小道具共　　五面　　代銀百拾匁程　〔三面〕

一箱たはこ盆　　四面　　代銀拾六匁程　〔三面〕

一文　箱　　六　　代銀十八匁程

〔數は同様にて内銀肴板二　黒塗は無地四つ〕
内黒ぬり　二　春慶四

一並文箱　　二十　　代銀二十目程〔溜塗文箱　七つ〕

一手形箱　春慶塗　　二　　代銀六匁程

一御調合臺　外箱入	一	代銀百七十目程
一判取箱	三	代銀四十五匁程〔一つ〕
一御伽羅割道具	一通り	代銀廿七匁五分程　〔無御座候〕
一藥　鑵　大中小	四	代銀百六匁程〔一升入 二升入 一〕
一五　徳　〃	二	代銀四匁八分程
一鉄火箸	二揃	代銀二匁四分程　〔一揃〕
一紙裁板　定木共	一	代銀十一匁程
一紙裁庖丁	一	代銀四匁七分程
一錐	一本	代銀三分程
一燭　臺	三本	代銀六十三匁五分程〔二本〕
一鐵行燈	四	代銀六十八匁程　〔三つ〕
一棕梠箒	三本	代銀六匁七分五厘程〔二本〕
一雑巾布	三筋	代銀三匁程　〔無御座候〕
一十　能	一	代銀四匁七分程
一雑巾たらひ	一	代銀三匁八分程
一簞　笥　大小	三	代銀百五十九匁程
一御金簞笥　御紋附革覆掛	一荷	代銀二百八十目程　〔無御座候〕

一御紋附御挟箱　一荷　代銀百五十目程

一鋏　一挺　代銀一匁八分程〔鋏　御金箱無御候座〕

一春慶塗御金箱　一　代銀十五匁五分程

一中茶碗　五　代銀一匁九分五厘程

一次茶碗〔染附茶碗　三　清水焼茶碗　十〕　五　代銀九分五厘程

一手　桶　杓共　二　代銀三匁八分程

一ふきん　二　代銀一匁二分八厘程

一手水たらい　二　代銀二匁五分二厘程

一炭　計　一　代銀一匁五分程

一さいはい　二本　代銀一匁三分四厘程

〔ふきん　手水たらひ　さいはい　無御座候〕

一木行燈　小道具共　二　代銀五匁程

〔本行之外に

一御時計　大小　二組　一唐金手燭　一本

一御剃刀砥　湯入曲物　御剃刀三挺　一通　一懸　硯　一

一印肉入印判箱　一通　一ほんほり　二

一やねほんほり　一　一箱挑灯　三張

一御花入切溜　但手桶　一
一借　刀　廿腰
大長押御〆り御用
一六枚折屏風　両面紺紙張　三双
一本鋲
(脇)
一下　挾　五
煮黒め
一上　挾　十
一粘　桶　一
一粘　漉　一
一蠟燭箱　一
一火ならし　一本
一戸　棚　但茶碗戸棚　一本
一大たらい　一
一炭　桶　一

一馬上挑灯　蠟燭筒共　五張
一紺染絹借羽織　廿　御門番警固用
黒塗鉄
一圭　算　六尺　六本
同
一同　三尺　四本
御輿入
一御　錠　御柏子木　一
一粘　板　一
一は　け　一本
一火かき十能　一
燒物
一火　鉢　五
春慶塗
一八寸盃　六枚
一手水鉢　柄杓共　二
一傘　五本

御進物方御金方は御用達より兼勤之御定に付
政所様方右両役所御道具打合二重筋は省き左之通

呉服入
一大簞笥　一本
一御廣蓋　黒塗金御紋附 いつかけ　二枚

春慶ぬり
一呉服臺　十五
内　時服一つ居　一　巻物五巻居　二　同　二巻居　六
同　二つ居　二　同　三巻居　四

一小廣蓋　黒塗金いつかけ　一枚
一紗綾三布風呂敷　花色御紋附　二
一御紋附御長持　御仕着入　二棹
皮覆御紋附
一御挟箱　二荷
かふせふた
一溜塗文庫　（一本ナシ 木綿眞田紐）　一
一掛　硯　一
一押切判　印肉入箱共　一
一箱挑灯　二張
一千木秤　一挺
一大算筒　貫ぬき附　一
ためぬり
一御金箱　野郎ふた十文字筋金物　一
一御銀箱　十〆目入（一本ナシ 錠鑰共）　二
一銀附紙板行　一挺

御醫師詰所御道具　御醫師部屋皆具 代銀三十八匁二分程

一多葉粉盆　出來合塗　一面
一茶　碗　二

一木綿三布風呂敷　花色印附　一
一木綿四布風呂敷　花色印附　一
黒柿合塗朱御紋附
一御長持　一棹
同
一御小長持　一棹
一判取箱　一
一十露盤　大中　二丁
一帳算筒　一
一銀　秤　一挺
一敷　紙　大小　三枚
一御金たんす　御紋附皮覆　一荷
一革才布　三〆目入　一
一手形箱　一
一薬　鑵　中　一
一五　徳　一

一炭　計　一
一棕梠箒　一本
一白木文箱　二
一雜巾　二
一手水たらひ　一
一手桶　杓共　一
一さいはい　一本
一ふきん　二
一鐵行燈　一

〔御醫師御針醫詰所

一藥　鑵　三升入　一
一五　徳　一
一手水桶　柄杓共　一
一水　壺　同　一
一並たはこ盆　小道具共　二面
一火　鉢　火はし共　一
一小炭計　一
一木行燈　土器下皿共　一
一茶わん　二

京都に限り候役所附道具御臺所雜道具數々にて附紙にも仕兼候付別帳に仕候事〕

御仕着類〔御仕着類本行御同樣認出候積相成御座候〕

一坊主三人分　黑木綿合羽
一御廣敷御錠口番八人分　黑木綿合羽
一御小人七人分　黑絹羽織　小倉袴
一仕丁　組頭共　十三人分　御仕着花色木綿紋所五つ　黑絹羽織　紺木綿合羽紋所五つ

一御手廻り十三人分　三品共右同断
御輿廻り
御輿庄頭之者十四人分　右同断
但合羽なし
一女中急事手拭木綿七十筋程　但御末頭已下并又下女分
一同乗物舁肴板　百程
「乙前断書之所より是迄之間之御道具等丸印帳面に無御座候」
紺染紋所五つ
一帯百筋紺無地　右御仕着類不残
代銀五貫四百十四匁八分程
一女中乗物
青漆乗物　上﨟より
呉服之間格迄　先六挺程
代銀二貫八百八十目程
鋲打乗物　御三之間より
御末頭格迄　先二挺程
代銀六百目程
用意
あんた駕籠　員数其節の
人数に可應　先二挺程
代銀百八十目程
「一女中乗物
網代乗物　二つかなもの　御局以上　青漆乗物　一つかなもの　若年寄より
御中﨟迄
青漆乗物　表使より
呉服之間迄　莚包鋲打乗物　御三之間より
御末頭迄
用意
あんた駕籠　三挺
一合羽籠　七荷　一[illegible]合羽入　二差
一同釣臺　二差」

〔女中乗物
一網代乗物　御局以上　一青漆乗物一つかな物若年寄より御中﨟迄
一青漆乗物　表使より呉服之間迄　一摠包鋲打乗物御三之間より御末頭迄
女中附
一合羽籠　十荷〕
一合羽籠　七荷　代銀百七十一匁五分程．
御附方諸役所渡し
墨筆紙類大様
一達磨形墨　七挺　〔是より〇印迄諸役所渡し墨筆紙類丸印帳面には無御座候〕
御附差添御醫師御客之間二面書役二人
一梅形墨　五挺
坊主御茶道方御錠口番仕丁人廻し
一黒軸筆　九對
〔筆墨紙水引御用意筋共に本行御同様認出候積に相成御座候〕
御附差添御醫師御客之間二面一對つゝ書役二人二對つゝ
一並　筆　五對
坊主御茶道方御錠口番仕丁人廻し
一大直紙　日記頭書　一束

筆紙墨類大様

一大奉書　一帖　一上中奉書　二帖

一並奉書　三帖　一(粘)[一本糊]入紙　五帖

右被進被下物包幷奉状御用部屋認御目録紙

一上仙過紙　三帖　御家門様方 公儀御役人衆御(金)[一本里]役人中御附属姓名帳

一並仙過紙　二帖　帳面上紙

一中奉書半切　二巻　此二帖　一、(粘)[一本糊]入半切　二千枚

一上山半切　二千五百枚　一下山半切　三千枚

一上西之内　一帖

手形紙

右三品御人與前御人用幷御附諸役所渡し

一美濃紙　五帖

御附属表方共起請文前書服忌令

一岩城紙　三帖

手形幷包紙

一上々半紙　十折

被仰渡帳幷日記

一上書紙　十巻　此上々半紙十折　一上半紙　三〆

御入輿前御入用并御附添役所渡し

一並半紙　壹〆

諸役所渡し

一水　引

一赤白三尺水引　三十把　一赤白二尺水引　五十把

一同常尺水引　五十把　一黄紺三尺水引　五十把

一黄紺常尺水引　百把　一同常尺水引　百把

一上のし　五把　一並のし　十五把

一目録臺 中上り　十枚　一並目録臺　廿枚

一扮　百枚

右紙類水引等　代銀三百九十五匁九分壹厘程

「〇是迄之墨筆紙類丸印には無御座候」

御紙御水引類大様左之員數御用意之積猶其節々見計御増減之事

一大奉書　一束　一中奉書　六束一帖

一小奉書　四帖　一無間大奉書　一束

一大高紙　一帖　一三好奉書　一束

一上美濃紙　二束　一色奉書　五帖

一薄葉紙　百五十枚
一上半紙　三〆
一小形清浄墨　五挺
一達磨形墨　二挺
納戸入
一上美濃紙　二束
一上中奉書　一束
一藏半紙　三〆
「大奉書　二束
小奉書　三束四帖
三好紙　三束
上中奉書　三帖
上美濃紙　五束
行成紙　百廿枚
右之分員數相違御座候
一右之外に
中美濃紙　二帖
並奉書　三帖

一漆越紙　五帖
一筆　十五對
一御鼻紙　但よしの紙　四十束
一千代紙　五十枚
一上小奉書　一束
一行成紙　いろ／＼　六十枚
中奉書　三束一帖
大高紙　二帖
色奉書　二帖
上小奉書　五帖
小形清浄墨　八丁
筆　三十對
並中奉書　三束
御敷紙　九十枚

右之通多御座候」

御水引類

一白紅尺長　五十把　一白赤尺長　五十把

一白紅中尺長　五十把　一白赤中尺長　百五十把

一白紅常尺　五十把　一金紅常尺　五十把

一白赤常尺　八十把　一黄赤常尺　五十把

一金銀尺長　五十把　一小水引　百把

右御紙類御水引等　代銀一貫四百五十一匁四厘程

「水引品々千百三十把

本文ゟ差引
四百八十把丸印帳面之方多し」

ロより是迄

合三百五十四貫二百四十一匁三分三厘程

御反物御綿類御召筋

御〔一本ニ〕（端）物　御綿類

御召筋

一御綸子御表　三十五端　代銀拾二貫四百四十二匁五分程

一縮緬御縫入御表　廿五端　代銀八貫八百八十五匁程

一紗綾　同　十五端　代銀五貫目程

一羽二重御縫なし　二十端　代銀四貫六百目程
一御相召　三端　代銀三貫七百目程
一御相白　十二端　代銀四貫目程
一嶋縮緬　五端　代銀九百七十五匁程
一八丈縞　五端　代銀七百五十目程
一御下召白羽二重　百二十疋　代銀廿四貫九百六十目程
一御裏紅羽二重　六十疋　代銀十六貫五百目程
一御くけ帯　二十三筋　代銀五貫百五十目程
一御召綿　五十貫目　代銀十二貫五百目程
一冬御褥　五　代銀二貫五百目程
一御輿蒲團　二　代銀一貫六百目程
一御衣桁かけ　三　代銀九百目程
一御褥御輿蒲團御綿　十一貫二百目代銀二貫四百十九匁二分程
一辻御帷子　十五端　代銀三貫十五匁程
一茶屋辻帷子　十端　代銀二貫五百二十六匁程
一伊達染御帷子　十端　代銀一貫九百目程
一絹縮御辻　五端　代銀二貫廿六匁七分程

一絹ちゝみ御縫入	五端	代銀一貫六百目程
一のし縮御辻	五端	代銀二貫目程
一同御縫入	五端	代銀一貫二百五十目程
一絽絹ちゝみ御縫入	五端	代銀二貫目程
一縞きぬちゝみ	三端	代銀八百五十五匁程
一越後縮縞	七端	代銀八百七十五匁程
一御下召晒	四十五疋	代銀六貫三百目程
一御襟裏地	九疋	代銀二貫四百三十八匁程
一御提帶	十五筋	代銀一貫六百六十九匁五分程
一素縫御腰卷	二	代銀七貫目程
一御うら紅ゆ(る)(かカ)し		代銀五百目程
一晒御染ゆかた	三	代銀四百五匁程
一御湯風呂敷	三	代銀四百五匁程
一御下召さらし	貮疋	代銀二百五拾目程
一夏御褌	五	代銀一貫六百六十一匁四分八厘程
一御輿巽臺	二	代銀八百九十一匁八分三厘程
丸御褌	二	

御綿　一貫二百目（御綿共）代銀四百五十九匁二分程

冬御夜る

一綸子大御夜る	三	代銀一貫九百八十五匁程
一縮緬中御夜る	三	代銀一貫九百廿四匁程
一同御介巻	三	代銀一貫七百八十目程
一御上蒲團	三	代銀一貫百十二匁五分程
一御下蒲團	三	代銀一貫八百八十四匁五分程
一御枕	三	代銀百三十五匁七分二厘程
一御純帳	壹	代銀五貫五百目程
一御火燵かけ	三	代銀一貫二百十四匁二分五厘程
一御綿	十九貫五百目	代銀四貫二百十二匁程
一同	四貫八百目	代銀一貫三十七匁八分程

夏御夜る

一絽縮中御夜る	三	代銀一貫九百四十目五分程
一同御介巻	三	代銀一貫七百十五匁二分程
一絹ちゝみ御下蒲團	三	代銀七百六十目程
一御呂御蚊帳	二	代銀八貫九百三十一匁程

御先様冬
御夜る

夏 同

一御吳蓙 三 代銀五百三匁三分三厘程
一紅高色 九疋 代銀九百九十目程
一御裏地淺黄晒 五疋 代銀七百八十五匁程
一御上蒲團 三 代銀五百九十四匁程
一御 綿 十三貫五百目 代銀二貫九百十六匁程

御先様冬御夜る

一大御夜る 二 代銀一貫百八十九匁六分程
一中御夜る 二 代銀一貫九十六匁六分程
一ちりめん御介卷 二 代銀一貫二百八十六匁六分程
一御上蒲團 二 代銀二百八十目程
一御下蒲團 二 代銀一貫二十六匁程
一御 枕 二 代銀百六匁八分四厘程
一冬御褥 二 代銀五百八匁五分五厘程
一〔一本常〕(宿)御褥 二 代銀四百八十六匁三分五厘程
一御 綿 十六貫四百目 代銀三貫五百四十二匁四分程

夏 同

一中御夜る 二 代銀八百五十五匁程

一御介巻	二	代銀七百十八匁六分程
一絹ちゝみ御下蒲團	二	代銀七百七十八匁程
一御異蓙	二	百四十十匁四厘程
一御異蓙褥		代銀二百十三匁程
一御上蒲團		代銀七百十匁程
一御綿	九貫目	代銀一貫九百四十四匁程

御祝儀筋

一唐織大御夜る	二	代銀三貫四百七十目程
一純子御夜る	二	代銀二貫二百九十目程
一御介巻	二	代銀一貫八百目程
一紅兩めん御上蒲團	二	代銀一貫百八十七匁五分程
一唐織御へりふとん	二	代銀一貫八百五十八匁程
一同御長枕	一對	代銀二百目五分程
一御綿	十九貫五百目	代銀四貫二百十二匁程

天兒御伽

一白唐綾	二反	代銀四百二十三匁程
一紅梅唐綾	二反	代銀六百目程

一白唐綾御帯　二筋　代銀百五十目程
一紅唐綾御帯　二筋　代銀二百目程
一綸子御表　二反　代銀二百七十目程
一紅縮緬御相召　二反　代銀三百目程
一御くけ帯　二筋　代銀七十目程
一御平生御褥　二　代銀四百二十目程
一御輿蒲團　一　代銀二百目程
一御　綿　一貫六百目　代銀三百四十五匁六分程

御當日御召

一御かつき地白練　一疋一端　代銀三百九十目程
一紅梅綾御腰巻　一　代銀七百四十目程
一白綾同　一　代銀三百目程
一紅綸子　一反　代銀二百十八匁五分程
一白りん子　一反　代銀三十七匁五分程
一御裏紅　一反　代銀百四十二匁五分程
一白羽二重　一反　代銀百四匁程
一紅梅ねり　一反　代銀二百七十五匁程

一白ねり　一反　代銀百六十目程
一白綾御輿蒲團　一　代銀二百目程
一白綾御帶　一　代銀百五匁程
一紅梅同　一　代銀百八十五匁程
一紅白綾御褥　二　代銀五百十一匁程
一御緋之袴　二　代銀二貫八十目程
一御召白あや　一反　代銀四百六十目程
一御召紅梅綾　一反　代銀四百九十目程
一御召綿　八百目　代銀一貫九百八十四匁程

御客様前

一大御夜る　三通り　代銀二貫六十九匁九分程
一中御夜る　同　代銀一貫三百五十六匁二分五厘程
一御介卷　同　代銀一貫二百七十目程
一御上蒲團　同　代銀一貫目程
一御下蒲團　同　代銀一貫四百廿八匁二分五厘程
一御枕　同　代銀百三十目程
一冬御褥　同　代銀八百目程

同夏夜る

吹上通客前夜る

一御火燵かけ　同　代銀一貫三百八十九匁程

一御ゆかた染さらし御湯ふろしき共　同　代銀五百五十五匁程

夏御夜る

一御夜る　三通り　代銀一貫百廿五匁程

一御上蒲團　同　代銀六百廿九匁程

一御下蒲團　同　代銀一貫百五十六匁程

一御吳蓙　同　代銀四百五十二匁九分程

一御蚊帳　同　代銀八貫百匁程

一御吳蓙褥　同　代銀四百七十六匁九分程

一御枕　同　代銀百四十四匁程

一御綿　十三貫五百目　代銀二貫九百十六匁程

吹上通客前

一ちりめん大夜着　五通り　代銀一貫七百八十一匁三分程

一同　中夜着　同　代銀一貫六百八匁三分程

一介巻　同　代銀一貫五百十九匁程

一上蒲團　同　代銀六百目程

一下蒲團　同　代銀四百八十五匁程

次中通中
下共夜る

一枕	同	銀八十五匁程
一火燵かけ	二	代銀六百七十九匁五分程
一蚊帳	同	代銀五百四十目程
一茣蓙	五	代銀二百九十四匁五分六厘程
一ゆかた	二重	代銀三百四匁程
一絹ちゝみ介巻	五	代銀一貫五百目程
一淺黄さらし蒲團	同	代銀三百五十目程
次中通中之下共		
一大夜着	七通	代銀二貫目程
一中夜着	同	代銀一貫七百五十目程
一介巻	同	代銀七百八十五匁三分四厘程
一上蒲團	同	代銀七百目程
一下蒲團	同	代銀五百八十一匁程
一枕	同	代銀八十目八分程
一ゆかた	二重	代銀百六十七匁程
一火燵かけ	二	代銀百五十目程
一蚊帳	三張	代銀五百九十一匁程

下客前夜る

一夏介巻　七　代銀七百五匁一分一厘程
一吳　蓙　七枚　代銀百七十目程
冬夜る之物
方禮七十四貫四百目　代銀一貫九百三十四匁四分程
眞綿拾四貫四百目　代銀二貫七百六十四匁八分程
火燵かけ
方禮四貫八百目　代銀百二十四匁八分程
眞綿一貫二百目　代銀二百三十目四分程
夏夜る之物
方禮十貫五百目　代銀二百七十三匁程
眞綿二貫目　代銀三百八十四匁程
下客前
一木綿夜着　十通り　代銀一貫五十五匁程　綿共
一同　蒲團　同　代銀六百六十七匁程　綿共
一枕　同　代銀百五十目程
一蚊　帳　三張　代銀四百五匁程
一敷吳蓙　十枚　代銀九十目程

一もめんゆかた　五　代銀百目程

御納戸入

一地黒地白綸子　十端　代銀二貫三百八十目程

一同　辻　十端　代銀一貫八百九匁程

一小袖表　十五端

内　縮緬　七反　代銀一貫百五十五匁程

さあや五反　代銀七百七十五匁程

羽二重三反　代銀三百九十目程

一帯　もふるちりめん類　十五筋　代銀一貫五百目程

一絽さらし御模様　十端　代銀一貫七百五十目程

一紅羽二重　十疋　代銀一貫六百廿目程

一白羽二重　五疋　代銀六百五十目程

一眞　綿　三貫目　代銀六百四十八匁程

一紅白さあや縮緬　五十反　代銀七貫三百目程

一八丈縞ちりめん類　二拾五反　代銀三貫七百五十目程

一越後縞　十五反　代銀一貫三百五十目程

一さらし　十五疋　代銀一貫二百六十目程

奥御用

一白羽二重　十疋　代銀一貫三百目程

一白高色　五疋　代銀三百五十目程

一御髮かけ羽二重　但黑　一疋　代銀百五十目程

一御のし蒲團淺黃加賀　一疋　代銀六十八匁程

一御枕しんさらし　一疋　代銀五十目程

一御足袋　羽二重袷十五足　金巾袷十五足　三十足　代銀三百三匁程

一御枕しんはんや　十斤程　代銀百六十二匁程

一御手拭地さらし　一疋　代銀五十匁程

一さらし木綿　二反　代銀十八匁六分程

一御挾箱入りん子にても紅ちりめんにても三布四方兩面より　代銀四百六十目程

一御小角包御帛紗　三　紅さあやうら紅　代銀三百九拾目程

御服紗風呂敷御かけ類

一御小納戸御用

御ふくさ　御もやう　大小　五　代銀五百十匁程

純子　御手洗かけ　二切　代銀三十二匁程

純子　御手拭かけ尺三尺つゝ二切　代銀三十二匁程

一御手道具かけ　代銀二百五十目程

御ふくさ　紅ちりめん類　二反

御うら紅　一疋　代銀百五十目程

一御書御文箱

御ふくさ　御模様御縫入　五　代銀五百九十目程

一同　長

同　三　代銀四百六十目程

一長御文箱御ふくさ　七　代銀一貫七十八匁程

一半　同　同　代銀八百五匁程

一竪御目録箱同　同　代銀一貫七十八匁程

一横　同　五つ　代銀七百十匁程

御疱瘡筋
一御文箱御目録箱御ふくさ　三　代銀百五十三匁程

但紅しゆす無地

一御廣蓋かけ御ふくさ但御紋唐草御模様二　代銀二百六十目程

一御鼻紙臺かけ　同　代銀八十四匁程

一御守箱包縮緬二布半　但御紋附　一　代銀百四十四匁程

御符箱包
一御藥通ひ箱包　紫ちりめん一布半　三　代銀百二十目程

一御納戸御用

御ふくさ 純子 ちりめん類いろ／＼ 十五 代銀一貫二百目程

一御臺子御膳所

御かけ純子 大小 十五 代銀九百四十五匁程

一御重包御ふくさ 淺黄羽二重 紫羽二重 十五 代銀五百七十目程

一木綿ふろしき 三十 代銀二百九十目程

一次仕廻道具かけふくさ 紅ちりめん紅 一反つゝ 代銀百八十五匁程

一御伏籠かけ 紅ちりめん 花色ちりめん 三 代銀一貫七百五十目程

一御長持 御油簞

一御簞笥等御油簞御長持御簞笥夫々之部へ御油單代記之

御輿之者御牛下看板

一中色加賀もやう 六反 代銀三百九十六匁程

一裏 紅 同 代銀二百五十目程

一白加賀 六疋 代銀四百二十目程

一ちりめん帶 六筋 代銀二百五十目程

一さらし中色模様 六反 代銀三百十八匁程

一さらし 三疋 代銀百五十目程

右之通

御召物類より是迄

合三百二十一貫七百十五匁二厘程

大名衆へ

御入輿御入用大樣積り

總合六百七十五貫九百五十六匁三分五厘程

此一万千二百六十五兩三歩二朱三匁八分五厘　兩替六十目立

外に

潰銀(一本丸先つ)十六貫二百五十目程

「尾州樣

水戸樣

兩卿樣へ

御入輿御入用凡積り

總合七百三十九貫二百九十八匁二分八厘程

此一萬二千三百廿一兩二歩二朱七分八厘　兩替六十目立

外に　潰銀先つ十六貫二百五十目程」

〔京都へ

御入輿御入用大樣積

總合六百八十二貫七十七匁八厘程

外に別御帳入用

二十五貫九百六十八匁二分三厘程

合七百八貫四十五匁三分一厘

此金一萬千八百兩三步と三分一厘　兩替六十目立

外に　潰銀（先つ[一本凡]）十六貫二百五十目程）

南紀德川史卷之百二十

臣　堀内信　編

典禮第六

久米之丞様御宮參御箸揃御祝調

寶曆十辰年二月十一日

久米之丞様は　菩提心公御八男後三浦長門守爲脩御事此時御二歳若山にて御祝儀御整也記載之　方々様は左之御續き也

永隆院様　菩提心公御實母
左京太夫様　大慧公御二男　頼淳公後香嚴公
靜諦院様　同御女細川越中守室
桂香院様　同　松平相模守室
勘解由様　同御四男後松平左兵衛督
賢姫様　同御女後松平播磨守室
相君様　同　京極二品親王御息所
悦姫様　同　後松平讃岐守室
雅之進様　同　御五男後内藤因幡守
千穗君様　左京太夫様御奥方
智境院様　大慧公新御部屋様

一御宮參

久米之丞様御宮參被遊

一爲御知

永隆院様　御附へ　御用達より
左京大夫様　御用達へ　御用達より
靜證院様　御附へ　御用達より
桂香院様　同　斷
勘解由様　同　斷
賢姫様　同　斷
相君様　同　斷
悦姫様　女中より
雅之進様　御附へ　御用達より
千穗君様　同　斷
智境院様　女中より

御當日

五時之御供揃にて女中奉抱御錠口より表御座之間へ御出御近習詰所前通御年寄詰所前御通番頭詰所夫より中之間口へ　御出被遊候

右之節御座之間より御次迄御先立奥之番夫より御用達御先へ立奥之口外より御目付御先へ立小

玄關上之間にて御駕に被爲　召中口より御出東御門より長町へ　御出御駕町通り久野丹波守屋
敷脇より雜賀町通り湊片原小野町御通伊達社へ　御參詣被遊
一御歸之節伊達社四辻より久保町へ　御出被遊下の町より西長町通御花畑前より堤通り御藥種畑
へ被爲入
御藥種畑へ被爲入候節柴田利久右衞門罷出
一御藥種畑より　御歸之節道筋
御藥種畑より堤通御花畑前外通東御門より北御門脇引戸口より御內證へ被爲入
一當朝より　御出まて服御改
一東御門番人揃羽織
但右御門之內積手桶差置也
一伊達社にて　御駕より御下り遊遊候節
御まんほう　　御小納戸頭
御大小　　奥之番 御近習番
右之通持之
一御頂戴之神酒御參詣前伊達社へ廻し置
伊達社
瓶子一對　　男蝶女蝶飾之　　御酒詰封印にて遣之

御三方　二
御土器一重　奉書にて包封印にて遣之
長柄御銚子　男蝶餝之
御提子　女蝶餝之
蛭子社へ　右同斷
右之通兩社へ餝之
押桶二つヽ　白木臺一枚に貳宛居
内　米　餅　錢五百文
右押桶へ米餅入御蒔錢添神主方へ前日右何茂一所に御先へ神納
一御宮參之節御先へ蒔錢有之
右蒔錢御供之御藥込役之押桶蒔錢神前より御藥込小頭取出御藥込へ渡之
一神樂は　御歸後相勤之
久米之丞様より　伊達社へ
御太刀馬代銀壹枚　干鯛　一箱　行器　一荷　御目錄
蛭子社へ　同斷
右之通御備被遊
殿様より

金貳百疋　秋津大膳
鳥目五百文　神子
同　壹貫文　社役之者共
久米之丞樣より
銀　壹枚　秋津大膳
右之通被下之
一伊達社へ　御先へ罷越候者
奥役人　壹人　新役　壹人
御藥込小頭壹人　御藥込貳人
鋌前番
右之通罷越
一兩社へ押之者貳人罷越
一御土產物
小間物　壹臺　御菓子　壹臺
右御內證へ廻之
一御代參
岡之宮
金百疋　御代參　御近習番

栗林八幡
金百疋　御代參　同　斷
右之通遣之
一御祝儀物
殿樣より　久米之丞樣へ　御使　御用達
生肴一折　白木臺　御樽代貳百疋　御目錄
右之通被進之
一右御使へ被下物に不及御吸物御酒被下之
久米之丞樣へ　愛君樣より　御使御附代　御藥込頭
生肴一折　白木臺　御樽代貳百疋　御目錄
中將樣より　御肴代金百疋　御使御雇　御用達
永隆院樣より　生御肴一折　白木臺　御使御雇　御藥込頭
勝姫樣より　生御肴一折　同　御使御藥込頭御小納戸頭內
致姫樣より　同　同　斷
榮三郎樣　鐵之丞樣
金十郎樣　職之丞樣　より　御使　奥頭役
從姫樣より　御使御藥込頭御小納戸頭內

右御口上計

右之通被進之

一右之外　御方々様よりも御口上計之御使被進之

本文御方々様

（静寛院様・香桂院様・勘解由様）より　御使　奥頭役

實姫様より　同　御附

相君様より　同　奥頭役

悦姫様より　同　御藥込頭御小納戸頭内

雅之進様より　同　奥頭役

智境院様より　同　（一本同 奥之番）

右御口上計

殿様　愛君様　へ

中將様より　御口上計　御使　御用達

永隆院様より　生御肴一折　同　御附

勝姫様　致姫様　より　同　御藥込頭御小納戸頭内

榮三郎様　鉄之丞様　金十郎様　より　同　御附

職之丞様より　同　御使役頭中之間番頭内

従姫様より　同　御藥込頭御小納戸頭内

右御口上計

右之通被進御上け被遊

一右之外　御方々樣よりも御使御上被遊

一右御使御用部屋にて勤之　永隆院樣より之御使はお富士之間　御前へ被　召出御手自御のし被下之

殿樣　愛君樣　へ

久米之丞樣より　生御肴一折宛　白木臺　御使　御藥込頭

右之通御上被遊

永隆院樣へ

殿樣より　生御肴一折　白木臺　御使　御用達

愛君樣より　同斷　同　同　御附

中將樣より　御口上計　同　御用達

久米之丞樣より　生御肴一折　白木臺　同　御藥込頭

右之通被進之

一御酒被下

御用役　御用達　奧向當番

久米之丞樣御供中　御內證向　女中

右之通御酒被下之
一永隆院様御附頭役と女中へも被下之
一榮三郎様鉄之丞様金十郎様御附へも御酒被下之
一衣服定
一御供中諸士のしめ半上下以下役麻上下
一奥向服紗半上下
一表向共御用掛りのしめ半上下以下役にても御用懸りは麻上下
一御使之分はのしめ半上下
一江戸にても　殿へ罷出候奥平士迄服紗半上下
一御守殿方も諸士迄麻上下
右之外諸事　雅之進様御宮參り之節之通諸事宜御作略候事
一京都向御知せ等無之筈
一尾州様水戸様御初御連枝様方御縁家様方へも爲御知御斷等無之筈
一御箸揃　御表御座之間にて御整
右は　久米之丞様御箸揃御祝儀御整被遊
但御箸揃御祝儀相濟夫より御宮參被遊
玉女之方へ　爲向御着座被遊御のし上之御膳上御のし引之

御三献

御銚子　御提子

御服紗御膳

御指南役　柴田利久右衛門

着　座　村上三郎右衛門

齋藤勘左衛門

御指南役御右脇に罷在候御箸を揃生飯を取御本膳之向右之角に置其後御食を二箸上け御本膳之御高盛を二箸上又御食を一箸上御餅を一箸上御箸を納め九献を上御銚子納る

御給仕　女　中

一御産神へ御膳神酒御備之

一御祝御膳三汁十菜ぬり高足打

一被下

紗綾　壹卷　御指南役

右之通被下之

一御規式に掛り候面々のしめ半上下

一御箸揃御祝儀付て

殿様より　御使　御用達

愛君様より　　　　　　　　　　御使御附代り
　　　　　　　　　　　　　　　御薬込頭
　久米之丞様へ　生御肴　一折つゝ
右之通被進之
一中將様　永隆院様御初　御方々様よりは　御宮參相兼御使被進之

安永九庚子年十二月十一日
　方(みち)姫様御紐直御祝御廣敷調
觀自在公御女後　香嚴公御養女　水戸治紀卿御簾中恭岳院様御事此時御七歳若山にて御祝御整也
一　記中御續合左の如し

殿様　御養父　香嚴公
岩千代様　御兄　舜恭公
永隆院様　菩提心公御實母
清信院様　觀自在公御實母
筆姫様　御姉
千間姫様　御伯母　従姫様　御叔母
致姫様　同
左近將監様　御叔父
職之丞様　同
唯之進様　同
益之助様　同

久米之丞様　　　　　同
左京太夫様　　　　　同
（桂香院様　賢姫様　　　大御叔母
靈光院様　永昌院様
兵部様　丹波守様　　　大御叔父

一御紐直
右は當月十一日
方姫様御紐直御祝儀御整被遊候等に付爲御知
殿様へ　　　　　　御用達を以
岩千代様へ　　　　　同　断
永壽院様　清信院様　へ　　　御附へ　　御用達より
等姫様へ　　　　　女中作略
千間姫様　致姫様　へ　　　御附へ　　御用達より
左近將監様　職之丞様
從　姫　様　唯之進様　へ　　　御傅へ　　御用達より
益之助様　久米之丞様へ　　　御附屬へ　　御用達より
左京太夫様へ　　　御用達へ　　御用達より
桂香院様　賢　姫　様
靈光院様　永昌院様　へ　　　御附へ　　御用達より
兵部様　丹波守様へ　　　御用人へ　　御用達より

右之通無急度爲御知被　仰進且被　仰上之

一御規式

右は　方姫樣御城へ被爲入候上於御内證

御小袖　一重　帶　二筋

右廣蓋に御小袖一重其上に御帶小扇子たたふ紙熨斗七筋包形にて小松二本敷柑子取添御帶之役之前に出し置之

一御帶之役

方姫樣玉女之方に被爲　向御小袖を一重其御取右之御小袖　御手を通し御帶を二重御廻し御後にて兩わなに御結被遊此節女中其御相手を勤右相濟鱚之御吸物長柄御銚子出し御祝被遊候

一殿樣御祝被遊御盃事等之儀　思召次第

一御床餝

女蝶　御瓶子

男蝶　長柄御銚子

御熨斗　白三方

女蝶　御提子

男蝶　御瓶子

右之通飾之

一於御下屋敷御祝御膳

二汁六菜　塗御薄盤

右　方姫様御祝被遊

一御祝儀物幷御使

大殿様より　　御使　御用達のしめ半上下

方姫様へ

御小袖　一重　　御帯　二筋

干鯛　一箱　御目録

懿姫様　等姫様　備姫様　より　　同　御薬込頭　御小納戸頭内（一本ナシ）（同）

御口上計

右之通被進之

一殿様　岩千代様　永隆院様　清信院様御初　御方々様より被進物等　夫々様思召次第

一右御使之分へ　方姫様より御吸物御酒被下之

方姫様より

大殿様　殿様　へ
永隆院様　清信院様　　御使　御薬込頭　御小納戸頭内（一本ナシ　のしめ半上下）

干鯛壹箱つゝ　御目録

右之通御上被遊

大殿様より

殿様　永隆院様　清信院様　へ　　御使　御用達　のしめ半上下

干鯛一箱つゝ　御目録

右之通被進御上被遊

大殿様へ　方姫様より　（御使）［一本ナシ］

御上物等前段之通

一殿様　岩千代様　永隆院様　清信院様より御使御祝儀物等思召次第

一右御使　御前へ被　召出披露御年寄御目録同人上之

御返答　御請

御直に被　仰聞之　御手自御熨斗被下之

殿様　岩千代様より之御上（納）［一本物］出し引御用達

一永隆院様　清信院様よりも被進物　方姫様より之御上物出し引御近習番

一右為御禮

殿様へ　　御使　御用達

永隆院様　清信院様　へ　　同　御薬込頭

右之通御使被進御上被遊

方姫様へ被進物等有之候得は右御禮も御口上に加る

一右之外

御方々様より御使等御上被遊候はゝ於御用部屋相勤御返答御用達申述之

大殿様　殿様　へ

懿姫様　等姫様
備姫様　　　　より御口上計　　御使　御薬込頭　御小納戸頭内　のしめ半上下

右之通御使御上被遊

一御代參

方姫様より　伊達社　蛭子社へ

金貳百疋つゝ　御代參　御薬込頭　御小納戸頭内　長上下

刺田比古社　栗林八幡へ

金百疋つゝ　御代參　御薬込頭　御小納戸頭内　長上下

右之通御代參被遣御備被遊

金貳百疋　秋津伊豆

右之通　方姫様より被下之

一差上

方姫様へ　生肴一折つゝ　三浦長門守

村上奥兵衛

相合
交肴一折

大殿様方

御用役

奉行

村田次郎九郎

三宅源五左衛門

相合
交肴一折

大殿様方

御用達

右之通差上之

一御酒被下

御年寄御用役奉行御用達御業込頭御小納戸頭へ御酒被下之

一女中へも御酒被下之御內證向へも御酒被下之

一御表方へも右同様御酒被下之

一清信院様御附幷女中へも御酒被下之

右之通被下之

一衣服定

御小姓頭以上御用達御內證向諸士熨斗目半上下其外奥向當番諸士服紗半上下

一御規式懸りは熨斗目半上下以下役にても御用懸りは麻上下
右之外細雑之儀は跡々の趣を以及取計候事

御鎗初御式

天明四辰年閏正月六日於江戸
中將様（舜恭公御事 御十四歳）御鎗初大島雲五郎御指南仕る
殿様（香巖公）富士之間御着座　中將様御出被遊御用達披露大島雲五郎（麻上下）被召出雲五郎御竹刀差上候段御用達申上之形遣入御覧候様　殿様御意有之于時雲五郎相手朝比奈與市（麻上下にて）御次之竹刀長刀持出雲五郎形遣入御覧相濟右竹刀長刀與市持御次へ引雲五郎儀其儘能在　中將様二之間へ御出被遊御相手與市御次（へ）（一本より）罷出

御竹刀
御長刀　臺居

右最初より二之間へ出置右竹刀雲五郎へ御近習番取渡之御長刀與市取相濟御臺へ御近習番引御竹刀雲五郎　中將様へ差上御稽古初被遊相濟御竹刀御長刀共御勝手へ與市持退之雲五郎御入側迄退扣罷在　殿様へ御時宜被遊最前之御席へ御着座被遊于時御三肴御小姓上之雲五郎少し席を進置
中將様へ恐悦之段御用達申上之雲五郎へ　中將様御意有之雲五郎退出
一雲五郎與市へ御吸物御酒被下候事
一雲五郎へ時服一銀七枚被下候事

享和二壬戌年十二月廿一日

豊姫様御髪置御祝儀御廣敷調

豊姫様は　舜恭公御三女後　顯龍公御簾中鶴樹大夫人也此時御三歳和歌山にて御祝被爲整御内々同之宮へ御参詣さあり其中
鍇姫様は御姉君にして後仙臺家へ御緣組　信恭院様御事（マヽ）信姫様亦御姉君にて御早世也川上方之助は御實母御里方なり

一殿様より　豊姫様へ
御小袖　一かさね　干たひ　一はこ
外に　生御肴　一折　生花臺　御酒
御仕廻道具一通り被進候事

一大殿様より　御小袖　生御肴　一折

一鍇姫様より　御さかな　一折　外に　御小袖　壹

一信姫様より　生御さかな　一折

一殿様へ　豊姫様より　生御肴　一折　外に　御吸もの　御酒　御硯ふた物　御菓子貳重

一大殿様へ　生御肴　一折　御酒　御硯蓋もの

一鍇姫様へ　御肴一折　代百疋　何そ御一品　江戸御賴込也

一信姫様へ上け　御さかな一折　代百疋　御酒　御硯ふた物　御召　御由緒之方

一殿様より
白かね壹枚　於さえ

金百疋　　浦　瀬
銀拾匁つゝ　　御次貳人
同貳兩つゝ　　（御三之間　貳人 / 御乳持　三人）
同五匁つゝ　　御半下

此分御姫様より被下に成候筈

一豊姫様より
白かね壹枚　生さかな一折　紅白縮めん貳巻　　三浦長門守　妻
金貳百疋　生さかな一折　　みよし　姥
金三百疋　御召一重　　於さえ
金貳百疋　　うら瀬
同七百疋を相合　　御次　御三之間　御乳持　御半下
此分　殿様より被下に成候筈
御召　　川上万之助
上り合　さかな一折つゝ　　同　傳右衛門
　　有本　左門

一殿様より
白かね五枚（上物に付　金三百疋）　　三浦長門守　妻

同三百疋　原田
同二百疋つゝ　りか　まり
同百疋　中居
銀拾匁　半下
一殿様より　金三百疋　初島
一姫豊様より
御召　生さかな一折　同人
一豊姫様より
御召　富小路　綾その　關川　谷むら　袖崎　福をか　ちや
同　●花井　初浦
白かね七枚を　梅崎初御半下迄　千か
御切
御召　御廣敷　御用人
金壹兩を　御用達　五人
御召　日置　健立
金貳百疋　同　周健
上り合
大交肴三折　外之　御いし共

一殿様へ差上
御肴一折　　佐衛
同斷　　（富小路初七人
　　　　初しま

一豊姫様へ
御肴　一折　　さえ
相合
同斷　二折　　富小路初
同斷　一折　　梅崎初
　　　　　　　その岡迄　七人
同斷　　　　　うら瀬
相合
同斷　　　　　御廣敷　御用人

一被下
吸物　五十人前　　いり物　貳鉢　　三盃漬　貳鉢　　酒　壹斗五升
外に　御方御用
御赤飯大御食籠　一荷
　　　小同　　　一荷　　大硯ふた　貳面　　御酢さかな　貳重　　御酢さかな　貳鉢　　酒　三升
右之通り

文化三寅年十一月
豊姫様御紐解御祝御廣敷調

一御紐解

當十一月　豊姫様御紐解御祝儀御整可被遊旨被　仰出之

一右之御儀に付別帳之通御用部屋にて調之

一御床餝

御目出度御掛物御花御廣敷御用人作略之

一豊姫様御祝

御三献　御膳二汁五菜　御居鏡餅　木地御三方

一御當日

御紐解御規式女中作略之

殿様より被進候御小袖被爲　召

豊姫様於御方

鐺姫様
豊姫様へ

御熨斗上之

鰭御吸物　御盃事被遊相濟

御三献御祝ひ被遊

一豊姫様御方にて玉女之方へ被爲向上り候御手本にて御手習初御讀物初被遊御熨斗上之

一御使

大殿様　殿様へ　於紀州
鐇姫様より　御口上計　御使　女中
鐇姫様より
豊姫様へ　御口上計　御使　女中
右之通御上け且被進
一天兒
御伽
御居鏡餅　二飾　木地御三方
一差上
豊姫様へ　相合　御肴　一折　御廣敷御用人
一被下
いり物肴　大　貳鉢半　三盃漬　同斷　御酒　貳斗　吸物　六十五人前
大奥上通り御廣敷御用人迄
右之通相廻し大奥并御廣敷向末々迄被下之
豊姫様此時御七歳なり書中御方とは方々様御部屋を奥向にては例御方と通稱するなり

天保三辰年正月
御中﨟着帶調〔老女方記錄〕

八十女は顯龍公の御中﨟也流產故か御誕生之事　御子樣方之部に洩れたり

天保三辰正月廿六日

御中﨟八十女着帯に付內々さつま姥上る

二月朔日にも添はゝ同道上る

二月朔日着帯祝儀に付

紅白ちりめん　二卷　生鯛　一折　覺目六

金三十兩　八十へ

同　斷

御包の內繻子地帯

西御殿より

嶋ちりめん　同人へ

さかなさして貳百疋

右之通被下之

御二所樣へ右に付差上

御肴一しゆつゝ　百疋つゝ　同人より

御二所樣へ

生御肴一折　さつま姥より

右差上度きたまて差出す
大納言様より
白かね　貳枚　さつま
鯛　一折　横折覺書　さつま
御二所様より
さかなさして
三百疋　覺書横折
右は御肴さし上候に付被下之
大納言様より
白かね　一枚　添はゝ
右被下候
御姙婦より
貳百疋　さつま
百　疋　添はゝ
右之通
一着帯に付お八十殿へ
鰹節　貳連　兩老女　同格貳人
同　貳連　御本家　若年寄はしめ　兩表使迄

二月廿八日
御筧三方一餝
鰹節　一折
御樽　一荷代百疋　牧　秀右衞門
右之通り差上候に付上り合御肴被下候筈之處御肴無之生肴代り貳百疋被下候
五月十一日
於八十今夜五時比流產御死胎
西御殿より右催しに付熊野へ御祈禱被仰付
同　十二日
御二所樣より　八十
食ろう　一荷　添重　一組　精進也
右被下候
十二日夕方まて御使座敷に
被爲入候に付淨性院へ御淸め御祈禱申出る
御初穗百疋は寄金を出す
御禮
御幣差上候
西御殿より　八十

介卷　かつをふし　一はこ
右被下候
十四日
西御殿より　重　二組　にしめ くはし　八十
右被下候
十七日
大納言様より白銀拾枚　さつま娩
同　三枚　添はゝ
御產婦より同　貳枚　さつま娩
同　壹枚　添はゝ
右之通被下表使より文にて出す
廿日
御二所様より食籠　一對　あか うこん　八十
添重　一くみ　魚類也
右被下候
右之外御中﨟着帶之例不尠略す但し御誕生御肥立之時及ひ前記欠記之分を左に揭く
着帶之節　妊婦へ

御部屋様より　いはた帶　こんふ　一臺　壽留め　一臺　樽代

右之通被下之

一御誕生之節

御貳所様より御誕生様へ　御食籠　一對　御添重　一組

御簾中様より　御ふんこの内　御ひよ 御くろみ　鰹節　一箱

右之通被進之

一大納言様御初方々様御銘々様より

御誕生様へ山王氷川熊野御札守御夜守被進

一御誕生様御乳附に御役人等之妻女上り其節

御貳所様へ生鯛一折差上

御貳所様より御肴代貳百疋つゝ御誕生様より白銀貳枚同人へ被下

一御七夜迄之内折々

大納言様より御重組前大納言様より御食籠一對御添重一組被進

一御簾中様より介卷被下之外に左之通被下

小寢卷代り　金　五　兩

一御七夜之比さつま姥等へ左之通被下

白銀　十枚　さつま姥へ

外に骨折候に付
同　七枚　　又は白銀　十枚

一しゆ　　行器　一荷

外に
金十五兩

弘化三午年之節は　さつまはゝへ

白銀　十五枚　一しゆ　行器　一荷

外に衣服夜具代として
金貳拾兩

添はゝへ
白銀　三枚　食籠　一對

外に衣服夜具代として
金拾兩

白銀　五枚　　添はゝへ

外に骨折に付
同　貳枚

産婦より

白銀三枚　又は五枚　　さつま姥へ

同　貳枚　又は三枚　　添はゝへ

一御誕生に付御家老御用人御醫師老女より鯛一折つゝ　大納言様へ差上夫々へ銀一枚つゝ又は一枚
金貳百疋つゝ被下女中末々迄も貳百疋又は百疋つゝ被下

右之外は都て前記八十女之例に同し

一御本腹之節薩摩姥へ被下は左之通り之旨調書あり

白銀　拾枚　　一種　　さつま姥へ

外に夜具代として
金拾五兩
白銀　三枚　　添姥へ

外に
金七兩

御雛中樣より

白銀　十五枚　　一種　　さつま姥へ

行器　　一荷

外に
諸色代銀十五枚

中色縫入總もよふ小袖一重　　ふくさ帯　一筋　　八丈小袖　　一重

白銀　五枚　　食籠　一對　　添姥へ

外に
中色縫入總もよふ　　小袖　　一重

ふくさ帯一筋　　八丈小袖　　一重

天保十四癸卯年八月廿八日　　於江戸

伊曾姫様御誕生調（一本アリ老女方記録）

顯龍公御妾腹神光院君御事也御實母松平氏

一吳服御上初

御裁初

白綸　一反　白重り羽二重　貳疋　白羽二重　壹疋

紅羽二重　壹疋　紅羽二重　壹疋

右五品奉書紙折形包にて白木臺一つへ一所に載之

一右に付御祝儀

大納言様　御簾中様　へ

御酒　御吸物　御硯ふた

右之通上之

一壽命御鋏折形包　二挺　壹包　一御双ふくら同　二　壹包

一白御結糸　同　一包　一藁十八筋　一包

一御物差　同但鯨さし　二本　一白練繰糸　同　一包

一朴の木御物差但し鯨さし三尺　一本　一包　一熨斗包　同　一つ

右は白木臺一つへ載之　折形包は何れも奉書赤白水引

一御裁板　朴の木　一枚

一白米壹升　約掛升に入　　一鰹節　此弐品木地御三方載之　二本

一錫瓶子　蝶花形木地三方　一對　　一銚子　生餝

一提子　生餝　　一土器　内墨　三枚　木地三方

右之通

一御酒被下無之

跡々御内々御調にても御用掛り女中幷男子向へ御酒御吸物被下候得共万端御省略之取調に付

此度被下無之

一衣服定

御用掛り一等麻上下着　跡々はのしめ着用に付此度は

右之通

一差上無之

跡々御内々御調にても御産婦幷老女御用掛り御用人より御肴差上候得共此度は差上無之

一被下無之

跡々御肴差上有之節は御産婦幷老女御用掛り女中男子向共御かね被下候得共此度は被下無之

「御廣敷御用人」　牧　秀右衛門

一御篦刀差上

右は今日御日柄宜候に付差上之義前日老女へ申談左之目録之通差上之

牧秀右衛門幷御用掛り御用人御用達麻上下着

御對面所御三之間へ並居秀右衛門致見分於同所老女壹人出席御目錄秀右衛門老女へ渡之

御箆刀三方　　　　　　　　　一飾

白木御三方紺青御紋附

白米貳升よく〳〵干揚是を盛其上に山椒をむらなくまき中央に御胎衣土器貳枚重ね置御胎衣

土器の中に御產石を置左右御土器の下より雄蝶雌蝶の折形をはさみ建之置前之方に御箆一對

鉄御小刀を置向之方御麻苧九結ひ熨斗三本昆布貳枚を奉書に包み銀水引を懸置申候御箆御小

刀之前には勝栗九つを置申候

鰹節　一折　　御樽　一荷　　御樽代百疋　　「牧　秀右衛門　木數一

右御目錄楷書にて認之

但御箆刀三方一餝と計認之

一右差上候に付　　　　　　　　牧　秀右衛門

御上り合　御肴一折

右御廣敷扱にて被下之

跡之者御箆刀上より鯛一折差上候得共御內々之御事にて右差上之御三方に御熨斗等添有之候

付御肴差上候には及間敷候

一跡々は御箆刀差上候に付銀壹枚被下候得共此度は右被下も無之本文之通御肴被下之

一御酒被下無之
跡々御篦刀差上候御用人幷御用懸り御用人御用達へ御酒吸物硯ふた一面被下候得共御內々御取調に付被下無之

一御七夜
右は今日御七夜に付御內々　御誕生樣へ
御名　折紙　鰹節　一箱
右之通被進之
一御名引合紙三折中央に表御右筆御書方認之
但外に假名附候筋も相認大奥へ相廻り候節は右假名附候筋も添相廻之
一右御使御廣敷へ罷出老女へ申達大奥取扱にて被進候事

一御祝儀に付
御貳所樣へ　數々御熨斗　木地御三方紙敷
御居鏡餅赤白　一重　同斷　赤白菱附　三枚
長御熨斗　貳本添
杉折盛
御赤飯　上に御熨斗　貳本添
御三獻

御二度目御膳
二汁七菜　松立御肴　御銚子　御提
一衣服御用掛り熨斗目麻上下其外服紗麻上下着
右之通御祝上之
一御產髮垂
右は　御誕生樣今日御產髮剃之御祝儀御整被成候付右爲御祝儀
御貳所樣へ　御吸物　御酒　御肴　一種
右之通
一右に付御用之品左之通り
御紋附大之
御食椀　壹つ　白木御三方
上之
御草履　壹足　右同斷
麩のり　五枚小き筋
一兼て大奧へ廻し込有之候御品
壽命御剃刀　白繪御箱に入　御曲盥　同斷
御湯當　右同斷　御毛受硯蓋　同斷
一右　御產髮垂大奧にて相勤候女中之內壹人被　仰付候事尤御用人之內にても壹人御式相勤候樣

被　仰付候

御用掛り

御用人

金貳百疋　　　筒井平藏

外に　御酒　吸物　肴　一種

右は御產髪垂御用相勤候に付被下之

右御用相勤候

金貳百疋　　女中へ

御酒　吸物　肴　一種

右御產髪剃御用相勤候に付被下之

御廣敷坊主

銀壹兩つゝ　　貳人

右御髪剃刀硎御用相勤候に付被下之

一御產髪垂之御式

一明きの方へ　御向ひ被遊候事

一御食椀にて御湯少〳〵つゝ三度御盥へ　あけ御湯加減いたし程能致し御髪しめし御左の方三度御右之方三度中三度御剃刀上之

一御草履は御髪剃刀上け候者腰脇左之方へ置之
但し　御姫様に被成御座候得は初御右之方三度御左之方三度御中三度上け候事
御草りも剃刀上け候者之右之脇の方へ置候事
右之通
一御七夜御祝儀に付
被進
大納言様より
御誕生様へ　御産衣　一重　白唐綾御紋織出し
御下重　白羽二重
御肴代　金百疋
一位様より
御同所様へ　御産衣　一重　右同断
御肴代　右同断
御簾中様より
御同所様へ　御産衣　一重　右同断
御肴　右同断
御部屋様より

御同所様へ　御産衣　一重　白綸子葵御紋

御内證之方より

御誕生様へ　生鯛　一折　代金貳百疋

右之通被進且差上之

一差上

大納言様

御簾中様　へ

御誕生様

御相合 御肴　一折　御本家　老女

御肴　一折　御簾中様　老女

御肴　一折　御用掛り「御廣敷御用人」　筒井平藏

井田大記

御肴　一折　徳田忠庵

佐武才庵

金谷玄純

御肴　一折　「御廣敷御用達」　津田左助

伊藤爲十郎

右之通差上之

一被下

東金三百疋　　御本家　老　女

同同斷　　御簾中樣　老　女

同同斷　　筒井平藏
　　井田大記

同同斷　　德田忠庵
　　佐武才庵
　　金谷玄純

同金貳百疋　　津田左助
　　伊藤爲十郎

右之通

一御酒被下

右は大奥女中一統幷　御簾中樣御用人初左之通御酒吸物肴被下之

吸物　御酒　肴　　大奥　女中一統

吸物　御酒　肴　　御簾中樣　御用人　御匕醫　御醫師　御用達

御廣敷番　右以下末々迄　詰合不殘

一御七夜に付御祝之餅
被進被下之品
大納言樣へ
御行器　一荷　御餅十三入
右御祝儀に付御初穗取上之
大納言樣より　御簾中樣へ被進
御行器　一荷　御餅十三入
御肴　一折　御目六
右之通被進之
大納言樣より　一位樣へ
御行器　一荷　御餅十三入　御肴　一折
大納言樣より　御部屋樣へ
御祝之御餅　十一
御內證之方へ
御祝之御餅　九つ
右於若山御上被進且被遣之
餅　十三　薩摩姥へ　同　七つ　添姥へ

同　七つ　　御乳附へ　　同　三つ　　産婦へ
同　十三　　岡了允へ

右之通被下之

一右之外御用掛り御用人初へ御祝之御餠被下之儀は大奥調にて被下有之候事

一被下

右御祝儀に付

御貳所樣より

公儀御醫師上產婦へ被下幷御乳附薩摩姥へ被下物其外大奥向幷御用掛り御用人初へ被下物等都て大奥調にて被下有之候事

菊千代樣御箸揃御式

菊千代樣御箸揃御式　弘化三午年九月廿八日

上使

御對面所御上段へ　御出席

御盃事之節　御前御相伴

御長熨斗　木地御三方　御吸物　木地御三方　御盃土器　木地御三方

銀御間鍋　松立御肴　木地御三方　御下捨土器

右之分御相伴被遊候事

御對面所御下段

御膳三汁八菜御向詰共

御本　御二　御三　御向詰　御引物　御吸物　塗御間鍋

御肴二種　御硯ぶた　御茶菓子　御後菓子

上使御使休息相濟

御餅菓子　盃に盛塗三方　御塗重　七寸一組　御吸物　御肴二種

御硯ぶた　さしみ　名酒

右之通

御後段

御對面所御下段

蕎麥切　吸物　塗三方　御肴

右之通り相濟

御箸揃

御三獻　御銚子　御提子　御祝御膳

御指南役御廣敷御用人御右脇に罷在御箸を揃へ生飯を取御本膳之向右之角に置其後御飯を二箸あけ御本膳之高盛を二箸上又御飯を一箸上御餅を一箸上御箸納九献を上御銚子納

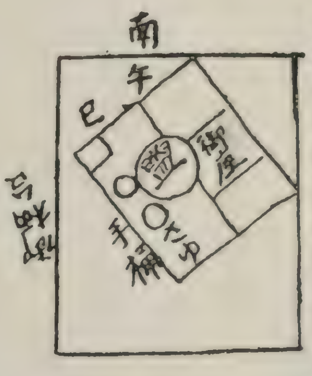
右相濟

大納言様菊千代様御盃事被遊
御熨斗　白木三方紙敷　御吸物塩鯛鰭土器盛　木地御三方
御土器　壹　木地御三方　長柄御銚子　御加　引合紙糸色餝
御取肴　木地御三方紙敷　御したみ土器　木地御三方紙敷
右之通御祝儀相濟候事

文久二戌年十月
御簾中様御痲疹　倫宮様　（一本アリ老女方記録二）
一十月廿日夜より少々御熱氣つよく廿五日御痲疹御治定
右に付老女初髪上式日にて御小座敷西御殿へ御祝儀申上兩御小姓迄申上る　御のし上る
一同廿八日十一月朔日式日御禮御小座敷兩詰所之者兩御側出合　はかり　御のし上る
一十一月七日卯之日に付於御小座敷御二之間御酒湯御うろ〳〵召され候但巳午の比ゆへ晝四つ半時比召させらる
御用意
一御小座敷御二之間へ新きこさ二枚敷高麗へり
一御三方にさんたはら一つ
一御笹少々本をゆい少し御三方にのす
一御酒　一徳利

一御湯米之湯白湯上に御のし此御のしを差上候節御三方の上のさんたはらへのせさし上る
一御手ぬくひ一つ
是は御跡の御湯にて三度御しほり御顔を御ぬくひ遊す尤其時に寄り御熱氣有之候はゝ御眞
似事被遊
一御召出し置
一御たらい一つふた共　一御小手桶一つ御ひしやく二本白木臺にのす
召さられ候御湯御表へ出方角へあけ(て)[一本候]よしさんたはら笹も同斷御手拭奥にて流す

玉女之方



一御(髪)[一本湯]上る者計髪さけ
一上候者玉女の方へ一禮
御米湯　六つ　但閏にはいつれも一つ多く相成　御白湯
一さんたわら御三方共御のし添
御主様へ差上　取て御かさし申上一人御後より持御笹にて三度御かさし申上

さんたわら請取元へ直し下る
一御のし三方差上　御祝儀申上る
一巳之日御二番湯
同斷
一未之日御三番湯
一統模様もの着す

御ひんそき御袖留御式

御ひんそき御袖留幷に圖

御床餝之事
御三方　勝くり十六　蝶花形　御銚子
御三方　蝶花形　御瓶子　一對　三つ土器御三方
御三方　昆布十六枚　蝶花形　御提子
御祝ひの御間御餝り附
御ゆすり次
御ゆすり臺
上に柳御鬢板
御床脇　非盤
御違棚之前　御竹刀御小刀　御ゆすり臺　御ゆすり次　御亂れ筥　御櫛之具

御鬢曾貴御祝儀之次第

一御上檀　御着座　御介添之老女衆玉女之方へ被　仰上候て　御向ひ被遊　御着座時に碁盤を御前へ置碁盤の左右に御ゆすり臺ゆすり次を置御前の御右の脇に御美たれ筥を置此時御ひんそきの御役御美たれ筥に御座候稜の御櫛を御取被成候て御右の御ゆすり水を御櫛の歯に付候て御右の御鬢を三度御撫被成候て其後御左の方のゆすり水を御櫛の歯に付御左の御鬢を三度御撫被成候其後はらひの御櫛を御美たれ箱に御置被成候て鶴の本白の羽ねを御取被成御左右のゆすり水を羽の先へ付候て御右の御鬢を三度御左の御鬢を三度御撫被成候て其本白を御亂筥に御置被成候て御介添の老女衆　御前の御右の御目尻の御髪を十二筋御胴の下を御廻し被成御左の御小耳に御くらへ被遊候て碁盤の上に御座候柳の御ひん板を請御ひんそきの役御竹刀を取りて御鬢板の上へ當て十二筋の御鬢の御髪を切候眞似を被成候てまた御左の御目尻御髪を十二筋御胴の下へ廻し御右の御小耳にくらへ柳の御ひん板の上に請御竹刀をあて切眞ねを被成候て其後鉄の壽命御小刀を御取直に十二筋の御鬢そきの御くしを御はさみ被遊候右にて御作法相濟候扨長御かけ被遊此時御廣ふたに御脇付の御小袖を打掛に御上被遊御袖は御通し不被遊母衣(ほろ)に御打掛被遊候て御作法濟候此時御口祝之御臺上て直に御下け可被成候右相濟

御化粧の間へ被爲　入御眉を御取被遊御本眉に御作り被遊候て御祝ひの御間へ出御まして御着帯之御祝式御内々申上候通御作法濟せられ候て御二所樣御三献之御式被爲在候御事

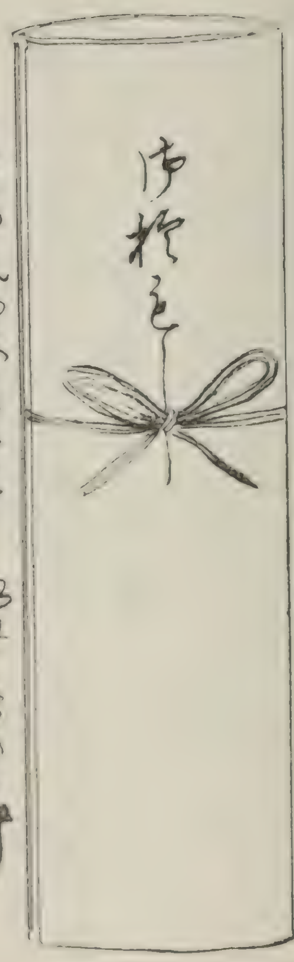
「右蓋し禮式家より提出のものならん原書年月欠記いつれの御時か知るべからず」

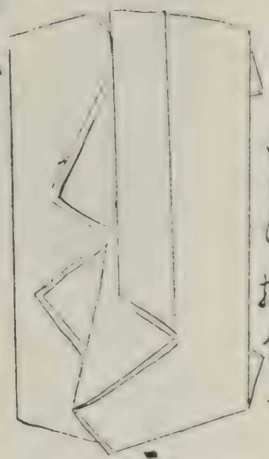
明治二巳年八月五日　倫宮様御時　御式書等欠失



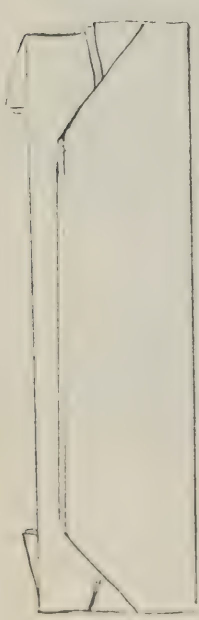
御櫛疊

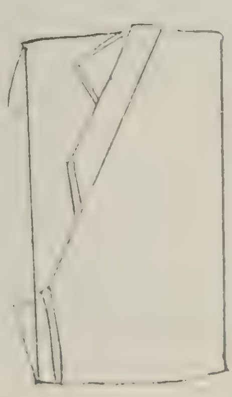
三ツ





三ツ





御飾附圖式　眞行草御床飾
板床附眞行草
（一本ナシ御違棚眞行草
御書棚御飾）

御厨子黒棚傳

此一巻は小笠原流式法を諸禮家より提出のものにて内庭に存置せるを抄出す何れの御時とも判明せされ共御儀式の程度に應し準據ありしならん類により爰に編す



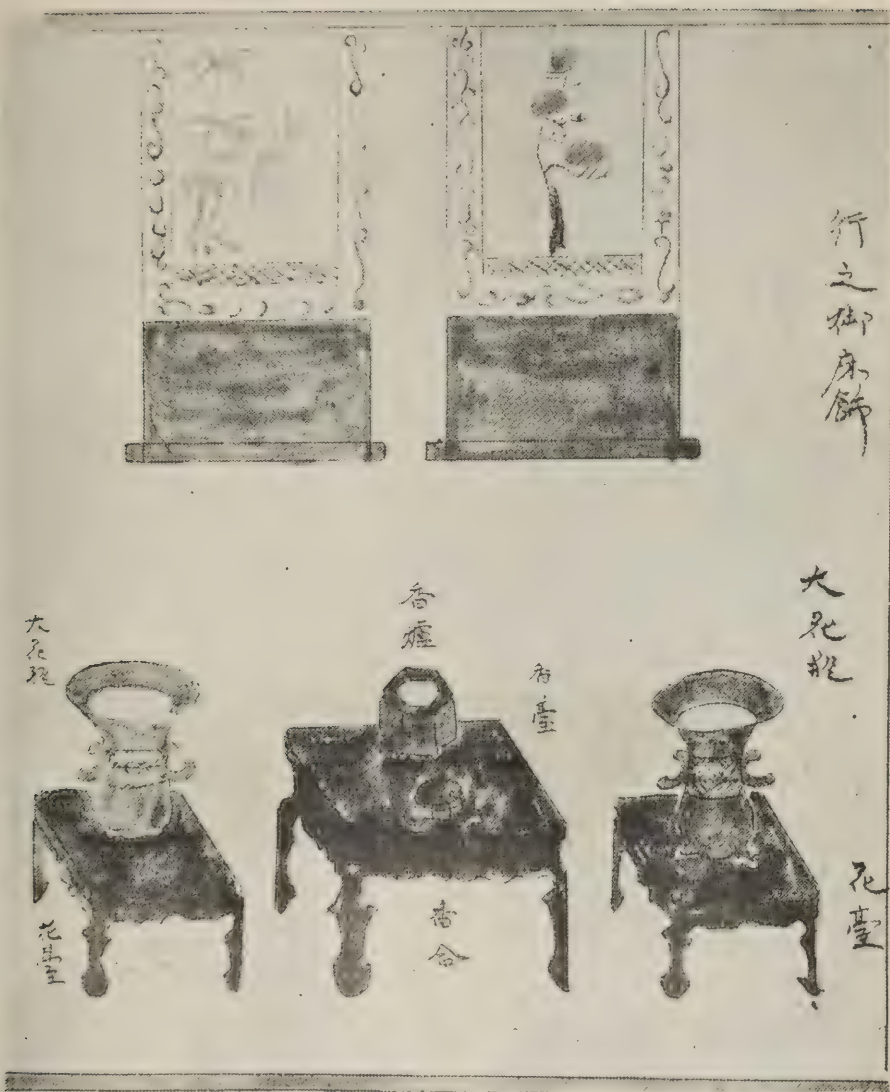
此御飾の內春日棹梨子地之時は花臺も梨子地青貝の類にても一統之御出來

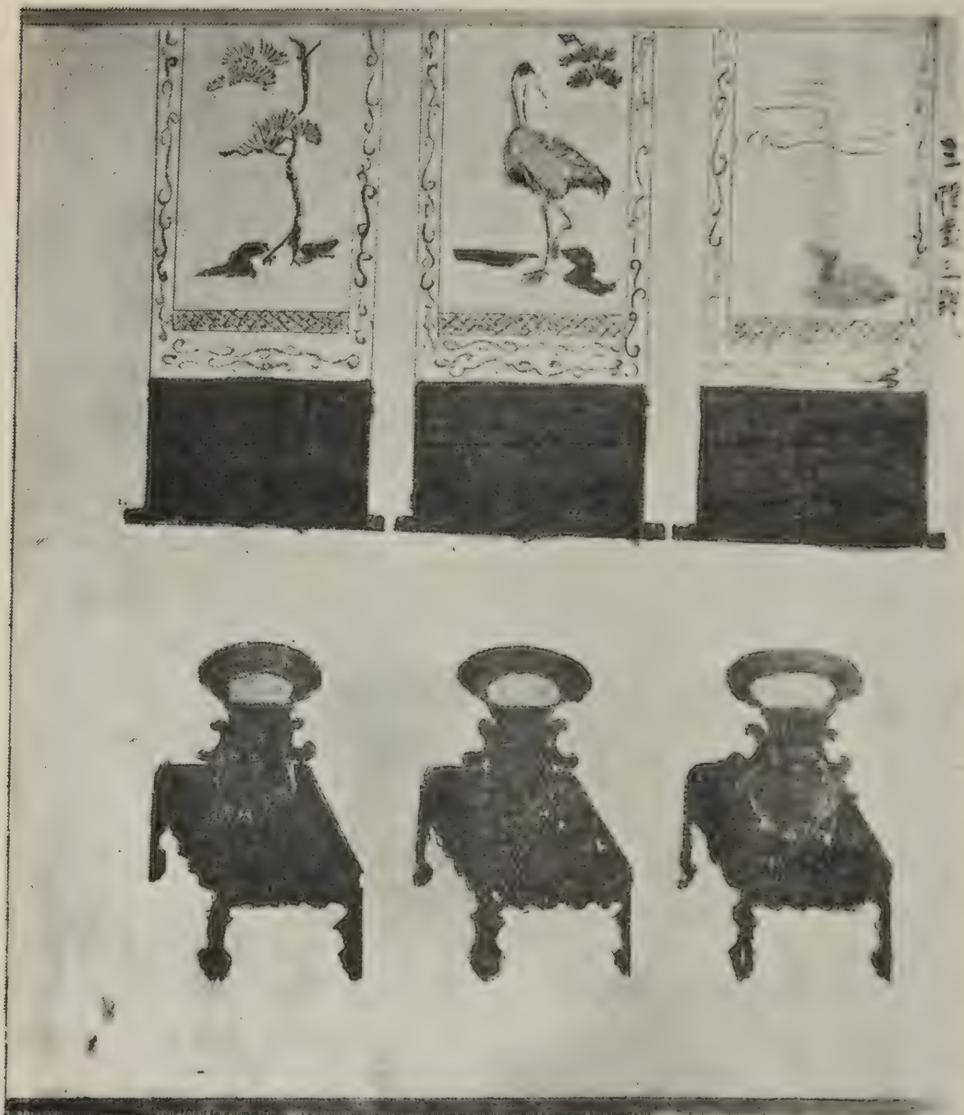


□印之所へ奥向にてはきやうしこし建て御組附御飾に相成候儀も故實にて御座候



きやうしこし建御組附御飾之儀御同前


行之御床飾
大花瓶
香爐
香臺
大花瓶
花臺
香合
花臺



三幅對三對



行之御床飾他同断
三幅ニテモ二幅ニテモ二瓶
御掛物三幅ニ二瓶之方



（銀ばさみ）
火ばし
香匙
三本にても



但薄板花臺香臺之類は十九もく目御飾附御座候て御模様宜くおはしまし候
一御硯料紙淺縁等は御床柱之際に御床縁より不遠様に御飾り御座候



一御飾替中央に人物鳥獣之類御置物但御床疊之上には御臺か薄板を敷御板床には薄板御臺等無之其儘御飾附御座候此時は御左之方御食籠止之一所御明置


御香炉
御香合
御火箸



一御掉下之花
御飾替に
御きやうし建に
こし
銀はさみ
火ばし
香匙
以上三本立
右御掉下に置
御飾附御座候



一冠臺冠棚共中習ひ候士庶人之家にては不用之調度にて御座候へ共香臺にも用ひ候故士庶人之家にても床飾には仕候儀にて御座候

右冠棚中央に御飾附の節は御香爐を上に御組附御飾御座候

一御軸之物御飾御違棚之内に御書躰御置合せ御座候時は除之此所御明け置



但十月御茶之口切之節等御飾附



一重食籠御飾替には唐鉢に龍眼肉或はれいし盛之

一唐盞御飾替淺縁に御短冊上に御文鎮

一仙盞瓶御飾替

御重硯

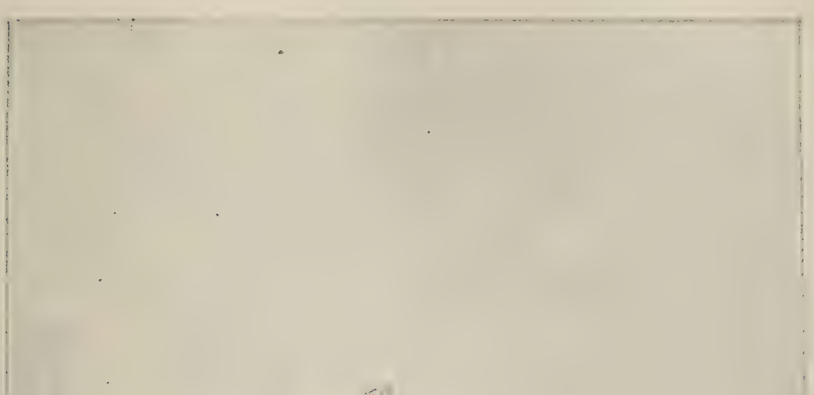
板床附眞御飾



御床に御花有之時は御飾大笛笙之
内袋入仙盞瓶の跡へ御飾付御座候

御軸之物御棚飾之
内御書躰は御差合
之時は此所明置候
て御飾附御座候

同行之御飾



御食籠御飾替折枝

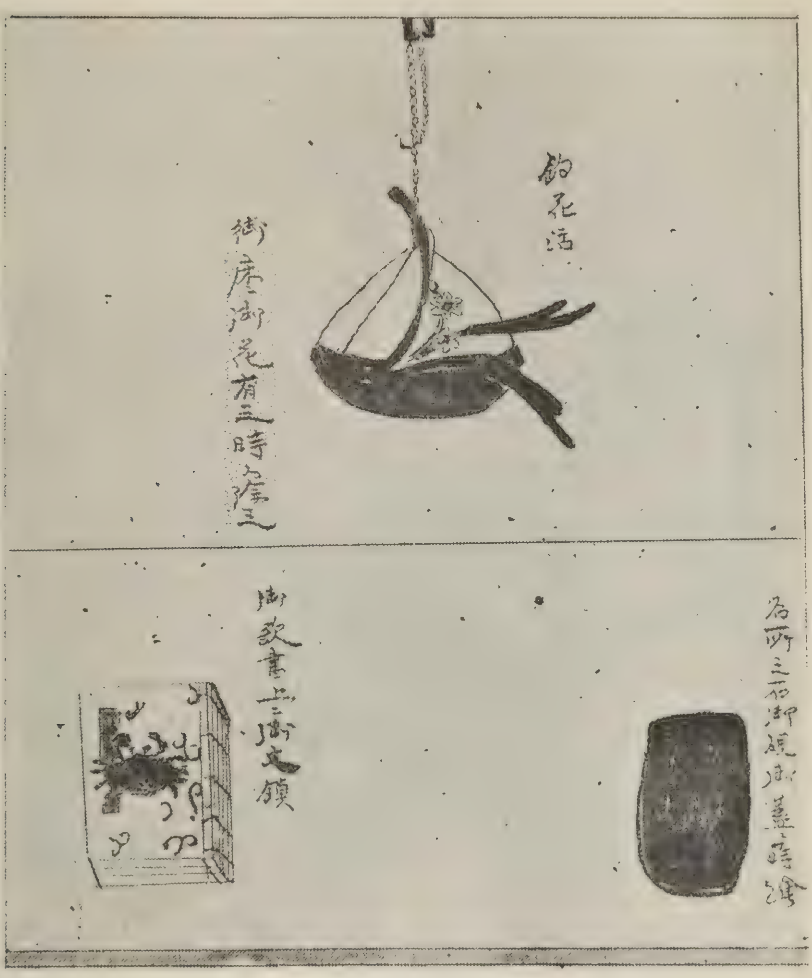
御手鑑御飾替四季之薄様上に御文鎮



石菖は暑之時之御飾此御飾替人物生物之類御置物

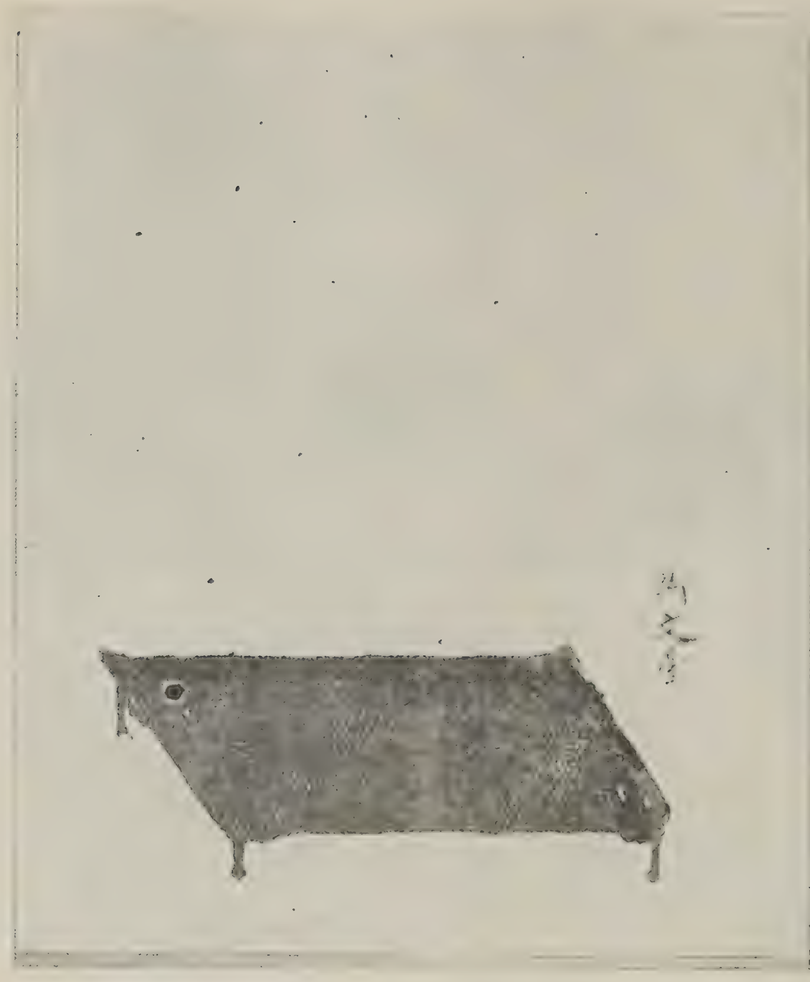
引合御飾替式紙短冊上に御文鎮

同草之御飾



御硯御飾替御火取香爐御棚飾之內御香具御差合之時は細口御花生に孔雀の羽建

御歌書御飾替御重硯

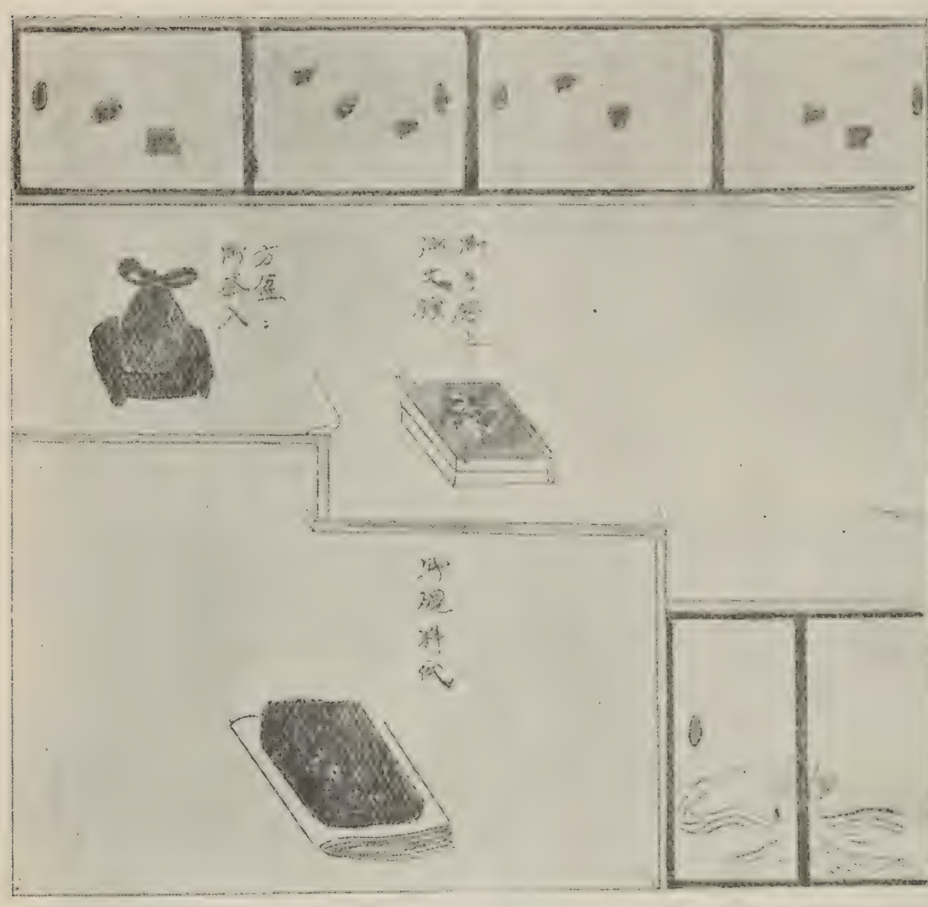


御文臺御飾替
盆山
但御床御掛物山水
御繪之時は此所之
御飾替
柳箱に短册上に御
文鎭



一御香盆御飾替
御折枝
一御沈箱御飾替御唐鏡
袋入
一御棚下御盤三面御飾
替には御棚下之中す
みに大食籠御臺に置
但大食籠御板床附に
御差合之時は御料紙
筥
但御料紙箱御飾に相
成候節は中之御硯箱
を御取出御料紙箱之
上に御重ね置御飾附
おはしまし候へき也

同行之御飾

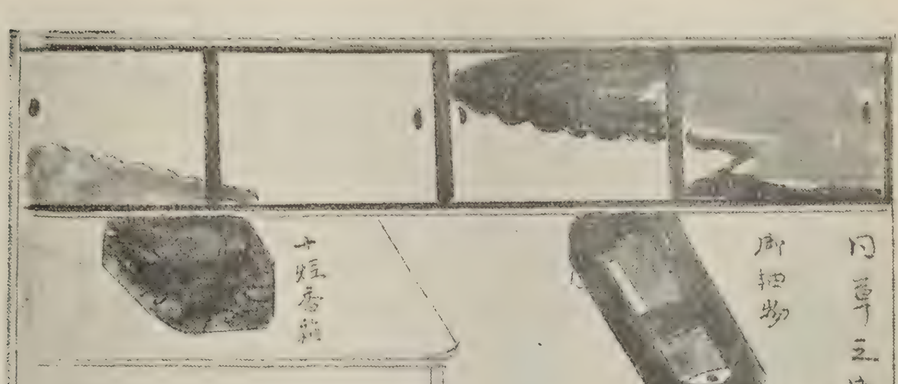


一上御棚袋入御茶入御飾附
矢數香の矢筒に矢を立或
は競馬香の立物御盆に載

一中御棚御手鑑御飾替
御式紙御短冊上に御文鎮

一下御棚御明置

一御棚下御硯料紙御飾替
盆山或は名所之石御臺に
載



一上御棚十炷香箱
御飾替
御樂器之内笙か大笛
小笛袋入或は御爪袋

一御軸之物御飾替
御薫物壺

一御棚下御茶壺御飾替
御見臺或は引合上に
御文鎮御見合に依り
御重硯にても御飾附
御座候

一御違棚之内高き御棚を冠棚と申習はし候御客衣冠せさせ給ひて御着坐御休息之時御冠を此御棚に置せられ候御作法もおはしまし候得ども都て第一の棚を冠棚と申儀は一の上にこれあり故の名にて御座候よし師傳之趣申上候

一御硯料紙は御手近なる所へ御飾御座候御具にて御座候間御棚下の御飾に相成候御床之内にては御違棚附之方御床柱之際へよせ御飾附御座候故實にて御座候

一全躰御床は神前を設候故實にて尊きの至にて御座候得共御棚杯のごとくにも高からすして御手近なれは御硯料紙を御組附何にても御飾附御都合よき御品御飾御座候趣の故實にておはしまし候

一御板床附御飾は御机に准し候故實にて御座候故に御筆硯文房之具を専らに御飾附御座候

一御違棚御飾之内御香道具御書物御軸物は御棚に御飾附御茶器も御見合に依り上中下御棚之内小食籠は中下の御棚之内大食籠は御棚下之御飾附此外御硯料紙御料紙箱御見臺御廣蓋等は皆御棚下御飾附之趣にをはしまし候

御書棚御飾附之御品々

一御香道具　　一御薫物壺

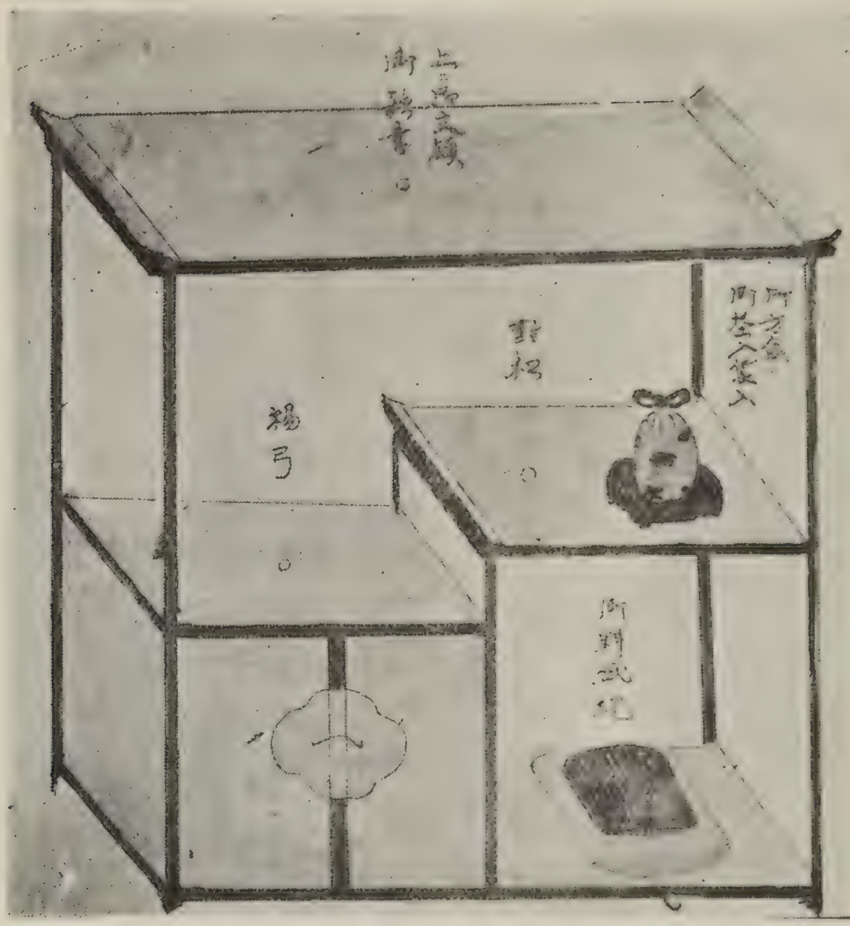
一御火取香爐（但あこたさ御名附）　　一御臺天目

一袋入御茶入　　一袋入御茶碗

一細口御花器　一羽箒
一御食籠　一御折枝
一御半文箱　一揚弓
一對松草　一御繪鑑
一御軸之物　一式紙短冊
一御歌書物語之類御本　一御硯料紙
一御重硯　一御文鎮
一樂器之内笙笛袋入　一御爪袋

右御品々之内御香爐御書物等は上中之御棚に御飾附之御作法にて御座候得とも御模樣に依り下御棚へも御飾附専らに御座候御茶器抔も上中下の御棚之内御見合に依り御飾御座候御唐鏡は上中下に渡り御見合に依り御下板へも御飾附御座候御硯料紙御引合淺縁等は必す御下棚之御飾附細口之御花生は下御棚に限候得共御取合により中御棚之御飾附にも専らの御飾之趣におはしまし候

御書院御飾



一壹之御棚御歌書御飾替
御軸之物御軸盆有之

一二之御棚御茶入御飾替
御盆に食籠

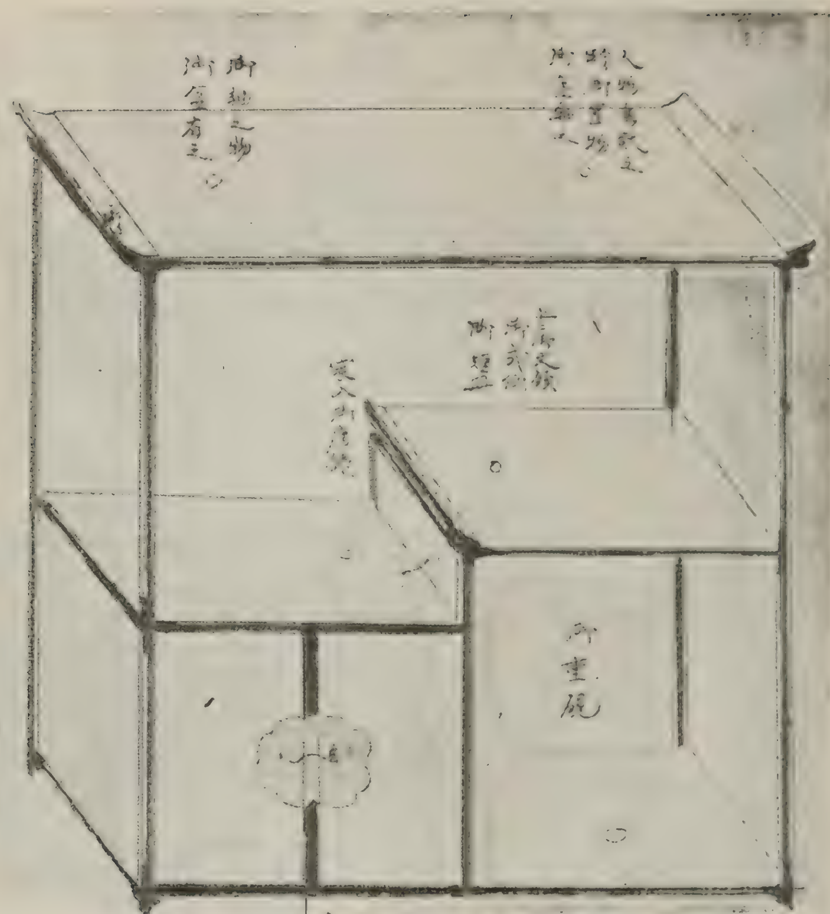
一對松御飾替
歌書たる御短冊上に御文鎮

一揚弓御飾替
御半文箱

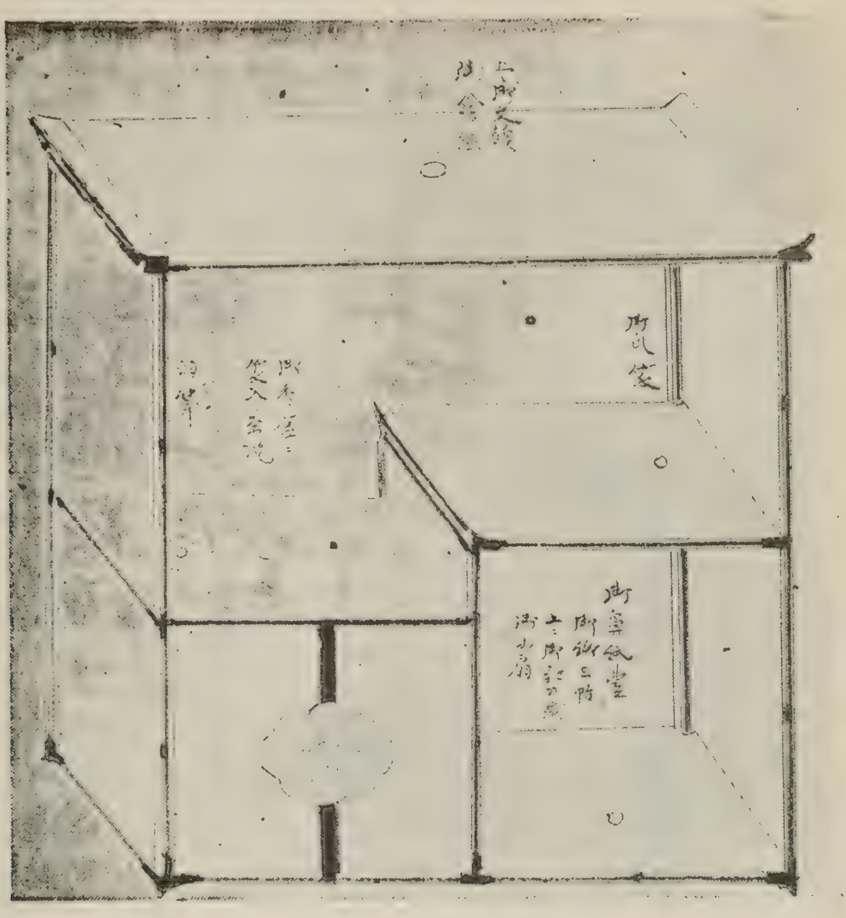
一御料紙硯御飾替
引合上に御文鎮



一御折枝御飾替
御手鑑上に御文鎮
一御火取香爐御飾替
御薫物壺御香盆に置
（［一本ナシ］一御歌書御飾替
御樂器之内笙か大笛袋入）
一御小文箱御飾替揚弓
一羽箒御飾替
御唐鏡袋入



一人物鳥獸之類御置物御飾替
御歌書上に御文鎮
一御軸之物御飾替
御歌書上に御文鎮
但御右古今御左後撰或は御右御歌書御左物語
一御式紙御短冊御飾替
御枕香爐
一御袋入唐鏡御飾替
御臺天目
一御重硯御飾替
盆山



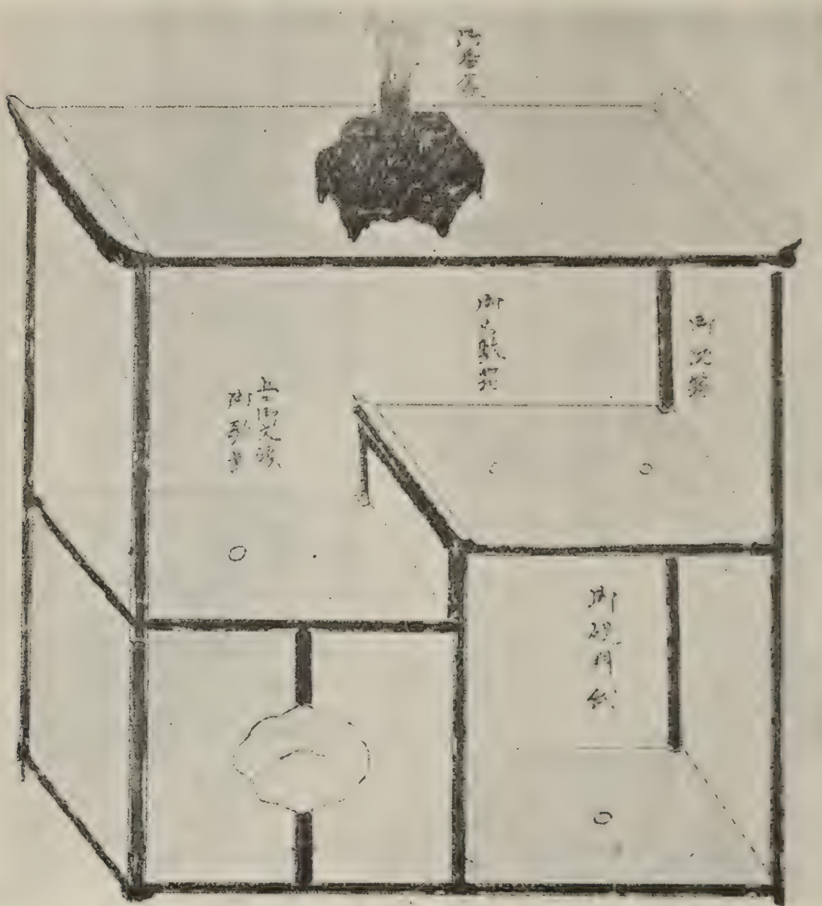
一御紷鑑御飾替
御香盆に御薫物壺

一御爪袋御飾替
御短冊上に御文鎮

一袋入茶碗御飾替
御軸之物御軸盆有之

一羽箒御飾替
細口御花器に孔雀之羽建

一御鼻紙臺御飾替
淺縁りに名所之御筆一對
折形に御包御飾附



一御香盆御飾替
高位之御方御染筆
御式紙短冊上に御文鎮
一御沈箱之御飾替
御小文箱
一御火鋪箱御飾替
袋入御石印御盆無之袋入
之儘にて御飾附
一御歌書御飾替
細口御花生に時之草花
一御硯料紙御飾替
御食籠御盆有之

御厨子黑棚傳之事

一御厨子棚は出所大内御厨子所之棚なり此棚には殊なる調度を置せ給ふ調度は和訓ものの具と讀て御道具の事なり此棚をまなびて女中第一の手道具を置事となん申傳へ侍るなり棚の端に筆返し有て脇板を張厨子有所の外は皆透し有足は蝶足なり

一厨子の内に惠美壽大國の御形を畫き扉の内に狗犬を蒔繪にしたるものなり

一黑棚一名黑み棚とも云女中方黑齒道具を飾る故に黑棚の名あり或說に大内に黑殿と云所あるその所に立る棚を表したるともいへり棚の上に筆返しなく脇板を張らす足は撫足なり是には厨子一所ある内には布袋を畫き扉に唐子を蒔繪にするなり流儀に依て是にも厨子を二つ附たるもあり一遍に心得へからす

一手箱の事女中第一の調度なり玉くしけ共云は是なり掛子の下に小箱八つ油桶二つ入て掛子に宗入丸鏡二面あり是にて以上十二品入に依て十二の手箱と申習はすなり又略儀には片方に小箱六つ入て手箱二つにて十二の數に合するなり小箱へは何を入とは定ねとも紅粉白粉攡眉黑何にても入内の小箱まて蒔繪あるを用ふ此小箱の中に分目の糸を入る箱一つあり高位の女中方長かつら掛給ふ時額より髮の辻まて分目を直に立髮を搔撫すへからし玉ふなり夫を大すへらかしと云て上古の髮の形なり大裡院中の女房御所方の女中皆如是額に分目を立てすへらかしにせさせ給ふ故に糸はさみとて黑角にて幅八分齒長さ八分に櫛のことく作り齒の數三つにして中の齒に黑糸を結ひて其糸を後へ引なり此黑糸をはり金にもするなりかやうに分目を立る時は左右の鬢そきの分目二ところ

共に以上三所わけ目を立るなり今世は左右の鬢そきの分目を立る計にて額に分目を立ることあらねとも本式の髪の道具なるゆへに是を手箱の内に納るなり今雛抔の髪の眞中より左右へわけ額より後へ白き筋を見せたるはわけめの糸の故實なり

但本文は古傳之趣にておはしまし候凡御手箱の御入組小箱十二入其二つは御掛子に　九御香合二つ　御鏡二面袋入にして納之御掛子の下には御白粉御香合二つ　御紅粉御香合二つ御櫛御香合一つ是夜の櫛と申楊津妻櫛(ゆつのつまくし)とも黄楊櫛(きよくし)とも申御祝の櫛にて寸法製作秘事の櫛にて御男子様方にも御所持御座候筈の御作法にておはしまし候此楊津妻櫛一枚色鳥の子折形に包み御香合一つに納之又御香合一つに分目の糸納之色鳥の子御包形有之又御香合一つに御繪元結又御香合一つには花昆布結昆布御包形御同前にして納之御油桶御香合二つ以上十二箱入この故に十二の手箱と稱申候

一短冊箱に兩様あり大短冊箱小短冊箱なり大短冊箱は百枚入中に仕切有て左右へ五十枚つゝ入小短冊箱は仕切の板なく五十枚入るなり看板とて短冊を押へる板あるなり掛子に硯水入錐小刀墨筆等組附るもあり或說に短冊は慈照院殿富士見として下向の時美濃國不破の關屋にて飛鳥井家歌を詠せられ不破の關屋の家根板に書て御覽に入られしと云傳ふ

但本文は古傳之趣にておはしまし候不破の關屋の屋ね板はえかたけれともまれに見る時は短冊の寸法に違はぬ物なりと申傳へ候

短冊寸法長さ一尺貳寸　幅一寸八分

御製御短冊長さ一尺二寸　幅一寸九分
御製御自筆長大牀御同前　幅二寸
一式紙箱百枚入なり紅の打紐を附又革紐を附るあり
色紙の初は柿の葉の色つきたるに歌被書たるをもとゝして後に色々彩ると申傳へ候定家卿の比より大式紙小式紙の名ありて正しく定れるは爲世卿頓阿より始る由色紙を式紙とも書るよしなり
色紙寸法
大式紙長さ七寸二分　幅五寸四分
同　同　六寸四分　幅五寸六分
小式紙長さ六寸　幅五寸一分
一文箱二品大文箱を長文箱とも云是には竪文を入るなり小文箱を半文箱とも云是には折文を入るなり大文箱は紐の結形二重淡路に結袋の紐は箏の袋の緒のことく結なり小文箱は兩輪に結ひ又行合結に結なり
一水引箱是を黒棚に飾る時は白紅の水引を入るへし御厨子に置時は常に遣ふ水引を入るゝなり又水引を折形に包ても飾るなり
但本文は古傳の儘にておはしまし候水引と申は服紗臀にて彩となりたるに依て水引と名附るよし服紗なるゆへ水付はそのまゝ水を引ゆへに水引と申一名を彩紙捻(いろこより)とも申よし

一沈箱沈とは香の總名なり掛子あり 掛子の中に香を入小箱六つあり草源氏とて桐壺、帚木、空蟬、夕顔、紅葉賀、花宴源氏六帖の形を蒔繪に略して模樣したる物なり掛子の下に香包香爐銀葉火箸香箸の類を入置なり

一御厨子に飾る四季の薄樣は色鳥の子に四季の景物を下繪にしたる物なり此薄樣に金泥を置たるは高位の御方の御料紙なり今專ら相卿の御短冊に金泥多く色々の下繪細やかにして金泥の雲形押たるは此薄樣を裁たる短冊式紙も同紙なり薄樣と申本名なれども

一御懷紙　四季の薄樣の色目

春　綠　下繪　梅　櫻　柳　藤　款冬

夏　紅　下繪　撫子　菖蒲　樗　杜若

秋　白　下繪　菊　女郎花　萩

冬　薄墨下繪　雪氷の研(みがき)精付なり

一紅葉重ねの薄樣は薄紅梅の色なり此外櫻重ね柳花重ね藤重ね山吹撫子種々の色目は大方裝束の色目に同しきとの師傳にてをはしまし候

一紅の薄樣は色鳥の子を十二枚重ね四方の、こくち、はみいたしをとり表の方へ一分程つゝひかへ御繪元結眉作道具何にても御包形にせさせ給ふ物なりとぞ

一四季の薫物と申事春は梅花の形夏は荷葉、秋は菊花、冬は落葉何も止事なき御方に御用のよし薫物壺に入て盆に乘御厨子棚にも黑棚にも置せられ候よしにておはしまし候なり

一炭團箱は內を隔子にして色々の形に製したる炭團の丸も角なるも飯櫃形花形抔に作れるを入置御飾に相成候炭團燒樣胡桃の唐松笠に味を能く燒き薄糊にて固め用るをよしとすと師傳の趣中上候

一火取香爐は常の袖香爐よりは大にして外は木也內は土の物なり上に銀の籠をきせたる物也外の形は木瓜形也是は懷中に香を〆髮なとに香を止る時に用ふ源氏槇柱の卷に籠の下なる釣火取とあり

一火鋪箱此內に銀盤入四季の銀は春花形夏は地紙秋は楓の葉冬は雪形なり舞鶴角切龜甲等は雜なり銀葉大きさ七分八分九分の間なり色々を箱にいれ御厨子に置せらるゝなり

一聞香爐は青磁染付の類をもちひ香盆に聞香爐を置て御厨子又は黑棚違棚に置とも香爐の足二つ座敷の方へ向け置へし香會又人に見するに香盆に載せ出すとも足二つ人の方へ向る禮なり

一飾香爐は火も不取銀も不置火際を能く清め飾るへし

一生物の類の香爐にて香を炷さるなり飾るまてなり

一空薰には名香はせぬ物なりいかにもかうはしき香を用ふ銀をしかす香長さ三分厚さ一分幅二分程にしたるをよしとす

一沈箱に入る香を序破急にも亦は松葉香にもすへし序は長さ四分破は三分急は二分半幅は香に依て貳分にも一分にもすへし松葉香は松の葉の如く長さ二三分に割たるを云ふ

一沈割箱は御厨子にも置せらるゝなり沈割道具　鑓　鋸　鑿等を入組置なり

一灰壺は香爐の灰をたくはふるなり香爐の灰に埋木の灰と云ふことあるは陸奧名取川の朽木にて燒たる灰なり埋木の灰のみ香爐に入て香を炷時は火をとり過て香爐割る物なり藤灰を半分ませたる

か吉との師傳にておはしまし候

一名香に返り灶と云ふことは蘭奢太子法隆寺枯木抔いへる香の由なり返り灶とは火鋪の上に置て座中へ香薫渡ると銀はさみにて火鋪ともに取てその香を又嗜む事をいへるなり蘭奢香の名初音と云ふ初音は十度返す太子法隆寺は三度まで返すと申傳はるなり

一香爐の灰押ことは眞なり香盆飾にも押なり不押はとめ伽羅と空灶の時はかりなり是を草と云又當座にみな〳〵押ことならぬ時は香爐の足の三方より箸目三つつゝ立る是行の格なりとぞ

一折枝と云物あり金銀にて橘など作り又梅花五葉の枝抔つくれる中に薫物を入るゝなり近代の物なりときこゆ御飾に然へき調度にて薫物の古例にも叶ふへけれは御厨子にも置せらるゝなり

一香の札箱種々香會の時の札を入る箱なり二重にして蓋合口紅の紐附なり

一扇箱といふ物あり三本も五本も入常の扇子箱とは違て扇の形にして蓋合口箱の本の細き方に紅の紐を附るなり

一疊紙箱は中に引合椙原紙を疊入るそのほかやはら紙をも入る疊紙は規式の鼻紙なり鼻紙といへる詞はいやし疊紙と申へき由此紙を入る箱なり蓋の上に紙を疊みたる彩の折形を蒔繪にするなり

一又疊紙と云物有紅の薄様の如く色々の紙にてはみたしを取金紙稲妻形龜甲形抔の打出し裏銀砂子

一枕香爐近代の物なり掛子ありて掛子を香盆にもちゆ匂枕とも云式正の具にあらねは御厨子には不被置なり

一もと遊ひ箱是より下は黒棚へ飾らるゝ具なり此内へは常の水こき蒔繪蒔こひつさき中の蒔白紅の

水引等を入置るゝなり繪嘗は鳥の子を卷竪幅五分程にして兩端を丸くし地總金にて色々の繪の具にて鶴龜を畫たるなり是おちつかたの用ふるなり白繪の繪嘗と云は地總金にして家の紋鶴龜松竹をして繪に畫るを云なり是王公の姫君姫宮のかけ給ふなりおちつかたへ賜はり御免ありといへ共其日計かけて重ねては遠慮あるへし妻紅粉のえもとゆひと云は地は總金にして兩端を筋違に赤く染鶴龜松竹の繪を彩色にするなり是は三位以上の御息女方ならてはならす又白紅の水引は長かもし掛させ給ひて結ひすて迚白紅にて片わなに結はるゝなり半分白半分紅なるは常並に用ふるなり相卿の御息女方掛玉ふは半分銀半分紅成物なり勿論紅は紅粉を濃く引て笹色に光あるを云ふなり

一拂箱掛子あり掛子に折拂を入掛子の下に打亂りを入打亂りは純子繻珍の類を用今の髮かけといふ物なり此箱の掛子に折拂を入ゆへに箱の名とす此箱の掛子を本式亂箱と云へとも今は別に亂箱と云ものありて三つ入子にする物なり折拂に大小あり大には御髮を結ふ時御髮先を疊へつけぬためなり小拂は髮のをち櫛のあかを入る物なり拂の緣を色々の紙を以てはみ出しをとり表金紙稲妻形彩色にて鶴龜松竹を畫るなり手箱櫛箱眉作箱を取出さすしては常に此箱のうちへ櫛水入白粉紅粉顏鏡等の化粧の具を入るなり上﨟はそれ〱の道具を御用の事は稀なりといへとも壹つも闕けさる樣に持せ玉ふ事式法なり

但年中の髮の落を溜置て十二月下の午の日に拔けたる髮に沈香を入て燒その灰を地に納め是をみくしあけと云ふ此日拂紙をもあらたにするなり折拂拂入とも云ふ大寸法長さ一尺八寸横二尺八寸左右上下折て用ゆ上前に成所へ彩色にて鶴龜松竹の繪あるへし小拂寸法長さ

九寸横一尺六寸折形同前

一小角赤掛子あり蓋合口角々に緞子をきせ朱塗にするによりて角赤と云ふ總躰緞子をきせ黒塗高蒔繪梨地抔にもするなり是には化粧の道具を入らるゝなり

一大角赤長さ一尺二寸幅八寸高さ一尺小角赤の通に對に拵たる物なり大内の宮女抔は几帳の陰に置て人前へは出す物にあらす武家にては納戸にも並へて置れぬ宮の物なり此大角赤は紅巾耳合を入置物にて今俗に云ふしたの帶の箱なり婚禮の翌日是に寢間着夫婦の分を入て生土へ贈る事故實なり然に中の入物を知らすして棚飾に置て恥を取りたる事あるよし申傳へ候婚禮祝すへき生土へ夫婦の寢間着白小袖新敷紅巾耳合を大角赤に入れ介添或は局の方より遣はすなり勿論懷胎の沙汰あるまては生土に預り置法なりとの古傳にておはしまし候

一和紙は吉野紙を云ふ鉄漿を含唇を拭ふへき爲なりやは々々と云ふ女詞なりとの師傳の趣申上候

一封小刀を文刀と申紙の上に置なり

一櫛箱常のことく髻箱に同しく掛子あり　天子の御櫛は十二具諸侯大夫は十一具是所謂三十三枚の櫛と云ふ士以下は七八具なりとの古傳にてをはしまし候

　但此外にも高位の御方にはさし櫛の箱と云物を御厨子の調度とせさせ給ふ差櫛の箱方四方許にして蓋の上に心葉をするなり心葉は色々の花鳥岩組抔の形を金にて作り或は五葉の枝鶴龜抔うき揚に作るを云ふなり

一昆布箱此内へは結こんぶ花こんぶを入置御祝日の節鉄漿上らるゝ時御口祝せさせ給ひて後黒齒を

上らるゝものなり黒歯箱とならへ置せらるゝなり

一亂箱は拂箱の掛子にてありしを今は別に改作るなり寸法は長さ一尺二寸横八寸高さ三寸二分の物なり又方九寸なるもあり流々に依て相違するもあるへけれは一へんに定むへからす御櫛道具を入或は御枕元に置之御枕を入御座舖をひろはせ給ふ時は持參りて御着座の時御後に置れ御髪の先を疊へ附ぬやうに亂箱に入置物なり亂箱を内記とも云又搔上(かゝけ)の函とも申由内を錦にて張たるも有とて櫛の具に限らす式紙短冊諸々の香具抔入るゝよしなりそれを香壺の箱とも云ふしかるへき所の御厨子の式の調度なり諸香を此壺に納らるゝ由水原抄にも見へ侍るなりまた打亂りの箱とも云ふ髪をけつる時打亂りの箱のうへに髪の具をうち亂し侍れは箱の名になつけ侍るへし

一眉作の箱二重ある物なり蓋の上に疊紙箱と同し模様の蒔繪をするなり上下の掛子に眉拂大中小大上﨟小上﨟黒はつし大小何れも一對つゝ鬼毛と云筆白はつし紅粉筆眞立白際置何れも一本つゝこね香箱二つ此類を紅の薄様に包みて入るなり以上の品不殘用らるゝにはあらねと此中の得道具にて眉作化粧あらせらるゝよし故實なり

一黒歯箱掛子にふし水筆揚枝抔を入れ下にふし箱漳子漳次等を入るなり

一渡し金箱大方短冊箱に同し渡し金銀にて鶴龜松竹家の紋をちらし模様すかしあり紅の薄様に包て入又渡し木あり寸法長さ一尺二寸幅三寸渡し金とも云ふ黒歯上るゝ時かね吐の上に置て漳子三つ並へ右なるにかねを入れ中にふし左に水を入置るゝなり昔は拔簀迚竹を簀にあみたるなり是わたし木の初なり次にわたし木出來て後今のわたし金はつくれるなり上代の拔簀は機織簇のことくし

て縁りをとりたる者なり

一爪切箱爪切を入小刀柄共に五寸左小刀三本右小刀三本並て入置へし爪とる作法男は左の大指より女は右の大指より取る者なり手足の爪を同時に取らすと云ふいにしへよりの傳なり若取らすして叶はさる時は手の爪を左右ともにとりて後疊の上を歩行て足の爪をとると云古傳なり

一御厨子に置せらるゝ水引は檀の水引宜きり黒棚には白紅の水引を飾らるゝなり是は長髢かけさせ給ひて結ひすてに用ひ玉ふ心なり又檀の水引は五色にして五段七段に彩とりたる物なり

御厨子の御飾本式檀の水引圖のごとく五色にして紅の薄様に包て置せらるゝなり

藍　紅　黄　白　黒　藍　紅

水引の數は不定大躰五十筋計包形にして御模様宜なり水引箱にも入るなり

又古法の髻水引は皆糸なり紫のこ染の糸眞紅の糸村濃の糸抔云て昔は皆糸を以て髪を結たりとの師傳之趣申上候

御厨子道具

一手箱　一大小短冊箱　一式紙箱　一大小文箱

一水引箱　一火舗箱　一沈箱　一炭團箱

一硯箱　一料紙文鎮　一料紙箱　一薄様

一香爐香盆香合炷殼入　一火取香爐　一薫物壺　一香匙建

一香の札　一沈割　一十炷香道具　一歌の硯

一手鏡　一繪鏡　一扇箱　一歌書
一對松

黑棚道具

一拂箱　一小角赤　一簪箱　一黑齒箱
一櫛箱　一眉作箱　一亂箱　一折拂
一渡金　一爪切箱　一昆布箱　一薄樣
一やはやは文鎭　一香爐　一香盆　一瀧子
一五倍子箱　一拔簀　一瀧筆　一犬張子

一御厨子黑棚は一飾と云物なり

一御厨子道具を黑棚に飾は苦からす黑棚の具を御厨子に飾る事は有ましき事なり兩品ともにすへて小道具の置所兎角見たる所の置合尊卑を辨て飾るへきなり

一歌の硯とは常硯よりは小振なり芦手書の硯とも云ふ芦の葉を下繪に書て其上へ文字を書添たる物なり笹の葉書きと云事あり文字の躰笹の葉のごとくなり硯箱に限らす香盆抔にもある物なり又說に硯を詠たる歌を蒔繪にしたるをも歌の硯と申よし

一御厨子黑棚に十種香箱飾ること然へからす中の小道具はかりは飾も宜きなりとの師傳の趣申上候

一對松も近代の物なれは晴の時は飾るへからす正月なとの飾には用ひらるゝよし然るへきのやう師傳之趣申上候

南紀德川史卷之百三十一

臣　堀内信　編

典禮第七

年中行事　上

總言

年中行事とは毎年正月より十二月に至る迄の　公儀御勤品（御在府には式日五節句初御登城上野芝兩御靈屋御自拜時々の御獻上物上使御拜領物等恒例の御禮式又は簾君方へ御附屆等の事を總て御勤品と云ふ）を初御家御歷代初の御廟參寺社御參拜乃至御代拜（御在國には和歌御宮初長保寺雲蓋院等諸御寺方日前國懸兩社國之宮粟林八幡社抔へ御參拜江戸にては上野眞如院御庭御堂等へ御參拜何れも御參詣なき時は御代拜被遣）五節句式日嘉定玄猪之御祝式或は內外御附屆と稱し御家族方尾水兩家三卿方御連枝方御緣家諸侯へ御音信御贈答諸御使等都て年中差定りたる典儀施行の事を云也皆御用人主任表御右筆日記方にて先例を照查年々調帳を製し伺を經て定制其時々調帳の如く御擧行且奏事す尤御在國御在府又御代々の御親疎に因て御勤品御屆向も差別一ならすして（複）雜多端を極め枚擧すへからす而して之を表御右筆日記方日々日記に登記保管の處維新の變に伴ひ無用視せられ截斷又水火に投し了て傳はらす僅に掲くるものは其部分中改正等の布達文に止まれは從來全般の定制を窺へからす唯維新後の分は較備る如しと雖も從來と同日の談には非さる也

記中御靈屋御靈前御牌前御靈屋料御佛供料の類又は樣文字殿文字の別等皆成規ありて然るなり制

度部尊稱の條に詳なり

御年忌御法會は重きは執政初職々臨時に御用掛を命せられ表御右筆日記方前以より(別)〔一本副〕局を開て先規に照し調帳を制定す　御歴代初御年忌の遠近御親疎の別等に依て御(佛)〔一本法〕事の儀典諸般の作法區々別々の成規あり　幕府歴世の御法會に於けるも大同小異共に古今の調帳存在の處亦悉く逸失傳ふるものなし

一豫參は　君上御參拜の時重役(御供番頭以上を云ふ)以上の者參列するを云ふ何つ比より創始せられしや詳ならす(蓋し〔一本ナシ〕　舜恭公の時より　幕府の制に傚はせられしならん)

一御精進日。御清之間行事。乃至諸御勤定。諸御屆定等は皆御代毎に制定(御簾中樣御勤御屆定とも)年中の御行事に立られたり維新(前)〔一本アリ〕之分は　顯龍公御精進日の一例外(の)〔一本アリ〕傳はらす御清の間とは內庭御佛間の事也御屆とは內外御緣族方に被爲對年始暑寒時々の御慰問御音物御贈答の事を云ふ寺社御供料御宛行等は御附屆と稱せり又文中　御家父樣方とあるは　龍祖御初御歴世の事御總容樣とは御家族樣御總体を稱す又單に御鏡御頂戴とあるは御宮へ奠供の鏡餅を御頂戴の義或は月に付云々とあるは從前は式日五節句の外に正五九月(正月五月九月なり)を以て一の禮季節とす譬へは　東照宮の如き四月十七日は御證忌月なれ共其他正五九月にも　御參詣の成規なれは夫をさして月に付てと稱するにて是等皆當時の通語と知るへし

寺社御名代

有德公御自記政事鏡に

一家老用人之内代香代參申付馬駕籠にて相勤之於途中朋友不寄大小身先より參候節見掛候はゝ家來を差遣し何某今日御代香御代參可相勤候間及御斷候と可申遣候先より參候者へ不可致挨拶候是於菩提所法事之節代香相勤候格に心得可申候

寛政四子年六月廿五日

一七月十日御施餓鬼に付　　長保寺

清溪院樣
高林院樣
深覺院樣
大慧院樣
菩提心院樣
香嚴院樣

御代參　　御年寄

是迄御施餓鬼に付右御方々樣へ之　御代參七月八日九日十四日に被遣候得共當年より右之通十日に被差遣候筈

一澄清院樣御施餓鬼に付是迄七月十日右御牌前へ御年寄御代參被遣候得共當年より七月十四日に被遣候答

御歷代每年中寺社御名代定書なるもの有たれとも皆傳はらす本記は　舜恭公年中寺社御名代定中の改正なり僅に此記のみを存す　澄清公は公の御生母なり

同年十二月三日

一都て寺社へ　御代參之儀自今　御名代と唱候筈

同年同月十九日

一長保寺へ御法事之外之　御名代は御年寄衆九時迄に御勝手に御勤被成候筈候事

同七卯年十二月廿八日

一御年寄衆　御名代等之節束帶衣冠狩衣は　上之御裝束に隨ひ候筈御束帶御衣冠御狩衣被爲召候御定之筈思召にて御直垂被爲召候共御年寄衆には其儘御定之御裝束に隨ひ着之筈

但本文　御留守年にも　御在國御參詣御定之御ヶ所へ　御名代被　遣候節は右　御在國御參詣之節之　上之御裝束に隨ひ　御名代相勤候筈

寬政十午年八月七日

一六月九月　十九日　刺田彥社祭禮

御名代　　大御番頭　　長　　祷

八月十五日　粟林八幡祭禮

九月廿六日　日前宮　國懸宮　　　御名代　　大御番頭　　長　　袴

御名代　　大御番頭　　長　　袴

同十二申年十月十一日

一御宮　御名代御勤御時刻は是迄之通　御靈屋方御牌前方御名代御勤御時刻以來五時御出宅之事

御宮幷御靈屋方へ御名代御勤被成候節雨天に候得は御手水所迄御近習之内一人御召連被成御手傘爲御取扱被成候事其外之御供は晴雨共　御宮にては隨身門外へ御靈屋にては總御門外へ御殘被成候事

但是迄隨身御門内總御門内へ御供之内御召連込被成候得共向後本文之通相成候事

西御堂も右に准候事

享和二戌年六月十日

一長保寺へ之　御名代當期六時過迄に御勝手次第出宅同寺參着次第　御名代相勤候筈

但御方々樣より之　御名代も右に准候筈

同四子年八月廿七日

一自今長保寺おゐて　御法事之節長保寺預り列居となく御法事序へ罷出候筈序之儀は列居之面々末席へ御廟之方へ向着座之事

一御名代之節　御廟外石檀之下へ罷出候儀は是迄之通候事

文化三寅年十二月六日
一日前宮境内へ　邦安社御勸請被遊候事
一祭禮は五月廿八日之筈
一右祭禮之節　御名代大御番頭被遣候筈
一邦安社と相認候節は闕字に相認候筈
　右之通相極候事
同六巳年十月二日
一年寄衆　御宮御名代御勤時刻是迄之通　御靈屋方御靈前方御牌前方御名代御勤時刻已來五時御開
　出宅之筈
同七午年二月十四日
一大御番頭代り日光　御名代罷越候面々江戶着發之節も對挾箱先道具爲持候儀不苦候事
同年五月十五日
一例五月　邦安社へ之　御名代正午剋被相勤候筈候事
同十一戌年七月十日
一此度　御宮前御手洗へ新中道出來候事候就ては是迄雲蓋院へ罷越候節勝手門迄駕籠乘候筋向後下
　馬橋より乘入不申新中道通雲蓋院勝手門迄乘通可申事
　　但是迄下馬へ殘る供廻り新中道下馬之方より取附之外へ殘可申候

且又是迄寶藏院前へ殘り候挾箱は新中道北之方取附廣みへ

一御宮并和合院　御名代之節は是迄之通下馬橋より內へ乘込候事

文化十四丑年正月七日

一御連枝樣方より之　御代參之儀向後　御名代と相唱候筈

同月十五日

一御簾中樣より　御代參之儀向後　御名代と唱候事

天保二卯年二月九日

一南龍院樣御初雲蓋院　御家父樣方御靈前へ御名代御代參之節向後四足御門より御唐門通往來之事

一貞恭院樣御初御裏方樣御靈屋へ御名代御代參之節は是迄之通雲蓋院玄關より上通り往來之事

一南龍院樣御初前段　御家父樣方御靈屋御靈前へ御名代之節は御參詣之節の御振合に准し向後御唐門內雨天之外は薄緣敷候事

但自拜之節は御濆緣并階下拜席之所へ薄緣敷候事

顯龍公御精進日　天保四巳年正月七日御定

每月之御株

大慧院樣　御當日斗

二　日　觀自在院樣　前日暮六時より御當日暮六時迄

御證月は前日暮六時より

御證月も同斷

日	御方	御當日	御證月
	浚明院様	同同	同
	嚴有院様	御當日斗	御證月も同斷
八日	清溪院様	同	御證月は前月暮六時より
	深覺院様	同	同
	貞恭院様	同	同 「舜恭公御簾中御養母」
十日	常憲院様	同	御證月も同斷
	南龍院様	前日暮六時より御當日暮六時迄	御證月も同上
十二日	惇信院様	御當日斗	御證月も同上
十四日	文昭院様	同	同
	高林院様	同	御證月は前日暮六時より
十七日	御宮	前日暮六時より御當日暮六時迄	四月九日も同上
廿日	有德院様	御當日計	御證月は前日暮六時より
	大猷院様	同	御證月も同上
	最樹院様	同	御證月は前日暮六時より「文恭公御實父御實方御祖父」
廿三日	香嚴院様	前日暮六時より御當日暮六時迄	御證月も同上
廿四日	台德院様	御當日斗	御證月も同上
廿五日	孝恭院様	同	御證月は前日暮六時より「後明公御世子」

菩提心院様　同　右同斷

妙操院様　前日暮六時より御當日暮六時迄　御證月も同上　御生母

有章院様　御當日計　御證月も同上

晦　日

御證月計之御株

十月二日　俊岳院様　御當日計　「舜恭公御養子 御實弟

八月八日　信恭院様　同　舜恭公御長女 御養方御姉

五月八日　慈徳院様　同　文恭公御生母 御實方御祖母

五月十日　澄清院様　同　舜恭公御生母 御養方御祖母

五月十九日　清湛院様　同　文恭公御女 御實方御姉

八月二十日　心觀院様　同

七月二十日　貞惇院様　同　文恭公御女 御實方御妹

（一本ナシ）（八月廿一日　養珠院様　同　南龍公御生母）

八月廿二日　貞鑑院様　同　文恭公御女 實方御妹

六月廿五日　觀達院様　同　舜恭公御嫡子 御養方御兄」

二月廿六日　到心院様　同

右御精進日は即ち御潔齋日にて進膳魚肉御鷹野御遊獵等禁せらる書面の如く　東照宮　龍祖及ひ幕府御家共近き御三代迄は重く御實母は之に准させられ御家御三代已上之御代々夫に次

き　有徳公は御家より御相續孝恭公は幕府の世子且つ御近親最樹公は　將軍の御父君且御近親なるを以て御家御歷代に被爲准　幕府御三代以上の御代とは少しく御輕と云如く御秩序の整然たる以て察すへし

一貞恭公外御世々御籙中の御進日なきは脫漏なり

御精進日に關する令一二を存す

寛政四子年四月十一日

一當時御家中愼日多く婚禮祝儀等之出會差支難儀可致に付寶永年中御定之趣被復向後重き御精進日之外は御宥め可被遊との思召故自今左之御日柄之外は婚禮其外祝儀等之出會不苦音曲等も遠慮に不及候

二日　八日　十日　十四日　十七日　二十日　廿三日　廿五日

御證月は前夜より御當日日之內斗平月は御當日日の內斗相愼候筈

右之外御精進日には御附をも相勤候面々心次第愼可申儀に付一統遠慮に不及候

同年同月十五日

一右御精進日之外は鳴物音曲等愼に不及筈候處殺生之儀も愼に不及候

右は急度夫々へ通し候品には無之候得共若聞合之筋も有之候はゝ愼に不及旨申聞候樣年寄衆被申聞候事

天保十一子年二月

一四月十七日御祭禮に付江紀魚類表向取扱不相成

御法事規則幷豫參自拜之制

寛政元酉年四月二日

一御年忌御法事之節出家中へ御齋非時被下之儀自今料銀にては無之御齋非時にて被下候筈

同四子年十一月廿八日

一大組中御用達中物頭中御法事之節幷御證月共都て御齋非時挨拶に被出候儀自今相止候旨御目付中被申聞候

同十二申年六月十一日

一左之通先年相極候大目付中に不審之旨御側御用人衆へ被承候處小書之通之由申來候旨御目付中被申聞候

御法事御回向之節音曲愼振之儀向後火之元觸出候節は御當日計相愼其外は愼候には不及筈

右之通相極候旨二月廿五日山中作右衞門方御目付中へ被申聞候

寛政七卯年二月廿五日極る

本文は御方々樣等御當日計之御法事御回向之節愼之儀に候　御家父樣方幷十七日廿日は御證月にてさへ前夜より相愼候筈寛政四子年相極有之通付御法事之節は勿論御當日計之御法事にても前夜より相愼日數有之御法事に候跡は御初日より相愼候事

右之趣御目付へも可申合事

寛政十二申年六月十七日
一大智寺和合院　御靈屋方へ　御參詣之節重役豫參之儀向後總御門內へ豫參相勤候筈
　但出場所之儀は是迄歸御之節々出場所之通
同十三酉年二月三日
一御宮
右御祭禮　御神事を初其外都て御參詣之節豫參可相勤事
一御靈屋　御靈前方
一御手前御家父樣方　御牌前方
右御法事御證忌月幷月に付御參詣之節豫參可相勤事
一長保寺御廟
右御參詣之節不及豫參事
一御簾中樣方　御實母樣方　御方々樣
右御牌前へ御法事其外都て御參詣之節豫參之事
　但御先立年寄共是迄之通可相勤事
一日前宮　　岡宮　　粟林八幡
右御參詣之節は豫參可相勤事
享和二戌年六月廿一日

一是迄　御參府前　御歸國後或は月に付御宮を初總　御靈屋　御靈前方幷　御家父樣方總御牌前へ
御參詣之節豫參之義　御宮　御靈屋　御靈前方幷　御家父樣方御牌前へ夫々相分れ豫參相勤候處
向後右等之節は　御宮へ計豫參相勤總御靈屋御靈前方幷御家父樣方御牌前へ豫參相勤候に不及事
右之節　御宮へ御參詣不被遊候節は　大猷院樣御靈前へ計豫參可相勤事
但本文之通　大猷院樣御靈前へ計豫參相勤候事候得共御靈前方總御門は一ヶ所之事に付總御靈
前方御參詣相濟御退下迄例之御場所に出居候筈豫參は　大猷院樣御靈前へ相勤候儀と不紛樣相
心得可申事
一和歌吹上同日に　御參詣被遊候節は　御宮一ヶ所は大智寺　台德院樣御靈屋へ計豫參可相勤事
但本文之通　台德院樣御靈屋へ計豫參相勤候事候得共御靈屋御靈前方總御門一ヶ所之事に付豫
參勤振り和歌同樣可相心得事
一御宮へ計　御參詣且　御靈屋御靈前方幷　御家父樣方　御牌前へ御忌月に付　御一方儀へ　御
參詣之節豫參勤振是迄之通候事
一御定には無之事候得共御品有之筈　御手前御家父樣方總御牌前方へ計　御參詣有之節は豫參之
義例之席へ出居　南龍院樣御牌前へ御拜之內一統御同所御唐戶前板緣少し退西向に着座　御同
所御拜相濟御退下之節　御意有之其外御牌前方へ御參詣之內例之席へ着座不及引取可申事
但本文之通に付勿論　西御堂幷　大慧院樣菩提心院樣御牌前へ豫參に不及　南龍院樣御牌前
へ計豫參相勤候筈候事

御年寄樣側詰御年寄は重役之間少し切着座之事

一前行之通相極候ても御先立樣側詰御年寄勤振是迄之通

一御年寄は豫參にては無之御供之儀に付勤振是迄之通御參詣ヶ所へ相分罷越候事

右之通被　仰出候事

豫參之輩自拜之儀寛政八辰年八月相極有之候得共向後左之通相極候事

一月に付　御宮を初總　御靈屋御靈前方幷御家父樣方總御牌前へ御參詣之節豫參之輩右御ヶ所へ不殘自拜可仕事

但御宮　御靈屋御靈前方豫參之外態と自拜之儀且拜席等之儀は寛政八辰年相極候通候事

一御宮へ斗　御參詣且　御靈屋御靈前方幷御家父樣方御牌前へ御忌月に付御參詣之節豫參之輩其御方樣へ斗自拜可仕事

一御參府前　御歸國後　御宮を初總　御靈屋御靈前方幷　御家父樣方總御牌前へ御參詣之節は豫參之輩自拜に不及事

但同日御證忌日に被爲當候　御方樣有之候得は其　御方樣へは自拜仕候事

文化元子年五月五日

一御在國年御法事之節御當日御參詣御差支にて御名代被遣候節總奉行御年寄右御名代之衣服に准候筈

一御法事總奉行御年寄大紋着之節　御參詣御當日は　上之御裝束に奉准候筈

但御在府年御法事之節御當日御參詣代り　御名代有之節は總奉行御年寄　御名代之衣服に准候
筈
文化元子年五月六日
一長保寺之外御寺方出家へ御齋非時被下候節御馳走懸り同心向後御寺へ罷出候に不及候事
同年同月十四日
一公儀御代々樣幷　御手前御家父樣方御法事之節豫參之面々出場所之儀右は　公儀御代々樣之節は
御靈屋へ豫參相勤　御家父樣方御法事之節は本堂御唐戸之外西向着座豫參相勤候事
同年八月廿七日
一自今於長保寺御法事之節長保寺預列居となく御法事席へ罷出候筈席之儀は列居之面々末席へ　御
廟之方へ向着座之事
一御名代之節　御廟外石檀之下へ罷出候儀は是迄之通候事
同二丑年十一月九日
一都て御法事濟謁は恐悦と申上候筈
同十一戌年六月六日
一御法事掛御目付向後布衣着之事
同年九月廿五日
一公儀御代々樣　御手前御家父樣方其外御法事之節向後右御法事中普請鳴物祭禮法事等不及相止候

事
拷問手鎖或牢舍或繩懸候類之儀可爲無用事
下ケ紙
御家父樣方幷十七日廿日は御法事之節御逮夜より相愼候儀勿論是迄之趣にて半年御證月之通
相心得可申事
勢州御領分之儀も本文同樣之事
一本文之通に付ては辻打芝居等も不及相止事
文化十四丑年五月廿三日
一御參詣之節豫參之儀　公邊御振合に被准向後左之通被仰出之
四月九月十七日御祭禮御神事其外御法會之節は一統豫參之事
一御平日　御宮初　御靈屋方其外神社へ　御參詣之節は五六人豫參之事
一長保寺へ　御參詣之節向後御目付一人御唐門外へ罷出御同所御通行相濟候得は御供所へ罷出候
事
文政四巳年十月廿五日
一御法事之節　御目見以下勝手次第拜に罷出候付地士大庄屋等拜に出候儀跡々之趣を以被達候樣御勘定奉行中へ跡々相達有之候得共享和元酉年　御目見以下にても先年より御目見に出來り候役々も有之候得共向後以下にては御目見に出候儀不相成等に相極候付ては右拜に出候儀も勿論不相成事に付此度より相止候等に申極候事

文化十一戌二月

同六未年二月廿三日

一和歌　御宮御祭禮御神事之節隨身御門內縁頬詰年寄衆初豫參之重役且町奉行御代官出候所へ向後薄縁敷候筈

文政八酉年十一月十二日

一御祭禮御神事之節向後下馬橋にて下乘致候筈尤同所より雲蓋院勝手門迄下乘內徒之者兩人召連候筈

文化十二亥九月十五日

一御法事有之下馬所相替候節下馬所にて徒之者殘し候事に候得共向後は下馬所にては不殘下乘所迄徒之者召連候筈

下ケ紙
本文之通候得共雲蓋院にては平日之通下馬にて徒之者殘候筈

文化四卯年十月五日

同十亥年三月十五日

一都て御法事中自拜に罷出候面々是迄は御法事御式之內に自拜致候事候得共向後總奉行初御用掛之面々之外はいつれも御式相濟候以後勝手に拜參可致事

同十一子年八月廿三日

一御法事之節拜振之儀去年三月相達有之通候處猶又御用掛被　仰付無之候とも御法事御用に付相詰

罷居候向は矢張御用掛之筋同様順次を以御式中に拜致候筈候事

同年十月十九日

一御法事之節拜振之儀去年三月相極有之候處猶又御用懸被　仰付無之候とも御法事御用に付相詰罷居候向も矢張御用懸之筋同樣順次を以御式中に致拜候筈之旨當八月相極右に付　御名代御代參は自拜　御參詣に付豫參之面々は自拜不致筈之旨且又御法事に付相詰候御醫師も自拜致候筈之旨比日御申聞候事候夫に付左之品如何相心得可申哉

一都て　御參詣御用に付相詰候面々は自拜不致儀と相心得可申哉

下ヶ紙
本文之節自拜は不致事

一奥御用部屋（一本同御用部屋）勤幷御臺所勤且寺社吟味役之内　御目見以上之仁相詰居候得共自拜致候儀と存候

下ヶ紙に此通り

一御徒目付之儀も組頭詰合候得は自拜致させ可申哉

下ヶ紙に本文御法事御用に付相詰罷在候はゝ自拜致候事

文政十二丑年六月十五日

一御家父樣御嫡子樣御簾中樣御新葬御法事以前之通於大相院被　仰付筈近比被　仰出候得共右は文化七午年相極候通向後於雲蓋院被　仰付筈猶又被　仰出候事

件之通に付右御法事被　仰付候節　四つ足門前幷下馬橋矢來る（本のまゝ）計振之儀委細御勘定奉行へ

仰出候事

六月四日

同年十一月十五日

一御法事之節向後大會　御聽聞被爲在候得は御茶御菓子　御手自御供被遊御定之外　御配膳をも被遊候事

御參詣無之節は　御名代之年寄共御茶御菓子御花御供幷御配膳御名代も相勤候事

但御法事之節御茶御菓子御花等御供有之節は是迄中奥御使を以　當朝雲蓋院へ廻し御法事初り以前御供有之候得共向後　御手自御供被遊候事

天保元寅年十二月晦日

一和歌　御家父樣方　御靈屋へ年頭初御目見以上之面々自拜日並之節

四足御門外
番所
諸組寄合同心三人

右當朝六時より夕七時迄勤番之事

但自拜之向之内刀預け候筋も候はゝ預り可申事

南龍院樣御初　御家父樣方　御靈屋へ年頭盆暮御證忌日に御目見以上之面々自拜罷出候日割向後左之通相成候事

年頭　正月元日より　同七日迄之内

盆中　七月十四日　　同十五日
歳暮　十二月廿三日　同廿五日
御證忌日
右いつれも當朝六時より夕七時迄に罷出候事
一右自拜に罷出候節是迄雲蓋院　西御靈屋共勝手玄關通往來致候得共向後　南龍院様御初へは四足御門より往來致し　西御靈屋へは總御門より可致往來事
但四足御門内幷總御門へは一刀にて罷出尤刀は四足御門外幷總御門外に爲持置候共又は右爲持置候儀差支候向は四足御門外番所へ預置　南龍院様御初へ自拜相濟夫より山内の儀に付一刀之儘にて　西御靈屋へ罷出不苦事
一御唐門下迄は履物相用不苦事
但御參詣之節豫參濟後自拜之節は最初豫參之時御年寄之外は履物不相用自拜に罷出候事
一四足御門内幷總御門内へ家來召連候儀勿論不相成事
天保元寅年十二月晦日
一和歌　南龍院様御初　御家父様方　御靈屋へ御家中之面々年頭初自拜に罷出候節拜席之儀向後左之通罷出拜禮可仕事
兩　家
右御敷居内より二疊目上にて拜禮

万石以上諸大夫
右御敷居内下より二疊目下にて拜禮
無官御年寄
右御敷居内下より一疊目上にて拜禮
大寄合以上
高家大御番頭初
御供番頭以上
右御敷居内下より一疊目下にて拜禮
右御破魔縁にて拜禮
頭役
右階下縁取上之方にて拜禮
平士
右階下縁取下之方にて拜禮
同二卯年七月十日
一御家父様方　御靈屋御靈前方へ御供番頭以上拜參之節雨天に候はゝ御唐門内に裏附差出有之候間
右裏附用候筈候事
右手傘は持參之筋用候事
同五年年十月廿三日

一御實母樣方御法事之節總奉行之御老中初御用掛之面々長袴着用之御定に候得共御在國にて御參詣被遊　思召にて　御法事大會　御聽聞被遊候得は上に御狩衣被爲召候御儀に付右之節は前條御定は居置　上之御召服に奉准總奉行之御老中初御用掛之面々も狩衣且布衣着用之事

上ヶ紙　本文兩日之御法事に候はゝ御初日は　御參詣無之儀に付勿論一統極之通長袴着之事

御參詣に付相詰候御先詰御先立等も勿論上之御召服に奉准狩衣布衣着用之事

一御參詣有之候共御法事大會御聽(聞カ)(問)無之御定之通御法事濟後御長袴にて　御參詣之節は勿論

一統極之通長袴着用之事

天保十二丑年七月十一日

一文恭院樣御忌日　公儀御代々樣之通御家中愼に不及筈

但本文之通には候得共御續柄之御儀に付御役人向御表御側向は銘々心得振りも可有之事

弘化四未年五月廿五日

一顯龍院樣御中陰御法事中獻備之儀是迄御家中之面々忌中引之輩は獻備不仕候處右向後忌中にても

獻備仕候筈候事

嘉永二酉年八月五日

一御法事之節相詰候勤番御先手物頭御式中自拜振之儀向後御用掛之面々自拜相濟候上　御名代御代

參且御用にて相詰候面々は奥表打込順次を以自拜致候筈相極候事

本文御名代年寄共菊之間詰相勤候節自拜振之儀は天保十二丑年相極候通候事

嘉永三戌年四月十八日

一於此表　公儀御代々御法事に付自拜之節是迄大寄合以上足袋相用候事に候得共向後御供番頭以上幷御用人足袋相用候ても不苦候事

維新後年中行事

年中御參詣御名代定

明治二年六月版藉御奉還府藩縣の制度となり藩治と御家政と分裂家令所を置かる依て公務掛貴志九藏をして從來の定例に鑑み時宜適應の程度を考へ調査せしめ此制を立られたる也（九藏は永年表御用局に在職常に此等の事務擔任の者也）以下御清之間行事初の諸制亦同樣とす時世の變遷古今程度の異は無論と雖も悉く舊規に基かさるなければ之を押して以て從前の御躰裁亦追想し得へし

御　宮　和歌浦

一正月十七日　御參詣　御直垂

出御以前　御宮之御鏡御頂戴被遊

但十七日　御參詣不被遊正月中　御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

一四月十七日　御參詣　襲御衣冠

御太刀代金二百疋

御馬代　金六百疋　御目錄

雨天其外御差支等にて御參詣不被遊候はゝ

御名代　家令

右之通被遣之御献備被遊　　家今奉切紙を以

一新粉御備

一九月十七日　御參詣　　御直垂

雨天其外御差支等にて御參詣不被遊候はゝ

御名代　　家　令

一歳暮

右之通被遣之

御參詣　　御半袴

但十七日御勤同日御參詣不被遊十二月廿七日迄に　御參詣不被遊候はゝ　御參詣代り　御名代被遣之

一毎月十七日

御名代　　家　令

但十七日御參詣被遊候節は　御名代に不及

南龍院樣　　長保寺

一正月十日

御參詣　　御直垂

御廟へも

但十日御參詣不被遊候はゝ御忌日御並之通左之通　御名代被遣之

御名代　御燒香　家　令

御廟へも　同

一年頭

御參詣十日御參詣不被遊正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

一七月十三日　　　　　　　　　　盆に付　金貳百疋

一毎月十日　　　　　御名代　　　　　　　家　令

但十日御參詣被遊候へは御名代不及七月には　御名代被遣
御靈前御廟前へも御燒香勤之

一新燒米御備　　　　　　　　　　　　　　家令奉切紙を以

一歲暮　　　　　　　　御參詣

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

清溪院樣　　　　　　　　　　　　　長保寺

御參詣　　　　　　　　　御直垂

年頭

御參詣正月中御參詣不被遊候はゝ御名代被遣

一七月十三日　　　　　　　　　盆に付　金百疋

一八月八日　　　　　御參詣　　　　　　　御半袴

御參詣不被遊候はゝ

御名代　　　御燒香　　　家　令

御廟へも　同

一新燒米御備　　　　　　　　　　　　　　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

高林院様　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

御參詣正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣

一五月十四日　御參詣　御半袴

御廟へも

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一七月十三日　盆に付　金百疋

一新燒米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

深覺院様　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

御參詣正月中御參詣不被遊候はヽ　御名代被遣之

一七月十三日　盆に付　金百疋

一九月八日　御參詣　御半袴

御廟へも

御參詣不遊被候はヽ

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一新燒米御備　家令奉切紙を以

一歲暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はヽ　御名代被遣之

大慧院樣　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

御參詣正月中御參詣不被遊候はヽ御名代被遣之

一七月二日　御參詣　御半袴

（一本ナシ御廟へも）

御參詣不被遊候はゝ
御名代　御燒香　家　令
御廟へも　同
一七月十三日　盆に付　金百疋
一新燒米御備　家令奉切紙を以
一歲暮　御參詣　御半袴
但十二月廿七日迄に御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之
菩提心院樣　長保寺
一正月　御參詣　御直垂
年頭
御參詣正月中　御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之
一二月廿五日　御參詣　御半袴
御參詣不被遊候はゝ
御名代　御燒香　家　令
御廟へも　同
一七月十三日　盆に付　金百疋
一新燒米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　一本ナシ（御半袴）

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

觀自在院樣　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

御參詣正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

一六月二日　御參詣　御燒香　御半袴

御廟へも

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一七月十三日　盂に付　金百疋

一新燒米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

香嚴院樣　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭
（御參詣）〔一本ナシ〕正月中御參詣不被遊候はゝ御名代被遣

一七月十三日　盆中に付金百疋

一新燒米御備　家令奉切紙を以

一十月廿三日　御參詣　御半袴
御廟へも
御參詣不被遊候はゝ
御名代　御燒香　家令
御廟へも　同

一歲暮　御參詣　御（半袴）〔一本直垂〕
但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣

舜恭院樣　長保寺

一正月　御參詣　御直垂
年頭
（御參詣）〔一本ナシ〕正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

一正月八日　御參詣　御半袴
御廟へも

但八日御參詣不被遊候はゝ御忌日御重之通左之通　御名代被遣

一是迄和歌　總御靈屋へ年頭御參詣は十日に被遊候御定有之就ては舜恭院様御靈前へも同日御參詣被遊候付八日御遠忌日就て之御參詣の御廉は御居置御參詣代り　御名代被遣候御定に付右御參詣之廉以前之規定に倣ひ八日に左之通御名代被遣

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一七月十三日　盆に付　金百疋

一新燒米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣

顯龍院様　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

(一本ナシ)(御參詣)正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣

一五月八日　御參詣　御半袴

御廟へも

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一七月十三日　盆に付　金百疋

一新焼米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄に御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

憲章院様　長保寺

一正月　御參詣　御直垂

年頭

（御參詣）[一本ナシ]正月中御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣

一三月十日　御參詣　御半袴

御廟へも

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

一七月十三日　盆に付　金百疋

一毎月十日　御名代　御燒香　家令

但十日御參詣被遊候得は　御名代被遣無之

一新焼米御備　家令奉切紙を以

一歳暮　御參詣　御半袴

但十二月廿七日迄御參詣不被遊候はゝ　御名代被遣之

瑤林院様　報恩寺

一正月廿四日　御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歳旦歳暮二度御參詣不被遊年には御靈前へ計御名代被遣之

一七月十三日　盆に付　金五十疋

天眞院様　報恩寺

一二月廿六日　御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

御年回之節は思召次第御參詣被遊御平年は歳旦歳暮二度御參詣被遊御參詣不被遊年は御靈前へ計御名代被遣之

寛徳院様　報恩寺

一六月四日　御名代　御燒香　家令

御廟へも　同

御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歲旦歲暮二度御參詣被遊御參詣不被遊年には御
靈前へ計　御名代被遣之
淨眼院樣　　長保寺

一五月廿四日　　御名代　　御燒香　　家　令
御廟へも
御年回之節は思召次第御參詣被遊御平年は歲旦歲暮二度御參詣被遊御參詣不被遊年には御靈
前へ計御名代被遣之
明脫院樣　　長保寺

一七月十九日　　御名代　　御燒香　　家　令
御廟へも
御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歲旦歲暮二度御參詣被遊御參詣不被遊年には御
靈前へ計御名代被遣之
寬耀院樣　　養珠寺

一四月廿六日　　御名代　　御燒香　　家　令
御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歲旦歲暮二度御參詣被遊御參詣不被遊年には御
名代被遣之
貞恭院樣　　長保寺

一正月八日　御名代　御燒香　家　令

御廟へも　同

御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歳旦歳暮二度御參詣被遊御參詣なき年には御靈

前へ計御名代被遣之

鶴壽院樣　長保寺

一八月十日　御名代　御燒香　家　令

御廟へも　同

御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歳旦歳暮二度御參詣被遊御參詣なき年には御靈

前へ計御名代被遣之

觀如院樣　長保寺

一二月十日　御名代　御燒香　家　令

御廟へも　同

御年回之節は　思召次第御參詣被遊御平年は歳旦歳暮二度御參詣被遊御參詣なき年には御靈

前へ計御名代被遣之

一七月十三日　盆に付　金五拾疋

養珠院樣　養珠寺

一正月　御名代　御燒香　家　令

一八月廿一日　御參詣　御半袴

御寶塔へも　御參詣

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

一十二月　御名代　御燒香　家令

智德院樣　養珠寺

一正月　御名代　御燒香　家令

一八月十四日　御參詣　御半袴

御參詣不被遊候はゝ

御名代　御燒香　家令

一十二月　御名代　御燒香　家令

理眞院樣　養珠寺

一十月九日　御名代無之

瑞應院樣　同

一十一月十日　御名代無之

眞如院樣　報恩寺

一六月廿四日　御名代無之

清信院様　　　　　　　長保寺
一二月三日　御名代無之
善修院様　　　　　　　養珠寺
一十二月廿一日　御名代無之
澄清院様　　　　　　　長保寺
一十一月十日　御名代無之
妙操院様　　　　　　　養珠寺
一十月廿五日　御名代無之
榮恭院様　　　　　　　長保寺
一十一月廿三日　御名代無之
本性院様　　　　　　　報恩寺
一三月八日　御名代無之
右御九方様へ
一正月　七月　十二月
御名代　御燒香　家扶
右之通被遣之
一御年回之節　御名代被遣之

台嶺院様 報恩寺
一二月八日 御名代無之
清心院様 同
一八月十九日 御名代無之
眞性院様 養珠寺
一正月八日 御名代無之
高岳院様 長保寺
一十月十八日 御名代無之
寶池院様 同
一六月十四日 御名代無之
一生院様 同
一六月十八日 御名代無之
心蓮院様 同
一十二月十七日 御名代無之
靈應院様 大相院
一七月十七日 御名代無之
示幻院様 同

一正月八日　　御名代無之
　妙幻院様　　　　　　　長保寺
一六月廿日　　御名代無之
　本池院様　　　　　　　感應寺
一五月廿九日　御名代無之
　慈讓院様　　　　　　　長保寺
一十一月十一日　御名代無之
　讓恭院様　　　　　　　長保寺
一四月十日　　御名代無之
　右御十三方様へ
一正七十二月　御名代　御燒香　家扶
　右之通被遣
一御年回之節　御名代被遣之
　了心院様　　　　　　　淨心寺
一八月廿一日　御名代無之
　忠善院様　　　　　　　感應寺
一六月六日　　御名代無之

詳容院様　　　　　　　蓮心寺

一八月十六日　御名代無之

如電院様　　　　　　　高松寺

一正月五日　御名代無之

青樹院様　　　　　　　同

一九月廿五日　御名代無之

幻壽院様　　　　　　　同

一十一月廿九日　御名代無之

妙智院様　　　　　　　大相院

一九月廿七日　御名代無之

如幻院様　　　　　　　同

一四月廿二日　御名代無之

清涼院様　　　　　　　同

一五月廿五日　御名代無之

緣覺院様　　　　　　　吹上寺

一十一月廿三日　御名代無之

右御十方様御諱忌日金百疋つゝ家扶切紙を以御備之儀宜取計候様御寺々へ申遣之

白道院様　　養珠寺　　種幻大童子様　　報恩寺

右御二方様へ御諱忌日別段御備無之　御方々様中御賄金に籠り被遣之

東　京

御名代御定

四　月

一年頭に付

日光御宮　御名代　　家　従

御太刀　一腰

御馬代金三千疋　居峯御名小札

御目錄

金五百疋　扮居包のし　　御宮別當大樂院

同斷　　御宿坊護光院

正　月

一年頭に付

氷川社　金王八幡　御名代　　家　従

右之通被遣之

山王幷熊野神社へ之御名代已來相止候事

午四月

御證忌日

東叡山

大猷院様
厳有院様
常憲院様
有徳院様
浚明院様
文恭院様
温恭院様
孝恭院様

御名代

增上寺

台徳院様
文昭院様
有章院様
惇信院様
慎徳院様
昭徳院様

御名代

右之通被遣之

御證忌日

歳旦歳暮　増上寺

明信院様　御名代　御焼香　家従

「歳旦歳暮御名代相勤候日段不定御用之都合にて相勤已下同断」

正月七月十二月　池上　本門寺

観樹院様　「身延へは御名代無之」

谷中　護國院
永隆院様　御名代　御焼香　家従
八月十四日　池上　本門寺
智徳院様　御名代　家従
七月九日　同寺
秀徳院様　御名代　家従
正月　七月　十二月
孝順院様　護國院
法劝院様　池上　本門寺
圓妙院様　護國院
泰良院様　本門寺
葆光院様
慈泉院様
妙泰院様
智幻院様　護國院
春窓院様
空如院様

覺明院様
觀達院様
俊岳院様　増上寺

法縁院様
清泰院様
普現院様
瓊淳院様　護國院
心浄院様
鬘珠院様
神光院様

資成院様
簾如院様　上野 凌雲院
珂月院様

琮玉院様
蕙岑院様　護國院
令孝院様
深入院様　千駄ヶ谷 仙壽院

妙相院様　　本門寺

智鏡院様　　護國院

圓心院様　　護國院

一本行院様
　　　　　　仙壽院
一容光院様

御名代御焼香　　家従

右之通被遣之

一大慧院様御實母觀樹院様へ御名代之儀身延へは被遣無之

一身延大野へ年々之御名代は已來相止御備物は奉狀を以相廻し左之　御尊靈様御年回之節御名代被遣

芳林院様は御年回にても奉狀之事

香嚴院様御簾中寛耀院様　身延　　養珠院様　大野

香嚴院様御實母善修院様　身延　　大惠院様御女芳林院様　身延

本記の如き處後明治九年より　御名代被遣事に改正あり

他家御相續御婚嫁之方々様

芳心院様　源性院様　松壽院様　圓光院様
靈岳院様　雲松院様　静證院様　桂香院様
松岳院様　遠紹院様　龐岳院様　靈光院様
永昌院様　壽光院様　光安院様　轉心院様
芳壽院様　恭岳院様　信恭院様

右御十九方様他家御相續且他へ御嫁被遊候御方々様故御手前に平常御勤無之

一御年回之節御法事御執行爲御知有之候はゝ御名代相勤御香典金壹兩御備夫々御國許等之御法事に候はゝ其屋敷々々へ御香典御備被遊

維新後

御清之間行事

一御花　御靈前兩脇へ隔日に御備盃には十三日十四日十五日にも御備

一御燈明　御靈前兩脇へ毎朝六時半より五時迄暮六時より六半時迄

一御證忌日其外都て御備物有之節は右御備中差上御年回之節は御蠟燭をも上之

一御佛飯御茶日々

御惣容様へ御茶一臺

一御香爐　御正面へ一

御拜之節に御燒香

一年頭　　御鏡　　壹臺

　御惣容樣へ御茶壹臺

一盆　十三日　十四日　十五日

　御惣容樣へ御茶

　　御膳御菓子 一汁三菜

　　　外に野菜物庖厨方にて見計御備

一御年回御證忌日御膳奉供振

　南龍院樣　憲章院樣

右御二方樣毎月御膳 一汁三菜御菓子御薄茶　御證忌日には一菜増御年回之節は二汁五菜

清溪院樣　高林院樣　深覺院樣　大慧院樣

菩提心院樣　觀自在院樣　香巖院樣　舜恭院樣

顯龍院樣

右御九方樣御證忌日御膳 一汁三菜一菜増御菓子御薄茶　御年回之節は二汁五菜

瑤林院樣　天眞院樣　明信院樣　寛德院樣

淨眼院樣　貞恭院樣　鶴樹院樣　寛耀院樣

右御八方樣御證忌日御膳 一汁三菜御菓子御薄茶　御年回之節は一菜増

觀如院樣

右毎月御膳　一汁三菜 御菓子御薄茶　御年回之節は一菜増

　養珠院様

右御證忌日御膳　一汁三菜 御菓子御薄茶　御年回之節は一菜増

　理眞院様　瑞應院様　眞如院様　觀樹院様

　永隆院様　清信院様　善修院様　證清院様

　妙操院様　榮恭院様　本性院様

右御十一方様御證忌日御膳御備無之　菓子御薄茶計御年回之節は一汁三菜

　寶池院様　一生院様　俊岳院様　觀達院様

　資成院様　妙幻院様

右御六方様御證忌日御膳　一汁三菜 御菓子御薄茶　御年回之節は一菜増

本文　妙幻院様へは三回御忌度濟候迄毎月御膳　一汁三菜 御菓子御薄茶御備

　源性院様

右御證忌日　御菓子 御薄茶　御年回之節は一汁三菜

　智德院様

右毎月御菓子 御薄茶　御證忌月　一汁三菜 御菓子御薄茶

右之余

御方々様は御年回之節計御菓子御薄茶奉備之

御拜幷御召服定

御宮　毎日　御遙拜　御半袴

台德院樣　大猷院樣　嚴有院樣　常憲院樣
文昭院樣　有章院樣　有德院樣　惇信院樣
浚明院樣　文恭院樣　愼德院樣　溫恭院樣
孝恭院樣

右御十三方樣御證忌月御拜　御半袴　御年回之節　同斷

昭德院樣

右每月御拜　御平服
御證忌月　御半袴　御年回之節　同斷

南龍院樣　憲章院樣

右御二方樣每月御拜御平服御證忌月且御年回之節萬一御參詣不被遊候はゝ御樣子次第御拜御半袴

清溪院樣　高林院樣　深覺院樣　大慧院樣
菩提心院樣　觀自在院樣　香嚴院樣　舜恭院樣
顯龍院樣

右御九方樣御證忌月且御年回之節萬一御參詣不被遊候はゝ御樣子次第御拜　御半袴

瑤林院樣　天眞院樣　明信院樣　寛德院樣

浄眼院様　明脱院様　貞恭院様　鶴樹院様

寛耀院様

右御九方様御證忌月且御年回之節御拜 御半袴

觀如院様

右毎月御拜 御平服 御證忌月且御年回之節御拜 御半袴

養珠院様

右御證忌月且御年回之節御拜 御半袴

但外御實母様方へは御證忌月并御年回之節とも御拜無之

寶池院様　一生院様　俊哲院様　觀達院様

養成院様　妙紅院様

右御六方様御證忌月且御年回之節御拜 御半袴

但其余御二男様方御初御子様方御年回之節にても御拜無之

麗如院様　珂月院様　琮玉院様　蕙岑院様

源性院様

右御四方様御年回之節御拜 御半袴

右御證忌月且御年回之節御拜 御半袴

智德院様

右每月御拜 御平服 御祥忌月且御年回之節御拜 御半袴
一盆に付　十三日　十四日　十五日
御惣容樣へ夕御拜之節 御半袴
右之通御拜被爲召之

維新後
御簾中樣御名代定

一正月十日　南龍院樣　御名代　御燒香　家扶
一八月八日　淸溪院樣　御名代　御燒香　家扶
一五月十四日　高林院樣　御名代　御燒香　同斷
一九月八日　深覺院樣　御名代　御燒香　同斷
一七月二日　大慧院樣　御名代　御燒香　同斷

菩提心院様
一二月廿五日　御名代　御焼香　同断
観自在院様
一六月二日　御名代　御焼香　同断
香巌院様
一十月廿三日　御名代　御焼香　同断
舜恭院様
一正月八日　御名代　御焼香　同断
顯龍院様
一五月八日　御名代　御焼香　同断
憲章院様
一毎月十日　御名代　御焼香　同断
御忌月に付三月には　御廟へも御焼香
鶴樹院様
一八月十日　御名代　御焼香　同断
観如院様
一二月十日　御名代　御焼香　同断

御廟へも　同

養珠院様

一八月廿一日　御名代　御燒香　同斷

智德院様

一正月　御名代　御燒香　同斷

一八月十四日　御名代　御燒香　同斷

一歳暮　御名代　御燒香　同斷

京都　御靈宮

一八月十八日御祭禮日　金百疋　御備

一四月四日御誕生日　金百疋　御備

東京　御庭稻荷

一二月初午の日　御名代　金壹朱　家扶

維新後　御法事御回向料

御佛供料

一御法事等料金

右は　南龍院様御初御方々様御年回御法事御回向料左之員數にて御膳御盛物御莊嚴品且御齋非時被下品其外巨細之儀迄も悉皆御寺々々へ爲相賄候等の事

御家父様方

御一周忌より十七回御忌迄	金三拾両
二十一回御忌より	金二拾両

御簾中様方

御一周忌より十七回御忌迄	金二拾両
二十一回御忌より	金十五両

御嫡子様幷御實母様方

養珠院様御儀は　御簾中様方之通

御一周忌より十七回御忌迄	金十五両
二十一回御忌より	金十両

御方々様

御一周（一本アリ 忌）より十七回御忌迄	金十両
二十一回御忌より	金五両

御七歳未満之御方々様 御嫡子様共

御一周忌より	金一両貳歩

右之通

一御佛供料共

右は　御家父樣方御初御惣容樣へ御佛供料且御莊嚴品爲御入用米金左之通御寺々へ被遊御附候筈に付夫々へ達之

米三百俵　　陽照院

同　拾俵　金二兩　養珠寺

同拾五俵　同一兩（一本三貳）分　報恩寺

右之通被遊御附万々一此後　御廟御增相成候とも御增は無之よしの儀も達之

御祈禱料

正月　　御宮　　御祈念

金一兩

六月晦日　大祓　　同

右家令切紙を以て

御二所樣より　晒一反つゝ　金三百疋

右御形代御祈禱掛り執事前廣差出候はゝ奉差上下ヶ候節晒等公務方を以て渡之

一六月晦日　　茅繩祓

金百疋

右杉原某（鷺森神主也）爲差出　御二所樣へ奉差上御作法濟

東京寺院御附屆御切米等來年分此節取計候事　明治二己年冬

一御切米拾石　御佛供料　金二十三兩　眞如院
一御佛供料米壹石　凌雲院
一御佛供料金四兩壹步　御位牌附出家へ金三步　久遠寺
一御佛供料金三兩貳步　御位牌附出家へ金三步　本門寺
一御佛供料米十石　增上寺
「内　三石　增上寺分　七石　鑑蓮社分」　御別當　鑑蓮社
一御佛供料金二兩三步　仙壽院
一御宿坊料金四兩　安立院
一御宿坊料米四石　護光院
一御合力金拾兩　境妙寺
一合三兩　護國院
「一金壹兩　香蓮寺」
〆米二十五石　金五十二兩　「米の分は若山の時の相場を以勘定相立候事」
維新後
神社等御勘定
聖像
一二月　中丁の日　御參詣　御直垂　御太刀代金二百疋御目錄　御馬代金二百疋

御參詣不被遊候はゝ御名代且御献備に不及
右は釋（菜）［奠カ］御執行に付御參詣被遊右御執行振都て學校作略之
但春秋兩度已前釋奠御執行有之候處昨已年
御改正後春一度御執行之積

一二月初午の日
御庭稻荷
御參詣　金一朱　御半袴
御參詣不被遊候はゝ　御名代　家　扶
港御殿御穴稻荷
一同日
御名代　金一朱　同　斷
栗林八幡
一八月十五日
御名代　金百疋　同　斷
右祭禮日　參詣不被遊候はゝ御名代不及
刺田彥社
一九月十七日
御名代　金百疋　同　斷
右祭禮日御參詣不被遊候はゝ御名代不及

日前宮
國懸宮
一九月廿六日　御名代　金百疋つゝ　家扶
右祭禮日に付被遣之
砂丸中央社
一冬至　御名代　潮初御備あり　同斷
大藏大明神
一十一月十九日　御名代　神酒初御備あり　同斷
右二ヶ所御備物いさゐの儀は庖厨方作略之
日前宮初大社御參詣振等御定之節之内に
祭禮に付
邦安社　御名代　金百疋　家扶
右之通
維新後
伏見樣　御宗家樣　名水樣御初　西條樣も罷る　御屆定

伏見樣

年頭

一品宮樣

御太刀一腰代金二百疋

奉狀御家令より

御息所樣
二品宮樣
妙榮德院樣

御馬代金壹兩

奉狀家令より

一春御初便之節

一種金三百疋つゝ

一品宮樣
御息所樣

御肴代金三百疋つゝ

女中御文

二品宮樣
妙榮德院樣

御肴代金貳百疋つゝ

同斷

一歲暮

一品宮樣

奉狀家令より

御息所樣御初御方々樣へも右奉狀に籠被仰進之

一暑氣
一品宮樣
御息所樣　女中御文
芦柄御團扇一箱つゝ代金三百疋つゝ
二品宮樣
妙榮德院樣　同　斷
同　斷　同
外御方々樣へは女中御文計

一寒氣
一品宮樣
御息所樣　女中御文
密柑一箱つゝ
二品宮樣
妙榮德院樣　同　斷
同斷
外御方々樣へは女中御文計
御宗家樣

年頭　御　使
御口上斗

（一本ナシ 御方々様へも被　仰入之）

暑寒　　　　　御使

御口上計

本文之御廉々御簾中様よりも御同様御屆被遣年頭も御口上計

但安水之外

御吉凶事等は爲御知有之候はゝ不取敢東京にて御使被遣重立候廉は御國許へ相伺　御承知之上被進物等取計

名水様

三卿様

御連枝様方

年頭暑寒初差定候御附屆は御斷に取計御吉凶事等は爲御知有之候はゝ不取敢東京にて御使被遣重立候廉は御國許へ相伺　御承知之上被進物等取計

鳥取従二位様　元福井様

吉井従四位様

舉母従五位様

初御兩敬に相成有之御方々

年頭暑寒初差定候御附屆無之吉凶事等は爲御知有之候はゝ不取敢東京にて御使被遣重立候廉は御

國許へ相伺　御承知之上被進物等取計

安水兩家

年頭暑寒其外何事によらす使者等被差出候はゝ爲御挨拶奉狀被遣被差上品有之候はゝ御應答被遣物取計

一吉凶事等は御吹聽被申上候はゝ不取敢奉狀被遣廉立候節は御樣子次第被遣物取計

若山には居屋敷無之に付在所へ奉狀被遣候得共東京其外にて屋敷に住居有之節は東京にて御使被遣

西條樣

年頭

從四位樣　御使

御太刀一腰金百疋

御馬代金二百疋

智月院樣　同

干鯛一箱　代金百疋

一入寒入土用

從四位樣　奉狀家令より

智月院樣

一歳暮

智月院様　　女中御使

御鏡餅一飾　干鯛一箱代金百疋

従四位様

前段御文に加へ被仰進之

一正三位様御誕生日御祝之節

智月院様　　女中御使

生鯛一折代金百疋

従四位様　　同断

交肴一折代金百疋

明治三午年正月廿日

西條様御初より年中御上物且此御方様より被進品等表向御内々共都て御互に御断之儀一應　思召奉伺相済候に付此表西條表へ奉状を以申遣候事

但臨時御上物且被進物等之儀は格別之御儀に候事

御簾中様より

伏見様 西條様　御届定

御簾中様より

年頭
一品宮樣
御息所樣
二種代金二百疋つゝ　奉狀家令より
二品宮樣
妙榮德院樣
一種代金百疋つゝ　奉狀家令より
外御方々樣へも被　仰進之
一春御初便之節
一品宮樣
御息所樣
年頭御鏡餠一飾つゝ　女中御使
代金三百疋つゝ
二品宮樣
妙榮德院樣　御初
同斷
一暑氣
一品宮樣
御息所樣
干飯一箱つゝ代金三百疋つゝ　同斷

二品宮樣
妙榮德院樣　　　　同　斷
御初へも御見廻被　仰進之

一御生身玉
一品宮樣　　　　同　斷
御肴　代金三百疋
御息所樣
同　金二百疋

一中元
一品宮樣　　　　女中御使
蓮飯　代金三百疋　刺鯖　代金二百疋
御息所樣　　　　同　斷
御肴　代金貳百疋

一寒氣
一品宮樣
御息所樣　　　　女中御使
蜜柑一箱つゝ　五百入
二品宮樣
妙榮德院樣　　　　同　斷

一歳暮

外御方々様へも被　仰進之

一品宮様
御息所様
二品宮様
妙榮德院様　奉状家令より

外御方々様へも被　仰進之

一御内々より

御四方様へ

干鯛一箱つゝ代　金二百疋つゝ　女中御使

外御方々様へも被　仰進之

御簾中様より

一年頭

西條従四位様
智月院様　御使

干鯛一箱つゝ代金百疋つゝ

一入土用
入寒

従四位様
智月院様　女中御使

一歳暮
智月院様　　　　　　　　　　同　斷
御鏡餅一飾　　干鯛一箱　代金百疋
從四位様
前段御文に加へ被　仰進之
御内輪御届定
正三位様より
御簾中様へ　　　　　　　　　御使家令
年頭
一種　代り
歳暮
御鏡餅一飾　　干鯛一箱　代金百疋
御簾中様より
正三位様へ
年頭　　　　　　　　　　　　御使家扶
干鯛一箱
歳暮

御鏡餅一飾　干鯛一箱　代金百疋

右

維新後明治四未年

正月御祝式

大晦日御祝　明治三午年十二月晦日也

一たはら御熨斗　木地御三方紙敷

御吸物　御酒　御肴一種

御八つ上り之節

御蕎麦切　御汁御かやく

正月元日

正三位様

一御居鏡餅　黒塗御薄盤

御簾中様

一御居鏡餅　同

御祝

一数之御熨斗　木地御三方紙敷

一松立御喰積　同

切のし　切昆布　勝くり

一御吸物塩鯛　ひれ　木地御三方

一御盃土器　同

一松立御肴　するめ　同　紙敷

一銀御間鍋　屠蘇散　同

朝御膳之節

一御雑煮

一朝御膳一汁三菜　外に御香物

一御二度目御膳二汁五菜

御酒　御肴二種

一御三度目御膳一汁三菜　外に御香物

正月二日

一数之御熨斗　木地御三方紙敷

一御吸物塩鯛　ひれ　同　御三方

一御盃土器　同

一松立御肴　たり　同　紙敷

一銀御間鍋　白散　同

朝御膳之部

一御雜羮

一朝御膳一汁三菜　外に御香物

一御二度目御膳二汁五菜

御酒　御肴一種

一御三度目御膳一汁三菜　外に御香物

正月三日

一數之御のし　木地御三方紙敷

一御吸物塩鯛　ひれ　木地御三方

一御盃土器　同

一松茸御肴　から墨　同　紙敷

一銀御かん鍋　屠蘇散　同

朝御膳之節

一御雜煮

一朝御膳一汁三菜　外に御香物

一御二度目御膳二汁五菜

御酒　御肴一種

一御三度目御膳一汁三菜　外に御香物

四日御祝

一俵御熨斗　　木地御三方紙敷

一御若餅　　同

銘々角豆の粉　　長のし二本

六日御祝

一俵御のし　　木地御三方紙敷

一御福茶之御品

御八つの節

一御蕎麥切　御かやく御汁

七日御祝

一俵御のし　　木地御三方紙敷

一松立御肴　から墨　　同　同

一御盃土器　　同

一銀御間鍋　　同

御二度目之節

一菜入御雜炊

御酒　御肴一種

一御三度共御膳御平日之通

十一日御祝

一たわら御のし　木地御三方紙敷

一御汁粉餅　御向浅漬大根

十四日御祝

一俵御のし

御八つ之節

一御蕎麦切　御汁御かやく

十五日御祝

一たわら御のし　木地御三方紙敷

一松立御肴　するめ　同　同

一御盃土器　同　御三方

一銀御間鍋　同

正三位様　御誕生日に付

御二度目御膳之節

一御酒　御肴一種

南紀徳川史卷之百三十二

臣 堀内信 編

典禮第八

年中行事 下

御簾中樣 倫宮樣 年中御清之間御拜定

正月 八日 舜恭院樣 御拜　同 貞恭院樣 御拜
同 十日 南龍院樣 同　同 廿四日 瑤林院樣 同
二月 十日 觀如院樣 同　同 廿五日 菩提心院樣 同
同 廿六日 天眞院樣 同　三月 十日 憲章院樣 同
四月十二日 明信院樣 同　同 十六日 寛耀院樣 同
五月 八日 顯龍院樣 同　同 十四日 高林院樣 同
同 廿四日 淨眼院樣 同　六月 二日 觀自在院樣 同
同 四日 寛德院樣 同　七月 二日 大慧院樣 同
同 十三日十四日十五日 御惣容樣 同　同 十九日 明脱院樣 同
八月 八日 清溪院樣 同　同 十日 鶴樹院樣 同
九月 八日 深覺院樣 同　十月廿三日 香巖院樣 同

御簾中様
毎月御精進日

御簾中様倫宮様　毎月御精進日

二日	大慧院様 觀自在院様	朝計	御證月終日
八日	温恭院様	終日	御證月は前日暮六時より御當日暮六時迄
同日	清溪院様	朝計	御證月終日
同日	深覺院様		
同日	舜恭院様		
同日	顯龍院様	終日	御證月前日暮六時より御當日暮六時迄
十日	南龍院様		前日暮六時より御當日暮六時迄
同日	清章院様		
同日	觀如院様	朝計	御證月終日
十四日	高林院様	同	同
十七日	御宮		前日暮六時より御當日暮六時迄
廿日	有德院様	朝計	御證月終日
廿二日	愼德院様	同	同
廿三日	香嚴院様	同	同
廿五日	菩提心院様	同	同

御證月之部　「但いつれも朝計り」

正月　十日　常憲院様　　同　廿四日　台徳院様
同　晦日　文恭院様　　二月　廿日　最樹院様
同　廿四日　孝恭院様　　三月　八日　本性院様
四月　廿日　大猷院様　　同　晦日　有章院様
五月　八日　嚴有院様　　六月十二日　惇信院様
八月(十一)日（一本八）　鶴樹院様　　同　廿一日　養珠院様
九月　八日　浚明院様　　十月　七日　源性院様
同　十四日　文昭院様　　同　廿五日　妙操院様
七月　盆に付　十三日暮六時より十五日暮六時迄

愼徳院様温恭院様御忌日にも御精進は公儀御近代による御證月之部最樹院様は　文恭院様御實父孝恭院様は浚明公の御嫡本性院様は憲章公の御實母妙操院様は顯龍公の御實母いつれも御近代之御親に依る也此御精進日者御音曲御愼は勿論御臺所御膳所等心得罷在魚類調進不致なり

御寺方其外年中女中御名代定

正月中

五日

日前國懸宮へ　年頭に付

中納言様御簾中様より　御名代　御備金二百疋つゝ

五日

一邦安社へ　年頭に付

中納言様御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

五日

一栗林八幡宮へ　年頭に付

中納言様御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

一岡之宮へ　年頭に付

中納言様御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

一吹上山王社へ　年頭に付

中納言様御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

松生院

一不動尊　年頭に付

中納言様より　御名代　御備金百疋つゝ
御簾中様

西丸稲荷社
湊御殿稲荷社へ　年頭に付
中納言様より　御名代　御備金百匹つゝ
御簾中様

右御序を以御役宅　砂丸稲荷社へも立寄候筈

伊達社
蛭子社へ　年頭に付
中納言様より　御名代　御備金百疋つゝ
御簾中様

十三日
一岡之宮　御誕生日に付
中納言様より　御名代　御備金百疋

同日
一栗林八幡宮へ　御誕生日に付
中納言様より　御名代　御備金百疋

十三日
一西丸
湊御殿へ両御庭
稲荷社へ　御誕生日に付

中納言様より　　御名代　御備　神酒　二對
御備餅二餝　以前より極り
赤飯二盛
右御序に付砂丸御役宅稲荷社へも立寄候筈
但御備右御同斷

八日
一總御靈屋御牌前方へ　　雲　蓋　院
年頭に付
中納言様
御簾中様より　　御名代　御燒香計り
但　舜恭院様　顯龍院様　憲章院様　鶴壽院様　親如院様
御靈前へ　生花一桶つゝ
外に右御序を以　　大　相　院
清涼院様御牌前御廟前へ生花一筒つゝ御備拜致し候筈　「丑年年頭より相止」

八日
一舜恭院様御靈前へ　　雲　蓋　院
御證忌月に付
中納言様
御簾中様より　　御名代　御燒香　　生花一桶つゝ　　金貳百疋つゝ

十二日
一御裏方様御霊前御牌前へ　大智寺
年頭に付
中納言様
御簾中様より　御名代　御焼香
右御裏方様は
明信院様　雲松院様　「信恭院様」　恭岳院様　慈譲院様
右
二月中
十日
一観如院様御霊前へ　雲蓋院
御證忌月に付
中納言様
御簾中様より　御名代　御焼香　生花一桶つゝ
三月中
八日
一本性院様御牌前へ　報恩寺
御證忌月に付

中納言様
御簾中様より　御名代　御焼香　生花一桶つゝ
御名代振りは　妙操院様へ之御振を以此度相極る
右之御序を以左之　御三方様へ　御簾中様より無急度生花御備且御焼香拜致し候事
瑤林院様　天眞院様　寛德院様　報恩寺

十日
一憲章院様御靈前へ　雲蓋院
御證忌月に付
中納言様
御簾中様より　御名代　御焼香　生花一桶つゝ　銀壹枚
四月中

四日
一岡之宮　御誕生日に付
御簾中様より　御名代　御備金百疋

四日
一栗林八幡宮へ　御誕生日に付
御簾中様より　御名代　御備金百疋

四日

西丸御庭
湊御殿御庭稲荷社へ

御簾中様より　　御名代　御備　神酒二對　御備餅二飾　赤飯二盛　以前よりの極り

右之御序を以砂丸御役宅稲荷社へも立寄候筈

御備品　右同斷

五月中

一日前宮
國懸宮へ
邦安社

中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

一粟林八幡宮

中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

一岡之宮

中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

一吹上山王社へ

中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

松生院

一不動尊へ
中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

一西丸御庭
湊御殿御庭稲荷社へ
中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ
右御序を以砂丸御役宅稲荷社へも立寄候筈
但御備右同断

一伊達社
蛭子社　へ
中納言様
御簾中様より　　御名代　御備金百疋つゝ

八日

一顯龍院様御靈前へ　　雲蓋院
御證忌月に付
中納言様
御簾中様より　　御名代　御焼香　　生花一桶つゝ　　銀　一枚
六月中無之
七月中

八日
一総御霊前御牌前へ　雲蓋院
　盆に付
　　中納言様　御名代　都て年頭之通
　　御簾中様より

八日
一妙操院様御牌前御廟前へ　養珠寺
　年頭盆に付（ホノママ）
　　中納言様　御名代　御燒香　生花一桶つゝ
　　御簾中様より

十二日十三日之内
一御裏方様御霊前御牌前へ　大智寺
　盆に付
　　中納言様　御名代　都て年頭之通
　　御簾中様より

十二日
一本性院様御牌前へ　報恩寺
　盆に付

中納言樣
御簾中樣 より　御名代　御燒香　生花一桶つゝ

右之御序を以

御簾中樣より無屹度

瑤林院樣御初　御三方樣へ生花御備等都て三月之通候事

八月中

十日

一鶴樹院樣御靈前へ　雲蓋院

御證忌月に付

中納言樣
御簾中樣 より　御名代　御燒香　生花一桶つゝ

九月中

一日前宮
國懸宮
邦安社 へ

中納言樣
御簾中樣 より　御名代　御備金百疋つゝ

一粟林八幡宮へ

中納言樣
御簾中樣 より　御名代　御備金百疋つゝ

一岡之宮へ

中納言様より
御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

一吹上山王社へ

中納言様より
御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

松生院

一不動尊へ

中納言様より
御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

一西丸御庭湊御殿御庭内稲荷社へ

中納言様より
御簾中様より　御備金

右之御序を以砂丸御役宅稲荷社へも立寄候筈

伊達社蛭子社へ

中納言様より
御簾中様より　御名代　御備金百疋つゝ

十月中

廿五日
一妙操院様御牌前御廟前へ　養珠寺
御證忌月に付
中納言様
御簾中様より　御名代　御焼香　生花一桶つゝ
十一月無之
十二月中
八日
一總御靈前御牌前方へ　雲蓋院
暮に付
中納言様
御簾中様より　御名代　年頭之通
八日
一妙操院様御牌前御廟前へ　養珠寺
暮に付
中納言様
御簾中様より　御名代　盆之通
十二日

一御裏方様御靈前御牌前へ　大智寺
中納言様
御簾中様より　御名代　年頭盆之通
同日
一本性院様御牌前へ　報恩寺
中納言様
御簾中様より　御名代　盆之通
右之御序を以て　御簾中様より無屹度　御三方様へ御燒香等之儀は都て盆之通候事
右年一度
三月中にても
南龍院様初
總御廟前へ　長保寺
御名代　御燒香　しきみ
舜恭院様　顯龍院様　憲章院様　鶴樹院様　覞如院様
御廟前へは　御花代り　金百疋つゝ
右

○印は御臺所より相廻り候事

「本記は鶴樹院様之御例なり　倫宮様にも御同様之事」

正月元日

○數之御熨斗　木地御三方紙敷

御朝

服紗御雜煮　梨子地御懸盤

引次御朝

御膳二汁五菜　同　塗御盃　塗御三方

御間鍋　御肴一種　塗御三方

○御居鏡餅　黒塗御薄盤　○數之御熨斗　木地御三方紙敷

○松立御喰積　木地御三方紙敷御箸　○大福御茶菓子　木地御三方尺御箸臺

御茶

○御齒固之御餅　木地御三方紙敷

御三献御式

○御初献御引渡木地御薄盤

○御盃土器　○御銚子　○御加　包生飾

○御二献御雜煮　木地御薄盤

○御盃土器　○御銚子　○御加　包生飾

○御三献鰭御吸物　木地御薄盤

○御盃土器　○御銚子　○御加　同

屠蘇散紅の袋に入

○御素麪　木地御三方 只御箸臺　○御高盛御膳　木地御薄盤

御本　御二　御三

○御盃土器　木地御三方　○松立御肴　木地御三方紙敷 常之御箸

○御銚子　○御加　包生飾

○御湯　○御干菓子三種

御二度目

服紗御雑煮　梨子地御懸盤　御吸物　塗御三方

塗御盃　塗御三方　御間鍋

御肴一種　同

同

○御膳二汁七菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷 常之御箸

○塗御盃　塗御三方　○御間鍋

○御干菓子三種　○蓬萊御喰積

御三度目

御膳一汁五菜　梨子地御懸盤

御讀初　御書初に付

○數之御熨斗　木地御三方紙敷

正月二日

御　朝

服紗御雜煮幷　御膳御酒御肴元日之通

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○松立御喰積　木地御三方紙敷

○御齒固之御餅　同　御はし　○御三献　元日之通

御二度目

服紗御雜煮御吸物

御酒御肴幷　御膳御酒御肴　元日之通

御三度目

御膳　元日之通

正月三日

御　朝

服紗御雜煮幷　御膳御酒御肴　元日之通

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○松立御喰積　同

○御歯固之御餅　同　常之御箸　○御三献　元日之通

○福壽　にんにく御腰高 御酢みそ同　木地御三方尺御箸臺

御二度目

服紗御雑煮御吸物

御酒御肴幷　御膳御酒御肴　元日之通

御三度目

御膳　元日之通

同夕御弾初に付

○御吸物鯛鰭　木地御三方尺御箸臺　○御盃土器　同

○松立御肴　同御三方紙敷常之御箸　○御間鍋

正月四日

御朝二度目共

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤（一に御平生御掛盤）　○數之御熨斗　木地御三方紙敷

○御若餅赤白　木地御三方紙敷　銘々角豆の粉　長御のし二本添

正月五日

御朝　御平常之通

御膳一汁四菜

御二度目　「一に御掛盤御同様」

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　常之御箸　○松立御肴　木地御三方紙敷

塗御盃　塗御三方　御間鍋

正月六日

御　朝　御平日之通

御膳一汁四菜

御二度目　「一に御掛盤御同様」

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷　常之御箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

夕御祝

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○御吸物塩鯛鰭　木地御三方　尺御箸臺

○御向こゝり煮鯉　間之土器 下の輪附　○御盃土器　木地御三方

○松立御肴　同 紙敷 常之御箸　○御銚子御加

○御福茶之品　黒豆　小梅一丁　枝山椒

同　夕

○御蕎麥切

正月七日

御朝

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　塗御盃　塗御三方

御間鍋　御肴一種　塗御三方

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○御齒固之御餅　同

淺木御紋御椀

○七種御雜炊　木地御薄盤尺御箸臺

御向　御腰高　田作り　同　淺漬御香物

御二度目

菜入御雜炊　梨子地御懸盤

御向　御腰高　田作り　同　淺漬御香物

御吸物　塗御三方　塗御盃　同

御間鍋　御肴一種　塗御三方

引次

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

正月十一日

淺木御紋御椀
○御汁粉餅　木地御薄盤 尺御箸臺　○松立御肴　木地御三方紙敷 常之御箸
○御盃土器　木地御三方　○御間鍋

正月十四日

御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤
○松立御肴　木地御三方紙敷 常之御箸　塗御盃　塗御三方
御間鍋

同夕
○敷之御熨斗　木地御三方紙敷 尺御箸臺　○御吸物塩鯛ひれ　木地御三方 尺御箸臺
○御盃土器　同　○松立御肴　同　紙敷 常之御箸
○御銚子　○御加
○御福茶之品　黒豆　小梅一丁　枝山椒　○御蕎麥切

正月十五日

御朝
御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　塗御盃　塗御三方
御間鍋　御肴一種　塗御三方

○數之御熨斗　木地御三方紙敷

淺木御紋御椀

小豆御粥白餅二切　木地御薄盤（尺御箸臺）

御向　御腰高淺漬大根

御二度目

小豆御粥　梨子地御懸盤

御向　御香物淺漬大根

御吸物　塗御三方

御間鍋

引　次

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤

塗御盃　塗御三方

正月廿八日

御　朝

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤

御二度目

御膳一汁四菜　同

○御齒固之御餅　同　長御のし二本添

塗御盃　同

御肴一種　同

○松立御肴　木地御三方紙敷（常之御箸）

御間鍋

三月三日

御朝

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○桃花土器に入下輪附　塗御三方
塗御盃　同　御間鍋
御肴一種　同　○數之御熨斗　木地御三方紙敷
○菱形御餅上草下白一重　木地御三方紙敷　○御盃土器　木地御三方
銘々角豆の粉　長御のし二本添
○松立御肴　木地御三方紙敷常之御はし　○御銚子　○御加

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸
塗御盃　塗御三方　御間鍋
四月十七日和歌　御祭禮

御二の椀

○御赤飯　梨子地御懸盤常之御箸　御あさもの御椀
○御煮染　御直口
○胡麻塩　御腰高
○御香物
御盛替御重に詰　塗御三方　御せんし茶

○御吸物　塗御三方　○塗御盃　同

○御間鍋　○御肴二種　塗御三方

五月五日

御朝

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○菖蒲土器に入下輪附　塗御三方

塗御盃　塗御三方　御間鍋

御肴一種　同　○數之御熨斗　木地御三方紙敷

○御粽三本白一本黄二本　同尺御箸臺　銘々角焼塩の粉　長御のし二本

○御盃土器　木地御三方　○松立御肴　同　紙敷常之御箸

○御銚子　○御加

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○松立御肴　木地御三方紙敷御常之箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

六月朔日

○氷餅三本　木地御三方紙敷常之御箸　長御のし二本

○雪御蓋物に入　塗御三方常之御箸

御中皿結ひのし　此雪御庭方より出候へは差上候事　御直口添

入土用

○生小豆百五十粒三度 土器入枌盞[illegible]　塗御三方常之御箸　御水　銀御茶椀　塗御臺

梨子地御菓子盆

○小豆御餅五　塗御三方常之御箸　○御盛替御重へ詰數五十　同　長御のし二本

御煎茶

土用半

梨子地御菓子盆

○小豆御餅五　塗御三方常之御箸　○御盛替御重詰同數五十　同　長御長のし二本

御煎茶

六月十五日

御朝御膳引次

杉粉盛

○御蒸小麥　木地御三方紙替尺御はし　杉銘々角豆の粉　長御のし二本

同日　御祭禮日に付

御二の椀

○御赤飯　梨子地御掛盤常之御箸　御あさもの

○御煮染　御直口

○胡麻塩　　　　　　　　　　御腰高
○御盛替御重に詰　塗御三方常之御はし　○御香物
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御煎茶
○御吸物　同　同　　　　　　　塗御盃　同
○御間鍋　　　　　　　　　　　○御肴二種　同
文政七年申六月十五日相定り
岡の宮御祭禮に付
　御吸物　ざゝめき鯛　　　　　御酒御肴一しゆ
　　大御表廻り
　　六月十六日嘉祥
杉粉六寸五分四方改敷杉葉
○御熨斗揉　木地御三方尺御箸臺
杉粉八寸四方改敷杉葉
○御菓子　同　同
　御寄水五つ組
　　大饅頭　一　大うつら焼　一　やうかん　一　あこや　一
　　きんとん黒一黄一　合もち　一　にしめ麸　一
御水仙皿

御冷麦　木地御三方尺御はし臺
○御並進御水仙皿 御冷麦　木地御三方
○松立御肴　同　紙敷常之御箸

六月晦日

銀御鉢
○眞桑瓜皮附輪切 十二切　木地御三方尺御箸臺

同　日

御菓子盆盛笹敷
○御椛團子五串　塗御三方常之御箸

七月七日

御　朝

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤
御間鍋
○數之御熨斗　木地御三方紙敷
御水仙皿
御素麪　同　尺御箸臺
○御並進御水仙皿 御素麪　木地御三方

御直口御汁　御小皿からし
○御盃土器　同
○御銚子
○御加　不包
○茄子　但閏月有之年は十三切つゝ 六月の閏は後の六月
○御盛替御重三重　同　同
塗御盃　塗御三方
御肴一種　塗御三方
御直口御汁　御小皿からし
○御盃土器　同

○松立御肴　同　紙敷常之御箸　○御銚子　不包
○御加
御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　「木地御三方紙敷常之御箸」
塗御盃　塗御三方　御間鍋
七月中御生身玉御祝儀御上被遊候に付
御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○御吸物　塗御三方常之御箸
○御肴一種　同　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸
塗御盃　塗御三方　○御間鍋
七月十五日
「御朝」
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　塗御盃　塗御三方
御肴一種　塗御三方　御間鍋
○蓮之御飯　はすの葉に詰　ちかやに結ひ　木地御薄盤尺御箸臺
○刺鯖三刺　木地御三方　○御吸物　塗御三方常之御箸
○御間鍋　塗御盃　塗御三方
○御肴二種　塗御三方　○御鳥　中将様御鷹方より差上候はゝ右御鳥之内御簾中様へも御二度め御膳之節差上候筈

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

八月朔日

御朝

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　塗御盃　塗御三方

御間鍋　御肴一種　塗御三方

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○御吸物塩鯛ひれ　木地御三方尺御箸臺

○御盃土器　同　○松立御肴　同　紙敷常之御箸

○御銚子　○御加

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

八月十五日

淺木御紋御椀

○御味噌煮御たんこ里芋　木地御三方尺御箸臺

御向　御腰高結ひのし　○御吸物　塗御三方

塗御盃　塗御三方
○御肴二種　塗御三方
御二度目御膳之節
御吸物　塗御三方
御肴一種　塗御三方
九月九日
御　朝
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤
塗御盃　同
御肴一種　塗御三方
○御赤飯　同紙敷尺御箸臺
杉折に盛焼栗拾五　長御のし二本添
○松立御肴　同御三方紙敷常之御箸
御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御かけ盤
塗御盃　塗御三方
九月九日

○御間鍋
御間鍋
○菊花土器に入　塗御三方
御間鍋
○數之御熨斗　木地御三方紙敷
○御盃土器　木地御三方
○御銚子
○御加　不包
○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸
御間鍋

中將樣御誕生日御表にて御祝被遊右御居鏡を直し大奥にて

御汁粉餅　御吸物　塗御盃　御間鍋　御肴一種

九月十三日

七つ成茄子　○枝豆　木地御三方紙敷常之御箸

衣かつき芋　枝かき　長御熨斗　二本

梨子地

○御菓子盆盛 衣かつき芋 枝まめ　塗御三方常之御箸

○御吸物　塗御三方同　塗御盃　塗御三方

○御間鍋　○御肴二種　塗御三方

御二度目御膳之節

御吸物　塗御三方　塗御盃　塗御三方

御間鍋　御肴一種　塗御三方

十月七日御誕生日に付

○御居鏡餅赤白一重　木地御三方紙敷　銘々角豆の粉　長御のし二本

○木錫瓶子一對　木地御三方　御盃土器組

○御吸物　塗御三方常之御箸　塗御盃　同

○御間鍋　○御肴二種　塗御三方

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御懸盤　○松立御肴　木地御三方常之御箸

塗御盃　同　御間鍋

御祝之御居鏡を直し候て

御汁粉餅　御吸物　塗御盃　御間鍋　御肴一種

玄猪

○数之御熨斗　木地御三方紙敷

○鳥の子餅上赤下白　木地御三方紙敷　銘々角豆の粉　長御のし二本

○五色鳥之子餅八寸御重に入上（一本て之）　組一色二つ充　五色菊花

冬至に付

淺木御紋御椀

○小豆御粥　木地御薄盤尺御箸臺

○御雜煮結ひのし　餅 作りいも 結ひこんふ　長芋 はれ鰹　梨子地御掛盤

御向　田作り 淺漬御香物　○御吸物　塗御三方

塗御盃　同　○御間鍋

○御肴二種　塗御三方桃之御箸

十一月廿四日

淺黄御紋御椀

○小豆御粥　木地御薄盤尺御箸臺

十二月朔日

○小豆御餅　木地御三方常之御箸　御猪口御砂糖　御小皿御香物

○御盛替　長御のし二本

入　寒

○小豆御餅　木地御三方常之御箸　御猪口御砂糖　御小皿御香物

○御盛替　長御のし二本

十二月十三日御煤納に付

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○御吸物塩鯛ひれ　同　尺御箸臺

○御盃土器　同　○松立御肴　同　紙敷常之御箸

○御銚子　○御加

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方常之御箸

塗御盃　塗御三方　御間鍋

菜入御雜炊　梨子地御掛盤常之御箸

御向　田作り　淺漬大根御香物

除夜

御二度目

御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御はし

塗御盃　塗御三方　御間鍋

夕

○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○鬼打豆　同　長御のし二本添

御椀盛

○御吸物　木地御三方　塗御盃　木地御三方

○松立御肴　同　紙敷　○御間鍋

○御福茶之品黑豆 小梅 一丁 枝山椒　○御蕎麥切

十二月廿七日

○數之御熨斗　木地御三方紙敷

○御温餅赤白　同　銘々角豆の粉　長御のし二本添

○御雜煮　梨子地御掛盤　御向　田作り　御香物

十二月廿八日

御　朝

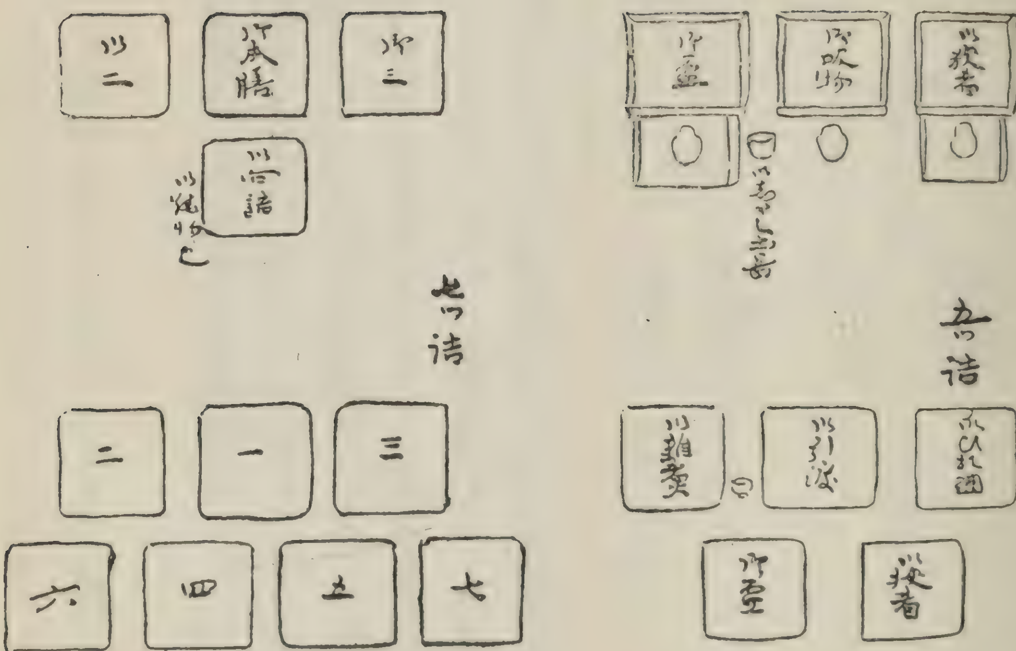
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○塗御盃　塗御三方

御間鍋　御肴一種　塗御三方
御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸
塗御盃　塗御三方　御間鍋
十二月晦日
御二度目
御膳一汁四菜　梨子地御掛盤　○松立御肴　木地御三方紙敷常之御箸
塗御盃　塗御三方　御間鍋
○數之御熨斗　木地御三方紙敷　○御高盛御膳　木地御薄盤
御本　御二　御三　○御盃土器　木地御三方
○松立御肴　同　紙敷常之御箸
○御銚子
○御加　不包
○御湯　○御菓子　木地御三方白御楊枝
○御福茶之品黒豆　小梅一丁　枝山椒　○御蕎麦切
右之通

御膳部据様

三つ結

御前



御簾中樣年中御作法

此記は年久しく奉仕の女中某か記憶の旨を記したるもの也內庭上下の行事見得て明なるへし

正月元日

御簾中樣朝六時御目覺被遊御髮御すへし御召御打着御袴召させられ御對面所に於て御用人御いし御目見後御よみ初御書初被遊四つ時過表より奧へ　中納言樣被爲成御前ぶれにて人よせ致し御對面所に於て役々段々にならふ程なく　中納言樣御裝束召し若年寄御先立御側若年寄御刀あけ致候御簾中樣及ひ兩上﨟兩老女御供申上御淸間御拜參夫より御對面所御座所へ御着座一の上﨟より元旦の御祝儀申上一統御祝儀申上る引つゝき松立御熨斗差上元日の御規式數々上り御長柄加へ御三獻御取替し被遊御祝相濟御通りかけ御目見以下見上け夫より御座の間にて御二度目御膳御祝上り御かけはん梨子地御紋ちらしにて上り

御はいせん役　上﨟

御長柄
御鉢役　若年寄中年寄の內

御松立
御本膳部
御二の膳部　兩御中﨟

御くわへ
御ふた置
御茶臺　御小姓

御膳後
中納言様より
御簾中様
両上臈
同老女へ

御流被下頂戴致夕七つ時比より御拜殿の御かちん引に付御廣座敷にて　中納言様御裝束にて御覽被遊候　御簾中様御簾こしにて御覽被遊候夫々御戴被遊候て　中納言様御表被爲成奥へ　御簾中様被爲成候
五節句は御對面所にて總御禮上臈初老女初吳服之間格まて式日は御座の間にて出合御禮上臈初表使迄當番に居候物計申上候事

二日　三日
御簾中様朝六時御目覺被遊御髮御すへし御召御襦ちん織紅裏御相召緋大紋御組白御袴召させられ（御襦ちん織御紅裏御介とり下の御相召は緋縮緬御縫入致候のを召させられ緋大紋には御座無）御對面所に御二所様總御禮御請被遊御祝幷に御祝御膳上り元日同樣

四日　御二所樣　御座の間にて出合御禮　式日
御簾中樣御髮御守殿御地下け被遊御召御地白介とり御相召赤御組白御相帶御縫入御　かちん御祝上る晝後上臈初御目見以上御側にて御雜煮頂戴致候末々は次にて被下事

五日　節句
御簾中樣御髮御すへし御召御地赤御相召白地に縫御座候を地しろと申候御相帶御縫入御袴召候て（赤地綸子に縫致候を地赤と申御地赤召候節は白縮緬縫致し候を召候事是を御ぢしろと申候　御

簾中様は多御地赤を召事候）御對面所にて御二所様出合御禮御請被遊候

六日　御座の間出合御禮　式日

御簾中様御髪御守殿御地下け御召御綸子相赤組白御帶縫入召事節分御祝上り候

七日　節句

御簾中様御髪御すへし御召御綸子御袴召事御對面所にて總御禮御二所様七草御祝儀申上御祝幷に御祝御膳上り候事

八日　九日　十日　御平日候得共正月は別段

御簾中様御髪御平御召紫萌黄ひわ黒中色草色右之内にて總御縫入御相召緋山舞のひちりめん何にても御赤色御白組白御帶御色とりよき織物被遊候御平日御晝前は御介どり晝後は御帶附被遊候事

十一日　御鏡ひらきに付式日

御簾中様御髪御地下け御召綸子御鏡ひらき御祝上り晝後上﨟初御目見以上御側にて御しる粉頂戴末々は御次向にて被下候事右の內今日御引初めに付　御簾中様御召御縫入召候事御相手の人御一所に不相替此歌を申琴歌

富貴といふも草の名めうがといふも草の名
ふきしさいとくめうかあらせたまへや

右にて御引初相濟御吸物上り御相手の人へ御祝儀被下　百疋の事
上﨟初兩老女伺居御側にて御吸物御酒頂戴致候事

十二日　十三日　御平日

御簾中樣總御縫入御介とり御相召赤何にても御組白御召替御模樣御帶附

十四日　六日の通り

十五日　節句

御簾中樣御髮御すへし御召御綸子御袴召候事御對面所にて出合御禮御二所樣御請被遊候事

十六日

御簾中樣御髮御平日御召御縫入御介とり御相赤召候事今日御さへ日と申て　中納言樣御廣座敷にて御なけ物被遊御次御三の間御膳所御遣ひ番茶所子供戴に出候此品靑物くわし澤山に被下候事

御簾中樣御簾越しに御覽被遊候事

十七日

御簾中樣御髮御平御召總縫入御相赤召候事今日昔勤候御比丘尼衆上り御座の間にて御二所樣に御目見法衣を着御目見後御仕度頂戴致晝後　御簾中樣御側にて御料理御品々被下御包之內夫々へ被下候事

十八日より　廿七日迄　御平日

御簾中樣御髮御平御模樣御介とり御相赤御召替御紋付御帶附

廿八日　式日

御簾中樣御髮御地下け御召綸子相赤召せられ御座の間にて御二所樣出合御禮御受被遊候事

二月一日　式日

御簾中様御髪御召前同断但御相赤組白

二月初午　御簾中様御縫入御介さり御相赤

二月十五日　廿八日　式日

同十五日より御組白の所一つ白に相成その外替り無御座

三月一日　式日

同　今日より御雛祭に付御雛へ御膳二度つゝ上り御祝幷に御祝御膳も上る
但二月月末より御飾に相成掛り等左之通り

御對面所御雛　若年寄 中年寄　西御休息御雛　中年寄 中﨟　西御化粧之間御雛　中年寄 中﨟

三月朔日　朝晝御膳上る　三月三日　朝晝種々別て上り候　同四日　朝御膳上り 晝御そば上る

一御雛に付呉服屋より紅白巻縮緬一臺(一間臺)御菓子屋より有平糖にて交肴一臺差上此外色々上り候事

三月三日　五節句

御簾中様御髪御すへし御召桃色季御縫入御相召白大紋赤なしにて御縫入召せられ候今日より相白に成る

御二所様御對面所に於て御禮御請被遊候御祝幷御祝御膳上る晝後　御簾中様御側御雛前にて上﨟はしめ表使御右筆迄一日二日三日と御白酒御料理被下尤三日別段に御品々被下候事下かたの人部屋の者共皆々御庭たいないくゝりより拝見に出夫々へ蒸菓子御干菓子被下候事

三月十五日　式日

同　廿八日　式日

同前同様

四月一日　　式日

御簾中樣御髮御地下け御召地白りんす今日より御袷御附帶召候事御二所樣御座の間にて出合御禮御請被遊候

四月十五日　　式日

同事

同十七日　　五節句

御豫參濟にて總御禮（但し御留主年は式日に御座候

四月廿八日　　式日

同し事

五月一日　　式日

同し事

五月五日　　五節句

御簾中樣御髮御すへし御召白赤黑の內絹縮に御縫致候をつち御單御白重御附帶召事（絹縮地にて赤白黑色に縫候を御單の御つちと申御附帶召事御重ねは白麻寒き時は白羽二重召せらる）御二所樣御對面所に於て總御禮御請被遊御祝幷に御祝御膳上り之事（五月五日柏餅御膳所にて被仰付四日夜の內より致差上候こと）

五月十五日　廿八日　式日

同し事

六月一日　　　式日

同　十六日　　五節句

御簾中樣御髮御すへし御召御つち御附帶御こし卷召事（晒にて白黑地に縫致候をつちと申冬の倫子の所に召候事御つちを召候節は御附帶召候ことに御座候）辻は總模樣赤はなし　御二所樣御對面所に於て總御禮御請被遊御祝幷に御祝御膳上り後段々に御嘉定之御品々上﨟初表使迄被下

六月廿八日　　式日

同し事

七月一日　　　式日

同し事

七月五日

今日より七夕祭りに付笹へ五色のたんさくしきし附西御殿御庭前へ二本御立て被遊候事

七月七日　　　五節句

御簾中樣御髮御すへし御召白赤黑の內のしちゝみ御縫御つち御附帶御こし卷召候事　御二所樣御對面所に於て總御禮御請被遊御祝幷に御祝御膳上り候事

御簾中樣御住居御入かはゝ御毛せん引御床行に五色御縫入同帶新しき御品をかけ御琴三味線胡弓外に大の御たての上へ青物そうめん色々三方に上備候事七夕祭の圖末にあり

七月十一日　　　式日

同し事猶御生身玉に附御目錄御取替し御座候

七月十四日

今日御兩親様あらせられ候御方々様は御祝被遊御召其外新しき物召事

同十五日　　　式日

御中元御祝儀に付御祝ひ被遊候

同十六日

今日御さい日に付正月御同様に御なけ物御座候御次以下へ被下又兩親の有若き女中へ御薬袋縫わせ候と御きゝめよろしくと申傳候

同廿八日　　　式日

同し事

八月朔日　　　五節句

御簾中様御髪御すへし御召白御つち召し御對面所に於て（御附帶御腰巻同し被遊候八月朔日は白縫つちにかきり候）御二所様總御禮御請被遊御祝幷に御祝御膳上り候事

八月十五日　　　式日

同し事今夕御月見に付御座の間に於て御酒ゑん上﨟初御側にて被下例年御月見の節幾色も替り候御膳出き尤是は西御殿上﨟初御小姓まて高躰に定紋付銘々心々の御膳を入て差上候事多人數の事

故半に分九月に幾人八月に幾人と致御本家の人は一切致不申
御簾中様御附の人計に御座候夕御賑やかに付御召總御縫入御附帶召す
白赤御膳きから茶御膳菜の御膳くこの御膳口なしの御膳青ちそ御膳
右之通
だんご　枝まめ　里いも
例年上り候事御膳所にて出き候事（一本両の面々）部屋にてもうす引致八月九月にも同所に致候事御殿部屋方うす引歌と申うたひ候
八月廿八日　式日
同
九月朔日
今月より御袷召候事
九月九日　五節句
御簾中様御髮すへし御召今日より御服御りん子御介とり御相召御白に相成候事（御相白に相成候と御介とりは赤黑綸子を召し候）御二所様御對面所に於て總御禮御請被遊幷に御祝御膳上り候事
同十三日
今日夕刻より御月見に付御座の間に於て御酒ゑん八月御同様に致候事
同十五日　式日

同　同廿八日　式日

同　十月朔日　式日
同今日より御相召赤に相成る
玄猪十月初の亥の日　五節句
御簾中様御髪すへし御召御りん子御相召赤御對面所に於て　御二所様總御禮御請被遊上﨟初表使
迄玄猪御かちん名々段々に戴候事御手より被下白黄相赤こま

同十五日
十月十五日より御組白召し候
同廿八日　式日

同　十一月朔日
同　十五日　式日
十一月初子の日　御簾中様より黄色御飯并風呂ふき大根みそ例年被下候事
十一月廿八日
御簾中様より両上﨟初與服之間迄御召被下
十一月　冬至

御簾中様御髪御地下け御召りん子御祝上り候事

十二月朔日　式日

同　川ひたり餅被召上女中末々迄も被下候事

同　十三日

御煤納に付　式日御禮御座候無（ホノマヽ）

同　十五日　式日

同

同　廿七日

御搗揚に付式日御禮無御座（廿七日御搗揚之節　御簾中様御側にて上﨟初御しる粉被下候事

同　廿八日　歳末に付五節句

御簾中様御髪御すへし御召御りん子御對面所に於て　御二所様御禮御請被遊御祝幷御祝御膳上り候事

十二月大晦日　夕五節句

御簾中様御髪御すへし御召りん子　御二所様御對面所に於て出合御禮御請被遊候御祝幷に御膳上り候事

十二月　節分　五節句

御簾中様御髪御すへし御召御りん子御對面所に於て　御二所様總御禮御請被遊御引つゝき御豆白

木御三方に入れ御二所樣へ別々に差上上﨟御側に居御對面所御下段の御兩方に若年寄中年寄御手まめ頂戴の紙包にのしを入被下候とてひかへ居る

中納言樣より銀御さしにて兩手へ被下若年寄前へ參り紙包へ入戴下り候事　御簾中樣も同しく被下直に中年寄へ參り御紙包へ入戴下る事上﨟初表使以下御目見以上へ被下節分の御祝幷に御祝御膳上り候　御簾中樣より年越に付御年男へ御目錄被下御禮に福紙と申御鼻紙御献上之事

十一月

御歲暮御目錄御取替しに付式日御禮は御座無候

十二月末

年々御年わすれと申御狂言御座候て藤間召し御仕度致御舞臺も出き

御簾中樣御簾越しに御覽被遊御用人初拜見仰付られ御側女中御簾外兩かはにならふ　御簾中樣御召式日の通り御狂言（御まく引は三の間女中美敷氣のきゝし人へ仰付られ候事御年わすれの御狂言は夜二時頃までも御座候）

御近火御立のきの節は

御簾中樣黑御紋付御介とりからけ御火事頭巾黑朱子御紋白にて出す

一御簾中樣御元服は御髮御和らはと申御打着御袴の色は濃色にして御ひも御くゝり被遊候御打着御振袖に御座候　御かほへ白きは御附被遊候　御婚禮は御祝ひ事御別に上り候事

同御半元服之節は御髮御前髮なし御和らは御打着御袴前の通り

同御元服後は御髪御すへしにて御前髮わけ御ひんつら御下け被遊御打着御袖少しつまり御袴は緋の御袴御手に御持被遊御くゝりなし御長袴御ひもゝ御位に寄り御永く被遊候由御まゆ御附被遊候
同御振袖の内は御介とり下帶は御後に御〆被遊御袖留後は御介とり御帶は御前帶御〆被遊候
御五節句式日御平日共御晝前は御介とり御召替より御帶附御附帶は御袴御單御かたひら右の内被遊御晝迄は御附帶御召替より御帶附
御五節句御召替御縫入式日御召替御模樣
御年號替り候節は御縫入召され候事
御能之節（式日）御地白綸子召され候事
御有卦入　御無卦入
右之節御縫入召され候
一六月御祭禮御覽の節は御庭内御こしにて御物見へ被爲成御用人初御供女中は歩行にて御供致候御召御縫入召され候
一上使の節は　御簾中樣五節句御髮も御召も御同樣に被遊候御召替御縫入御使衆の節は御縫入召され候　公方樣右大將樣よりの御使は上使さ申御簾樣共御外樣よりは御使衆さ申候事
御上使の節は御對面所にて御請被遊種々御取あつかい後晝後より御簾中樣御側にて御もてなし御料理外思召御品被下其外表向被下澤山之由に御座候
西條樣より御使衆の節も同樣にてよ程御けんしに御座候　御簾中樣御側にて御料理被下の節はこ

なた上﨟初同しく被下候事

御誕生日は　　式日

大般若經仰付られ候節は　御簾中様御模様召され候

御庭しまりの節前々日より申出し　御簾中様御縫入御介とりからけ御召替御帯附御縫入御ひしこき御歩行被遊御先拂表使口の丸扇子を持御目見下の人相みへ候と扇子をひろけ大音にて御ふさかりと申尤表使聲の通り候人御供に出夫より中年寄毛拂を持御先引　御簾中様御日かさ御さしかけ御本家上﨟老女若年寄御中﨟御供尤西御附の人中﨟御小姓御次向夫々御供申上中々澤山の御人に御座候御庭御茶屋御辨當上り所々の御茶屋には御茶御菓子等上り次向は御辨當戴候事

御簾中様御輿上けをお看板共と申右八人の外さしづ役をおちりけと申せい高く揃ひ候人着類は冬は中色に竹の形帯も黒地に白にて形を杣やの字にしめ候事

夏は白晒地に淺き色にて竹を染出し重附着帶は冬も同様冬は紅裏白重候御廣座敷より御廣敷御玄關迄御玄關より男子にて御輿上候事

夕六つ時計表御使番にて部屋方々の釜の下其の外を見廻り火のもとゝ聲をたて御使番申事

半には御廣敷番御錠口番そふし部や人時には火の番女中御半下附添火のもとふと聲をたて廻り候事夜着共に此通り廻り候事

十月中旬より夜の八つ時に部や方釜の下こたつ迄表使御火の番廻り候尤二月中旬迄別段に廻り候事　御簾中様御附茶所子供六人皆おとり子にて御狂言の節右の者藤間參りおしへ候事

一御簾中様御平日御寢召　白羽二重　一重　御帶　緋縮緬御ひしごき
御朝召　八丈しま　紅裏白重ね　御帶ふくさ

御雛拜見

一　倫宮様御用人
御醫師
御廣敷御用達

萬延二酉年三月三日

御雛爲拜見御對面所通御休息御化粧之間　宮様御化粧之間にて御用人へ　御目見被　仰付御内々御人形被下候（御對面所へは老女立合に出不申御休息之節は兩側に兩詰所の者ならひ居候事）

一同四日　御年寄　御側向一統

上にて御つれ被遊候同所御〆りに相成候上御錠口〆

一御休息にて御年寄へ　宮様より御雛御かさりの御むし菓子其儘被下に相成候

一御小座敷も御〆りに相成所々拜見被　仰付候

右に付御對面所通は早く御〆りとけ八間御廊下よりゆるりと拜見いたし御〆りとけに相成候

一御休息へ御年寄被通候節御小姓頭兩人通り候尤一人は御刀上け候事

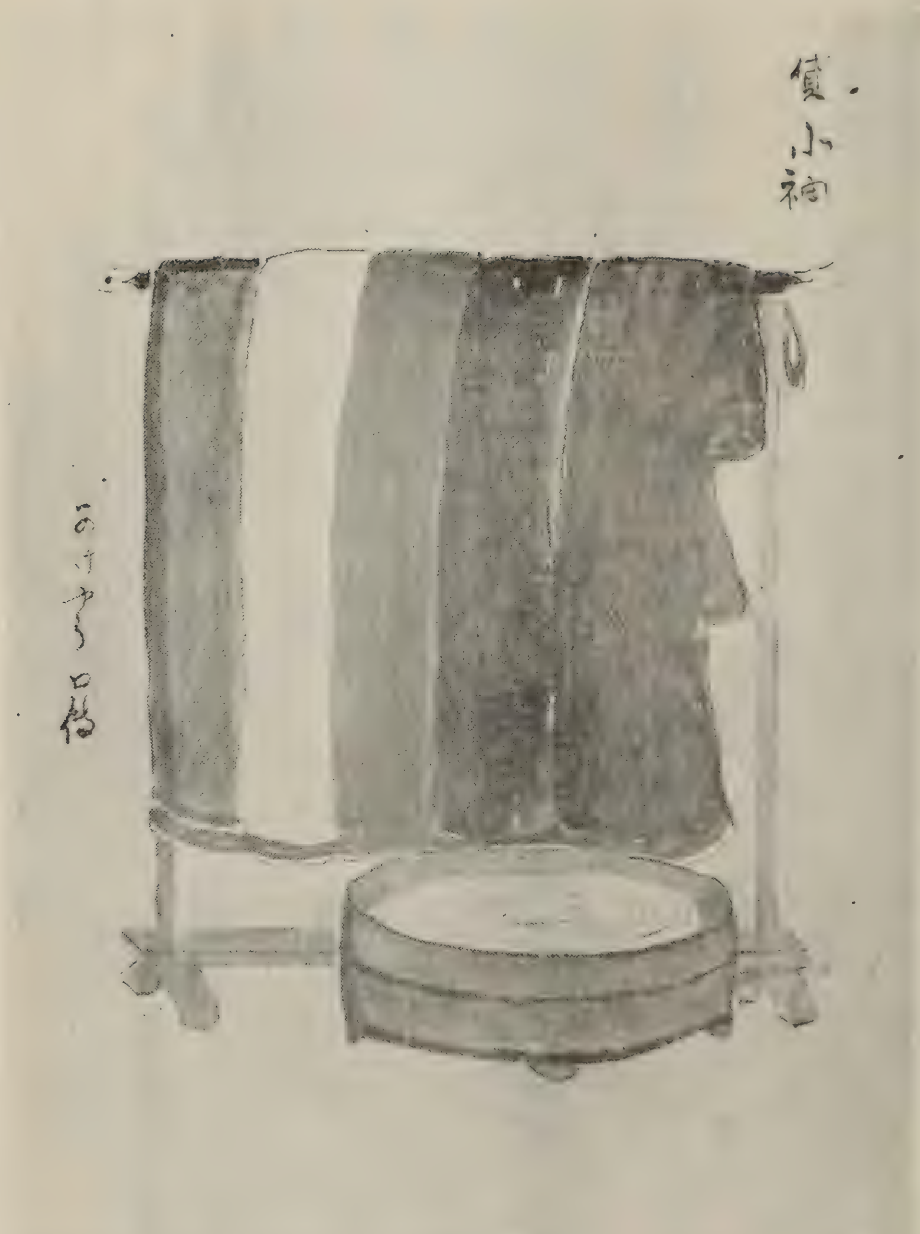
一右日段は御都合により二日三日四日の節も又兩日に拜見相成候事も有之候

一酉之年より御二階御三階共御〆りに相成候事
宮様より切すし一鉢被下に相成候やうにと御上け被遊候

七夕祭之次第　諸禮家より呈出

一七月七日の夜行はる天平勝寳七年より初れり乞巧奠とも七夕祭ともいふ也牽牛織女の二星を祭る也とあり神代巻の御歌にをとたなはたのうなかせる玉のみすまるとのたまへるを思へは神代よりのことゝ見え侍るなり七夕祭中庭を洒掃し机を置香花御酒菓子等の供具を備へ庭上に文を置竿の端に五色のいとをかけてねかひの事を祈るに三年のうちに必叶ふといふ故實なり故に乞巧と申也
本文は庭のともし火なとおはします古代本式の祭方を申たる分にて御座候當時は御床の内か或は御椽頰へ向て御飾付有之御祭方の供具は故實のまゝにておはしまし候
一七夕貸小そての事衣桁を組下に毛氈をしき小袖を掛るなり衣桁の前に塗盥に水を入て二星をうつす此水天台の百知の池といふをかたどりたるもの也此水七日の明六つ穢不浄無之人に汲せおくへし祭り過て流し捨る時は又其井の中へ納るなり
一星に手向侍る詩歌を芋の葉の露を硯にすりて梶の葉に書侍る事あり新勅撰集に
草のはの露とるけふの玉つさに軒はの梶はもとつ葉もなし
一星に手向る七草を知る歌とて昔より傳へ侍るうた
萩か花尾花葛花瞿麥のはな又をみなへし蘭朝顔のはな


青黄赤白黒
小花生
大三方
大三方


貸小袖
一かけやう口傳

一　女中昇進の御禮申上之次第

田川

御座之間にて　御目見結構被　仰付之御禮申上

御座之間御入側より御下段へ入口上りは中（御疊三疊目）被下は入口御上段御側にて名目錄頂戴仕

一宮樣（御簾中倫宮樣御事也）には御休息にて被下御座候

一實成院樣には御住居にて御逢被下御座候

松浦

粂野

御座之間にて　御目見結構被　仰付之御禮申上

御座之間御障子際上り御下段（御疊三疊目の處）被下其まゝ

一宮樣へは御休息にて御目見御入前相濟被下も名目錄も御同所にて相濟候に付御入之節御横座まゝ　上へ御禮被　仰上候

一實成院樣には御住居にて御逢被下御座候

八十瀨　やの　岡の

かよ　たち

御座之間にて御目見結構被　仰付之御禮申上

御座之間御入りかわ御障子きわに並居　上り御下段（一疊目）被下其まゝ

此節御本家西御殿のし樣御三所の者一所に付　宮樣かよ御目見も一處に相成候て別段に分り

西條樣より御使女中御目見

比丘尼等御目見

不中被下は矢張西御殿にて一所に候

一實成院樣に(て)(ほカ)御住居にて被下かわりなし

「按に　田川は老女被　仰付し也女中は累進により名を賜る事のよし西御殿とは御廉中樣御殿をいふ　倫宮樣未た御婚禮前ゆへ　宮樣と申上たり實成院樣は　昭德公御生母にて萬延二酉年二月　御本丸御引移此時未た此御方に御住居なり」

西條樣より御使女中御目見　　百人町より御使　槇　野

一

御座之間にて　宮樣御手廻し次第　御先へ(君上より御先の事)御目見御口上申上直に御上け物御目録御披露御返答御挨拶　御使下りて覺目録を被下御入側其まゝ御障子きわ　御料理後お八つ御休息へ被召戴下りかけ進せられ物被下も御同所にて御居なりに候

御本家は覺目録御使座敷にて被下候

「殿樣方を都て御本家と唱へ西御殿に區別す」

比丘尼等御目見　　紫乘院殿

御座之間にて　宮樣へ御目見差上もの御ひろう相濟御下段にて御しとねなくうちへと被　仰候へ共外御入側にて御申上被成候

一被下物は御小座敷御休息にて被下候

一夕西御殿御二の間にて御餘多にて支度被下

一上へ之御目見御なしされ御座之間御下段へ入御敷居きわの内のよし候得共此度は入らせられ無之外にて申上候

「右は公邊比丘尼にてもあるへし故に御扱ひ別也比丘尼とは元女中にて奉仕之　方々様薨去御暇となり剃髪したる者也　顯龍公憲章公の女中比丘となり常に伺公の者多くありたり」

一　御比丘尼

宮様へ御座之間にて御目見上り被下御座之間

老女は御下段御敷居内きわ若年寄はしめ中年寄初とも段々ひとつに御目見相濟

染山龜嶋和田三坂右四人は御休息にて御目見申上お八つ茶被下候節御比丘尼染山龜嶋迄は御二の間和田や三坂は御入側出口御敷居そこにて引つゝき戴候尤表使比丘尼も御入側に候

一　ため

宮様へ御座之間にて御目見御入側御障子きわいつもの通り上り被下候も　御休息へ差上ものは相廻り候

一御錠口へ差上物に付被下物は菊之間にて若年寄立合被下候

「若年寄中年寄等は従前の役名をいふ剃髪後にても改名せさる者もありたるなり」

年頭五節句女中御禮式

一年頭五節句には一統御表の如く御禮申上る圖左の如し

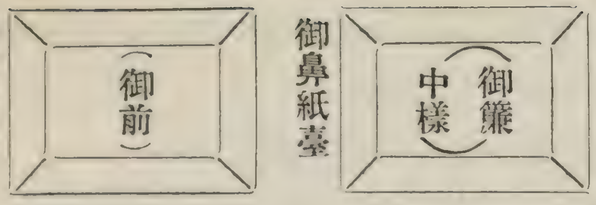
御三之間女中
同格
御末頭
使番頭
使番

此之處迄
中納言樣御出張被遊
御目見以下女中へ
御沙汰なしにて見上
させ

「年頭五節句女中御禮式圖」

御對面所御次之間

御對面所御上段



御鼻紙臺

御刀掛

上﨟 同 老女 同同同同

御下段

上﨟 同 老女 同同同同

中﨟頭 同 同 中年寄 同 同 御錠口格 同 同 同 同 同 同 御錠口 同 御中﨟 同 同 同 同 若年寄

同 同 同 御中姓 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 中﨟

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 呉服之間格 同 同 同 同 呉服の間 同 同 同 同 同 御次 御次頭 同 同 同 同 同 御右筆 同 同 同 同 同 表使

女中　上使之節御廣敷

一上使之節　御輿ろうかに御乘物すへ表使御廣敷迄御先引御さしきより若年寄　御たまりより上﨟
御客之間迄御先を引
一御同所にて　若年寄御のしを上る　御次御茶たはこ盆
一上使へ御挨拶濟　ほもし出る寒中なれはすゝの御茶碗御さとふ付　御三方へ御揚枝向はし共二本
御代りは三度有之三度めはさとふなし　寒には　御あさ物に御さとふ付御くわん鍋先三度出
右下り　御茶出候　上ろう御相伴
一御雜煮出御配膳之者御直し上御代りも右之通
一御吸物出御雜煮と御引かへに成　御くわん鍋出
一上使へ盃を渡御配膳之者御酒をつく
二しゆ御肴出　初の御肴上使之御右之方へ置御酒は御配膳之者いつにてもつき候事
吸物のふたいつにても膳のふちへ取はなしはしは膳のふちへ直す事下り候節おろし候事
御入りに成　上使御客之間入側より　御對面所へ御通り被成候御二之間迄被爲成御挨拶有之
御上段にて　上意被爲請御拜領御目錄出　御下段の下迄御臺にて若年寄持參　上ろうの方へ渡す
御拜領しな出右下り　御上段にて若年寄御のし上る
一御吸物　若年寄持出
一御したみ　御中ろう

一御間なべ　御かはらけ　御松立　老女持參　御上段御疊三疊目へ引居
一御吸物と御挨拶有之　配膳之者吸物ふた取
　上﨟之方　土器間なへ取に出　相圖に配膳之者御吸物をわきへよせ　御下段へ下り居
一上﨟の方　上使へ御持被成候と　まつ〳〵と御したひにて　上へ御持一つ御つきに被成　上使へ
御持被成候事　上使へ御持被成候を相圖に　御松立上へ上る
上使御肴御戴濟にて直に下り元之所に居上へ御間なべ上り候と　上使へ御さかな上候事　上使御
肴を　上へ　御上被成先そのまゝ置候事
二之上使へ御間なべ參一つつき御肴戴に御出被成相濟候はゝ下け元へ座す
上使御獻付相濟　上へ御間なべ上け　上使へ御肴持參の事
上使御肴御持　上へ御上置相濟候はゝ直に下け御疊四疊めへ引居
御間なべ下る　御かはらけ下る　松立下る相濟候へは配膳之者　御上段へ上り御三方上面へ直し
御吸物膳持下る　上使へ御返答夫より御下段へ御下り被成御下段にて
一上り目錄　上ろうの方御披露
一御手より御目錄被遣　若年寄引　上使御座敷へ御出被成候御髮計御上被成候
御休息有　こなたへ御むかひに老女出候若年寄老女の少御先へ參候事
御對面所へ通 御料理 三(十)八菜　御對面所御下段
御たはこ盆　寒には御手あぶり

杉丸　猪口　鱠香　つほ　地紙　煮酒
汁　汁　椀　汁

三の膳　御手前出來

一　配膳

二の膳　木椀是へ置　御向詰御引物是へ置

配膳之者右手へ出

一本膳　二の膳　三の膳　向詰　二の膳之向へ置　御手前出來三の膳の向へ置

一御かよひ人ふた置を持出候者へふせかき渡す　ふた取平のふた留置　向詰の上へ置

御引物　御通ひ之者持出　上ろうの方は　上使へ御渡し申す　御挨拶有て配膳之者へ御渡し受取

向詰の三方へのせ置候

一汁初物御替出　汁計は三度出　御飯初は白上る　御替りより御聞申候て御好候へは色附上候　御替り相濟御茶二つ出

御手前出來より下り　御向詰下る　御三方には　御吸物出　御三の膳と引かへに成る　間なべ出

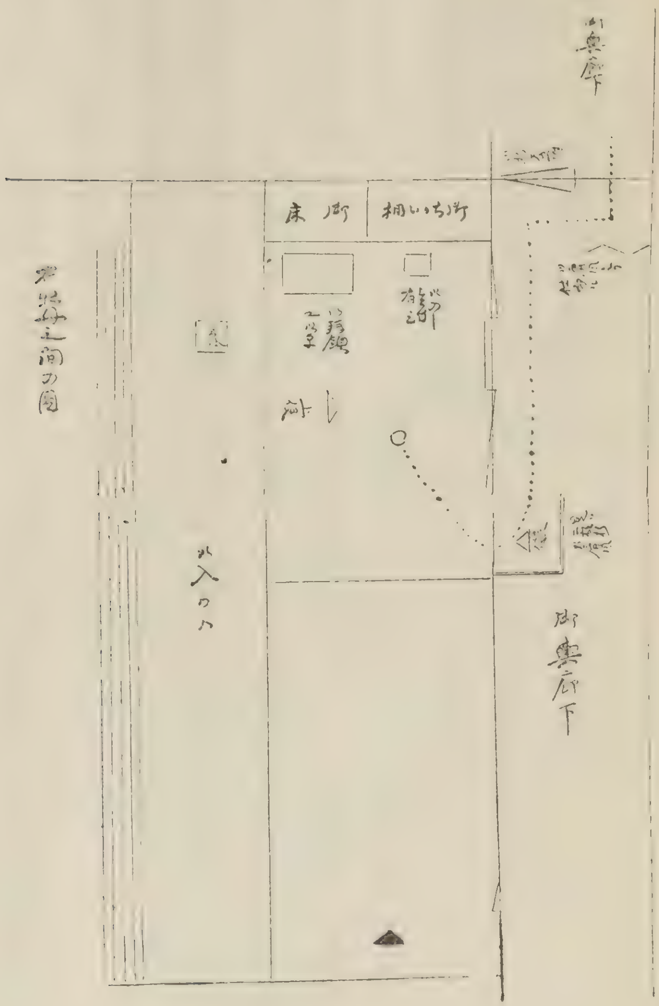
盃上使へ御渡し申す配膳之者つぐ　二しゆ　御肴出御吸物膳の上へ置候

硯ふた物　表使持出御通ひ之者引つゝき御さら持出　三方なり置

御こん付濟　御吸物下り　二の膳下り　湯當出　御通の者つく

本膳下りきり　ふち高　御くはし出　濃茶出御通の者上る

干くはし出　ふち高と引かへ　薄茶出下り　配膳之者　たはこ盆計直し下る表使へ御部やの人を
申候事　御對面所濟　老女御先引　御使座しきへ御出被成候
　上使召かへ替り着かへ候
上使召かへ濟御部やの人下り候へは宜を申込　御使座しきへ老女參こなたへと申す　御座之間へ
御出被成御獻上品有之　御小座しき　御側にて　御くわし御茶出候　御手より御しな被遣候　御
二階御三階御拜見　御表へ被出御餠くはし　（さま〳〵）（一本御うき〳〵）御硯蓋物
御すし出　御替被成　御茶出下り　御座之間御拜見　御庭御出若年寄御先を引　御座之間にて御
盛出し　御盛出し御くはし出　御好之しな直し上る
御吸物出　御盛出しの御くわしにて引替　間なへ出　硯ふた　御さしみ出御替り出　若年寄付立
上被爲成　配膳之者外へ引居　御挨拶濟候へは又配膳之者上面へ出　御拜領之　御吸物出　御猪
口　とくり　御肴出　御しやく相濟　御こん付濟　間鍋下り　御德利下り　御吸物下り　御茶出
御鉢つみの御くわし被遣候　老女若年寄御先を引　御對面　御後段　引かへ　御吸もの出
二しゆの御肴　御こん付濟　御吸物下り　御干くはし出　御茶出下り
上被爲成被遣候　御中ろう持出　相濟候へは同人引
若年寄　御のしを上御歸りに相成　御歸之節　御ままり　御つい立の内へ御先手しよく引居
御使座しき入口迄若年寄御先を引


御奥廊下
御床
御奥廊下

南紀德川史卷之百三十三

臣　堀　内　信　編

典禮第九

御式御禮式　上

綜　言

御式とは年頭初式日五節句八朔等恒例の御儀式乃至臨時吉凶の御儀式に關するを通稱す御禮式とは年頭初御祝事に付御目見以上の諸士拜賀及ひ諸士自己に係る謁見拜禮の事をいふ又謁と稱するあり御家老へ謁見して御祝儀上申或は御機嫌伺ひ奉る也事件の大小輕重多端繁雜盡し難し悉く成規先例の紀律に隨ひ秩序整然たり是概ね幕府營中の制度に准憑と察せらる今假に御式の大凡を揭けんに

年頭　正月元日より十五日迄

式日　毎月朔日　十五日　廿八日

但二月朔日三月朔日　六月十五日　七月十五日

三月　五月　六月　八月　九月　十月　十一月の廿八日には出仕なし

五節句　正月七日若菜　三月三日上巳　五月五日端午　七月七日七夕　九月九日重陽

八朔　八月朔日

嘉定　六月十六日

玄猪　十月初の亥の日

中元　七月十五日

除夜　十二月　節分

上使　定季臨時又御老中御奏者番御側兩番頭等之別或は若山上使あり
御廣敷へは　女中上使　御伽坊主御使あり
御臺樣御簾中樣よりは御使と稱し御附御用人又は御廣敷番之頭等被進

御家督御相續御隱居

御官位御昇進

御緣組御婚禮御養子其他一切御慶事　御簾中樣御嫡子樣方々樣等都て之御慶事

御參府御歸國　御脊座御發駕　山川御越立

日光久能　御鏡御頂戴

諸御拜領物御披露御披見

和歌御神事

御普請御滿作御移徙

將軍家御立寄御通拔

日光御門主樣被爲入

公家衆參向

尾水樣被爲入

御老中御招請

琉球人參上

公儀御大禮御慶事

此他尙數ふへからすして　御身邊の御作法諸士引見之次第多端一樣ならす又引見謁見之上にも總出仕あり（御目見以上總出仕也）御役人向奧中奧頭役以上或は當番詰合等之別あり又左之類之如きは槪ね御機嫌伺ひの謁とす

入土用　入寒　御年忌御法會　御忌中　御不例　御逝去　御卒去

公儀初御同族御緣家方御不幸御凶事

大震大雷御類燒其他臨時異變等

又自分御禮之上には

初て之御目見　諸士之長男十七歲に至れは請願之上初て拜謁するを初ての　御目見と稱す此式畢れは以來式日等に出仕な得都て諸士の資格に遇せられ重き事とす

家督跡目之御禮　隱居之御禮

御役儀之御禮　御加增之御禮

總領二三男被召出之御禮　養子緣組之御禮

他國着發之御目見　寺社繼目入院之御禮

地士町人之御禮

世の饒季と共に都て之曲禮（典カ）細節自然鄭重緻密に渉り前記の如きも時々改正修補之沿革不尠所謂威儀三千之類にて到底舉け盡へからす之か調元は一切表用局之司る所にして時々別局を開き掛員審査更に調帳を製し伺を經て施行之事及ひ從前よりの調帳保存ありしも維新之變廢毀今傳はらさる事實等皆御婚禮首卷緒言に解說の如し今僅に甲乙遺存之者を拾集此編を草すと雖も固より万分の一に足らす唯一つを押て十を推し新によつて舊を考ふの一助に過さるのみ

一恒例乃至臨時の儀典皆御式書又は御次第書といふあつて一本を君邊に呈し數本を諸有司掛り員へ交付之に據て各自動作斡旋す拜賀之席を正し非禮を警戒するは御目付の任なり御同朋亦監察に屬して席付等之事に預る

一謁之作法は役々諸士一同殿中極り之間席へ身分之格式順に列居御家老へ謁見首席之者より何々に付御祝儀申上升すと陳述して一同平伏す此時御家老は申上升すと答へて畢るの例なり

一御禮式といふには非れ共召出日と稱し毎月定日ありて御供番頭已上之面々及ひ御役人向（御家老御勘定奉行御用人御廣敷御用人御目付也）は御座之間へ伺公拜謁するを例とす蓋し樞要の職又は組配下を預る番頭等なれは特に御親昵御閑話御下問等之間に人品をも御視察之義に基しものかしかし近世は魚貫して進退唯一拜に止る儀式的の餼羊たり

一毎歳正月十一日に御具足御祝の式あり（御鏡開御祝とも稱す）御小書院に御召の御甲冑を陳列諸士拜觀を命せられ御祝の鏡餅を當番詰合の者へ賜る又是日を以て初て武官の新任あり（多くは御使番など被命）之を御用初と

稱す政事初の義なるへし　有徳公には武門第一の祝にて格別重き祝なれは總御家中三日に分ち十三日迄御祝ひ申へし此末代々の定法に立へしと被　仰出たり（詳に法令の部に記す）然ともいつ比よりか御省略と見へ該被　仰出の如くにはあらさりし也此御式書傳はらされは概畧を附記す

年頭御式

正月朔日

一御座之間御祝如恒例

御座之間　出御　御狩衣　御上段　御着座

御讀初　御書初

御熨斗鮑　　御小姓

御祝如恒例相濟　入御重て　御座之間　出御　御上段　御着座

年寄共

右一統出席御祝儀申上之　御意有之例之席へ着座

御勘定奉行

御用人

御軍事奉行

右一統出席御祝儀申上之　御意有て退去過て御次まて　出御

御成廊下より出御

御先立

御對面所　出御　御狩衣

御先立

御上段　御着座

御座疊幷御褥御刀掛上之

右使者　御前へ被　召出年寄共披露之退去

但し使者御緣頰へ出席松平左京大夫殿と計披露之

御廣敷御用人初奥詰頭役幷
御匙醫之面々平伏

年　寄　共

燒火之間北御緣頰
奥詰之面々奥御醫師等平伏

大溜之間北御緣頰
御納戸御番御小姓目付組頭等平伏

年寄共大紋

松平左京大夫殿
名代　松　村　孫　惣

安　藤　徹　福　丸

久野丹波守

右一人宛御太刀目録御奏者番持出之　御下段御敷居内（徹福丸は三疊目下丹波守は二疊目上に置之）にて御禮御奏者番披露之一旦御敷居外へ退座　御様子奉伺御下段　御左之方順々着座　御太刀目録御奏者番引之

御盃　南御番頭

御引渡　同断

御捨土器　同断

着座之面々へも引渡出之　（一本ナシ中奥御小姓）

御酌　南御番頭

御加　中奥御小姓

御前へ被　召上御加有て其御盃三方に載之御下段中央に御酌扣有之時徹福丸出席（此盃徹福丸御酌へ會釋有て　上之御様子奉伺　上に之御會釋被為在候節平伏御盃頂戴之御酌も　上之御會釋被為在候た奉伺徹福丸へ盛之）御盃頂戴之銚附有之加有て又銚附盃を持浪之間へ退時年寄共取之御三方に載之御酌へ相渡之　御前へ被召上候時出席御禮歸座丹波守出席御盃頂戴之

御次第同前御酌御扣之時

着座之面々引渡引之

年寄共御取合　御意有て退座　御前へ被　召上御加無之其御盃　御銚子に載之御下段中央に御酌扣有之時

數之御土器出明御三方と引替之

佐野出羽守　水野丹後守

右一人充御太刀目錄持參披露無之御下段御敷居内二疊目上に置之にて御禮御盃頂戴之直に　御緣頰へ順々着座

御太刀目錄御奏者番引之

御酌御扣之時年寄共御取合　御意有て退座

安藤飛驒守　水野大炊頭　三浦長門守

岡野伊賀守　下條信濃守

右壹人充御太刀目錄持參披露無之御下段御敷居内飛驒守大炊頭は三疊目下其余は二疊目上に置之にて御禮御盃頂戴之直に例之席へ着座

御太刀目錄御奏者番引之

山高左近　伊達源左衛門　鈴木三之右衛門

朝比奈惣左衛門　加納平次右衛門　戸田金左衛門

橋本六郎左衛門　菅沼半兵衛　有本左門

廣田杢之右衛門

右一人充御太刀目錄持參披露無之御下段御敷居内二疊目下に置之にて御禮御盃頂戴之直に南御緣頰へ順々着座

御太刀目錄御奏者番引之

畢て御酌御加之時年寄共御取合御意有て退座

但し左近金左衛門六郎左衛門左門は着座の席より出席御盃頂戴復座

平井助左衛門　池田喜右衛門　鈴木甚左衛門

大草四郎右衛門　金澤彌右衛門　井關彌五助

松平八輔　山本理左衛門　正木五郎右衛門

渡邊主水　村上與兵衛　西山與七郎

垣屋十郎兵衛　藪九郎太郎　薗田彦兵衛

右壹人充御太刀目錄持參披露無之御下段御敷居内に置之外にて御禮御盃頂戴之

御太刀目錄御奏者番引之

順々御緣頰へ着座年寄共御取合　御意有て退座御銚子入御膳部撤之

但し出御之節年寄共は御緣頰御下段角之御柱より浪之間之方へ筋違に着座

一右何れも浪之間より出席御下段御敷居内幷御敷居外にて御禮御盃頂戴之相濟盃持なから南御緣

頰順々着座御相之時年寄共御取合　御意有之退座御城代初大寄合以上御禮次第同前

大廣間へ　渡御

御先立　年寄共　大紋

御上段　御着座

御引渡御土器組付　兩御番頭

御酌　同断

御加　中奥御小姓

御前へ被召上御加有て其御盃御銚子に載之御下段中央に御酌扣有之時御酌代御酌御下段北之方に扣有之時御勝手より一銚子出二銚子に成

此節數之御土器足打に載御書院番持出御酌之次に扣罷在右御土器一充御銚子に載之

一右御土器殘少に相成候得は又々御勝手より持出右同前役之

一高家二人充御禮御太刀目錄持參（披露無之）直に御盃頂戴之退座

御太刀目錄御書院番引之

一大御番頭より重役以上二人充御太刀目錄持參順々御禮（披露無之）直に御盃頂戴之退座

御太刀目錄御書院番引之

畢て年寄共二人御下段御襖際着座于時御下段迄　出御御襖障子年寄共開之御次之間御書院番頭より虎之間席迄蘇鐵之間板縁へ掛一統着座　御用人幷御軍事奉行且五百石以上之分竹田慶安板坂卜齊御太刀目錄前に置御禮年寄共御取合重て　御上段御着座御襖障子年寄共開之

但し此節御酌等は其儘御下段に扣立御之内御銚子持なから平伏

右二銚子にて布衣以上御流頂戴之于時御勝手より一銚子出三銚子にて布衣以下虎之間席迄頂戴

畢て二銚子板縁へ下る大夫御流頂戴之畢て御銚子入　入御

御先立　年寄共（大紋）

但大夫人數に不拘二人頂戴之
一御前引渡は其儘置　入御以後撤之
一年寄共御勘定奉行御用人御軍事奉行は御下段孔雀之間堺御襖通より南板縁へ西向に着座菊之間
詰は北之方板縁へ南向に着座御城代初御供番頭以上は東之方板縁へ西向に着座
一猿樂共は　御正面落縁に群居

正月二日

一御祝如恒例
御物初
御座之間　出御　御狩衣　御上段　御着座
御角木　御手弓頭
御弦　御弓役
御火縄　御手筒頭
右着上之御小納戸持出御小姓頭披露之相濟御譲之御道具御頂戴被遊
御射初　御(遣)初（槍カ）　御鉄砲初
御熨斗鮑　昆布　勝栗　御小姓
右相濟御用掛御小姓被　召出御小姓頭御取合　御意有て退去　入御
御祝如恒例

年寄共

御勘定奉行

御用人

御軍事奉行

御手弓頭

御手筒頭

重て　御座之間　出御　御狩衣　御上段　御着座

右一統出席御祝儀申上之　御意有之例之席へ着座

右一統出席御祝儀申上之　御意有之退座過て

右被召出　御意有之年寄共御取合退去

御馬召初

右於大溜之間御庭　御召初被遊御馬預へ　御意有之燒火之間　御緣頰　御着座

御小姓

御熨斗蚫　昆布　勝栗

右差上之相濟　入御

御對面所　出御　御狩衣

年寄共　大紋

御先立

御上段　御着座

松平彈正大弼殿

名代　近藤一郎右衛門

右使者　御前へ被　召出年寄衆披露之退去

但し使者御緣頬へ出席松平彈正大弼殿と計披露之

在新宮に付不出　水野鶴峯

右御太刀目錄御奏者番持出之御下段御敷居內（三疊目下に置之）御禮御奏者番披露之一旦御敷居外へ退座御樣子奉伺御下段御左之方着座

御太刀目錄御奏者番引之

御盃　兩御番頭

御引渡　同斷

御捨土器　同斷

鶴峯へも引渡出之　中奧御番

御酌　兩御番頭

御加　中奧御小姓

御前へ被　召上御加有て其御盃三方に載之御下段中央に御酌扣有之時鶴峯出席（此節鶴峰御酌へ會釋有て上之御樣子奉伺上に御會釋被爲在候節平伏御盃頂戴之御酌も上に御會釋被爲在候を奉伺鶴峰へ盛之）御盃頂戴之銚附有之加有て又銚附盃を持浪之間へ退時年寄共取之三方へ載之御酌へ相渡之　御前へ被　召上時出席御禮歸座御酌御扣之時

鶴峯引渡引之

年寄共御取合　御意有て退座　御前へ被　召上其御盃御銚子に載之御下段中央に御酌扣有之時

數之御土器出明御三方と引替之

渡邊伊豫守

御太刀目錄御奏者番引之

金森孫右衛門　村上兵衛　成田致道

有本深幽齋

右御太刀目錄持參（披露無之）御下段御敷居內（二疊目上に置之）にて御禮御盃頂戴之直に例之席へ着座

右壹人充御太刀目錄持參（披露無之）御下段御敷居內（二疊目下に置之）にて御禮御盃頂戴之直に南御緣頰へ順々着座

御太刀目錄御奏者番引之

御酌御扣之時年寄共御取合　御意有て退座

山中作右衛門　森翫松軒　岡野平太夫

下條八十郎

御太刀目錄御奏者番引之

右壹人充御太刀目錄持參（披露無之）御下段御敷居內に置之外にて御禮御盃頂戴之

順々御緣頰へ着座年寄共御取合　御意有て退座御銚子入御膳部撤之

但し着座之外年寄共隠居初は浪之間之方より出席御禮御盃頂戴相濟盃持なから南御縁頬へ着座御扣之時年寄共御取合　御意有て退座

年寄共初着座振元日之通

中之間へ　渡御

御先立　　年寄共 大紋

中之間席一統御禮年寄共御取合相濟大廣間へ　渡御　御上段御着座

年寄共初着座振元日之通

御引渡御土器組附　　兩御番頭

御酌　　同斷

御加　　中奥御小姓

御前へ被　召上御加有て其御盃御銚子に載之御下段中央に御酌扣有之時御酌代御酌御下段北之方に扣有之時御勝手より一銚子出二銚子に成

此節數之御土器足打に載御書院番持出御酌之次に扣罷在右御土器一充御銚子に載之

一右御土器殘少に相成候得は又々御勝手より持出右同前役之

一無官年寄共菊之間詰嫡子二人充御太刀目錄持參御禮披露無之直に御盃頂戴之退座

御太刀目錄御書院番引之

畢て年寄共二人御下段御襖際着座于時御下段迄　出御御襖障子年寄共開之御次之間御供番頭以

上之隠居幷布衣以上嫡子總領獨禮之分　蘇鉄之間板縁へ掛一統着座重役隠居幷五百石以上之分
千石以上重役嫡子御太刀目録前に置御禮年寄共御取合重て御上段　御着座御襖障子年寄共開之
但し此節御酌等は其儘御下段に扣立御之内御銚子持なから平伏
右二銚子にて重役隠居御流頂戴之于時御勝手より一銚子出三銚子にて虎之間席迄御流頂戴之時
重て五銚子にて虎之間席幷御同刖迄御流頂戴之畢て　入御
御先立　　　年　寄　共
但し五銚子に相成候節は一銚子南之方へ出
一入御之節御酌は其儘出居　入御被遊候と引續御城代支配小普請初御流頂戴之　御前御引渡は
一統頂戴相濟候上撤之
一入御以後大廣間にて御城代支配小普請初御目見以上之面々順々五銚子にて御流頂戴之
正月三日
一御座之間御祝如恒例
大廣間　出御　御狩衣
御先立　　　年　寄　共　大紋
御下段迄　御出御御襖障子年寄共開之御次之間奥御醫師初三日御禮　獨禮之分板縁へ掛一統着
座献上物前に置御禮年寄共御取合畢て　御上段御着座御襖障子年寄共開之
年寄共初着座振元日二日之通

御引渡 御土器組附　　兩御番頭

御酌　　同斷

御加　　中奥御小姓

御前へ被　召上御加有て其御盃御銚子に載之御下段中央に御酌扣有之時御酌代御酌御下段北之方に扣有之時御勝手より二銚子出三銚子に成

但此餝數之御土器足打に載御書院番持出御酌之次に扣罷在右御土器一充御銚子に載之

一右御土器殘少に相成候得は又々御勝手より持出右同前役之

御醫師

御數寄屋頭

御匙醫總領

御流頂戴之重て五銚子にて

但御醫師總領御數寄屋頭總領者中之間にて御禮相濟

入御之上御流頂戴之

一三方は　入御以後撤之

年寄共二人御下段御襖際着座于時御下段迄出御襖障子年寄共開之虎之間　立御

町總代

諸職人

右蘇鐵之間（板緣）〔一本ナシ〕にて献上物前に置御禮

口六郡幷高野領　地士

地士格　町人共

右射手番所　通御之節御禮新御番頭披露之

御醫師總領

中之間

御數寄屋頭總領

右御禮年寄共御取合　入御以後大廣間にて御流頂戴之

御徒格醫師

右中之間にて一統御禮

町醫師

茶屋元〆共

右同所板緣にて献上物前に置御禮新御番披露之

町人共

入御之節大溜之間

武村撿校

右御禮御用人御取合畢て　入御

御先立　年寄共
但し地士町人共は地士町人共御年頭と披露之
一（室）〈一本實〉町新右衛門と名披露之事
御謡初御式寛政八辰年正月三日
酉の刻御書院　出御御上段御着座御年寄會釋有て高家出席御下段御向へ着座
御土器に載之　御年男　但御年男出之
御引渡　同断
初献
御酌　御年男
御加　中座　御膳番
御前被　召上御加へ有て其御土器手に載御下段四疊目之下に扣此時此高家罷出御盃頂戴之御土器
を持歸座
御銚子入但御銚子に引續御加同斷
但し高家右御土器自分之脇へ差置
御吸物　年男
御引渡と引替
吸物　中奥御番

高家へ出土器は不載

二　献

御　酌　　兩御番頭

御　加　　御膳番

御前被　召上御加有て其御土器手に載御下段四疊目下に扣此時高家御盃頂戴之土器を持歸座御銚子入

明御三方引　　御年男

御吸物引　　同　斷

三　献

蕗御臺　御土器七つ載　　御年男

御　　肴　　同　斷

肴　　中奥御番

高家へ出す

御　酌　　御年男

御　加　　中座　御膳番

御前被　召上此時飛驒守出席可謠旨傳之

但し飛驒守御下段御敷居際へ罷出傳之此時御下段向御縁頬御障子際に罷在候御役者小諷高砂

謡之引續御噺子

三番　難波　東北　老松

御加有て御土器手に載御下段四疊目下に扣

此時高家御盃頂戴之土器を持歸座

御銚子入

四　献

御　酌　兩御番頭

御　加　中座御　膳　番

御前被　召上御加有て其御土器手に載御下段四疊目下に扣

此時高家御盃頂戴之土器を持歸座

御銚子入

五　献

御　酌　兩御番頭

御　加　中座御　膳　番

御前被　召上御加有て其御土器手に載御下段四疊目下に扣

此時高家御盃頂戴之土器を持歸座

御銚子入

此時高家膳を持御緣頰へ下り退去
但し最初より之御土器五つ重置此時膳へ載持引

六　献

御酌　　　　　　　　　　兩御番頭
御加　　　　　　　　中座　御膳番

御前被　召上御加有て其御土器御銚子之口に載之御下段三疊目下に扣
此時飛驒守罷出也御盃頂戴之其御土器其儘差置御二之間へ退去す此時御書院番罷出御酌代る
御土器手に載御下段下より三疊目中程御敷居之上へ置之出雲守初大寄合迄一人つゝ御流頂戴
之大御酌書院番御下段下より三疊目之御敷居際に其儘扣罷在此節御加西南の方へ下る
但し御酌代りに出し御書院番に引續御加代り候御書院番罷出御膳番より御加受取御下段下
より三疊目西南之方へ下り扣罷在

七　献

御酌　　　　　　　　　　兩御番頭
御加　　　　　　　　中座　御膳番

御前被　召上御加有て其御土器御銚子之口へ載御下段三疊目下に扣
此時出雲守御盃頂戴之其御土器其儘差置此時御書院番出御酌代る最初罷在候御書院番御土器
手に載御銚子持添御下段下より二疊目へ下る御土器御敷居之上に置次に出し御書院番御土器

手に載御銚子持添最前貳疊目へ下る跡へ扣御土器御敷居之上に置
但し最前扣罷在候御加御下段下より二疊目西南之方へ下り扣次に御加代候御書院番下より
三疊目最前之跡へ扣

八献

御酌　　　　　　兩御番頭

御加　　　　　　中座　中奥御番

御前被　召上御加無之其御土器御銚子之口に載御下段四疊目下に扣
此時村上與兵衞御盃頂戴之其御土器其儘差置此時御書院番出御酌代る此時最初出扣罷在候御
御銚書院番下之方一人御土器を手に載御銚子持添退去次に出扣罷在候御書院番御土器手に載
子持添最初之跡へ扣御土器御敷居之上に居但最初出二疊目に扣有候御加御酌に引續退去三疊
目に扣在候御加退去之跡二疊目へ下る次に出中奥御番代候御加最前之跡三疊目に扣

九献

御酌　　　　　　兩御番頭

御加　　　　　　中座　中奥御番

御前被　召上御加無之其御土器手に載御下段御左之方塗緣より一疊目之下に扣御土器御敷居之
上に置之
此時三井孫十郎御盃頂戴之御土器其儘差置于時御書院番出御酌代る夫より御次第八献之通

但し御加同斷

一三番目之御囃子相濟候はゝ御通り二銚子一同に入御御土器其終に頂戴之者持退去

但し終之頂戴は御目付也

一新御番頭御書院二之間境御緣頰に着座大夫異服被下之幷猿樂に折紙被下之

但し右被下之品廣蓋に載御書院番出之

高砂之御臺　御年男

蓬之御臺と引替

御肴　同斷

蓬之御肴と引替

御酌　同斷

御加　御膳番

一御前被　召上御邦之時大夫一同弓箭立合舞之終る時分御加有て御銚子入御年寄共一統御敷居之際へ出座御祝儀申上之　入御　但し高砂之御臺御肴は其儘置之

一御謠初の事一話一言（十卷）に左の記あり因に依て抄出す

正月三日御謠初之事林春齋の兩朝時令卷上に其始不詳應永廿二年正月二日將軍義量營中に猿樂を唱（いさあい）謠之を俗松囃と云

此松囃の初不詳義滿（三代將軍）義持（四代將軍）義量（五代將軍）三代將軍義滿抔よりの例なるかとあり

御當家にては天正二年正月二日東照神君於遠州濱松城有御謠初自是毎年爲恒例（有同書に見る）

伊勢貞春云伊勢宗五入道の記（大永年中の人足利家十二代義晴將軍之代也）殿中にて能をさせられ松はやしの時は各一重を被下（一重とは練貫の御小袖なり）

一素襖ぬぎの事同書に是も殿中にて御直垂出候へは各ぬきて舞臺へ持て出て置翌日大夫其外座之者持て參り御ひたゝれの事は不及申面々要脚に上下をそへて遣候（私云上下とは素襖の上下也素襖ぬきては別の素襖を着す事なく袴計りにて居る也）

私に云すへて能の時素襖にても小袖にてもぬきたるはたゝます其儘左の手にすへ右の手にて上よりおさへ持行舞臺へ置也主人のぬかれたるひたたれにても小袖にても右の如く持行出向ふ大夫へ渡す也と同書に有之と伊勢貞春云へり

一當時御謠初に出仕之面々肩衣をぬき觀世大夫へ遣す事足利家よりの例と見へたり猿樂傳記なとに色々の説あれとも信用するにたらす

一正月二日之御謠初三日になる事

嚴有院君の御世承應元年十二月二日御母公寶樹院殿逝去に付翌承應二年正月廿三日御謠初の御規式あり（忠寄云承應元年十二月小にて正月廿三日御忌明なり）

承應三年より正月三日と定められ候

右承應元年同二年同三年の記に有之候

覃按國史實錄永享二年庚戌記正月細川畠山赤松一色諸族自其邸宅調松柏子踊躍鼓舞而入室町幕府

八朔御式 略

御座之間　出御御白帷子御長袴　御上段　御着座御祝如恒例　　年寄共

右出席當日御祝儀申上之　御意有之例之席へ着座　　御勘定奉行

右一同出席當日御祝儀申上之　御意有之年寄共御取合退去過る　　御側

右御次第同前過る　　御用人

右御次第同前過る　　御供番頭以上之 御廣敷御用人

右御次第同前過て御表　出御御先立年寄共　　小溜り 御附人

大溜り 御廣敷御用人初奥役之輩

右通御掛　御目見御對面所　出御御上段　御着座年寄共御様子奉伺會釋有之

御太刀目録　　　　　　　　　　　水野丹波守

右出席御禮申上御下段御敷居內へ着座　御太刀目錄御奏者番引之年寄共御取合退去過て

御太刀目錄　　　　　　　　　　　菊之間詰初大寄合以上

右夫々御禮申上御太刀目錄御奏者番引之相濟中之間へ　出御々先立年寄共此節　御對面所於東御

緣頰年寄共着座之儘御太刀目錄前に置御禮申上過て中之間　立御

中之間席之分

右御禮被爲　請過て大廣間へ渡御々上段　御着座御板緣御下段月番年寄共出席御樣子奉伺會釋有

之直に列居之席へ着座

御太刀目錄　　　　　　　　　　　高　家

右兩人つゝ出席御禮申上之御太刀目錄御書院番引之

御供番頭以上西條御家老迄

右同樣御禮申上相濟年寄共兩人御下段へ出御襖障子開之御下段迄　出御御次之間

孔雀之間席より虎之間席並迄

右御禮被爲　請御帳臺通り　入御々先立年寄共五友之間御廊下松御杉戶際

御勘定奉行

御側

御用人

右御禮被爲　請夫より於鎖之間重役嫡子御禮被爲　請相濟　入御

嘉定御祝

按に毎歳六月十六日嘉定の御祝ある事御歴世之恒例にして近く維新迄年々其式ありし也是　公邊御例に準せられしなるへし左に一二之御式書を掲く執務之職名等小異あるは時の沿革により彼此參照自から詳悉を得へし

嘉定御式　寛政七卯年六月十六日

出御已前御書院番東御椽側御年寄初御小姓頭以上御用人着座

但御供之分は　出御已後追々出席

御書院出御御上段御着座

水野飛驒守
同　出雲守

右出席御下段御向へ着座

御熨斗もみ　御年男

御菓子　御膳番

持出之備　御前着座之面々へも御菓子出之御書院番役之御前被　召上何れも頂戴之御のしもみ御菓子引之着座之面々御菓子持之末座より直に御緣頰へ歸座外御年寄より大寄合は一人つゝ大御番頭より御用人迄二人つゝ出席頂戴畢て御下段立御奥表頭役平士當番詰合之面々御二

之間より御三之間御緣頰へかけ着座御祝儀頂戴可仕旨　御意有之一等御禮畢て　入御已後奥表當番詰合面々之順々出席頂戴之　但頭役は二人つゝ平士は三人つゝ
一猿樂共二之間御緣頰御障子外板緣に並居諸士頂戴畢て御菓子御椽へ下け其儘御椽にて頂戴之
一御目通南之方御緣頰に切麥十五膳汁錫之汁次に入御酒御銚子に入盃上に添　出御已前出し置
右は御書院番へ渡候御式書也　御座之間より御年寄御先立御書院御帳臺より　出御御上段御着座より御祝相濟　御對面所御上段御着座御祝上之右相濟御小姓頭御小姓御小納戸順々頂戴之等嘉定一統之御式は略す
一御前御祝上候御年男御膳番長袴着座之御年寄へ御菓子出候御書院番長袴
一御祝頂戴之面々其外年頭のしめ着格の分廡上下着之等

又　文化七年六月十六日御式
御書院　出御　御上段御着座

着座　水野飛驒守
安藤岩三郎
右出席御下段御敷居之内にて御禮直に御正面御椽側着座
御熨斗採　兩御番頭　長袴着
御寄水　同　斷　同
右持出之備　御前

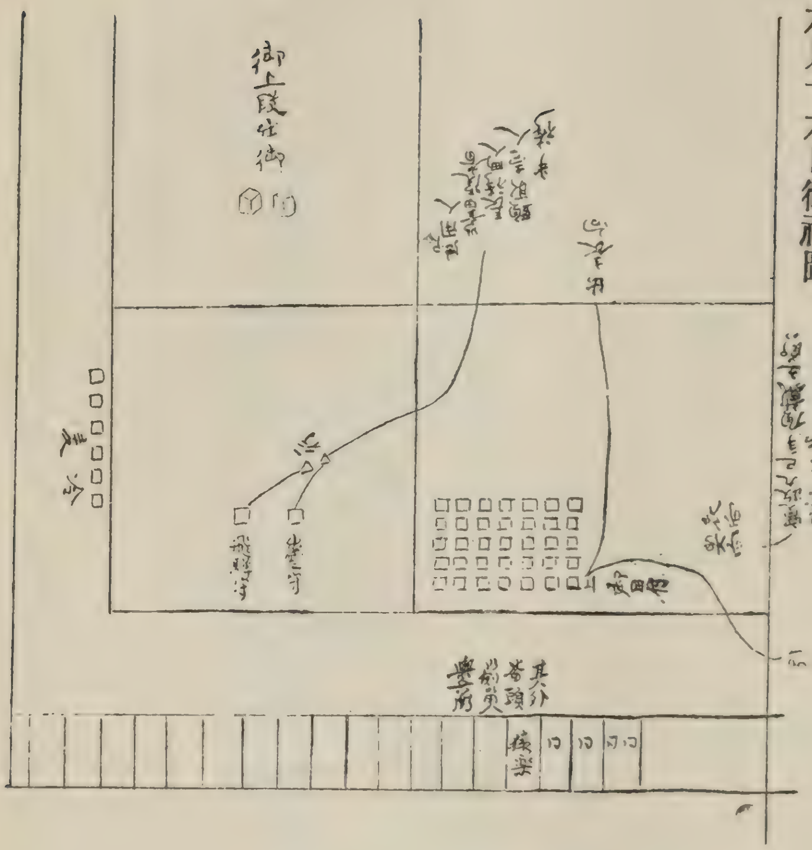
但御のし揉を御正面へ備之次に御寄水を持出備候時御のし揉を少し御左之方へ寄御寄水を
御右之方へ備尤右之御二品少し御間を透し御向へ御都合能く備之撤候節は先御寄水を撤す
其節御のし揉を又々御正面に備置次に御のし揉を撤候事
一着座之年寄共へも御菓子出し御書院番長袴役之
一着座之外年寄共大寄合迄一人つゝ大御番頭より御小姓頭迄二人つゝ出座頂戴之畢て御膳部撤
之着座之年寄共御祝頂戴之御禮月番年寄共取合相濟着座之年寄共御菓子持之退去又々出席月
番年寄共之次へ順々着座畢て　御下段　立御　御意有之一統御禮畢て入御
一御書院　出御之節列座之席より年寄共御先立相勤之
一年寄共初御勘定奉行御用人東御椽側着座御用取次見習御附書院後方へ東向に着座御樣子次第
御後詰にも罷出重役一統東御椽側下之方着座　椽側詰年寄共南御緣側鳩之間を後に着座
高家には二之間北御椽側に着座
一入御以後年寄共初最初之席に其儘着座椽側詰年寄共大寄合高家重役には退座奥表當番詰合之
者頭役者二人つゝ平士は三人つゝ出席頂戴之着座之外年寄共初一統頂戴之御菓子粉盛にて
出御　以前御書院二之間へ並置之
一入御以後頂戴之輩最初より御書院三之間に群居
一二之間末御敷居際に切麥素麵十五膳錫之汁次二つ并御酒錫之德利八つ
以上

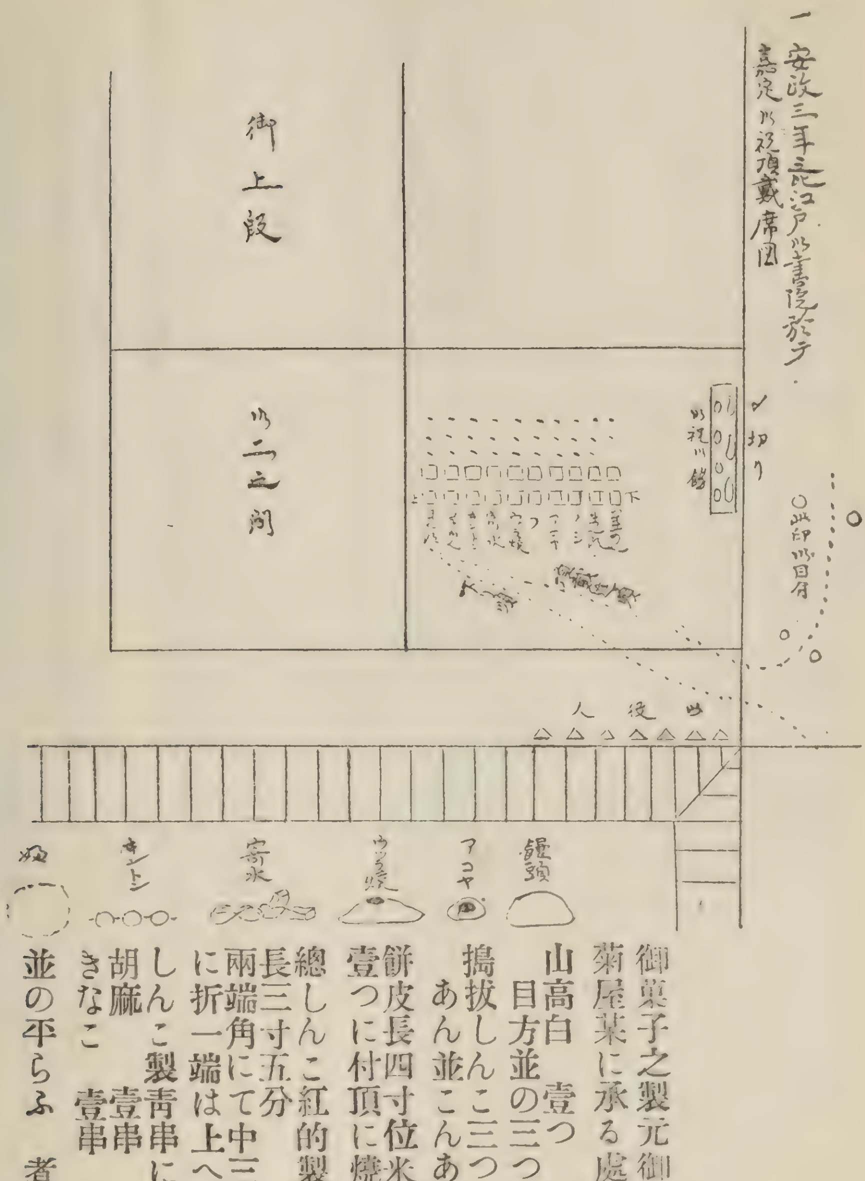
年月日不詳布達

一嘉定御樽肴御披露之節奥詰之輩頭役格平士共奥にて頂戴之事

但頭役格之奥儒者御匙醫幷同格は表にて頂戴之事

一寛政七卯年六月十六日御祝圖





御菓子之製元御菓子御用達
菊屋菓に承る處左之如し
　山高白　壹つ
　目方並の三つ掛
　搗抜しんこ三つ
　あん並こんあん
餅皮長四寸位米饅頭とも云
壹つに付頂に焼判をす
總しんこ紅的製　五本並
長三寸五分
兩端角にて中三角捻り二つ
に折一端は上へ向く
しんこ製青串にさす
胡麻　壹串
きなこ　壹串
並の平らふ　煮〆て

嘉定祝 文化十四丑年六月 文政二卯年六月　和歌山　小間使頭

嘉定御祝

御座之間　出御　御祝如恒例

右相濟　大廣間　出御

御熨斗採　兩御番頭

御寄水　同斷

右持出之備　御前へ

着座　久野伊織

御菓子出之御書院番役之

一着座之外年寄共初御小姓頭以上一等右以下頭役一役より一人宛之積中奥幷表平士は當番之面々頂戴之　但御番人之内半分通頂戴に罷出候事

一殿中諸役等勤　御目見以上之分一役一人つゝ頂戴之事

一着座之外年寄共初一統頂戴之御菓子扮盛にて　出御以前孔雀之間へ並置候

一虎之間南之方切麥素麵三十六膳幷錫汁次御酒錫德利二土器足打に載黑戸之上に餝置之

但黑戸之上に舟二つ置右舟一つへ瓶子小八つ大三つ小七つを一つ之舟へ瓶子置方右同前都合

大小三十六瓶子圖之如く置附る

一並之足打二膳右舟之前へ圖之如く置之右足打之上如圖並之土器數五十枚つゝ二通り餝置候

一御小姓御小納戸奥御醫師奥儒者御數寄屋頭奥詰之輩御規式相濟於焼火之間頂戴之
　但御匙醫幷頭役格儒者は御表にて頂戴之筈
一上之御祝幷年寄衆初へ被下御菓子等仕立方極之通
　御熨斗採
　御寄水
右大廣間御祝
一着座之年寄衆へ被下　　一人分
一御表被下
一奥被下
一女中被下　　三十二人
一女中被下
　蒸籠饅頭　十二人分　但一人前數五つヽ
一用意
右之通
　諸注文
〔上大奉書　　拾五枚
〔上三好奉書　　二拾五枚　此二株丑年より大長紙廿五枚に相成候

紅白上水引　　四拾把
並半紙　　一帖
右之通り兒玉銀六へ相渡す

（御のしもみ
一御熨斗　二十本
一御盃土器　二つ
一尺御はし　二せん
一五本枝松　一本

（御座之間
一御熨斗　三十本
一するめ　二枚
一長御はし　二膳
一三好奉書　二枚

一御冷麥　二升（當朝六時打立候樣）
一からし　一合
一耳土器　三つ
一丸麩　四つ

右御冷麥之外は十五日に參候樣

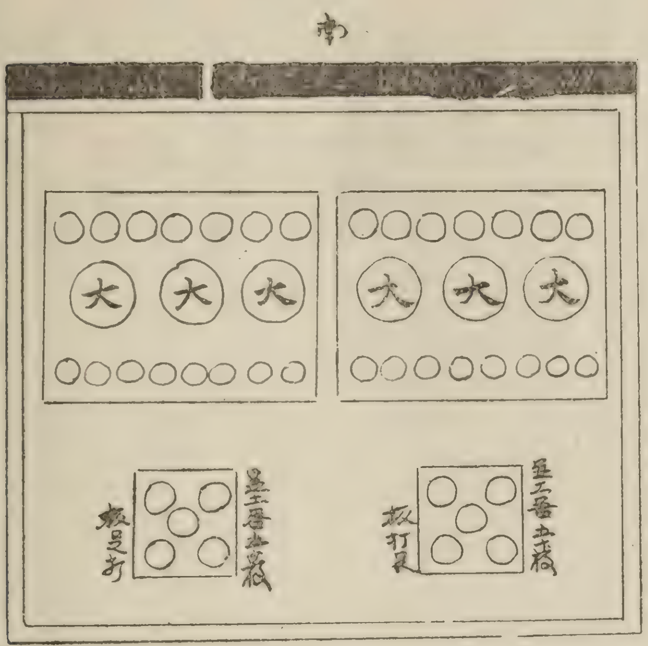
御くはし注文

大廣間筋
一御寄水　五つ組　六組（白三組 キ三組）　一御寄水　五つ組黄四組　一大まんちう　四つ
一大鶉燒　四つ　一やうかん　四切　一あこや　四つ
一金鈍　黒四つ 黃四つ　一合餅　四切　一麩　四
右いつれも十六日朝六時參候樣
一杉之葉者御賄方筋を尺回り一杷受取候筈
右注文六月八日福田嘉左衛門へ相渡す

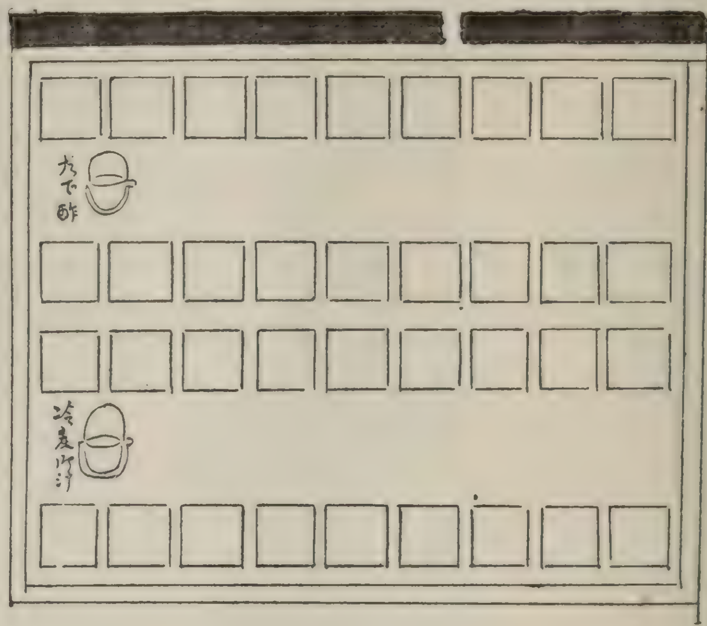
一桐之葉　五拾枚　一そうめん　五百目
一宇飩粉　打手間共六升　一醤油　五合
一酢　五合　一たで　二把
一白はし　四拾ぜん
嘉定御順書左之通
大廣間にて御祝
杉粉六寸五分四方改敷杉之葉
御熨斗揉　二十本　木地御三方　尺御はし臺
杉粉八寸四方改敷杉之葉
御寄水　黄白黄 白黄白　五つ組　同御薄盤　長御はし臺
御座之間にて
數之御熨斗　三十本　木地御三方紙敷
杉粉八寸四方改敷杉之葉き御寄水　五つ組一組
御菓子
大まんちう　一　同　御薄盤　大うつらやき　一　尺御器臺
やうかん　一切　あこや　一
金鈍　二　黑一 き一　合もち　一切

煮染麩　一
染付御皿
御冷麥　二升　木地御三方
染付御直口　尺御はし臺
御　汁
御向に染付御小皿
からし一合
御再進御冷麥　同　御三方
御盃土器　同　御三方
松立御肴　木地御三方紙敷
するめ　常之御はし
御銚子
御　加
右之外に御菓子二通り御紋付御重に入御膳番衆封印にて大奥へ相廻候
右之通相濟
大廣間にて頭役以下一役一人つゝ御目見以上　役所勤御目見以上迄一役一人つゝ
御餝付如圖左に相記置候　是者小間使頭取扱無筋

朱膳へ桐之葉筋違に敷其上へそうめん冷麥二の字に盛
朱塗御紋付船へ錫徳利如圖置いつれも錫之口四方蝶紅白水引五筋にて雨わなに結ひ御酒
次大之筋へは五合つゝ小の筋へは二合つゝ



文政二卯年より尺長紙廿五枚にて大小瓶子四方蝶紙に相極候
錫瓶大六本口紙大奉書に二枚合にて一尺三寸四方蝶紅白水引尺長にてわなに結ひ錫瓶子小三十本三好奉書二枚合にて七寸四方蝶紅白水引にて雨わなに結ひ
本文朱塗御紋付御船二つ共御黑戸之上へ圖之通置
板足打二せん但一せん並土器五十枚つゝ載御黑戸之上へ置圖之通



朱膳三十六膳御黒戸之上へ置此通りならべ
但朱膳へ桐之葉を角違に一枚置其上へそうめんと冷麦を二之字如に盛圖之通かさ一つつゝ置はし一ぜんつゝ付尤かさはふせ申候



桐之葉置様
そうめん冷麦盛様

此兩様御餝付は諸事小間使頭取扱之筈

右之通に御座候前段之通諸注文小間使頭より嘉定調御賄人へ相渡候筈

文政二卯六月十六日

嘉定御祝付大廣間にて御餝付前段如圖御餝付相濟候
但錫瓶子之口大之筋六本尺長紙にて四方蝶尺三寸四方に裁四方蝶に折三尺物水引一把にて兩わなに結ひ錫瓶子之口小之筋に三十本尺長紙にて四方蝶八寸四方に裁四方蝶に折長尺水

引一把にてわなに結ひ

去る丑年迄は大瓶子は大奉書へ小之筋は三好奉書にて四方蝶致候へ共當年より尺長紙
廿五枚と相極候

福島可兵衛殿高橋杢兵衛殿承屆候

御黑戸二枚者御同朋取扱之筈
朱塗御紋付船二つ御振廻場預り
朱膳三十六膳朱かさ三十六同所預り
錫瓶子大六本小三十本同斷
並内曇土器正月御盃被下殘り同斷
　但此百枚
木地板足打二枚進上方預り筋　是は盃土器臺一膳土器五十枚つゝ
白はし五十せん御振廻場より
桐之葉は御賄人調より申遣候筈　杉之葉も同様

諸注文扣

一尺長紙　二十五枚　　一半紙　一帖
一紅白水引　三尺物　七把　　一紅白水引長尺　三十五把
一晒生ふ　二合　　一杉之葉尺廻り　二把

一杉粉　二枚　内　一枚六寸五分四方
　　　　　　　　　一枚八寸四方
一長御箸　二せん
　尺御はし　二せん
一醬、油
一かつをぶし　二本

大廣間飾
一御寄水　黄三組
　　　　　白四組
一たて尺廻り　二把
一酢
一桐之葉　五十枚

右大廣間御飾付御用

大廣間御飾立當辰年も前段同樣飾立仕相濟候其外相替儀無之候

右は御臺所小間使頭取扱覺書也按するに嘉定祝之事諸說區々あり近來風俗畫報にも記載ありと雖信憑しかたし信甞て表御用部屋勤務之時同局に左之如き筆記ありし爰に抄出して參考となす

嘉定記

嘉定之御規式絕す行はれしは慶長年中よりと申傳へたり其の初は元龜三年味方ヶ原御陣の折から羽入八幡にて裏に十六と鑄付たる嘉定錢を拾はせ給ひしその時は甚御難戰にてあらせられしかと是を御利運の吉兆と御氣色斜ならす折ふし先祖藤五郎（後主水と改む是上より給はりし故也）藤原忠行六種の御菓子を献せしかは能折から奉りしとて御喜悅遊され從ひ奉りし人々にも賜りしと也此の比忠行は鉄砲疵にて步行かなわさりしかは上和田に在て御菓子調製し

吾家にて御菓子調し御軍用勤まりかたきにより仕官の業にはあらされ共召上り物大切に存し奉るより自身御菓子製造し奉りしより初まれり然るに三代主水忠尾か代迄は年々献上し時服給わりしを慶安元年より献するに及さる旨仰せ渡されたり

家來仙水清左衞門熊井五郎左衞門兩人さし添御陣中へ差上し也御軍勢へ給はるへしとの仰にて

御目通りにて長持のふたならひに菓子船へ或は七八人前あるひは十五六人前つゝ盛ならへたりこの例にて其後も大かたはふねへもりわけぬれは菓子船の事を嘉永渡しと云傳へたり其後年を追て御勝利にてあらせられし也かつ此御祝儀は足利將軍家の御時より行われてめてたき御事ゆへ年來御もよほしあそはされたくおほしめし折から嘉定錢六種の御菓子同時に御手に入しは御存分也とおほせられ其の後年々六月十六日定式にと　仰出されしよし聞傳へ侍り

大久保主水

大久保主水は世々御菓子の御用を達し安政の比白かね町二丁目河岸に住す其邊を主水河岸橋を主水橋と唱へたり

○玄猪御祝御式　略

酉刻　御座之間　出御御長袴　御上段　御着座御祝掛御側出席御祝有之御給仕御小姓相濟　御手配餅持出　御座之　御右之方へ置之

御附人初御側向幷奥詰之輩
奥儒者奥御醫師御數寄屋頭

右頂戴相濟直に御表　出御御先立御側御小書院御上段御塗緣附へ　御着座年寄共御様子奉伺會釋有之御祝之餅御三方兩御番頭長袴　持出備　御前へ御手被爲　附則引之　御手配之餅薄盤　兩御番頭中奥御小姓長袴撤劍　持出　御座疊之上　御右之方に置之下る年寄共御様子奉伺會釋有之

大寄合以上

右一人つゝ頂戴に出高家より兩人つゝ西條御家老迄喰切無之兩人つゝ頂戴之西條御家老にて一旦喰切小口御用人は御目付と代り一統頂戴相濟候はゝ御用人より年寄共へ會釋有之年寄共より上へ申上　入御

但兩日に頂戴有之候はゝ初日虎之間席並以上二日目右以下　御目見以上之輩頂戴　御城にては大躰一日に頂戴相濟候事

○御發駕御次第書

御休息御留守に殘候御側向被　召出相濟御直　御座之間　出御御熨斗差上御給仕御小姓相濟

年寄共

右被　召出　御意有之相濟例之席へ列居

御留守之　御勘定奉行

御側

御用人

御供番頭格之　御廣敷御用人

右被　召出　御意之（有脱カ）息オて留守中入念候様　年寄共御取合相濟小溜り年寄共會釋有之候はゝ

御城代

右被　召出相濟御直　出御御成廊下通被爲　成大溜り之間にて

御廣敷御用人初

奥詰之面々御醫師其外

御目見夫より鎖之間西御縁頬中奥向　御目見御同所中程北向に

御供之 年　寄　共

御目見夫より御對面所西御縁頬御敷居内

御留守居番頭

御同所外 御留守居物頭

御留守居番

御目見相濟御對面所へ一寸　御着座御供御都合宜候はヽ其段御先立之年寄共申上　出御被遊溜之間にて當番之

御使番

御目見夫より五友之間御廊下東之方

五友之間御廊下詰

西之方 表向御番人並居

御目見夫より松之間當番之大御番　御目見御玄關御板間御番人御同所西之方

一位様より之御使さなく

御用人

御着城御次第

御意有之直に　御發駕被遊

○御着城御次第書

大手御門通御玄關へ被爲　成御先立年寄共御玄關上之板間にて　一位樣益御機嫌能被成御座候段奥掛申上之夫より五友之間御廊下通　御對面所御下段鎖之間より御錠口通御成廊下通　御座之間　御着座御熨斗鮑御小姓相濟御留守殘之御側向被　召出相濟　御入御

中奥向御留守居番頭初御使番五友之間御廊下詰其外表向御番人等都て　御發駕之節通罷出る

重て　御座之間　出御（御熨斗目御半袴）　御上段　御着座御褥御刀掛上之

年寄共

右出席御祝儀申上之　御意有之例之席へ着座

御供之

年寄共

右被　召出　御意有之

御勘定奉行

御側

御用人

御供之

御用人

右被　召出　御意有之

右同斷

御供番頭以上之御廣敷御用人

右被　召出　御意有之　御褥御刀掛引之

一位樣より御使菊之間詰

右御下段へ出席年寄共披露之　御意是へ有之御上段へ進御口上申上　御請御直に被　仰含之退去御褥御刀掛上之御熨斗御小姓重て御使出席撤劍御上段へ進　御手自御熨斗鮑被下之直に御緣頰　御正面へ着座年寄共御取合退去御熨斗鮑引之

一位樣御用兼帶之年寄共

右出席　御上段へ進　御禮書御渡被遊退去御褥御刀掛引之年寄共御樣子奉伺會釋有之

公儀へ之御使　御城代　撤劍

右御緣頰へ出席年寄共披露之　御意是へ有之御上段へ進御使可相勤旨　御意有之御老中初へ之御口上　御直に被　仰含御下段御敷居外へ着座　御意有之年寄共御取合退去御褥御刀掛上之年寄共御樣子奉伺會釋有之

御城代　帶劍

右御緣頰へ出席年寄共御取合　御意有之又々御取合退去御成廊下通御御表へ　出御御先立御側

右　出御之節

小溜り　御附人

大溜り　御廣敷御用人初奥詰之面々奥役

右一同平伏　御對面所　出御　御上段　御着座

菊之間詰初御供番頭以上

右被　召出年寄共御取合　御意有之相濟御勝手之方より

御留守居番頭

右出席年寄共御取合　御意有之又々御取合退去過て　入御

入御後御廣敷御玄關より　湊御殿へ被爲成候事

○御歸國之節假御養子御願

一御歸國之節々未た男女不被爲在時は御發駕前に假御養子の事を幕府へ被　仰込の制也（舊事不詳れ共觀自在公舜恭公の御時然り）御名指の御方は西條公にして御同公に御嫡子あれは御嫡子を仰立らるゝを例とす依て執政より文案を奉り御側認めに被　仰付御朱印封にて御下付之を執政より閣老へ提出す天保十五年三月　顯龍公御歸國の時如左

我等未た男子も無之候間在國中如何樣之儀有之候はゝ松平左京大夫儀何分にも被　仰付候樣仕度奉存候兼て此段御心得可給候以上

三月十一日　　紀伊大納言

土井大炊頭殿
直田信濃守殿
阿部伊勢守殿
牧野備前守殿

執政覺書
紀伊殿此度國許へ被相越候處未男子無之付別紙書付被差出候間宜敷賴入被存候
右月番閣老宅へ持參閣老受取宜敷申上へく旨答あり
此時伊曾姬君御誕生なれとも未た表向御弘め無之故に男子も無之云々と被遊御男子無之時は未た一子も無之との御文案と云

御留守之儀御沙汰

○御發駕前御留守之儀御沙汰

一御歸國御參府共江紀御留守の御家老初へ留守中入念可勤旨被命の通規也文久慶應間京阪御出馬乃至征長の時も同斷たり
但し時に應し文例小異あり一例を揭く

御年寄

御留守御用之儀跡々之通相心得入念申付　御簾中樣御用幷大奧御用筋共無滯樣取計出火之節抔は別て入念夫々申付候樣にと　思召候右之趣可申聞との御事候

御簾中樣　御用人

御留守中大奥御用筋其外諸事跡々之通相心得　御簾中樣伊曾姬樣御用筋をも入念相勤出火之節抔は別て入念取計可申との御事候

老女

御留守之儀諸事跡々之通相心得可申候　御簾中樣　伊曾姬樣御用筋をも入念相勤出火之節抔は別て入念取計可申との御事候

御匙醫

御留守中　御簾中樣　伊曾姬樣御用筋彌入念相勤可申候　伊曾姬樣には御幼年之御事候得は猶更入念相勤候樣可申聞置との御事候

奧御醫師

右同文言　但平士故にその御事なし

右御家老申渡す　但天保十五年三月十八日の例にて御發駕當日なり

若山御發駕には　舜恭院樣御部屋樣等被爲在時は右御附屬の要職へ別て入念相勤御不自由不被爲在樣にと被　仰付

按に御留守の節兩家初へ無油斷可相勤旨御面諭の事御代々定法に可被立由　有德公の正德四年に被　仰出あり法令の部に詳也

○上使を以御拜領之御樽肴御披之節御式

御座之間　出御（御熨斗目 御半袴）　御上段　御着座　（御褥御刀掛上之）

公方樣より御拜領之

御肴　　御小姓

右大將樣より御拜領之

御肴　　御小姓

御盃　　御小姓

御拜領之

御酒　御間鍋　　御小姓頭取

御前被　召上御酌御下段御床前に扣于時御肴御盃撤之

公方樣より御拜領之

御肴

右御用人（帯劍）持出　御上段際南之方　御上段御塗縁之上へ置北向に着座

右大將樣より御拜領之

御肴

右御用人（帯劍）持出御同樣最初置有之御肴之北之方へ置之

右御用人御勝手へ引候はゝ年寄共一統出席東御縁頬着座　御意（拜領之品頂戴致せ）有之一人つゝ御肴頂戴之過
て南御縁頬へ順々着座

塗御盃

右御小納戸持出順々引之御下段に扣有之御酌順々盛之直に御酌人年寄共御禮申上銘々御盃持例之
席へ着座過て

御勘定奉行
御側
御用人
御廣敷御用人（御供番頭以上之）

右被　召出　御意有之年寄共御取合退去相済直に御表　出御御先立年寄共

御附人（小溜り）
御廣敷御用人初（大溜り）
奥役之輩

通御掛　御意有之葵御杉戸外　立御

大御番頭初（中之間北御縁頬）
御供番頭以上
西條御家老
高家并布衣以上之輩（中之間）

右一同　御目見　御意有之年寄共御取合相済　御對面所へ被爲成　御上段　御着座（御傳御刀掛上之）
公方様より御拜領之

御肴

右御用人帯劔持出　御上段南之方に置之　御上段際へ東向に着座

右大將樣より御拜領之

御肴

右御用人帯劔持出最初置有之御肴之東之方へ置之直に御勝手へ引

御拜領之

御酒　御間鍋

右中奥御小姓持出御下段東之方に扣于時浪之間より

菊之間詰

右一同出席南御縁頰へ着座　御意有之一人つゝ御肴頂戴之又々南御縁頰へ順々着座

塗御盃

右中奥御番持出順々引之御酌盛之御酌入年寄共御取合銘々盃を持退去

御拜領之

御酒　御間鍋

右御書院番持出御下段東之方に扣

大寄合以上

右一同出席南御頰縁へ着座　御意有之一人つゝ御肴頂戴之御酌扣有之席にて御酒頂戴之又々南御縁頰へ順々着座年寄共御取合退去

公方様より御拜領之
御　肴
右御用人持出御上段東之方に置之御上段際へ西向に着座
右大將樣より御拜領之
御　肴
右御用人持出最所置有之御肴之西之方へ置之
御拜領之
御　酒　御同銚
右御書院番持出最初出居候御酌之次へ扣
塗御盃
右御書院番持出御酌之前に置之
右兩人つゝ出席御肴御酒頂戴之相濟　入御
高家初布衣以上
御酌引御勝手より御用人兩人出
右大將樣より之御肴引右引候はゝ御挾に出居候御用人　公方樣より之御肴引之
一入御後大廣間にて御目見以上一統頂戴有之年寄共御勘定奉行御用人列居重役以上列居無之小口線
出御目付作法頂戴相濟候はゝ御目付より會釋有之年寄共初引取

南紀德川史卷之百三十四

臣 堀内信 編

典禮第十

御式御禮式 下

○宿繼奉書を以御鷹之雲雀御拜領に付御披見御頂戴御式

御座間 出御（御半袴） 御上段 御着座（御披見に付御褥は最初より不上御刀上之）

年寄共

右出席當日御祝儀申上之 御意有之例之席へ着座御刀引之

奉書

右三方に戴御用人（帯劍）上之（上包を取上之） 御披見被遊（同人引之） 過而御拜領物御床前へ被爲 入 御頂戴被遊

御歸座（御刀取之） 年寄共列座之席を少進 御意有之（宿繼奉書を以御鷹之雲雀拜領致す忝い） 御祝儀申上之復座

御勘定奉行

右一同出席當日御祝儀申上之 御意有之宿繼奉書を以雲雀御拜領に付而之 御意有之御祝儀申上之退去過而

御側

右御次第同前過而

右御次第同前過而

御用人

御供番頭以上之御廣敷御用人

右御次第同前過而　入御

御拜領之雲雀は最初より出置之　入御後御用人引之

○天保十四卯年正月廿二日湊御殿にて

東照宮御誕生日支干御相當に付御拜領之御樽肴御頂戴　奉書御披見且　御拜領之鶴庖丁御式

御座之間　出御御熨斗目御半袴　御上段　御着座奉書御披見に付御褥は最初不上御刀斗上之

年寄共

右出席　御意有之例之席へ着座御刀引之

奉書

右三方に載御用人上之　御披見被遊同人引之過而　御拜領物御頂戴被遊歸座御刀上之年寄共列座之席を少進

御拜領物に付　御意有之御祝儀申上之復座

御勘定奉行

右一同出席御拜領に付　御意有之　御祝儀申上之退去過而

御側

右御次第同前過而

御用人

右御次第同前過而一旦御帳臺へ　入御御拜領物引之重而　出御御上段御着座御袴御刀掛上之

御拜領之

鶴眞那板に載上之方御用人下之方御膳番

右御用人御膳番兩人持出御緣頰に置之御臺所人組頭罷出庖丁仕過而眞那板引之年寄共列座之席を少進御祝儀申上之退去　入御

年月不詳「布告」
一御拜領の鶴御披の節向後御供番番頭以上御用人へ被下候事右之以下へは被下無之事

久野丹波守位記頂戴其外御加増之御禮御役儀之御禮初而御目見之御式

○天保十一子年七月廿八日於　御城久野丹波守位記頂戴其外御加増之御禮御役儀之御禮初而御目見有之候御式

御座之間例　召出之分御禮相濟御袴御刀掛上之

口宣案

宣旨

位記

右御用人半袴帶劍持出備　御前へ御覽畢而御下段下扣有之時

久野丹波守長袴帶劍

右出席御用人取渡之頂戴持退（此節明御三方持御用人引之）御刀上之重而東御縁頬へ出席年寄共御取合退去過而
但御下段　御右之方二疊目下へ下り扣

御加増之御禮

箱　肴　　嶋　善之丞 半袴

右出席於御縁頬御禮御用人披露之年寄共取合退去進物引之過而
但進物御縁頬下より二疊目下に置之御小納戸役之

御役儀之御禮

箱　肴　　大澤善太夫 半袴

右出席御次第同前

勢州へ御暇

榎坂五郎左衛門 半袴

右出席御用人披露之　御意有之年寄共御取合退去過而　御對面所　出御　御上段　御着座菊之間
詰初重役共御禮相濟引續

初而　御目見

多門嫡 水野權次郎 長袴

御太刀目錄

右出席御下段御敷居內にて　御目見御奏者番披露之過而　南御縁頬へ着座　御目見之御禮年寄共
御取合　御意有之又々御取合退去過而

但御太刀目錄御下段御敷居內二疊目下に置之御太刀目錄御奏者番持出引候節も同人引之

嫡初而　御目見

水野多門 半袴

右出席御下段御敷居內にて御禮御奏者番披露之過而南御緣頰着座權次郎初而　御目見之御禮年寄共御取合　御意有之又々御取合退去過而

御役儀之御禮

箱肴

廣田杢之右衞門 半袴

右出席御下段御敷居外にて御禮御奏者番披露之過而御緣頰へ着座年寄共御取合退去進物引之

但進物御書院番役之最初浪之間より持出一旦同所へ引御禮過而同所より　出御御勝手へ引之

寺社奉行兼帶之御禮

箱肴

海野兵左衞門 半袴

右出席於御緣頰御禮新御番頭披露之年寄共御取合退去進物引之

但進物御下段御敷居外より一疊目上に置之

御役儀之御禮

箱肴

山本十郎右衞門

同

榎坂五郎左衞門 半袴

右一人つゝ出席御次第同前

御太刀目録　初而　御目見

藤二郎養子　伊達峯輔　長袴

右出席於御縁頬　御目見新御番頭披露之年寄共御取合　御意有之又々御取合退去過而

御勝手より家督之御禮

新御番頭

御太刀目録　池田（一本喜）右衛門　長袴

右出席於御縁頬　御目見新御番頭披露之年寄共御取合退去

但御太刀目録新御番頭持出引候節も同人引之

家督之御禮

御太刀目録　長野七郎　半袴

右出席御次第同前

初而　御目見

御書院番頭

御太刀目録　次右衛門総領　小笠原仁之允　長袴

御小姓組番頭

同　兵右衛門総領　三宅彌一郎　長袴

右一人つゝ出席御次第同前過而

御先手物頭
紋九郎養子 村河壽之助 初五人 半袴

御太刀目録

右御次第同前過而

御匙醫格奥御醫師
幸祝嫡孫承祖
弘田幸哉 初三人十徳

壹束一包

右出席於御縁頬 御目見新御番頭披露之 御意有而年寄共御取合退去過而葵御杉戸之外 立御

中之間
家督之御禮 拾四人
初而 御目見 拾三人

右御目見寄合以上幷右以下二百石以上且寄合以上之總領御太刀目録其余鳥目御醫師差上物前に置
家督之御禮初而 御目見之者(共)(一本ナシ)と計新御番頭披露之過而浪之間通り大廣間へ 渡御相済 入御

寺院住職入院御禮且初御目見御禮之御式

○天保十三寅年十二月十五日 御城にて大智寺住職之御禮其外入院鷲森輪番代り且初而之
御目見有之候御式

御對面所 出御御上段御着座

水野太郎作

五家以下無官
菊之間詰

右一統出席年寄共御取合　御意有而退去過而

御城代

大寄合

右御次第同前過而

大御番頭以下御供番頭以上

右御次第同前過而

初而御目見

御太刀目録　民右衛門養子　大島新八郎 長務

右出席於御縁頬　御目見新御番頭披露之年寄共御取合御意有之又々御取合退去過而

但御刀目録新御番頭持出引候節も同人引之

住職之御禮

一束一巻　大智寺

右出席御下段御敷居内にて御禮御奏者番披露之一旦御敷居外へ退座御様子奉伺御下段　御左之方

着座進物引之住職被　仰付

公儀御目見も相濟難有旨　年寄共御取合　御意有之

但進物御下段下より三疊目に置之

一進物出候節は浪之間より出一旦浪之間へ引又々浪之間より出進物御勝手へ引之

御盃　　　兩御番頭

御核　　　同　斷

御捨土器　同　斷

御間鍋　　同　斷

御前被　召上其御盃三方に載之御下段中央に御酌扣有之時大智寺出席御盃頂戴御核被下銚附有而御盃を持浪之間へ退座之時年寄共取之三方に載御酌へ渡之　御前被　召上時中座有而御禮復座御膳部撤之過而頂戴之御禮年寄共御取合退去過而

但御給仕之兩番頭半袴　此所にて御袴御刀掛上之

入院之御禮

一束一本　梶取　總持寺

右出席御下段御敷居内にて御禮御奏者番披露之入院之御禮申上難有旨年寄共御取合　御意有て退去過而

但進物下より二疊目に置之

一御奏者番幷進物出引之御書院番長袴

一束一本　鷲森輪番代り　長安寺

右献上物持參於御疊緣　御目見新御番頭披露之退去過而
但進物御書院番引之御勝手より出御勝手へ引
御勝手より初て　御目見
御太刀目錄　修理總領　長野高助　初三人長袴
右一人つゝ出席於御緣頰　御目見新御番頭披露之年寄共御取合退去過而
御太刀目錄　形右衛門總領　小嶋篤之助　初四人半袴
右御次第同前退去過而葵之御杉戶外　立御
家督之御禮　五十三人
初而　御目見　十二人
右　御目見寄合以上幷二百石以上之分御太刀目錄其余は鳥目御醫師進物前に置家督之御禮初而
御目見之者共と計新御番頭披露之畢而　入御
御料理被下
大智寺住職之御禮濟於孔雀之間一汁四菜御料理出之給仕御書院番半袴
一御料理被下之內御用人挨拶に出る
一伴僧へ一汁二菜支度被下之於松之間給仕（表）（一本アリ）坊主
一按に年頭御禮初都て御目見之節之太刀目錄は表御用部屋に兼て雛形之錺り太刀準備しありて之を貸與へ若干つゝの費用を表御用部屋へ納むるの慣例なり即ち告朔の餼羊に類するか如し又二百石已下之鳥目は御禮錢と唱へ其定左の如し剃髮

職寺院等制外の分は一束一卷或は一束一本と稱し紙一束卷物扇子の類いつれも規式的のものにて武家の古例如此事と見へたり

一二百石已下之輩御禮錢向後左之通相極候事

知行 百石
御切米四十石 以上御禮錢五百文

右已下　同　三百文

右文化五辰二月八日御用人より達

高野坊主幷勢州御暇御目見地士御目見御法事掛被召出之御式

○天保十四卯年正月廿八日　湊御殿にて高野坊主幷勢州御暇御目付地士山中善太夫　御目見

御法事掛被　召出之節御式

御小書院重役御禮過而

年頭に付參上

高野山大德院代　照明院

同　三十六院總代　金剛院

右一人つゝ出席於御疊縁御禮新御番頭披露之退去過而

御勝手より勢州へ御暇

御目付　小笠原庄太夫

右出席於御縁頬　御目見新御番頭披露之　御意有而年寄共御取合退去過而雁之間　立御中奥向御

禮相濟
御納戸構
參上京都住　大倉好齋
右御目見新御番頭披露之過而御書院へ　渡御同所御禮相濟　入御之節再雁之間　立御
大廊下松御杉戸外
年頭に付參上
泉州地士　山中善太夫
右平伏新御番頭披露之畢而　入御之節　御座之間御上段　御着座
渡邊主水
右御下段御敷居內へ出席今度　文恭院樣御法事に付和歌へ相詰候旨年寄共言上之　御意有て御取合無之
退去過而
土生廣右衞門
伊達藤二郎
富永平十郎
右一同御緣頰へ出席今度　文恭院樣御法事に付和歌へ相詰候旨年寄共言上之　御意有而年寄共御取合　入御

御給仕向心得

信按に御給仕役に兩番頭と中奥御小姓と御書院番之別あり此書何役の御給仕なるや不判明と雖も文中當時此御給仕兩御番頭に相成不申との語あり御書院番は　御前近之御給仕をなさゝれは全く中奥御小姓之御給仕心得書なるへし且年號を不記れ共末文に當五月十五日　房丸樣云々とあり房丸樣（修理大夫樣御六男）御前髮取りは文化十三子年五月十五日なれは同年之筆記たる事知るへし下け紙及ひ朱書は追記したるもの也

御給仕之節

一御召御紋付麻上下着用不苦尤重御紋之儀も一方時服御紋に候得は重御紋にても不苦候との御事

重き御給仕之節も同樣之事

一下着淺黄無垢に不拘格別不目立色合無垢幷嶋八丈嶋縮緬等着用不苦事尤淺黄着用も勝手次第之事

重き御給仕之節も同樣之事

一尾水樣爲御用談平日夏分被爲　入候節御給仕之者紋付單着用致候ても不苦事尤帷子着用之者と打交候ても不苦事

一夏分　上使重き御給仕にても足袋相用候筈之事

一上使幷重き御給仕にても暑中又は殘暑强節は縮帷子着用不苦事（縮着用之節は半袖襦袢着之筈）

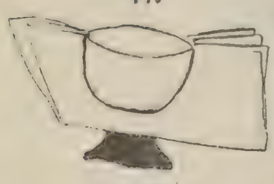
一しゝら熨斗目御給仕之節着用不相成事

本文之通り極り有之候處文化十一年戌正月廿九日に左之通り極る奉　七澤半四郎」大絨熨斗目は御登城御供御先番上使御給仕等には不相成其余は不苦事

小絨熨斗目御召御紋御小袖同樣にて御登城御供御給仕等にても相用不苦候委細は被　仰出帳記有之事

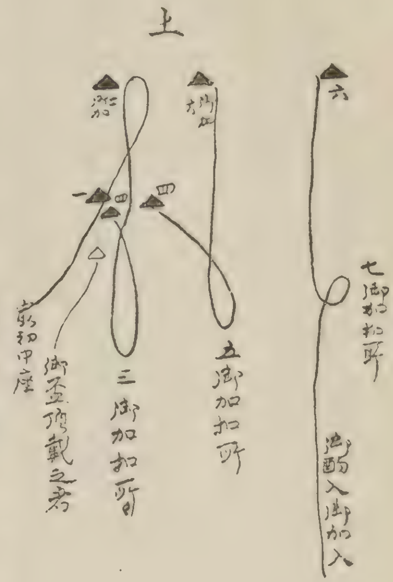
一定紋替紋上下小袖帷子等へ交せ着用不苦事
御給仕之節腰之者
一柄糸色黒白茶茶類不苦事
一柄巻掛緑頭物共不苦事
一鮫白　塗鮫又は替り品は不相成筈
一鞘臘色段布之類共不苦各黒也　但栗色うるみ等不苦候事
一下緒黒幷茶類不苦事
一小さ刀鐺舟底幷に裏かわら鯉口等へ好み有之筋は不相成筈栗形鐺等も同様
但脇差も同様之事
一御給仕之節都て早留め掛相勤候筈之事
一丸額御小姓は御給仕不相勤との品元文四未十二月相極有之候處右は前髪有之候得は角入候後迄も
上使幷御老中御招請等其外重立候御給仕は不相勤筈被　仰出候文化九申年七月極
御濃茶上候節御ふくさの向猶又千宗左了々齋へ承り合候處如圖にて相違無之旨申聞候事

御客附



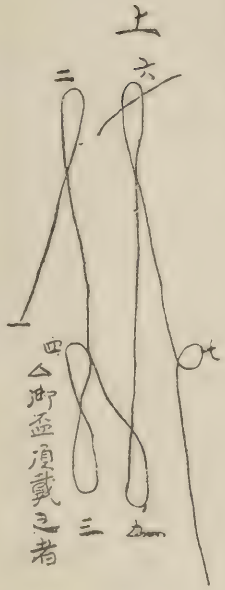
御給仕之者此方前にいたし

御祝儀に付結ふ加之圖



圖之一二附を以合せ見るへし御加扣所は三度共同所なれ共圖に表はし難き故別所に記者也

同合圖

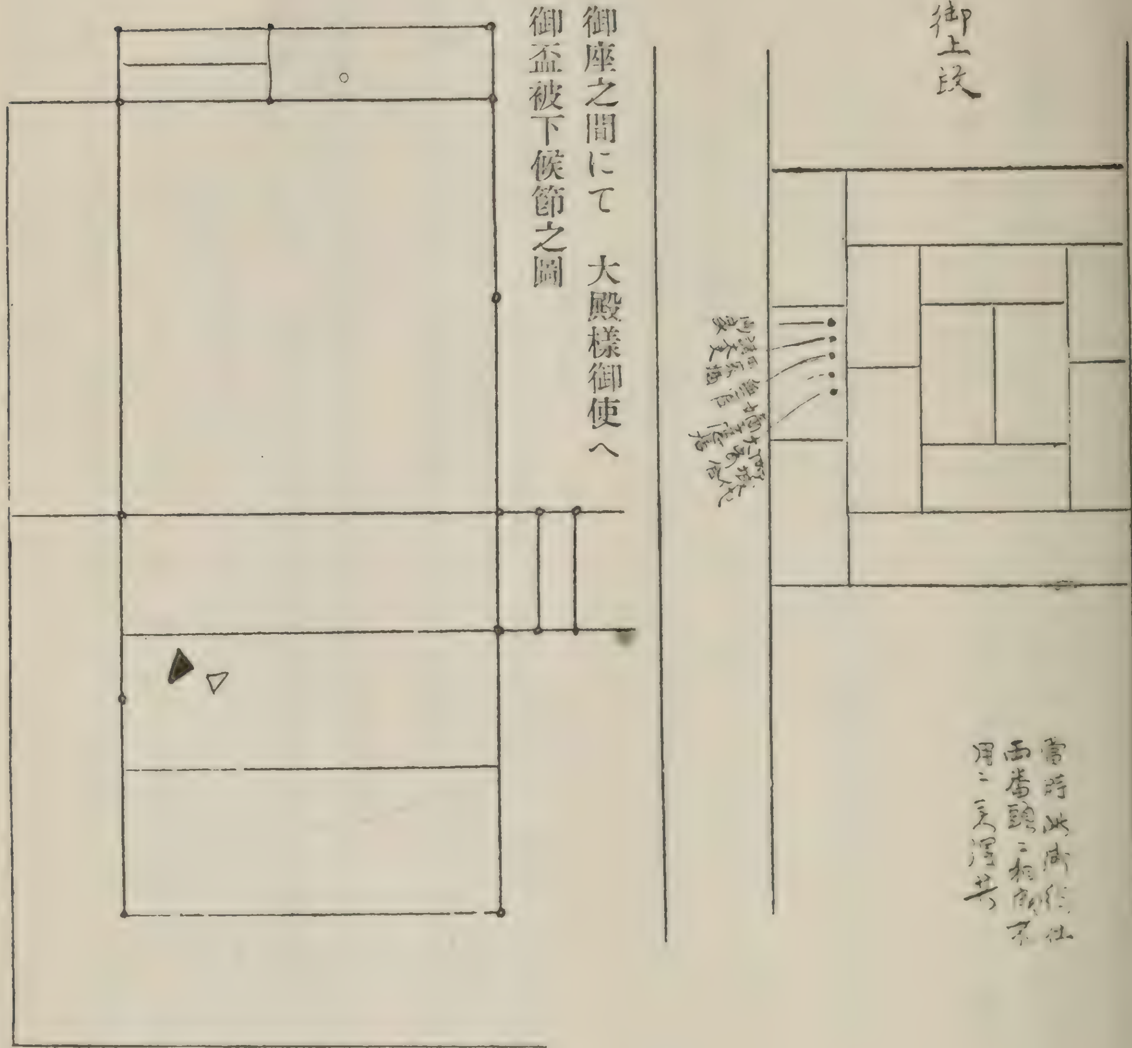


前圖を合せつゝけたる所也

天明年中關口十兵衛差圖之趣也

御對面所御年寄へ御盃被下之圖

御座之間にて　大殿様御使へ
御盃被下候節之圖



▲御酌扣所
△御使御年寄御盃
頂戴之席

一大惠院様御代年頭御盃事等之節　御嫡子様へは御吸物御三方御次男様よりは足打にて有之候由

右本文御振合至極御相當に被思召候付右御儀不紛様相心得可申上之御事

一尾水様御招待御連枝様方にも御一座之節は都て御三方相用御連枝様方計御招待之節は御膳部足打相用候筈　御前へも御同様之事

一松平加賀守殿宰相任官に不拘御茶臺天目相用候様嫡筑前守殿へも同様

但松平越前守殿御一座之節は筑前守殿へも平茶碗にて候筈

下ケ紙

松平大隅守宰相任官後初て御座之間御逢之節寛政七卯三月十九日享和四子正月九日加賀守入来御逢之節之通薄茶は臺天目服紗無く御菓子は三方にて出之尤御前へは臺天目服紗敷き差上之

一大隅守刀加賀越前同様御間内へ入れ可申哉申見候處今日は御人拂御用も有之　御劔持引候事ゆへ最初より御座之間御次に御小納戸持扣居候事御用も無之節は倚可申極事

天保十己亥年正月廿一日

前文之通り今日御劔持引候へ共外大名御用之通御襖外へ御刀掛へ上置候方可然哉

一松平越前守殿御初諸大名衆御膳具足打相用候筈　御前へも御同様足打之筈

但御茶碗御客へ平茶碗　御前へ臺天目

一尾水様被爲入候節御膳并御茶屋にて出候御料理向珍敷御仕立に仕上候様尤　御前御不斷御膳之節も同様可致と之御事

一尾水様之御連枝様方御出之節向後　御前へも御茶差上候様被　仰出候尤御客へ平茶碗　御前へ臺天目にて差上候筈

但右は先達て御連枝樣へは御茶片上に相成有之候處本文之通猶又此度御改被遊候間不紛樣にと
之御事

御煎茶臺之事

加賀守殿初平大名衆にても差別無之當時　御主客共御同樣之事御茶師衆へ煎茶被下候節も通ひ盆へのせ出し候事

下ケ紙

一尾水樣被爲入候節二汁菜已下御料理共節は御薄盤之御二の膳を御本に致差上候樣被　仰出有之事

一汁三菜之儀末に被　仰出有之事

一都て御客之節御內輪共御熨斗出候節御熨斗三方白木之筈御使御手熨斗被下候節之御三方も右同樣
白木之筈

但御祝付之御熨斗は是迄之通

一御客之節都て御料理出候節御鉢出候はゝ幾度にても御鉢出候はゝ直に御本汁上替候筈尤御菜數は
右御汁替り候跡にて上替候筈

一御汁盛替　御前へ參御汁之蓋きり　御前に扣居御椀御出し被遊候はゝ御請取申上替候筈

一都て御客之節　御客樣御一座之內御鉢御斷之御方ゝ又御飯御替被遊候御方ゝ御座候節は外樣へは
御汁替出し不申御飯御替り被遊候御方樣へ計御汁替上候筈尤御鉢も御斷有之候迄出し候樣にとの
御事

一御膳中御茶御好み被遊候はゝ御煎し茶御茶臺にてさし上候筈御取り被遊御椀へ御明け被遊候內
御前に扣居御出し被遊候と御請取申下り候樣又々見合如前御茶差上候樣右御手當等致置候筈御煎

茶御好み被遊候はゝ直に差上候樣御吸物等相濟候上例之通御膳付之御湯はいつれ差上候筈

但右之通御膳中御茶被召上候故御湯上候儀共節疑心可有之儀に候得共是非御湯は上り候筈也

一御蕎麥切類御客之節御出し被遊候節御蕎麥切之御汁入候御猪口最前差上候節は御膳へふせ上候筈

御汁跡より出差上候筈尤御汁次御銘々へ出る右御汁次持出候者　御三方樣に候得者三人にて始終

東御入側に出居候て見計上候筈

一御蕎麥切等御盛替御鉢へ入御銘々御盛替上候樣尤上け振御鉢之通御鉢蓋なし尤御鉢へ少し入置候

樣

一尾水樣共外御客之節都て御多葉粉盆御火入上替候節御多葉粉盆共上替候筈

右二ヶ條　尾張樣外山御屋敷へ被爲入候て歸御後被　仰出候事

一尾水樣御料理出候節御替り物上候節御三方之筈

一大名衆へ御料理出候節御替り物上候も足打にて出候筈

一尾水樣御膳御和らはにはら〳〵と出來候樣にとの御事

一尾水樣被爲入候節御濃茶菓子何にても(御)形小振りに仕立御菓子三つ付候樣被　仰付候事

但右は　源明樣　源文樣之節之儀當時は別に被　仰出無之事

一御吸物御肴等御替り被　仰出候はゝ三献相濟候共又々御銚子出し候樣にとの御事

但御献數を合せ候儀御給仕人之心得可有之事

一尾水樣被爲入候節御庭持廻り御菓子御三方にて持廻り御茶屋にては御三方にて差上御腰掛にては

御平膳にてさし上候樣にと之御事右に付御平膳も御用意持廻り候筈之事

一年頭御連枝樣方御盃事元日に御差支にて御盃事不被遊候はゝ向後御流に相成餘日分て御盃事無之筈

一御臺樣より御使御廣敷御用人衆へ御出會之節御口上被申述御敷居外へ被退候節御會釋被遊候ても御敷居内へ進み不被申候節は其儘御熨斗御茶出し候樣兩番頭衆にても　上使之節右等之儀有之候はゝ右同樣之事

但前件御會釋御挨拶被遊候節御請被　仰上候儀と心得違上座へ進み被申候ては御熨斗出振右等之節は御熨斗御正面へ出候に不及　御身通りへ出置少し退き直に御熨斗撤し候樣兼て相心得居其節取合右之通取計可申事

一御盃御通り頂戴有之候節御酌之者御代り土器懷中致居若御流頂戴不相濟内に心得違御土器持下り候得は早速右懷中より出候樣尤紙に不包懷中致候事右は則此度　御城にて右之振有之候由に　御意之事

一御通り頂戴之節末座にて頂戴之者右土器持退座致候處向後其儘置退き候樣御酌之者手に戴引候樣被　仰出候右　公儀にても全躰末座にて頂戴之者右土器持退座致候筈之由に有之候得共紛候ては不宜候由に付其儘置下り候由右に付御酌手に戴引之候と之御沙汰之事

一年頭御連枝樣方被爲入御盃事之節是迄御したみに御下り被遊候御場所迄御酌之者御三方を持參御土器御請取申候處向後は陵王御杉戸外に御年寄衆列座之二番目之御年寄衆着座之邊へ御土器置右

之所迄御下り被遊御したみ被遊候右御土器御年寄衆へ御渡被遊御年寄衆手に被持御酌之者へ被相
渡候筈御酌之者は其儘御上段に居候樣相極候事
一御酌之者御長柄持樣之儀向後相改候書印かたし口傳
一御嶋臺持樣是又難圖し口傳
一大名衆へ御逢之節官位に寄御熨斗御見通しへも出候て二之間御敷居外迄披き直に御熨斗撤し候得
共向後は右相止め官位之高下に不拘御正面御塗緣際へ出し御逢相濟候上にて撤す
但御出席無之已前御塗緣際へ御熨斗出し置御逢相濟御退座之上御熨斗撤候儀猶御近例に候事
一大名衆御庭拜見之節若御茶屋にても　御前御出會被遊御相伴被遊候はゝ御双方共御給仕御小姓よ
り相勤候筈（御相伴無之候はゝ御小納戸給仕之筈）
一御盃事等之御膳具御次へ寄候節向後御捨土器は御作立へ乘せ不申御臺之上へ置候樣將又被召上候
御土器は是迄之通洗ひ御捨土器は洗ひ不申樣可致旨被　仰出有之事
一都て御客之節御燒物代り大板かまほこ等上候節は庖丁目入上候樣被　仰出有之事
一尾水樣御初都て御客之節二汁五菜御料理出候節は御菜數も御少く有之候間御燒物鯛等にてはきつ
こ過候て御箸付も無之に付向後二汁五菜之節は御燒物代り大板かまほこ割海老之類或は脊切鱸な
と被召上易き御品上候樣被　仰出有之事
但御慶事幷御歸國前御暇乞且又御參府後御初て之節は御燒物鯛之筈
一都て御客之節御茶屋にて御菓子御吸物出候節是迄御吸物と引替御菓子を上候得共向後は引替に致

不申御吸物を下け候て見合て御菓子出候樣尤御客御急き等之節は引替可然と之御事
　但右本行之通に付其節々之見計も可有之事先は引替に無之事
一御門主樣尾水樣御招請御老中御招請之節是迄御湯御かな色にて上候處向後御湯當にて出候樣被
仰出有之事
　但御水之儀は御用意に不及事
一御門主樣尾水樣急度御招請にて御料理被進候節右御膳に付御盃事被遊候節は奈良臺にて御盃事被
遊候等被　仰出有之事
　但御盃事計之節は是迄之通御嶋臺にて宜候と之御事
一尾水樣爲御用談被爲　入候節御菓子御手輕き方相用候樣色數三色に致御蒸菓子是迄之通御菓子之
内にて打物御用談にかきり上不申候樣尤外御客等之節は是迄之通と心得候樣乍併御菓子は三品に
致候樣五品付に致候儀は先不用致候樣あるへい之儀は全　尾水樣爲御用談之節計上不申等
右之通には候得共　尾水樣には御慶事等之節も右あるへいは上不申方可然と之御事外御客之節は
いつにても大あるへい上候筈
　但御菓子五品付候事急度無用に致候樣との被　仰出には無御座候得共先御省略之　思召にて
被　仰出候御樣子に候事右之通に候付御品に寄又は御客之御樣子御菓子之品にも寄五品付に
も伺可然事松平越前守殿之節も奉伺候處三色にて宜候旨被　仰出候事
越前守殿には打物御好み都て御菓子能御上り被成候付此節五品に相伺候事

一御拜領之鶴庖丁被　仰付候節御披御給仕之者御召服同樣熨斗目着之
一是迄左近將監樣左京大夫樣宮内大輔樣御盃事有之御返盃之節御したみに御下り被成候と其御土器御年寄へ御渡し被成御年寄御酌之者へ被相渡候得共向後御酌之者之前に有之候御三方へ御土器を載せ御三方を　御前之御方へ向け直し御酌之者へ相渡され候筈御年寄衆にも承知之筈之事
一向後左近將監樣左京太夫樣宮内大輔樣御盃事之節御熨斗出之畢て最初御土器三方　御前之御右之方へ差上夫より御吸物三方御右之方へさし上御捨土器は御盃土器三方と御吸物三方之間眞中へ御捨土器上候樣にとの御事尤方々樣には御吸物之外何も御まへへ居候品無之に付御まへへ眞直に御吸物膳居候筈

御肴出候節之竝樣

□御肴
□御吸物
上　○御捨土器
□御土器
御酌右なり

□御吸物
上　○御捨土器
□御土器
御酌右なり

御土器一番にさし上候筈夫より御吸物夫ゟ御捨土器右之順に出候樣　公邊之御振合に候事文化十一戌正月元日猶又奉伺候處彌其通にて宜候と之御事

二番に備御捨土器備候程間を明け
上
□ー御肴
□ー御引渡
○御捨土器　四番に備ふ
□御土器　一番先へ備最初此所へ上る

文化十三年子五月七日房丸樣御元服御前髮執之御次第之御稽古之節伺定

一大名衆へ御逢之節御盛合御菓子御出し被遊候節は最初御薄茶御多葉粉盆出夫より御菓子跡へは御煎し茶を出候様向後右之通可致旨被　仰出有之事

一日門様被爲入候節僧正執當へも御煎茶是迄出候處伺之上已來は御煎茶出し不申候様相極り万一御煎茶出し候儀も有之候はゝ其節は臺にて出候様可致旨被　仰出有之事

本文之儀　尾張様にても御煎し茶は日門様へ計出候由僧正執當へは御煎茶出不申候由　水戸様にては僧正へ薄茶腰高にて執當へは薄臺にて出候由御煎し茶は御出し無之由申參候若煎し茶好にても有之出候節は右臺に差別無之由に申參候事右之通に付此御方にても僧正執當へ御煎し茶は相止候事

一公家衆入來之節是迄休息所へ御用意御菓子有之候處右は相止み候間向後は大奥より右御菓子銀之御鉢へ御附合させ御出し可被遊候間頭取々計にて詰所へ入置御茶も御膳所より爲出置休息所へ被立寄候様子に候はゝ直に檜之間へ運候様被　仰出有之事

一水戸様此御方へ被爲入候節御案内被申上候御年寄御書院二之間にて被披　御前御下段迄御出向被遊候得共　水戸様へ此御方より被爲入節多くは御下段へ御着座被遊御案内之御家老御下段御敷居際へ殘り此節直に御茶御多葉粉盆出候て追付　水戸様御出迎被遊候御振合に付此御方にても右之御振合にも可被遊旨御年寄へも心得申聞置候様尤御客様御刀持扣居候様其外御出迎に參候者御勝手へ退き居候等（御客様御刀持候御小姓頭取は二之間御椽側に御刀持扣居候筈）

但本文之通に付都て　水戸様被爲入候節御書院へ御茶御多葉粉盆相廻置候事例御多葉粉盆御

三家樣筋也

一御連枝樣方へ御對面所にて御逢之節御菓子御出し被遊候得共已後一ヽ通之節は御菓子御出し不被遊御茶御多葉粉盆計御出し被遊御慶事或は五節句等御熨斗出置之事

但御菓子御出し不被遊候御儀は　水戸樣被　仰合

御連枝樣之外御客之節御出し來り之筋へは是迄之通御菓子御出し可被遊候筈　尾水樣御連枝樣御菓子之儀は末に又々被仰出有之付見合可申事

一大納言樣御有卦入御當日殿中平服兩御所樣御平服御小姓衆御小納戸衆一統平服

公方樣西丸へ被爲成候も矢張御平服御祝振之儀は御改り被遊候御事には無之候得共前段御書附に認加へ有之候間記置候樣被　仰出別帳に留有之候得共何そ申合にも可相成哉と認加候事

西丸御祝振

御上り料　御吸物　御小振舞　御肴二種　御酒　御のし鮑

右之通

一尾水樣御用談として被爲入候節帷子着用之時節に候共薄暑秋冷之節は單着用致候ても不苦候尤勝手次第之事に付單帷子打交り有之候ても不苦候旨被　仰出有之事

一御參府後初て御登城之節御身祝御熨斗さし上候筈之事

一御客之節都て御煎し茶御加減不致候てさし上候筈之事

右は是迄　上御茶へ水をさし上候儀に付て之事也

一御用談計之節御對面所にて御着座無之に付御對面所御給仕向無之　御茶御多葉粉盆御用意に不及事

一公儀にて年中之御祝御規式等之内　公方様大納言様御座之間にて御盃事之節は御給仕之人撤𨥉にて被相勤候事に候右は向後此御方にても右に御准し被遊候御儀も可被爲　在候間得と記置候樣被仰出候事

一公儀玄猪御祝之御給仕被相勤候兩番頭衆撤𨥉にて有之候右は重き御品持出候事に付此御方にても向後御改被遊撤𨥉之筈

右御小姓にて取扱候儀には無之候得共又見合等にも可相成儀も可有之哉と認加候

御用談計にて　尾水樣被爲　入候節御膳付之御薄茶は御出し不被遊候付不紛樣にとの御事

一御客之節最初御膳所より御附立致候てさし上候御飯は隨分輕く付上候樣にとの御事

一都て御客之節御飯御替り無之内は御汁召上り有之候共御飯御替り有之上にて御汁上替候樣幾度にても御飯御替被遊候はゝ御汁之御上りに無構其度々御汁替出し候筈に被　仰出有之事

一御門主樣爲御年禮此御方へ被爲入於御書院御例之通御盃事被爲　在候節最初御引渡出御御盃事之節御酌出中座致候ても御箸付無之事に付此儀相心得居御酌可相勤事

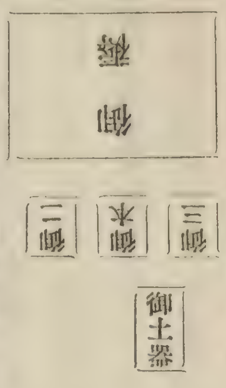
一御薄盤と御三方之儀別之御品と心得さる樣御本御二御三迄を御薄盤と唱候事に候書面に認候節は御膳部御薄盤と認候事

但四つ目五つ目は大三方御用ひに相成候事御通ひも大三方相用候事

一尾水樣御用談等にて御料理一汁三菜之節は御本膳に御薄盤之三を相用御燒物又は御燒物代等之御品且御吸物御盃御肴幷御通ひに至迄大三方相用候樣御二之汁有之節は御本膳に御薄盤之御二を相

用御二之膳に御薄鑑之御三を相用其余は前段同樣之事

一御高盛等御祝之節御土器置樣左之通向後備候樣被　仰出有之事



如圖御本御二之側へ
御土器上る

右之外御吸物御肴計御祝等之節は是迄之通御盃は御右へ上候筈之事

但御祝向之外にも右御振合之御膳上候節は前段之趣に相心得可申事御四つ目御五つ目なそ上候
御膳に候得は差別可有之事

一御客來之節御盃事御酌御加共向後頭取より相勤候樣尤平御小姓も勤馴候者より打交り相勤候ても
宜候との御事

但御内輪之御盃事（一本ナシ）（輕き御盃事）等は勿論平より御酌御加相勤宜候との御事御加は是迄若輩之者
相勤候心得に候得共向後御酌同樣勤馴候者より相勤可然との御事

公邊之御酌御加尾州樣にても御同樣御小姓頭取被　相勤候との御事

一都て御給仕之者二行に出候者は下りも二行に下り候樣次に出候者一行に候はゝ二行に下り候て中
を通り出候樣次に出候者二行に出候御品に候はゝ前に出候者一行に下り二行に出候中を下り候樣
何分下り切候上にて次之者出候ては手間取候に付何方之御座敷にても二之間にて行違候程に出候
樣被　仰出候

一御引渡へ御箸付哉否之儀　公儀御振合御膳番より承糺し候處都て當時は奥向表向共御引渡へ御箸は附不申候由に付御手前にても右御同樣に都て御箸付不申樣被　仰出有之事

一歳暮に付　御登城前　左近將監樣左京大夫樣へ御對顏之節御熨斗已後は出し候樣相極候事

一水戸樣中將樣御同道にて年頭其外御參府御歡等にて被爲入都て御盃事之節御吸物之御脇御右之方へ御土器三方差上候處向後は御吸物之御向へ差上候樣勿論　御前へも御同樣に可差上候旨被　仰出候御客御二方にも不限御一方にても御土器三方は御吸物之御向へ差上候樣にとの御事

一尾水樣御連枝樣方へ於御對面所御對顏之節是迄御菓子御出し無之樣に被　仰出有之候處右は紛候に付向後は先御菓子御出し被遊候儀と心得罷居候樣被　仰出有之事

但御手前御連枝樣にて他家へ御養子に御越之御方は尤御菓子不出御手前御連枝樣方ゟ同樣に相心得可申事

一尾水樣御初御客之節御銚子御獻數合せ候と御給仕之者御樣子を伺御意有之候上御銚子入候處已後御獻數合候はゝ御意を相待に不及御銚子入候樣に被　仰出有之候事

一御嫡子樣御盃事之節　御嫡子樣へは御挾肴被進候得共御嫡子樣よりは御挾肴御上け不被遊事に候處　公邊御振合に被准候向後　御嫡子樣よりも御挾肴御上け被遊候筈

但御式に寄御挾肴有無之御差別は勿論是迄之通に候事

一尾水樣御用談御慶事等にても被爲入御料理出候節御飯御替之御鉢出候て宜時分小口に居候頭取へ御前御相圖被遊候付右御相圖奉伺御鉢出候樣若夫にて御鉢出樣遲り候はゝ御箸を御膳へ被爲置候

間兎角せわ敷相成不申候樣向後相心得可申旨被　仰出候尤御鉢出御汁替り外御菜數二品程も御替り上候上にて又之御鉢上候位にも可相成との御事

但本文之通故いつれ御相圖有之候上御鉢は出候筈被仰出は先　尾水樣之節に相成有之候得共此儀は都て御客之節共同樣にて可然猶其時々之時宜に可隨事

一修理大夫樣左京大夫樣御盃事幷御年寄衆初御盃被下候節御吸物御捨土器御土器据樣之儀前に有之候得共猶又御沙汰も有之候付猶其節々前之株可見合事

一尾水樣被爲入御料理出候節御獻立相伺候節是迄何々御替り附に可仕哉との附紙にて奉伺候處向後は其儀に不及御汁之外は何に不寄都て御一と替り御用意致候樣

但御先樣より御到來之御品御料理に相成被進候御品は幾御替りも被遊候樣に御用意致候樣にとの御事

右之通に候間二汁五菜幷一汁三菜之節共同樣之筈

二汁五菜一汁三菜にても本行之通候間御菜數多き節は猶更度々御替仕候には不及事

一水野藤四郎殿初て之　御目見御盃被下候節には御土器三方之綴目を下之方へ向置酌は上之方へ向扣居時藤四郎出席御土器を取候頃御酌之者御三方之方へ向一獻盛之又々上之方へ向扣居御肴幷御腰之物被下相濟御次へ退去御土器を御用人請取手にて持出御三方に持出御三方に載綴目を上之方へ向退去御酌之者御三方持夫よりは御次第書之通

一御土器三方引候節御捨土器を御土器三方へ載候て引之

・□御肴　◯藤四郎へ御盃
丁　◯御拾土器　三疊目　□被下候處此所
御土器三方置
□御土器　△御酌扣所

一御盃被下候節返盃有之節は御酌被下候御土器御三方前之圖（圖欠）朱丸之所に出候等返盃無之向は同斷黑印之所に御酌扣候等

一大名衆其外何れにても御菓子出候節頂戴被致度段被申候はゝ御干菓子御蒸菓子御附合之節には御蒸菓子を美濃紙へ包み葉蘭にても笹之葉にても間たへ入御干菓子一所に奉書へ包水引を掛遣候樣尤御干菓子は美濃紙に包候には不及直に奉書紙へならへ候て包候樣にとの御事

文化五辰歲五月五日

一公家衆入來之節近頃御給仕三人にて御給仕相勤候處當年より六人にて御給仕致候樣伺之上相極候事

一尾張樣鰻御嫌ひ被遊候間被爲入候ても差上不申樣御膳番へ申聞置候鰹も餘り御好み不被遊候との御沙汰に候事

一左衞門督樣御登城初て御對顏且御元服被爲濟候爲御吹聽今日　水戶樣左衞門督樣此御方へ被爲入於御對面所御對顏御熨斗出御銘々御銚子にて御酒御吸物等被進候儀日記留之通に候夫に付向後も右之御振合にて御當人樣爲御吹聽外御兩家樣へ被爲入候節は御盃事不被遊右は御幼年に被爲在候御儀に付御互に右之通被遊候等に被　仰合候然共其御家へ外御兩家樣より爲御歡被爲入候得は其

御家にて御盃事被遊候等今日水戸樣へ被　仰合御極被遊候旨被　仰出候事

但尾州樣には前々より右御同樣之御例に被爲在候哉之旨　水戸樣御咄し被遊候由尤此度　水戸樣左衞門督樣尾州樣へ被爲入候節も本文之通之御振合にて御盃事は不被遊候よし右に付猶又本文之趣　尾州樣へも追て御直に可被　仰合との御事に被爲在候處此度御直書を以被　仰合候との御事

一尾張樣御少食に被爲在候間御飯を隨分御輕く上候樣にとの御事

一修理大夫樣左京大夫樣御初且又御盃被下候節共　御前御納盃之節も御加いたし御銚子有之候樣尤御長柄御加之節は都合御献を半に合せ不申候て宜く候旨被　仰出候尤　尾水樣等被爲入御盃事之節も同樣之等

但御盃被下候儀は尤返盃有之向之事也尾水樣には餘り七種前御出も無之候儀には候得共若有之候はゝ右之通相心得可申候樣にとの御事

一御盃被下候節御長柄之口へ御土器載せ候節は御酌之者御盃被下候席へ參り　御前之方に向き扣不申最初より被下候方へ向き扣候樣被　仰出候事

一御拜領鶴之庖丁被　仰付御引續きに御披き御頂戴有之候節には御召服御服紗御半袴御給仕幷御側廻り共服紗半袴之事

別日に御披き一統へ頂戴被　仰付候節には頂戴之者熨斗目半袴之廉に候間　上之御召服も御熨斗目御半袴に付御給仕御側廻り等ものしめ半袴着用候樣にとの御事

一尾水樣被爲入候て御茶事有之節是迄御詰に出候者御通ひ之者御客樣御召服に准し御平服之節には矢張平服にて有之候處昨日　水戸樣へ被爲成候處御茶事有之其節御通ひ之者麻上下にて候間御詰に罷出候伊豫守殿作左衞門麻上下に着替申候事右に付　尾水樣被爲入若御茶事有之候節には　御客樣御平服にても御詰之者御給仕人等はいつれにも麻上下着用致候樣にとの御事

一御飯已後御和らかに御仕立差上候樣尤　尾水樣被爲入候節も御同樣に御仕立候樣との御事

一尾張樣御用談計に被爲入候節にても一旦御座之間へ御着座被遊御薄茶御多葉粉盆上候うへ御休息へ御通り御用談被爲在候儀に有之候處猶又被　仰出已來水戸樣被爲入候節も右同樣に相心得候樣にとの御事

但近頃迄　水戸樣には御座之間御着座は無之候へ共當時之御座之間御着座無之候ては不宜候と之御事

一松平陸奥守殿入來之節　御座之間にて御逢之節御熨斗置附之儀是迄大名衆御逢之節は御下段にて御逢之節は御下段御塗緣際へ出置候得共此度相極り御上段御塗緣際へ出置候筈被　仰出候尤御小書院にても御同樣之筈

一御身祝御熨斗之儀向後左之通御極被遊候間御膳番へも申合其節々さし上候樣被　仰出候尤御用部屋御次第書へは書加へ不申筈

一公儀御慶事にて御登城之節　　一御手前御慶事にて御登城之節

一年頭御登城之節　　一八朔御登城之節

一御參府御禮御登城之節　　　　一御暇御登城之節

右之通御休息にて差上候筈

子六月

一當五月十五日　房丸樣御前髮執御次第有之候節御盃事御膳部備へ振りに付左之通被　仰出御着座御正面へ御土器三方を差上御引渡出候節御土器之御三方を御右へ寄御引渡を御正面へ差上御肴之御三方を御左へ備御したみ土器を御盃と御引渡之間へ差上可申旨被　仰出則先達て御次第書之内を此度右之通被　仰出候趣に直置候樣との御事

但右御膳具備へ振之儀は近頃　公邊御盃御頂戴被爲在候節篤と御伺被遊候との御事

全く奉備候所之略圖

□御肴
□御引渡
丁　○——此所へ御したみ土器差上ろ
□御土器

一御緣組且御聟養子と申樣成御手前御慶事之節爲御歡　尾水樣此御方へ被爲入候節　尾水樣には花色御帷子尤御供之御家老も花色帷子にて有之候得共御手前之御慶事故　御前御召服花色帷子に無之只御染帷子にて尤殿中一統に染帷子之筈御席へ罷出候者且御給仕之御小姓も花色帷子に不及との御事且又　尾水樣にて右之振之御儀も被爲在候はゝ矢張御同樣之筈之事

一式部卿樣御引移被爲在候はゝ　御同所樣より被下候御手熨斗は御のしを結ひさし上候樣にとの御事

一向後京都より之御使を初都て他へ向被下候御手熨斗御老中　上使之節是迄出候筋之御熨斗を御用立候樣尤御のし之末之所は切り候筈

但御內輪之節は是迄之通に候事

一是迄御老中　上使之節御熨斗格別に能筋に有之候處已後は御熨斗に差別無之樣可致と之御事

一尾水樣被爲入御玄關被　仰置候節若雨天にて御敷臺にて被仰置候節抔殊に寄御書院へ御通被成御口上可被　仰述候儀も可有之右樣之節は是迄御小姓御茶御多葉粉等上候樣御手當に相廻り居候且又御手水役御小納戶相廻り居候處向後は右等之節御給仕は兩番頭御手水は中奥より相勤候樣御出會不被爲在候節は御小姓御小納戶は相勤不申筈に被　仰出候

下ケ紙

文化十四丑の正月十三日

尾張樣御年禮被爲入被　仰置候節御書院へ已前之通御小姓御小納戶罷出御刀御茶御多葉粉盆御小姓より役之御手水は御小納戶より役候樣被　仰出先今日は此通りに相成候

水戶樣にて御側向出候に付定て尾張樣にても御同樣被思召候仍て今日又々ケ樣に相成る

御禮式規則

諸御禮式諸　御目見式に關する成規細則時々之發令又は改正之條項等不尠是等皆表用局壁張帳新規帳に記載（兩帳共諸規則記載之簿冊也）御目付方にも記帳ありし處いつれも散逸せり左に揭くるものは僅に殘簡私策中に遺存尤も不完全を極むと雖も發見に隨ひ採錄す此他遺漏之分考査之便なし

午十月被　仰出（年號缺）

一家督之御禮寄合以下にても二百石以上太刀目錄にて御禮二百石以下御禮錢一貫文

五百石以上　公儀三千石以上に准

二百石以上　同　五百石以上に准

一諸大夫被　仰付候面々は　公儀へ年頭御禮御流をも頂戴可仕旨被　仰出候向後官位後江戶より罷歸候面々年頭見合發足致し若山に罷在候面々御供詰御使に不構出府致候筈

寬政十一未年十一月八日被　仰出

一江紀共御供番頭已上二日置に被　召出候へ共向後謁御年寄に相成候

一御緣側詰御年寄御城代は是迄之通二日置に被　召出候事

一初て御目見布衣已上之總領のしめ長袴頭役已上之總領幷平士之總領のしめ半袴尤頭役已上總領太刀目錄を以御目見平士にても二百石已上之總領は太刀目錄を以御目見其外鳥目にて御目見

但御切米八拾石にても本文二百石同樣之事

同年同月日

一跡目御目見以下に可相立面々之總領向後初て之御目見不相濟筈

文化十一戌年十二月廿三日被　仰出

一布衣以下之總領向後御禮式之節御用人總領之次へ罷出候事

同十一年

一跡目不被　仰付內出仕講釋に出候儀如何と問合の向有之先無用と及答

同十二亥年十二月七日被　仰出
一御加増之御禮申上候儀向後御役柄に不拘百石以上御加增被下置候得は御禮申上御供番頭以上御用人は干鯛一箱つゝ差上右以下差上物に不及事
但御省略中差上物に不及御年寄は御省略中にても是迄之通御太刀銀馬代差上候等
文政十三年
一表役にて奥役助被　仰付有之筋式日其外謁等に出候儀右は當分助之儀に付表役之所にて出候筋之旨年寄衆被　仰聞
弘化二巳年四月被　仰出
一是迄出仕有之式日御法事中に相當候節は御禮無之
御機嫌伺之謁に相成右謁振之義當日に付　御機嫌伺候段筆頭之輩より申述候處向後は　御家父様方幷御裏方御法事中出仕有之式日に相當候節は當日謁振之義當日に付出仕仕りました
右之通り上席之輩より申述候事
但御代々樣方幷御裏方御法事之外は相替儀無之事
元治二丑年正月六日
一中納言様御誕生日正月十三日之處同日は新朔平門院御忌日にて先達て　公邊御精進日之通心得候様被　仰出候付ては十三日御祝御延引年々正月十五日御祝有之候事
慶應三卯年五月七日

一　正月廿八日　　二月廿八日　　四月廿八日　　五月　朔日　　七月廿八日　　九月　朔日

右日限以來月次御禮不被爲受旨此度從　公邊被　仰出候右日限御手前出仕も無之事

同年七月十四日

一當八朔御禮之儀去る亥年之通五節句同樣に御禮被爲請候事

本文之通に付太刀目錄差上は御用捨之事

以下年月不詳

一御供番頭以上之面々都て他所其外へ罷越候儀御暇　御目見相濟候後は五節句月次其外御禮等にも出殿無之事

但出合居候儀萬一有之候ても　御目見は不致事

一御役人向は御暇　御目見相濟候後にても御用向にて出殿有之事ゆへ依御用　御目見も可有之候然共御禮日　御目見は不致事

右之外兩御番頭以下　御目見以上之面々右躰御暇　御目見に罷出候儀勝手次第之事

一平士總領年頭其外御禮之節御塩硝奉行之次へ罷出候筈

一御供番頭已下之隱居之面々向後年頭御禮罷出候に不及候

維　新　後

明治二巳年六月版籍御奉還被聞召藩知事御拜命により爾來藩治と御家政と分裂家令所を置かれ從

来之御躰裁都て一變に至る依て年中之御式事左之如く定められたり以下記する處之に准す

年中御式

元　日

御座之間　御着座 御半袴

御熨斗鮑　家従

右御祝相済

御先立　家令

御書院出御　御上段　御着座　家令

同並

右出席御祝儀中上之　御意有て退座過て　家扶

同並

右御次第同前過て　御下段　立御御間之御襖家令開之

二之間

家従

同並

右一統御禮家令御取合　御意有之過て　入御

御休息

七節　元日之通
八朔
若菜

家令
同並
家扶
同並

右出席御祝儀中上之

右已下
家令所勤人

右家令へ御祝儀中上之

一御東下御上京御發駕之節

御休息

家令
同並
家扶
同並

右被　召出

家従

右通御掛於御書院　御目見家令御取合　（一本ナシ同　並）

一御歸藩之節　前同斷

　御宮御鏡　御頂戴且頂戴

御書院　出御　御上段　御着座　　家　令

右　出御　御下段北之方着座

　御鏡　木地三方　　家　従

右御上段に置之家令召出頂戴之復座其外頂戴之面々一人つゝ召出家令並取渡之相濟　御鏡撤之家令退去

　但家令は着座之席より召出頂戴相濟取渡之家令並召出頂戴之

　御着城御次第

維新後明治二巳年初て御東下同年七月十二日御船にて東京御發艦　御着城之節也

御唐門前之邊　執　政

　　　　　　　參　政

　　　　　　　副參政

岡口御門外へ罷出夫より御供仕　七局知事

五段下井戸邊　監　察
七局判事
（七局判事試補）一本ナシ
衛士大隊長

右邊　大隊長

同　四兵副隊長

本文衛士大隊長以下和歌出嶋浦へ御出迎罷出候はゝ此所へ不罷出事

御着城之節

岡口御門より二丸御玄關へ被爲　入

御先立　公用知局事

御座之間御上段　御着座

御熨斗鮑　近　習

右御祝過て　入御

御着城御當日

殿中一統半袴以下役同斷

右に付爲御祝儀即日執政衆初參政諸局知事謁有之筈

一御簾中樣よりも同樣謁候事

明治三午年
五月五日御次第
御座之間　御着座
御熨斗鮑　家　従
右御祝相済
御先立　家　令
御書院　出御　御上段　御着座　家　令
同　並
家　扶
同　並
右出席　御祝儀申上之　御意有て退座過て　御下段　立御御間之襖家令開之
二之間
家　従　侍　醫　同試補
士族並以上之家令所勤人
右一統御禮家令御取合　御意有之過て　二丸へ被爲入
燒火之間　第一大隊

右一統並居御禮申上之　御意有之過て

御先立　　公用局　　權少參事

御對面所上段　御着座

大參事　權大參事

右一同下段敷居内下より二疊目へ出席御禮申上申上ると御挨拶有之退去

少參事　權少參事

右一同下段敷居内一疊目へ出席御禮申上る申上ると御挨拶有之退去

上田專太郎　三浦休太郎

右次第同前過て　入御

御先立　　家令

明治三年午年八月

年中御祝省略

一年中御祝御略し左之御廉々は御表にて俵御のし差上餘は御熨斗差上候御祝之御簾も都て大奥にて

差上候樣伺相濟候事

元日御祝　二日御祝　三日御祝

八日御禮　十一日御祝　上元御祝 御誕生御祝

廿日御祝　上巳御祝　端午御祝

七夕御祝　中元御祝　八朔御祝
重陽御祝　御煤納御祝　除夜御祝
大晦日御祝　御着發御祝

謁定

一御吉凶事に付上下之諸士奉賀且御機嫌伺等御家老へ謁見上申之禮式を總て謁と稱す從前謁之制事件之大小輕重により職役之高下謁席奥表之區別等頗る多端也然るに明治二巳年六月版籍御奉還知藩事御拜任爾來藩治と御家政と分裂御躰裁都て一變により年來表用局に勤務したる貴志九藏（此時家令所公務へ掛り也）をして從前之成規に照らし時宜適當之謁式を制定せしめられしなり從前之制傳らされ共大半之と同事にして唯御家老の廉は家令とし御役人已上を家扶已上と輕減したるものゝ如し

御誕生日　正三位様 正月十五日　御簾中様 四月四日
家扶已上謁　半袴

一御嫡子様御誕生御七夜
總謁　同斷

一御嫡子様御色直　御髪置御袴御召初
總謁　同斷

一御嫡子様御緣組御結納　御婚禮被爲濟候うへ

總　謁　同斷

一御姫樣／御男子樣御誕生　平服
　家扶已上謁

一御姫樣方／御男子樣方御七夜御色直　御宮參御髮置御袴召初　半袴
　家扶以上謁
　　御留守方謁無之

一御紐解／御鉄漿初　御具足召初　半袴
　家扶以上謁
　　御留守方謁無之

一御嫡子樣御元服／御官位
　總　謁　同斷

一御官位／御任官
　總　謁　同斷

右御禮被　仰上濟
　總　謁　同斷

一御疱瘡御酒湯御祝儀
　總　謁　同斷

一御水痘御痲疹　平服

家扶已上謁

一御嫡子様御袖留御前髪執　半袴

總　謁

一御嫡子様御幌御建物　同斷

家扶以上謁

一御嫡子様御表御住居之節　同斷

家扶以上謁

御留守方謁無之

一御婚禮御引移御時節被　仰出候節　同斷

家扶以上謁

御留守方謁無之

一御簾中様御袖留御着帯　半袴

家扶以上謁

一御簾中様御安産　同斷

總　謁

一御姫様方御縁組御結納
御婚禮

總謁　同斷

一御姫樣方御着帶御安産
　家扶以上謁　同斷

一御姫樣方御疱瘡御水痘御麻疹御酒湯御祝儀
　家扶已上謁　同斷

一御男子樣方御疱瘡御水痘御麻疹御酒湯御祝儀
　家扶以上謁　同斷

一御姫樣方御男子樣方御疱瘡御水痘御麻疹之節御機嫌伺
　家扶以上謁　平服

一御年賀
　家扶以上謁　半袴

一御生身玉御祝儀
　家扶以上謁　同斷

一御男子樣方御官位初て御參內被爲濟
　家扶以上謁　同斷

一御男子樣方御袖留御前髮執
　家扶以上謁　同斷

御留守方謁無之

一御男子樣方他家へ御養子被仰出候節

總　謁　　半　袴

一御男子樣方御緣組御結納
御婚禮濟

家扶已上謁　　同　斷

一御養君御聟養子被仰出候節

總　謁　　同　斷

一右御禮被　仰上濟

總　謁　　同　斷

一山川御越之御左右相達候うへ

家扶以上謁　　平　服

一御着藩爲御歡翌日

總　謁　　半　袴

一若山御發駕爲御歡翌日

總　謁　　平　服

一兩京御着座御左右相達候うへ

總　謁　　同　斷

一入土用入寒御機嫌伺
家扶以上謁　同断

一南龍院様紀州御入國支干相當御歡
家扶以上謁　同断
御留守方謁無之

一御家父様方御法事之節御機嫌伺御當日
家扶以上謁　同断

一御法事濟
總謁　平服
但百回御忌以上御法事濟恐悦は　半袴

一御簾中様御初御法事之節御機嫌伺
家扶以上謁　平服

一右御法事濟
家扶以上謁　同断

一和歌　御祭禮御神事濟翌日爲御歡
家扶以上謁　同断

一右已上御誕辰九月廿二日家扶以上謁之

一御宗家御吉凶事に付謁等之廉已前之廉を（二字不明）に致し家扶已上謁之乎

但右之通候得共見合候帳無之に付其節之評議可有候事

年中差定御酒被下

一年中差定御酒被下振　明治三年年六月定

正月十五日

御三方様御誕生日御祝儀御兼合にて　赤飯　にしめ　こま塩

四月十七日

神祖御祭禮に付　赤飯　にしめ　こま塩

十二月

大奥御煤拂　そは湯　罷出御用相勤候向へ計

右之外別段御祝儀事且臨時被下等之節　煮肴　御酒

右之通相極候旨庖厨方より申合之右之節に局々へ公務方より相達御品は庖厨方にて受取候事

維新後御禮式規則

維新後御禮式規則

明治二巳年三月二日公用知局事より達

一向後五節句御禮申上之儀執政衆御初參政諸局知事判事且大隊長監察於御座之間被　召出右之外諸局御目見以上之勤人於席々御禮申上候筈候へ共御人少に付一統於中之間御禮申上候筈候事

一衣服之儀は先是迄之通候事

同年七月

一年頭八朔五節句等御禮之節諸局判事試補之儀は以下役末々にても出仕候筈候事

同年九月公用知局事より申合

一是迄毎月朔望廿八日執政衆初於　御座之間被　召出候得共向後御止被遊　思召を以て折々被　召
出候筈候間右様被相心得例罷出候御役々へ通達之儀宜被取計候樣有之度事

同年十二月公用局參事より政事廳へ左之通申談之處了簡無之旨答有之旨にて同役より家令へ照會有
之事

一年頭御禮其外御祝儀御機嫌伺等　知事樣へ罷出候面々諸官人初士族に至迄西丸御玄關へ罷出候は
ゝ公私相混不申御躰裁も宜奉存候事

一件之通相極候付十二月十四日に至り公用局參事より來正月諸官人幷無役共士族並已上之面々
元日二日三日之間西丸へ罷出正三位樣へ年頭御禮申上候儀勝手次第社寺は六日十五日之内同斷
罷出御禮申上候儀是又勝手次第之旨諸向へ布達す

明治三午年五月

一御書院御餝は　正月計附候筈申極候事

同年五月

一御吉凶事に付謁之節は　御簾中樣へ家扶以上謁有之筈申極候事

同三年年二月廿三日公用局參事より
一五節句八朔御禮於御對面所諸參事御祝儀申上　知事樣御請被成其外從九位以上相當之官員は於局々長官へ謁候事　　一統半袴着之事
一聖上御降誕日之儀は當年頭之通於席々御祝儀申上候事　同斷
同年三月晦日政事廳より達
拜任等之節參事以上は　知事樣へ御禮申上右以下は夫々支配迄御禮申上等候事
家督跡目諸願濟御禮申上之儀も本文之通候事
七節御祝儀申上之事
同年七月廿七日公用局參事より達
一七節參賀之儀左之通被　仰出候旨東京より申來候付於御藩も右七節是迄之五節句通り御祝儀申上候事
但右之外御祝儀申上之儀は是迄之通候事
七月十三日御達
人日　　上元　　上巳　　端午　　七夕　　中元　　重陽
右七節と可相唱候付ては此表滯在之知藩事幷嫡子隱居參賀可致旨於辨官傳達所口達候事
明治三年年七月廿八日公用局より
一向後御禮式等にて二之丸へ罷出候節御玄關より昇降之等

南紀徳川史卷之百三十五

臣　堀内信　編

典禮第十一

出駕式一

綜言

此編以下は御登城御豫參江紀寺社御參拜御參府御歸國御旅行等總て出駕に係る典範儀衞の事を述す抑御登城御參詣等は幕府且御家廟へ御奉仕之重典也　有徳公御遺命に

當家勤之儀は江戸表にて月次登城病氣無之樣相勤候を第一とする也國元にては家中之者月次請候事又は佛參專一の勤なるへし次には社參是又可相勤もの也

されは御登城初を通して御勤向又は御勤品と唱へ來る而して大小の典儀悉く一定の式法備り秩序整然たり諸侯に於けるも同斷にして大藩外樣の如きは就中互に家格を張り威儀を競ひ登城豫參の作法行裝儀仗の程度會見接遇之曲節等一擧手一投足之微に至る迄(苟)(一本ナシ)も先規例格に矛盾する處あれは忽ち家格を貶し威權を殺かるゝものとして一歩を不讓を之れ勗むるの習ひ也し故に三親藩は三親藩の御家格特權あらせられて御登城初の御作法儀仗行列之制限等復雜多端なり隨て時に或は變更沿革あり是皆御用人總理調訂悉く伺を經て制定する處にして其元簿は表御用部屋に保存業合に至ては君邊に係るの事は奥御供方主理し表向の事は御目付常御供方掌りたり然るに表御用部屋

の元簿は散逸僅に與御供方及御徒目付の筆記存せり御徒目付は御目付の屬官にして御供方之事預らさるなし今此二書を專ら引用尙他二三司職の筆記をも蒐集編纂す甲乙相待て全躰の事較詳悉を得へし然れ共瑣（則細）[一本ナシ]節等時々の變更不尠又は各職一事を同記し或は年次を混亂する等ありて頗る錯雜紛擾に涉る可成重複を省き紊冗を畧し簡明を期すと雖も漫に修整し難き分は暫く原書のまヽに從ふ

一總して江戸に在ての出駕は幕府初他に被爲對の　公儀紀州に在ての出駕は封內の事自つから別あり故に分て別卷とす然れ共或は江紀連記又は一事同令の如きは一方に揭け一方を畧するあり併視參照を要す

一御豫參とは鎌倉以來武家の舊典にして將軍家歷世の忌辰御廟參之時御三家參列し給ふをいふ今の公侯爵　賢所參列之義之（如し）[一本節をいふ]（詳なるは[一本ナシ]　舜恭公御自著の秘鑑にあり）

（[一本ナシ]一紅葉山は江戸城內に在て　將軍家歷世の靈牌殿ある所也兩山は即ち上野寛永寺芝增上寺同靈廟を云ふ單に　御宮と稱するは　東照宮をいふなり

一御老中御駕寄せとは御家督御官位御任叙御元服御緣組御歸國御暇御參府等の重典の時幕府へ御禮の爲め閣老の官邸へ御枉駕の事をいふ御參暇の他は若年[寄脫カ]へも御駕寄あり是幕府へ御勤務の一にして諸侯に在ては御老若廻勤と稱す

一總して幕府より　上使の時は即刻御禮として御登城あり御在國之時若山へ上使あれは山口御殿迄御迎送あらせらるヽ成規なり

一總て出駕を出御又は御成と稱し（江戸にては將軍家御成に混するを以て御成と稱せず）歸城歸邸を歸御と唱へ御行列帳には乘輿乘馬の位次を御と單記す僭稱の如しと雖も當時に在ては尾水御兩家相通し從來之慣例なり尤他へ對しては稱せず

一御三家は天下總下座の特權を有せらる故に御供世話役なる者四方八方へ注目常に警蹕を大呼し行く（下にく下にを（ろーと呼ふなり））依て途中何人と雖も御長刀より乘輿通行濟迄は土下座平伏す（下駄を禁す庶人は御先箱よりして下座す）若し遙に懸隔しあつて下座せさる如きあれは御供世話役姓名を承り其不禮を咎む尙服せされは藩士は其主家へ紹介旗下士は閣老へ訴へ假釋する所なし商家等女子は家中に在て妨けなしと雖も男子は悉く軒下に土下座平伏せしむる也）

（一本ナシ）
（一御會釋とは御通行途上官方攝家方大小諸侯初へ御會見之禮節を云）悉く家格爵位等により曲節區別あつて各自に確守不可犯又御下乘所とは輿中より下乘し給ふ處の場所をいふ亦規律錯雜なり其他御草履上け御手水上け御廟拜順路等皆一定の成規あり共に其部類の記乃至圖面によつて知るへし然れとも悉くは備らす

按するに大小諸侯等途上相遇之時は先方先つ下乘下馬して路傍に待つ君上御下乘御會釋あれは最敬拜伏す雨中長柄傘を捧くれは先方は手傘を用ゆ若し御手傘なれは先方は手傘を用ゆる不能（尤高足を用ゆる不能）亘多之同勢共に濡れ浸しと成て平伏す故に御三家と行逢は諸侯の最禁忌する所大藩は偵察の者を先へ出し御三家通行と知れは道を替へて之を避く小諸侯の如き突然邂逅すれは輿馬鎗箱箕を亂して俄に横道岐道を遁走し避く故に御會見御會釋は實際に於ては甚僅少の事也しといへり

一御會釋の内に御駕居といふあり御駕を居ゆるの義と雖も全くは御駕を居るに擬し瞬間地を引く如く舁き行きて暫時くも停止せす之を御駕すりと唱へ示威の擧とす又御戸前と稱し御駕の戸を明くるの義なれ共全くは明けす唯締切たる音のみをなすを

御戸前役の口傳といひ傳へり御手被下とは　御輿窓より僅に御隻手を示させ給ふ迄の事とす如此一擧一動の瑣節をも吝惜し互に其威を張るを供頭等無二の　功名と誇るのさまにて既に　舜恭公の時　松平讃岐守殿（高松侯）に御行逢ありしに　公には先方の老躰を御いたわり下乘を止め給ひしに爾來是を家の例に曲け捧へ世々下乘せさる事に仕濟したりといへり時流の情態を示さん爲め贅言を附記す

一總して御外出の時通常には御供世話役をして御通行筋障害の有無を巡視せしめ臨時には奥御供方常御供等親から巡驗諸般の準備をなす之を御道見分と稱す（たとへは（商家の）〔一本ナシ〕商標看板軒先へ出張りあれは卸さしめ又汚れものと稱する捨札晒しもの等あれは取除かしむる也捨札とは罪人の刑状を書したる掲示札也晒しものとは刑人を道路にさらし又は行倒れ人を棺に入れ見知り人の有無を公示の爲め路傍に晒し置也赤坂見付外日本橋々詰の如き其他常設の場所ありたり）而して御通行順路を定め奥御供方より伺を經て諸向へ布告す之を御道書といふ又御注進ヶ所といふを定め御往來筋三四ヶ所へ人を派出しいつれ御出發席邊御通行といふ事を順次に受繼き御出先き本邸の兩所へ疾走注進せしむ是諸（有）〔一本ナシ〕司奉迎等準備の爲めなり

一年々御參府御歸國の御旅行儀仗之事を御道中御行列と稱し御行列中の大典とす平素御登城之如きも上下之同勢三百人に下らす御旅行に至ては實に數千人の大衆扈從其威嚴鄭重を極むるは第十三卷に概説の如し而して原簿散逸に歸したるを以て世々の事を詳にするを得す天保十五年御歸國岡によれる憶想と文久三亥年御歸國の近例を掲けて一考に備ふ又於江戸薨逝の　君公及　御簾中御遺躰の御旅行あり之を御遺躰御行列と云ふ又筆記存せす

一御簾中御外出は赤坂麹町兩邸御往來は兎に角寺社御參拜御遊參等は甚た稀の事にして御一世中兩三回あるやなし也内殿御三之間より御乘輿御半下女八人にて之を舁き御玄關にて男子の輿丁へ授く御途中は右八人之者御輿之前に行列いつれも丈高き女打揃ひ目立たる看板（竹模様紅裏なり圖別卷にあり尾水各模樣の成規あり）

を着し頗る見もの也御輿窓は三重の簾障深く鎖し御下乗にはあたりの人を拂ひ御供女中日傘を以て周圍を幾重にも覆へは他人は愚か御内人すら毫も伺ふ事能はす其さま到底今人の想ひ及ふへきにあらす當時諸侯夫人の出行概ね是に準したり

一第十五卷に記載　方姫君江戸御下向　倫宮樣江戸御下向は御婚嫁に付て之御下向なれは御婚儀の事項をも連記あり今之を分記しかたく且御旅行か主たるを以て此編に纂輯す

一編中掲くる奥御供方等の勤方は專ら江戸同職の章程也若山同職の分をも記せんとすれ共材料得る處なし若山は國内限りの事江戸は御登城御豫參尾水三卿方諸侯等都て他に對するを以て事自つから錯雜最經驗練熟を要せしなり

一（一本ナシ 篇中御供打の語あり下乘の時儀杖を停め扈從を（欠字）くの事なり）奥御供方覺書に御銀角とあるは銀角形（御紋付）水指の事也野服御行列に段切とあるは御行列を數段に分割一團つゝ間を隔扈從するをいふ野外道遠く府下の如く威儀を正し難し御小道具の類随意肩上に横たへ疲勞なからしめ且行路人等を妨けさる爲めなるへし

一徒行扈從の者は御茶辨當附坊主を除くの外は上下悉く高股立を取り股脛を露すを常とす（他諸侯の手廻（先箱持駕舁の類）の如きは特に裳を高揚犢鼻褌を露出揚々伊達さする風なり）寸脛を露すも違警罪とする　今日より見れは唯吃驚の外なし僅に三十余年前の風俗殆と憶想も及はさらんとす故に第十七卷に行裝及ひ儀仗什具等の略を圖し考古の一に供す固より悉く記するに堪へされは十中一を掲くのみ他は推知を要すへし旅裝伊達道具尻籠持の如きは奇怪戯謔に類するも人却て羨歎相劣らさらんと競ひたるなり

年中御登城　奥御供方覺帳

正月元日

一兩御丸へ御登城

一今日御定日には候得共御供觸有之候事

一御供揃六時　以前は六半時公邊出仕六半時

一御召服御直垂御立烏帽子

一御規式二之御行列

一出御前受取物左之通

一御印籠　御膳番より

御裝束に付ての

一御鼻紙

一今日は御裝束に付御扇子は無之御中啓御裝束掛御小姓持參致候事

一御召沓

一紫御服紗御沓包

一御餝沓

右之品奥之番より受取候筈近來は多分御召方坊主より受取候事

一右御沓御服紗は御草履持受に出候間相渡　歸御之上御召方へ相戻候筈

一御供布衣着　但のし半袴出殿之上布衣着用致候事

一召連候若黨上下着之事

一御小道具下し御目付より申出仲間より申上候事

一御往來共御玄關

　御左召　御右御下乘

一御簾御半卷

一御玄關御敷出し筵有之候付仲間一人御膳番一人刀世話役に爲持置御駕籠　御左右へ罷出仲間は御駕籠御右脇へ出居御太刀御召込之上御右より御小姓頭取御駕籠へ入候付其節御戸引申　出御被遊候はゝ御敷出し筵の上御供仕下り可申候若草鞋道に候得は早々手廻し致し草鞋はき御跡より追付可申候

　但草鞋掛相用候節は取可申筈に候得共見計手廻し之爲め草鞋掛之儘御供相勤候事も有之

一御履物緒太差上若雨天に候はゝ御淺沓上候事

　但雨天御淺沓御極に候得共當時多分御裏付被爲召候樣に相成候事

一歸御之節天氣能路次宜候はゝ御供之もの一人其外御筵之上刀は世話役に爲持草り脫御供仕候樣若路次あしく候はゝ仲間一人御膳番一人廱上下着端（打）[一本折]不致足袋取外櫻田御注進（位）[一本ナシ]にて御敷出し筵御左右へ着座御敷出し筵之上少々御供可仕事

　右御膳番へ前廣申合置候方宜

一歸御之節草（靴）[一本鞋]路に候得は御駕籠之もの四人紀伊國坂下邊より御先へ相廻し筵之上御駕籠上け候樣申聞候事

一御供布衣着用之節路次あしく候はゝ草鞋用ひ合羽は成丈は不相用方に候得共大雨に候はゝ合羽相

用候事

右相用候節は勿論御目付中御側向へ篤と申合候樣

一兩御丸御玄關前御敷出筵有之候共御草履上替候に不及候御供之面々御敷出し筵外御供（一本ナシ致）候樣心得可申事

一今日は御黑書院にて　三卿樣方へ御盃事有之相濟候上御白書院にて御三家樣方へ御盃事有之候由に付例之通御錠口觸にて御供下り候ては少々早過候儀も可有之に付御城附へ問合御三家樣方御盃事初り候頃御供下り候方都合宜候其節々見計取計可申事

一歸御之節は大名衆初御出會も多可有之候間外櫻田邊迄御太刀多分御持せに相成候事

但御沙汰無之候はゝ相伺候上御駕籠へ入可申其節御戸引可申候

一御太刀御駕籠へ入有之候節御出逢有之御下乘之節能々心得居御小姓頭（原本ナシ所）へ談し前廣早々出し候樣可致事

一御先番晴雨に不拘兩人つゝ參候

正月三日御謠初

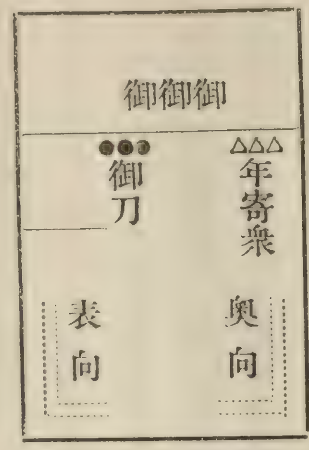
一御供揃夕七時通し有之事

但公邊揃七半時

一御往來共御成廊下御駕籠臺

一御供總廊上下

一出御前受取物例之通
一御小道具下し御目付より申出仲間より申上候事
一供に召連候若黨麻上下着
一御城内は暮六時打不申内は御挑灯入候儀不相成御極に候得共諸御門等火入候はゝ御挑灯も不苦趣
御城附三輪三右衛門物語致候事
一今夜御登城直に殿上之間へ被爲入候奥向御供御同所御次に扣居表向御供御目付初新御番迄御城附
より差圖有之御同所へ上り居候右に付仲間取扱無之着座圖左之通



一御供之者刀殿上之間着座致候跡へ(差)〔一本著〕置候尤夜分之儀紙にて名札拵へ持參致附置候方宜
一今晩は御玄關前殊之外混雜致候付年寄衆刀御同朋へ賴にて同役御玄關より受取持參致候付名札附
け年寄衆着座後へ御同朋へ爲持遣す御供下り候節同役持參家來へ相渡候事増御供之者心得罷在渡
方都合宜取扱候樣

但本文之通に候得共今日は仲間一人厚之間へ揃候間右刀御供下り候節御同朋に厚之間迄爲持參
受取置　御退散之節御括被遊候比見合相渡可申方都合よろし

一殿上之間より一旦爲御　禮大廣間へ御越被遊又殿上之間へ被爲入暮六時頃　公邊御月付衆御注進
被申上大廣間へ被爲入候

但一旦大廣間へ不被爲入候儀も有之候

一右爲御修禮被爲入候節も御刀大廣間入口迄御供致扣罷在候事

一御詰被遊候得は御同所迄御供致厚之間へ廻り例之御場所に扣居候事

一御詰被遊候はゝ奥向御供例之通厚之間へ詰候事

一御詰被遊候後殿上之間御座所内に參伺候ても宜

一御噺子高砂之切位にて奥向御供下り候事

但御供下り宜時分知らせ給候樣前廣御城附へ賴置可申事

一表向御供者右以前下り候事

一今晩御退散御玄關より御歩行場所御行列左之通

御小十人〇御小人目付　小十人御小姓組〇新御番　御使番　御供方

御御供方　御側向之面々

御小姓頭取

御小十人〇御小人目付　小十人御小姓組（御同朋）〇新御番　御使番　御供方

一今晩御小姓兩人御詰被遊候後御小用等之節御用相伺候て御部屋へ罷越候御城附差圖坊主案内致候

右に付仲間取扱無之候得共心得居可申事

一今夜は夜分之儀に付仲間一人殘り居御刀と一所に御供致居候事

但右に付先へ下り候仲間世話役申付草履わらんし等都合宜敷樣取計置可申事

一御刀持幷仲間弓矢立合初り頃見合大廣間入口御廊下板之間へ廻り居可申事

一御厮子初り追付御退散之御樣子先年は御用人へ仲間より申越候得共近年御城附より申參候付仲間取扱無之事

一夜分　御退散之節は　公邊御徒目付御小人目付御玄關へ御下乘御門迄御先立致拔き候處にて御手被下候事

但右常御供へ前廣申合候方よろしく併當時は夫にも及不申見計可申事

一御書院御門外より御持番所見通し　御下乘所迄少之間御早めに御歩行被遊候筈酉之正月三日被仰出

一御先番晴雨に不拘一人參候事

但右は大名衆抔御跡より追々下られ混雜致候に付て也

正月七日 御供衣服のしめ廡上下 一御手前出仕當番居掛り計

一例刻御供揃にて　定觸之事　兩御丸へ御登城諸事例之通

一御往來共御成廊下御駕籠臺より

一今日は登城　御三家御三卿溜詰加賀越前計

一今日此御方御供揃例刻に候得共　公邊出仕は五半時之よし
「天保九戊年今日西丸にて　大御所様へ　御對顔に付　御手間被爲取候付奥向御供一統上り　城附へ掛合蘇鉄之間へ御屏風圍付
右之内に罷在候事」

一例刻御供揃にて　御本丸へ御登城

正月十五日　御供のしめ麻上下

一今日　御簾中様御本丸へ被爲成候付百人番所前御道筋に付御下乗御門より御堅附候間御退散之節同時に相成候得は殿上之間に御扣被遊　公儀御目付衆御注進被申上候上御退散被遊候付御駕籠幷表向御供御下乗橋桝形内へ開き居御固め解迄例之處へ相揃候付品に寄御間に合兼候はゝ御駕籠持込候處迄御歩行被遊候事

一例刻御供揃にて　御本丸へ御登城諸事例之通

同廿八日　御供のしめ麻上下　御手前殿中同様

一多分出仕相止御登城無之併出仕止之儀通し無之候はゝ例之通御登城被遊候事

二月朔日

一例刻御供揃にて　御本丸へ御登城諸事例之通

同十五日

一右同斷

同廿八日

三月朔日

一御登城無之

同三日　御供のしめ麻上下

一例刻御供揃にて　兩御丸へ御登城極之通

一御召服五節句御長上下

三月節句前後御能

一公家御衆饗應御能爲　御見物　御登城被遊候はゝ御供衣服のしめ麻上下

一受取物例之通

一御小道具下し上より被　仰出

一御往來共御成廊下御駕籠臺

一奥向御供御城にて長上下着替御能拜見致候付長上下入挾箱二つ御小道具下し頭才領へ渡させ　御

本丸中之口へ遣候事

但三輪三右衞門承知之張札致遣候事

一銘々刀は名札附蘇鉄之間三四の御挾箱御番之筋へ賴置候事

右御番人小十人二人御徒目付二人御召方御數寄屋坊主御茶辨當に附居

一御辨當之節先年は仲間も相廻り御召替御手傳等も致候樣被　仰出も有之候得共近年は不參候

一御料理頂戴に參候節御刀持之もの上座仲間より御刀持候はゝ御刀袋御召方御數寄屋坊主之内より

受取御刀袋へ入着座致候後へ差置候事
右御刀近年迄御勝番奥御供之内にて役之候處當時御小姓頭取役之候事
一御料理頂戴之御禮歸御之うへ宿御側を以申上候品に寄候はゝ御小納戸頭取にても宜
一末壹番御能前長上下着替末一番にて御供下り候事
一万一夜に入候て　歸御被遊候はゝ仲間壹人御謠初同樣一人殘御附下り致可申事
但右之節は履物世話役に心得させ置可申事
一御注進之手紙御謠初同樣仲間取扱無之
一祝言之前之御能半頃御城附取扱御挾箱下候事
一若御城附不居候節は仲間より申付下け候ても宜筋之よし
但臺子六尺取扱右に付被下物有之由
一御挾箱下候はゝ銘々刀扉之間へ御持參致候事
一長上下挾箱は御城附作畧臺子六尺持人へ相渡候事
但中之口御門出斷致候事之よし
一御中入後御能初りにて細川屋敷へ參居候御供之分御城へ相廻候事
但御目附當御供へ万一御退散御早き儀も難計候間御供散不申樣程能前廣に申合置候方よろしく
一御能相濟　公家衆幷御三家樣方御對顏有之候事
一公家衆退散之節冠木御門外にて乘輿右注進御小人目付御玄關番へ申御徒目付へ通達右申上其上に

て御退散被遊候事
但右常御供世話役に申合置候方
一御退散之節御老中方へ御禮被　仰上畢て殿上之間へ少々御扣被遊候事有之心得に記す
一御城にて御料理頂戴之席順面々格式に不拘御側向奥向中奥向と其一局々々にて格式次第着座致候筈
天保元寅九月九日より
一中之口へ終日詰居候者共左之通
御小人目付兩人　　御供世話役兩人
外に入込御使之者二人朝より宍藏へ參居候
一御拜領之御品持人も朝より入込居候筈
一奥向御供長上下之儘股立とり御供致候ても相濟候趣に候得共先は不致方よろしく
一今日若御馳走掛大名衆へ御出會被遊候はゝ時宜に寄御先例も有之儀に付申上伺候上此節之儀御用も可有御座候間無御構御通り被成候様にとの儀御使差出可申事
一御先番晴雨に不拘一人つゝ參候事
三月　多分十五日　御供のしめ麻上下
一上使を以御國許へ之御暇被　仰出候はゝ爲御禮兩御丸へ御登城被遊　御退散より御大老幷兩御丸御老中方へ御駕籠被爲寄候事

一御口上書前日御用人中より受取持參可致御老中方取次之もの御口上之趣伺度旨申出候はゝ右御口上書相渡可申其後外にて承り候はゝ誰殿取次へ相渡置候間承り候樣可申聞事

一御下乘表門外敷石より一間程離れ御駕籠御行形に居御下乘之事

但被爲　召候節は御簾取扱御目付役之

右當時御目付阿部清兵衞より頼にて仲間より御簾取扱致し候筈

一御參府被　仰出候節も同斷

一御案炬當時御入組之儘也

一御老中方にては取次門外に罷出候付同所にて御下乘御口上御意被遊候御大老にては表門地伏之内に取次之もの出居候付門内へ御乘込同所にて御下乘御口上被　仰述候事

天明五四月廿二日

天保八酉八月御駕寄之節掃部頭殿にて取次正面へ兩人出居候事

一御參暇に付尾水樣峯壽院樣上野御宮兩山御靈屋方幷最樹院樣且傳通院妙操院樣芝鑑蓮社御牌前御庭御堂へ御參詣被遊候筈に付心得に記し置

四月朔日　御供衣服のしめ袷　但閏月は服紗袷

一御登城相替儀無之

一今日より御城殿中足袋不用

一今日より御駕籠御日覆御布（一本薄）御簾上候事

天保四巳七月廿九日馬場内膳方通し

同十五日　服紗袷

一今日參勤之御禮有之候付多分出仕相止み候事通し無之候得は勿論御登城被遊候事

同廿八日同斷

一御登城極之通替儀無之

五月朔日

一御登城替儀無之

同五日　染帷子半袴

一御登城替儀無之

一今日より御供一統日笠相用候事

同朔日五日兩日之内

一公儀御幌御見物被　仰出候はヽ左之御振合に取扱致可然事

文政十二年丑五月朔日

一今日御幌御拜見被遊候はヽ御先立不仕筈

一今日御登城被遊候處　大納言樣御幌御見物被遊候樣被　仰出候付右之趣御城附より奥御供方へ申合有之候付御供之御目付へ申合候事

一前段に付　御本丸御退散之節中之御門外より右へ寺澤御門通り被爲成候付例御乘輿御場所御持出

張番所之方御棒先に致し御駕籠居置　水戸樣御駕籠は御左之方へ居置被爲召候事右に付　此御方樣　水戸樣中之御門下にて御左右御入替被遊候ては　御双方御供入違混雜致御身邊をも通拔候樣に相成候間右之趣申上相成候はゝ少々御前廣に御入代之儀相願候處　水戸樣と被　仰合御退散之節御玄關御敷臺上にて御入代被遊此御方樣には御右之方御進み　水戸樣には御左之方御進被遊候旨御城附を以仲間共へ被　仰付候付此段御供之御目付へ申達し例御退散之節と違御右之方へ御供打直候事

一中之御門より御乘輿被遊寺澤御門蓮池御門通り西丸御裏御門へ被爲成御同所御門外にて御下乘被遊候尤　此御方樣御駕籠御右之方へ寄せ御行形に御駕籠居　水戸樣御駕籠は御左之方へ寄少引下り御行形に御駕籠居　此御方樣は御右御下乘　水戸樣には御左御下乘に相成候事

一右御下乘より例中之御門外に殘り候御供之分相殘り夫より御幌場喰違御幕張外迄例御玄關迄參候御供通り御先立御小人目付御小姓兩人御同朋御跡御供は御側向仲間共常御供頭役同御小姓組御徒目付一人御小人目付兩人御草履持兩人御供世話役五人右五人之内にて一人御手傘持參御雨傘御用意御傘御杖三四の御挾箱御簑箱御徒押一人御年寄衆御醫師迄御幕張際にて　公儀御徒目付を見受候と御先立之御同朋迄不殘開き御跡より御供仕御長屋御門内喰違御幕張手前より御跡へ殘候御先立之者御幌立候御通道後ろ御先へ拔け右御幕張の外より御先立仕御玄關迄參候事

但當時御手傘奥坊主持參候事

一表向御供者御裏御門より坂下御門西丸中仕切御門へ相廻候事御徒目付御小人目付差圖

六月十五日　出仕無之
七月七日
八月朔日　白帷子
一御供日笠八月晦日迄
九月朔日
一今日より御駕籠布團上候事
一今日より御供日笠用不申事
一二月朔日
右は觸（一本戻）（出）し無之候はゝ御登城有之儀と心得可申事
一三月朔　四月十五日　六月十五日　七月十五日　八月廿八日　九月廿八日　十月廿八日
十一月廿八日
右御登城無之事

上使御登城

「〇」上使御禮御登城　同上

一上使有之爲御禮御登城被遊御供衣服例　上使之節之通と有之候得（一本は）（共）服紗小袖半袴
但上使之品に寄御供のしめ麻上下之事有之候
一御小道具下し上より被　仰出
一上使被爲受一旦　入御被遊例之通御挾箱出觸　御登城被遊候哉　上使濟　入御無之直に御登城被

遊候議之儀宿御側へ承り御直に御登城被遊候はゝ　上使末之御注進にて御挾箱出と心得御供一等北屏重御門外へ相揃　上使濟直に南溜御駕籠臺へ相揃候筈一旦　入御被遊候はゝ例之通御挾箱出觸有之候樣宿御側へ申談篤と申極置可申事

一本文一旦　入御無之御挾箱出觸も無之との事に候はゝ早々相紛不申樣御目付中へ可申合事

一一旦入御被遊候ても若御都合に寄御挾箱出難出しとの事に候はゝ是又　上使御注進を以御挾箱出と心得居候間申談可置候是又其段早速御目付中へ申合可申事

但御目付中には　上使之節多分不殘御玄關向へ出張候付御徒目付心得居取計致候由尤　上使不相濟内は御道具は下し不申候得共申合置候得は御都合宜敷取計候事之由

一御本丸にて奥御供上候儀は御城附の由御玄關にて鳥渡承り樣子次第にて上り可申事多分　上使之節は上り不申候事

「〇」奥向御登　城之節　同上

一當朝受取物例之通

一前日掛合置有之候御風呂屋口にて御道具類早々上候儀常御供中御數寄屋坊主御草履持へ申合置候方宜候事

一御風呂屋口にて御附之衆外に持人之もの三四人坊主衆も御出迎に出居候間右へ左の〇印之御品々相渡候儀御附之衆へ掛合相渡可申事

一〇御駕籠入御煙草盆相渡候節は御數寄屋坊主紫縮緬御服紗用意致御煙草盆へ掛御出迎之坊主衆へ相渡候事

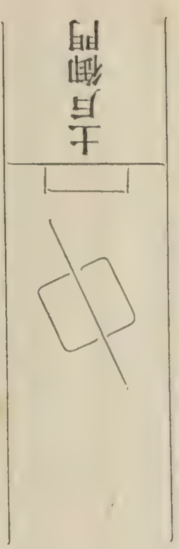
一〇三の御挾箱一つ

一〇御手傘杖御下駄御裏附御草履二足相渡可申事

一〇雨天にて御合羽被爲召候節は右包候御服紗御柄袋御用意御一所に御風呂屋口にて御附之衆へ相渡候儀御數寄屋坊主へ爲心得置可申事

一土戸御門外御下乘場所より御風呂屋口迄例御登城之節之通御先立は御小姓組御小人目付兩人つゝ御同朋其外は御下乘場にて殘可申事

一土戸御門外にて御下乘之儀は御場所狹候付御行形に御跡之方右へ寄せ筋違(々々)[一本ナシ]に御駕籠附御右より御下乘被遊候事　歸御之節は御左御乘輿之事



一雨天之節は御長柄傘上候ても御風呂屋口にて鳥渡と仲間より御手傘差上不申候ては御ぬれ被遊候付見計取扱致候樣當時御手傘都て御小姓頭取(々)[一本ナシ]扱に相成候付右等取扱之處心附置候はゝ可然事

一御先箱は土戸御門外右御門へ向左之方番所脇へ開き候儀も有之多御風呂屋脇迄入込候儀も多く有之候處近頃望月庄八郎勤役中同人了簡にて用人中へ申達土戸御門外に殘り候樣相成候事

一御先御案内之　公儀御徒目付御風呂屋口にて開き候間申上候て御手被下候事
御風呂屋口より御上り被遊候はヽ直に公儀御徒目付案内にて一統中之口より上り奥向夫々屋之間屛風圍ひ付有之候處へ御供下し迄詰居候筈表頭役并御目付中も同所に屛風仕切有之刀は中之口より持上り右詰所へ差置候筈

一表向一統は蘇鉄之間へ屛風附け有之處へ扣居候筈尤御同所に御同朋中も居候事何れも御目見以上之筋一席也

一御駕籠は御臺所（一本右）（右）之間に敷物有之右之上に上け絹を掛同所に御退散迄置候筈御駕籠之者兩三人つヽ同所に詰居殘りは御玄關脇腰掛幕張有之所へ詰居候事

一御茶辨當御挾箱共上り不申伊賀持人等も御玄關脇腰掛幕張詰所に詰居御數寄屋坊主も同所に罷在候事

但御用之節は御茶辨當御挾箱蘇鉄之間へ上可申事尤御城附へ掛合之上取計可致事
御能之節は上り候得共不時之節は上り不申御極り也
一御茶辨當は近年御數寄屋坊主前日より出御膳番中と懸合（一本候）（差）上多分蘇鉄之間へ終日上候て御數寄屋坊主同所に詰居候事

一平河口より御登城之節は同所橋詰にて表御道具御長刀御徒等も殘り同所下馬幕張有之處に　御退散迄扣居候筈尤同勢之分も幕（欠一字）自分若黨草り取挾箱等は中之口迄御供仕込御玄關脇腰掛に居候事
箱は百人番所腰掛之處に居候筈

一奥向一統御料理頂戴之節は御城附より被申候間檜木之間へ出張頂戴仕候付其節刀は御同朋詰居候

所へ預け可申事

但當時は多分御茶辨當上り候付御數寄屋坊主へ相賴右之處へ差置候方都合宜敷候

一右頂戴之席之儀は奥向計一構中奥頭役表頭役一統御目付迄は一座にて中奥と表一座に候得共少し席隔て上席之方に罷在候事

一右之外表向平士扣所にて頂戴御同朋も同所にて打込頂戴致候事

一夕御湯漬出候節も前段に準し可申事

一諸大夫之外御年寄御供にて御料理頂戴之席は醫師溜諸大夫は柳之間之よし

一御城附退出後御用筋掛合候節坊主衆へ掛合候儀有之候間退出前姓名書附貰置御用之筋有之候はゝ右坊主衆へ可及談に候事

一御退散之儀御附より御供下し候儀奥御供方へ被申出候付左候得は御目付中へ仲間より申達候御供之御年寄衆へも御目付中より被申出候哉之儀御城附退出後に候得は承り何れにも拔不申樣仲間より申上候樣御目付中被申聞候はゝ此御同朋を以て可申上候御扣所は御同朋衆之部屋に被居候事仲間より入込候儀は先見合候方可然との事に候

一御供世話役一人つゝ御小人目付も中之口上に御退散迄詰居候間御供下し被　仰出候はゝ家來呼集め候樣申聞候方都合宜敷候事

　但御徒目付も同所に詰居候事

一御退散迄之内臺子六尺部屋へ例之通代々休息に參候ても宜敷事

一御供下り候はゝ早々　公儀御徒目付案内にて御風呂屋口へ廻り御先番之御附へ今朝上り申候御道具下り候儀掛合御道具下り候はゝ御駕籠御入組等宜候はゝ御目付中さ談し表向御供(宜)（一本ナシ）候はゝ御附を以御供宜旨申上候事

一若夜に入候はゝ御之御提灯御様子に寄御附へ掛合一張相渡可申候多分御弓張御提灯にて被為成候故御用は無之候得共心附候はゝ承り見可申事

一御風呂屋口より御乗輿迄之處夜分は御極之通小十人兩人新御番兩人御提灯二行に相立上候事御先立は御上之節之通

一御提灯へ火を入候儀御城内は先六時打不申内は提燈不相成候得共御賴之御徒目付へ掛合火入可申候右御徒目付差圖にて取計可申候六打候得は提灯火を入候ても不苦候得共六時前之所は右之通取計可致候事

一御風呂屋口より　御退散之節　三卿様方御同道に候得は御供混雜無之見分易き様御目付中へ申合置候事

一御下り後　三卿様方御跡へ御引續に候得は少々御駕籠早め可申方御都合宜猶其時之御様子也

一平河口銅御門より御風呂屋口へ被為成候節番所々々にて御簾取扱無之若御小簾垂れ有之候得は其節御小簾上ヶ可申尤與力へ揚け候事二の丸御門砂利之處に御徒目付出張有之右へも御小簾御手被下候事

一御案内之御徒目付平川口の節は同所橋内之所より御風呂屋口外迄御案内申上候て開き銅御門之節

は右御門之處より御案內申上候　歸御之節も最初出張居候處へ開き罷在候事右御小簾御手被下度事

一奥向御登　城之節は御草履袋に入御附へ相渡候事故御沙汰出候前廣に御草り持へ心得申付置候方宜敷候事

「〇」御登城御供心得　奥御供方筆記

一五節句八朔朔望廿八日

御供揃五時

一御供一時早々相揃仲間小十八頭御醫師御同朋揃候はヽ奥向御供揃候段御目付中へ相達候事

但御醫師は不揃候共御醫師之外奥向御供揃候段申達候ても宜

一御供に揃候儀遲り候仁へは世話役へ申付呼に遣候事

一中奥御小姓御先番誰參候との儀申出候はヽ御小納戶頭取へ掛合天氣合且路次之模樣に寄御先番有無之儀掛合可申事

一御供揃時刻半時前御供御馬揃候段御用人中被申聞候はヽ即刻宿御側を以可申上事

但御供之年寄衆御上り有無之儀御用人中被申聞候はヽ心得居可申事

一御供揃申上候段奥之番御膳番へ知らせ候元極之事

一天氣模樣且路次之樣子に寄合羽手傘草鞋等之儀御目付中へ掛合可申事

但品に寄御側向は表向御供と相違致候儀も有之候尤其段御目附中へ斷置可申事右之節は小十人
頭御同朋は表向と一樣に相成候樣可申聞事

一天氣模樣に寄手傘六尺へ申付上させ可申事

一御供揃時刻二寸（本のまゝ）前御小道具下し候段御目付中被申聞候はゝ宿御側を以可申上事

但御極　御登城之外は御小道具下し上より被　仰出候事

一御小道具下し上之御都合に寄且御時刻之遲速に寄此方より御目付中へ心得申達候樣兼て申合有
之候事

一出殿之上受取物左之通

一御印籠　御膳番より受取候筈同役不居合節は御藥方坊主より受取候ても宜

一當番御供下け

一御鼻紙　奥之番より受取候筈當時多分御召方坊主より受取候事

一當番御供懷中

右御鼻紙御裝束之節は御包小振に候事

一御扇子　右同斷

增御供懷中

一御裝束之節は御末廣にて御裝束掛り御小姓持參致候間仲間持參に不及事

一御足袋御足拭右二品當時御小納戸持參に付仲間取扱無之

一御裝束之節は右之外に左之通受取候事
一御彷沓　　一御召沓　　一同御包紫御服紗
右三品御召方より受取御草履持受取に罷出候はゝ相渡　歸御之上受取相戻し可申事
一御挾箱出觸候はゝ　出御口へ相揃奥向御供宜候はゝ其段御目付中へ申達表向總御供揃候儀は同役中より直に御用人を以て申上候事
但本文之通に候處近來は奥向御供に不拘表向御供揃候得は直に御目付中より御供宜段申上候筈
同役中より被申合候勿論仲間には奥向御供揃次第御目付中へ申達候事
右は近來御側向之内には　出御迄御用有之候向は御附下りに致候樣との被仰出も有之故と被存候
一御成廊下御駕臺より　出御之節は增御供之者御書院後ろ御門内迄出張居表向總御供宜旨御目付中より承り御駕臺に出居候御用人中へ表向御供宜旨申達猶奥向も宜候はゝ又々申達候樣心得可申事
一常御供之もの御駕籠内外相改可申事
一平日は御簾揚け置候御極候事
但御裝束之節は御簾御半卷　同斷之節御駕御棚無之
一夜中は御簾垂置候御極り
一御途中にて差掛り不淨之物なと有之節は申上候上御簾たれ候御極り

一出御前雨催に候はゝ見計御雨覆掛置せ可申事
但様子に寄御張出しをも掛置せ可申候尤見計御前計掛させ候儀も有之右等之節は　出御之上御脇も掛させ可申哉之儀伺候ても宜
一御途中にて御雨覆掛させ候節は申上候上掛させ可申事御張出も同断尤御駕籠組頭取扱仲間よりも手傳致候方宜事
一御打上御駕籠被爲　召候節は御半桐油掛置せ可申事
一御駕籠臺より　出御之節は御玄關之薄縁へ出居候番頭へ申上御戸引可申事　御膳番取扱
歸御之節は番頭代り或は増候得は其段申上御戸引可申事仲間取扱
一中雀御門御先手物頭表御門御先乘右同斷　品に寄　歸御之節御供役へ申代り候哉之儀見させ候ても宜
一外櫻田御門内外にて御供役御老中方或は若年寄衆登城有無之儀申出候はゝ只今に候哉間も有之候哉之儀承り糺し増御供より當番御供へ申夫より申上候事
但右申出遲候節は此方より催促致可申事　登城有之候はゝ時宜に寄御駕籠進め候儀伺可申候
右當時御極之様に相成大概別段相伺不申進め候義も有之候
一本多豐後守屋敷境邊御徒目付西丸下馬場先通り御徒目付當時御構無之事
一内櫻田内桝形内御徒目付御手被下候事
一内櫻田大番所申上候上御戸引可申事
但御駕籠廻り候頃曲尺にて申上可致心得

一尾水樣御上之有無御供役申出候はゝ御老若同樣篤と承り糺し可申上事

一內櫻田邊にて　尾水樣御先大手先へ相見へ候趣御供役申出候はゝ申上早速常御供へ申御都合宜取計候樣申達常御供より直に御都合申上御同道之御都合に相成候段申上候はゝ御使可差出旨申上候て御先官樣より是より御同道可被遊との御使被進御次官樣より右御挨拶御使被進候御極に付御小姓組へ申從是御同道可被遊との御使相勤候樣可申達候　御次官樣より御挨拶御使參候はゝ常御供召連出候間爲扣置申上候上被　召出御戶引可申事尤御使之仁御駕籠脇相通候儀申上相通候樣常御供へ可申達　此御方樣御使罷歸候はゝ其段申上召出し可申御戶引に不及候事

但御同道に相成候はゝ申合宜敷筋左之通

一御駕籠之もの　御駕籠靜め候儀心得可申事

一御膳番御小姓頭取之內

一御小納戶頭取

一本文御次官樣より御挨拶御使　殿中にて先樣御供方より仲間迄相勤候儀も有之候間御口上之趣畏り居　歸御之節可申上事

一御手前よりの御使之仁御返答　歸御之節申上候儀も有之候間見計申上候上可召出事

一百人組之頭御目付出居候旨御供役申出候はゝ名前申上々御戶引可申事

但御目付は五節句總出仕抔之節計出候事御目付代り御徒頭御使番出候ても同斷尤代りとの儀申上御戶引可申事

一右申出遲く候節は御戸引置名前等跡より申上候ても宜

一下乘橋外與力同心御下乘所迄何れも御小篚御手被下候事

一路次之樣子に寄御履物心附可申分り兼候はゝ常御供へ申見せに遣可申事

一百人大番所與力へは御往來共申上御戸引可申事

但 出御掛 御膳番受
　 歸御 仲間受

一御下乘中御門外御横附雨落より一間程元極併見計可有事

一御退散之節御乘輿同斷

但御同道之節は御駕籠御順に居候事

一右御下乘所雨雪等にて格別に路次あしく候節は見計御轅にて御登城之節御門下にて御下乘被遊候御振合を以申上候上御門下にて御下乘被遊候儀も有之併是は臨時之取計にて極にあらす

右同斷路次あしき節

一御同道御退散之節御互に御供方申合申上候上にて御門下にて御會釋相濟御一方樣つゝ御順々御乘輿被遊候儀も是又臨時之取計也

一御登城掛强雨にも候はゝ西丸下邊にて御合羽御用意御召方坊主へ申付置御下乘前被爲召候哉之儀相伺可申事

但當時多分御合羽は不被爲召候に付大抵は伺不申方宜若被爲召候はゝ御下乘御門下にても差上御小姓御手傳仕御玄關御薄縁上にて御合羽御脫被遊候付是又同樣御手傳右御合羽は直に御召方

坊主へ相渡可申事
（一本ナシ右當時は仲間よりは御手傳に不及候得共兼て心得居臨時に御手傳仕候儀も有之）
一當時御下駄は不被爲　召候得共万一被爲　召候節は御杖多分上候心得にて增御供持參致居候樣
但大名衆御出會等之節も御杖の儘御會釋被遊候事
右御杖は御杖持より受取候事
一御上り相濟候はゝ奥向御供一統御玄關脇へ廻り本股立落し見合一所に御殿中へ上り御刀持初一統
屏之間へ扣居御錠口觸御城附申聞候はゝ直に尾水樣御供方申合下り可申事
尤右御錠口觸しらせ給り候樣御城附に賴置候元極に候
但大廣間筋幷御玄關通り　公邊御通行抔にて御差支之節は御刀初御供一統蘇鉄之間へひらき居
可申いつれ其節之御城附へ掛合可申事
一御上之節路次あしく御はね上候得は御小姓頭へ申談其心得にて少々進み御城附へ申御召替之儀伺
貫候樣可致
但右等之節は御召方坊主へ品に寄候はゝ御挾箱上り候心得申聞置候方宜
一右常御供中或は世話役へ御挾箱中之口へ相廻候儀心得させ置候方宜倂樣子次第右には及不申事
一彌御召替有之段御城附申聞候はゝ中之口より之持人六尺幷御部屋へ上け候坊主衆之儀御城附宜取
扱候得共猶鳥渡相斷置御玄關へ相廻り御召方坊主へ申聞中之口より御挾箱上させ可申候尤其節御
召方坊主附添參候樣申聞御挾箱蘇鉄之間へ上置御番致させ可申候若路次惡敷御召方坊主急に上り

兼候節は見計御番致候義取計可申事

但御玄關前に若御召方見へ不申候節は御玄關番へ頼赤坂供方之もの呼萓誰にても參候ものへ御召方坊主へ通達致させ可申事

一右御召物御部屋へ差上候儀御部屋附坊主衆持參候事此節爲御手傳御小姓頭取御小姓參候事

但右御手傳之もの御部屋へ參候儀　公邊御目附へ御城附より相斷候事之よし

一以前は仲間より御召替に掛候得共近來御側向御人數多に付先は御召替に掛り不申候方宜尤御部屋口迄罷越御用向伺候儀見計可申事

一御履物當時は晴雨に不拘御草履被爲　召候事

一御裝束之節は御緒太若雨天路次あしく候得は御淺沓被爲　召候事

但路次惡敷節は御裏附或は御三枚裏附被爲　召候事

但右御淺沓之儀兼て被　仰出御極に候得共當時多分御裏付被爲　召候事可心得

一御歩行御場所若風雪烈敷節は申上候上御長柄傘妻を仲間より持且手傘にて横降掩ひ候事

一御退散之節雨天且路次之模樣に寄　尾水樣御供方申合銘々合羽手傘草り草(履)（一本無）等之儀申合御供一樣に相成候方よろしく併都合に寄別々に相成候ても宜

一御三家樣方御履物且御長柄傘等之儀申合御一樣に相成候樣取計可申事

但御長柄常御供上候付打合可申尤雨降不申候共御門下抔雨たれ落候節は心得申合致候樣

一御玄關前御待申上候內御供役御下乘御門外　三卿樣方御通行之儀申參候はゝ承り置御通行相濟候

得は宜若御通行相濟不申候はヽ猶御都合宜申出候樣申聞置其內御退散に相成候得は御樣子に寄只今　三卿樣御通行との儀可申上候左候得は時宜次第御急き被遊又は御靜に被爲入候尤其內には常御供より御都合申上或は御供役より申出候事品に寄仲間より御樣子見計に御先へ罷越申上候儀も有之候心得可申事

一御退散之節出張役人へ御手被下或は御戶引之儀御上り之節之通

一西丸下乘橋外下馬中程と箱番所脇と右二ヶ所御徒目付出張御小條御手被下候事

一御同所大番所上番申上御戶引御上り掛御膳番受　御退散仲間受

一御本丸より御同道之節は御先官樣御駕籠鎭め西丸下馬角邊より別て御駕籠しつめ下乘橋へ　此御方樣御駕籠參候頃御次官樣御駕籠下馬角へ御見へ被成候位にて御下乘所御都合宜候事尤　御次官樣御駕籠は急き候等

右御駕籠之ものへ心得心附可申聞事

一御下乘中々仕切御門外御右御下乘尤御一方樣之節は御駕籠御橫附御同道之節は御駕籠釣扣にて御待合被遊御順に御揃之上御一所に御行列御右御下乘

一御退散之節御乘輿振同斷にて御左御乘輿

一御同所にて御謁に付御刀持御小姓計上り御供不上筈併御樣子次第にて御城附へ掛合候上御供上候儀も有之

一御退散之節御本丸同樣天氣模樣に寄御履物御長柄傘心得可申事

一兩御丸にて御居殘に相成候はゝ其段　尾水樣御供方へ心得申置候樣

御登城　御徒目付御供帳

一御供馬　七疋　一合羽籠　四荷　一傘桙　一差
一御供之面々合羽籠　一總御供鎗　一御小人押　二人

右坂下御門見通し之所へ殘り追て下馬へ引　御下り之節最初殘候處より御供　西丸へ御登城被遊候得は御供鎗之外靑山下野守殿屋敷脇長屋下へ廻し置其所より御供尤　尾州樣水戸樣御同道にて西丸へ御登城被遊候得は御供鎗共殘らす右同所へ相廻し置候事

一御徒押　二人　一御小道具附御徒　二人
一御長刀　一御立傘
一御直鎗　一御十文字
一一二御馬　一御小人目付　二人
一御供世話役　一人　一御使之者　一人

右桔梗御門外右之方御堀際に殘り追て下馬へ引　御下り之節最初殘り候所より御供
西丸にては橋之手前右之方へ殘り　御下り之節左之方御堀際へ立替

一御徒組頭　一御徒
一伊賀　但時に寄兩人共中腰掛へ入　一御使之者　二人

右之分下乗橋に殘る

一一二御挾箱　　一御茶辨當

一御雨覆　　一御簑箱

〇一御用意御傘　　一御草り箱

一傘桙　一差

但丸之印分雨天之節御玄關前迄入

右御下乗場所に殘る

一御目付　　一常御供頭役

一御使番　　一常御供御小姓組

但雨天之節御玄關前迄入る

一常御供御書院番　　〇一御小姓頭

一新御番　　〇一大御番

一小十人組頭　　一小十人

一御道具支配　　〇一御小人頭

一御徒目付　　一御駕頭

一御徒押　　一御數寄屋坊主

一御小人目付　　一御小人押

一御供世話役　三人　　一御使之者二人

右同斷　但し丸印之分は御玄關前迄御供いたし追て中腰懸へ引

一總同勢挾箱行形に百人番所手前へ押夫より中腰掛前へ　御三家樣方之挾箱順々並居　御下り之節中腰掛と百人番所之間へ繰出す　尾水樣御引續に相成候得は同勢幷挾箱內櫻田御門外同勢鎗等扣罷在候處へ相廻し　西丸へも御引續に相成候節は　西丸下青山下野守殿屋敷脇同勢鑓等扣罷在候處へ相廻し置同所より御行列に相立候筈

一三四御挾箱　　一雨傘

○一御用意御傘　　○一御簑箱

○一御杖　　一奥向不殘

一常御供御小姓組　　一同御書院番

此二役中腰掛迄引取

一御道具支配　一人　　一御小人頭

一御徒目付　一人　　一御小人目付　二人

御年寄衆先立

一御小人押　二人　　一御小姓同心　一人

一御小人組頭　　一御草り持　二人

一御使之者　二人　　一御供世話役　四人

右御玄關前迄御供仕込內下馬へ引奥向御玄關を下り候を見受それ〳〵御玄關前へ廻る

一御供之御年寄衆御家來右下馬右之方土間に罷在
一御登城之節　尾水樣之御内下乘橋邊にて御行逢御同道に相成候節は同勢幷挾箱等下乘橋手前御堀際にて押御引續之御方樣御簑箱之御跡へ附
御本丸御下りより西丸へ御引續に相成候節は桔梗御門外より御蓑箱迄御供に相立其御跡へ御引續之御方樣御挾箱御馬は御引續之御方樣御簑箱之次へ御順々に相立坂下御門見通しへ殘り候同勢鑓幷前段中腰掛に入込有之候同勢且挾箱共西丸下靑山下野守殿屋敷脇三辻之處へ相廻し置御退散之節其所より御供に相立候筈
一西丸御下より井伊掃部頭殿屋敷前迄　尾張樣御引續に相成候節は二の御馬迄御供に相立其次へ尾州樣御先御挾箱相立候事
一御注進　御本丸之節
御本丸御退散二人　外櫻田御注進二人　但御入口
一西御丸之節
御本丸　御退散二人
西丸御上り
西丸御退散　二人　外櫻田御注進二人　但御入口
一西丸御下り中仕切にて御乘輿被遊候筈之處若大名衆扣被居候はゝ御乘輿不被遊御步行被遊候筈に付左之通御行列

御道具支配　御挟箱御挟箱　小十人同同小十人同同　小十人組頭　新御番新御番　御使番御使番

水戸様小十人同御同朋　尾州様五十人同　御同朋　御小姓組同　御同朋

外様にて小十人五十人右御行列之通御先へ相立不申候節は御小姓組御跡へ相立候筈

一尾水様御同道にて御登城御退散之節向後御退散前奥中奥御供之翟殿中より御玄關前へ下り候境にて右之段御玄關前に罷在候御徒目付より御小人目付を以中御門外腰掛に罷在候御目付へ申越其處にて同所罷在候同勢を御徒押御小人押引纏御供世話役附添内櫻田御門外是迄同勢鎗等扣罷在候場所へ不殘爲相廻置同所より御行列へ相立候筈

但奥中奥御玄關前へ下り候上御居殘に相成候共矢張本文之通取計　此御方様御二方様計御登城御退散之節は是迄之通相心得可申事

一御本丸より　西丸へ御同道にて御登城之節は右同様引纏西丸下是迄同勢鑓扣罷在候場所へ相廻らせ置同所より御行列へ相立候筈

御謡初御登城　同上

一御供殘り所常御登城之節之通

一奥向幷御目付中

右犀之間へ上る

一常御供頭役之内　一人　三人有之節は二人上り候ても不苦

一御使番之内　一人
一御小姓組　二人
一新御番　二人
一常御供御小姓組之内一人
一常御供御書院番　一人

右殿上之間へ上る

右之内常御供御小姓組一人常御供御書院番一人御玄關切石之上左之方薄縁之上へ上り帯刀なから上り居其前へ小振御之御挑灯二張燈し並居新御番二人切石之下筵之上御使番先之御挑灯二張燈し並居御下り之節御門外迄新御番持　之

一御徒目付切石之上常御供御小姓組常御供御書院番並居候後へ上り居是又股立を取り帯刀なから上り居折々腰懸下馬等打廻り候事

但見習御供も同斷

一御挑灯之儀は御小人組頭へ巻相渡有之此方之巻留可見合

一御挑灯暮六つ打候得は燈し立御小人組頭一兩人御供外に入込肝煎

御注進　御本丸御退散二人　外櫻田之御注進　二人

御能之節
御登城

於　御城御能有之御登　城之節　同上

一御供殘り所常御登城之節之通

一三四御挟箱　御城中之口より蘇鉄之間へ上る

但御道具支配一人小十人二人附居上け下け　御城坊主幷中之口番上け下け致す御道具支配は當

時不揚

一御茶辨當右同斷

但御數寄屋坊主附居上け下け右同斷

一御辨當廻り候節中之口より蘇鉄之間へ上る尤引纏之御徒二人附居

一御供之御徒目付二人中之内にて刀抜持上る蘇鉄之間御挾箱御茶辨當上り有之處に罷在

一朝御供御徒目付中之口へ參り此御方御城附に逢左之通書付知らせ給り候樣賴置段々知らせ度毎々

中腰掛之御供御目付中へ御供世話役を以申達す

一御能初り　　　　　　一御中入

一御中入初　　　　　　一御祝言

御祝言之儀末一番と御目付へ申達す

一御能末一番にて御挾箱御茶辨當下す中腰掛へ參る尤中腰懸半分通り公家衆之供中取り切有之其次

御三家樣方御挾箱入奥向之御供御玄關を下り候得は御玄關前へ廻る

一御雨傘最初御玄關前迄御供仕込夫より中腰掛へ引御挾箱中腰掛へ廻り候得は其處へ參る但御用意

御傘入込候節も同斷

一夕御供御徒目付此御方四時過に罷出櫻田下馬中腰掛打廻り相替儀無之旨御目付中へ申達夫より中

之口蘇鉄之間へ罷越朝御供と代り合朝御供歸候節御目付中へ代り合歸り候段申達下馬打廻り御小

人目付に逢御供散不申樣申聞る

一代り無之御供は細川越中守殿屋敷内にて支度致候事尤御用談之節(之通 一本ナシ)御供中一統辨當兩度廻させ候事

一若御挑灯入候節は御謠初之節之通

一伊賀一人代る〳〵御駕へ附居是は仲間方作略にては無之奧頭役中より伊賀へ通し御駕頭へも伊賀附居候間支度に被參候樣申候由尤伊賀附居候儀は御入組もの上り不申故之事也

一御中入初りにて御供廻り候樣細川越中守殿屋敷に支度に被參有之候御供中へ御供世話役を以申遣す尤是迄は御目付中より御作略被成候處仲間より申遣候樣文化五辰三月五日御申聞被成以來仲間より申遣候事

一御供世話役中之口前に一人中腰掛に一人つゝ居候樣申聞置候事

西丸御幌御拜見

西丸御幌御拜見　同上

一御三家樣御本丸御玄關御下りより中御門にて御乘輿被遊　公儀御徒目付一人御小人目付二人御先引中腰懸に殘候御供中不殘御供寺澤御門蓮池御門御裏御門外にて御下乘被遊夫より御玄關迄之御供計例中御門へ殘候御供之筋幷御駕坂下御門より外通り　公儀御小人目付引纒西丸下馬中仕切御門外迄廻り居御内通し御幌御拜見相濟　西丸御玄關へ御登城被遊御禮濟より御玄關例之御道筋尤外殘り御供之分は西之丸例之御場所へ夫々廻し置

右寛政十一未五月朔日

一右之節小十人十六人とも御跡へ附御内通し參り候事

中將様不時御登城　同上

一坂下御門外へ殘る分例御登　城之節之通

一櫻田御門外殘る分同斷右例之通下馬へ引尤幕張出來有之其内に扣る

一下乘橋に殘る分例之通被爲入相濟候上御玄關前腰掛幕張之内に扣る

一赤銅御門より御風呂屋口外奥表仕切土戸御門にて御下乘赤銅御門より　公儀御徒目付御小人目付
御先引

一御下乘より御風呂屋口迄奥向計御供

一赤銅御門外にて若黨草り取挾箱等押る同所より直に　公儀御目付方御使之者案内にて中之口外へ
廻り居主人御座敷へ上り候と中之口内に扣る

一三の御挾箱は御風呂屋口より上る

一御駕石之間板之間へ上ける御駕之者附居

一奥向幷御目見以上之分中之口より御座敷へ上る
御小姓頭取御小納戸頭取御膳番御小納戸奥御醫師
右扉之間上之方御屛風圍

御目付右之次御屏風圍常御供頭役御小姓組常御供御小姓組御目付中中之次御屏風圍

一御玄關前腰掛へ敷もの敷幕張二ヶ所出來有之左之分扣る

一上之方へ御茶辨當初仲間御駕頭御徒(組)[一本ナシ]頭御徒押御徒御小人目付御小人押伊賀御小人組頭御小姓同心扣る

一下之方に御挾箱御鑓箱御立傘御用意御傘御雨覆御草り箱夫々持人幷御使之者御供世話役扣る刀棒同所へ入置

一中之口へ御供世話役一人つゝ代る詰させ候事尤中之口へ上り左之方に着座致させ候事

一同勢挾箱は腰掛内幕張無之場所へ入置

一仲間初末々迄燒飯被下候付御小人目付御小人組頭へ申聞夫々頂戴致させ候事櫻田下馬に入込候分もあの方へ燒飯相廻り被下候付御小人目付作略候樣申聞候

一香茶は前日御目付中御取計にて御掃除之者より茶之世話致候事尤右に付金二百疋被遣候事

一御供廻り候樣御賴御小人目付より知らせ候付夫々御風呂屋口外へ相廻し同勢草り取挾箱等赤銅御門外へ相廻し置候

御注進

御本丸御退散　二人

外櫻田之御注進　二人

寛政四子十月十七日

一殿様此以後御登城夜に入歸御之節は自今御謡初之通之御挑灯にて歸御被遊候筈

同五丑年五月十四日

一江戸若山共　殿様出御之節々御挟箱呼にて御供之面々下り候得共自今御挟箱呼相止御道具廻りの儀奥より御同朋へ申出御廣(間)〔敷カ〕坊主夫々諸役所へ申出候筈

同八辰正月六日

一御老中方若年寄方登城之節は御城大皷を相圖に登城若し早く登城之時は何時何歩廻りの御注進さ中て出候事候然處　尾州様　此御方御登城之節は右注進の者是迄は通し不申處右にては御老中方差支有之由にて御城附を以被相達　尾州様へ打合御駕脇を通し候儀御同様御許(可)〔一本無〕相成候間右注進之者參り掛候はゝ手明早道之者闘紙の上同道にて御駕脇を通し置其品御徒目付へ申出同役より御目付へ申達候事

寛政十一未十月十六日

一下乘橋內番所并出ヶ所に出居候同心へ御簾上り候事

享和三亥六月十四日

一御供通御行列改正　公儀へ爲御申あり

文化十一戌十二月十六日

一若山にては都て出御を御成又は遠御成さ唱候得共江戸表にては　公邊御成さ相紛候儀も可有之付

江戸表にて他へ被爲　成候儀は御他出と唱へ又は何方へ御出と相唱へ候ても可然旨屹度相達候儀には無之候得共前段之趣向々にて相心得居可申事

若山にて被仰出之趣は若山之部に記す

同十三子四月二日

一是迄　此御方　尾州へ被　爲成又は　尾州様　此御方へ被爲　入御白洲にて御口上被　仰置候節雨天に候得は御書院へ御通被遊御同所にて御口上被仰置候處以來若雨天の節は御駕臺差出有之候共御互に御玄關御式臺にて可被　仰置旨被　仰出候事

同年七月九日

一出御被爲　在御供下り候節是迄御道具廻りと相觸候得共向後御挾箱出と相觸候筈

同月同日

一御供觸作略之儀向後左之通可仕旨被　仰出

御供揃時刻より一時早御供之分揃候事

一御供年寄共出殿之上御供御馬揃候はゝ御目付より御用人へ相達御用人より御供頭役へ相達同役より御供御馬揃候段申上之

一奥役御供揃候はゝ其段御目付へ御供頭役より心得相達候事

一御供揃御時刻二寸前御駕御式臺へ居置之御小道具夫々へ相渡可申事

但御挾箱は下し不申持人は中の口に揃居可申事

一御茶辨當は御挾箱出前迄に揃場所へ相廻し可申事
一御供揃刻限二寸前を御時計番より御供頭役御目付へ不紛樣可申出事
右御道具出候を曲尺に同勢見調可申此節を御道具廻りと可心得事
但御先方へ御道具廻り之御注進此節出し可申事
本文御注進先方にて申候は矢張御道具廻りと申候等
一御挾箱出候節諸向へ相觸可申此節　殿中に上り居候御供一統揃場所へ可廻事
但雨天之節は御供中　殿中より雨具着用板廊下は草鞋相用候儘下り候て不苦事
一御挾箱出は　上より被　仰出尤御挾箱出と相觸可申事
一御挾箱出候ても同勢見調行屆兼候節は分けて御供御目付より可申出事
一御供廻り宜敷段申上候て　出御被遊候事
一歸御之節御先方にて之作略は是迄之通
文化十三子十月廿一日
一都て御供の節年寄衆表御門內北喰違外より切手御門迄は下乘所に候得共乘輿不苦通用御門之儀も
是又乘輿の儘御供仕不苦事
御供中夏笠用候儀も右の御場所幷通用御門共笠脫候に不及事
但雨天の節手傘用候節は表御門たり共其儘差通り候樣
一表御門內南北喰違內は勿論乘輿笠共不相成候事

文化十三子五月四日

一西丸御上り此御方樣計御登城の節は　御下乘所前御駕廻し差上中仕切御門外へ御平附御駕居へ候得共右は御行形に御駕少々筋違に居候樣被　仰出候

一御本丸にては御行形　御下乘に候得共御下乘所前御駕差上中之御門之方へ寄せ候得共矢張差上不申　御下乘所少し手前より御駕中之御門之方へ寄せ　御下乘に仕候樣との御事

同閏八月六日

一御登城之節　御下乘所より御玄關迄常御供之御先立相止平御小姓組相勤可申同勢等　御退出口へ相廻り候節引纏之儀は御使番相勤候事

同十二日

一御登城之節御玄關前迄　御先立被相勤候村　尾水樣御登城御同刻之節御使被相勤候節は右御先立御跡大御番之内へ被申合同役より御先立相勤大名衆扣被居候節申上候儀は是迄常御供御先立相勤候節之通相心得可被申事

同十月廿二日

一年頭五節句八朔幷兩御丸御登城有之式日其外兩御丸へ總登城之節　尾州樣水戸樣御同道被遊候節は御本丸御退散御同勢鑓西丸へ相廻し置御同所より御行列へ相立可申事

但尾州樣水戸樣之內御一方樣御同道之節も同斷

文化十三子十二月四日

一紀伊中將殿不時御登城之節平川口御門より汐見坂御門通御風呂屋口迄御徒目付御小人目付御案內差出し內櫻田御門より二丸銅御門汐見坂御門通被成御入候はゝ銅御門邊より御徒目付御小人目付御案內差出候事

一御風呂屋口へ御出相濟供中御表へ相廻し候筈案內御小人目付差出候事

一扣所之儀家老衆重役衆は柳之間北御緣へ屛風仕切致差置其外役々は大廣間溜幷目見以上之分は蘇鉄之間へ屛風圍ひ致差置候事

一挾箱其外御入用之品は御風呂屋口にて奧向へ被相渡御入用無之品は御表へ相廻し蘇鉄之間へ差置候事

一駕籠之儀は右之間上へ上け置駕籠之者附置候事

一御玄關前腰掛に差置候供方之分幕張敷物敷差置候事

一總供之分は御登城之道筋に寄平川口御門外腰掛亦は內櫻田御門外腰懸內へ幕張致し差置候事

同廿二日

一御登城之節中御門前腰掛幷下乘橋御門外へ殘候御供之分共御用等有之中御門內御玄關前へ罷越候節は御目見以上之面々は御目付へ相斷右以下末々は御徒目付へ相斷差圖之上入込候筈之處近頃は無斷猥に入込候筋も相見へ候付向後は兩御丸共前々之通御目見以上之面々は御目付へ相斷御目見以下末々は御徒目付へ相斷御家中又者夫々主人より御目付御徒目付之內へ相斷差圖之上入込候筈之事

文化十四丑五月廿八日

一御登城之節傘桙雨天之節計中御門外腰掛へ御供仕込候處自今晴雨に不拘一樣中御門外迄御供仕込候筈に相成候旨御申聞候事

文政元寅八月六日

一大納言樣中將樣御登城被遊候節　御下乘被遊候以後大名衆扣被居候得は是迄は何の誰扣被居候樣常御供より名前申上候處以來御下乘之上大名衆扣被居候とも何等申上候に不及候　御乘輿被遊候上大名衆扣被居候はゝ名前申上候に不及大名衆扣被居候樣可申上旨被　仰出候事

但大名衆一人被扣候節は名前を以可申上事

同五午五月十七日

一尾水樣御同道にて西丸御登城御退散之節中仕切御門にて御乘輿之砌少し先に大名衆抔扣被居候共御步行之儘御會釋被遊候ては彼是混雜致候付以來少し之處にても一旦御乘輿被遊其上又　御下乘にて御會釋被遊候筈被　仰出候事

同六未八月廿四日

一御登城之節　御下乘所内に大名衆御旗本衆被扣居候節是迄は御先立之御小姓組より姓名承り申上候事候得共已來同役より申上に不及常御供より右申上相勤候筈に付向後常御供兩人申上之ため御左右へ見計相立候事

本文御豫參之節も常御供四人相立候事

文政七申十一月十三日
御乘馬にて出御を向後御召切と不相唱御早乘と相唱へ可申事
文政八酉正月四日
一御謠初等にて　御登城御退散之砌御書院御門より御同所桝形御門外敷石迄の處向後御緩々御歩行被遊候得は御都合宜可有之との御儀に付自今右之御場所御寛かに御歩行被遊候筈尤御同所より中御門外迄之處は是迄之通
同十亥閏六月十三日
一御裝束にて御登城之節向後天氣に候得は御緒太雨天に候節は御淺沓御用ひ被遊候事
同七月朔日
一松平加賀守殿松平豐後守殿登城之節挾箱之儀　御本丸中御門外腰掛内に差置候筈に當六月十日御取扱相濟候旨今日百人組同心より申聞候事
同九月廿六日
一御三家方　御城附
御三家方御登城之節中御門外腰掛内へ御駕籠其外御供方等入來候處其砌增上寺方丈登城有之候節も同樣駕籠其外供廻り是又入來候然處御三家方御登城之節は別て混雜にて供之者其心配致候趣申立候依之腰掛内へ別紙繪圖面飛朱之通一と間棒仕切致し方丈駕籠供廻り等差置候尤右之趣百人組へも申渡し置候間御供方にて相心得罷在候樣相達可被置候事

九月

天保二卯五月朔日

一尾水樣御同道にて西丸へ御登城被遊候節左之通相極候樣御申聞且又是迄內櫻田御門外よりは年寄衆供連は不殘被召連御供被成候得共向後は內櫻田御門內より之供連にて西丸迄御供被成內櫻田御門外に殘り有之候年寄衆供廻りは外大名衆供之通西丸下へ廻し置西丸御退散よりは其所より供不殘供被召連候筈尤　尾州樣と西丸より井伊掃部頭殿屋敷脇迄御同道に相成候共右は是迄之通相心得候樣源藏殿御申聞被成候事

御牽馬　　同　　同

御家老　　同　　同

同五午六月八日

一都て　出御の節御挾箱出候上御供宜段申上候儀是迄は御供不殘下り揃候上御供宜段申上候得共御側向之內には　出御迄御用有之筋も有之付向後御側向は下り不申候共奧中奧表向御供下り候はゝ御供宜敷段申上候筈候事

件之通に付御側向之內　出御前御用無之筋は是迄之通前以下り居　出御迄御用有之筋は右御用相濟　出御之節御附下り候て御供に相立可申事

天保十四卯九月廿二日　公儀百人組之頭より　但土岐下野守より御城附へ渡す

一百人組四組與力同心共是迄御出入致し下乘所の儀御賴有之候處近年取締不宜追々人數等相增不正

之筋も有之候付此度堀田攝津守殿へ伺之上改革之仕法夫々嚴重に申渡候向後御賴人數與力三人宛同心四人つゝに取極申候　四組にて廿八人

右之通には候得共是迄御賴人數書面之通無之分は都て是迄之通り居置候積尤只今迄は誰々と人物を定御出入致來右銘々へ御贈物有之候向後は書面之人數丈け是迄の御贈り物を誰組與力一同并同心一同へと御贈有之樣仕度右之通に候得共與力は與力一同同心は同心にて相心得候樣申渡置候尤後年に至り右規定に外れ候儀共申立候はゝ其節(早速)[一本ナシ]頭々へ被　仰聞候樣仕度且又年始暑寒外共御屋形へ罷出候儀は向後不相成樣に申渡置候事

一御國產の品々御贈有之候共割付方等に差支候間及御斷候

右之趣往々不崩樣仕度此段及御掛合候

一百人番所勝手にて香湯貰受は不苦辨當之儀も兼て御達も有之候間不苦候尤休息の儀は不相成候事

嘉永二酉十二月十九日

一背張に大目付深谷遠江守より問合に付別紙之通答候事

紀伊殿登　城之節御玄關より殿中へ上り候供方役々人數左之通に有之候

但御玄關前へ下り候儀は御定口觸にて下り候事

小姓頭取 小納戸頭取 之內	一人	膳番	一人	奥詰供方	二人
小十人頭	一人	中奥役	二人	奥醫師	一人
同朋	一人				

一登　城之節御玄關前迄入込候供方役々人數

常供徒頭　一人　　常供兩番之内　二人　雨天之節は一人増
小姓組　二人　　大　番　二人
道具支配　一人　月次には入込不申候　　徒目付　六人
徒　押　一人　　常供徒　四人
側方同心　一人　　小人目付　六人
小人組頭　一人　　供世話役　四人
使之者　二人　　草り持　二人
挾　箱　二走　　雨　傘　其節模樣に寄
目　付　一人　雨天并雨模樣之節共　　蓑箱杖　用意傘

右之通

安政二卯十二月廿七日

一加賀中納言此度刀番御玄關箱壇上に差置候樣伊勢守殿被　仰渡候に付是迄は御三家方御登城之節敷付へ罷出候得共以來扣所に平伏罷在候依之爲心得申達候以上

十二月　　鵜殿民部少輔

右は此度中納言に任官に付てなり

萬延元年申九月廿六日

一上使に付御登　城之外御成又は爲御伺御機嫌　御登城之節は　御往來共御成廊下御駕臺より被爲成候旨被　仰出候事

九月廿五日

文久元酉年四月八日

一御登城之節向後御城中腰掛へ敷候二間續薄縁三枚新規出來に付御小人目付へ申聞相渡預け切にいたし御登城之節々御小人目付差圖にて御供世話役幹才領之者取計之筈に付御小人組頭御中間組頭へ申聞右薄縁損取替之節も仲間方にて作略之筈候夫々相達常御供中へも申合候事

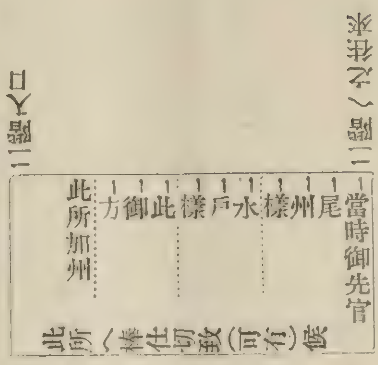
本文之通候處當時御人數も多行屆兼候付尚又貳間續薄縁三枚且御徒押中より申出候品も有之候付内櫻田御門外下馬へ同樣之薄縁一枚夫も出來尚又本文之通及作略候

酉五月十二日

文久二戌六月朔日

一御本丸御玄關前腰掛内へ　御三家樣方御登　城之節御挾箱御順々指置御供中扣場所之内當五月比より同所上之方にて一間通り往來に相成候少々御場所挾み有之候處當時は　御三家樣御揃に付御登城之節々混雜致候付去月十五日　尾州樣御徒目付より前條之通混雜にも有之候付末之方加賀殿挾箱置所少々繰下けさせ候はゝ可然さ令存候付ては供方之者抔へ懸合候ては承知致間敷候付　公儀御小人目付へ掛合候はゝ可宜歟如何可有之哉さ內談有之候付右は申見之上可及挨拶旨答置　歸御之上甚十郎方より御目付中へ被申達候處其通致候はゝ可然若下掛合にて談遂兼候はゝ　御三家

樣方御打合之上表向にて御達しに相成候はゝ可然旨答置候樣一郎兵衞殿御中間に付去月廿二日御登城之節右之通相答置候處今日市ヶ谷御徒目付山田久藏より　公儀御小人目付伊藤鍬之助へ懸合候處同人より其旨加賀殿留守居へ申聞候得共兎哉角受用無之に付則其段同役より直に御目付衆へ申達候處御目付池田左衞門より右留守居役之者へ前顯之品彼申聞三尺通り繰下け候筈に相極置候旨鍬之助より久藏へ答有之候旨同人打合有之候付其段御目付中へ申達候付右にては腰掛內御挾箱置場所左之通相成候事



御供心得　御徒目付記錄

總て御途中にて訴狀等差上度と申者有之候はゝ御供中何れにても早速受取其者を召連御跡へ下り御徒目付へ引合其上にて御供之立所へ可參候如何樣の輕き者差上候訴〔一本狀〕(訟)にても無理に押候品には有之間敷との思召候勿論右躰之者御駕近く寄可申儀には無之候間其旨心得可罷在との御事

但右之節事かましく大勢立合候儀は無用可仕候品に寄候ては二人も取扱候儀は有之候得共先は
一人にて任せ可申候

一御駕御跡先御供仕候面々御時宜之衆有之時は道廣所にても御時宜之衆之方を除け心を附通り可申候御時宜相濟御跡末々之御供之者共迄右御時宜之衆へ不禮無之樣隨分よけ候て御供可仕候

一雨天にて道殊之外悪敷所はよけ候共少々水抔溜候分は御行列亂し不申夫々之場所をよけ申間敷事

一御城へ御供罷越候節腰掛に罷在候輩股立をおろし可罷在候

一御老中并若年寄衆右之格之衆御城中被通候節參り掛候はゝ道をよけ可申路次狭き所にては隨分腰を屈慇懃に可仕又は扣可申候腰掛に罷在候節御老中若年寄衆被通候はゝ腰懸之外へ罷出慇懃に時宜仕諸事不禮無之樣可仕候

但御城内にて逢候はゝ道を除慇懃に成躰に可仕候

一諸大名衆御旗本衆御時宜被致扣居被申候節同勢之儀は腰を屈不禮無之樣に致し通可申候總て同勢後れ候節抔猥に走附申間敷候少々遲り候分は不苦候間騒敷無之樣に可仕候此段御徒目付御小人目付常々心得罷在指圖仕候樣に可申付且又同勢ときれ候時分自然横通り之者有之候ても不苦儀に候間咎申間敷事

一下馬腰掛抔へ猥に駈入申間敷候總て何方に不依同勢へ附居申候節も作法能可申付事

一若狼藉者有之節御定

御側向　野服之節は中奥御番　奥御供方

小十人頭　御小姓組　御書院番
奥御醫師　大御番　御道具支配
御小人頭　御馬預　「●」御馬役
御同朋　「●」増御供之面々（御小納戸代り）　「●」増御供之面々（大御番）
右之分　御駕之傍に罷在可受御下知事
「●」御徒頭　御目付　御使番
新御番　小十人組頭　小十人
御徒組頭　御　徒　御徒目付
御徒押

常御供御徒頭同兩御番之儀御行列作略致候付其節々模様に寄懸合等取計候付出場所難定置候付本文之株へは認出し不申候事
本文之内朱丸之分此度認加候事
萬延元申四月

右之面々は其場へ罷越御徒頭御目付御使番差圖仕可取計事
一御徒目付は御小人目付に申付同勢を可片付　御下知無之内は御小人目付より先へ一人も不可出
但同勢之鎗は御立傘之跡迄出向主人受取候はゝ可相渡事
「●」一御行列之先へ相越候御徒目付御小人目付等は路次に心を用ひ若不審之儀も候はゝ常御供之向へ早々可申出候其外御道筋に若異變等之儀も無之哉總体心を附何等之儀も有之候はゝ早速常御供より

御駕脇へ申參様子次第御道替之儀作略可致事

「●」一御馬預御馬役之内一人御用人差圖次第早速御屋敷へ注進可申參事

「●」一御持鑓其外御道具類之儀は御道具支配幷御小道具附御徒目付致守護罷在御下知次第可取計事

「●」一同勢鑓前後に罷在候御小人目付御供世話役之儀は御供鑓持人等散亂不致様心を附様子次第持主へ渡方之儀可致差引事

「●」一御貸馬總御供馬之儀は御徒押致差引鞍覆を取手綱を解沓を取らせ罷在持主へ渡方之儀可取計事

「●」一若亂心躰之者御行列へ參掛候はゝ捕押候様可致候譬抜身を持居候とも亂心と見受候はゝ可成丈捕押卒爾之儀無之様可致事

一人をあやめ候者參掛り共無構可通之追手之申分により兩方ともに押留候様にと被　仰付事可有之候間　御下知を相待卒爾に出逢申間敷事

一御厩方心得

一御途中にて俄に雨降候節御供中雨具着仕候儀一役之内にて大様二た代り仕可申候兩人つゝ罷在候

急事又は猥藉者有之節御馬は御鞍覆を取御手綱を解沓を取り常々之所へ可罷在事

輩は代り合可致事

一御駕廻り御先御跡共猥に無之様可仕事

一御道筋に笠等捨置不申様に可仕事

御途中にて雨具着用之次第

但雨上り脱候節も同斷

御先
一御道具支配　是は御跡御道具支配より雨具着いたし代り合可申事

同
一御徒拾人組頭一人　是は二た代りに御跡へ下り雨具着仕代り合可申候組頭着いたし相立候迄御徒之内より一人右立場へ相立可申候　但拾貳人之節も同斷

同
小十人六人　是は二た代りに四人と二人と御跡へ下り着仕代り合可申候　但八人之節も同斷

同
小十人組頭御同朋　是は代り合御跡へ下り着可仕候

同
一新御番御使番二人つゝ　是は一役一人つゝ御跡へ下り着可仕候

御駕廻り
一小十人頭御徒頭御膳番御小姓頭取　是は見合一人つゝ着可仕候

御跡
一常御供御徒頭御目付常御供御小姓組御小姓組常御供御書院番　是は見合着可仕候

同
一御道具支配　是は早速着御先にて代り合可申候

同
一大御番二人　是は見合着可仕候

同
一御小道具附御徒二人　右同斷

同
一御小人頭御駕頭御徒目付　右同斷

同
一伊賀二人御數寄屋坊主　是は見合代る〳〵着可仕候

御跡
一御小姓同心　是は見合着可仕候

一同
一御小人目付御小人押　是は見合代り〳〵着可仕候
一御小人組頭御口之者組頭　是は見合着可仕候
一御草履取二人　是は見合代り〳〵着可仕候
右之通大様二た代りに雨具着可仕候尤晴雨有之時は小十人組頭之所迄は立場にて着可仕候何れにても濡れ不申様との被　仰出も有之候尤立場急度披き候にも不及御供致なから着いたし候御目障りに相成候ても不苦候乍併大雨に相成候て草鞋等も履候節は代り合御跡へ下り着可仕候併雨之節に候共御行列猥に無之様に兼て申合置揉不申様に可仕事
同勢之者雨具着仕候儀作法宜聲高に無之様に兼て爲心得置可申事
寛政四子九月十一日
一都て御供先にて事に臨被　仰出候品幷差心得可致作略品等其役々にて取計候儀は勿論之事候得共其役々は不居合節又は早速不取計候て手延に相成候儀抔は役外之儀にても見計ひ不取敢致作略御急き之儀は事に寄規矩をはつし臨機應變之計無之候ては手延に相成不都合之儀等も可有之事候分て相違候に不及銘々心得にて作略可有之品には候得共猶御駕廻り之御役右之趣可被相心得事
寛政五丑正月十九日
一於御途中にかさつに無之樣御作法を相守り御成先にては別て行儀を正し可申候一統行儀を取繕ひ候御目見以下之輩は猶更夫々格式を以假にも卑劣躰之儀無之様如何身之廻り取繕ひ罷在候ても禮儀を亂し互之挨拶等惰弱に無之様御供通り之儀に付ては御目付は勿論御供頭役幷常御供之指揮に

万端随ひ御途中においては彌以かさつに無之様御作法を相守り神妙に御供可仕候
御供世話役御使之者共御途中にて下座等制し方かさつに不致丁寧に聲掛帯刀をも致候者へは猶更不禮に無之様制し可申尤末々に至ては亂鬢長髪之者幷ほころひ候衣類を着又は破候菅笠を着候者無之様

一御供之面々御行列立所御作法嚴重に可相守儀は勿論に候得共總体角々敷候ては見込も不宜候付向後不角立何となく安らかに見え候様可相心得尤御側向之外御供は袖内に手先を入候ても無苦事

右若山表にても同様布告

一總体御先御跡御行列延ひ過不申様可仕事

一御登　城之節　尾張様　水戸様下乗橋御先へ御行掛被遊候節例御下乗之御場所にて御下乗被遊御待合被遊候事に付右之御様子申上候義且又　尾水様之御跡へ引續此方より御先へ下乗橋行懸り被申候大名衆御旗本衆にはいつれ百人番所之手前又は先に扣被在之候事故右等之節は猶更常御供之者早々御先へ罷越　尾水様御待せ之御様子は勿論大名衆御旗本衆扣被在之候段申上候様且右申上候間合も無之差掛り候節は上より可被　仰付候間　御意に隨ひ御下乗之取計仕候様右に付尚以御左右共御駕脇を遠退さる様心懸　御意を奉り候様大名衆御旗本衆姓名承り等之儀は　御駕脇より一人御跡へ下り取計候様差懸り候節は御駕脇之者直に大名衆御旗本衆姓名可尋事

一於御途中御旗本衆御出逢被遊候節雨天抔に候得は　御籠御通行前致平伏　御通行有之候ても暫其儘平伏致居筋も有之候間濡候面々も有之候付右之通至て叮嚀なる衆中へは直に御使被遣候事

一西丸へ御登城之節　公方樣にも山里御門通西丸へ御成有之差懸り二重橋之邊留候筈　御前御上り之節に候はゝ御持番所にて御見合被遊御下り之節に候はゝ殿上之間迄　御立戻被遊候事
一暑氣之內御登城其外御他出等之節御供之面々下々迄笠御免被遊候事
但五月五日より八月朔日迄之間御免之事
大手前幷西丸下より松平肥前守殿辻番所前迄之間總同勢之分は笠脫せ其餘は笠相用右之外御城廻りにては總同勢共相用不苦候
旱笠着用之次第
內櫻田下馬迄　大手下馬迄　矢來御門迄　坂下御門迄　西丸大手下馬迄
一上野增上寺は御宿房迄
一何方樣へ被爲成候ても表門迄
一御上屋敷內にても下馬所之外は御供之面々御目見以上笠用不苦
一雨天之節御庭內にても御駕上り候はゝ傘幷笠可相用事
一雨降出候はゝ傘何れより開き候ても不苦事
一御供相勤候諸士　御目見以下末々迄痛所有之筋は足袋相用候ても不苦事
一於　御途中大名衆へ御出逢有之雨天之節には縱令木履にて差扣居被申候共此御方には御下乘被遊候筈且又大名衆へ於　御途中御使被遣候節先方之心得に寄万一御使へ逢不被申近習之者抔受候樣成儀有之候はゝ御使不相勤　歸御之上御使被遣候事

昭和八年二月十五日印刷
昭和八年二月二十五日發行

南紀德川史 自第百二十五卷 至第百三十五卷

編輯者 堀内信

發行者 山崎順平
和歌山市宇須町三百七十八番地

印刷者 福本芳太郎
和歌山市新堀四丁目三番地

印刷所 福本印刷所
和歌山市新堀四丁目三番地

No 396

第十四回配本

發行所 南紀德川史刊行會
和歌山市宇須町三百七十八番地
振替口座大阪四五八五二番